

# 印西市馬込遺跡

— (仮称)平岡自然公園埋蔵文化財調査報告書 —

平成16年3月

印西地区環境整備事業組合

財団法人 千葉県文化財センター

# 印西市馬込遺跡

— (仮称)平岡自然公園埋蔵文化財調査報告書 —





瓦塔

## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第495集として、印西市地区環境整備組合の平岡自然公園建設事業に伴って実施した印西市馬込遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器、縄文時代の土器及び石器を初め、奈良・平安時代の瓦塔が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年3月31日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水 新次

## 凡 例

- 1 本書は、印西市環境整備事業組合による（仮称）平岡自然公園建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市平岡字馬込1538-1ほかに所在する馬込遺跡（遺跡コード327-008）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁、印西市環境整備事業組合の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、北部調査事務所長古内茂が第2章第1・2・4節、第3章、上席研究員香取正彦が第2章第5節、研究員田中裕が第2章第5節の瓦塔に関する部分、上席研究員矢本節朗が第2章第3節・5節の石器に関する部分、研究員小笠原水隆がその他の部分及び編集を担当した。  
瓦塔の分析に当たっては、とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター主任 池田敏宏氏の御指導、御教示を得た。また、石材の同定については考古石材研究所柴田徹氏の御協力を得た。
- 6 当センター刊行物において、本遺跡を取り扱った下記の内容については、全て本報告書が優先するものとする。  
平成10年2月 現地説明会資料  
平成11年1月 「千葉県文化財センター年報No23-平成9年度-」 p.23-26.  
平成12年7月 「研究連絡誌」第58号 p.17-23.
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、印西市教育委員会、印西地区環境整備事業組合、千葉県企業庁の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地図は、下記のとおりである。  
第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図「小林」(N1-54-19-14-1)、「龍ヶ崎」(N1-54-19-13-2)
- 9 周辺地形航空写真は、京業測量株式会社による昭和47年撮影のものを使用した。
- 10 瓦塔の復元は、研究員田中裕の指導の下、株式会社京都科学に委託し、実施した。
- 11 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 12 本書で使用した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる（第1表参照）。

# 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の概要	5
第2節	遺跡の位置と周辺遺跡	7
1	遺跡の位置と環境	7
2	周辺の遺跡	7
第2章	検出された遺構と遺物	11
第1節	概要	11
第2節	旧石器時代	11
1	概要	11
2	層序	11
3	出土石器群	13
4	まとめ	42
第3節	縄文時代	46
1	概要	46
2	竪穴住居跡	46
3	土坑	65
4	遺構出土石器	134
5	遺構外出土遺物	140
6	まとめ	186
第4節	弥生時代	190
1	概要	190
2	竪穴住居跡	190
3	遺構外出土遺物	194
4	まとめ	198
第5節	奈良・平安時代	199
1	概要	199
2	竪穴住居跡	199
3	竪穴状遺構	206
4	掘立柱建物跡	207
5	土坑	209
6	遺構外出土遺物	209
7	瓦塔	216
8	まとめ	230

第6節 中・近世	235
1 概要	235
2 地下式坑	235
3 障子堀状遺構	239
4 野馬土手・野馬堀	239
5 遺構外出土遺物	239
第3章 結語	245
報告書抄録	巻末

## 挿図目次

第1図 馬込遺跡下層調査状況	第26図 第6-2地点出土石器実測図(4)
第2図 馬込遺跡上層調査状況	第27図 第6-2地点出土石器実測図(5)
第3図 グリッド分割と呼称	第28図 第6-2地点出土石器実測図(6)
第4図 周辺の遺跡	第29図 第7地点出土石器実測図
第5図 調査区及び全体図	第30図 第8地点出土石器分布図
第6図 基本土層図	第31図 第8地点出土石器実測図
第7図 第1地点出土石器分布図	第32図 単独出土石器実測図
第8図 第1地点出土石器実測図	第33図 上層遺構配置(1)
第9図 第3地点出土石器分布図	第34図 上層遺構配置(2)
第10図 第3地点出土石器実測図	第35図 縄文時代堅穴住居跡(1)
第11図 第4地点出土石器分布図	第36図 縄文時代堅穴住居跡(2)
第12図 第4地点出土石器実測図	第37図 縄文時代堅穴住居跡(3)
第13図 第5地点出土石器分布図	第38図 縄文時代堅穴住居跡(4)
第14図 第5地点出土石器実測図(1)	第39図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(1)
第15図 第5地点出土石器実測図(2)	第40図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(2)
第16図 第5地点出土石器実測図(3)	第41図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(3)
第17図 第5地点出土石器実測図(4)	第42図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(4)
第18図 第5地点出土石器実測図(5)	第43図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(5)
第19図 第5地点出土石器実測図(6)	第44図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(6)
第20図 第6-1地点出土石器分布図	第45図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(7)
第21図 第6-1地点出土石器実測図	第46図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(8)
第22図 第6-2地点出土石器分布図	第47図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(9)
第23図 第6-2地点出土石器実測図(1)	第48図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(10)
第24図 第6-2地点出土石器実測図(2)	第49図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(11)
第25図 第6-2地点出土石器実測図(3)	第50図 縄文時代土坑(1)

- 第51圖 繩文時代土坑(2)  
第52圖 繩文時代土坑(3)  
第53圖 繩文時代土坑(4)  
第54圖 繩文時代土坑(5)  
第55圖 繩文時代土坑(6)  
第56圖 繩文時代土坑(7)  
第57圖 繩文時代土坑(8)  
第58圖 繩文時代土坑(9)  
第59圖 繩文時代土坑(10)  
第60圖 繩文時代土坑(11)  
第61圖 繩文時代土坑(12)  
第62圖 繩文時代土坑(13)  
第63圖 繩文時代土坑(14)  
第64圖 繩文時代土坑出土遺物(1)  
第65圖 繩文時代土坑出土遺物(2)  
第66圖 繩文時代土坑出土遺物(3)  
第67圖 繩文時代土坑出土遺物(4)  
第68圖 繩文時代土坑出土遺物(5)  
第69圖 繩文時代土坑出土遺物(6)  
第70圖 繩文時代土坑出土遺物(7)  
第71圖 繩文時代土坑出土遺物(8)  
第72圖 繩文時代土坑出土遺物(9)  
第73圖 繩文時代土坑出土遺物(10)  
第74圖 繩文時代土坑出土遺物(11)  
第75圖 繩文時代土坑出土遺物(12)  
第76圖 繩文時代土坑出土遺物(13)  
第77圖 繩文時代土坑出土遺物(14)  
第78圖 繩文時代土坑出土遺物(15)  
第79圖 繩文時代土坑出土遺物(16)  
第80圖 繩文時代土坑出土遺物(17)  
第81圖 繩文時代土坑出土遺物(18)  
第82圖 繩文時代土坑出土遺物(19)  
第83圖 繩文時代土坑出土遺物(20)  
第84圖 繩文時代土坑出土遺物(21)  
第85圖 繩文時代土坑出土遺物(22)  
第86圖 繩文時代土坑出土遺物(23)  
第87圖 繩文時代土坑出土遺物(24)  
第88圖 繩文時代土坑出土遺物(25)  
第89圖 繩文時代土坑出土遺物(26)  
第90圖 繩文時代土坑出土遺物(27)  
第91圖 繩文時代土坑出土遺物(28)  
第92圖 繩文時代土坑出土遺物(29)  
第93圖 繩文時代土坑出土遺物(30)  
第94圖 繩文時代土坑出土遺物(31)  
第95圖 繩文時代土坑出土遺物(32)  
第96圖 繩文時代土坑出土遺物(33)  
第97圖 繩文時代土坑出土遺物(34)  
第98圖 繩文時代土坑出土遺物(35)  
第99圖 繩文時代土坑出土遺物(36)  
第100圖 繩文時代遺構出土石器(1)  
第101圖 繩文時代遺構出土石器(2)  
第102圖 繩文時代遺構出土石器(3)  
第103圖 繩文時代遺構出土石器(4)  
第104圖 繩文時代遺構出土石器(5)  
第105圖 繩文時代遺構外出土土器(1)  
第106圖 繩文時代遺構外出土土器(2)  
第107圖 繩文時代遺構外出土土器(3)  
第108圖 繩文時代遺構外出土土器(4)  
第109圖 繩文時代遺構外出土土器(5)  
第110圖 繩文時代遺構外出土土器(6)  
第111圖 繩文時代遺構外出土土器(7)  
第112圖 繩文時代遺構外出土土器(8)  
第113圖 繩文時代遺構外出土土器(9)  
第114圖 繩文時代遺構外出土土器(10)  
第115圖 繩文時代遺構外出土土器(11)  
第116圖 繩文時代遺構外出土土器(12)  
第117圖 繩文時代遺構外出土土器(13)  
第118圖 繩文時代遺構外出土土器(14)  
第119圖 繩文時代遺構外出土土器(15)  
第120圖 繩文時代遺構外出土土器(16)  
第121圖 繩文時代遺構外出土土器(17)  
第122圖 繩文時代遺構外出土土器片錘・円板等(1)  
第123圖 繩文時代遺構外出土土器片錘・円板等(2)  
第124圖 繩文時代遺構外出土土器片錘・円板等(3)

- 第125図 縄文時代遺構外出土石器 (1)
- 第126図 縄文時代遺構外出土石器 (2)
- 第127図 縄文時代遺構外出土石器 (3)
- 第128図 縄文時代遺構外出土石器 (4)
- 第129図 縄文時代遺構外出土石器 (5)
- 第130図 縄文時代遺構外出土石器 (6)
- 第131図 縄文時代遺構外出土石器 (7)
- 第132図 縄文時代遺構外出土石器 (8)
- 第133図 縄文時代遺構外出土石器 (9)
- 第134図 弥生時代竪穴住居跡 (1)
- 第135図 弥生時代竪穴住居跡 (2)
- 第136図 弥生時代竪穴住居跡出土遺物 (1)
- 第137図 弥生時代竪穴住居跡出土遺物 (2)
- 第138図 弥生時代遺構外出土遺物
- 第139図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (1) 及び  
竪穴状遺構・土坑
- 第140図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (2)
- 第141図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (3)
- 第142図 奈良・平安時代竪穴住居跡 (4)
- 第143図 掘立柱建物跡 (1)
- 第144図 掘立柱建物跡 (2)
- 第145図 奈良・平安時代遺構出土遺物 (1)  
及び竪穴状遺構・土坑出土遺物
- 第146図 奈良・平安時代遺構出土遺物 (2)
- 第147図 奈良・平安時代遺構出土遺物 (3)
- 第148図 奈良・平安時代遺構出土遺物 (4)
- 第149図 奈良・平安時代遺構外出土土器・土製品
- 第150図 奈良・平安時代以降砥石
- 第151図 瓦塔集中域 (SX001)
- 第152図 馬込遺跡瓦塔実測図
- 第153図 各部名称と二軸以上の斗拱
- 第154図 塔A部材実測図 (1)
- 第155図 塔A部材実測図 (2)
- 第156図 塔A部材実測図 (3)
- 第157図 塔B部材実測図 (1)
- 第158図 塔B部材実測図 (2)
- 第159図 塔B部材実測図 (3)
- 第160図 地下式坑 (1)
- 第161図 地下式坑 (2)
- 第162図 地下式坑 (3)
- 第163図 障子堀状遺構
- 第164図 野馬土手
- 第165図 野馬堀
- 第166図 中・近世遺構内出土遺物
- 第167図 中・近世遺構外出土遺物
- 第168図 銭貨

## 表 目 次

- 第1表 遺構番号新旧対照表
- 第2表 周辺的主要遺跡
- 第3表 第5地点出土の石器と石材
- 第4表 第6-2地点出土の石器と石材
- 第5表 遺構出土縄文土器集計表
- 第6表 遺構外出土縄文土器集計表
- 第7表 縄文時代遺構出土土製品計測表
- 第8表 縄文時代遺構外出土土製品計測表
- 第9表 縄文時代石器属性表
- 第10表 縄文時代石器組成表
- 第11表 奈良・平安時代遺物観察表
- 第12表 奈良・平安時代以降砥石計測表
- 第13表 銭貨計測表

## 図版目次

### 巻首図版 瓦塔

図版1 馬込遺跡周辺空中写真(昭和44年)

図版2 調査状況等

図版3 旧石器時代遺物集中地点(1)

図版4 旧石器時代遺物集中地点(2)

図版5 旧石器時代遺物集中地点(3)

図版6 縄文時代竪穴住居跡(1)

図版7 縄文時代竪穴住居跡(2)

図版8 縄文時代竪穴住居跡(3)

図版9 縄文時代土坑(1)

図版10 縄文時代土坑(2)

図版11 縄文時代土坑(3)

図版12 縄文時代土坑(4)

図版13 縄文時代土坑(5)

図版14 縄文時代土坑(6)

図版15 縄文時代土坑(7)

図版16 弥生時代竪穴住居跡(1)

図版17 弥生時代竪穴住居跡(2)

図版18 奈良・平安時代竪穴住居跡(1)

図版19 奈良・平安時代竪穴住居跡(2)

図版20 奈良・平安時代竪穴住居跡(3)・

瓦塔出土状況・掘立柱建物跡

図版21 地下式坑・野馬土手・野馬堀

図版22 野馬堀・障子堀状遺構

図版23 旧石器時代石器(1)

図版24 旧石器時代石器(2)

図版25 旧石器時代石器(3)

図版26 旧石器時代石器(4)

図版27 旧石器時代石器(5)

図版28 旧石器時代石器(6)

図版29 旧石器時代石器(7)

図版30 縄文時代遺構出土石器(1)

図版31 縄文時代遺構出土石器(2)

図版32 遺構外出土縄文時代土製品(1)

図版33 遺構外出土縄文時代土製品(2)

図版34 遺構外出土縄文時代土製品(3)

図版35 縄文時代遺構出土石器(1)

図版36 縄文時代遺構出土石器(2)

図版37 縄文時代遺構出土石器(3)

図版38 縄文時代遺構外出土石器(1)

図版39 縄文時代遺構外出土石器(2)

図版40 縄文時代遺構外出土石器(3)

図版41 縄文時代遺構外出土石器(4)

図版42 縄文時代遺構外出土石器(5)

図版43 縄文時代遺構外出土石器(6)

図版44 弥生時代竪穴住居跡出土遺物(1)

図版45 弥生時代竪穴住居跡出土遺物(2)

図版46 弥生時代竪穴住居跡出土遺物(3)・

遺構外出土遺物

図版47 奈良・平安時代竪穴住居跡出土遺物

図版48 砥石

図版49 瓦塔部材(1)

図版50 瓦塔部材(2)

図版51 瓦塔部材(3)

図版52 瓦塔部材(4)

図版53 瓦塔部材(5)

図版54 瓦塔部材(6)

図版55 瓦塔部材(7)・鉄鉢形土器

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過（第1・2図）

千葉ニュータウン整備事業は、白井市・船橋市・印西市・印旛村・本荻村に及ぶ広大な計画都市の建設が現在も継続されている。その事業に関連して、印西市平岡地区に自然公園の建設が計画された。平成7年度に事業主体である印西地区環境整備事業組合が、千葉県教育委員会に計画対象地区内の埋蔵文化財の有無について照会を行った。その結果、地区内は馬込遺跡として周知の遺跡となっていたため、関係機関が慎重に協議した結果、土盛りなどで遺跡を傷つける恐れのない部分を除き、記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人印旛都市文化財センターが行うこととなり、平成8年度に自然公園建設部分の21,300㎡を対象とした上層確認調査、排水路建設部分の340㎡を対象とした上層本調査及び下層確認調査が実施された。その後事業主体である印西地区環境整備事業組合との協議により、平成9年6月から財団法人千葉県文化財センターが調査を行うこととなり、平成15年度をもって全ての調査及び整理作業が終了し、報告書を刊行する運びとなった。

各年度の作業内容及び担当職員は下記の通りである。

#### 平成9年度

組織：北部調査事務所（所長 折原 繁）

（発掘調査）

期間：平成9年6月2日～平成10年3月6日

内容：確認調査 上層 9,970㎡のうち997㎡

下層 24,480㎡のうち979㎡

本調査 上層 10,420㎡

担当者：副所長 宮 重行、主任技師 石田清彦・沖松信隆

#### 平成10年度

組織：北部調査事務所（所長 折原 繁）

（整理作業）

期間：平成10年6月1日～6月30日、平成10年10月1日～平成11年3月31日

内容：水洗・注記から図面作成の一部まで（平成9年度調査分）

担当者：主任技師 沖松信隆

#### 平成11年度

組織：北部調査事務所（所長 折原 繁）

（発掘調査）

期間：平成11年4月7日～7月30日

内容：確認調査 上層 8,900㎡のうち890㎡

下層 8,900㎡のうち484㎡

本調査 上層 2,900㎡

下層 949㎡

担当者：主任技師 織田良昭・沖松信隆

(整理作業)

期間：平成11年4月1日～9月30日

内容：図面作成の一部から原稿執筆の一部まで（平成9年度調査分）

水洗・注記から実測の一部まで（平成11年度調査分）

担当者：主任技師 沖松信隆

平成13年度

組織：北部調査事務所（所長 石田廣美）

(発掘調査)

期間：平成13年5月1日～9月28日

内容：確認調査 上層 13,795㎡のうち1,242㎡

下層 19,795㎡のうち 795㎡

本調査 上層 1,003㎡

下層 330㎡

担当者：上席研究員 川端保夫

平成14年度

組織：北部調査事務所（所長 古内 茂）

(発掘調査)

期間：平成14年9月2日～平成14年10月18日

内容：確認調査 上層 220㎡のうち22㎡

下層 320㎡のうち56㎡

本調査 上層 100㎡

下層 330㎡

担当者：上席研究員 遠藤治雄

(整理作業)

期間：平成14年11月1日～11月30日

内容：水洗・注記から実測まで（平成13年度調査分）

担当者：研究員 沖松信隆

平成15年度

組織：北部調査事務所（所長 古内 茂）

(整理作業)

期間：平成15年4月1日～平成16年1月31日

内容：水洗・注記から報告書刊行まで（平成9・11・13・14年度調査分）

担当者：研究員 小笠原水隆



第1図 馬込遺跡下層調査状況



調査年度	調査主体	調査種別	調査結果	備考
① 平成8年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	確認調査のみで終了	
② 平成8年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	本調査範囲に決定	その後、復元発掘調査の上、本調査範囲の指定を完了した。
③a 平成9年度	京町雄勝町文化財センター	確認・本調査	本調査終了	
③b 平成9年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	本調査範囲に決定	
③c 平成9年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	本調査終了	
③d 平成9年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	本調査範囲に決定	
③e 平成14年度	京町雄勝町文化財センター	本調査	本調査終了	
④ 平成9年度	京町雄勝町文化財センター	確認・本調査	本調査終了	
⑤ 平成10年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	確認調査のみで終了	
⑥ 平成11年度	京町雄勝町文化財センター	確認・本調査	本調査終了	
⑦ 平成11年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	確認調査のみで終了	
⑧ 平成13年度	京町雄勝町文化財センター	確認・本調査	本調査終了	
⑨ 平成13年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	確認調査のみで終了	
⑩ 平成14年度	京町雄勝町文化財センター	確認調査	確認調査のみで終了	

森林残置範囲 (現状もしくは是土保存)  
 古墳 (馬込古墳群)



第2図 馬込遺跡上層調査状況

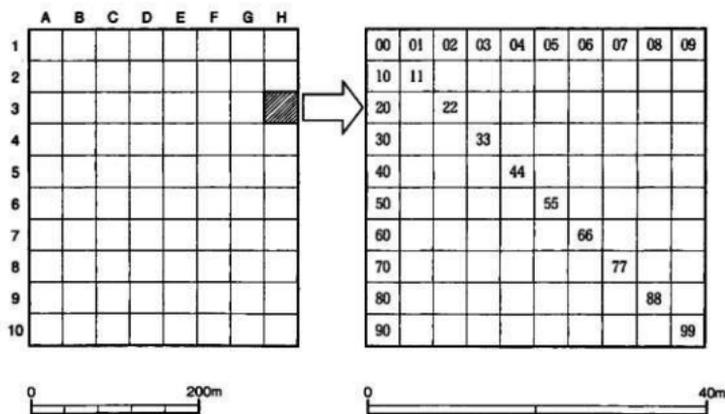
※参考：平成8年度印旛郡市文化財センターにおける発掘調査概要

- ① 自然公園整備事業調査分（平成9年度財団法人印旛郡市文化財センター年報において公表）  
 期 間：平成8年8月1日～平成8年9月20日  
 内 容：確認調査 上層 21,300㎡のうち2,130㎡
- ② 排水整備事業調査分（平成9年度財団法人印旛郡市文化財センター年報において公表）  
 期 間：平成8年11月25日～平成8年12月10日  
 内 容：確認調査 下層 340㎡のうち12㎡  
 本 調 査 上層 340㎡

## 2 調査の概要

### (1) 調査区の設定（第3図）

調査区全体を対象として、公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドは、北西を起点として西から東に向かってA・B・C…、北から南に向かって1・2・3…とした。ただし、数字と紛らわしいI・O・Vは使用しないこととした。大グリッド内は4m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…とした。したがって、各々の小グリッドは、2C-50、3G-99などと呼称する。



第3図 グリッド分割と呼称

### (2) 遺構番号（第1表）

調査時点では遺構の種別にかかわらず通し番号，すなわち001・002…という名称を使用した。整理作業の段階で、遺構番号の前に遺構種を示すアルファベットを冠した記号を付し、遺構番号を各遺構種ごとの通し番号に変更した。遺構種の一覧は次の通りである。

SI：堅穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝 SX：その他特殊遺構

第1表 遺構番号新旧対照表

新番号	旧番号	調査年度	時期	種別
SK 001	030	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 002	066	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 003	090	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 004	088	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 005	106	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 006	128	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 007	169	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 008	215	1999(平成11)年	縄文	竪穴住居跡
SK 009	178	1997(平成9)年	縄文	竪穴住居跡
SK 001	004	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 002	005	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 003	111	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 004	006	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 005	008	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 006	009	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 007	010	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 008	011	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 009	013	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 010	012	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 011	014	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 012	023	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 013	031	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 014	032	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 015	042	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 016	045	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 017	051	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 018	052	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 019	053	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 020	057	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 021	055	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 022	059	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 023	061	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 024	047	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 025	058	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 026	058B	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 027	062	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 028	071	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 029	080	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 030	077	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 031	063	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 032	081	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 033	082	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 034	084	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 035	085	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 036	086	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 037	091	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 038	095	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 039	088	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 040	096	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 041	101	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 042	103	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 043	105	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 044	113	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 045	116	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 046	122	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 047	129	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 048	130	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 049	133	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 050	131	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 051	135	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 052	142	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 053	143	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 054	150	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 055	153	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 056	155	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 057	156	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 058	157	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 059	158	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 060	161	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 061	164	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 062	165A	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 063	165B	1997(平成9)年	縄文	土坑

新番号	旧番号	調査年度	時期	種別
SK 064	167	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 065	168	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 066	171	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 067	172	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 068	173A	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 069	173B	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 070	175C	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 071	173D	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 072	173E	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 073	177	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 074	187	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 075	188	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 076	191	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 077	179A	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 078	179B	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 079	179C	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 080	179D	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 081	179E	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 082	216	1999(平成11)年	縄文	土坑
SK 083	217	1999(平成11)年	縄文	土坑
SK 084	223	1999(平成11)年	縄文	土坑
SK 085	220	1999(平成11)年	縄文	土坑
SK 086	218	1999(平成11)年	縄文	土坑
SK 087	212	1999(平成11)年	縄文	土坑
SK 088	219	1999(平成11)年	縄文	土坑
SK 089	SK009	2001(平成13)年	縄文	土坑
SK 090	SK005	2001(平成13)年	縄文	土坑
SK 091	SK004	2001(平成13)年	縄文	土坑
SK 092	SK006	2001(平成13)年	縄文	土坑
SK 093	SK101	2001(平成13)年	縄文	土坑
SK 094	125	1997(平成9)年	縄文	土坑
SK 095	205	1997(平成9)年	縄文	土坑
SI 010	007	1997(平成9)年	弥生	竪穴住居跡
SI 011	021	1997(平成9)年	弥生	竪穴住居跡
SI 012	029	1997(平成9)年	弥生	竪穴住居跡
SI 013	046	1997(平成9)年	弥生	竪穴住居跡
SI 014	065	1997(平成9)年	弥生	竪穴住居跡
SI 015	003	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SI 016	110	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SI 017	024	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SI 018	025	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SI 019	026	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SI 020	083	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SI 021	121	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SI 022	170	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴住居跡
SK 001	166	1997(平成9)年	奈良・平安	瓦塔片集
SB 001	174	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴柱建物跡
SB 002	183	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴柱建物跡
SB 003	184	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴柱建物跡
SB 004	185	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴柱建物跡
SB 005	221	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴柱建物跡
SB 006	222	1997(平成9)年	奈良・平安	竪穴柱建物跡
SK 102	207	1997(平成9)年	奈良・平安	土坑
SK 096	017	1997(平成9)年	中・近世	地下式坑
SK 097	018	1997(平成9)年	中・近世	地下式坑
SK 098	067	1997(平成9)年	中・近世	地下式坑
SK 099	094	1997(平成9)年	中・近世	地下式坑
SK 100	123	1997(平成9)年	中・近世	地下式坑
SK 101	137	1997(平成9)年	中・近世	地下式坑
SA 001	(野馬土手)	1997(平成9)年	近世	野馬土手
SD 001	060	1997(平成9)年	中・近世	障子組遺構
SD 002	002	1997(平成9)年	近世	野馬堀
SD 003	001	1997(平成9)年	近世	溝状遺構
SD 004	019	1997(平成9)年	近世	溝状遺構
SD 005	020	1997(平成9)年	近世	溝状遺構

旧番号と新番号の対照は第1表に示した。資料は可能な限り新番号に修正したが、現場調査時の記録類及び遺物の注記番号は旧番号のままである。

### (3) 発掘調査

上層確認調査は、調査対象範囲の10%を基本として確認トレンチを設定した。遺構や遺物集中の検出を目安として本調査の必要な範囲を確定し、本調査を実施した。

下層確認調査は、調査対象範囲に2m×2mの確認グリッドを調査対象面積の4%を基本として設定した。石器が出土した地点について周囲を拡張し、遺物集中の存否と広がりを確認した上で、本調査を要する範囲を判断し、本調査を実施した。

## 第2節 遺跡の位置と周辺遺跡 (第4図, 第2表)

### 1 遺跡の位置と環境

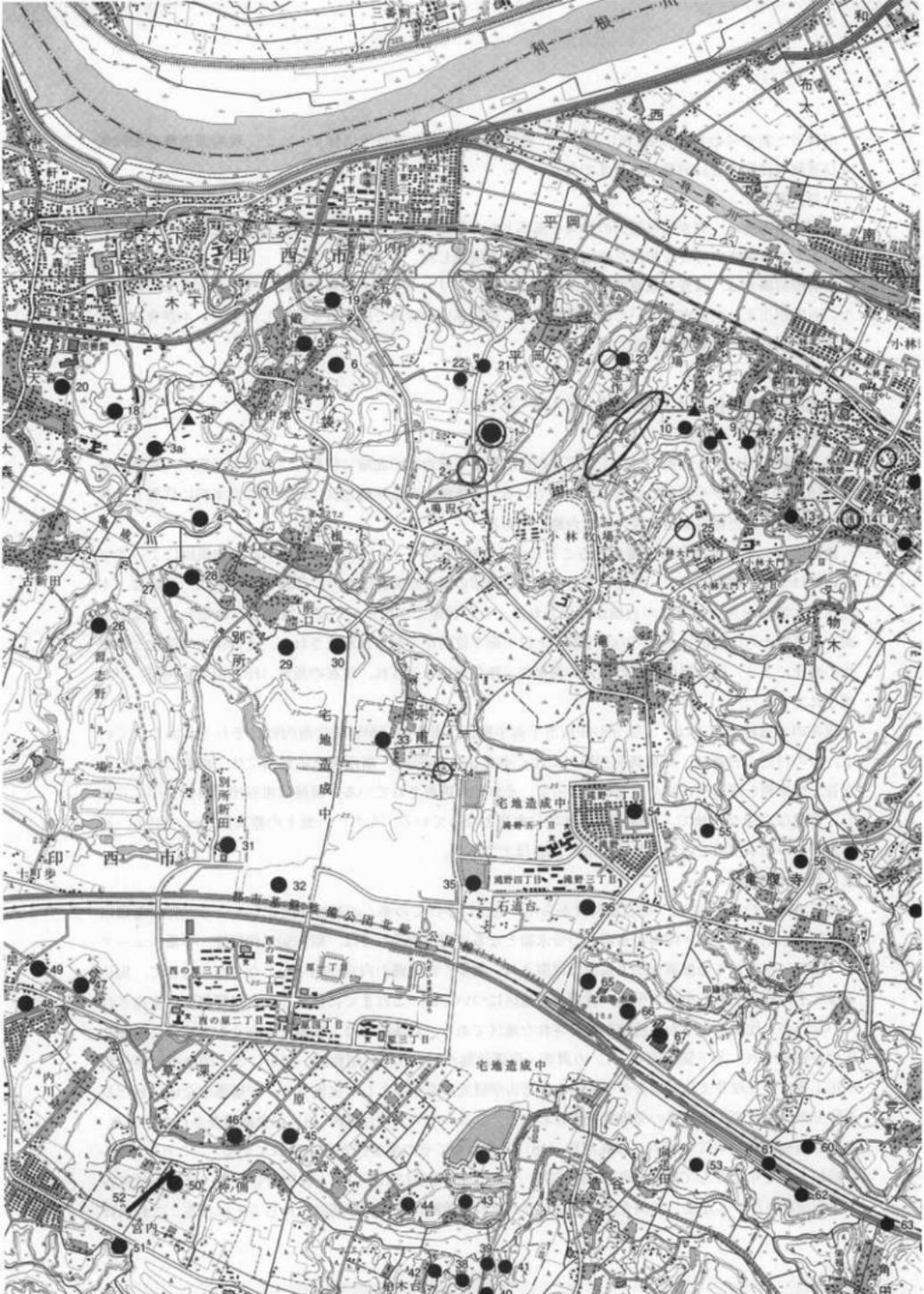
馬込遺跡の所在する印西市は、千葉県北部に広がる下総台地の北端に位置し、北側が利根川、東側～南側が印旛沼、西側が手賀沼にそれぞれ面している。本遺跡のある平岡地区は印西市の北東部に位置し、利根川に開析された標高30m前後の下総台地上にある。

地形学的に本遺跡周辺の変遷を見ることにする。約13万年～12万年前に蛇行する古利根川によって下総台地は大きく開析された。現在の手賀沼から印旛沼の部分が流路となり、印西市、白井市、印旛村、本埜村の大部分を含む孤島状の台地が形成された。この状態で立川ローム層が堆積し、台地上に下総上位面、手賀沼から印旛沼にかけての河岸段丘上に下総下位面がそれぞれ形成された。その後の寒冷化と温暖化の変化により、低地部に海水の流入・淡水化・陸化が繰り返され、現在の地形(印旛沼の干拓前)が形成されていった。

現在の本遺跡の付近は、大部分が印西市平岡字馬込、南側部分が別所字南内野にそれぞれあつている。この付近の台地は、北東側を利根川に注ぐ小支谷(東谷津)、南西側を手賀沼に注ぐ亀成川水系の小支谷、南東側を印旛沼に注ぐ小支谷によって、それぞれ開析されている。遺跡は東谷津の奥部左岸に立地し、南側は平坦な台地で、亀成川水系との分水嶺となっている。なお、台地上の標高は28m～31m、通称東谷津の旧水田面との比高差は20m～23mほどである。

### 2 周辺の遺跡

馬込遺跡(1)周辺では、旧石器時代から中・近世にかけての多くの遺跡が所在している。特に亀成川＝手賀沼水系と神崎川＝印旛沼水系との分水嶺となる平坦な台地上では、昭和50年代以降、千葉ニュータウン開発にかかわる発掘調査が大規模に展開され、数多くの遺跡の内容が明らかとなった。対して、馬込遺跡とその周辺である小林、平岡、竹袋の各地区については、これまでに目立った大規模調査は実施されていないが、比較的古くから遺跡が目された地区である。具体的には、戦後まもなく木下地区に愛郷文化会が結成され、木下別所廃寺(4)の調査・保護活動が行われた。昭和34・35年には、印旛沼・手賀沼干拓工事に伴う埋蔵文化財調査が早稲田大学考古学研究室を中心として実施され、印旛郡市全域にわたる遺跡分布調査及び主要遺跡の発掘調査が行われた<sup>(1)</sup>。この中で天神台遺跡(3)が発掘調査された。また、木下別所廃寺についても曾谷ノ窪瓦窯跡(18)と合わせてその重要性が指摘されている<sup>(2)</sup>。これ以後も、早稲田大学を中心として昭和46年に鶴塚古墳(16)、同52年及び53年に木下別所廃寺(4)、同54年に曾谷ノ窪瓦窯跡(18)と連続して調査が行われ、それぞれの遺跡の重要性が認識されることになる。これ以降



第4図 周辺の遺跡 (1/25,000)

は千葉ニュータウンの開発が進むに従って、中・小規模ながら開発が入りはじめ、稲荷峠遺跡(68)、小林城跡(17)、駒形北遺跡(12)などで記録保存目的の行政調査が行われた。以下、それらの成果も用いながら、時代別に周辺の主な遺跡の状況を概観する。

旧石器時代の石器群は、本遺跡の南側に展開する千葉ニュータウン内及びその周辺調査によって、多くの旧石器時代の遺跡が確認されている。本遺跡にほど近いあたりでは、地国穴台遺跡(36)、向辺田遺跡(53)、天王台西遺跡(59)、両古瀬遺跡(60)、角田台遺跡(62)、向原遺跡(66)五斗苺遺跡(67)などでまとまった石器群の出土が見られる。

縄文時代の遺跡は、縄文時代後期の貝塚を伴う天神台遺跡(3)が遺跡の規模、遺物の量ともに代表的な例として挙げることができる。貝層及びその周辺にはおびただしい量の土器片及び石器類等が散布している。先述したように学史的にも著名であり、貝層をはじめとして遺跡の遺存も良好で、本地域を代表する縄文時代貝塚として極めて重要な遺跡である。そのほか、本遺跡周辺では中期及び後期を中心とする遺跡が、新堀込東遺跡(6)をはじめとして多く見られる。また、早期前半の田戸(下層・上層)式が天神台遺跡をはじめとして、新堀込西遺跡(5)、井之内作南遺跡(19)、見城寺西遺跡(27)、鶴塚古墳(16)、

第2表 周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	遺跡地図No.	所在	主な時代
1	馬込遺跡	24-35	印西市	旧石器、縄文(中末・後)、弥生(後)、奈良・平安、中・近世
2	馬込古墳群	24-34	印西市	古墳 並円墳5基
3	天神台遺跡	24-17	印西市	縄文(早・後)、貝塚を伴う、弥生(後)、古墳、奈良・平安
4	木下別所庵寺	24-131	印西市	飛鳥、奈良、平安
5	新堀込西遺跡	24-20	印西市	縄文(早・中)、古墳(後)
6	新堀込東遺跡	24-21	印西市	縄文(中・後)、古墳(後)
7	遺作古墳群	24-41	印西市	古墳 並前方後円墳5基、円墳9基、方墳1基
8	馬場遺跡	24-44	印西市	縄文(後・後)、貝塚を伴う
9	駒形西遺跡	24-47	印西市	縄文(後)、貝塚を伴う
10	馬場古墳	24-45	印西市	古墳 並前方後円墳・遺作古墳群に含まれる可能性あり。
11	駒形古墳	24-46	印西市	古墳 並前方後円墳
12	駒形北遺跡	24-48	印西市	縄文(後)、古墳(後)、平安、中・近世
13	城山城跡	24-224	印西市	中・近世
14	小林古墳群	24-52	印西市	古墳 並円墳、方墳
15	浅間山古墳群	24-50	印西市	古墳 並円墳2基
16	鶴塚古墳	24-51	印西市	弥生・古墳 並円墳1基
17	小林城跡	24-53	印西市	旧石器、縄文(早)、古墳、中・近世
18	曾谷ノ宮古墳	24-16	印西市	奈良
19	井之内作南遺跡	24-22	印西市	旧石器、縄文(早・中・後)、平安
20	大森降屋跡	24-14	印西市	近世
21	東遺跡	24-36	印西市	旧石器、平安、中世
22	東古墳	24-37	印西市	古墳 並円墳
23	西山遺跡	24-40	印西市	縄文(後)、平安
24	西山塚群	24-39	印西市	中・近世
25	新山塚群	24-54	印西市	縄文(早・中・近世)
26	大山遺跡	24-128	印西市	縄文、弥生
27	見城寺西遺跡	24-129	印西市	縄文(早)、弥生(後)、平安
28	見城寺東遺跡	24-130	印西市	縄文(後)、弥生(後)
29	別所大田遺跡	24-136	印西市	縄文(中・後)、古墳(後)
30	宗重北遺跡	24-137	印西市	縄文(早・前・中)
31	別所新田遺跡	24-138	印西市	縄文(中)
32	六角遺跡	24-139	印西市	旧石器、縄文(早・中・後)
33	新割遺跡	24-140	印西市	旧石器、縄文(早・中)
34	鳥見神社遺跡	24-141	印西市	中・近世

No.	遺跡名	遺跡地図No.	所在	主な時代
35	石蓮谷津遺跡	24-142	印西市	旧石器、縄文(早・前)
36	地国穴台遺跡	24-179	印西市	旧石器、縄文(早期)
37	一の作遺跡	24-177	印西市	旧石器、縄文(前期)
38	亀ノ甲西遺跡	24-173	印西市	縄文(早・前・後)、弥生
39	亀ノ甲北遺跡	24-174	印西市	縄文(中)
40	亀ノ甲南遺跡	24-175	印西市	縄文(後)
41	亀ノ甲東遺跡	24-176	印西市	縄文(前・中・後)
42	柏木古墳群	24-172	印西市	縄文、弥生、古墳(中)、平安
43	安輪遺跡	24-170	印西市	縄文(後)、平安
44	東遺跡	24-169	印西市	縄文(早・中)
45	新堀下遺跡	24-167	印西市	縄文(後)
46	東遺跡	24-166	印西市	縄文(前)
47	灰中西遺跡	24-164	印西市	縄文(中)
48	猪沼遺跡	24-163	印西市	縄文(早・後)
49	舟天南遺跡	24-162	印西市	縄文(早・後)
50	新井塚1遺跡	24-229	印西市	縄文(後)、奈良・平安
51	新井塚2遺跡	24-230	印西市	奈良・平安
52	新井塚3遺跡	24-232	印西市	近世
53	向辺田遺跡	24-461	印西市	旧石器、縄文、奈良・平安、近世
54	大門遺跡	24-8	本埜村	旧石器、縄文、中・近世
55	稲荷峠遺跡	24-9	本埜村	中・近世
56	龍藏寺古墳群	24-11	本埜村	古墳、中・近世 ※古墳利用の塚群か。
57	天王南遺跡	24-12	本埜村	縄文、弥生、古墳(後)、中世
58	宮内遺跡	24-23	本埜村	旧石器、縄文、弥生、古墳(後)、奈良・平安、中・近世
59	天王台西遺跡	24-21	本埜村	旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中・近世
60	南古瀬遺跡	24-35	本埜村	旧石器、縄文(早・前)
61	廣所塚群	24-36	本埜村	縄文(中)、中・近世
62	角田台遺跡	24-40	本埜村	旧石器、縄文(早・前)、奈良・平安、中・近世
63	式ノ込遺跡	24-42	本埜村	旧石器、縄文(前・中)、弥生、古墳、奈良・平安
64	寛ノ遺跡	24-43	本埜村	旧石器、縄文(前)
65	向原北遺跡	24-41	本埜村	旧石器
66	向原遺跡	24-17	本埜村	旧石器、縄文(早・後)
67	五斗苺遺跡	24-18	本埜村	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)
68	稲荷峠遺跡	24-31	印西市	奈良・平安

※遺跡地図No.は、千葉県教育委員会(1997)『千葉県縄文文化財分布地図(1)-東葛飾・印旛地区(改訂版)-』を使用した。

南側のニュータウン地区内の六角遺跡(32)及び石道谷津遺跡(35)等で確認されるなど、早期前半の遺跡が比較的集中する地域としても指摘できる。また、馬場遺跡(8)では後期から晩期前半まで遺跡が存続し、貝塚も伴うなど注目される。

縄文時代晩期後半から弥生時代中期にかけては、本地域ではほとんど遺跡を見出すことができない。千葉ニュータウン地区内においても同様で、後期から古墳時代前期になると遺跡が急増し、集落を形成することが明らかとなっている。東海系の土器が出土した船尾町田遺跡をはじめとして、向新田遺跡、一本桜南遺跡、鳴神山遺跡、船尾白幡遺跡などがその例として挙げられる。

古墳時代後期になると、周辺に古墳群の形成が見られるが、集落の実態は調査例が少なく明らかでない。本遺跡東側の小林地区を中心として古墳及び古墳群が集中している。代表的なものに、前方後円墳5基を含む道作古墳群(7)、馬場古墳(10)、胸形古墳(11)、小林古墳群(14)、浅間山古墳群(15)、鶴塚古墳(16)がある。

奈良・平安時代以降は、先述したように木下別所廃寺(4)、曾谷ノ窪瓦窯跡(18)など寺院関係の遺跡が注目される。また、西山塚群(24)、新山塚群(25)、関所塚群(61)などの中世塚群も多く見られるのも本地域の特色である。

#### 参考文献(年代順)

- 滝口宏編 1961 『印旛手賀』 千葉県教育委員会・早稲田大学考古学研究室  
千葉県都市公社 1975 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ』  
財団法人千葉県文化財センター 1976 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅴ』  
財団法人千葉県文化財センター 1984 『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』  
財団法人千葉県文化財センター 1984 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅵ』  
千葉県教育委員会 1990 『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』  
財団法人千葉県文化財センター 1993 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』  
千葉県教育委員会 1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)-東葛・印旛地区(改訂版)-』

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 概要

本事業にかかわる発掘調査の結果、旧石器時代から中・近世に至るまでの遺構及び遺物を検出した。遺構は、旧石器時代遺物集中地点8か所、縄文時代竪穴住居跡9軒・土坑95基、弥生時代竪穴住居跡5軒、奈良・平安時代竪穴住居跡等9軒、掘立柱建物跡6棟、瓦塔集中地点1か所、中・近世地下式坑6基、障子堀状遺構1か所、野馬土手1条、野馬堀1条が検出された。

### 第2節 旧石器時代

#### 1 概要 (第5図)

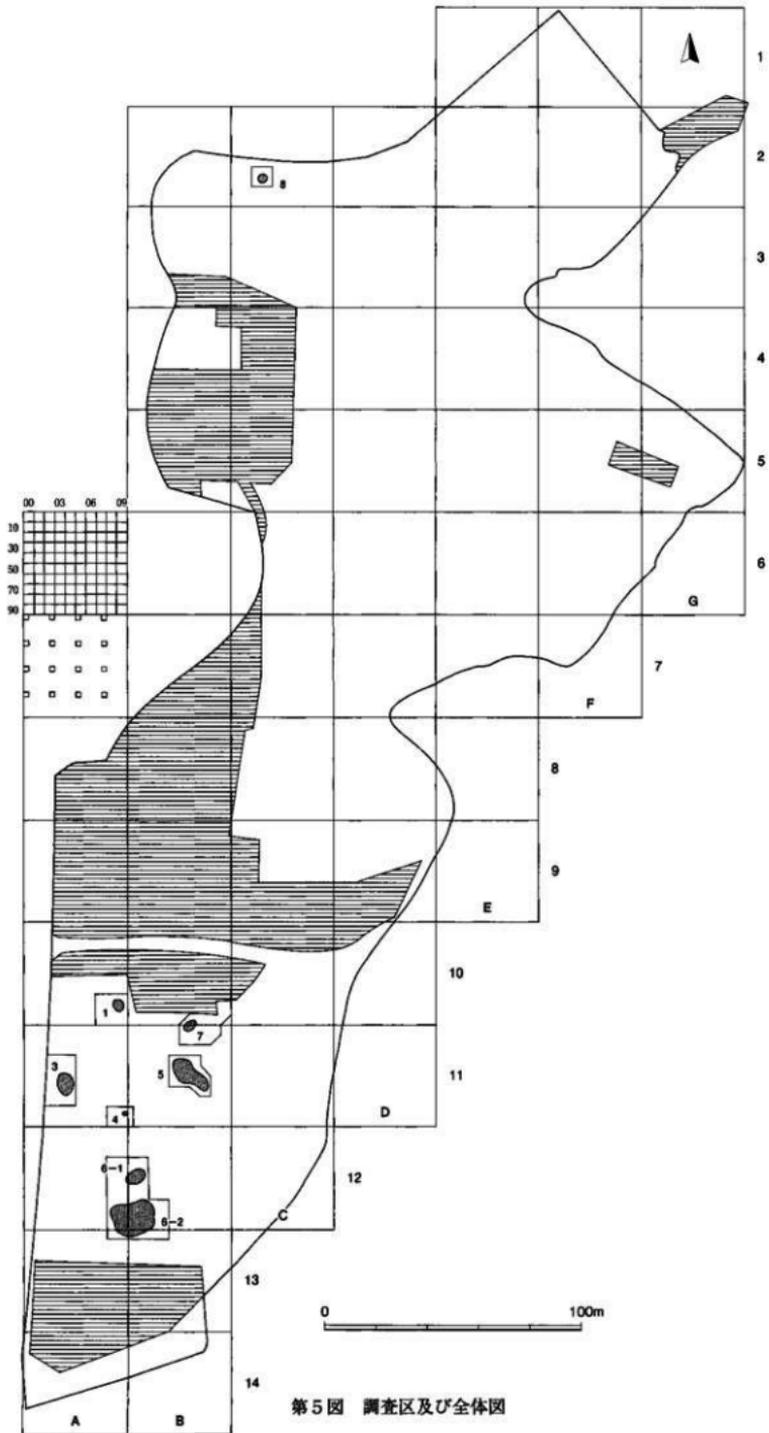
本遺跡は北方に利根川を望み、印旛沼と利根川を結ぶ将監川に近接した地点に位置し、台地の東側縁辺に沿って南北に延びるような形で形成されている。周辺には本遺跡の北に隣接した東遺跡<sup>(1)</sup>、北西約1kmの地点に五ノ神遺跡<sup>(2)</sup>などが所在し、旧石器時代に関連した遺物も若干検出・採集されている。このような状況の中で本遺跡の調査も上層遺構の調査が終了すると同時に旧石器時代の石器確認のための調査を実施した。

確認調査は第5図に示したように調査区を40m四方の大グリッドに区切り、その中をさらに4mの小グリッドを設定し調査を開始した。確認のための小グリッドは、原則として2m四方とし、大グリッドの中に16か所を設定し、均一に確認できるように配慮したが、調査区東部、南東部については公園としての景観保全ということで樹木を残すような整備を計画したため、10B・11B・12B区や10C・11C・12C区では保存樹木の隙間に小グリッドを設定し調査をすすめた。このような状況下での調査においても11B区では後述するように多量の石器群が検出されたため周辺の樹木を伐採し拡張区を設定し、本調査へと移行するような手順で調査を進捗させた。なお、当文化財センターの調査は平成9年度からであり、年度別に確認調査-本調査を繰り返し、平成14年度の本調査をもって本遺跡の調査を終了した。

その結果、調査区西方向から見ると、10A・11A・12A区、11B・12B区、2C区の各地点から石器群が検出された。だが、整理作業の過程で第2地点は縄文期の遺物であることが判明し、本章から削除するとともに第6地点は文化層が異なることが確認されたのでそれぞれ1と2に分離した。以下、堆積土層及び8地点の石器群について順次記述していくことにする。

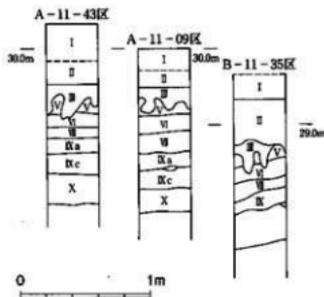
#### 2 層序 (第6図)

まず、堆積土について触れておくと、本遺跡を地形的な面から観察すれば標高約30mの平坦な台地上に営まれた遺跡であり、調査区の東側あるいは東南部ではやや傾斜をもつような地形となる。平坦部では、周辺域の堆積土と比較すると大きな変化は認められず、図示したように第IV層の消滅が著しい。図示した平坦部のグリッドでは、その痕跡をほとんど認めることはできなかった。第VI層はAT層を含有する堆積土であるが、本遺跡ではそれが顕著に認められる層はほとんど存在しない。また、第VII層の下部は暗褐色を呈し第IX層との色調の差異は少なく、以下に記すような層序となった。なお、石器群は主に第V～VI層において検出されている。



第5図 調査区及び全体図

- 第I層 表土 (耕作土)
- 第II層 黒褐色土 (縄文期の遺物包含層)
- 第III層 黄褐色土 (ソフトローム層)
- 第IV層 褐色土 (ハードローム層)
- 第V層 褐色土 (同上)
- 第VI層 明褐色土 (下部にはAT層を含有)
- 第VII層 褐色土 (暗色帯への漸移層)
- 第IX層 暗褐色土 (暗色帯)
- 第X層 褐色土 (上川ローム最下層)

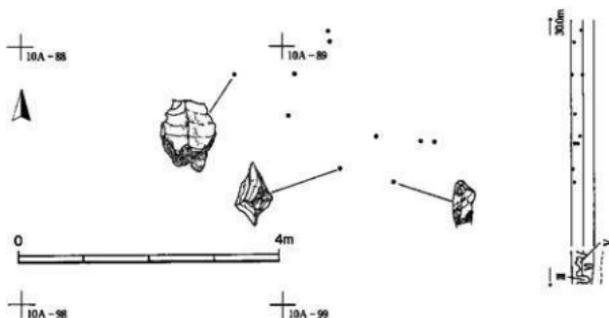


第6図 基本土層図

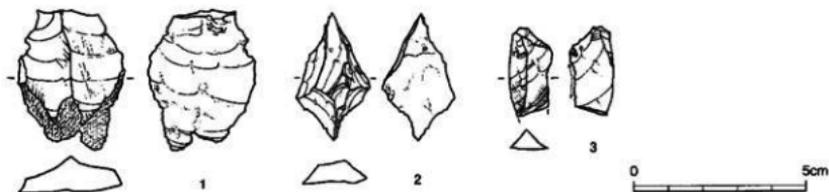
### 3 出土石器群

第1地点 (第7・8図, 図版23)

本地点の石器群は計3点と少ない。確認調査時に10A-79区で第III層中から黒曜石の剥片が検出されたため周辺を拡張して調査した。ただ本地点の東側は現状保存域にあたるため南西部に沿って拡張区を設定した。その結果、79・88・89区から剥片・削片の類が合計10点出土し、小ブロックを構成していたようである。



第7図 第1地点出土石器分布図



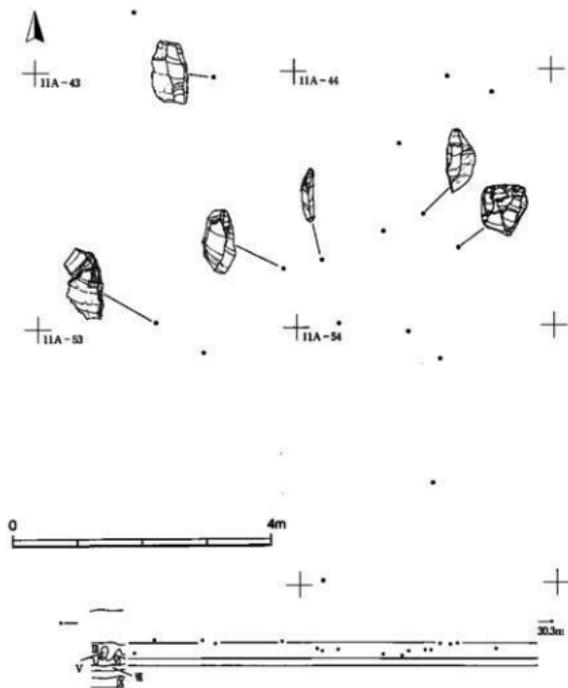
第8図 第1地点出土石器実測図

石材別にみると黒曜石 8 点、流紋岩 2 点となり、成品と認定できるものは皆無であった。なお本地点出土の黒曜石は気泡・不純物を多く含む石器の素材としては良好といいがたい石質であった。いずれにせよ本地点は小規模ながらも黒曜石を主体とした石材構成による石器群となる。

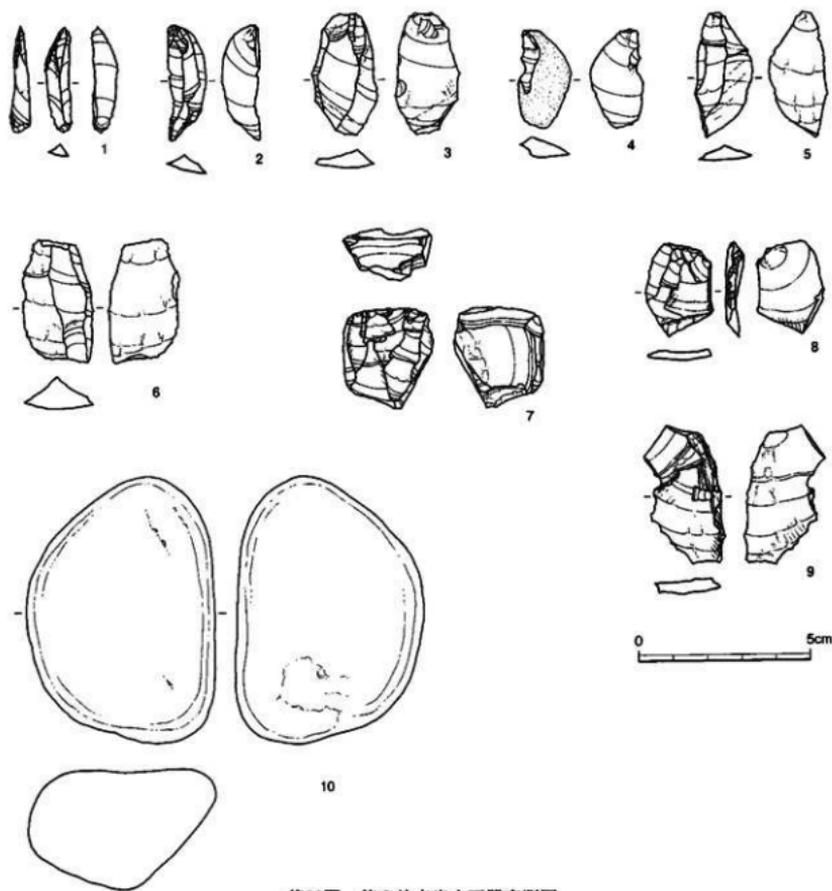
剥片 (1~3) 大型の剥片 3 点のみを図示した。1 は素材としては十分な形状を有する。表面の下半部には自然面を残す。不純物含有という点では本資料がもっとも顕著である。2 も石器製作可能な形状を呈しているが、加工痕等は認められない。3 は下端部が折断されており、表面石の側縁に使用痕らしき刃こぼれ痕が認められる。これら 3 点の石材はいずれも黒曜石である。他に流紋岩 2 点是小破片で屑片に近いため図示は省略した。

### 第 3 地点 (第 9・10 図, 図版 23)

本地点は 11A-43・45・54 区を中心として、その周辺を含め合計 29 点の石器群で構成される。確認調査時に 11A-43 区で 8 の剥片が第 III 層中から検出され、順次グリッドを拡張し調査したところ前記の 3 グリッドから 17 点、周辺から 12 点の剥片を主体とした石器群が検出されるに及んだ。だが、周辺部から出土した石器群は前述の中心部から 4 m ~ 5 m 離れており、確実に本地点を構成する石器群の一部として位置づけられるか疑問の残るところであるが、石材構成や出土層位といった点から集中的に出土した 17 点の石



第 9 図 第 3 地点出土石器分布図



第10図 第3地点出土石器実測図

器群と共通するためここに含まれることにした。ただ分布等については省略した。なお、石器の器種別構成をみると、成品としてはナイフ形石器が1点存在するのみで、他は使用痕をもつ剥片1点、剥片13点、断片10点、礫3点、石核1点となる。

これらの石器群を石材別にみると、流紋岩10点、黒色安山岩5点、メノウ4点、硬質頁岩3点、碧玉2点、頁岩1点、チャート1点、礫は石英斑岩2点、デイサイト1点となる。ここでの主要石材は流紋岩・黒色安山岩であり、他の地点と大きく異なる石材構成といえる。

ナイフ形石器(1) ナイフ形石器としては小型品といえよう。断面三角形の縦長剥片を素材としており左側縁上半部に簡単な刃潰しを施し、ナイフに仕上げている。基部にも僅少の調整痕が認められる。石材はメノウである。

剥片（2～6・8・9）石器の素材となりうるような縦長剥片を主体に図示した。3は素材として十分な形状を有する分厚い剥片である。表面左側縁には僅かな刃こぼれ痕が数か所認められ、石器として使用されたものであろう。8・9は打面再生時に剥離された剥片となろう。側面には幾つかの剥離痕が残る。2点とも風化によるものか白色化している。石材は2・3が硬質頁岩、5・6は黒色安山岩、4は碧玉、8が頁岩、9は流紋岩となる。

石核（7）1点だけ残核が出土した。表面には縦方向の剥離、裏面には大きな横方向の剥離痕が残る。剥離痕を観察すると、表面では次第に小さくなり、裏面の下端部での剥離では剥片剥取に失敗しており、石核としての役目を終え放棄されたものとなろう。石材は流紋岩である。

礫（10）1点のみ図示した。出土層位は上部で縄文期の所産も考えられるが、本地点の石器群の一部としての可能性も残るため図示した。表面では風化が著しく、使用された痕跡を指摘できる部分は存在しないが形状から敲打器の可能性が高い。石材はデイサイトである。

#### 第4地点（第11・12図・図版23）

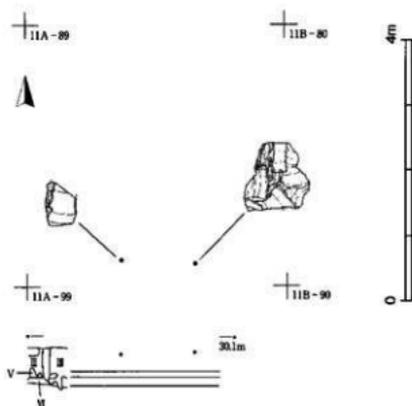
本地点から出土した石器群は3点のみと少なく、検出グリッドは11B-90区と11A-89区に限られる。確認調査時において、縄文期の包含層から石器片が検出され、1点のみではあるが旧石器時代に属する剥片が認められたため周辺域を拡張したものの、隣接する11A-89区の第Ⅲ層から2点の出土をみただけにとどまった。3点のうち図示したように1点は削器で、他の1点は大型剥片、図示を略したものは屑片に近い小剥片であった。

石材別にみると、通称、嶺岡頁岩<sup>①</sup>とされるもの2点、他の1点は流紋岩である。

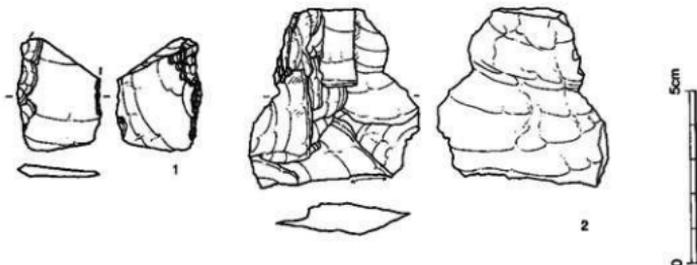
削器（1）上部は欠損しているものの、左側

縁には両面から丁寧な剥離を施し刃部を作出している。右側縁にも小さな調整が認められる。

剥片（2）打面部の残る大型剥片である。表面の剥離痕を観察すると、上下・横方向と数方向から剥片



第11図 第4地点出土石器分布図



第12図 第4地点出土石器実測図

剥離が認められる。また下端部での鋭いエッジを利用し、石器として利用していたらしく一部に刃こぼれ痕が観察できる。1・2ともに同種の石材であり、必ずしも良質とはいえない。色調は灰褐色を呈する。第5地点(第13～19図・図版23～26)

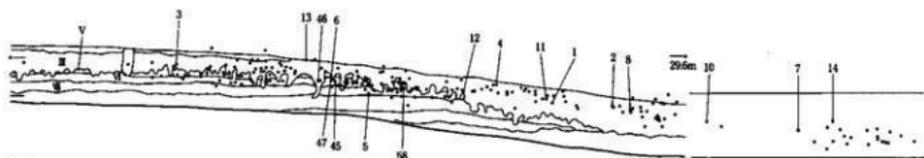
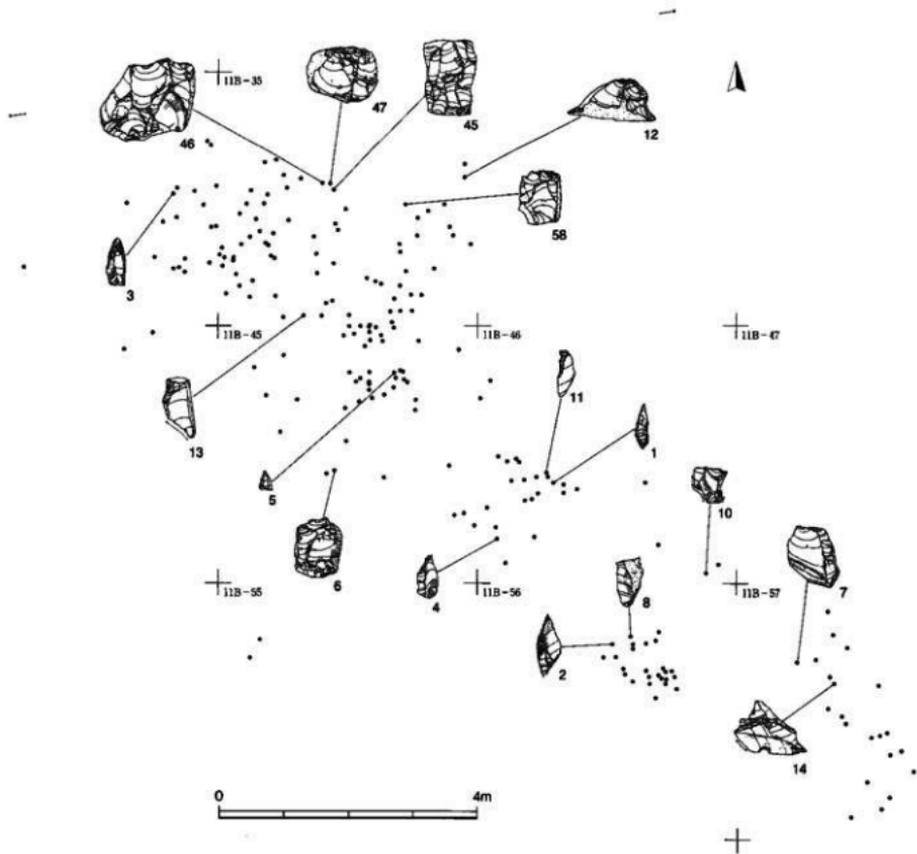
本地点から東部分の調査区は景観保全区域となっており、立木の保存に配慮した調査方法を採用したため立木の間を縫うような方法での確認調査となった。遺物は11B-46区で4点検出されたため、周辺の樹木を伐採し、大きく拡張区を設定して本調査に移行した。その結果、石器群は11B-34・35・36・44・45・46・54・55・56・57・66・67区にわたり広い範囲での散布が確認できた。特に石器群の集中する部分は11B-35区で、遺物はここを起点とし地形に沿って流れるように南東方向に向かい、その一部は11B-67区に及ぶ。その全長は約16mに達し、楕円を形成するような形状となる。次に本地点での器種構成をみると、ナイフ形石器5点、掻器3点、削器4点、彫器1点、石錐1点の他、定形石器とはいえないが石器として使用されたものも数点存在した。これらを総合的にみると、石器組成という点ではバランスのとれた器種構成となっている。また石核も4点、すべて11B-35区で出土しており、本区周辺で石器製作の作業がおこなわれていたことを想起させる。さらに剥片類についてみると、図示したように黒曜石では17～23、硬質頁岩では60・62・68～71のように石刃状の縦長剥片の存在が特徴となろう。

石材についてみると、黒曜石・硬質頁岩の二者が卓越し、次いで流紋岩、僅少ではあるが黒色安山岩・珪質頁岩・メノウの順で構成されていた。ただ黒曜石の残核は3点が検出されたものの、硬質頁岩については打面再生のための剥片は存在するが残核までは確認できなかった。以下、図示した石器について簡単に述べておく。

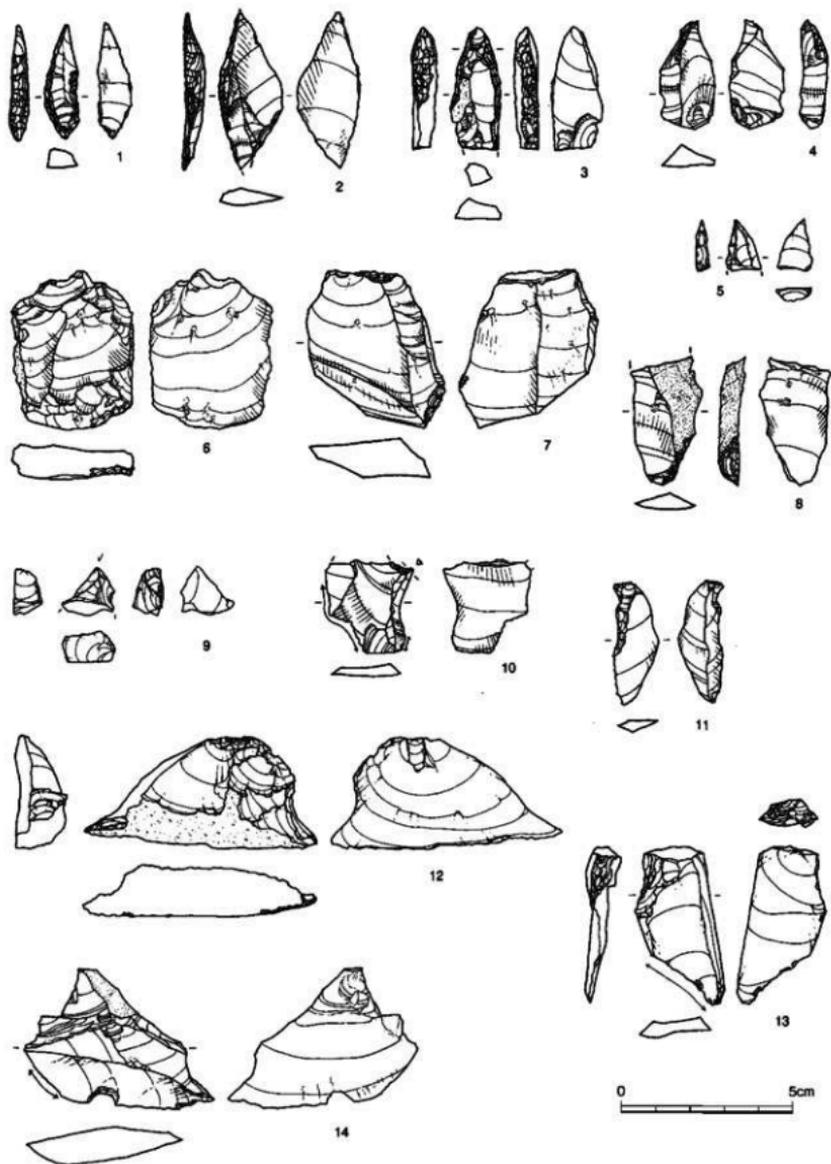
ナイフ形石器(1～5) 5点出土した。1はやや小型ながらほぼ完形品であり、背面加工は入念に施されている。先端部は図示できなかったが僅かな欠損が認められる。右側縁の基部周辺もきれいに調整剥離が施され、刃部では表裏両面にわたって顕著な使用痕が観察できる。2も両端部に欠損が認められる。背面加工も全面にわたり丁寧な調整が施されている。刃部では一部に刃こぼれも認められ頻繁な使用を物語る。3は上下が逆の可能性もある。分厚い素材の周囲に入念な調整を加えて成品としたものであるが、欠損部が大きいため尖頭器の可能性も否定できないが一応この種に含めておく。4は一応完形品とはいえ加工は粗雑である。背面では先端の一部と裏面基部に簡単な加工を施すだけで成品にしている。刃部での使用痕も僅かである。5は先端の一部が遺存するのみである。石材は1～4が黒曜石で、半透明で不純物の混入が皆無の良質のものである。1には黒色の縞状の帯が認められる。5は硬質頁岩で、表面が滑らかで光沢を帯びる。

掻器(6～8) 3点出土している。6は完形品で両側面に自然面を残すところから表皮に近い部分の剥片となろう。刃部は数回の剥離と剥片剥離時の丸味部分をそのまま利用し、軽微に仕上げている。7も完形で表面が主剥離面となっており、平坦な打面をそのまま残す。加工は打面の後縁部を細かい剥離により形状を整え、刃部は15mm程度の小範囲に調整剥離を施すのみで作出している。8は欠損部が大きい。表面には自然面を大きく残す。刃部は素材となる縦長剥片の打点部をきれいに整形して作出している。ただ形状からナイフ形石器の製作途中のものとも考えられる。石材は3点とも黒曜石で半透明という点ではナイフ形石器群と共通しているが、本掻器群では小石の混入が少なからず認められる。

削器(11～14) ここでは側面加工に限定することなく削器として一括した。11は左側縁上部を整形し成品としており、下部でも顕著な使用痕を残す。12は削器としての明確な加工痕は認められない。ただ表面



第13图 第5地点出土石器分布图



第14图 第5地点出土石器实测图(1)

下端の左右には微細な調整痕が付され、スクレイパーとして機能していたことには相違あるまい。13は形状的にはナイフ形石器を想起させる。下端部にも調整痕が認められ迷うところであるが、打点部の未加工という点から削器に加えた。14の形状は12に近似する。下端部中央に明確な挟りが付されている点を除くと使用部位でも12と近い。素材となった石材はすべて硬質頁岩で、12・13は石材そのものに光沢がある。彫器(9) 先端部のみが遺存するにすぎないが、明確な縫状剥離痕を残す。右側面では整形のための剥離が加えられており彫器と考えると間違いなであろう。石材は硬質頁岩である。

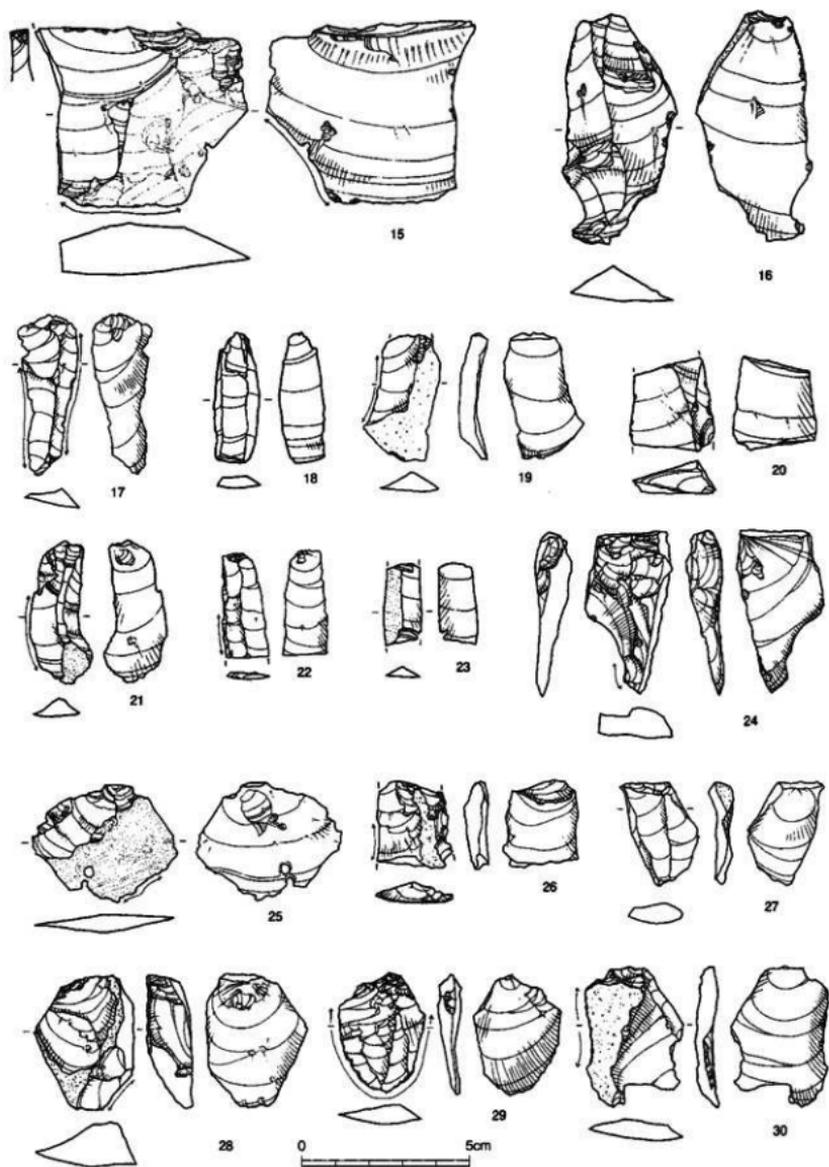
石錐(10) 完成品である。素材となった縦長の剥片を折断し、右隅の一部に調整剥離を加えて錐の先端部を作出しており、断面はほぼ三角形となる。また、左右側縁部での使用痕も著しい。石材は半透明の良質な黒曜石である。

剥片(15・44・48～57・59～94) 剥片類については使用石材により分類して図示した。実測については大型剥片・縦長剥片・使用痕の認められる剥片を中心とし、石器製作が可能な形状を保持するものを剥片、それ以下のものは屑片として分類した。ここではできる限り多くの剥片までの大きさの資料について図化するように努めた。

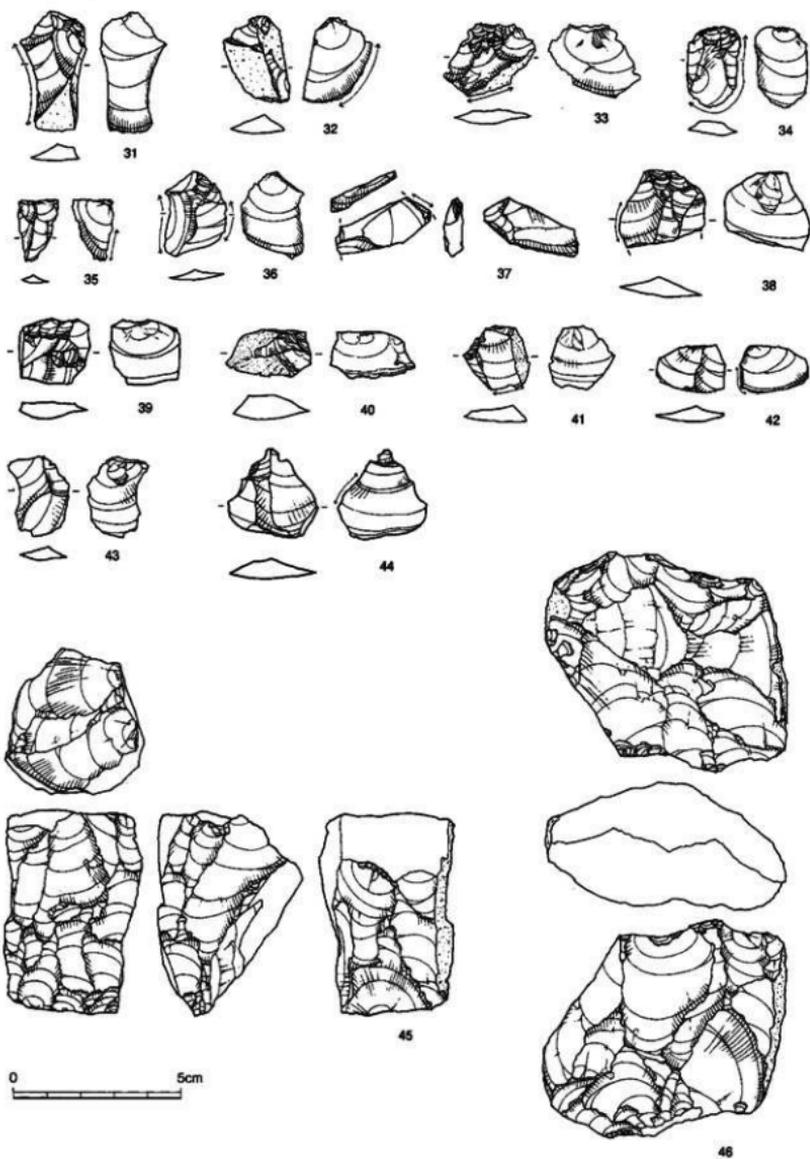
黒曜石(15～44) 15は全地点の剥片中、最大の形状・重量を計測するもので、表面では自然面に近い風化が認められる。打面は石器としての機能を持たせるため若干折断していることが主剥離面のリング・フィッシャーから観察できる。石器としては下端部を主に使用したらしく著しい刃こぼれ痕と擦痕が残る。いわば搔器としての用途が考えられる。さらに上部左右にも調整痕が付されており、この部分も使われていたらしい。いずれにせよ一部折断も含めて考えると、本資料の原石の大きさは直径10cm以上となることは間違いのない。石器の中には1mm～2mmの小石を数点含む。16も大きな原石から剥離された縦長剥片で、右上側面には自然面が認められる。また石器として使用されていたことは両側縁に残された微細な剥離痕が物語る。表面には2mmほどの小石が付着している。17～23まではいわゆる石刃あるいはそれに類似する剥片であり、使用痕や調整痕の認められるものが多い。それに伴うものか折断された剥片(15・19・20・22・23)もまた目立つ。25～31は概して形状の整った剥片を一括して図化したもので、石器の素材としても十分な大きさを有する。やはりここでも使用されたものと考えられる剥片が多い。24・29などはその好例である。32～44の剥片は小型でも使用された可能性を認めるもので、折断されているもの(37・38)もある。この大きさが剥片の限度といえよう。

流紋岩(48～57) 48～50・52・53・55・56の7点は、すべて流紋岩で58の残核から剥離されたものである。繻状の文様が内部に存在し、肉眼でも判別は容易であった。50・54・57はその接合図である。出土地点も11B-35区に限られており、成品は存在しなかった。ただ48の一部には調整剥離が認められ、爪形搔器と考えることもできる。

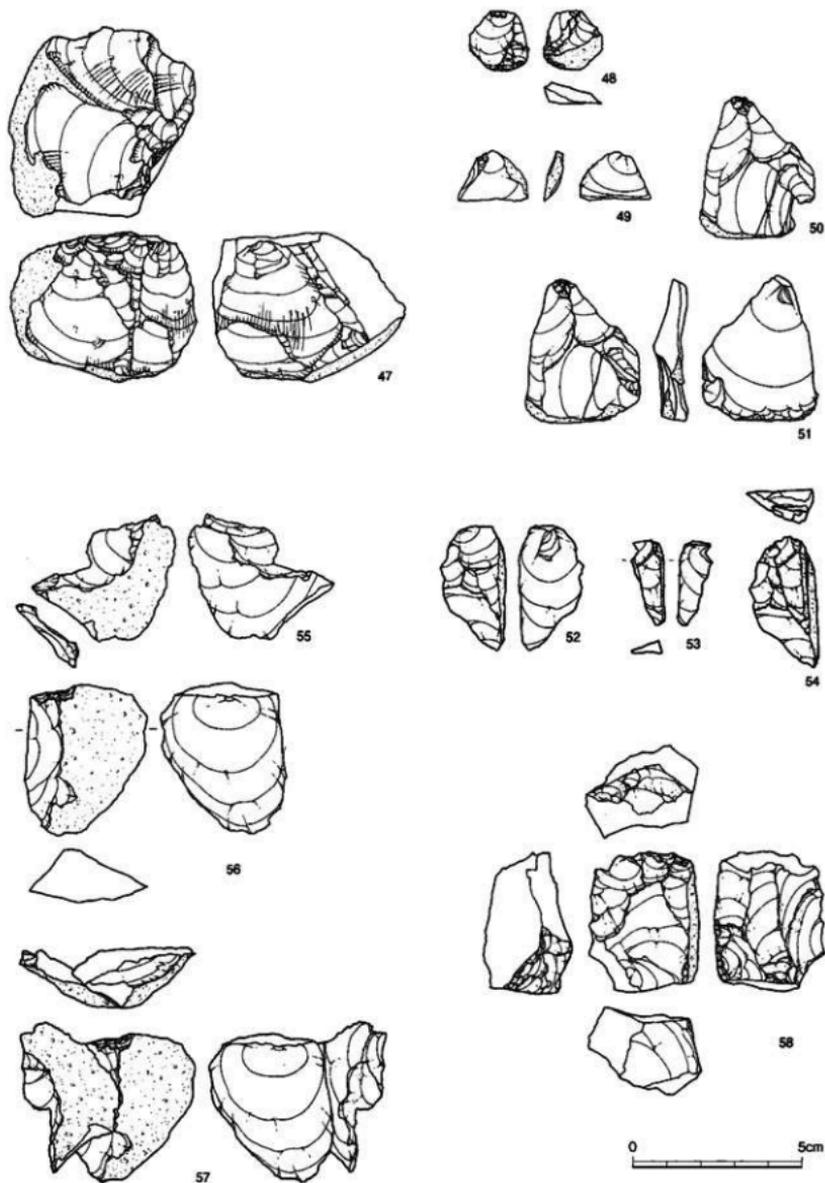
硬質頁岩(59～84) 接合資料が3点含まれるため、剥片数としては26点となる。これら剥片の形状を観察すると、石核となった原石は、黒曜石同様かなりの大型品と察せられる。石刃剥離のためであったことは容易に想像できる。60・62・70・71などはその好例といえよう。さらに79・85・86のような小型石刃の剥取もしていたようである。61は59と60の接合図で左上部に僅かに自然面を残す大型剥片である。形状からみて打面再生剥片であろう。明確な使用痕は認められない。だが、62・64～68・70～72などでは微細な調整痕や使用痕が観察できる。石質についてみると、表面に光沢を帯びるもの(62・64・68・69・71・73・75・76・82・83)と帯びないものがあり、比率的には偏りは認められない。



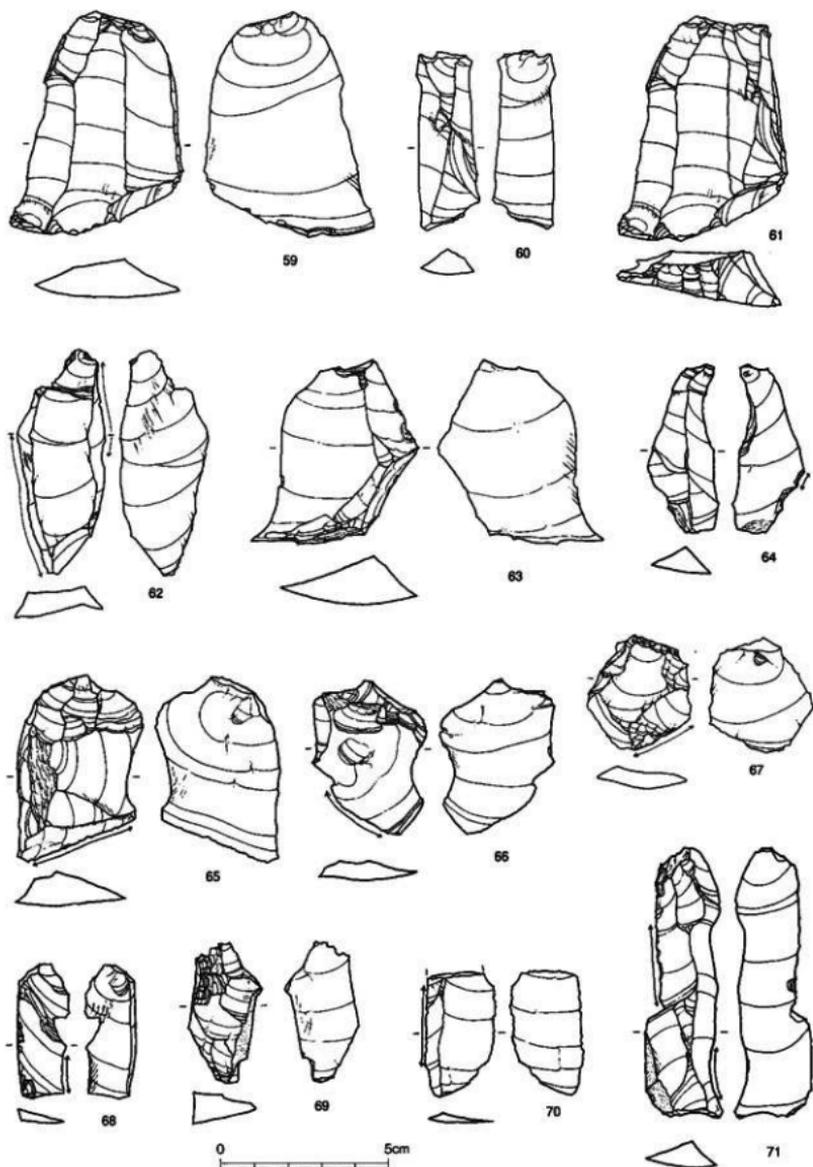
第15图 第5地点出土石器实测图(2)



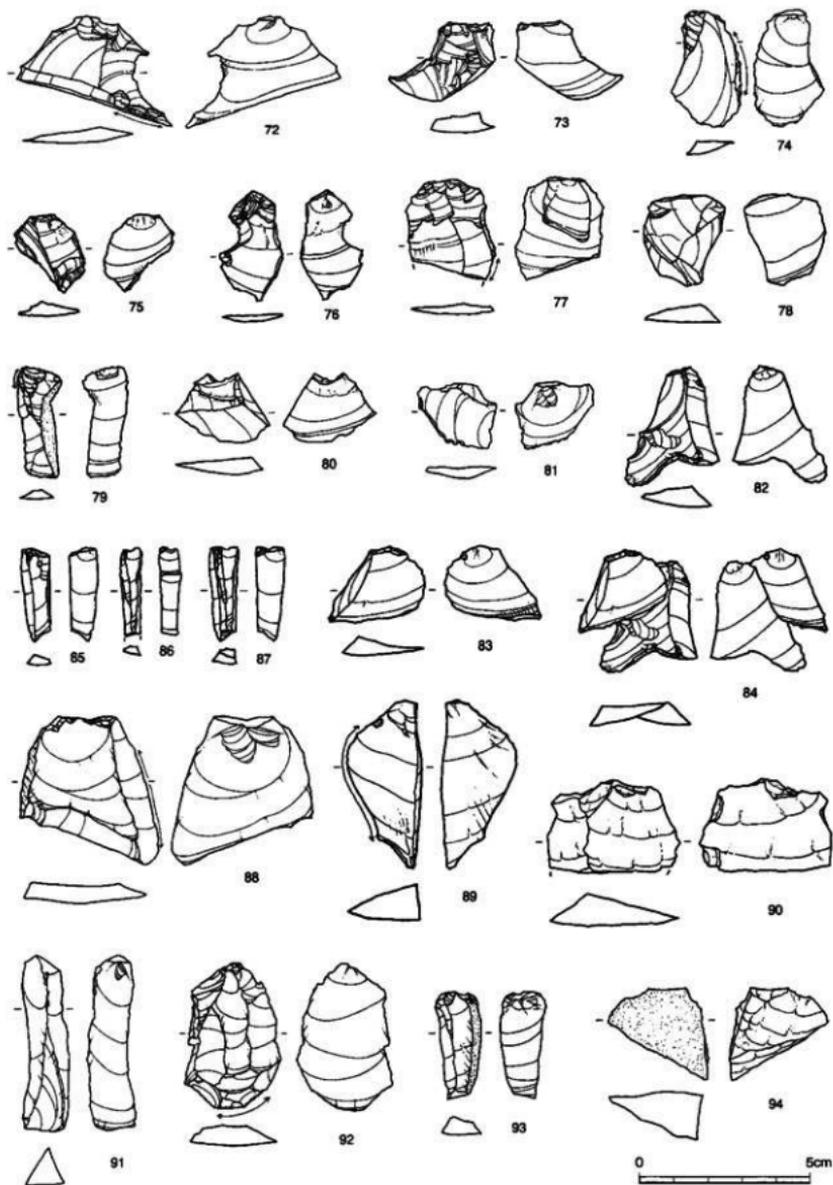
第16图 第5地点出土石器实测图(3)



第17图 第5地点出土石器实测图(4)



第18图 第5地点出土石器实测图(5)



第19图 第5地点出土石器实测图(6)

その他(88～94)ここでは各種石材を一括した。この中で流紋岩が3点(88・91・93)存在するが前述した流紋岩とは色調などが異なる。90・94は黒色安山岩で、本地点では少ない。89は珪質頁岩で右側面に使用痕が認められる。92はメノウ、下端部に使用痕が存在するところから搔器として使用されたものと考えられる。

石核(45～47・58)4点が検出された。45～47は黒曜石で、その大きさは3点とも子供の拳大ほどとなる。この大きさから推測すると、原石は3～4倍はあったものと考えられる。このように大きな原石の必要性は石刃剥離に欠かせない大きさともいえよう。45は上下方向から剥片剥離され、上部の剥離角は90度に近いが、下部での剥離角はより鋭角となる。石質は良好だが若干小石をふくみ、赤味を帯びた有機質層が縞状に入り込む。側面には平坦な自然面を残す。46の剥離角は、45以上に鋭角さを増し、打製石斧を連想させるような形状を呈する。打面の周囲には剥離を施しているが、一部に自然面が残る。その最長は約8.5cmを計る。石質についてみると、若干小石を含み微細な不純物のためか乳白色の層が著しい。47は自然面を多く残す。打点部では調整痕が認められる。剥離角は約90度、周囲の剥離面から打面変更の痕跡が認められる。石質は良好といえるが小石や乳白色の層を含む点、46と同一原石から分離された可能性も捨てきれない。58は剥片48～57で触れたとおり、これらの母岩である。側面の一部に自然面が残る。また自然面を多く残す接合剥片57の大きさから推測すると、この原石も拳大以上の大きさになろう。これら4点の共通する部分は、側面に自然面を残していることである。意図的なものかどうか注意しておきたい。

屑片 その他、図示しなかった剥片・屑片類は約130点が出土した。とりわけ屑片についてみると、11B-35・45区の二つのグリッドで69点も出土しており、全屑片の66%を占める。石材からみると、黒曜石・硬質頁岩・流紋岩・碧玉などで、特に黒曜石は54点を数える。これは明らかにこの地点で黒曜石の石器製作が行われていたことを示すこととなり、成品から推測するとナイフ形石器や搔器類の製作であったものと考えられる。また、流紋岩や碧玉のように剥片・屑片のみが検出され成品が存在しない場合は、製作器種の推測は困難となるが、定型石器の製作までには至らず剥片の段階で石器として使用したり、碧玉屑片のように屑片のみ5点の出土は成品の移動ということになろう。いずれにしろ本地点での石材は、第3表にみられる<sup>(4)</sup>ように黒曜石・硬質頁岩が主体となって構成されているところが特徴といえよう。

#### 第6地点(第5図)

本地点の石器群は、確認調査時に12B-50・70・80区において第Ⅲ層下部あたりからその一部が発見されだし、調査の区域を順次拡大していった。分布域はさらに広がり長径は30m弱にもおよび、結果的には12A・13A、12B・13Bの4か所の大グリッドにかかる大規模な石器集中地点となることが判明した。最も遺物が濃密に分布していた場所は12A-99区及び12B-90区で、この2グリッドで総数301点が検出されている。これは本地点出土総数の約80%にあたり、ここが当時の人々の石器製作活動の中心地となっていたことであろう。残された遺物には剥片・屑片等が多く、その点からも石器製作の場所であったことが裏付けられよう。

石材についてみると、特に集中的に出土したグリッドでは黒曜石が主体を占め、他の石材は僅少な割合でしかなかった。周辺域から出土している石材では、硬質頁岩・流紋岩・嶺岡頁岩等もみられるが、その比率は第5地点出土の石器群と比較すると明らかに少ない。ただ黒曜石の成品や剥片の形状では共通するものがあった。

第3表 第5地点出土の石器と石材

器種	石材内訳														合計								
	黒曜石	硬質頁岩	黒色安山岩	安山岩	メノウ	珪質頁岩	流紋岩	ホルンフェルス	碧玉	チャート	粘板岩	嶺岡頁岩	頁岩	アブライト		石英斑岩	閃緑岩	片麻岩	花崗岩	砂岩	粗粒珪レイ岩	アイサイト	
尖頭器																							
ナイフ形石器	4	1																					5
台形石器																							
掻器	3																						3
削器		4																					4
形器		1																					1
石錐	1																						1
楔形石器																							
剥片	49	29	3		2	1	14	3		1													102
屑片	80	13	1		1	1	4		5														105
石核	3							1															4
合計	140	48	4		3	2	19	3	5	1													225

さらに整理の過程で、各グリッドの石器群や使用石材、出土層位などを検討していくと、12B-60・61区あたりでは石器分布の空白地帯が存在し、12B-40・50・51区などで出土している石器群とは出土層位・使用石材での相違点が明らかになってきた。このため以下の記述については、これらの石器群を二分して述べることにしたい。

#### 第6-1地点(第20・21図・図版29)

ここでは12B-50区を中心に半径約10mの範囲に薄く散布するような状態で検出された。合計22点の石器群で構成されており、出土層位は第Ⅲ層となる。石材には黒曜石は含まれず、硬質頁岩・流紋岩・嶺岡頁岩などで構成されていた。この点、次に述べる第6-2地点の石器群と大きく異なる点である。

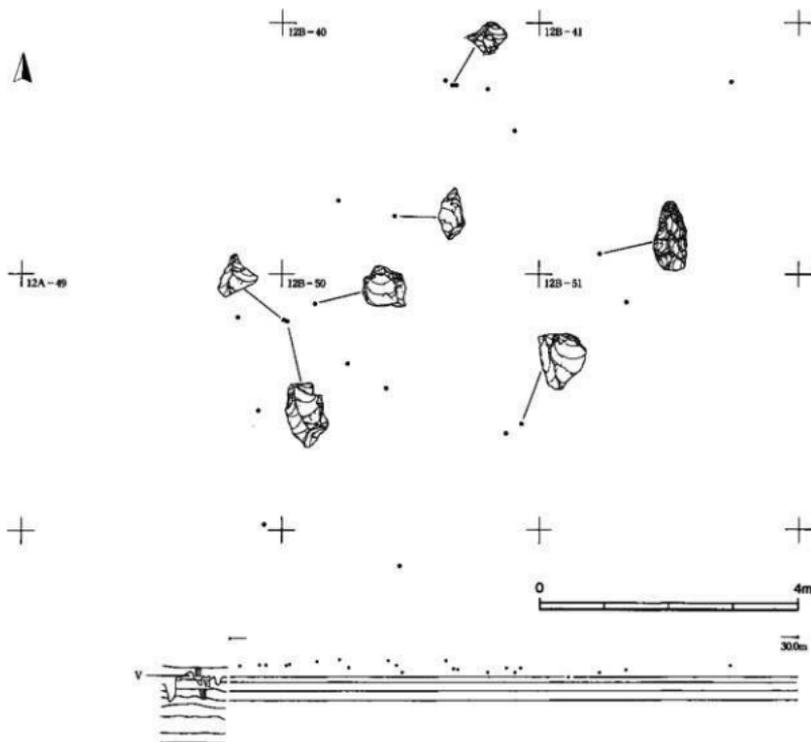
尖頭器(1) 主剥離面の一部を除き、表裏面ともに加工されており、厚みのある頑丈な作りである。素材には横長剥片を用いたらしく、裏面基部にその名残をとどめる。先端部は使用の結果か、僅かな欠損を認めることができる。石材は硬質頁岩である。

ナイフ形石器(2) 小型の横長剥片を素材にし、背面を数回の粗い剥離により整形しており、概して粗雑な作りとなっている。しかも石材には加工しにくい嶺岡頁岩を採用しており、一層簡単な作りに映る。

剥片(3~13) 上記の2点以外はすべて剥片である。これらの中には使用痕・微調整痕の認められるもの(3・6~8・13)もあり、何らかの形で石器として使用していたものであろう。6・8などは、その形状から削器のような用い方をしていたものと考えられる。石材には硬質頁岩(3~5, 8・9)、黒色安山岩(10~12)、流紋岩(6)、嶺岡頁岩(7)、碧玉(13)と多形である。

#### 第6-2地点(第22~28図・図版26~29)

本地点は、前にも触れたとおり12A-99区、12B-90区が中心の分布状況を示しており、他のグリッドでは希薄な状態となっている。また、使用石材や出土層位から推察しても相違点を見出すことができないため、本地点のエリアは広いものであったとすることができる。ここでは黒曜石の頻度が、他地点と比較し圧倒的に高く、一つの特徴といえよう。さらに石器の器種も豊富で、ナイフ形石器の出土量は他を凌ぐ。他に礫群が12B-70・71区から検出されている。合計20点が出土し、若干接合した資料もある。その大き

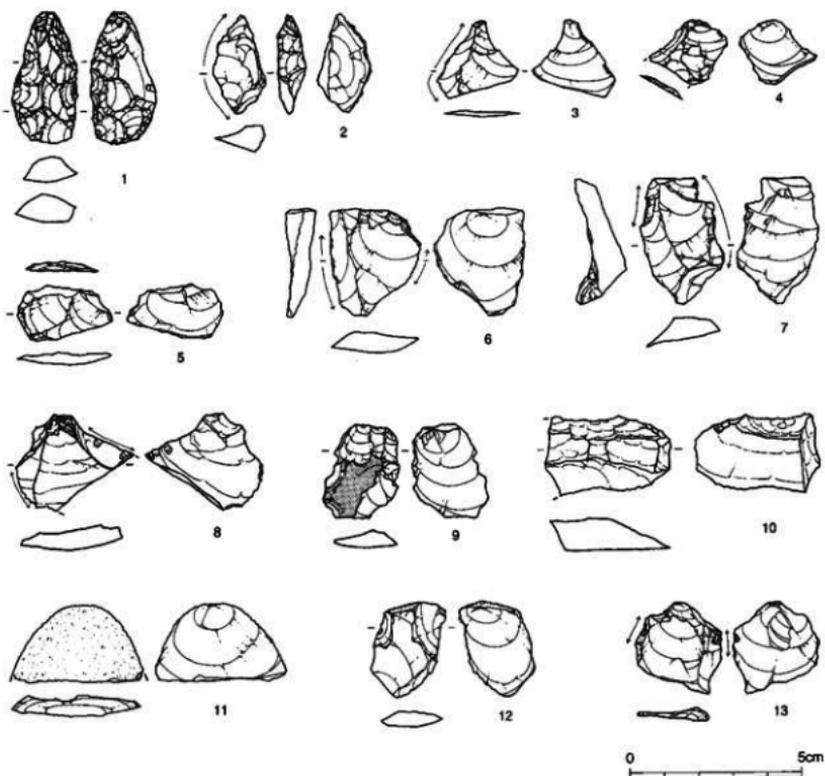


第20図 第6-1地点出土石器分布図

さは子供の拳程度から大きいものでは400gを越える重さを計測した。これら礫群を含む石器群は、その出土層位からみると他の石器群より若干上層となり、時期的には二分できるかもしれない。

尖頭器（1） 縦長剥片を素材として用いた片面加工の尖頭器である。表面には節理面が入り、形状はよくない。周囲の加工は細かく丁寧に施されているが、主剥離面での加工は基部に僅かにみられるだけとなる。石材は黒曜石で半透明の良質なものである。

ナイフ形石器（2～14） 13点出土した。大半は遺物の集中する2グリッドから出土しており、しかも黒曜石製のものが多い。2は打点部まできれいに削除しており、その周囲及び左先端部に刃潰し加工が加えられる。表面の一部には自然面も残すが、刃部には顕著な使用痕を認めることができる。先端部を僅かに欠損する。3は完形品で背面と基部周辺を丁寧に加工し成品に仕上げている。4も同様な仕上げであるが打点は先端方向にある。5は小型品で、基部周辺を主に加工痕し若干裏面にも及ぶ。先端部は数回の剥離で仕上げている。6は横長の剥片を素材とし、基部は片側方向からのみ加工を施す。先端部を少々欠損する。7の形状は細長く、柳葉形ともいえるほどスマートな作りであり、先端部は使用頻度が高かったのか



第21図 第6-1地点出土石器実測図

磨耗している。背面は全面にわりきれいに剥離され、刃部にも及ぶ。8は打点部も残し、微細な加工が先端部だけに認められるもので定型石器とはいいがたいが、ナイフの中を含めた。9も小型品で基部を僅かに欠損する。背面加工は全面に施され、刃部でも微細な調整痕が認められる。10は左側縁に若干整形のための剥離を施し、成品に仕上げている。打点部を残すなどいかにも簡単な作りである。11は下半部だけの遺存であり、背面には自然面を残す。刃部には使用痕が認められる。12は先端・下端部ともに欠損するが、背面加工は小さな剥離で丁寧に施されている。刃部では刃こぼれ痕が著しい。13は表皮に近い部分の剥片を用いたらしく、風化による白色化が認められる。形状は小さな木葉形を呈し、先端が僅かに欠損している。14は約3m離れた隣のグリッド(13B-00区)から出土した剥片と接合したもので、自然面を大きく残した製作途中のナイフか、あるいは主剥離面先端の微細剥離からこの形状で石器として使用していたとも考えられる。ここでは背面加工が施されていることからナイフの一種として取り扱った。石材についてみると、12がメノウ、13は硬質頁岩。他はすべて黒曜石となり、その質は半透明で良質といえる。た

だ11だけは中に縞状の筋が認められる。

台形石器 (15～17) 15は刃部周辺に微細な調整を加えて成品に仕上げている。右側面は節理面をそのまま残す。石材はチャートのためか器面では凹凸が著しい。16は大型の剥片を切断し、左側縁を微細な刃潰して整形し成品としている。基部を若干欠損するが、刃部には刃こぼれ痕が顕著で、表面には自然面が残る。石材には半透明の黒曜石を用いている。17も同質の黒曜石で、基部の調整は右側面だけで打点部までには至らない。粗雑な作りとなっている。先端の一部を欠損する。

楔形石器 (18) 基部付近の断面は三角形に近く、刃部・側縁ともに粗雑な剥離で調整するだけであり、形状から楔形石器とした。石材は黒曜石である。

搔器 (19・23) 明確な搔器といえる石器は19だけである。小型部の部類に入ろうが、形状の整ったいわゆるラウンドスクレイパーで、周囲は小さな剥離で丁寧に加工されている。石材は硬質頁岩であるが、色調は淡い灰緑色を呈する。23は大半が欠損しており形状は把握できないが、用途としてはスクレイパーを想定できるため搔器の類に入れた。石材は黒曜石である。

削器 (20～22・24～26) 削器としたものは6点となるが、総じて乱雑な作りが目立つ。20は縦長剥片を素材としたもので、周辺を小さな剥離で調整している。用途的には削器と考えられるためここに含めた。石材は風化した硬質頁岩でやや白く変色している。21は下端部の両面を剥離し刃部としている。平坦な打面での調整は認められない。22も削器とすることには躊躇するような石器であるが、一応周辺の整形は施されている。下端の一部が欠損する。24は分厚い剥片を乱雑に整形しただけのもので、下部の剥離は調査時に付いたものである。25は厚めの縦長剥片を利用し、主剥離面の一部を整形し石器としている。表面には自然面を残す。これらの石材は、いずれも黒曜石で半透明の良質品で21・24には若干小石を含む。26も粗雑な作りで、左側縁を大きめの剥離で整形し石器に仕上げている。下端部にも小さな剥離が認められるところから搔器のような用途も併せもつものであろう。石材は嶺岡頁岩となる

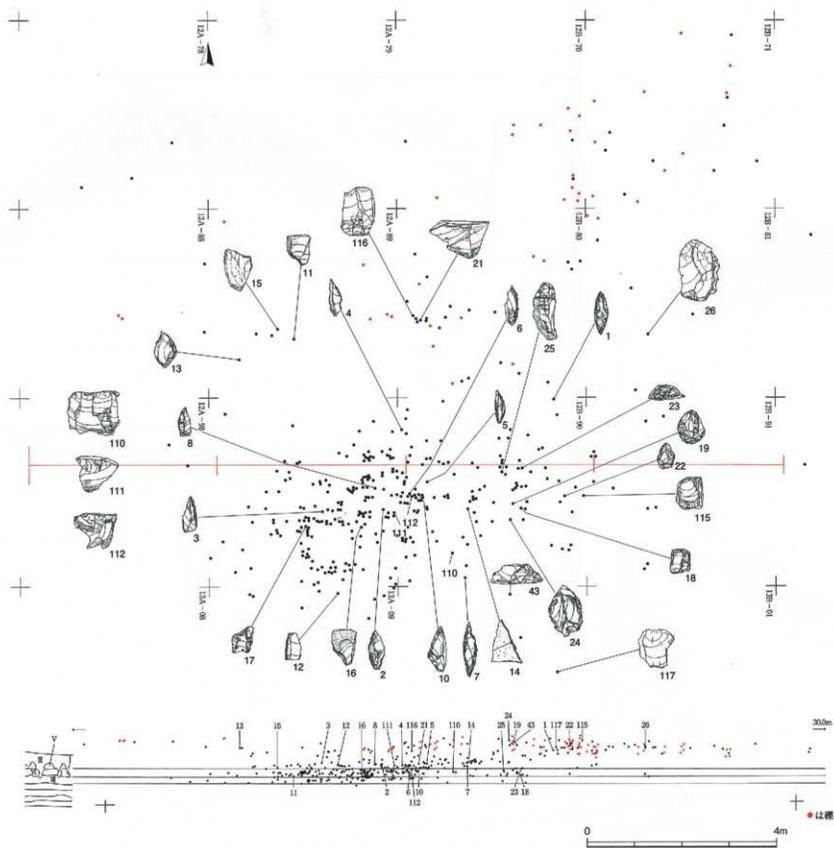
剥片 (27～109・113・114) ここでの剥片類は量的に多いので大型・縦長・使用痕の認められる剥片などを主として図示したが、説明については石材ごと加えることにした。

硬質頁岩 (27・28・31・32・36・37・39) 27は素材として十分な縦長剥片で、一部に使用の痕跡を残す。表面には自然面を残しており、やや光沢を帯びる。28も少々使用痕が認められる。上部は切断により失われており、おそらく石器として加工されたものと推測できる。31・32は縦長の剥片だが使用された痕跡はない。素材としても十分とはいえない。36は残核の一部を利用したものであろう。下端部の鋭利な部分を使用している。表面右上の剥離は調査時のものである。37は上部がきれいに調整され、下部には刃こぼれ痕が顕著に認められる。削器としての用途を果たしていたものであろう。39の左側面にはきれいな整形が施されており、製作途上であったことを窺わせる剥片である。

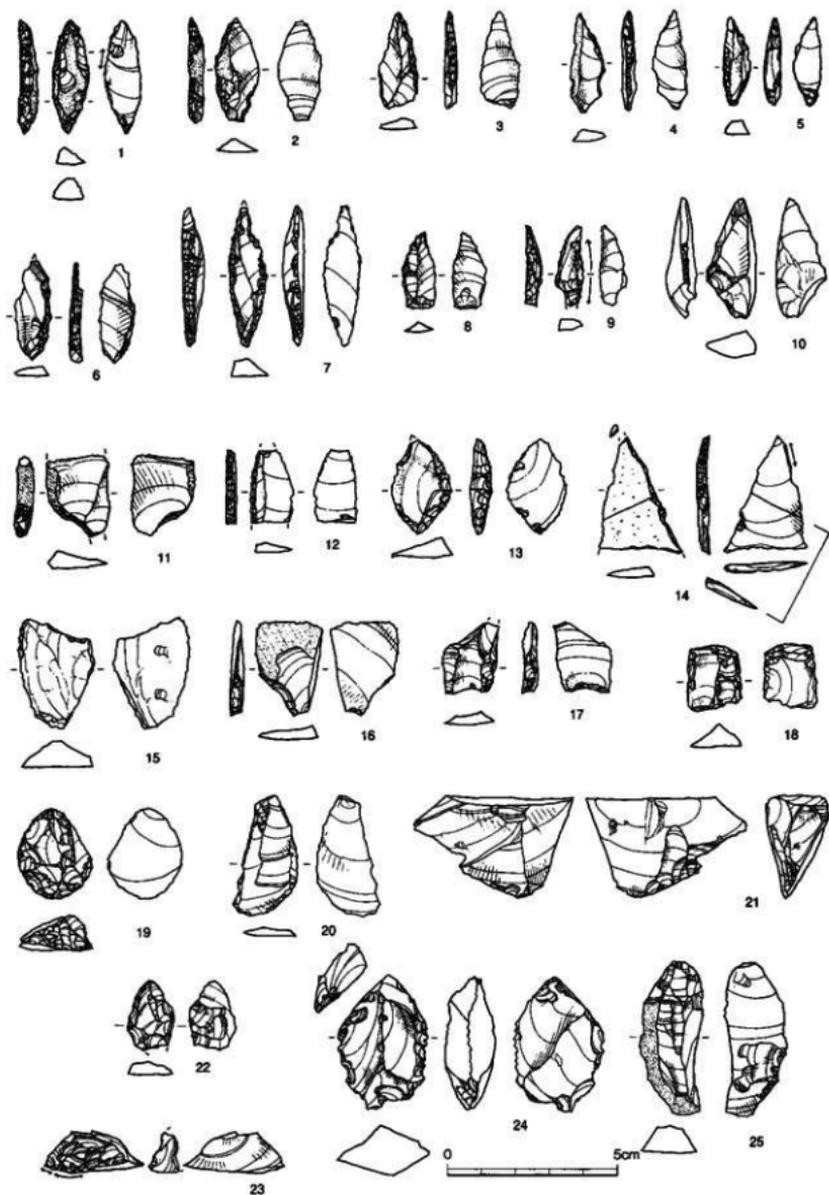
流紋岩 (29・40～42) 29は黒褐色を呈し、白い斑文がみられる。右下端部の一部を使用している。40・42は暗緑灰色で同一母岩から剥離されたものであろう。41の色調は29に近い。いずれも剥片としては小型品である。

嶺岡頁岩 (30・35・38) 石質的には劣る石材と考えられるが、3点とも一部に使用痕らしき痕跡を残す。35は分厚い剥片を切断したものであろうが、その後、左側縁に小さな剥離痕を残す。

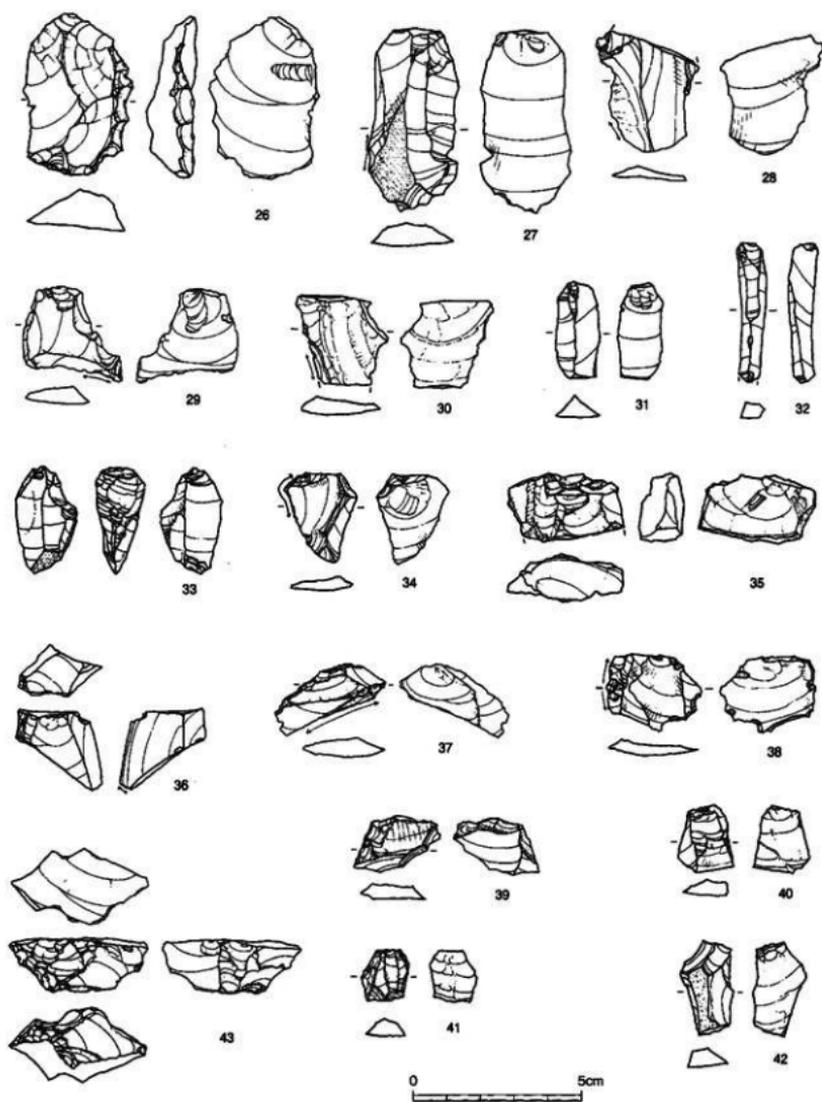
碧玉 (33・34) 2点ともほぼ同じ色合いを呈し、流紋岩の40・42よりも緑色味を帯び、緑灰色に近い。おそらく同一母岩から剥離されたものであろう。33の下端には小さな剥離痕が付され、上部には打撃した



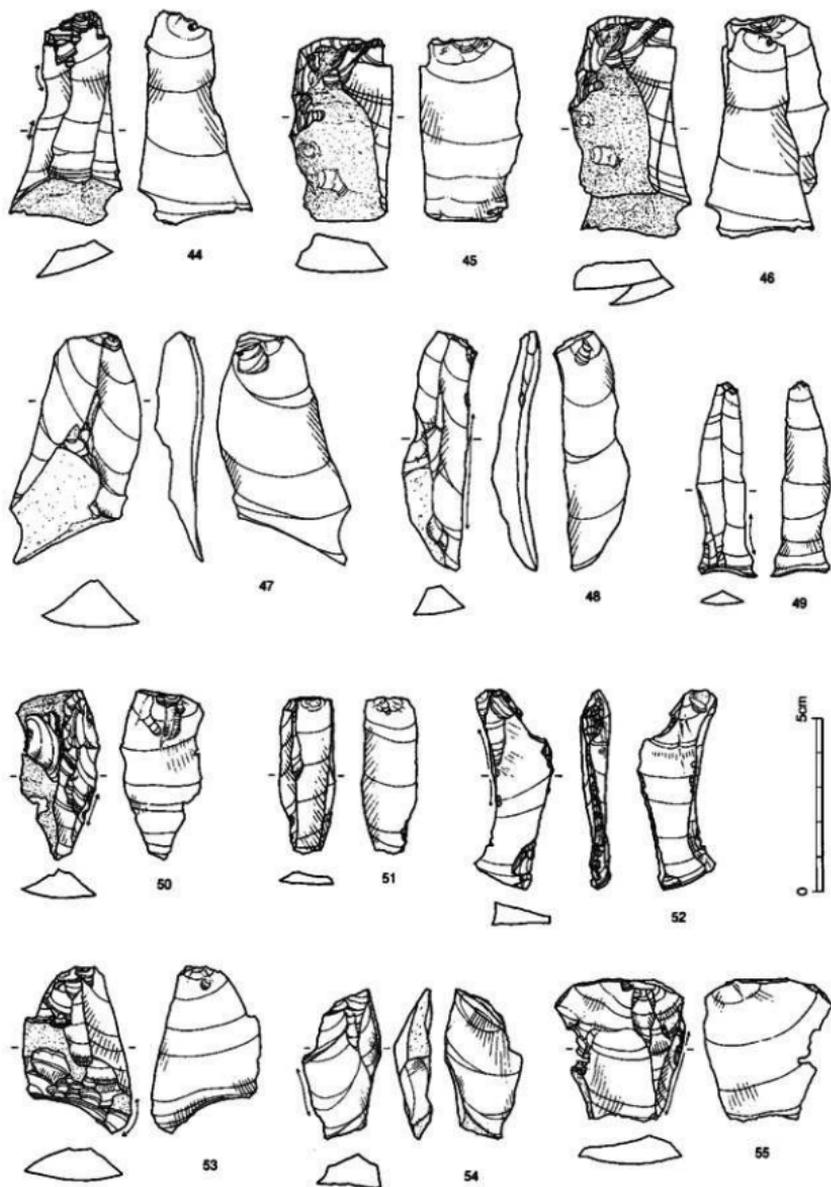
第22图 第6-2地点出土石器分布图



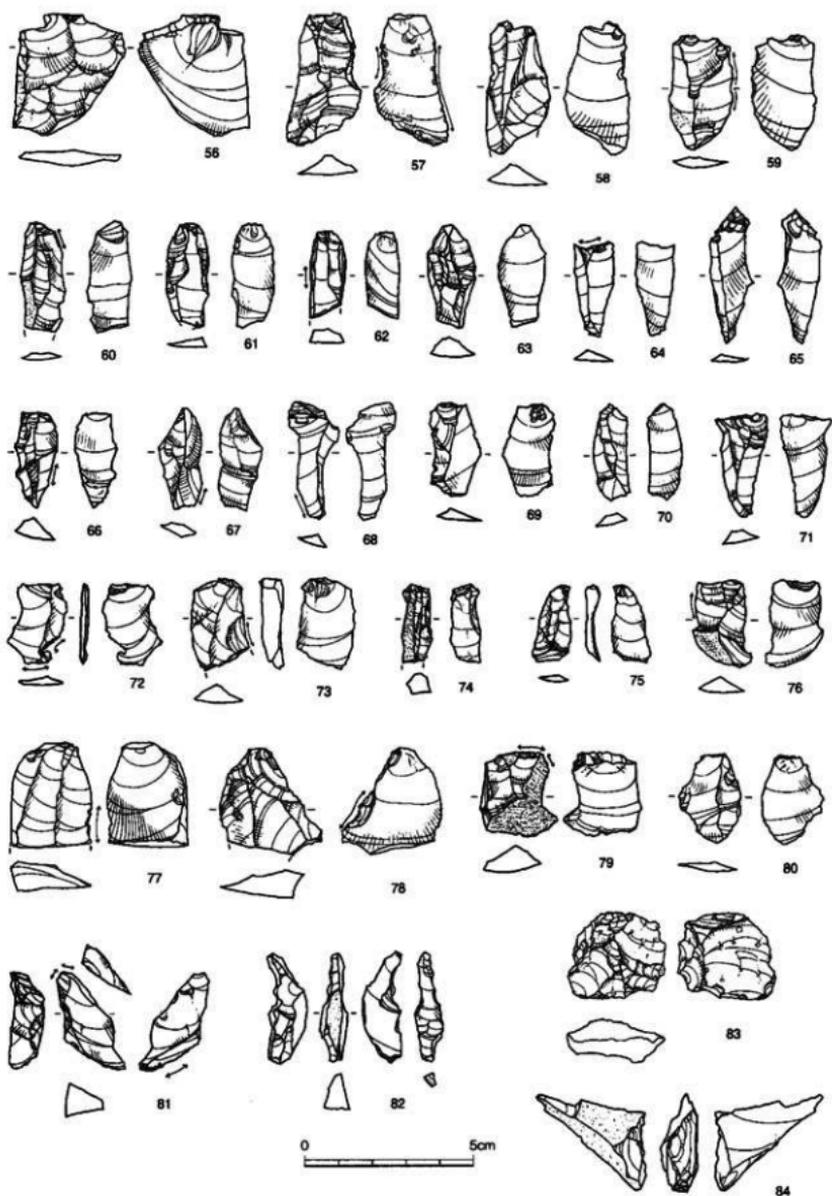
第23图 第6-2地点出土石器实测图(1)



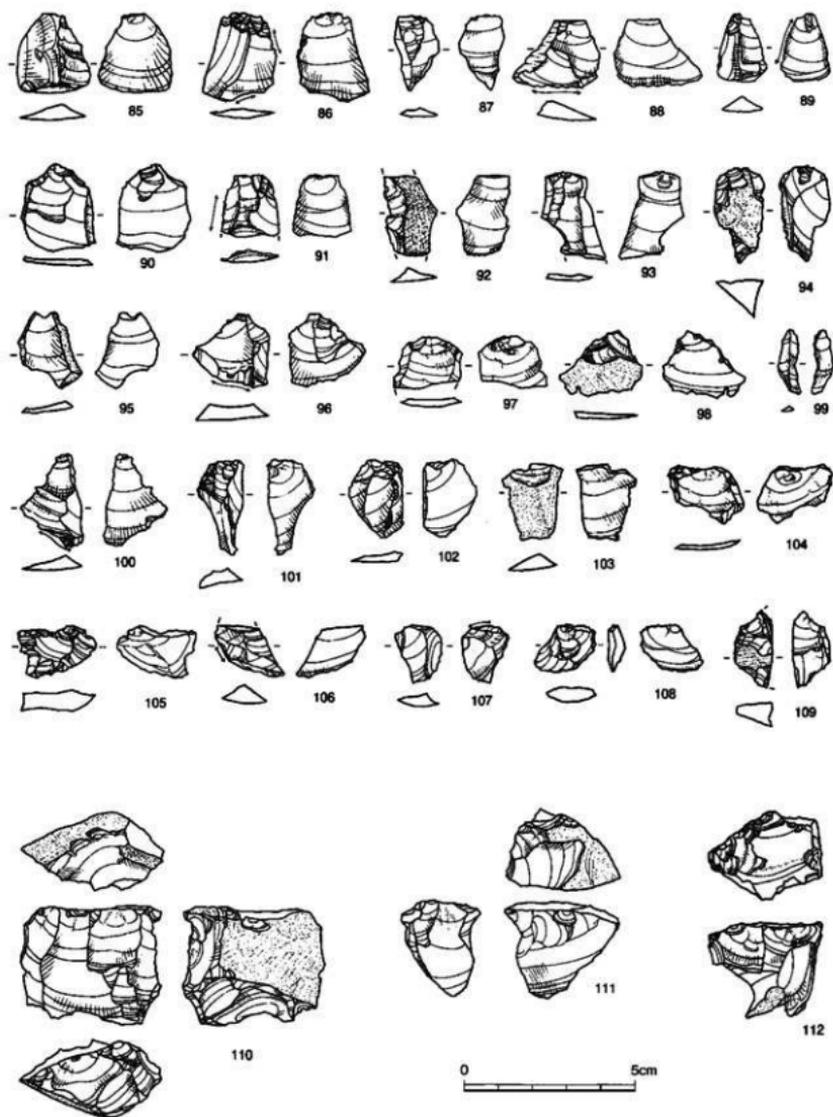
第24图 第6-2地点出土石器实测图(2)



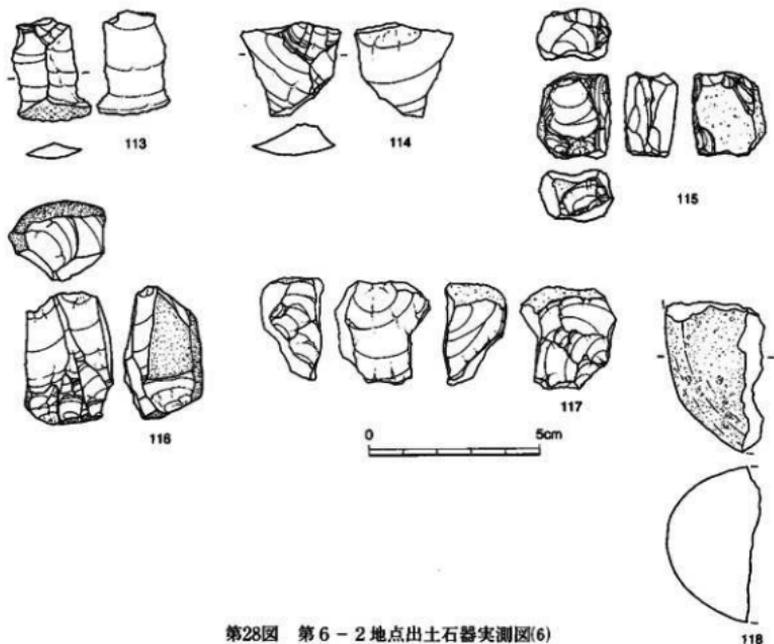
第25图 第6-2地点出土石器实测图(3)



第26图 第6-2地点出土石器实测图(4)



第27图 第6-2地点出土石器实测图(5)



第28図 第6-2地点出土石器実測図(6)

ような痕跡の剥離が認められ、楔形石器としてもよい。

黒曜石 (44～109) ここでは、大型剥片を中心に石器の素材として可能と考えられる剥片64点を図示した。44～49までの5点は、縦長の石刃状の剥片で使用痕の認められるもの(44・48・49)もあり、石器としても用いていたものであろう。この形状から推察すると石核はかなりの大きさになるものと思われる。第5地点での石核と遜色のない大きさが想定できる。50～59は前者よりやや小型のもので、使用痕・調整痕等が付されているものも多い。51の剥離は調査時によるものである。60～76では小型の石刃状剥片を一括した。ここでも微調整の加えられる剥片が多い。81は打面調整による剥片か槌状剥離片の一部か即断できない。82は槌状剥離された剥片であろう。剥取後、先端部には再度加撃されており、彫器としての機能を有していたとも考えられる。83の石質は、ここでは異質で黒色味が強く小石を多く含有する。周辺は大きな剥離で整形しており、楔的な石器として使用された可能性が強い。85～109は総じて小型剥片であるが使用痕が付されている剥片も少なくない。99は細石刃と見紛うような形状を呈しており、微調整も顕著に施されている。106・107も屑片の部類にいれてもよいものであるが、一部に微調整が認められる。109は製作途上の剥片か切断されている。

ホルンフェルス (113) 縦長剥片であるが、表面が風化のため使用の痕跡は視認できない。

黒色安山岩 (114) ホルンフェルスとともにここでは僅少な石材である。特に加工は施されていない。

礫 (118) 礫群中の1点で、磨耗痕は認められないが磨石とも考えられるため図示した。石材は石英斑岩

となる。

石核 (43・110～112・115～117) 残核といえるものは7点出土しており、ここでも黒曜石が卓越する。ここで興味深い点は115～117の3点で、肉眼では黒色安山岩のような色合いを呈していたが、分析の結果うち2点は黒曜石であることが判明した。しかも表面は風化面のみで剥離の痕跡は認められず、このような小礫でも搬入の対象品となり得たのか疑問の持たれるところであった。

黒曜石 (110～112・115・117) 5点検出されており、110～112は多量に出土している剥片類と同一の石質を有する。110では打面での調整はなされていないが、112は周囲に小さな剥離で打面調整が施される。ここでの共通点としては側面の一部に自然面を残すことである。115・117での剥片剥離は認められない。硬質頁岩 (43) 平坦な打面を周囲からくまなく剥片剥取しており、ごく僅かであるが下端に自然面を認めることができる。下部からの整形剥離も施されているところから、石器として使用されていたとも考えられる。

黒色安山岩 (116) 本資料も側面に自然面を残す。剥片は上下方向からみられ、剥離角は図示したように鋭角を示す。何度か打面調整はなされたものと思われるが、最後の平坦な打面からみるとまだ剥片剥取は可能な状態とも思われる。

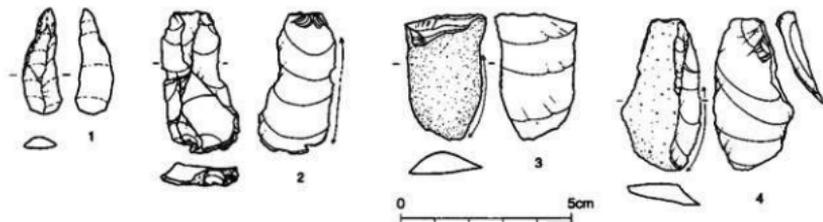
屑片 図示できなかった剥片・屑片についても若干触れておきたい。まず屑片からみると、その主体は黒曜石となることはいうまでもない (第4表参照)。だが他の石材も量的には少ないが、石材としては豊富であることが理解できる。硬質頁岩・流紋岩・ホルンフェルス・楡岡頁岩といった石材がそれにあたる。これらの石材の中で成品が確認されているのは硬質頁岩のみで、他は見あたらない。一方、屑片では90%以上が黒曜石で他の石材を圧倒しており、成品もそれを裏付けるものであった。つまり、本地点は黒曜石を用いた石器製作が行われていたことを如実に物語る痕跡を残したものとえよう。

#### 第7地点 (第29図・図版29)

本地点から出土した石器群は4点と少なく、図示したものですべてである。10B-96区と11B-05区か

第4表 第6-2地点出土の石器と石材

石材内訳 器種	黒曜石	硬質頁岩	黒色安山岩	安山岩	メノウ	珪質頁岩	流紋岩	ホルンフェルス	碧玉	チャート	粘板岩	楡岡頁岩	頁岩	アブライト	石英岩	閃緑岩	片麻岩	花崗岩	砂岩	粗粒流レイ岩	アイサイト	合計
尖頭器	1																					1
ナイフ形石器	11	1			1																	13
台形石器	2									1												3
擡器	1	1																				2
削器	3																					3
彫器																						
石錐																						
楔形石器	1																					1
剥片	77	7	1	1	1	1	4	4	2	1			5	1					1	1		107
屑片	205	11	2								1		1									220
石核	5	1	1																			7
礫片					1		6			4			1	1	8	1	1		8	2		33
合計	306	21	4	1	3	1	10	4	2	6	1	5	3	1	8	1	1	1	9	2		390



第29図 第7地点出土石器実測図

ら各2点づつの出土であるが、1は第Ⅲ層中、他は第Ⅱ層下部～Ⅲ層上部で出土したため一括で石器を取り上げた。そのため分布図等は省略せざる得ないが、その後、周辺域を拡張し調査したが石器の検出は皆無であった。出土層位あるいは石材構成から第3地点の石器群と时期的に近いものと思われた。

石材についてみると流紋岩が2点(2・3)、デイサイトが1点(1)、硬質頁岩1点(4)となる。ナイフ形石器(1) 小型品で形状も第3地点出土品に近い。刃渡し加工も左上半部のみと簡単な作りで成品としている。石材として使用されているデイサイトの特徴として本資料も著しい風化が認められる。掻器(2) 縦長の形状の整った剥片を素材にしているが、刃部は数回の剥離によって作出している。また、側縁でも微調整が施されているところから削器としての機能が主となっていたものと思われる。剥片(3・4) ともに石器の素材として十分な形状を有しているが取り立てて加工された痕跡はない。だが、使用されていたことを物語るかのように側縁に刃こぼれ状の痕跡が認められる。2点とも風化によるものか灰白色を呈する。

#### 第8地点(第30・31図・図版29)

本地点の石器群は、確認調査時に2C-72区においてその一部が第Ⅲ層上部から検出されたことで確認された。遺物はグリッドコーナーよりに集中的に出土し、広範には分布していないことが認識できたため隣接するグリッドのみを拡張し調査をすすめた。本地点から出土する遺物は、その大半が黒曜石の屑片であったため黒曜石を用いた石器製作の跡であることは容易に推察された。出土点数は2C-62区で4点、同63区で11点、同72区で35点、同73区で87点の合計137点の出土となっている。図示した5点を除き、他はすべて屑片の部類に入るもので、大きさはほとんどが1cm未満の小破片である。

石材についてみると、136点が黒曜石で、1点のみメノウが存在した。図示したものはすべて黒曜石である点、他地点の様相と大きく異なる。

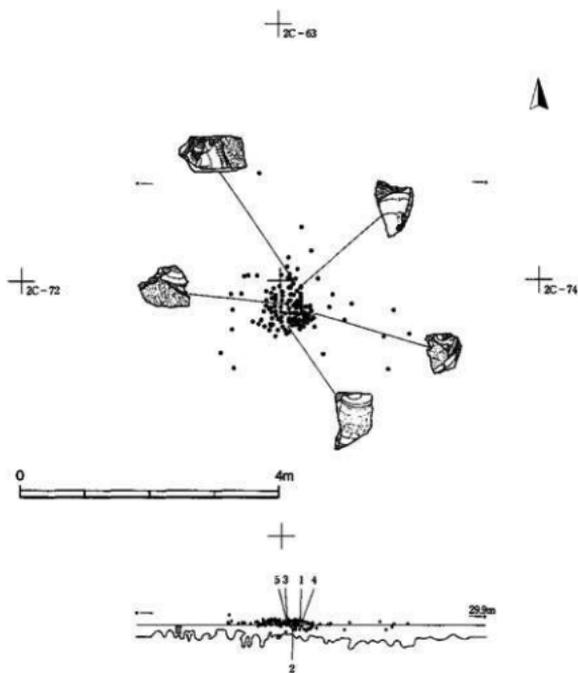
剥片(1～4) 剥片と呼べるものについてはすべて図示した。1の表面上部と側縁部には明らかに調整痕が認められ、形を変えてみると石織の未成品と考えられなくもない。僅かに自然面を残す。他の3点も一部には自然面や節理面を残す。このことからこれらの剥片類は5の石核から剥離された可能性が高い。石核(5) 側面に自然面を残し、剥離方向も一定してはいなく、平坦面を利用して順次剥離を繰り返したものであろう。打面調整は施されていない。いずれにせよこれらの石器群は、他の地点と比較すると分布のありかたや単一に近い石材構成、90%以上が屑片で構成されるなどの相違点が指摘できる。ここでは旧石器時代の項に含めて記載したが「时期的に縄文期に下る可能性もあることを付記しておきたい。

単独出土の石器 (第32図・図版29)

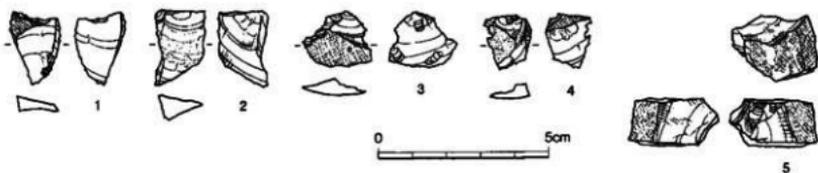
本遺跡では前述した石器群の他に同時期と認定できる数点の石器が出土している。いわゆる単独出土の石器である。確実と思われる6点を図示した。

尖頭器 (1) 基部が若干欠損する。縦長剥片の周辺部と基部の一部だけを剥離し成品としている片面加工の小型尖頭器となる。石材は黒曜石で021号跡の覆土中から出土している。

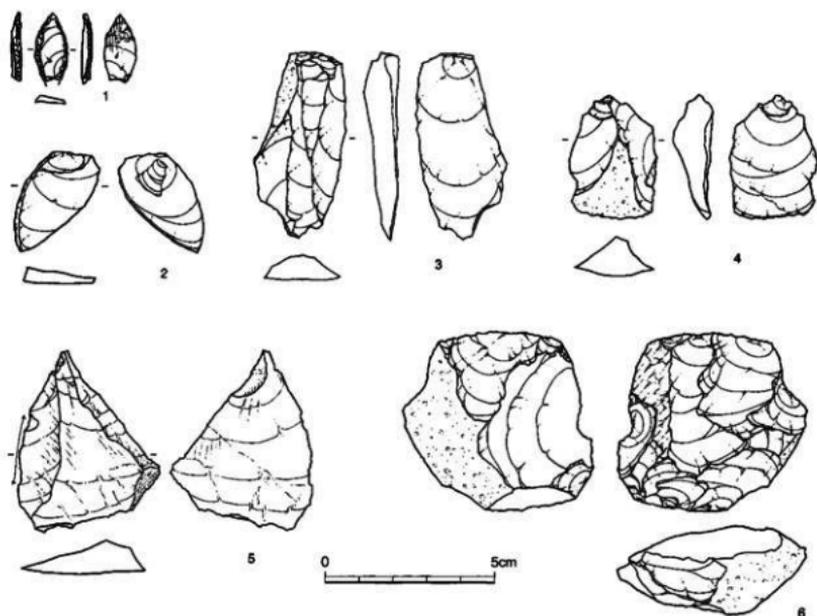
剥片 (2~5) いずれも石器の素材として十分な形状を有しており、3などは石刃と呼称してもよいであろう。5は石器として使用された痕跡を残す。2~4は黒色安山岩、5は嶺岡頁岩。出土地点は2が2B-89区、3が6F-68区、4が304号跡、5が12A-46区からそれぞれ出土した



第30図 第8地点出土石器分布図



第31図 第8地点出土石器実測図



第32図 単独出土石器実測図

石核（6）打面部には自然面が残りに、2回以上の大きな剥離で打面を作出している。剥離角はかなり鋭角で、残核の形状は図示した如くレンズ状にまで変形している。石材は嶺岡頁岩で、12B-13区から出土した。これら嶺岡頁岩とした石材を用いている石器群は時期的に近似するものと思われる。

#### 4 まとめ

以上、本遺跡から出土した石器群についてその概要を記載してきたが、ここで遺物出土量の多かった第5地点、第6-2地点を中心に若干の所見を付しておきたい。まず、出土した石器群を出土層位からみると、第Ⅴ層～第Ⅵ層にかけて遺物が含まれている場合と第Ⅲ層～第Ⅶ層上部に遺物が含まれている場合とに大別できよう。以下、前者を第1文化層の石器群、後者を第2文化層の石器群として記述する。

第1文化層 本文文化層に該当するものは、第5地点と第6-2地点出土の石器群となろう。出土層位をみると、第6-2地点では一部第Ⅶ層に及ぶがその中心は第Ⅵ層であり、出土層位からは若干の時間差が認められる。また、礫群を含む一部は第Ⅲ層中から出土しており後出の可能性を指摘できよう。第6-1地点との関連も考えられた。一方、第5地点出土の石器群は斜面部に流れ込むような状態を示しており、その包含層はいわゆるハードローム層中といえようが出土層位は安定したものではない。以下、石器と石材について双方を比較しつつその内容についてまとめてみたい。

石器 2地点での石器の器種はナイフ形石器・搔器・削器に共通性がみられ、第5地点ではそれに彫器と

石鏃が加わり、第6-2地点では台形石器3点が付帯する。基本的な器種構成には大きな変化は認められない。ここで特筆できることは石核となろう。第5地点出土の石核は4点を数えるが、黒曜石製の3点は前述したように一部に自然面を残すことと、まだまだ剥片剥取が可能で十分な大きさを備える。このことから推定すると母岩としての原石は子供の頭部大くらいはあったものと想定され、重量は5kg前後はあったものと思われる。それを裏付けるかのようにきれいな石刃状の大型剥片が伴っており、いわゆる石刃石器群の時期に位置づけられるものである。第3表に示したように剥片と屑片の数量が拮抗しており、ここでは大型剥片の剥取が主目的であったともいえよう。一方、第6-2地点の場合、屑片の出土量は剥片の2倍以上となり、石器製作に重点の置かれた場所といえよう。

これら一連の石器群と剥片を観察すると、近隣で対比できる遺跡に印西市木刈峠遺跡の第IV層出土の石器群<sup>5)</sup>、沼南町石揚遺跡の第V~VI層出土の石器群<sup>6)</sup>等が本遺跡の第5地点の石器群に近似するものとなろう。また、第6-2地点の石器群は石揚遺跡の第VII~VIII層上部出土の石器群と時期的に近いものと思われる。ここでの共通点は石刃状剥片にある。時期的に近い遺跡として取り上げた2遺跡も石刃状剥片の出土が特徴的で石核もかなり大きい原石が用いられていたことが残核や接合資料から窺える。

石材 一方、使用されている石材についてみると、黒曜石が主体となり次いで硬質頁岩<sup>7)</sup>、流紋岩といった石材が目立つ。特に第5地点での硬質頁岩は大型の石刃状剥片が剥取されており、成品数では黒曜石製と変わらない。これは硬質頁岩に依存している部分が大いともいえよう。この硬質頁岩多用の傾向は印旛村に所在する一ノ台遺跡<sup>8)</sup>で顕著に認められる。時期的にも近いものであろうが、この硬質頁岩は房総に居住する旧石器時代人にとって黒曜石に次ぐ貴重な石材となっていた。さらに石器と石材との関係では第3・4表に示したとおり、第5地点では9種の石材で構成されるが、第6-2地点では黒曜石以下アブライトまで14種の石材が用いられている。なかでも嶺岡頁岩が5点検出されており、これらの点からも両地点の石器群には時間差を認めることができよう。

第2文化層 第1文化層以外での出土石器群がこれに該当する。いずれも小規模なものであり、第1・3・4・6-1・7地点の5地点となる。遺物の包含は第III層としたソフトローム層中である。資料の関係で多くは語れないが石器・器種・石材という点からみると時期的な差は存在するものと思われる。第3地点で出土したナイフ形石器などは他遺跡との比較も可能な成品であるが、僅少という点からここでは触れないこととする。ただ第8地点とした剥片と屑片が集散的に出土した石器群は本文中でも触れたが、屑片の量と形状、計測値などから縄文期の石鏃製作地点とも考えられた。

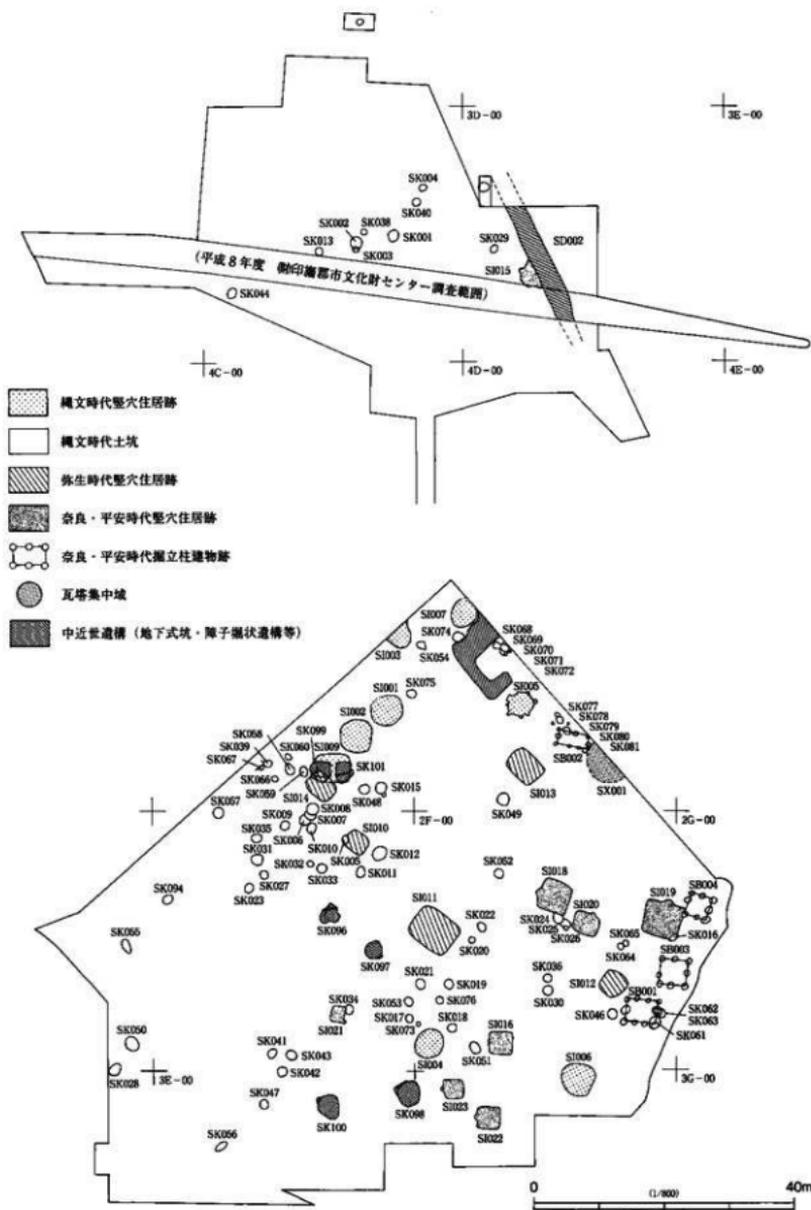
以上が本遺跡で出土した旧石器時代の概要である。現在、遺跡周辺は利根川に面した山林・畑地となっているが、当時の住環境を想定すると利根川は存在せず、北方一面は低湿地または海岸線が深く入り込んだ入り江などで構成されていたものと推測される。これを居住環境という点からみると、水源にも恵まれた風光明媚な場所であり、至って環境に恵まれた地域といえる。このような生活環境のなかで当時の人びとは遠方から運ばれた石で石器を作り、狩りや漁労に携わっていたものであろうが、調査による資料が増加するに従ってこの地域の当時の人びとの具体像が復元できることとなろう。

#### 参考文献

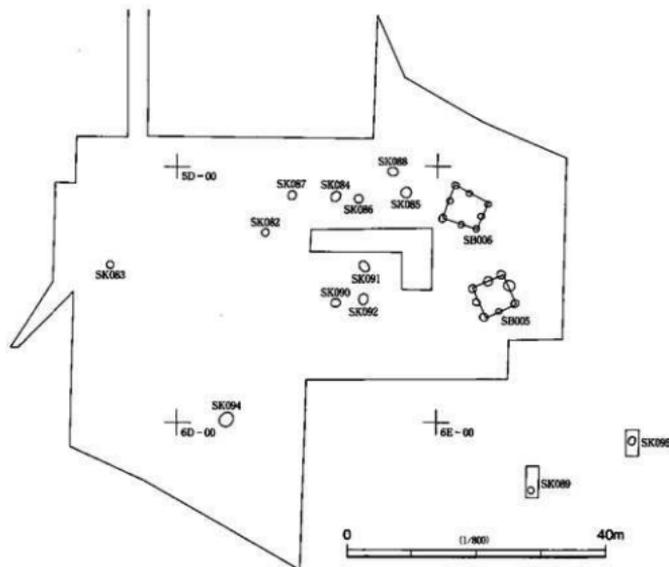
注1 千葉県教育委員会 1994 「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—平成5年度—」

2 千葉県教育委員会 1997 「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)—東葛飾・印旛地区(改訂版)—」

- 3 嶺岡頁岩（珪質頁岩）については以前から注意されていた石材であったが、最近、具体的な産出地点の調査が実施され、数か所でその岩石層（白滝層）の確認が報告されている。本遺跡で出土した石器には、その特徴がよくあらわれており、産出地の名称を付して「嶺岡頁岩」として分類した。  
加納実・国武貞克・吉野真如 2003 「房総の石器石材2」『千葉県史料研究財団だより』第14号
- 4 表中の屑片については、1g未満あるいは明確に石器加工できない小破片を屑片として分類した。
- 5 鈴木道之助 1975 「木莉峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(財)千葉県都市公社
- 6 太田文雄・安井健一 1994 「石揚遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 7 本報告でいう「硬質頁岩」とは東北地方で産出し、褐色を呈したものと淡褐色の光沢を有する石材で、頁岩や珪質頁岩、珪質粘板岩等といわれているものである。
- 8 道沢 明 1985 「一ノ台遺跡」『平賀』平賀遺跡群発掘調査会



第33図 上層遺構配置(1)



第34図 上層遺構配置(2)

### 第3節 縄文時代

#### 1 概要

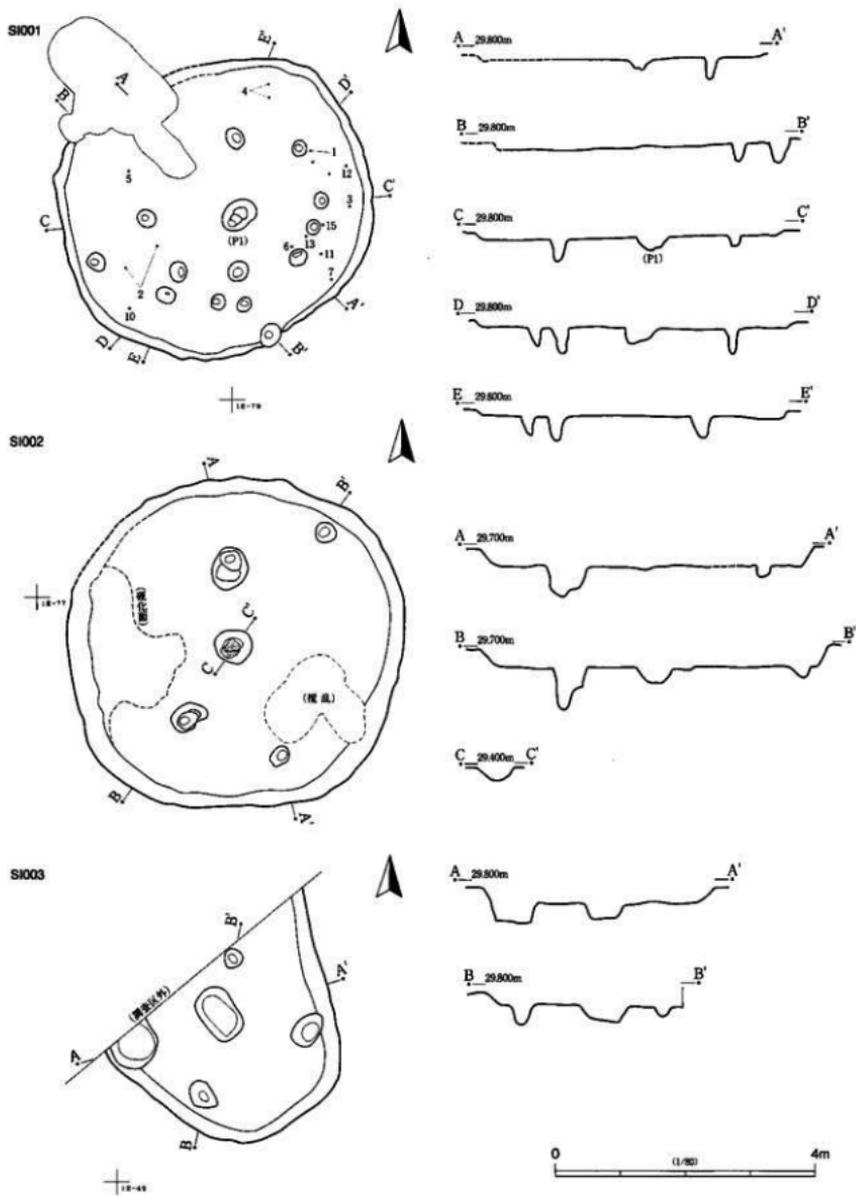
本遺跡における縄文時代の遺構及び遺物は、調査対象範囲の北東側、すなわち2E・2Fグリッド付近の本調査区に集中する傾向がある。だが、土坑についてはここより南西側にある3Cグリッド及び5Dグリッド付近にもややまとまりをもって分布している。検出した遺構は、竪穴住居跡9軒、土坑95基である。時期は中期末の加曾利E4式から後期の称名寺1式・2式にほぼ限定され、その大半は加曾利E4式期に属するものである。これら遺構は、切り合いも少ないことから、集落としては極めて短期間で形成→廃棄という過程を経たものと考えられる。だが、遺構外出土土器を見ると、後期の堀之内式土器も多く見られ、加曾利B式土器まで見られることから、人々の生活域としてはある程度継続するようである。

#### 2 竪穴住居跡

SI001 (遺構：第35図、図版6 遺物：第39図1～17)

1E-76グリッド付近に位置する。平面形は、長軸5.2m、短軸4.4mほどの円形に近い楕円形である。確認面からの深さは10cm程度であった。中央部付近に炉跡らしき掘込み(P1)が見られるが、焼土は全く検出されていない。ピットは住居の南東側にやや偏って12基が検出され、深さは20cm～40cm程度である。帰属時期は、出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

1～3・10～13は、沈線による区画の後、帯状に無文部を残すほかは、単節縄文LRを充填している。1・3は同一個体である。典型的なキャリパー形の器形で、推定口径は20.3cmである。1の口縁部に縦位



第35図 縄文時代堅穴住居跡(1)

の粘土帯が剥落した痕跡が見られることから、2のような小突起が貼付されていたと思われる。口縁部内面には、整形時の浅く細かな横方向の条痕が、磨り消されずに残っている。2・12・13及び10・11はそれぞれ同一個体である。10・11は比較的小型の深鉢である。10の肩部もしくは口縁部には無文帯が形成され、その下に沈線区画の充填縄文が施紋されている。4・5・7・14は微隆線による区画で、1～3等と同種の文様を描出している。縄文は4が単節縄文RL、5・7・14は単節縄文LRがそれぞれ充填される。7は口縁部付近ですぼまって、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、あたかも壺のような器形となっている。6は口縁部無文帯は微隆線で区画されるもの、それ以下に区画は見られず単節縄文RLのみが施文される。15は底部である。底径6.9cm、現存高4.8cmである。使用による痕跡か、底面は激しく荒れている。16は土器片鏟である。製作は打ち欠きのままであるが、使用により周縁は磨り減っている。17は円板である。1/3程度の残存である。周縁は打ち欠きのままである。

SI002 (遺構：第35図、図版6 遺物：第40、41図18～44)

1E-77グリッド付近に位置する。平面形は、直径5.6mほどのやや歪みの見られる円形である。確認面からの深さは25cmほどである。中央部付近には炉跡が見られる。掘込みは明確で、火床面も明確であった。ピットは4基検出され、深さは15cm～60cmほどである。帰属時期は、出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

18～20・21・24・26・31・35は微隆線による区画が見られるものである。18は把手付の浅鉢となるものと考えられる。口縁部区画を除き、胴部には地文の単節縄文RLのみである。21の口縁部区画の直下には拓影図右下方向からの刺突が2か所確認できる。24は口縁部区画が隆帯上に肥厚し、肥厚帯を対につぶすようにして、微隆線区画の無文帯が逆U字状ないし曲線状の構成になるとと思われる。外面口縁部には横方向のケズリを丁寧に行い、平滑で光沢を帯びている。色調は全体的に黒褐色であり、胎土には雲母及び長石の細粒が多く見られる。このような外面的特徴は、本遺構の資料の中では異質である。26は口縁部付近がやや内傾する器形となり、口唇部から口縁部内面にかけて幅1cm～1.5cmほど肥厚する。口縁部の断面形態は、やや内割ぎ状である。22・23・25・32・33は胴部文様が沈線によって区画されるものである。22は比較的小型の土器と思われる。口縁部区画の沈線直下に刺突列が施文されている。27は小型土器の波頂部で瘤状に肥厚している。単節縄文LRの施文が確認できるものの、微隆線の区画は明確でないものである。28は後期初頭称名寺1式土器の口縁部破片である。かなり薄手の器壁である。29は口縁部の明確な区画が見られないまま、単節縄文RLが施文されている。30は無文であり、製作時の輪積痕や指頭圧痕を顕著に残している。36～39は口縁部把手、40～44は底部である。

SI003 (遺構：第35図、図版6 遺物：第41図45～52)

1E-39グリッド付近に位置する。遺構の北西隅約半分は調査区外であり、調査はできなかった。従って全体の形状は不明であるが、外形に台形状の角が見られる。確認面からの深さは20cm前後である。中央部付近に隅丸長方形の掘込みが確認されたが、焼土等は全く見られなかった。ピットは4基検出され、深さは20cm～30cmである。帰属時期は、出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

45は口縁部下端を微隆線により区画する。46は縄文のみ、47は無文の口縁部破片である。49・50は沈線により区画し、無文帯と縄文充填部分に分けている。51はその区画を細隆線で行うものである。以上は加曾利E4式土器に比定される。48は外割ぎ状の口唇部形態であり、口端部外面には刺突列が施文されている。その下に7mmほどの間隔を開けて歯齒状工具による条線が斜位に施文されている。後期堀之内1式併

行であろうか。52は条線状の細沈線が交差している。胎土には砂粒を大量に含んでいる。

SI004 (遺構：第36図、図版7 遺物：第41・42図53～68)

2F-80グリッド付近に位置する。平面形は、直径4.5mほどで歪みの見られる円形である。確認面からの深さは25cmほどである。中央部付近には炉跡が見られる。掘込みは明確で、火床面も明確であった。ピットは壁際に廻るように19基検出された。深さは30cm～50cmほどである。帰属時期は、出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

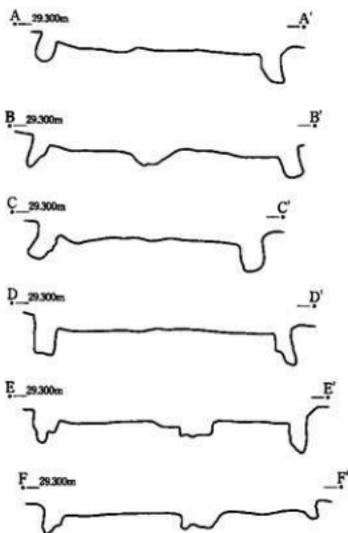
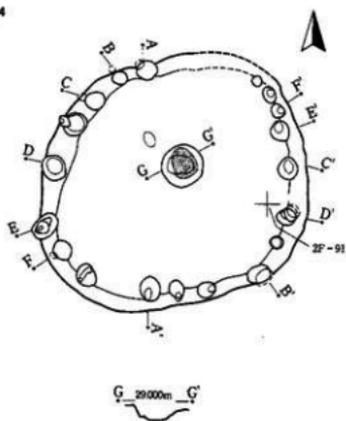
53～57は口縁部下端を微隆線で区画するものである。57を除き、概ねキャリパー形の器形である。区画線以下は、微隆線及び沈線で逆U字状などの文様構成となつてと思われる。57は内傾する器形で、口縁部直下で急激に外反する。58は口縁部付近で大きく外反し、口唇部の断面形態は角状となる。色調は明褐色であり、胎土には砂粒をわずかにしか含んでおらず、本遺構の中でも異質である。内面には赤彩も施されており、阿玉台式終末～加曾利E1式に併行する資料と考えられる。59は把手の一部分と考えられる。両側面は角状の断面形態であり、横断面はわずかに曲がっている。外面は細隆線による幅狭の区画内に単節縄文RLが施文され、破片上部に小さな橋状の把手が付されている。内面はナデにより平滑である。60～62は胴部文様を微隆線で区画するものである。63は底部で、底径は40.8cmである。64～67は土器片鏝である。64は40%程度の残存であるが、図左側に非常に浅い溝が見られる。全体的に打ち欠きのままの製作であるが、使用により本来の縁辺が摩耗している(図中の←の部分)。65は20%～30%ほどの残存であり、溝らしき痕跡は見られない。製作は打ち欠きのままで、それほど磨り減っていないことから、短期間の使用で破損し、廃棄されたものと思われる。66は加曾利E4式土器の口縁部破片を利用したものである。全体の約半分を欠損している。図右下が口縁部に該当する。図左側のやや上部には浅いが明確な溝が確認される。製作は打ち欠きのままであるが、使用により少しながら摩耗が見られる。67は薄手の破片を利用したものでほぼ完形であるが、溝を見出すことができない。製作は比較的丁寧な打ち欠きのままで、わずかながら摩耗が見られる。68は直径2.5cmほどの土製円板と思われるが、約半分を欠損しているため詳細は不明である。

SI005 (遺構：第36図、図版7 遺物：第42・43図69～95、図版30)

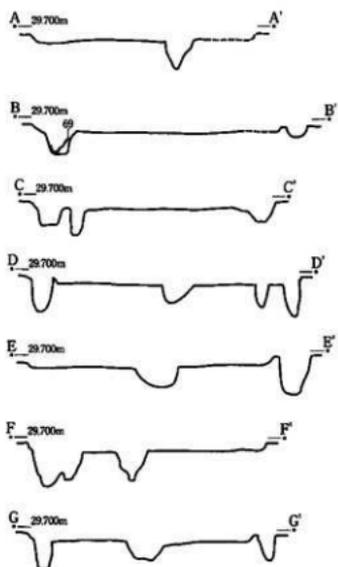
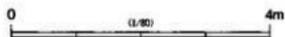
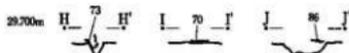
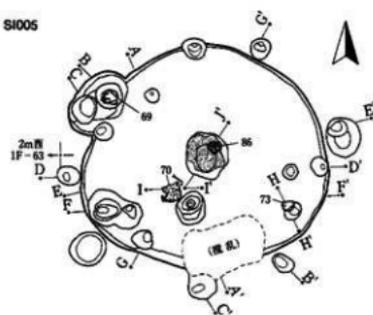
1F-53・63グリッド付近に位置する。平面形は直径3.8mほどの、歪みの大きい円形である。確認面からの深さは15cmほどである。中央部付近には炉跡が見られる。掘込みは明確で、火床面も明確であった。ピットは住居の外側にあるものも含め、16基検出された。このうち6基は完全に堅穴の外にある。北西側の2基は、堅穴から瘤状に突き出た大きな掘込みの中に作られている。深さは、床面ないし掘込み面から30cmほどのものから100cmに及ぶものまでである。北西側に突き出るようにして構築されたものの中に、称名寺1式土器の埋壺(第42図69)が確認された。帰属時期については、覆土中から称名寺2式土器も検出されており、やや幅を持って考えたい。

69は称名寺1式土器の深鉢である。全体の約90%が遺存している。口径34.2cm、底径9.0cm、器高42.8cmを測る。内底面より高さ2.5cmほどまでは、灰黄褐色で器面がかなり荒れている。18cmほどまでは黒褐色であり、この下半分の器表面が鱗状に剥落する部分などが見られ、荒れている。これ以上は、概ね灰黄褐色からぶい褐色である。また、くびれ部のやや上から斑状に色調が変化する部分が多い。外面は、底面より4cmほどの高さまでが灰黄褐色、16cmほどまでが赤褐色から灰褐色、26cmほどまでが黒褐色、それ以上が灰黄褐色となる。これらの特徴から本資料が、積極的に煮炊きに使用されたと判断できる。使用の際

S1004



S1005



第36圖 縄文時代竪穴住居跡(2)

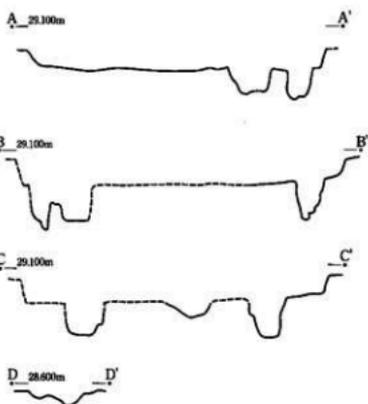
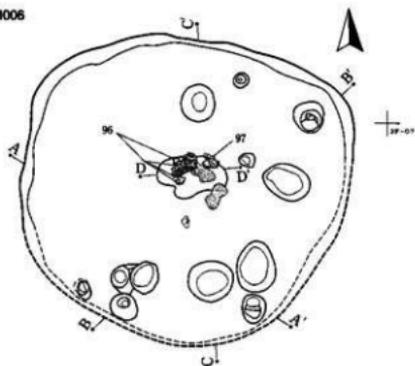
は、高さ16cmほどまで火が直接あたり、くびれ部のやや上まで液体が入っていたことが多かったと推察される。文様はJ字文を基調とした磨消縄文が施文される。70～73は地文のみが施文されている深鉢である。70は遺存度70%、口径25.1cmである。外面のほぼ全面に単節縄文LRが施文されている。器面は灰黄褐色から黒褐色であり、外面下部は直接火を受けた影響か剥落が見られる。71は遺存度30%、推定口径31.0cmである。器面には、幅2cmほどの櫛歯状工具を用いた条線を縦位で密に施文する。器面は内外面ともに被熱の痕跡が激しく、破片の下部ほど荒れが激しくなっている。72は遺存度が30%ほどで、底径7.8cm、器高41.9cmを測る。器面には単節縄文LRのみが施文されている。異方向に施文することで、羽状の施文効果がでている。器面は概ね灰黄褐色から褐色であるが、底部に近いところほど褐色が強くなる傾向にある。73は胴部～底部までの遺存で、遺存度は40%ほど、底径8.3cmを測る。器面には単節縄文LRが地文として、縦位で密に施文されている。外面の状況は、底面から10cmほどまでの無文部は褐色、15cmほどまでは褐灰色、それ以上は黒褐色である。内面は、底面から2cmほどまでが褐灰色、11cmほどまでが黒褐色、それ以上が灰黄褐色である。この状況から積極的に煮沸利用していたものと考えられる。74～76は深鉢の把手部分の破片である。77～79・86～89は磨消縄文によりいわゆるJ字文の構成となるものと思われる。86は全体的に器面の荒れが著しい。外面下半の色調は灰褐色、上半は暗褐色、内面は黒褐色から灰褐色である。81・90・91は沈線区画内に刺突文が加えられている。82は口唇部に刺突文及び沈線文、口縁部に沈線文が確認できる。83は無文、84は円形刺突文下に細縄文が施文されている。85は横位の隆線下に櫛歯状工具によるやや深めの沈線を、曲線状に施文している。92は縦位の結節縄文が見られる。93は櫛歯状工具で器面を軽く抉ったような施文である。94・95は底部である。94は内外面ともに被熱の影響が激しかったようであり、器表面が荒れている。

SI006（遺構：第37図、図版8 遺物：第44・45図96～141、図版30）

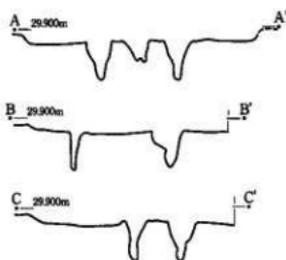
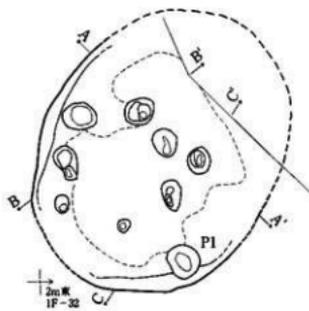
3F-06グリッド付近に位置する。平面形は、縦・横ともに5m前後の不整形である。確認面からの深さは30cm～40cmほどである。中央部付近には炉跡が見られる。掘込みは明確であるが、焼土にはやや散らばりが見られる。炉跡内のほぼ最下面から2個体の土器が検出された（96・97）。これらは横につぶれたような状態であり、炉囲いのために埋設したものではない、もしくは使用後に炉囲いを解体したものと考えられる。ピットは大小12基検出され、深さは50cm～70cmほどである。帰属時期は、出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

96は遺存度が50%ほどで、口径26.9cm、現存高22.2cmを測る。胴部下半以下は欠損している。欠損はほぼ同じ位置であるため、意図的に下半を取り去ったものと思われる。器形はキャリバー形で4単位の波状口縁となる。微隆線により、胴上部は曲線状、胴下部は杵状の文様が構成されている。地文として単節縄文RLが縦位に施文されている。内面に二次焼成の痕跡や荒れはほとんど見られないが、外面は色調がほぼ全面灰褐色であり、それほど激しくはないものの、二次焼成を受けた痕跡と思われる器表面の荒れが観察される。97は歪みの見られる平縁のキャリバー形であり、単節縄文LRを全面に施文後、軽いナデを全体に加えている。遺存度は90%ほどで、口径25.1cm、底径6.7cm、器高29.4cmを測る。外面の状況は、底面から10cmほどの高さまでが赤褐色で、器表面に荒れが見られる。15cmほどまでが灰褐色、それ以上が暗褐色から黒褐色である。内面は暗褐色から黒褐色がほぼ全面に広がるが、底面付近はやや明るい色調となっている。それほど激しくはないが、煮炊き利用の痕跡と考えられよう。帰属型式は文様から加曾利E3式と考えられる。98～101は同一個体であり、96とほぼ同一の文様構成となると思われる。102・103・

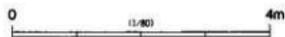
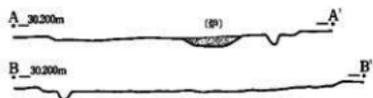
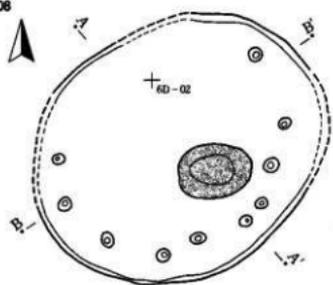
SI006



SI007



SI008



第37圖 縄文時代整穴住居跡(3)

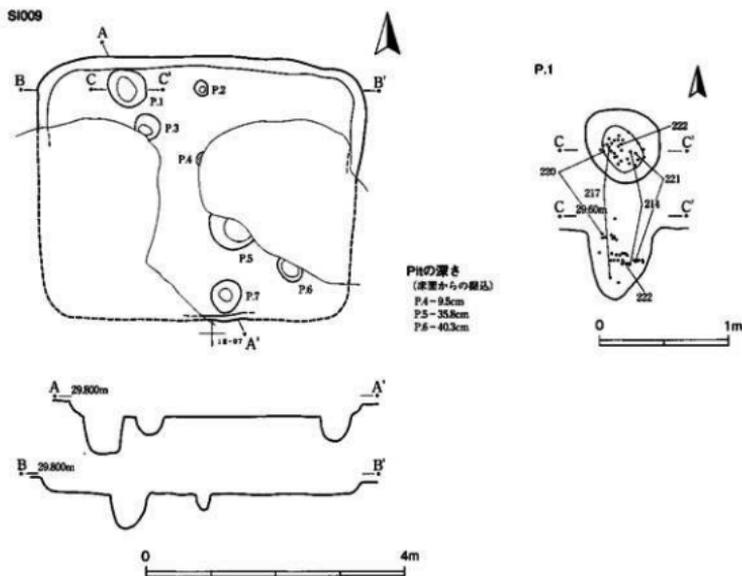
121～124も曲線状の微隆線を基本とした文様構成のものである。125～127は沈線により器面を区画し、縄文を充填している。104～108・110～112は縄文ないし沈線により口縁部を区画し、それ以下には縄文のみが見られる。113～116もほぼ同一の構成となるが、口縁部の明確な区画がない。117・118は無文の口縁部破片である。119・120は微隆線のみで文様が構成されるものである。120は特に厚手の製作である。128は幅1.2cmほどで5本一単位の櫛歯状工具を用いて器面全面に対し、円を描くように重複しながら施文している。129～134は底部である。以上の資料は、96を除き、中期加曾利E4式の範疇で捉えることができるものと考えられる。

135～139は土器片錘である。137を除いて製作は打ち欠きのままであり、特に研磨などの周縁調整は行っていない。135は加曾利E式土器の口縁部を利用している。基本的に打ち欠きだが丁寧に整形し、溝も明確である。136は使用による摩滅が少々見られる。137は周辺を軽く研磨しているが、溝らしき痕跡は見られない。138は非常に小さいが、溝は明確に形成されている。139は図右半を欠損している。溝は明確である。140・141は有孔円板である。140は直径3.6cm、中心孔径5mm～6mm（いずれも推定）である。141は直径5cm、中心孔径2cmほどと推定される。中心の穿孔は図裏面から大きなドリル状の工具を利用したと思われ、断面がすり鉢状になっている。

SI007（遺構：第37図、図版8 遺物：第46～48図142～205、図版31）

1F-21グリッド付近に位置する。遺構の北東隅が調査区外のため、遺構の全体を調査することができなかった。推定される平面形はやや歪んだ楕円形で、長軸4.6m、短軸3.6mほどである。確認面からの深さは約15cmである。中央部付近に掘込みは見られたが、炉跡らしき痕跡は見られなかった。ピットは8基検出され、深さは20cm～60cmほどである。このうち南東隅に位置するピット（P1）は、深さが約20cmで淡い焼土が充填していた。火床面などは見られず、炉ではないと推定される。また、土器小片が多く含まれていた。このうち1点を図示した（165）。帰属時期は、出土土器から称名寺式期と考えられる。

142は遺存度が30%ほどで、推定口径35.2cmを測る。寸胴な器形で、口縁部下端を一条の隆線で区画している。胴部全面に、6本一単位で幅1.4cmほどの櫛歯状工具を用いて、長さ1cmほどの短条線をやや曲線的に施文している。143・144・146は同一個体の胴部である。現存部分の最大推定径は35.5cmで、底径は6.4cmである。内外面ともに褐色から明褐色であり、器表面の荒れが著しい。頻繁に煮炊きに利用されたため、もしくは二次焼成を受けているためと思われる。145は胴上部をほとんど全て欠いている。底径は約7.5cmである。文様は幅3mmほどの浅い沈線が2cm～3cmの間隔をもって垂下し、1区画おきに単節縄文LRを充填している。わずかに残っている上部破片を見ると曲線状の構成が見られることから、胴上部と胴下部とで文様が2段構成をとるものと思われる。147～150は同一個体である。J字文を基本とする沈線区画内に単節縄文LRが充填される。外面には丁寧なケズリが施され、器面は平滑で、光沢を帯びる部分もある。内面には丁寧なナデが施されている。151～154・180～183も沈線区画内に縄文が充填されるものである。153の口縁部内面は肥厚し、断面形は鍵の手状になっている。179は沈線に添って一条の刻みを持つ隆線が見られる。155～157・160・161・193・198は沈線のみが観察されるものである。155は波状口縁の波頂部に刺突が施されている。158・159・184～192は沈線によるJ字文を基本とする文様構成となるものであるが、沈線間には縄文ではなく刺突文が施文される。194・195は同様の沈線間に条線が充填されている。162は把手部分が剥落している。口縁部を区画する微隆線に沿って円形の刺突文が連続して施文されている。163は低部であるが、やや太めの隆線で区画し、縄文が施文されている。164は微隆

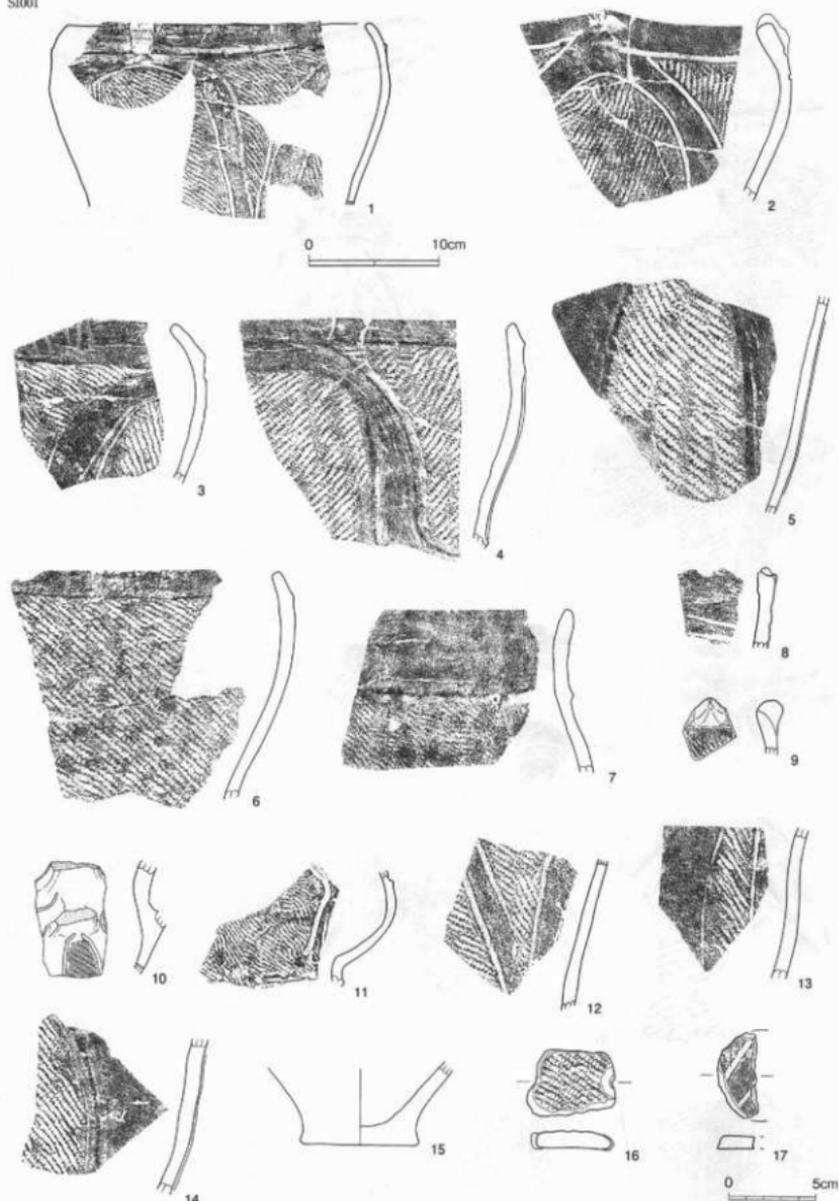


第38図 縄文時代堅穴住居跡(4)

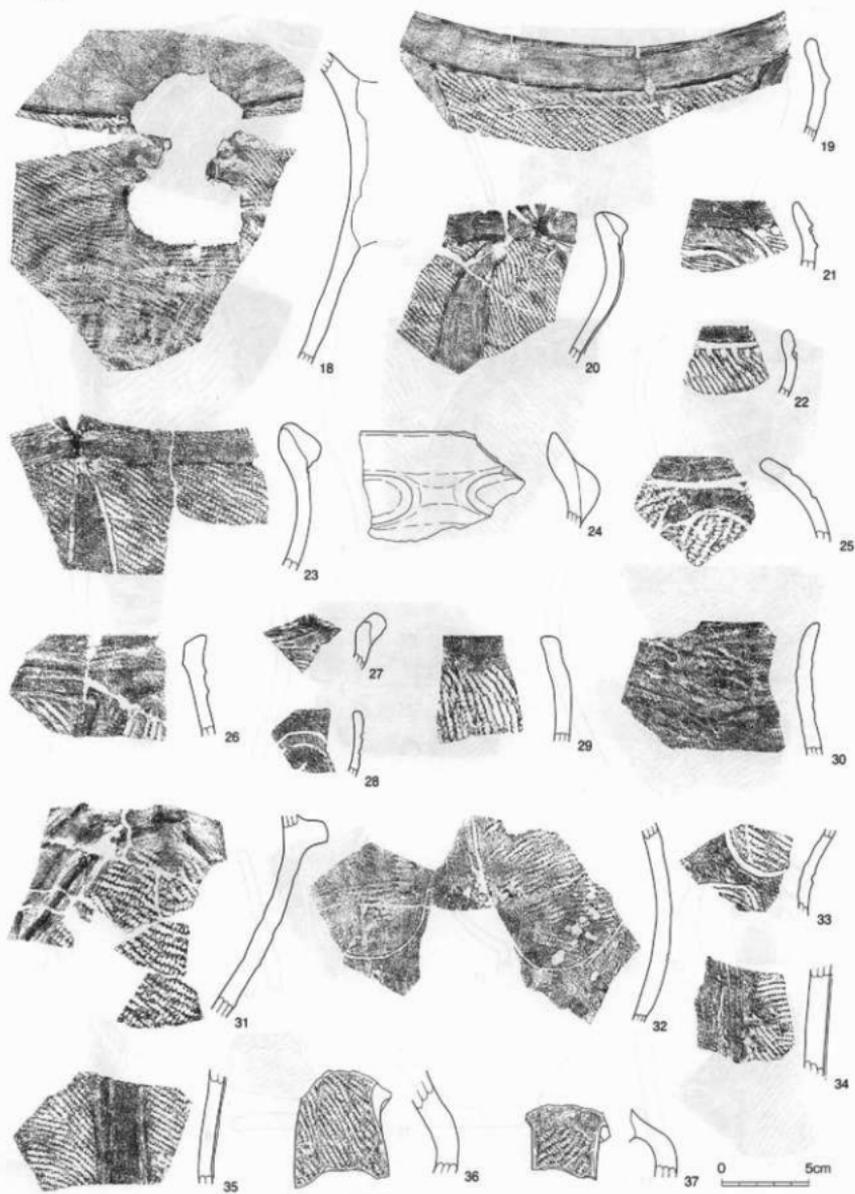
線のみが見られる。165は頂部の破片である。渦を巻くように隆線が付され、その上に円形竹管文が連続して施文される。166～168は把手部分の破片である。170～175・199～201は条線文を主体とするものである。171・172は横位隆線の下に条線が見られる。175は口縁部に一条の沈線が巡る。176・177は縄文のみが観察される。177はキャリパー形の口縁部破片で、節の細かい単節縄文LRが密に施文されている。178は無文の口縁部である。器面には粗いケズリ調整の痕跡が顕著である。196は薄手の製作で、2本の横位沈線間に疎な条線を縦位に施文している。197は櫛歯状工具を用いて波状の条線が施文されている。202は器表面の摩滅が著しい土器片の中央部に穿孔が見られるものである。称名寺式土器を用いていると思われるが、その用途は不明である。203は加曾利E4式土器である。204・205は底部である。204は推定底径4.1cm、205は推定底径5.8cmを測る。204にはわずかに縦位の縄文が観察される。以上の資料については、特記したものを除き、概ね称名寺式に比定できるものである。中でも沈線間に刺突が施文される158・159・184～192は称名寺2式に比定される。

SI008 (遺構：第37図、図版8 遺物：第48図206～213)

6D-02グリッド付近に位置する。確認面が低く、壁が判然としない部分も多いが、平面形は長軸4.8m、短軸3.9mほどの楕円形と推定される。確認面からの深さは約8cmである。住居の中央部から南西よりの所に炉跡が検出された。焼土、掘込みとも明確であった。ピットは壁際を巡るように9基検出された。ただし、北東側からは検出されていない。深さは15cm前後である。帰属時期は、出土土器から加曾利E4式から称名寺1式期と考えられる。

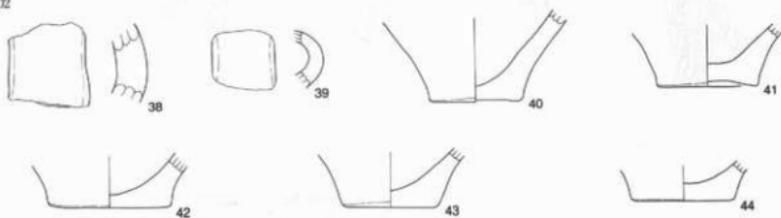


第39図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(1)

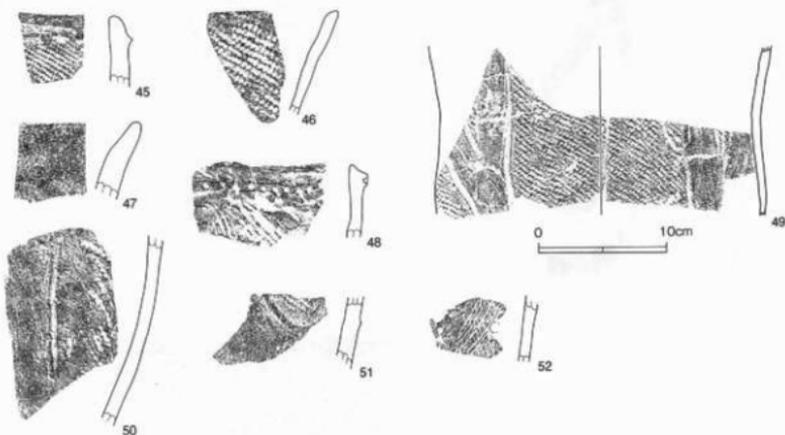


第40圖 縄文時代竪穴住居跡出土遺物(2)

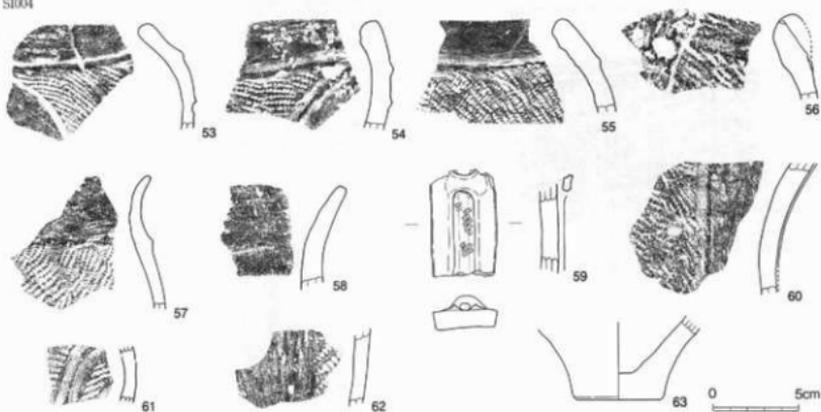
SI002



SI003

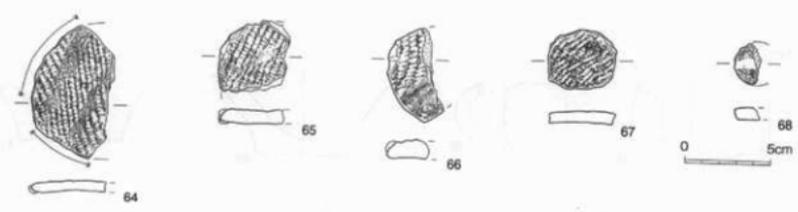


SI004

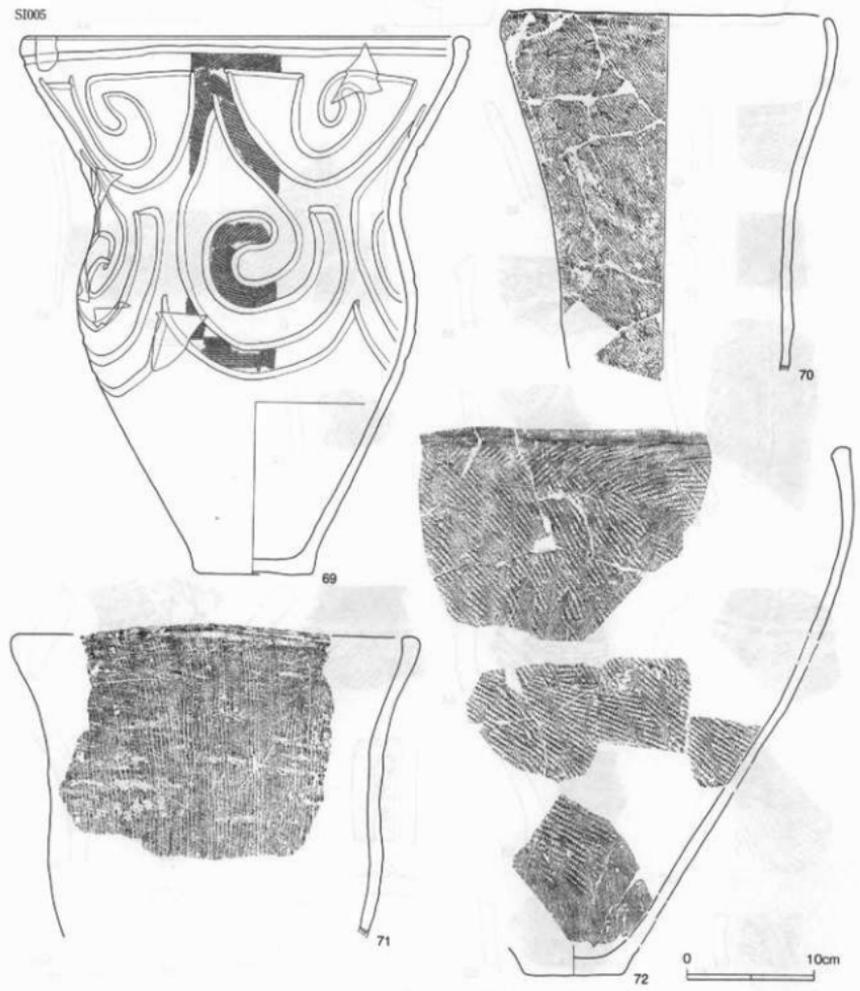


第41圖 縄文時代竪穴住居跡出土遺物(3)

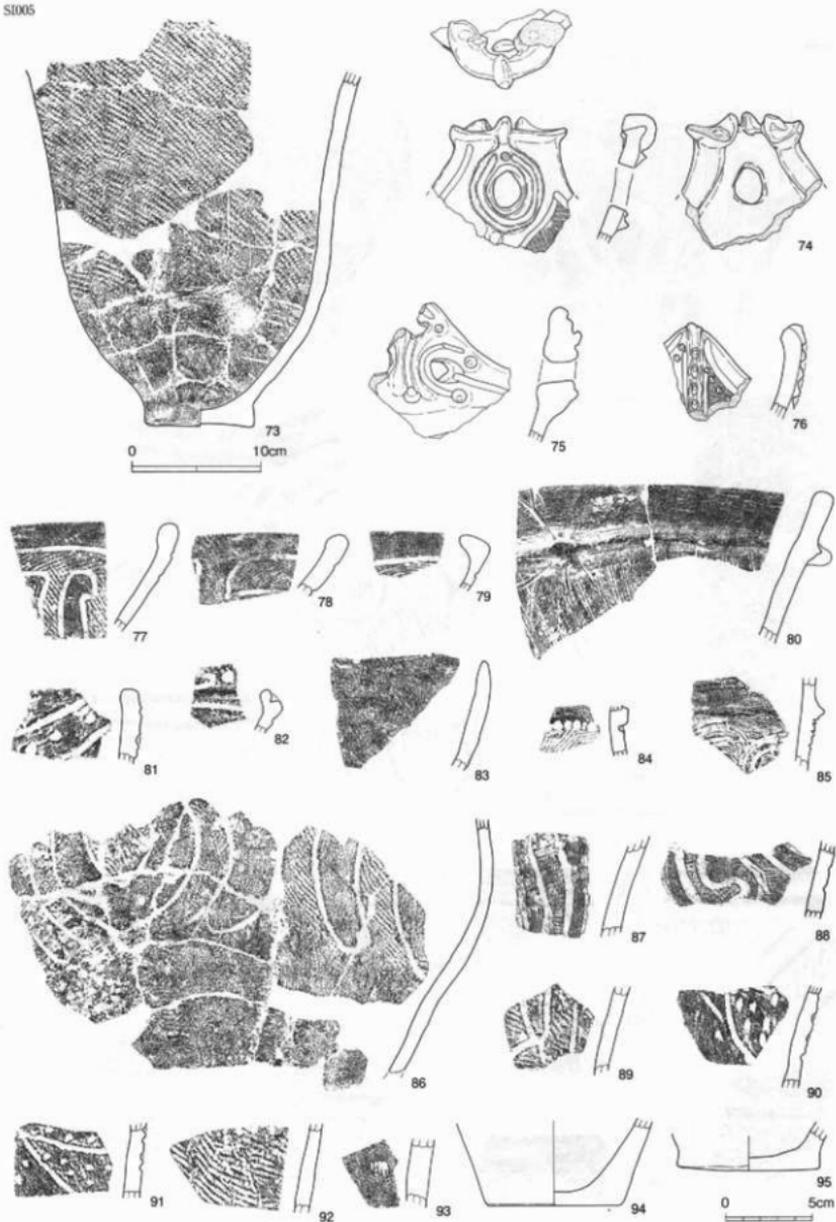
SI004



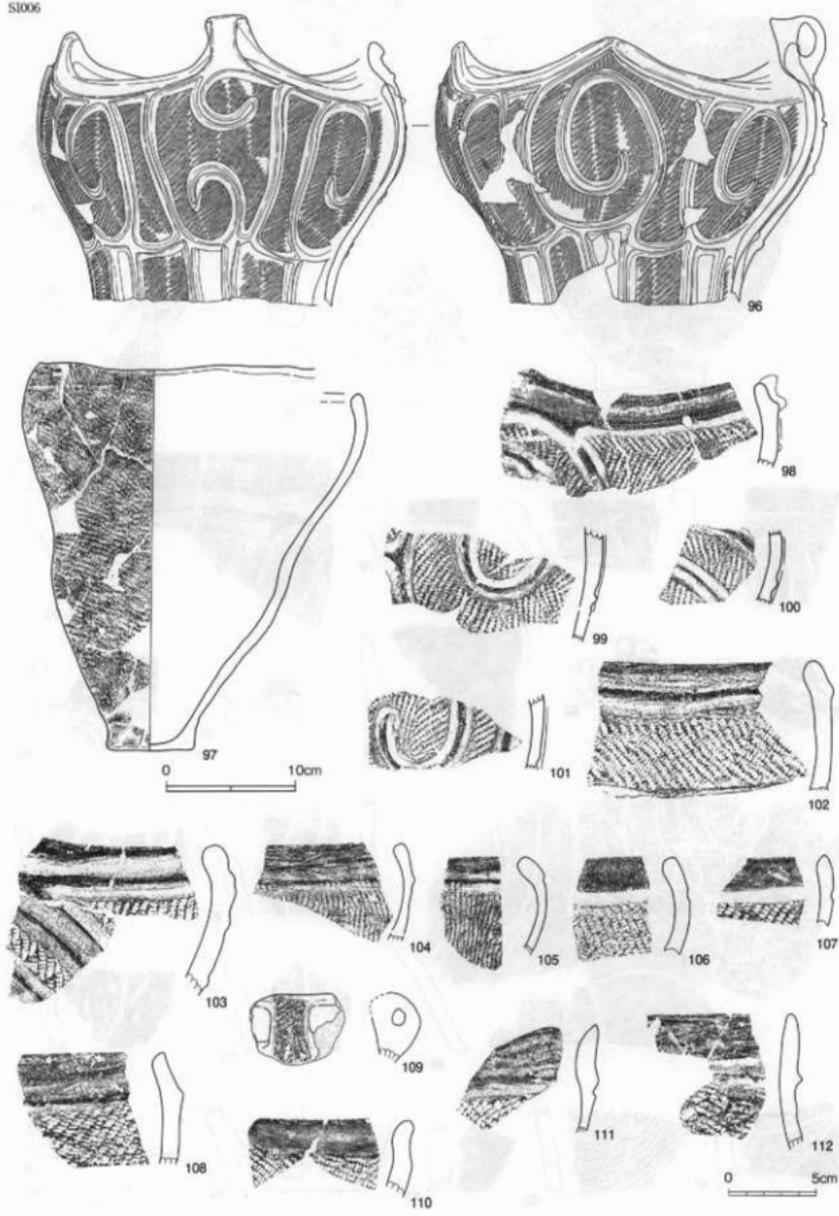
SI005



第42図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(4)

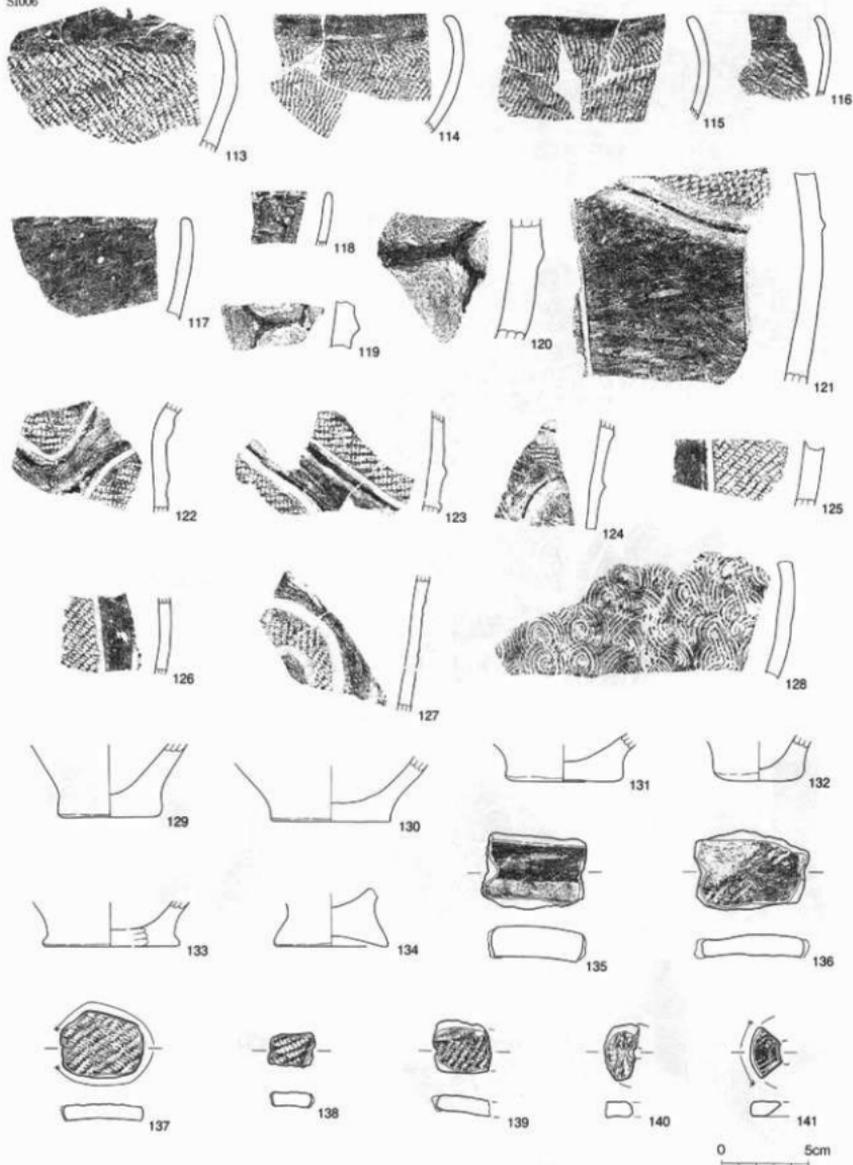


第43図 縄文時代竪穴住居跡出土遺物(5)

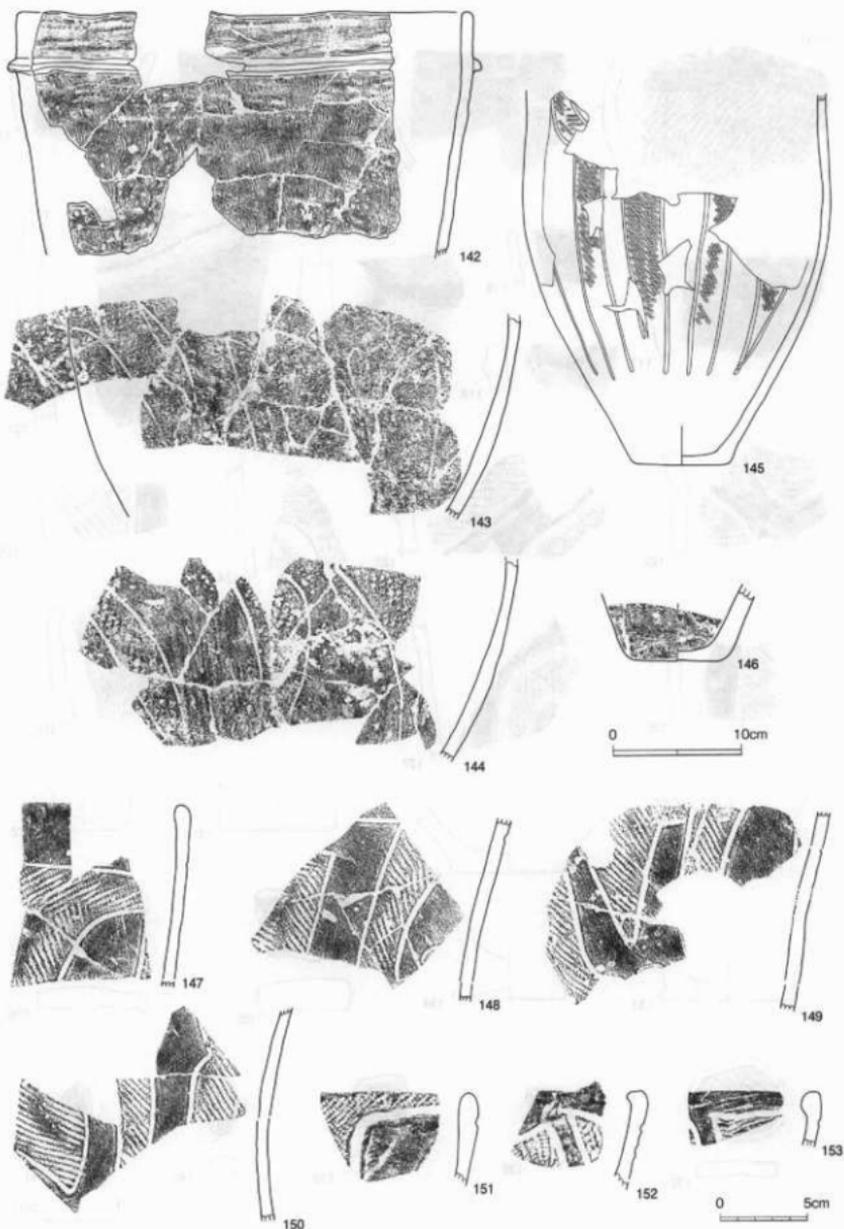


第44圖 縄文時代竪穴住居跡出土遺物(6)

S1006

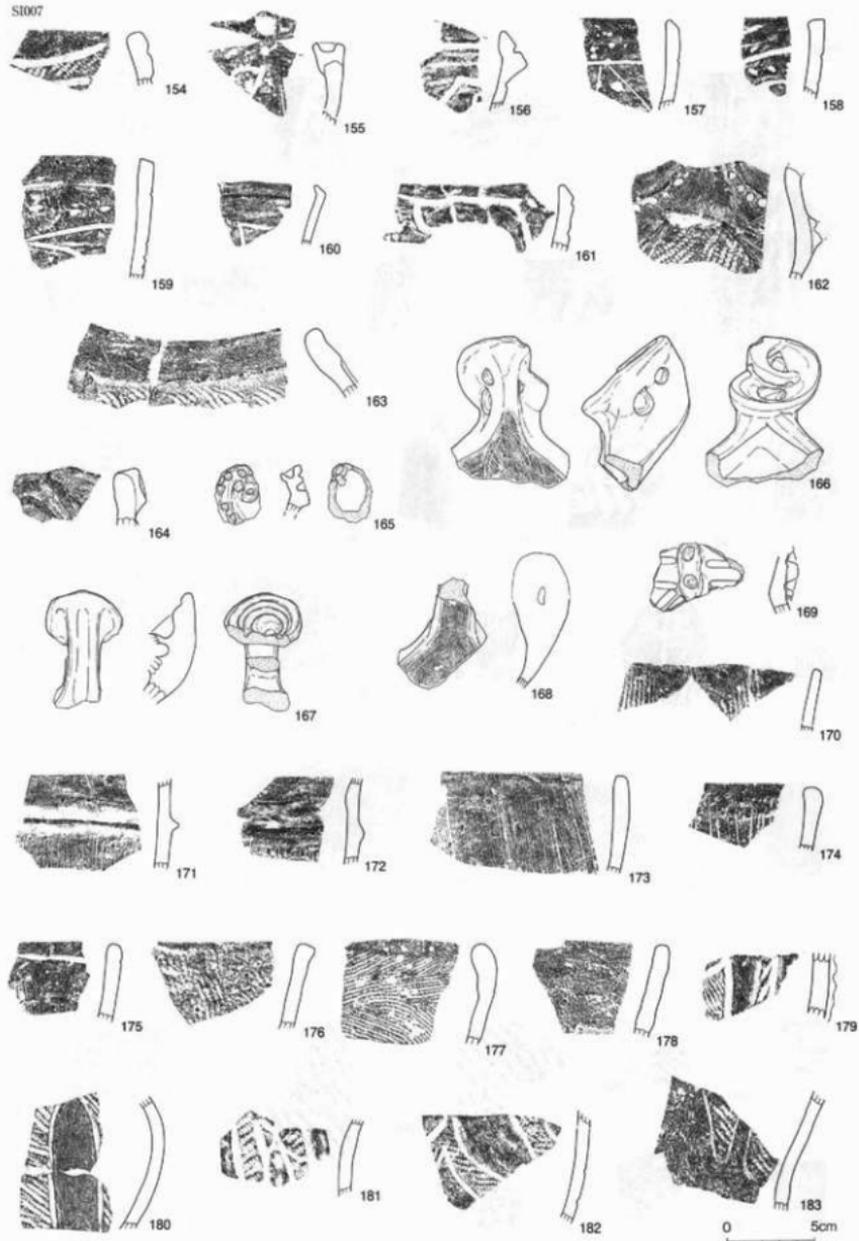


第45図 縄文時代竪穴住居跡出土遺物(7)



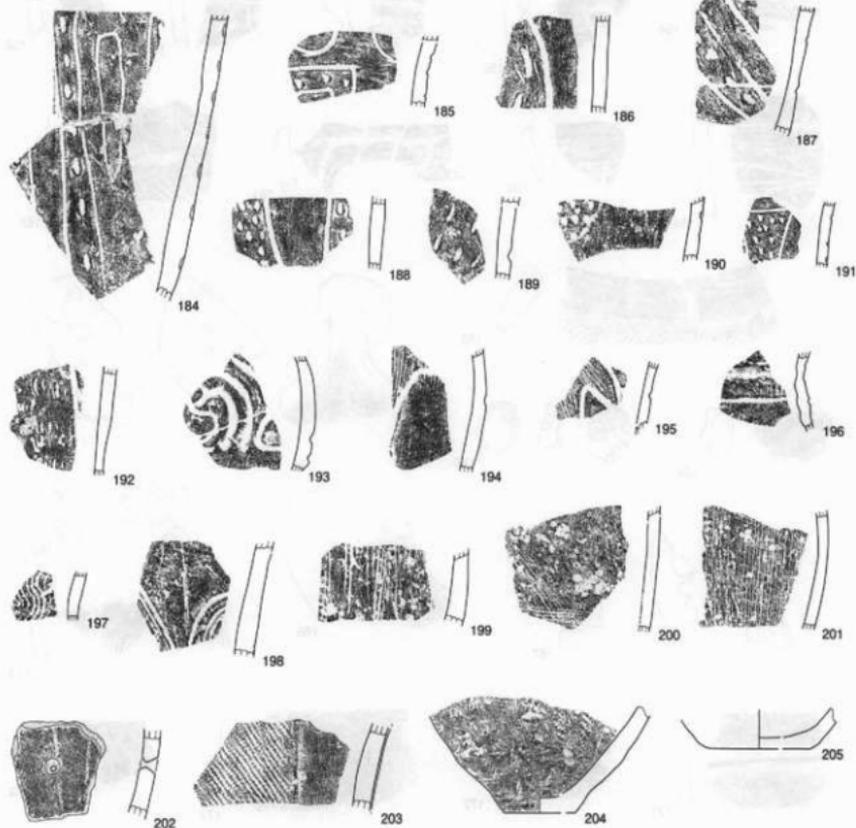
第46圖 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(8)

S1007

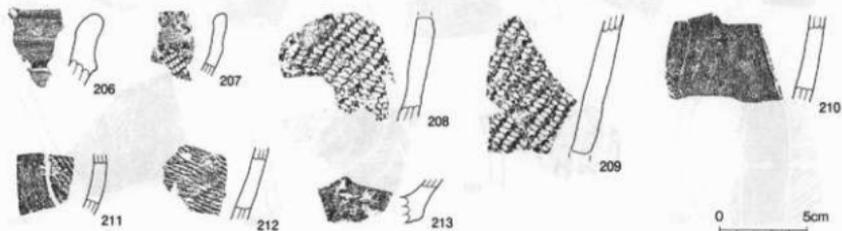


第47圖 縄文時代竪穴住居跡出土遺物(9)

S1007



S1008



0 5cm

第48圖 縄文時代竪穴住居跡出土遺物(10)

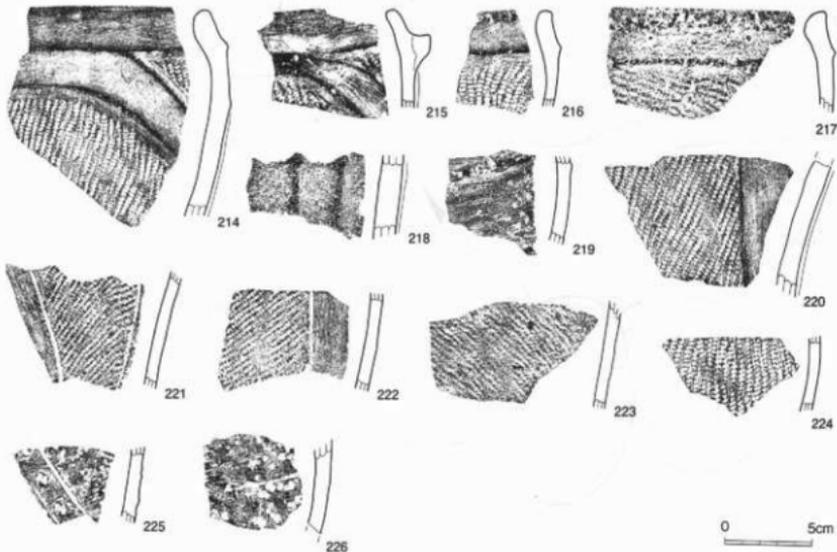
206・207は口縁部破片である。口縁部の下端が微隆線によって区画されている。207はその下に単節縄文LRが施文される。208・209は同一個体である。厚手の製作で、単節縄文RLのみが施文されている。210は無文の胴部片である。211は細い沈線による区画内に縄文が充填されるものである。212は無節縄文Rのみが施文されている。213は底部破片である。

SI009 (遺構：第38図、図版17 遺物：第49図214～226)

1B-86グリッド付近に位置する。平面形は長方形になると思われるが、遺構の大半は中世の地下式坑(SK094及びSK137)が重なり、詳細は不明である。残存部分から長軸5.0m、短軸2.2mと推定される。確認面からの深さは約30cmである。炉跡は検出されていない。ピットは7基検出されたが、配列等は不明である。深さは15cm前後である。帰属時期は、出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

214～220は細隆線を基本とした文様が見られる。221・222は同一個体であり、沈線区画で縄文を充填するものである。223・224は縄文のみが観察される。以上の資料は、加曾利E4式に比定できる。225・226は同一個体である。沈線間に刺突文を加えることから、称名寺2式に比定される。

SI009

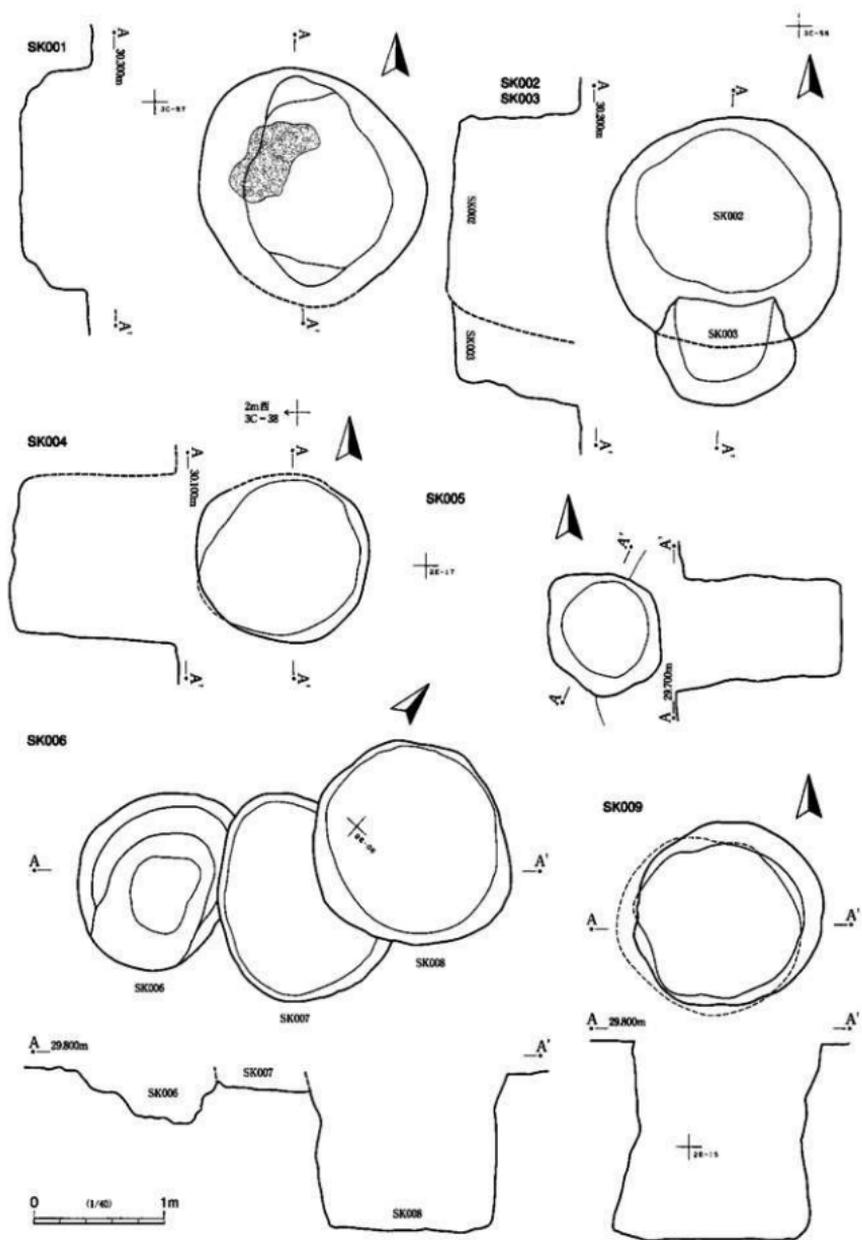


第49図 縄文時代堅穴住居跡出土遺物(1)

### 3 土坑

SK001 (遺構：第50図、図版9 遺物：第64図1～4)

3C-57グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸184cm、短軸166cm、深さ55cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。



第50図 縄文時代土坑(1)

1は波状口縁の波頂部が欠損している口縁部片である。微隆線により区画した内部に縄文を充填している。2も同様の文様であるが、微隆線の両脇に沈線を加えている。3・4は沈線により区画し、同様の文様を描出している。

SK002 (遺構：第50図 遺物：第64図5～18)

3C-56グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸188cm、深さ105cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

5は微隆線の交差部に突起が見られる。6～9・13・14は微隆線で区画した内部に縄文を充填するものである。10～12は指頭による凹線程度で口縁部下端区画を行っており、境界が明確でないものである。10は区画部分に細い丸棒状工具による疎らな刺突を加えている。17・18は同一個体である。胎土は中砂粒を非常に多く含んでいる。18は細い条線が見られるが、文様を意図したものか、調整痕であるのか判断としない。以上の資料は加曾利E4式に比定できる。15は単節縄文LR施文後に沈線で区画し、縄文を磨り消して無文部を作出する、いわゆる磨消縄文技法が見られる。内面は丁寧なケズリにより調整され、平滑である。16は粗い撚りの無節縄文Lを縦位に施文している。拓影図左側部分では軽いナデを加えられ、縄文が磨り消されている。内面調整は非常に丁寧なナデ・ケズリにより平滑で光沢を帯びる。15・16は後期加曾利B式に比定されるが、本遺構では客体的で混入と思われる。

SK003 (遺構：第50図 遺物：第83図482～495)

3C-56グリッド付近に位置する。遺構の大部分をSK002によって切られているため、詳細は不明であるが、平面形は円形から隅丸長方形になるとと思われる。規模は現存東西幅が110cm、深さ100cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

SK004 (遺構：第50図、図版9 遺物：第64図19～30)

3C-38グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸139cm、深さ129cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

19は蓋である。皿形に成形したものを逆にし、中心線に添って粘土帯を貼り付け、把手及びつまみ部分を形成している。つまみ部は基部以上の部分が欠損しているため、形態等は不明である。器面調整はケズリの後にナデを加えるなど丁寧に行っている。また、外面には赤彩を施した痕跡がある。20・21は緩い波状口縁の波頂部である。22～26は微隆線で、27・28は沈線文でそれぞれ区画した内部に縄文を施文するものである。29は細い櫛歯状工具による条線が施文されている。30は底部である。外面には縦方向のケズリ調整が行われている。

SK005 (遺構：第50図、図版9 遺物：第65図31～39)

2E-17グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸104cm、短軸88cm、深さ127cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

31は口径15cm前後の小型土器で、キャリパー形の器形、波状口縁となる。残存部が少なく詳細は不明であるが、浅い沈線による曲線文が見られる。外面には煤の付着が口縁部にまで及んでおり、煮炊きの痕跡と判断できる。32は器面全面に単節縄文LRが施文されている。内面は丁寧にケズリ調整され、光沢を帯びる。33～36は微隆線による区画内に縄文を充填するものである。37・38は底部である。39は土器片錘である。拓影図右側の一部が欠損しているが、ほぼ長方形になるとと思われる。周縁調整は打ち欠きのままであるが、丁寧に細かい打撃により形状を整えている。溝も明確に形成されている。

SK006 (遺構：第50図，図版9 遺物：第65図40・41)

2E-06グリッド付近に位置する。SK007に西側の一部を切られている。平面形は歪んだ円形，規模は長軸145cm，短軸119cm，深さ42cmほどである。底面には凹凸がある。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

40は縄文施文後に，無文帯に添って太沈線を加える。41は細い櫛歯状工具により曲線状の文様を施文している。

SK007 (遺構：第50図，図版9 遺物：第65図42～47)

2E-06グリッド付近に位置する。SK008に北東側を切られている。一部推定となるが，平面形は歪んだ円形であり，規模は長軸162cm，短軸推定130cm，深さ18cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

42は薄手の製作で，比較的小型の土器と考えられる。地文のない口縁部には刺突列が施文されている。43は微隆線，45は沈線によって区画されている。44・46・47は縄文のみが施文されている。

SK008 (遺構：第50図，図版9 遺物：第65・66図48～71)

2E-06グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形，規模は長軸165cm，短軸156cm，深さ124cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

48～52は口縁部が無文となり，下端は屈曲による段ないし微隆線で区画している。48は縄文施文後，下端区画直下に斜め方向からの刺突列を施文する。53は把手部分の破片である。55～62・67は微隆線ないし沈線で区画した内部に縄文を充填する個体の胴部片である。67は薄手の製作で，製作時の指頭圧痕を顕著に残すなどやや異質な特徴を持つ。63・64・68は縄文のみが施文されている。63は外面に煤の付着が著しい。65・66は櫛歯状工具による細い条線が施文されるものである。69・70は底部である。71は土器片鏟である。製作は粗い打ち欠きのままであるが，使用による摩滅が周縁に見られる。溝は比較的明瞭である。

SK009 (遺構：第50図，図版9 遺物：第66・67図78～96)

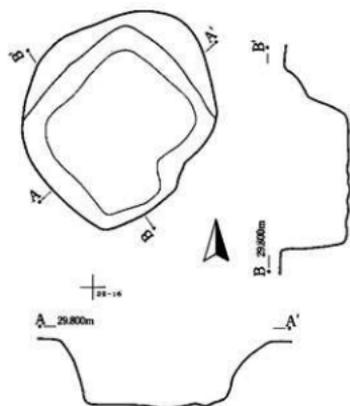
2E-15グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形，規模は長軸150cm，深さ152cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

78～88は基本的に微隆線区画をして縄文を加えるものである。85は口縁の下端区画に添って，円形刺突文を2段に連続施文する。89～91は縄文と沈線が組み合わさるものである。89は縄文地上に縦位の凹線を加えている。90は2条のやや太い沈線間に縄文を施文している。91は細沈線による区画内に縄文を充填している。92は縦位の単節縄文RLのみが施文されている。93は単節縄文LRを施文した後，図右側にヘラ状工具による縦位のケズリを加え，光沢を帯びる無文域を作出している。94は浅く調整痕状の縦位沈線と，刻みを持つ縦位の微隆線が見られる。器面は明黄褐色で，胎土には細砂粒が少量混入されている。本遺構出土資料の中では，文様及び製作の特徴で異質な印象を受ける。95・96は土器片鏟である。95は切り込みは明確で，四方に作出されている。製作は打ち欠きのままで，多少使用によると思われる摩滅が観察される。96は大部分を欠損しているが，周辺調整及び溝の作出ともに非常に丁寧であり，本遺跡の中でも大変に珍しい。器面を見ると，一条の浅い沈線が見られ，称名寺式土器を使用したものと考えられる。

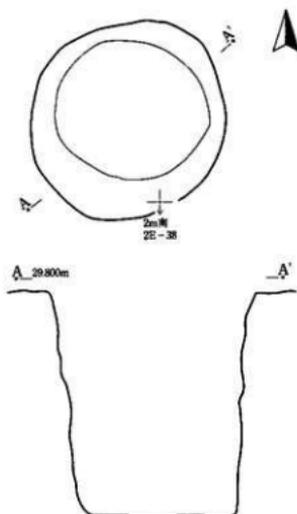
SK010 (遺構：第51図，図版9 遺物：第66図72～77)

2E-16グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形，規模は長軸170cm，短軸143cm，深さ53cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

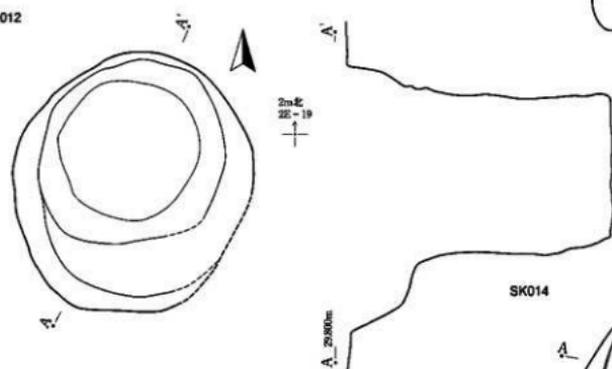
SK010



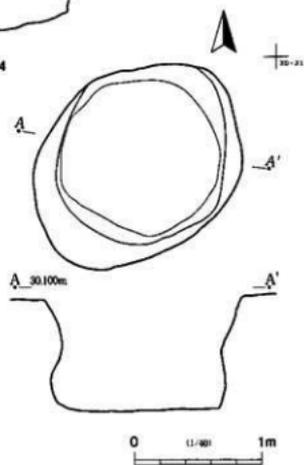
SK011



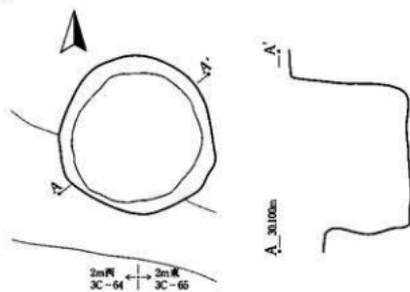
SK012



SK014



SK013



第51圖 縄文時代土坑(2)

72は緩い波状口縁の口縁部破片であり、微隆線による口縁部区画が見られる。73は内削ぎ状の口唇部形態をなし、口縁部に丸棒状工具による斜め方向からの刺突列を施文し、その下に少なくとも2段の凹線を加えている。74は非常に薄手の器壁及び器形から小型土器と思われる。点列の下には単節縄文LRが施文される。75・76は沈線区画内に縄文が充填される。77は底部である。

SK011 (遺構：第51図、図版9 遺物：第67・68図97～119)

2E-38グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸168cm、短軸154cm、深さ179cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

97～104・107～114は微隆線で区画した内部に縄文を施文するものである。101・102及び109～111は同一個体である。105・115は沈線で区画され、縄文が加えられる。116・117は底部である。以上の資料は加曾利E4式に比定できる。106は大きかな区画をごく浅い沈線で施した後に単節縄文LRを施文し、無文域に縦方向の粗いケズリ調整を加える。内面調整も縦方向の粗いケズリである。後期土器に比定され、本遺構では混入と思われる。

118・119は土器片鏟である。118は楕円形に近い平面形状である。製作は打ち欠きのままである。溝は確認できるが、明瞭ではない。119は全ての面に摩耗が見られ、使用の結果と考えられる。溝は痕跡程度である。

SK012 (遺構：第51図、図版10 遺物：第68・69図120～141)

2E-19グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸212cm、短軸推定185cm、深さ210cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

120・121・126・127・129～136は微隆線で区画した内部に縄文を施文するものである。129～132は同一個体である。133は縄文を充填後、微隆線に沿って沈線を加える。135は隆線に沿ってナデを施している。122・123・137は沈線による区画である。124は縄文のみが施文されている。125・126は口縁部の無文部分の破片と思われる。138は櫛歯状工具による細い条線が施文されている。139は底部である。

140は土器片鏟である。製作は打ち欠きのままであるが、使用による摩耗が見られる。溝は明確である。141も土器片鏟と思われるが、溝らしきものは見られない。周縁の打ち欠きはやや丁寧に行われており、土製円板の可能性もある。

SK013 (遺構：第51図、図版9 遺物：第70図142～159)

3C-65グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸124cm、深さ89cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

143・144は把手部分の破片である。142・145・146・148～154は微隆線で区画した内部に縄文を施文するものである。150は微隆線上にまで縄文が及んでいるが、最後に微隆線に並行するが、やや間隔をあけてナデが加えられる。155・156は沈線で区画している。147は単節縄文LRが器面全面に施文される。157は底部近い破片であり、縄文施文後に縦方向のケズリが加えられている。158は櫛歯状工具による細い条線が施文されている。159は無文で、幅広のケズリ痕のみが観察される。

SK014 (遺構：第51図、図版10 遺物：第70・71図160～172、図版30)

3D-31グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸187cm、短軸145cm、深さ91cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

160は基本的に四単位の波状口縁であるが、一対は把手状となる。そのうち一か所はローソク状の突起

となり、華美な装飾がほどこされている。口縁部は無文となり、下端は微隆線で区画される。以下の文様は微隆線で区画した内部に縄文を施文している。161～170も同様に微隆線文を基本としている。166・167は比較的厚手の器壁であり、大型の深鉢になると思われる。171は条線のみが施文されている。172は底部である。

SK015A・B (遺構：第52図、図版10 遺物：第71図173～186、図版30)

1E-99グリッド付近に位置する。2基が重複しているが、先に構築されたBが後から構築されたAに切られたものと見られる。Aの平面形はほぼ円形、規模は長軸推定179cm、短軸165cm、深さ94cmほどである。底面はほぼ平坦である。Bの平面形は円形から隅丸長方形であり、規模は長軸現存78cm、短軸77cm、深さ40cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期はA・Bともに出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

173～186はすべてAから出土したものである。173は無節縄文Lが底部付近を除き、ほぼ器面全面に施文されている。遺存度が95%ほどで、口径25.4cm、底径5.8cm、器高30.4cmを測る。口縁部付近がやや内傾する器形で、口縁部直下を指頭でなぞったような凹線が一周している。この凹線は縄文施文後に施されたものである。外面の状況を見ると、底面から高さ13cm位までは概ね灰褐色から灰黄褐色であり、それ以上は黒褐色部分が主体となり、斑状に灰黄褐色になる部分が見られる。内面は概ね黒褐色から暗灰褐色であるが、口縁部付近を中心に被熱により表面が荒れているような状況が見られる。また、本資料は口縁部付近の約1/4が欠損しているが、割れ口付近は土器の風化が著しい。通常の煮炊きと異なる使用をしたとも考えられ、興味深い資料である。174～177・179は基本的に微隆線で区画するものである。175は口縁部区画の下に櫛歯状工具による条線を波状に施文している。178は沈線区画内に縄文を充填していると思われる。180～183は底部である。184・185は土器片鏟である。184は溝は大きくて明確であるが、周辺は打ち欠きのままである。185は楕円に近い形に成形され、周縁調整は比較的丁寧に行われている。溝の作出も丁寧である。186は有孔円板である

SK016 (遺構：第52図、図版11)

2G-50グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸123cm、短軸94cm、深さ55cmほどである。底面はほぼ平坦である。出土遺物は中期の無文土器の小片が4点のみであり、帰属時期の詳細は不明である。

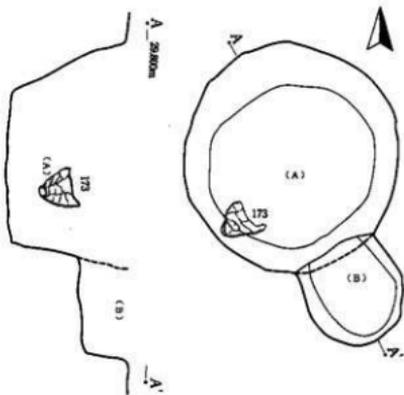
SK017 (遺構：第52図 遺物：第72・73図187～220)

2F-80グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸128cm、深さ148cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

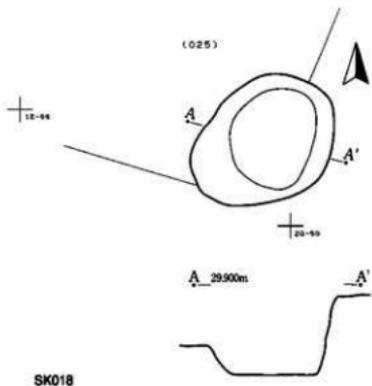
187～195・199・200・203～208・211は微隆線で区画した内部に縄文を施文するものである。196・197は縄文施文後に凹線及びケズリ調整を加えて口縁部下端を区画している。198の胴部は沈線区画内に縄文を充填した後、無文部にケズリ調整を施す。201は口縁下部に鋸歯状の沈線が見られる。口唇部断面は角状に近く、胎土には砂粒を多く含む。202は薄手の製作で、口縁部下端は微隆線により区画され、その上下に径2mm～3mmの先尖状工具による円形刺突文を連続的に、浅く施文している。209・210・212・213は沈線区画内に縄文が施文される。214は縦位の細沈線が疎らに施文される。215は縄文部と無文部の境界が判然としませんが、縄文施文後の無文域に縦方向のケズリを加えている。216・217は底部である。

218は土製円板である。ほぼ完形の状態であった。全体的に器表面の摩滅が見られる。219は円板状の手

SK015



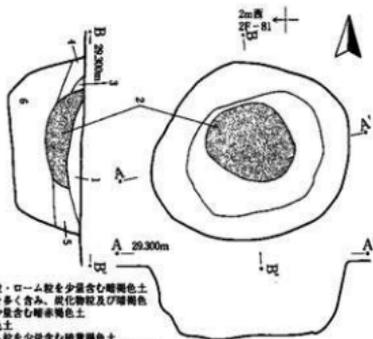
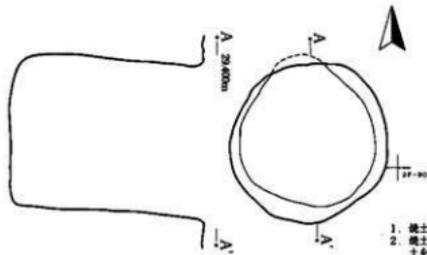
SK016



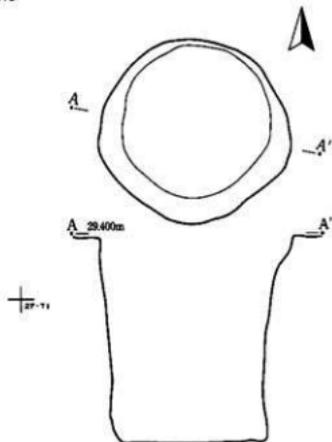
SK018



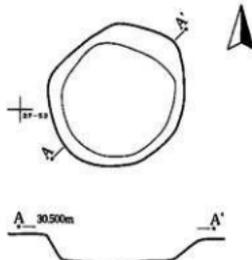
SK017



SK019



SK020



0 1/40 1m

第52図 縄文時代土坑(3)

捏ねである。220は穿孔された円板状土製品である。

SK018 (遺構：第52図、図版11 遺物：第73図221～239)

2F-81グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸159cm、短軸136cm、深さ57cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から称名寺1式期と考えられる。なお、本遺構出土の土器を見ると、そのほとんどが内外面ともに褐色から赤褐色のものが多く、激しい被熱の痕跡を有するものも少なくない。出土位置を見ると覆土の上部にある焼土層中から検出されたものが大半であり、その関連性が注目されよう。

221～226は口縁部下端を微隆線によって区画するもので、加曾利E4式系統のものと理解できる。また、胴部破片である223～235も同様に考えられる。230～232は磨消縄文の手法を用いる後期初頭称名寺1式に比定できるものである。230～232は同一個体である。236・237は円形刺突文のみが施文されている。238は底部破片である。

239は土器片鏝である。周辺は基本的に打ち欠きのままであるが、使用により多くの部分に摩滅が見られる。溝は、痕跡程度であるが、図下側に一対見られる。

SK019 (遺構：第52図 遺物：第74図240～255)

2F-71グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸148cm、深さ158cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

240～245・251・252は微隆線で区画するものである。240・241は同一個体である。推定口径27.0cm、現存高21.8cmを測る。246・249・253は沈線で区画し、縄文が充填されている。246は口縁部把手部分の破片である。247・250・255は条線のみが見られる。254・255は底部である。

256は口縁部を利用した完形の土器片鏝である。周辺は基本的に打ち欠きのままであるが、使用により多少の摩滅が見られる。溝は痕跡程度であるが、一対見ることができる。

SK020 (遺構：第52図、図版11 遺物：第74図260～263)

2F-52グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸116cm、短軸99cm、深さ21cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

260は口縁部下端を微隆線で区画している。加曾利E4式に比定できる。261は磨消縄文により曲線状の文様を描出している。称名寺1式に比定できる。262は節の細かい単節縄文LRを地文として、沈線及び円形竹管文が施文されている。263は細沈線が曲線状に施文され、刺突文が確認できることから称名寺2式に比定できる。

SK021 (遺構：第53図 遺物：第74図257～259)

2F-70グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸132cm、深さ62cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

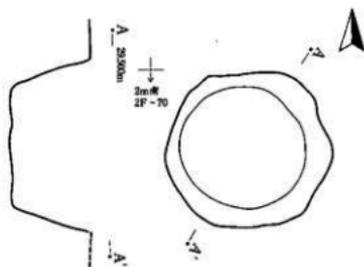
257・259は微隆線による区画内に縄文が充填されるもので、加曾利E4式に比定できる。258は沈線による幅狭の区画内に縄文が充填されている。称名寺1式と考えられる。

SK022 (遺構：第53図、図版11 遺物：第75図279～284)

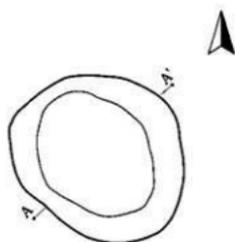
2F-43グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸143cm、短軸124cm、深さ25cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

279・280・282の口縁部内面には稜が見られる。279は口縁部に無文帯が形成されるが、280には口縁部

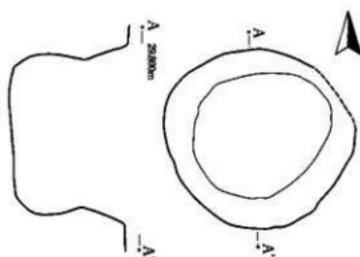
SK021



SK022



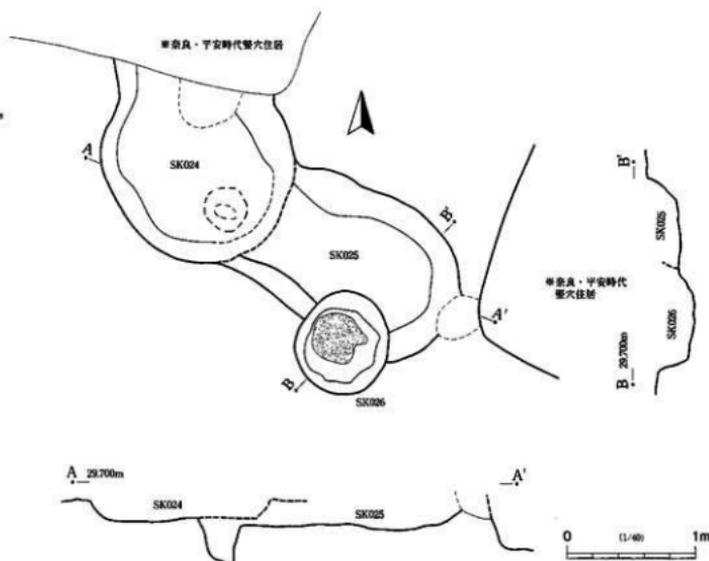
SK023



127-24

SK024  
SK025  
SK026

127-25



第53図 縄文時代土坑(4)

区画が見られない。282は幅狭の沈線区画内に縄文が充填される。いわゆるJ字文が描出され、称名寺1式に比定できる。281は口縁部の区画内に縄文は施文されないが、胴部文様側には縄文が充填されるようである。283は厚手の波状口縁であり、太沈線区画内に縄文が充填されている。

284は土器片錘の破損品と思われる。周縁及び表裏ともに摩滅が激しく判然としないが、称名寺式の土器片を利用していると考えられる。

SK023 (遺構：第53図、図版11 遺物：第76図285～299)

2E-34グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸150cm、深さ91cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と考えられる。

285～287・289～293は微隆線により区画されるものである。286は把手部分の破片である。292は沈線も組み合わせられている。294・295は沈線区画内に縄文が充填される。296～298は底部である。

299は土器片錘である。被熱による器表面の荒れが激しい土器片を使用している。製作は打ち欠きのままである。溝の作出は大雑把であるが、比較的明瞭である。

SK024 (遺構：第53図)

2F-45グリッド付近に位置する。北側は奈良・平安時代の堅穴住居であるSI018が構築されている。推定の平面形は歪んだ楕円形、規模は短軸150cm、深さ18cmほどである。底面はほぼ平坦である。遺物は加曾利E式土器の小片が多数検出された。

SK025 (遺構：第53図 遺物：第75図264～276)

2F-45グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ楕円形になると思われるが、北西側はSK024によって、南側の一部をSK026が後から構築されているため、正確な形状は不明である。なお、SK024は床面が本遺構よりも高かったようであり、SK024の下から検出されたピットは、本遺構に伴うと判断した。規模は短軸が114cm、深さが23cmほどである。底面には緩い凹凸がみられる。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

264～271は微隆線による区画が見られる。264は口縁下端の区画部分に、ほぼ真横に突き出る突起が貼付されている。272・273は沈線による区画内に縄文が充填されている。273は沈線間が幅狭で曲線状の構成となることから、称名寺1式に比定できる。274は歯歯状工具による細い条線を曲線状に施文している。275は底部である。

276は土器片錘である。製作は打ち欠きのままであるが、全体的に使用による摩滅が見られる。溝は比較的明瞭である。

SK026 (遺構：第53図 遺物：第75図277～278)

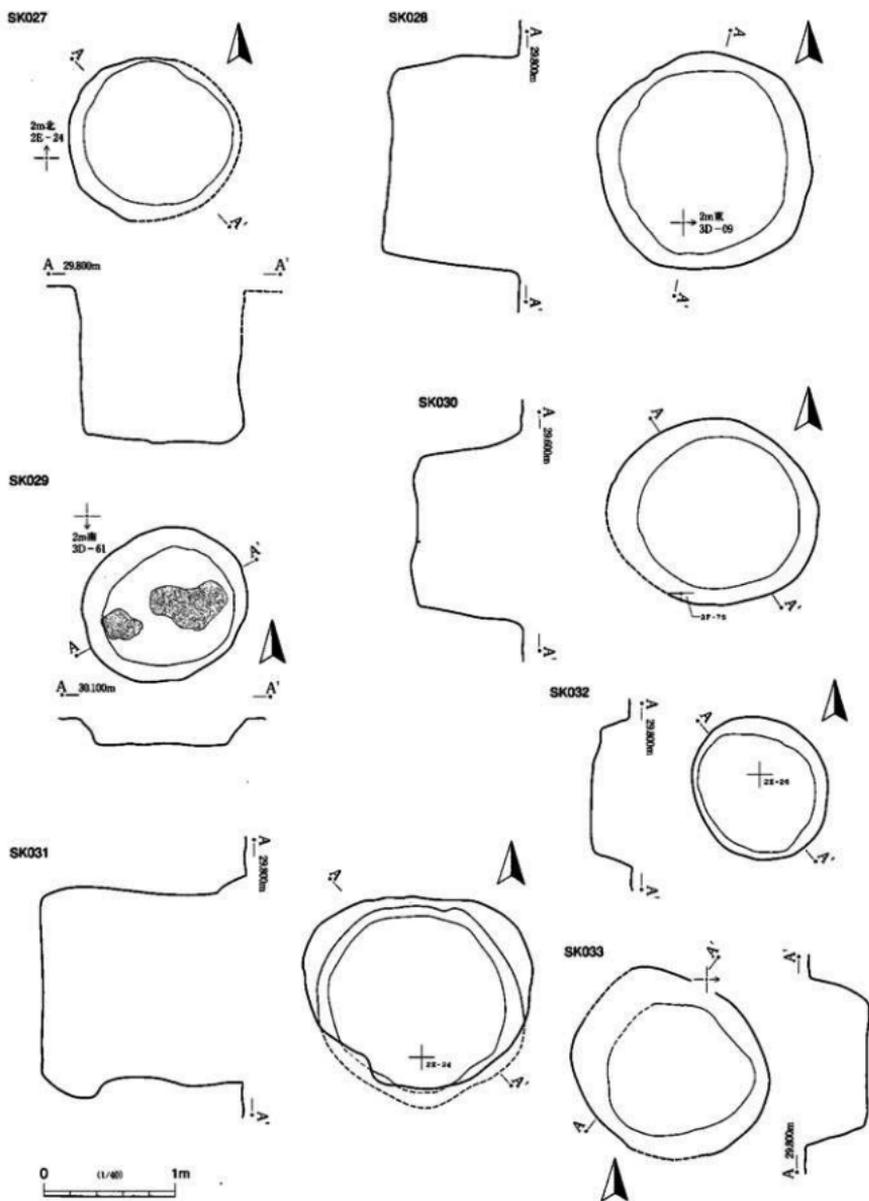
2F-45グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸80cm、深さ31cmほどである。底面はほぼ平坦である。覆土上部には焼土の堆積が見られる。時期は出土土器から加曾利E4式と思われる。

277は微隆線区画の後に縄文が充填されている。比較的薄手の製作である。

278は土器片錘である。被熱により器表面の荒れが著しい縄文のみの破片を利用し、製作は周縁を打ち欠きのままにしている。溝の作出は大雑把であるが、比較的明瞭である。

SK027 (遺構：第54図、図版11 遺物：第76図300～307)

2E-24グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸133cm、深さ118cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。



第54図 縄文時代土坑(5)

300はキャリバー形の器形で比較的小型の土器と思われる。波状口縁であり、波頂部の口唇部上には橋状の小さな把手が、口縁部には渦巻き状の隆帯が貼付される。口縁部がやや内傾することで、その下端には稜が形成され区画の役割をしている。胴部には縄文が施文されるが、他の文様が施文されているかどうかは不明である。胎土中に砂粒は少なく、赤色スコリア粒が多く混入されている。本遺跡においてはやや異質な胎土である。301は口唇上に取り付けられる橋状把手の破片である。302～305は微隆線で、306は沈線でそれぞれ器面を区画するものである。

307は土製有孔円板である。加曾利E式土器の胴部片を利用している。

SK028 (遺構：第54図、図版11 遺物：第77図327～329)

3D-09グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸175cm、深さ107cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式と思われる。

327は器形がキャリバー形の無文の口縁部破片である。328は縄文地上に微隆線が貼付されている。329は無文の底部である。

SK029 (遺構：第54図、図版12 遺物：第77図339)

3D-61グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸132cm、短軸113cm、深さ21cmほどである。底面はほぼ平坦である。なお、覆土上層中には焼土の堆積が見られた。

339は無文の胴部片である。器面調整は、内面ナデ、外面ケズリである。外面のケズリは丁寧に行われ、器表面は平滑で光沢を帯びる。胎土には細砂粒が多く含まれている。

SK030 (遺構：第54図 遺物：第77図330～338)

2F-75グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸164cm、短軸147cm、深さ87cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

330は縄文施文後に、波状の口縁部に沿って凹線を2条施すことで、その間に微隆線を形成している。331は波頂部の口縁部に貼付される突帯である。333は微隆線に沿って円形刺突文を連続して加えている。334は隆線による区画内に縄文を施文している。加曾利E3式か。335・336は沈線区画内に縄文が施文されている。335は曲線状に展開しており、称名寺1式に比定できる。337・338は条線が施文されるものである。338は曲線状に施文されている。なお、特記したもの以外は概ね加曾利E4式に比定できる。

SK031 (遺構：第54図、図版11 遺物：第76・77図308～326)

2E-24グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸178cm、短軸160cm、深さ158cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

308は大きな突起を有する波頂部破片である。「8」の字状に上方へ伸びていくと思われるが、最上部が欠損している。破片自体に煤の付着が見られるが、割れ口にも被熱の痕跡があることから二次焼成をうけたものと思われる。縄文を地文とし、破片左下側には縦位微隆線により区画された幅狭の無文帯が確認される。309～312・316～320は微隆線により区画され、縄文が充填されるものである。311は口縁部下端に沿って円形刺突文が加えられる。315・318・319・321は沈線による区画の後、縄文が充填されるものである。322は条線のみが観察される。以上は加曾利E4式に比定できる。313は幅狭の沈線間に縄文が施文されており、称名寺1式と思われる。323・324は底部である。

325は土製円板である。周縁は打ち欠きのままであるが、丁寧に作出されている。326は形状から土器片鏝と思われる。325と同様に丁寧に打ち欠きされている。いずれも砂粒を多く含む縄文のみが施文されて

いる破片を利用している。

SK032 (遺構：第54図 遺物：第77図340～349、図版30)

2E-26グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸115cm、短軸103cm、深さ31cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

342・344・346・347は沈線区画の後に縄文を施文するものである。346はさらに無文部にミガキを加え、一部沈線及び縄文を磨り消してしまっている。343は低い隆線が無文部と縄文部が区画されている。以上は加曾利E4式に比定できよう。340・341・345は沈線間に縄文が帯状に展開することから称名寺1式に比定できる。348は底部である。

349は土器片鏝である。製作は打ち欠きのままであるが、使用により全体に摩滅が見られる。一か所のみ明瞭な溝が確認できる。

SK033 (遺構：第54図 遺物：第78図350～363)

2E-27グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸156cm、短軸140cm、深さ48cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

350～352は微隆線による区画内に縄文が施文されるものである。353・354は沈線で区画されている。354の縄文は縦位帯状に、間隔を開けながら施文している。355～359は沈線間の帯縄文が、曲線的に展開する。称名寺1式に比定できる。360は曲線状に沈線のみが確認できる。丁寧なナデによる器面調整で、器表面は光沢を帯びる。361・362は底部である。

363は土器片鏝である。打ち欠きのままの製作だが、周縁打撃は丁寧に削り整形されている。溝の作出も明瞭である。使用により全体に摩滅が見られる。

SK034 (遺構：第55図、図版12 遺物：第78図364～383)

2E-87グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸160cm、短軸142cm、深さ161cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式と思われる。

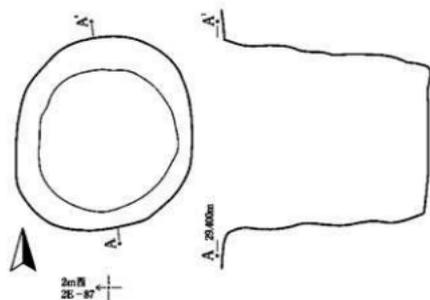
364～383は加曾利E4式に比定できる。364～376は微隆線による区画、377～379は沈線による区画をそれぞれ基本として文様が展開する。370及び371は波頂部ないし突起部の破片である。374・375・378・379は割れ口に意図的な打撃を行って、形を整えようとする意図がうかがわれ、土器片鏝の未製品である可能性もある。382は条線のみが施文されている。383は底部であるが、外面全体に赤彩が施されている。

SK035 (遺構：第55図、図版12 遺物：第79・80図384～430)

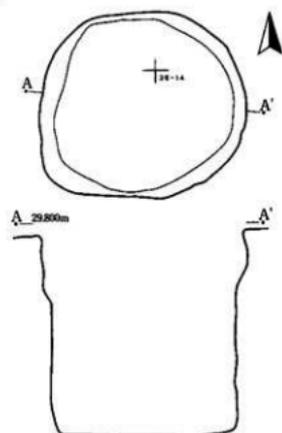
2E-14グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸171cm、短軸156cm、深さ160cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

384～400・403・407～415・422は加曾利E4式に比定できる。386～389は把手部分の破片である。384・385・390～395・398・407～410は微隆線により、411～414は沈線により区画されるものである。409は微隆線による区画内に縄文を充填した後、無文部に縦方向のケズリを加えられる。ケズリは微隆線上にもおよび、微隆線が縄文の一部とともに不鮮明になっている。402・416・417・419は称名寺1式、418は称名寺2式に比定できる。402は口縁部が微隆線で区画され、沈線による区画内に縄文が充填されている。418の沈線間刺突文は、先割れ状工具を斜め方向から刺突することで施文されている。404・405・420・421は後期の堀之内1式に比定される。本遺構では客体的であり、混入と考えたい。404の口縁部内外面にはケズリ調整が施され、光沢を帯びている。また、口縁部内面にはわずかに凹線状のものが認めら

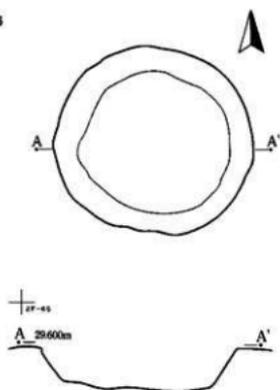
SK034



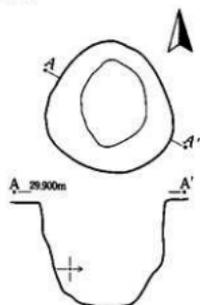
SK035



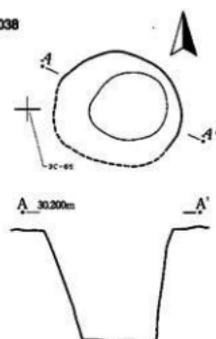
SK036



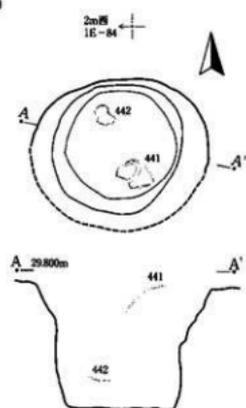
SK037



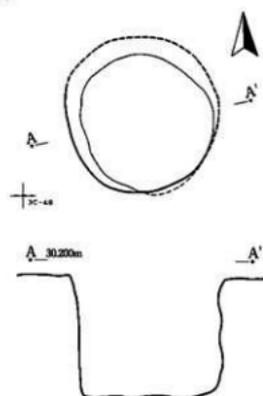
SK038



SK039



SK040



0 (1/40) 1m

第55図 縄文時代土坑(6)

れる。406は薄手の器壁であり、全体の湾曲度も高いことから、注口土器等の胴部片と思われる。微隆線による曲線的文様のみられ、赤彩の痕跡も確認できる。器面調整はケズリを丁寧にっており、黒色を呈する外面は光沢を帯びている。

426・427は土器片鏝である。打ち欠きのままの製作であるが、溝は明確に深く作出されている。427は図右側の大半を欠損している。溝は明確でないが、全体的に使用による摩耗が見られる。428～430は土製円板である。いずれも基本的に打ち欠きのままの調整があるが、かなり細かく行き、形を整えている。

SK036 (遺構：第55図 遺物：第80・81図431～440)

2F-65グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸154cm、深さ34cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から称名寺式1式期と思われる

431は波状口縁の波頂部の破片である。ローソク状にのびた突起が内湾し、その先端には横方向の切り込みが入れられており、鳥のくちばしを表現しているものとも思われる。さらに側面には細い円形刺突文を連続して施文している。全体としてこの装飾は鳥頭状になると思われる。

438～440は土器片鏝である。438はかなり使用したためか、全体が摩滅している。439はほとんど外面からの打撃で形状が整えられている。440はかなり丁寧に打ち欠いている。

SK037 (遺構：第55図、図版12 遺物：第81図448)

2C-76グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸103cm、深さ83cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から堀之内1式期と思われる。

448は後期の堀之内1式土器である。縄文地上に沈線が蛇行しながら垂下している。

SK038 (遺構：第55図、図版9・12 遺物：第81図449)

3C-65グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸100cm、短軸推定88cm、深さ90cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる

449は加曾利E4式土器である。区画内に縄文を充填し、無文部にミガキを加えている。

SK039 (遺構：第55図、図版12 遺物：第81図441～447、図版30)

1E-84グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸推定138cm、短軸推定119cm、深さ98cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる

441は胴上部のみの残存で、推定口径が41.6cmで、現存高が17.4cmを測る。442は底部片であり、底径が7.0cm、現存高が6.6cmを測る。沈線による区画後に単節縄文RLを施文している。外面には被熱による器表面の荒れが見られる。443・444は同一個体である。微隆線で区画し縄文を充填している。445・447は沈線で器面を区画している。446は薄手の製作で指頭圧痕を顕著に残すため、器表面は凹凸に富む。胎土には砂粒を多く含む。手捏ねの用途不明土製品の可能性もある。

SK040 (遺構：第55図 遺物：第81図450～453)

3C-48グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸推定122cm、深さ94cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる

450は厚手の製作で、比較的大型の土器と思われる。把手部分が剥落している。文様は微隆線と単節縄文RLが見られる。451・452は微隆線区画内に、453は沈線区画内に縄文が充填されている。

SK041 (遺構：第56図 遺物：第81・82図454～468)

2E-94グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸150cm、短軸119cm、深さ147cmほど

である。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる

454・456・459・462・464は微隆線区画を行い縄文を充填するものである。464は縄文施文後、微隆線に沿って一条の沈線を加えている。463は沈線区画によるものである。457・458は無文の口縁部破片である。458は色調が明褐色で、胎土中の砂粒は少量である。器面調整はケズリで、特に内面を丁寧にやっている。本遺構中では異質な特徴である。

465・468は土器片鏝である。465・466には明確な溝が認められる。周辺調整は基本的に打ち欠きのままであるが、465・468は使用による摩滅が認められる。467はかなり丁寧に打ち欠きを行い、使用による摩滅が加わっているため、意図的に磨いたようにも見える。

SK042 (遺構：第56図、図版12 遺物：第82図469～474)

3E-05グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸138cm、短軸122cm、深さ125cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる

469～471は微隆線で口縁部を区画している。471は微隆線直下に斜め下方向からの刺突を加えている。また、沈線で区画し縄文を充填している。473は沈線で、474は微隆線で区画し、縄文を充填している。

SK043 (遺構：第56図、図版12 遺物：第82図475～481)

2E-95グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸155cm、深さ84cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる

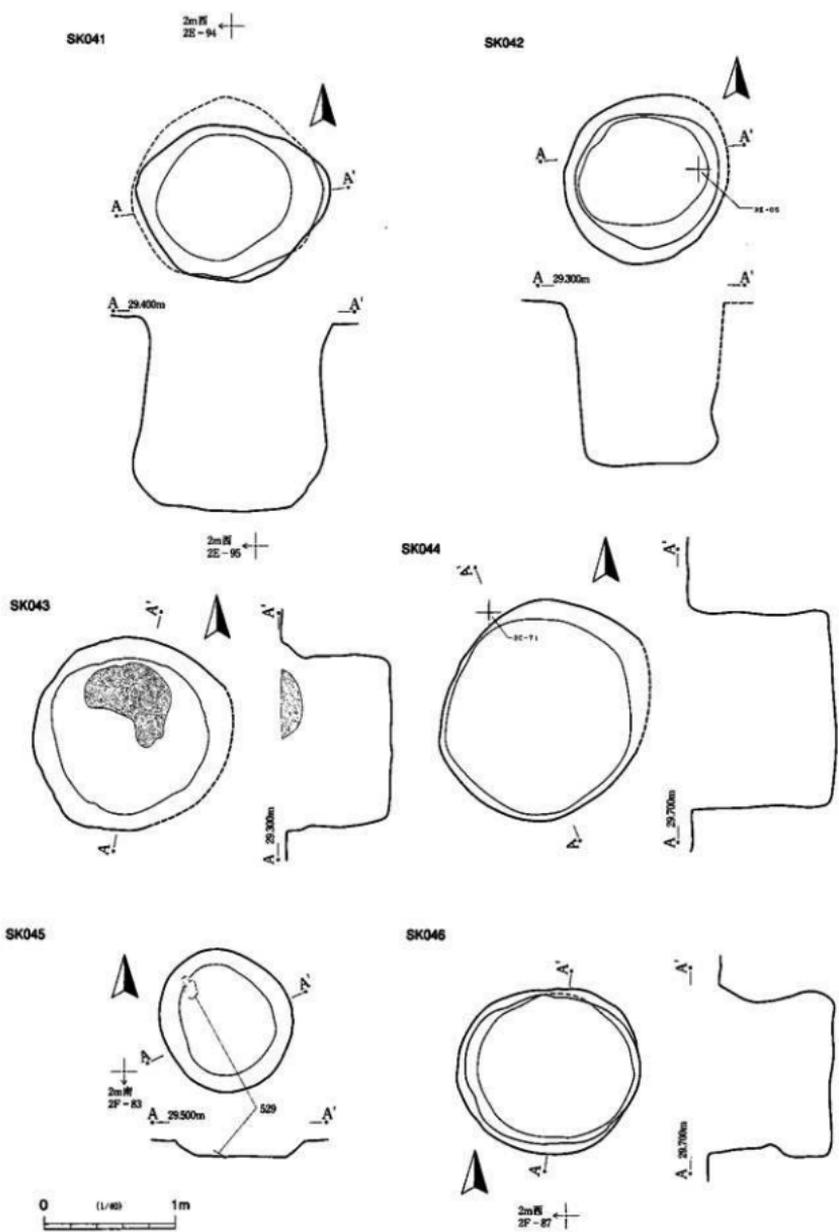
475・477～479は微隆線で区画し縄文を充填している。480は厚手の製作で、単節縄文LRのみが施文されている。476は口縁部に隆線を貼付し、渦巻文を施文している。口縁部の断面形態は先尖状で内面に稜が形成されている。

481は土器片鏝である。形状はやや不整形である。周縁は基本的に打ち欠きのままであるが、使用により全体に摩耗が見られる。その摩耗の状態の差から、図右側を破損とした。だが、破損面も少々の摩耗が見られ、破損後も使用を継続していた可能性もある。溝は比較的明瞭なものが、図左側に見られる。

SK044 (遺構：第56図、図版13 遺物：第83・84図496～528)

3C-71グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸177cm、短軸154cm、深さ113cmほどである。底面はほぼ平坦である時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

496はキャリパー形の器形で、4単位の小突起を持つ口縁である。推定口径が19.4cm、現存高が13.2cmを測る。口縁部は微隆線によって区画され、器面は沈線で大きな波状に区画され、縄文が充填されている。器面調整は縄文施文前に行われ、内外面とも比較的丁寧なケズリにより光沢を帯びる部分も見られる。内面の口縁部を除き、焦げの付着が見られ、煮炊き等に使用されていたと思われる。497～499・505は口縁部を微隆線で、500は沈線で区画している。なお500の沈線の上下には浅い円形刺突文が連続して施文されている。505は微隆線下にやや斜め方向からの刺突文を加えている。501～504は把手部分の破片である。506・508は比較的小型の土器と思われる。506は波状口縁をなし、沈線区画内に縄文を充填している。508は口縁部内面が大きくせり出し、文様は見られない。内外面には赤彩の痕跡が認められる。507は口縁部に爪形文が連続して施文されている。509・510・512・513は微隆線で区画するものである。510・512は、さらに微隆線に沿って沈線が加えられる。511・514515は沈線区画内に縄文が充填されている。514は胴下半部の破片であるが、拓影図上側1/3～1/4が黒褐色、下側2/3～3/4が暗褐色から暗灰褐色であり、煮炊き利用の痕跡と思われる。なお、内面は暗灰褐色から黒褐色である。516・517は条線が施文されている。



第56図 縄文時代土坑(7)

517は縦位波状に施文される。518・519は底部である。

520～527は土器片鏝である。520～523は完形ないしそれに近いものである。製作は基本的に打ち欠きのままであるが、522・526は使用による摩耗が見られる。527は丁寧に打ち欠きされており、使用による摩耗が加わって、周辺は滑らかになっている。いずれも溝は明瞭に作出されている。528は三角柱状の用途不明土製品である。角部は丸みを帯びるように製作され、丁寧にナデ調整も加わり、器表面は平滑である。胎土には砂粒を含んでいるが、本遺構出土の土器片に比べるとやや少量である。

SK045 (遺構：第56図 遺物：第84図529～531)

2F-83グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸110cm、深さ13cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

529は薄手の製作で、胴部に大きな膨らみを持つ器形である。文様は曲線状の微隆線のみが確認できる。530・531は同一個体である。無節縄文Lが全面に施文されている。胎土には砂粒を多く含む。

SK046 (遺構：第56図 遺物：第84・85図532～540)

2F-87グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸143cm、短軸127cm、深さ92cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

532は微隆線文が展開し、曲線状の文様を描出するものである。加曾利E4式である。533は沈線で幅狭に区画した部分に縄文を施文し、曲線状ないし幾何学状の文様となるものである。称名寺1式に相当する。534は口縁部に貼付される曲線状の突帯部分の破片である。537は沈線区画後に縄文が施文されている。535・536は同一個体である。口縁部付近は横位に、胴部は縦位に帯状の縄文を施文している。538は厚手の製作であり、縄文のみが見られる。539は底部である。

540は手捏ねの用途不明土製品である。砂粒をやや多く含む胎土であり、褐色を呈する。

SK047 (遺構：第57図、図版13 遺物：第85図545～557)

3E-14グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸150cm、深さ148cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

545は環状突起をもつ口縁部破片である。口縁部には爪形の突起が巡り、下端は微隆線によって区画される。胴部は沈線を施文後に縄文を加えている。546～555は微隆線で、556は沈線でそれぞれ区画し、縄文を施文している。557は縦位方向の条線のみが観察される。

SK048 (遺構：第57図 遺物：第85図558～568)

1E-98グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸168cm、深さ75cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

558・559・561は微隆線で、562は沈線でそれぞれ区画し、縄文を施文している。563・564は底部である。

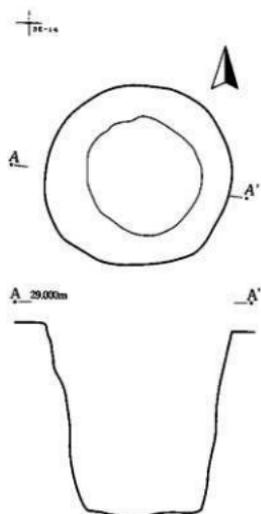
565～567は土器片鏝である。いずれも製作は打ち欠きのままであるが、使用により周縁には摩滅が見られる。567には溝が認められないが、565及び566では明瞭に作出されている。568は土製円板である。縄文のみが施文されている土器片を用いている。周辺は軽く研磨しているが、製作時の凹凸を残す。

SK049 (遺構：第57図 遺物：第86図583～587)

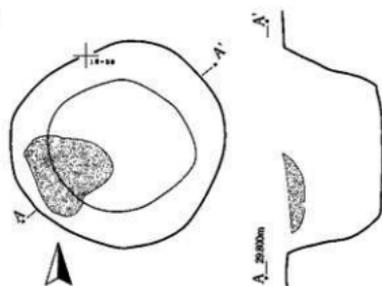
1F-93グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸185cm、短軸173cm、深さ80cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

583は微隆線により、584・585は沈線により器面を区画し縄文を加えるものである。

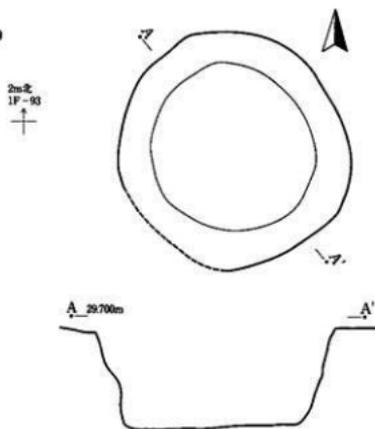
SK047



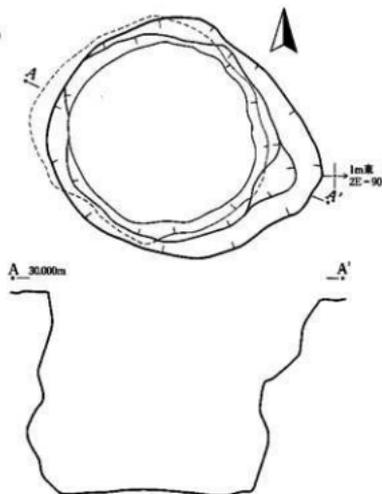
SK048



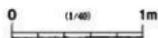
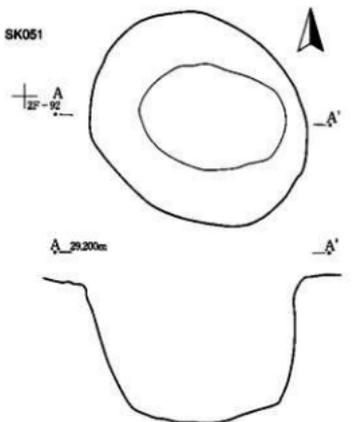
SK049



SK050



SK051



第57図 縄文時代土坑(8)

586・587は土器片鏟である。製作は打ち欠きのままであるが、588はやや丁寧に打ち欠いている。溝は比較的明瞭である。

SK050 (遺構：第57図、図版13 遺物：第86図569～582)

2E-90グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸215cm、短軸185cm、深さ157cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

569は口縁部下端を微隆線によって区画する。572・573は胴部に微隆線が施文される。574・575は微隆線区画後に縄文を施文し、微隆線に沿って縄文側に凹線を加える。そして無文部にのみミガキを施すが、微隆線及び一部の凹線内にも施され、微隆線はかなり目立たなくなっている。572は口縁部下に指頭圧痕を巡らしている。その下には無節縄文しを施文している。571は口縁部付近で外反の度合いが強くなっている。外面には、条線が器面全体に縦位施文されている。576は粗い縄文を施文後にナデを加え、一部磨り消している。内面調整は丁寧にケズリが施され、器面は平滑である。577は単節縄文RLを地文として、ミガキ調整に用いるようなヘラ状工具で浅い凹線を加えている。578は条線を波状に施文している。579・580は底部である。

581・582は土器片鏟である。583は打ち欠きのままで、形状も不整形であるが、溝の作出は明瞭である。582の打ち欠きは丁寧に行われ、形状も整えているようだが、破損部分が多く溝等も不明である。

SK051 (遺構：第57図 遺物：第86図588・589)

2F-92グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸179cm、短軸150cm、深さ113cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

588は比較的小型の土器と思われる。口縁部を沈線によって区画し、胴部側に縄文を施文する。そして区画沈線の上下に先尖状工具による円形刺突を浅く加えている。589は微隆線が突起状に肥大化する部分の破片である。

SK052 (遺構：第58図 遺物：第86図590～594)

2F-33グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸153cm、深さ87cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

590は微隆線により、591は低い稜により、587は沈線により口縁部が区画され、縄文が施文されている。593は縄文地上に沈線を加えている。594は条線が波状に施文されている。

SK053 (遺構：第58図 遺物：第86図595～597)

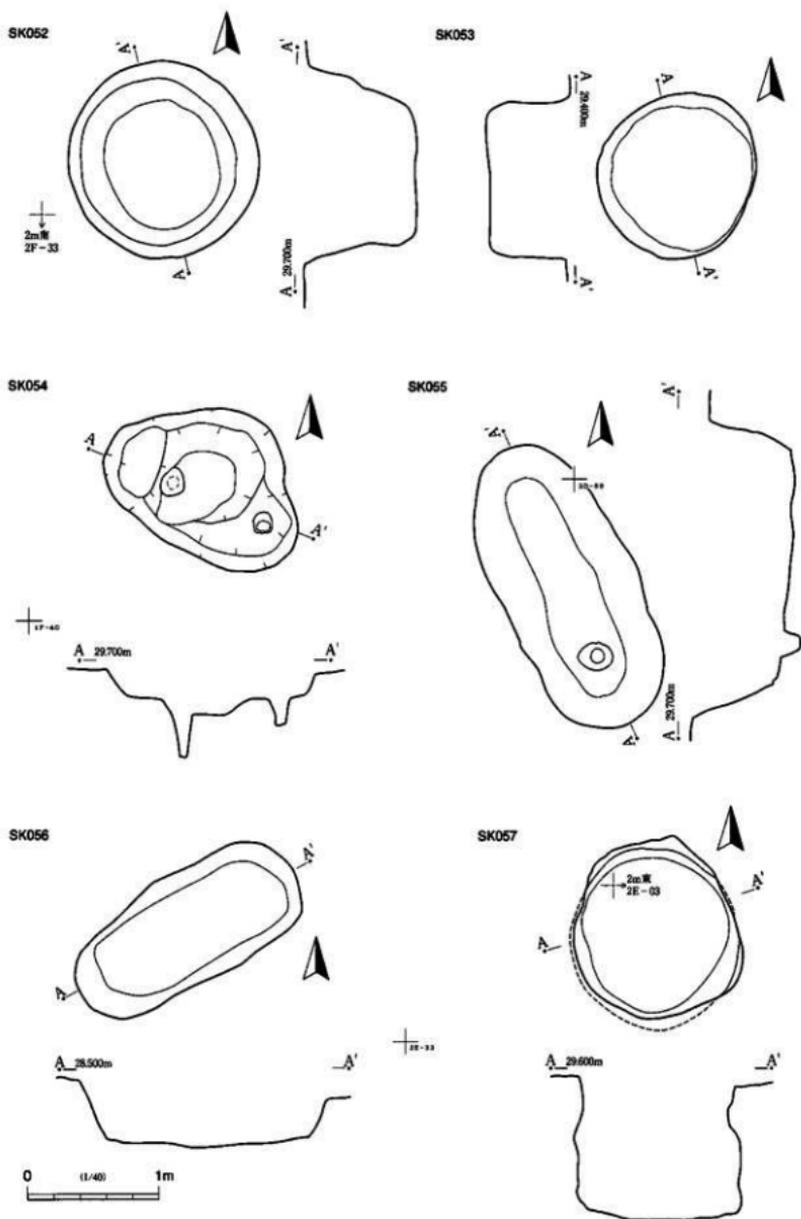
2F-70グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸131cm、短軸120cm、深さ64cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

595・597は微隆線で区画し、縄文を加えるものである。596は比較的小型の土器と思われる。沈線で幅瀬間に区画された内部に縄文を充填している。

SK054 (遺構：第58図、図版13 遺物：第86・87図598～604)

1F-40グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ楕円形、規模は長軸162cm、短軸116cm、深さ35cmほどである。底面には凸凹がある。時期は出土土器から称名寺2式から堀之内1式期と思われる。

598は大きくひらく鉢形土器である。無文で、指頭圧痕を顕著に残す製作である。外面はナデ、内面は粗い横方向のケズリによって調整される。胎土は砂粒を少量含む。599は口縁部に単節縄文LRが施文される。600は無文の口縁部破片であるが、外面に横方向の粗いケズリが施されている。601・604は条線が



第58図 縄文時代土坑(9)

施文されるものである。602は粗い曲線状の沈線と浅く明確でない斜め方向からの刺突文が確認できる。603は遺構外出土遺物と接合した。接合図は第116図238を参照されたい。

SK055 (遺構：第58図、図版13)

2D-58グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、規模は長軸230cm、短軸107cm、深さ70cmほどである。底面には凸凹がある。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

SK056 (遺構：第58図)

3E-33グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、規模は長軸189cm、短軸86cm、深さ47cmほどである。底面はほぼ平坦である。

SK057 (遺構：第58図 遺物：第87図605～613)

2E-03グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸143cm、短軸133cm、深さ109cmほどである。底面はほぼ平坦である。

605は波状口縁の波頂部突起部分の破片である。上面は浅い皿状となり、両脇からは口縁部を区画する微隆線がのびている。地文に単節縄文LRが施文されている。606～609・611・612は微隆線により区画し、縄文を施文するものである。606は緩い波状口縁の波頂部付近だが、突起部分が剥落している。610は沈線で区画している。薄手の製作で、内面には赤彩の痕跡が認められる。615は底部である。

SK058 (遺構：第59図 遺物：第87図614、図版39)

1E-95グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸172cm、短軸142cm、深さ57cmほどである。底面には凸凹がある。

614は大型深鉢の胴部破片である。現存部位の推定最大径は46.5cmを測る。沈線による区画内に単節縄文LRを充填している。内面には被熱の影響と思われる器表面の剥落が顕著である。

SK059 (遺構：第59図、図版13 遺物：第87図615～618)

1E-96グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸150cm、深さ54cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

615は4単位の緩い波状口縁となる。推定口径は28.4cmを測る。微隆線によって口縁部及び胴部を区画して単節縄文RLを充填している。器面は内外面ともに暗褐色から黒褐色であり、被熱によると思われる荒れが観察される。616は口縁部下端を微隆線によって区画するものである。617は条線のみ、618は縄文のみが施文されている。

SK060 (遺構：第59図 遺物：第87・88図619～625)

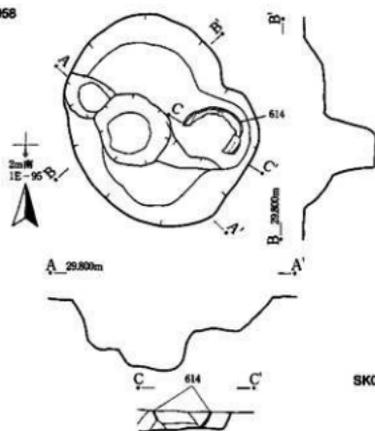
1E-85グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸推定120cm、深さ28cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

619～621・623・624は微隆線で区画し縄文を充填するものである。625は沈線と縄文が確認される胴部破片である。比較的薄手の製作で、器面は丁寧にナデ調整される。胎土中の砂粒は少量で、堅致な焼成である。622は器面を沈線で区画した後、縄文を施文している。縄文は口縁部をはじめとして、幅1.5cm前後である帯状部分に施文される。内削ぎ状の口縁部形態をなし、口縁部内面には稜が形成される。

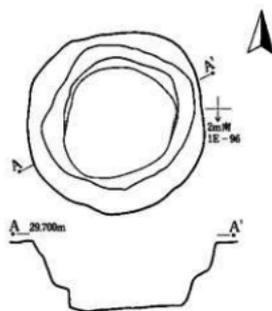
SK061 (遺構：第59図、図版13 遺物：第88・89図626～642、図版30)

2F-89グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸推定160cm、深さ128cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

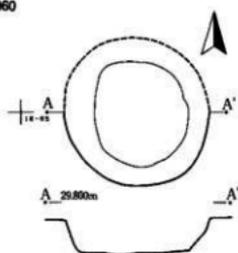
SK068



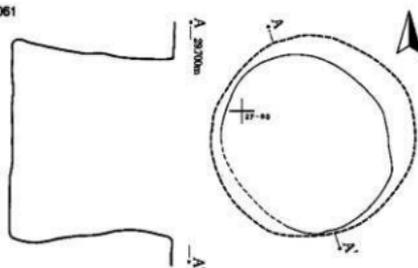
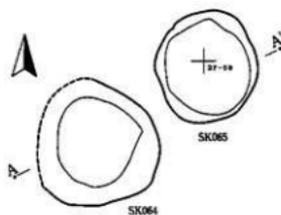
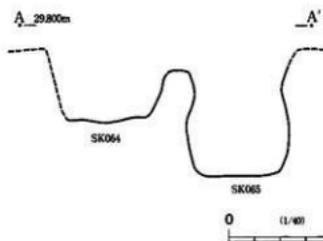
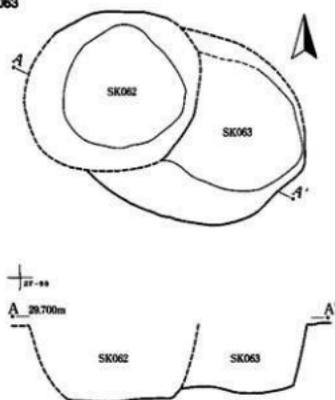
SK059



SK060



SK061

SK064  
SK065SK062  
SK063

0 (1/40) 1m

第59圖 縄文時代土坑(10)

626～631は口縁部下端をはじめとして微隆線による区画後に縄文が施文されるものである。632・633は底部に近い部分であり、縄文のみが観察される。632は器壁の厚さが2.0cm～2.5cmにもなり、かなりの大型土器になるとされる。内面は比較的丁寧なナデ調整が施され平滑である。外面は軽いナデ調整のみで、器面の凹凸を完全に除去しないまま縄文を施文している。底部近くは器表面が薄くは暗くしているように観察されるが、焼成時のものか使用時のものか判然としない。634は櫛歯状工具による細い条線が施文されている。

636～642は土器片鏝である。いずれも基本的に打ち欠きのままの製作であるが、637・640を除き、かなり丁寧な打ち欠きで整形している。638・639・641・642は使用による摩耗が見られる。特に639の摩耗は著しく、周縁はかなり滑らかになっている。

SK062・SK063（遺構：第59図、図版13 遺物：第89図643～650）

2F-89グリッド付近に位置する。調査の結果、2基の重複と判明した。SK062がSK063の上に構築されたものと思われる。SK062は平面形は歪んだ円形で、直径は130cm前後であり、深さは60cmほどである。底面はほぼ平坦である。SK063の平面形はやや歪みのある楕円形と推定される。短軸は146cmほどである。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式1期と思われる。なお、遺物の面からSK062・SK063の新旧を分離することはできなかった。

643～645は口縁部の下端を微隆線ないし沈線で区画している。646は器表面の荒れが激しく判然としなが、微隆線区画と縄文が組み合わされる個体と思われる。647は帯状に沈線で区画された内部に節の細かな単節縄文LRを施文する。648は縄文のみが施文される。649は底部である。

650は土製円板の一部と思われる。

SK064（遺構：第59図）

2F-58グリッド付近に位置する。SK168の北西側に隣接する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸推定101cm、深さ57cmほどである。底面はほぼ平坦である。

SK065（遺構：第59図 遺物：第89図651～653）

2F-58グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸90cm、短軸79cm、深さ99cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から称名寺1式期と思われる。

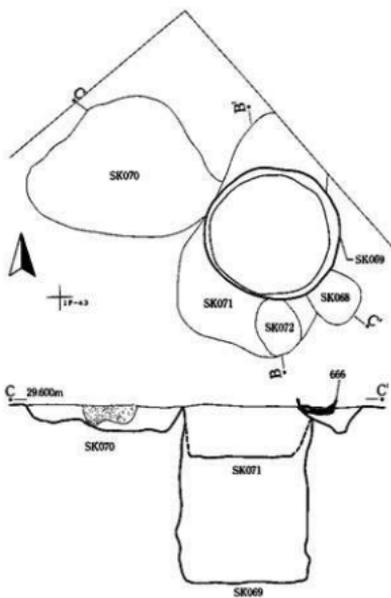
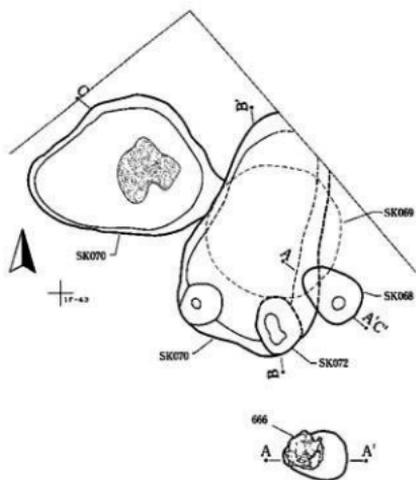
651～653は沈線で帯状区画され、縄文が施文される。652・653の区画は曲線状になるようである。

SK066（遺構：第60図 遺物：第89図654～661）

1E-95グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸113cm、深さ55cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

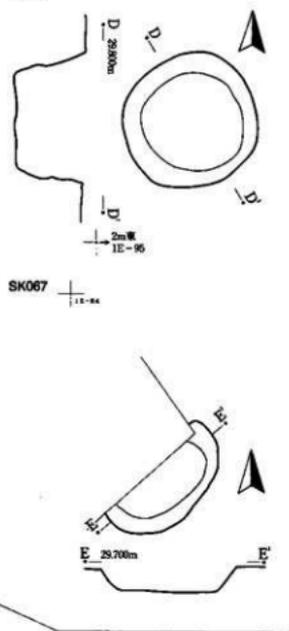
654は推定口径26.6cmを測る。口縁部下に2条の沈線が巡る。拓影図中央部付近では上方の沈線が舌状に垂れ下がる部分が見られる。沈線間のみが無文となり、残りの全面に単節縄文RLが施文される。655は口縁部に一条の沈線が見られる。656～657は比較的薄手の器壁の口縁部である。656は外削ぎ状の断面形態をなし、口縁部直下に稜が形成されている。口縁部は無文となり、胴部には縄文施文される。657は横方向の浅い条痕が口縁部に施文されている。658は微隆線で、659は沈線でそれぞれ区画した内部に縄文を施文している。660は2条の曲線状の沈線を施文後、ややランダムに縄文を施文している。661はJ字状の沈線間に縄文を充填している。無文部には縦方向のケズリ調整が施されている。656・658・659は加曾利E4式に、660・661は称名寺1式にそれぞれ比定される。

SK068  
SK069  
SK070  
SK071  
SK072

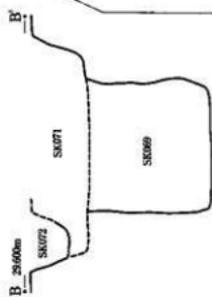
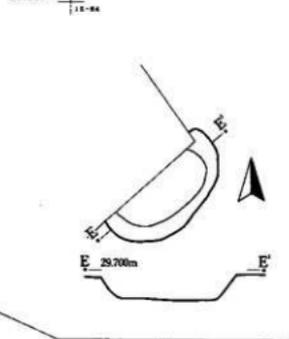


0 (1-40) 1m

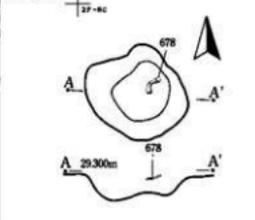
SK066



SK067



SK073



第60図 縄文時代土坑(1)

SK067 (遺構：第60図 遺物：第89・90図662～665, 図版31)

1E-84グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、規模は長軸104cm、短軸現存44cm、深さ19cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から称名寺1式期と思われる。

663は微隆線によって器面が区画され、縄文が充填されるものである。加曾利E4式に比定される。664は垂下する微隆線が途中でとぎれているものである。また、微隆線の貼付後縄文を施文している。662と665は同一個体の可能性がある。沈線による帯状区画の内部に縄文が施文され、曲線状に展開することから称名寺1式土器に比定される。

SK068・SK069・SK070・SK071・SK072 (遺構：第60図 遺物：第90図666～677, 図版31)

1F-43グリッド付近に位置する。大小5基の土坑の重複である。切り合い関係等から新旧を判断すると、古い順にSK069→SK071→SK068・SK072となる。焼土の見られるSK070は切り合い関係が不明なため、新旧の判断ができなかった。SK068の平面形は歪んだ楕円形、規模は長軸51cm、短軸38cm、深さ20cmほどである。底面には凸凹がある。SK069の平面形はほぼ円形、規模は長軸105cm、深さ191cmほどである。底面はほぼ平坦である。SK070の平面形は不整形、規模は長軸153cm、短軸111cm、深さ20cmほどである。底面には凸凹がある。SK071の平面形は歪んだ楕円形、規模は長軸現存180cm、短軸109cm、深さ46cmほどである。底面はほぼ平坦である。SK072の平面形は歪んだ楕円形、規模は長軸45cm、短軸34cm、深さ30cmほどである。底面はほぼ平坦である。遺物はSK068・SK069から出土したものを図示した。他は小片が少量出土したのみである。いずれも時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

666・667はA内から出土したものである。666はキャリバー形の器形であり、図最上部すなわち現存の最大径は32.5cmほどである。底部付近を除き、無節縄文Rをほぼ全面に施文している。器面を見る限り、煮沸等の痕跡は見られない。667は沈線の内側に縄文が施文されている。

668～677はB内から出土したものである。668～671・673は微隆線の、674は沈線の区画内にそれぞれ縄文が施文されるものである。672は緩い波状口縁の波頂部破片である。波頂部口唇部には丸棒状工具による円形刺突が施文される。口縁部付近には刺突文が連続的に施文されている。口縁部内部には後が形成されている。675～677は条線のみが施文されている。

SK073 (遺構：第60図 遺物：第90図678)

2F-80グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸84cm、短軸70cm、深さ21cmほどである。底面には凸凹がある。

678は底部である。底径は7cmほどである。文様は認められない。器表面の荒れが著しいが、煮沸使用の結果がどうか疑問である。

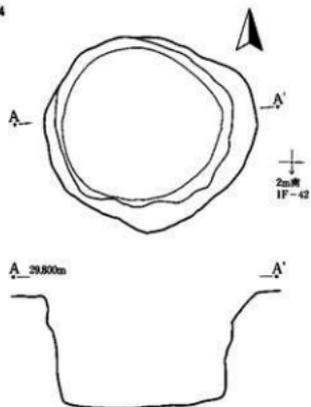
SK074 (遺構：第61図 遺物：第91・92図701～712)

1F-42グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸165cm、短軸155cm、深さ89cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

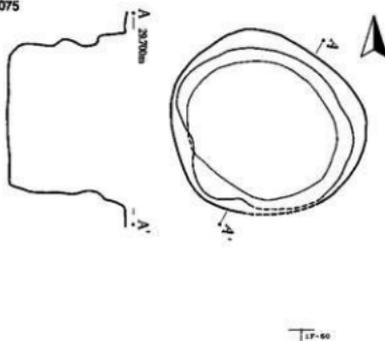
701～705・708は微隆線で区画し、縄文を充填するものである。706は把手部分の破片である。707は沈線を施文した後縄文を全体に施している。709・710は底部である。709は内面が、710は内外面ともに黒褐色である。

711・712は土器片錘である。製作は打ち欠きのままであるが、丁寧に整形されている。711の溝は深く明瞭に形成されている。712は縁辺がやや丸みを帯びる形状である。

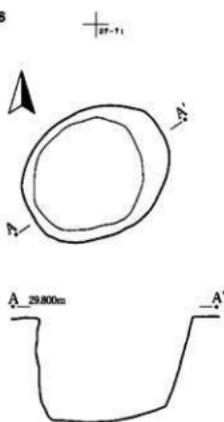
SK074



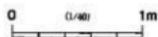
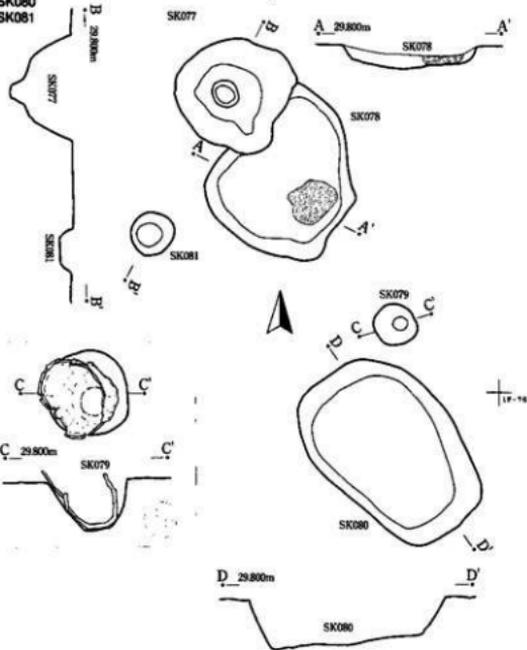
SK075



SK076



SK077  
SK078  
SK079  
SK080  
SK081



第61図 縄文時代土坑12

SK075 (遺構：第61図 遺物：第92図713～721)

1F-60グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸155cm、短軸144cm、深さ92cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

713～715・718は微隆線で、717・719は沈線でそれぞれ区画するものである。716は把手部分が剥落した胴部破片である。720は櫛歯状工具による波状の条線が施文されている。721はミニチュア土器である。推定口径は約5cmである。

SK076 (遺構：第61図 遺物：第92図722～730)

2F-71グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸119cm、短軸97cm、深さ81cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

722・723は口縁部を沈線で区画し、胴部側に縄文を加えるものである。725は微隆線の両脇に、縄文の上から沈線を加えている。726は縄文地上に沈線を施文している。727は縦位の沈線を施文した後に縄文を施している。728・729は条線が施文されている。730は底部である。

SK077・SK078・SK079・SK080・SK081 (遺構：第61図 遺物：第91図679～700、図版31)

1F-76グリッド付近に位置する。隣接して大小5基の土坑が確認された。重複しているのはSK077とSK078のみであり、他はそれぞれ独立している。SK077とSK078では、切り合いの状況からSK078の後にSK077が構築されたものと判断できた。SK077の平面形は歪んだ円形、規模は長軸92cm、深さ48cmほどである。底面は有段となり、中央部がくぼんだような断面形になっている。SK078の平面形は歪んだ円形、規模は長軸140cm、短軸114cm、深さ18cmほどである。底面はほぼ平坦である。SK079の平面形はほぼ円形、規模は長軸35cm、深さ20cmほどである。底面はほぼ平坦である。SK080の平面形は歪んだ長方形、規模は長軸155cm、短軸104cm、深さ40cmほどである。底面はほぼ平坦である。SK081の平面形はほぼ円形、規模は長軸35cm、深さ10cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器からSK077・SK078が加曾利E4式期、SK079が加曾利E4～称名寺1式期、SK080が称名寺2式から堀之内1式期と思われる。

679～682はSK077内から出土したものである。いずれの資料も遺存状態があまり良くない。679・681は縄文のみが施文されている。680は口縁部下端を区画するような横位沈線と器面を区画する縦位沈線が確認できる。682は条線のみが施文されている。

683～686はSK078内から出土したものである。683は微隆線により口縁部付近を曲線状に区画している。破片下側の区画内には縄文を充填している。684は口縁部が無文となり、弱い稜で区画され胴部に単節縄文LRが施文されている。685は沈線区画後に縄文が施文されている。686は縄文のみ施文される。

687～692はSK079内から出土したものである。687は遺存率95%で、口径が26.0cm、底径が6.0cm、器高が35.1cmを測る。口縁部は無文となり、下端は微隆線で区画される。底部付近を除き、胴部全体に単節縄文RLを施文している。色調にはむらが見られるものの、外面では下からの高さが15cmほどまでは褐色、口縁部まで黒褐色となる。内面は下から5cmほどまでは灰黄褐色、12cmほどまでは黒褐色、口縁部までは暗灰褐色から黒褐色である。よって煮沸に使用された可能性は強いが、さほど器表面の荒れが認められないことから、頻度がさほど高くないものと思われる。688・690は微隆線で、689は沈線でそれぞれ区画し縄文を充填するものである。以上の資料は加曾利E4式に比定できる。691・692は幅狭の沈線間に縄文を施文しており、称名寺1式に比定できる。

693～700はSK080内から出土したものである。693はやや幅広の浅い沈線が施文されている。694・699

は沈線間に刺突文を加えるものである。695は刻みを有する隆線が垂下している。696は把手部分の破片である。697は横位方向に隆線が貼付されている。698は外削ぎ状の口縁部の破片で、竹管による円形刺突が口縁部に加わる。700は格子目状の沈線が施される。以上の資料は694・699が称名寺2式に比定できる。ただし、699を見ると沈線区画内を充填するように刺突文を加えている。称名寺2式の中でも新しい要素、若しくは堀之内1式土器の古い部分に対応する資料であろうか。他は判然としない部分も多いが、概ね堀之内1式に対比される。

SK082 (遺構：第62図、図版14 遺物：第95図788～803)

5D-33グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸133cm、短軸推定117cm、深さ83cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

788～791は口縁部下端を微隆線によって区画している。788は口縁部が内傾することによって稜を作出し、微隆線状にして区画としている。その直下には斜め下方向からの刺突列が施文される。胴部は沈線により区画された後に縄文が施文されている。794・795は沈線で、796～798は微隆線で区画し、縄文が施文されている。792・793は無文の口縁部破片である。799は疎らな縦位方向の細沈線のみが確認される。800は条線のみである。801・802は底部である。

803は土器片鏝である。打ち欠きのままの製作である。溝は比較的明確で、断面にひもをかけたと思われる部分に磨り減りがみられる。

SK083 (遺構：第62図、図版14 遺物：第95図804～807)

5C-47グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸132cm、深さ120cmほどである。底面には凸凹がある。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

804は微隆線で、805・807は沈線で区画し、縄文が施文されるものである。806は底部近い破片であり、拓影図左側に隆線の痕跡らしきものが見られる。隆線及び縄文の施文後にケズリ調整を加え、隆線及び縄文の上からも部分的にケズリが加わり、特に隆線は痕跡程度になったと思われる。

SK084 (遺構：第62図 遺物：第97図836～839)

5D-16グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸137cm、短軸123cm、深さ99cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

836は推定口径27.6cmを測る深鉢である。口縁部は無文で、粗い凹線を加えることで低い段が作出され、その下の縄文帯と区画している。胴上部には比較的粗い撚りの単節縄文RLが施文される。全体として粗い作りで、器面には凹凸が顕著に残る。837は波頂部に環状把手が見られる。口縁部は無文となり、胴部は細沈線による鋸歯状の区画の後に、縄文が施文されている。838は微隆線で区画し、縄文を充填する。

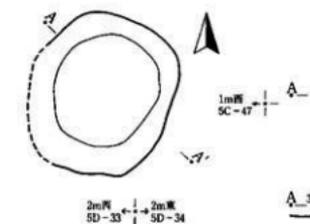
839は土器片鏝である。打ち欠きにより溝が作出されている。特に図左側の溝幅は広い。

SK085 (遺構：第62図 遺物：第96・97図827～835)

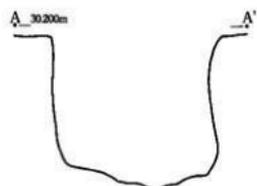
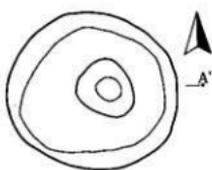
5D-19グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸177cm、短軸142cm、深さ95cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

830～832・834は微隆線で区画し縄文を充填するものである。827は口縁部下端は微隆線で区画されるが、胴部は沈線で区画している。828・829は同一個体である。緩い波状口縁であり、口縁部付近は無文、胴部全体に単節縄文LRが施文されている。833は薄手の器壁である。文様は一条の斜沈線のみが観察される。835は条線のみが施文されている。

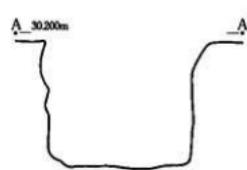
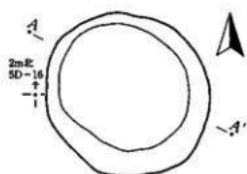
SK082



SK083

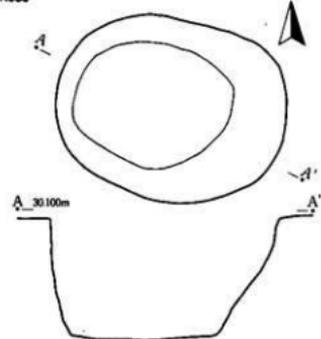


SK084

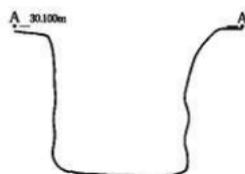
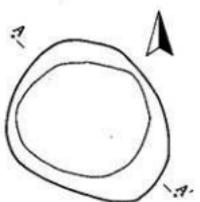


+SD-19

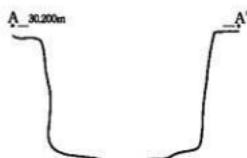
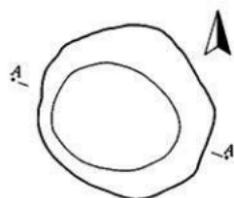
SK085



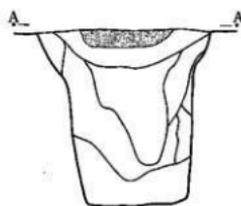
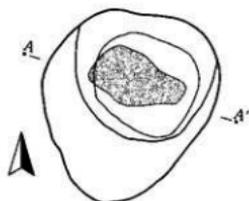
SK086

1m北  
SD-17

SK087

2m東  
SD-15

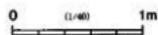
SK088

2m北  
SD-06

SK089



+SE-34



第62図 縄文時代土坑13

SK086 (遺構：第62図、図版14 遺物：第95・96図808～824)

5D-17グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸133cm、短軸117cm、深さ114cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

808～813・817～823は微隆線で区画し、縄文を充填するものである。814は無文の口縁部、815は外削ぎ状の断面形態で、胴部との境に稜が形成されている。胎土には砂粒を多く含む。816は縄文のみが施文されている。外面は激しく荒れているが、使用に伴う加熱の影響と思われる。

824は土器片鏝である。口縁部破片をそのまま利用した格好であるが、左側の溝は打ち欠きにより形成されている。右側の溝は特に作出せず、割れ口の凹みをそのまま利用している。土器の割れ口にはひもをかけた痕跡(キズ)が認められる。

SK087 (遺構：第62図、図版14 遺物：第93～95図741～787、図版31)

5D-15グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸141cm、短軸123cm、深さ102cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

741は一単位の突起を有する深鉢である。口径19.6cm、底径6.6cm、器高28.8cmを測る。突起部分は縦位の短隆帯が口縁部に貼付されているが、上方を欠損しているため詳細は不明である。口縁部と底部付近を除き、粗い撚りの単節縄文LRが全面に施文されている。口縁部の下端には、わずかながらであるが、稜が形成されている。色調は外面下半が褐灰色から暗灰褐色、上半及び内面が暗灰褐色から黒褐色である。内面調整には横方向のケズリが施され、比較的丁寧な仕上がりととなっているが、外面は製作時の凹凸を顕著に残したまま縄文を施文するなど粗い印象を受ける。742は平縁の深鉢であり、底部に高さ7ミリほどの台が付く形状である。口径17.9cm、底径5.2cm、器高22.4cmを測る。器面調整の特徴は741に類似する。色調は外面の底部付近が灰褐色、胴部以上が暗褐色から黒褐色、内面が褐色である。よりの粗い単節縄文LRが底部付近を除き施文されている。743～746は無文の底部である。748・749は同一個体であり、推定口径35cm程度の深鉢である。微隆線により器面を区画し、縄文を加えている。胎土には砂粒が多く含まれている。750～752・755・757は口縁部を微隆線で区画するものである。752は比較的小型の土器である。口縁部の微隆線の上下には円形刺突文列が施文される。把手を有し、そこから垂れ下がるように沈線で挟まれた無文帯がのびている。761～763は胴部に微隆線と縄文が施文されている。753は把手部分の破片である。754・764～771は沈線区画内に縄文が施文される。760・776・777は条線のみが施文されている。775は縄文地上を軽くなでて一部を磨消、疎らな条線を加えている。

778～787は土器片鏝である。基本的に打ち欠きのままの製作である。780の溝は明確であるが、778・780～783の溝は痕跡程度である。784～787は形状が丸みを帯びていることから、土製円板の可能性もある。

SK088 (遺構：第62図 遺物：第96図825・826)

5D-08グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸156cm、短軸127cm、深さ135cmほどである。底面はほぼ平坦である。

825は貼付された隆帯が剥落している。他は無文であり、胎土には砂粒を多く含む。826は比較的小型の底部である。外面は縦方向のケズリにより平滑で光沢を帯びる。

SK089 (遺構：第62図、図版15)

6E-34グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸99cm、短軸84cm、深さ76cmほどで

ある。底面には凸凹がある。

879は磨消縄文の技法が使われている。縄文地を沈線で区画し、外側の縄文を磨り消している。称名寺1式に比定できようか。880は底部である。破片上方には無節縄文Lが施文されている。

SK090 (遺構：第63図 図版15 遺物：第98図865～873)

5D-56グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸154cm、短軸141cm、深さ124cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

865は最大径を胴部中央部付近に持つ深鉢である。口径は約19.5cm、最大径は約23.5cmである。器面全体に単節縄文RLが施文されている。外面の色調は口縁部付近が灰褐色、拓影図の最下部付近が黒褐色、その他の部分が暗褐色である。内面は口縁部付近が灰黄褐色、以下黒褐色となる。残算部位が少なく判然としないが、煮沸利用等の結果と考えられる。866～871は微隆線で口縁部を区画するものがある。869は微隆線直下に刺突列を施す。872は直下から胴部にかけて沈線区画が施文される。872は橋状把手部分の破片である。873は底部である。

SK091 (遺構：第63図 図版14 遺物：第97・98図840～864)

5D-47グリッド付近に位置する。平面形はほぼ楕円形、規模は長軸158cm、短軸119cm、深さ109cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

840～842・844・849・851は微隆線で区画し、縄文を充填するものである。840～842・844は口縁部下端が微隆線によって区画されている。845は波状口縁の頂部に環状の突起及び橋状の把手(剥落している)が付されている。口縁部をはじめとして、沈線により器面は区画され、縄文が充填されている。846・852～855・857は沈線区画内に縄文が施文されている。843・856・858は縄文のみが確認できる胴部片である。859～863は底部である。859・861は縄文が施文されている。

864は土器片鉢である。周縁は軽く研磨されている。溝は確認できない。

SK092 (遺構：第63図 図版15 遺物：第99図874～878)

5D-57グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は長軸166cm、短軸150cm、深さ196cmほどである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

874は口縁部に浅い凹線が施され、その下端が微隆線状となって区画の役割を果たす。以下は沈線で区画し、縄文が施文されている。器面は丁寧なケズリによって調整されている。

SK093 (遺構：第63図 遺物：第99図881)

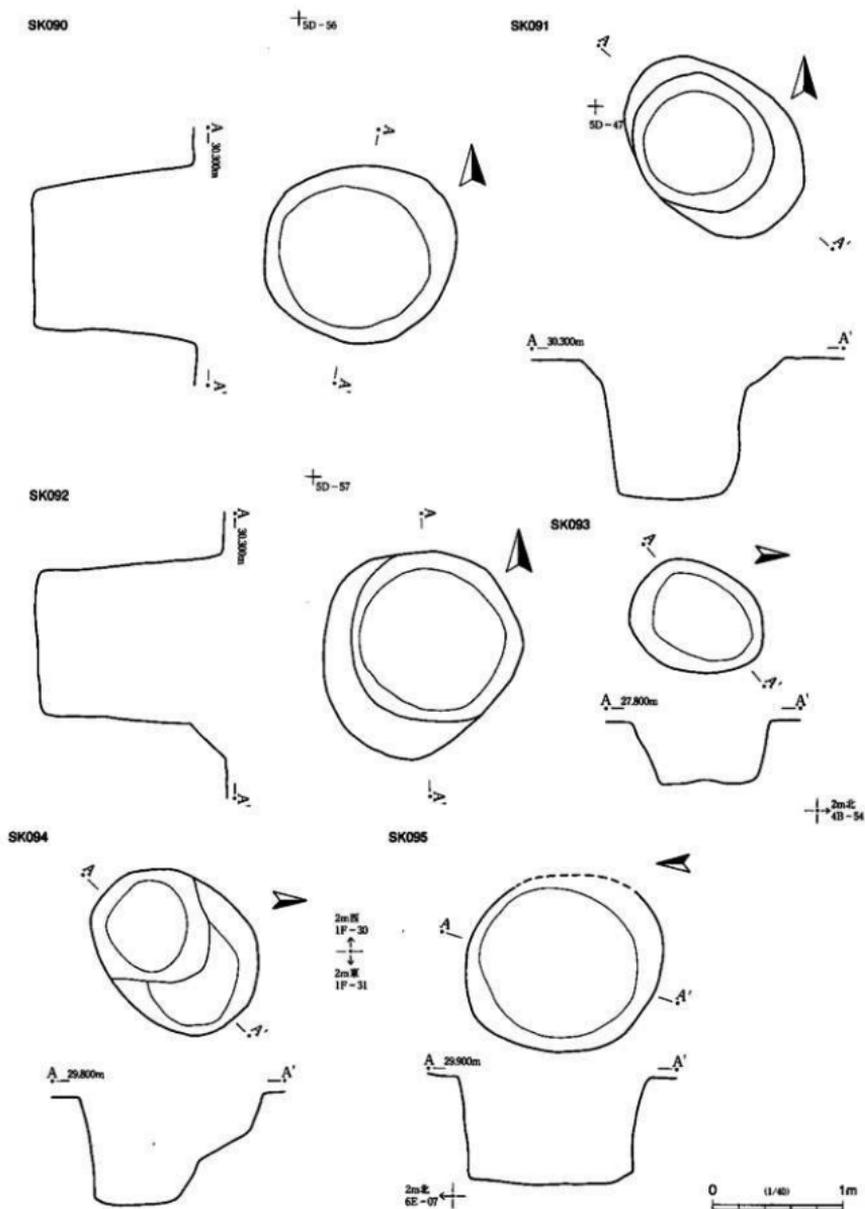
4B-43グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ楕円形、規模は長軸108cm、短軸85cm、深さ50cmほどである。底面には凹凸がある。

881は土器片鉢である。上部を欠損している。製作は打ち欠きのままである。溝は割れ口の凹凸を利用しており、あまり明確ではない。

SK094 (遺構：第63図 遺物：第85図541～544)

1F-30グリッド付近に位置する。平面形は楕円形であるが、南西側が深く、北東側が浅くなるという有段状の土坑である。全体の規模は長軸が140cm、短軸が120cm、深さが85cmほどである。時期は出土土器から加曾利E4式から称名寺式期と思われる。

541は微隆線で、543は沈線で区画し縄文を充填するものである。加曾利E4式である。542は口縁部下に2条の沈線が施文され、その間に刺突文が施される。称名寺2式土器か。544は縄文のみが施文される胴

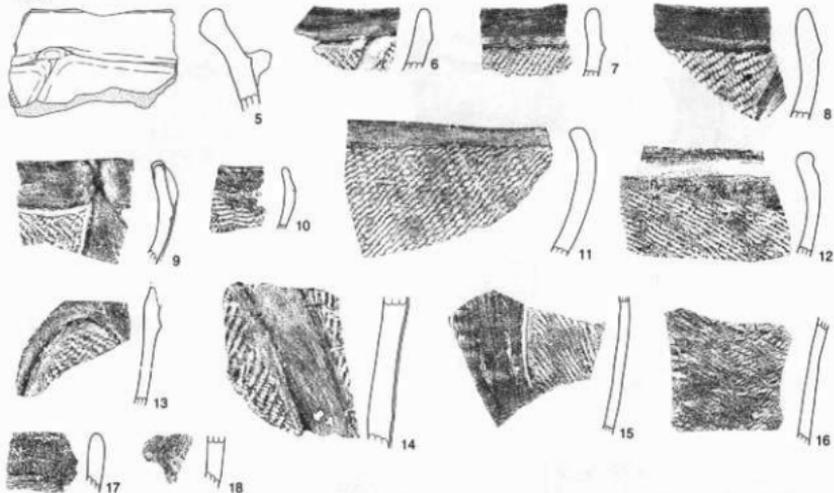


第63図 縄文時代土坑①④

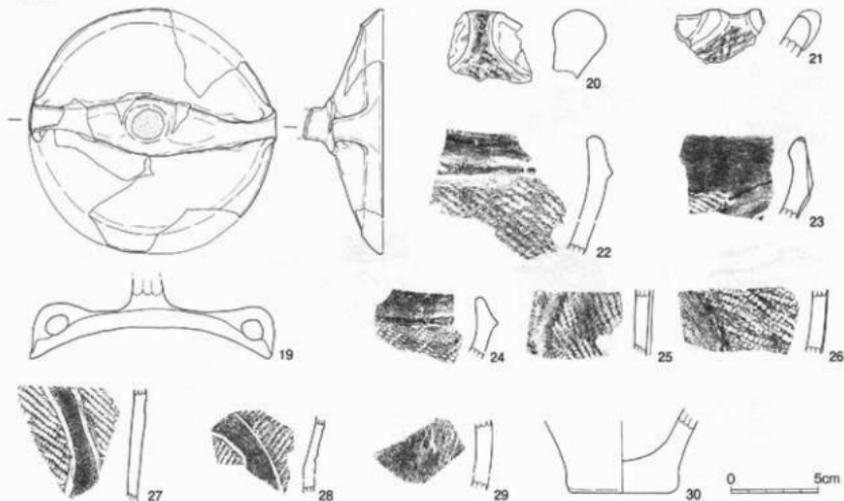
SK001



SK002

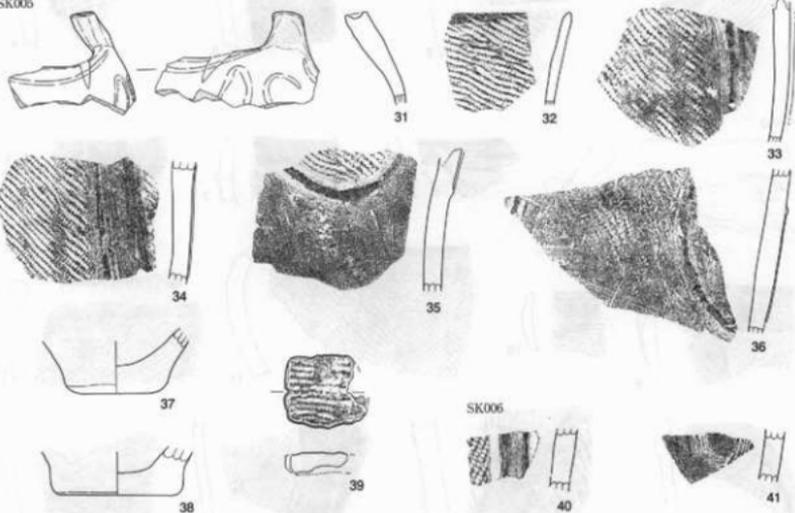


SK004

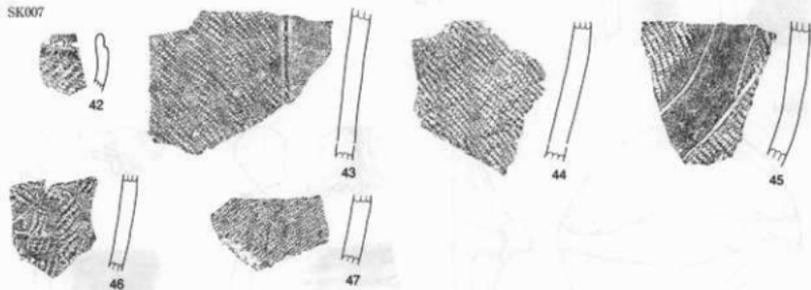


第64圖 縄文時代土坑出土遺物(1)

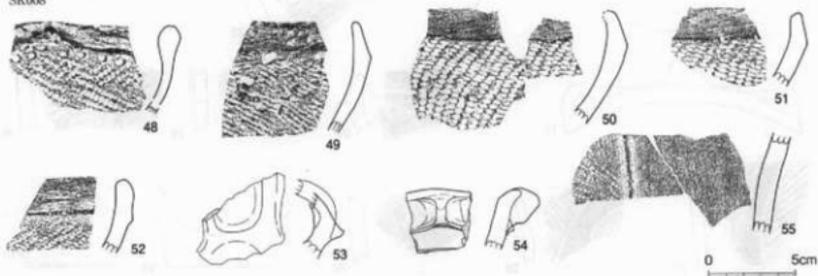
SK005



SK007

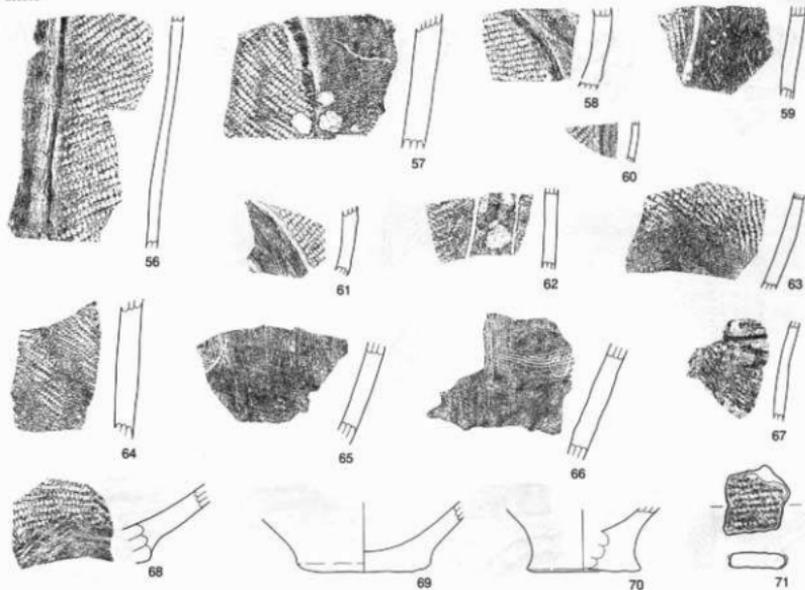


SK008

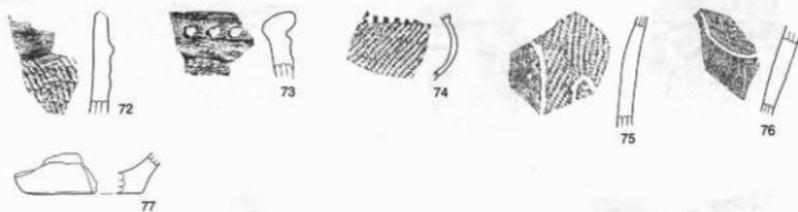


第65図 縄文時代土坑出土遺物(2)

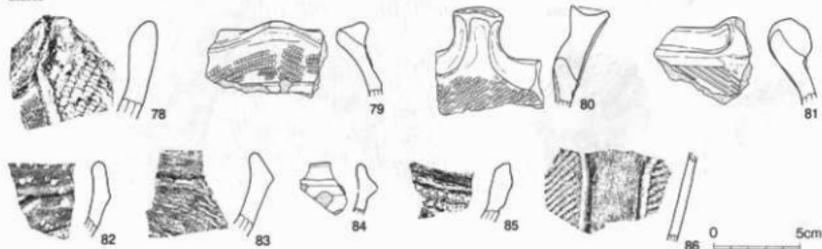
SK008



SK010

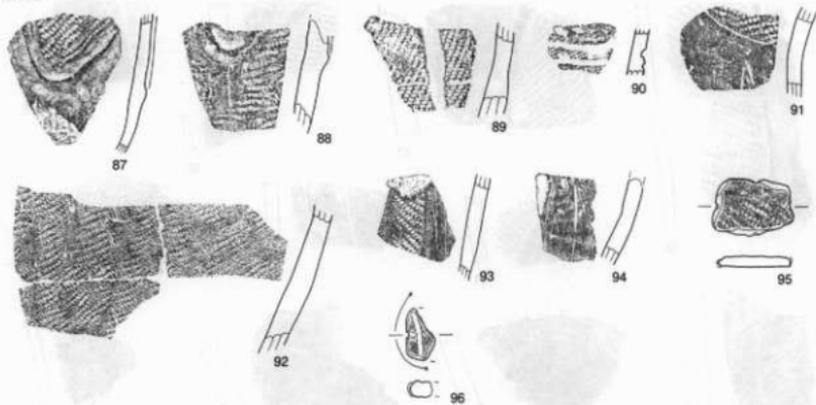


SK009

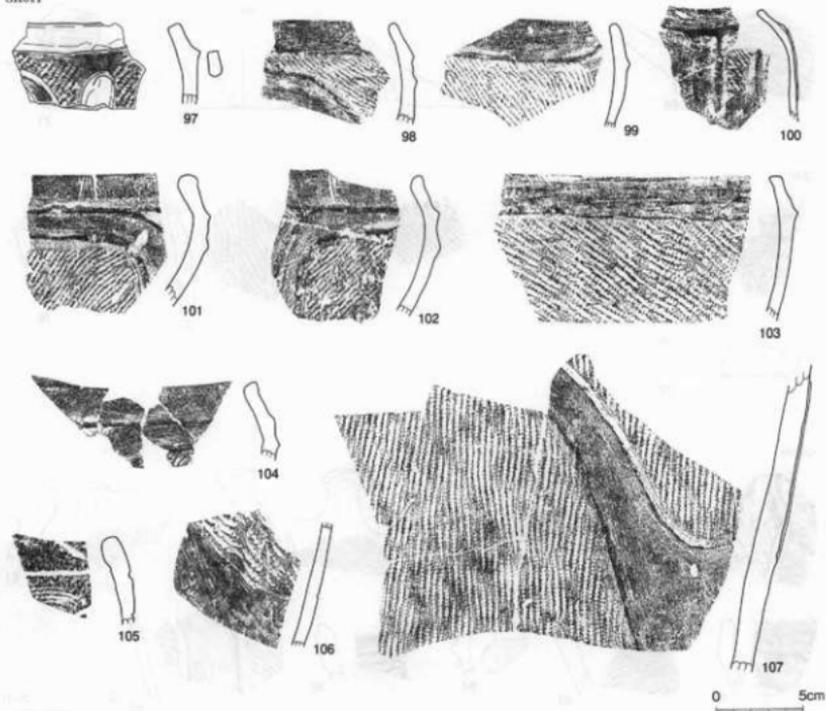


第66図 縄文時代土坑出土遺物(3)

SK009



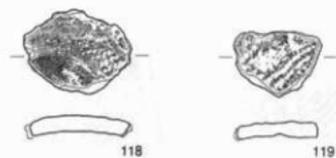
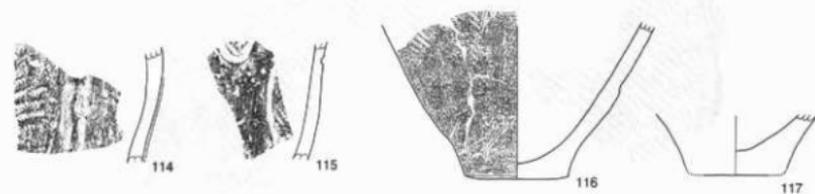
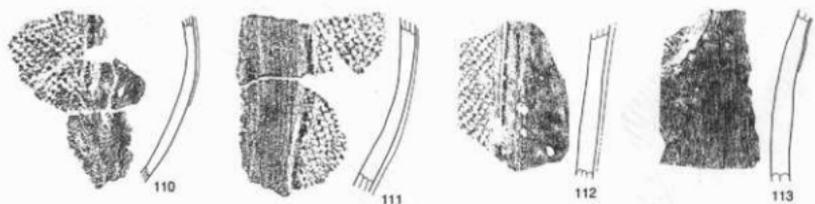
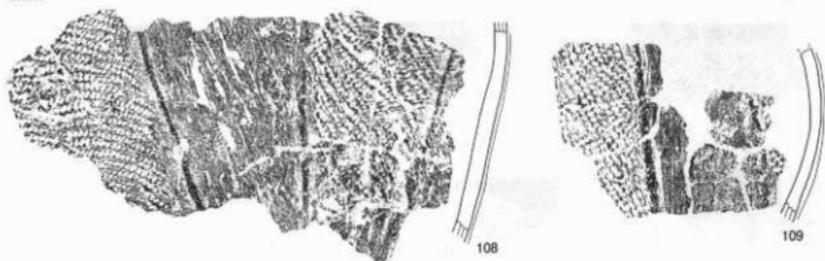
SK011



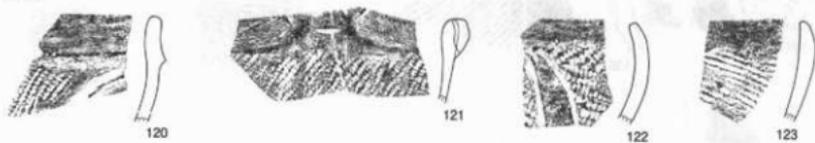
0 5cm

第67図 縄文時代土坑出土遺物(4)

SK011



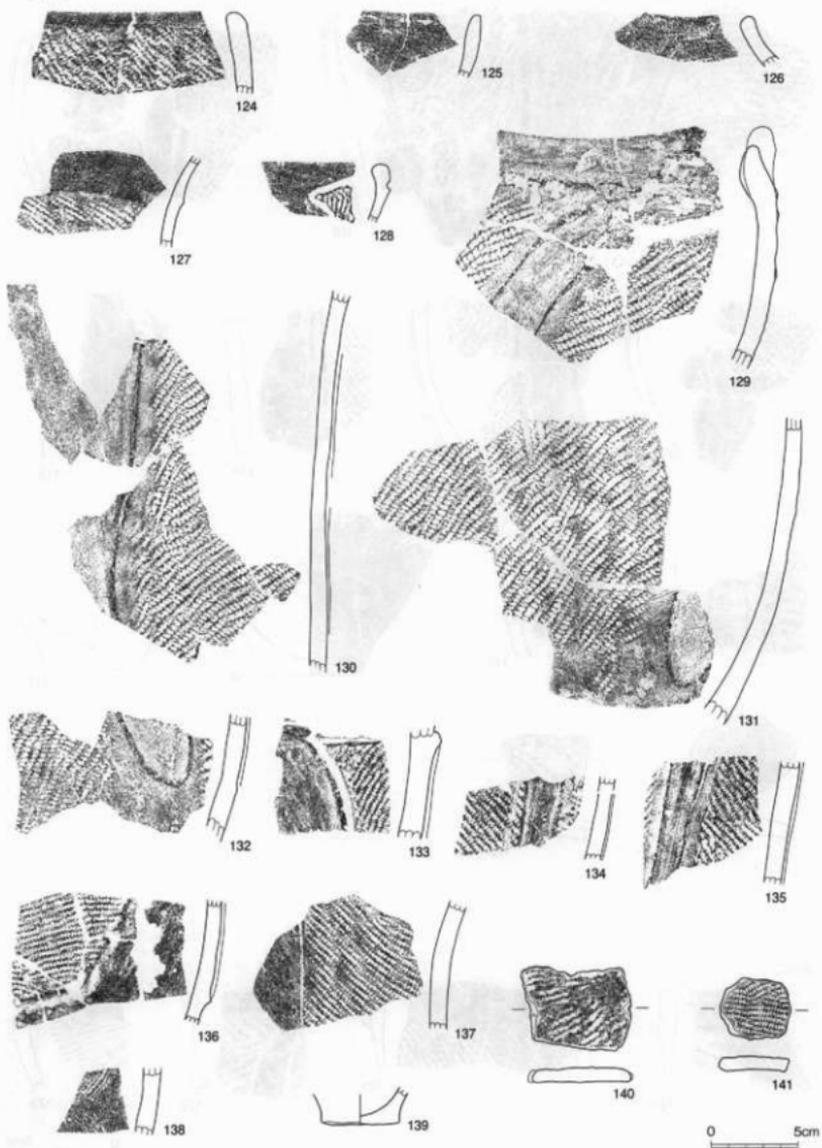
SK012



0 5cm

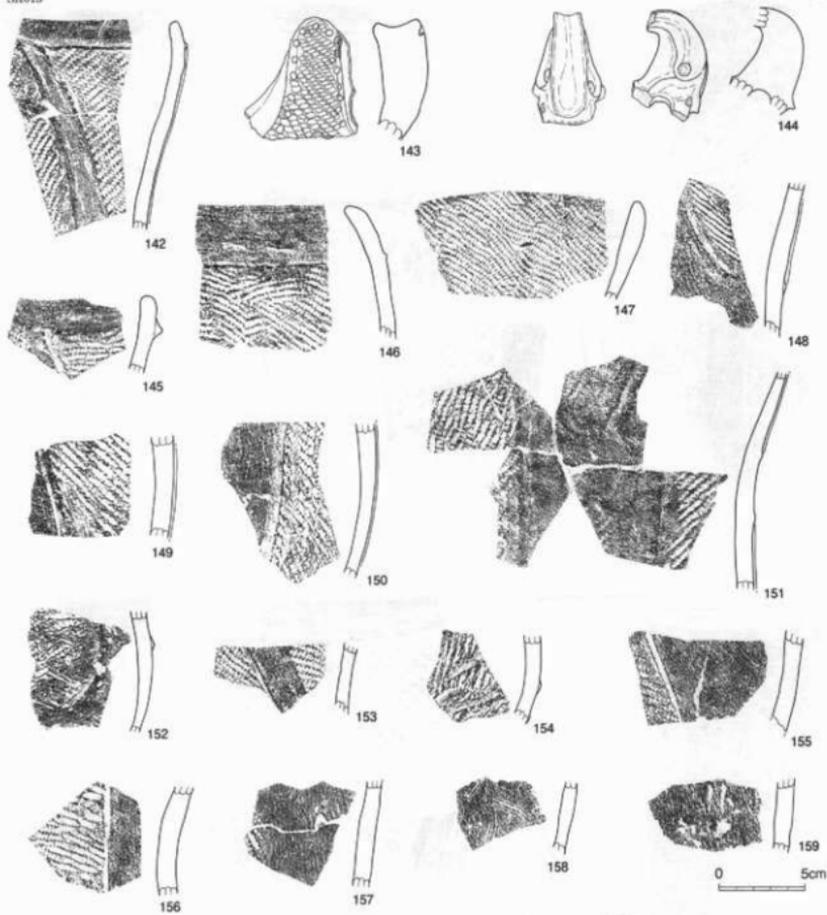
第68図 縄文時代土坑出土遺物(5)

SK012

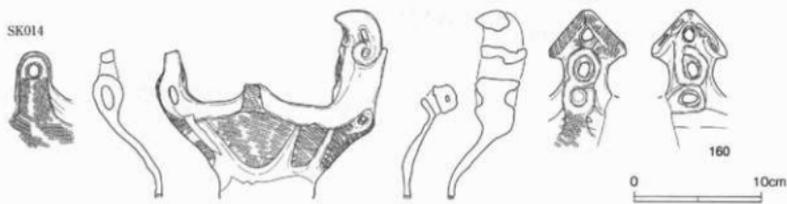


第69図 縄文時代土坑出土遺物(6)

SK013

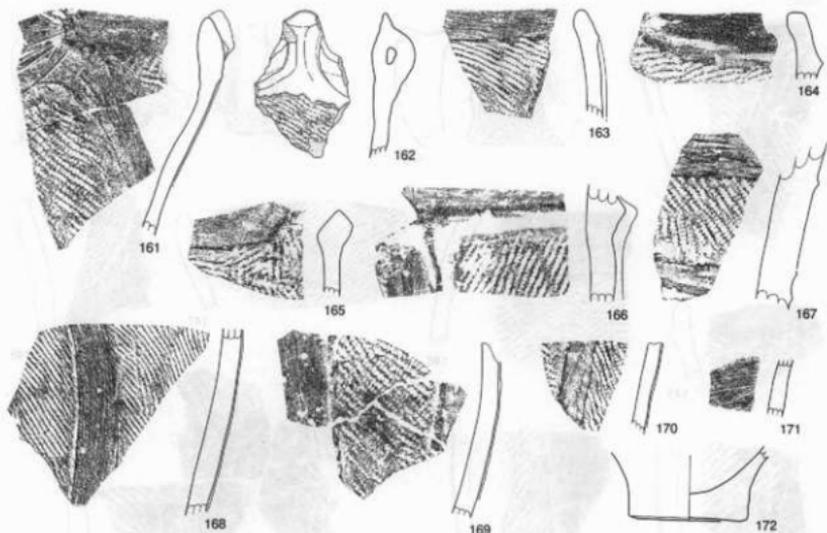


SK014

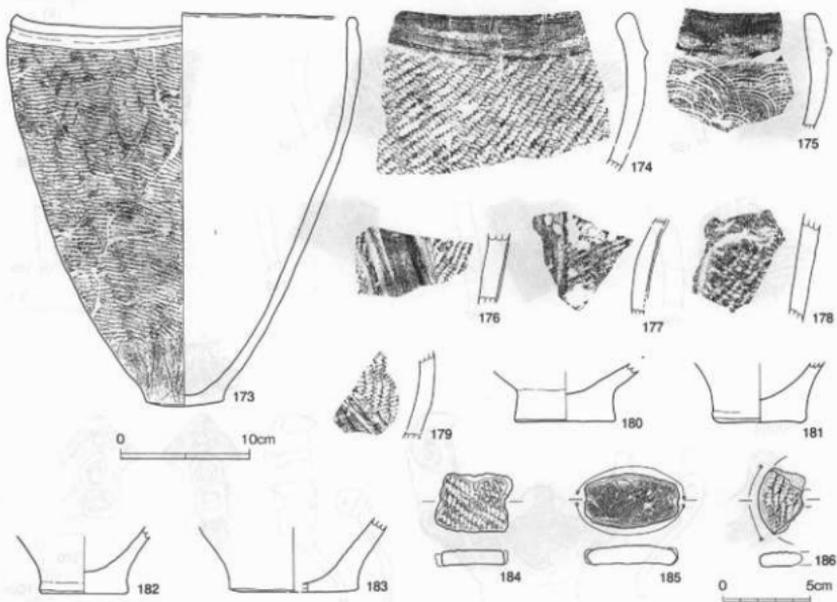


第70図 縄文時代土坑出土遺物(7)

SK014

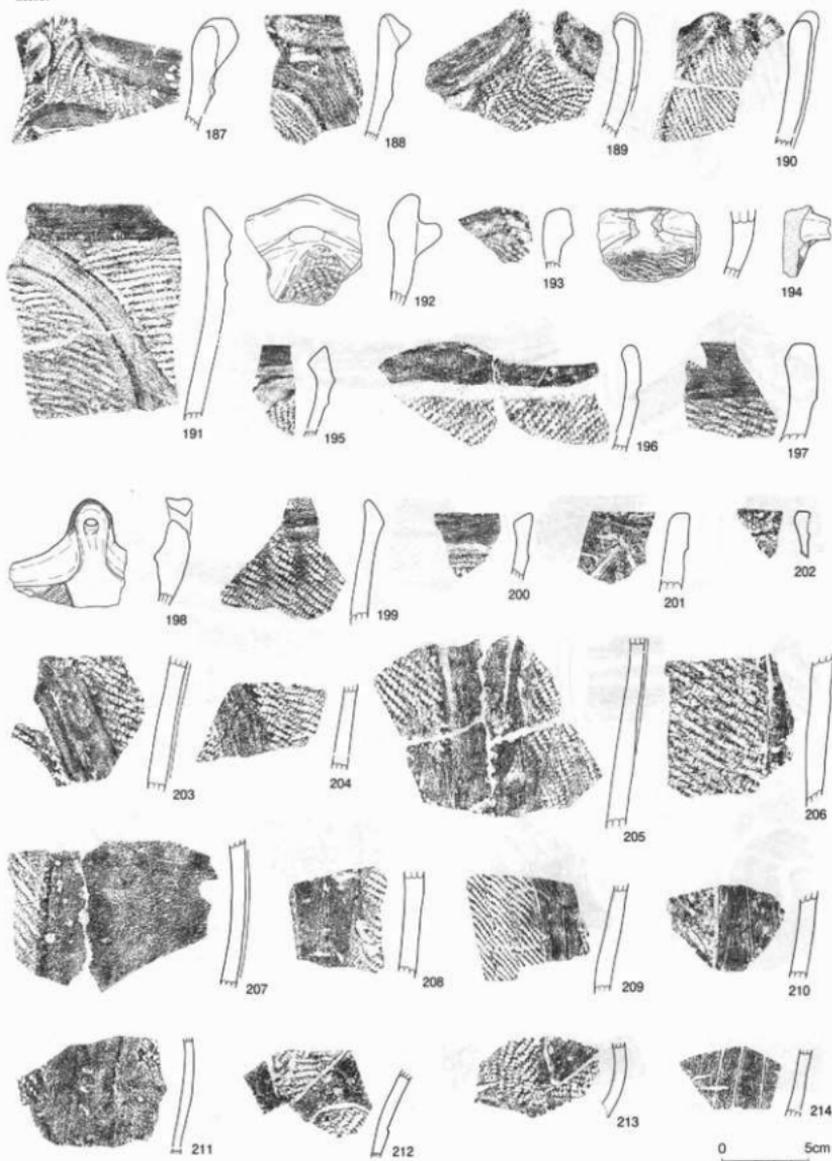


SK015



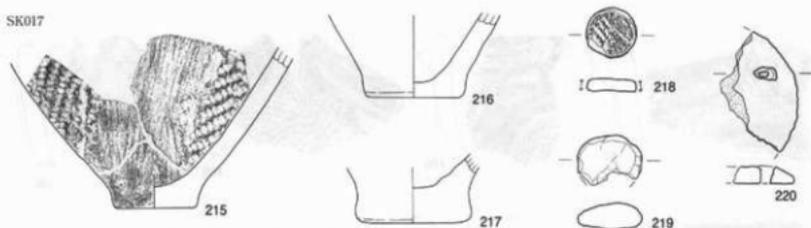
第71圖 縄文時代土坑出土遺物(8)

SK017

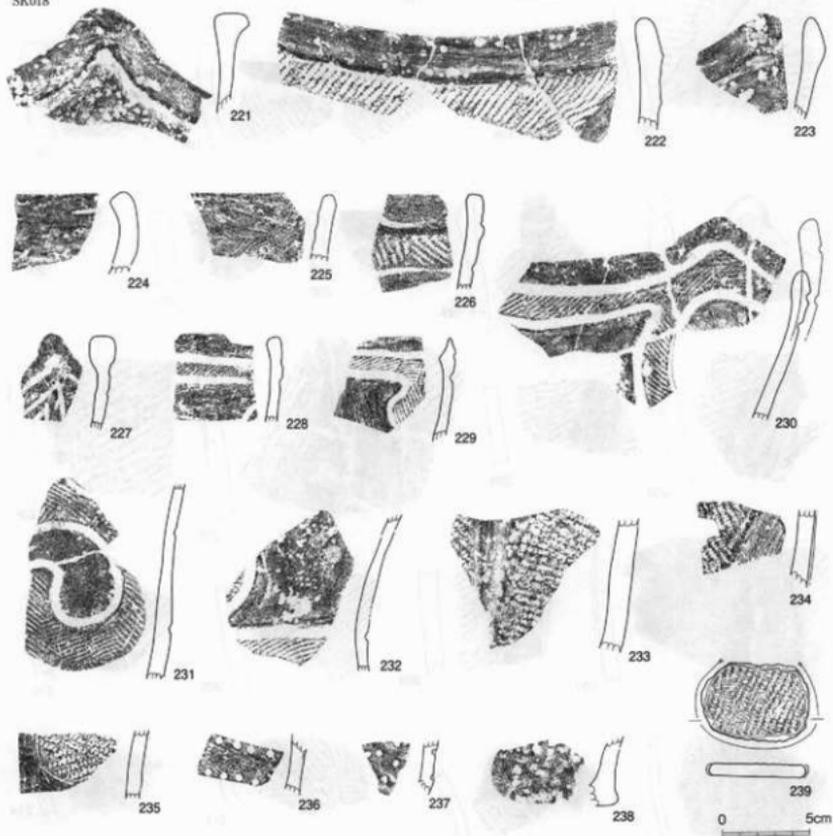


第72図 縄文時代土坑出土遺物(9)

SK017

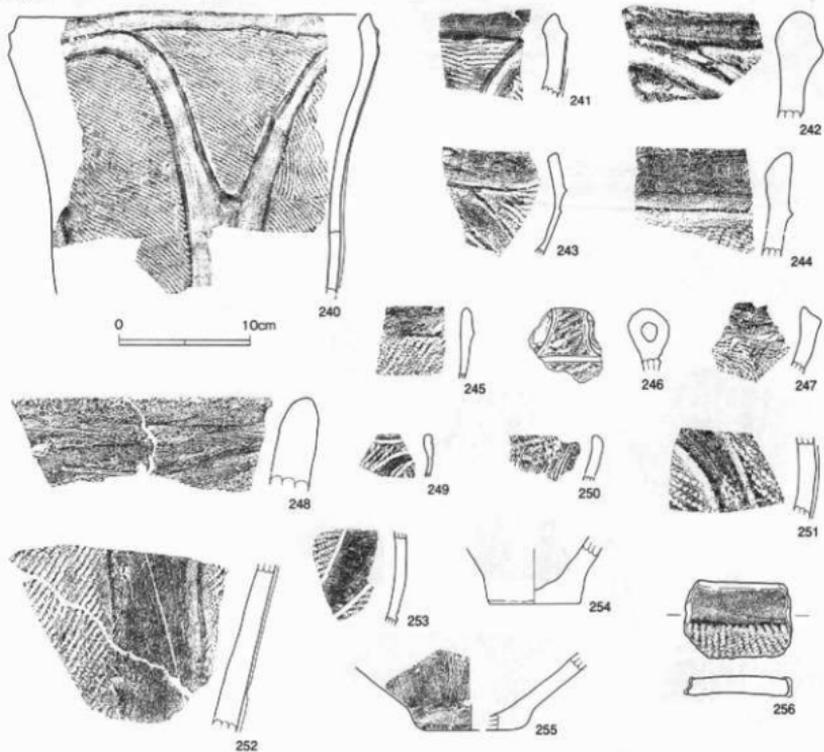


SK018



第73図 縄文時代土坑出土遺物(0)

SK019



SK021

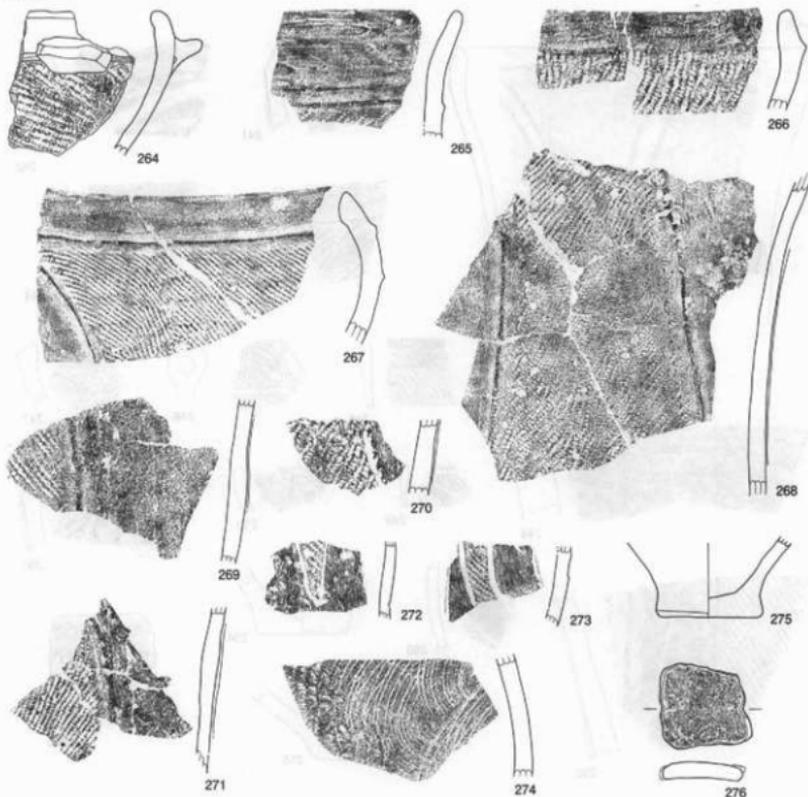


SK020



第74図 縄文時代土坑出土遺物(1)

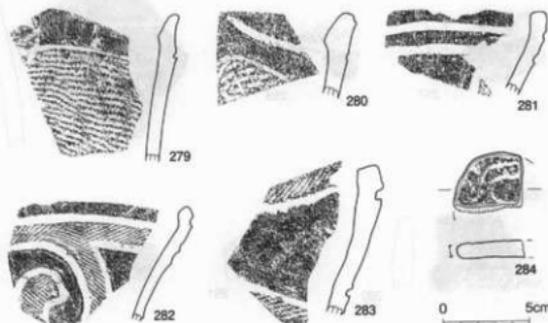
SK025



SK026

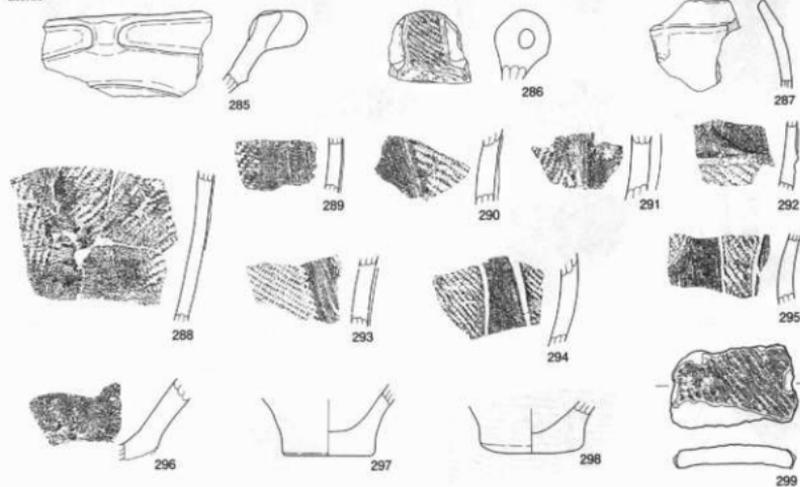


SK022

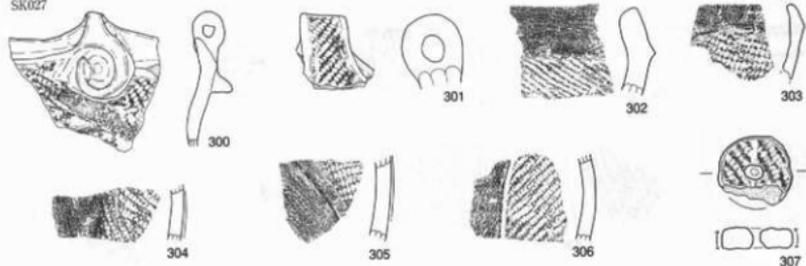


第75図 縄文時代土坑出土遺物12

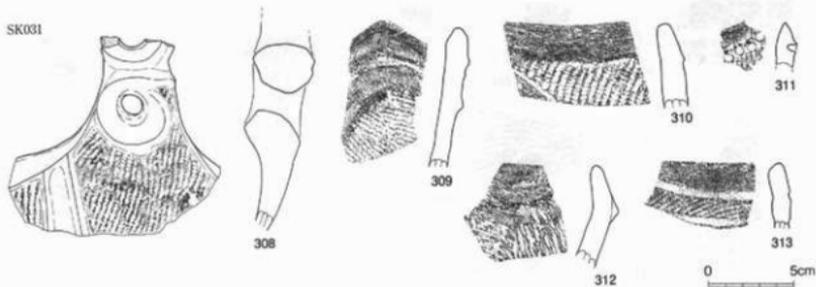
SK023



SK027

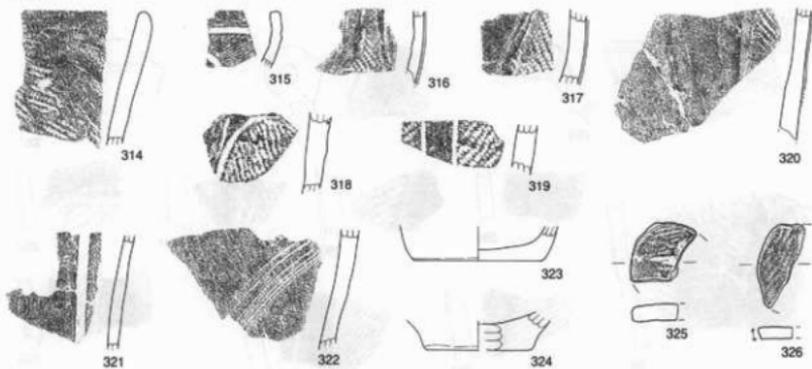


SK031



第76図 縄文時代土坑出土遺物13

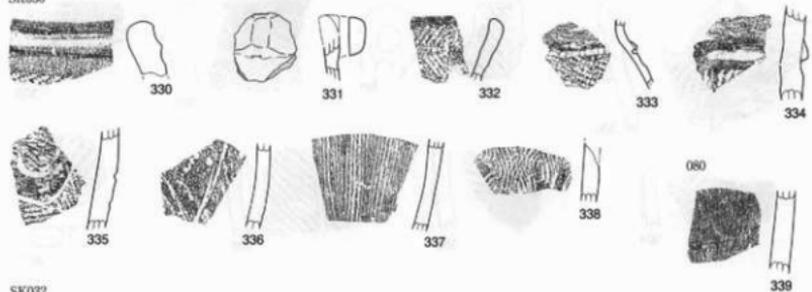
SK031



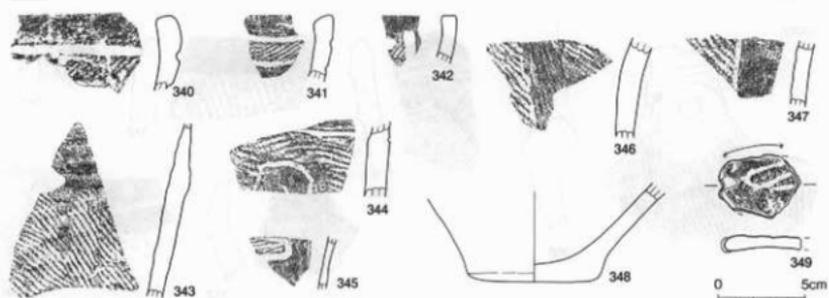
SK028



SK030

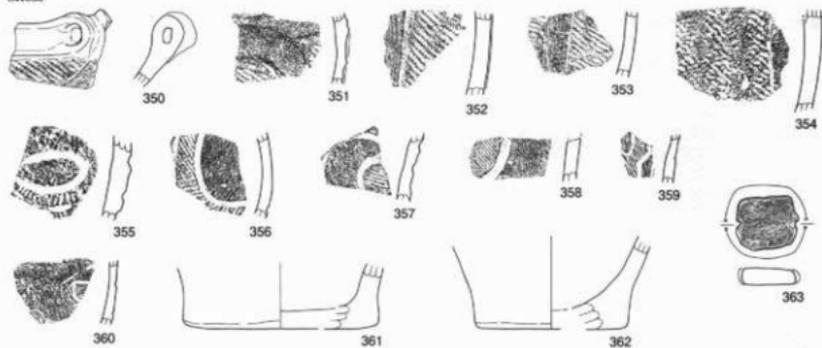


SK032

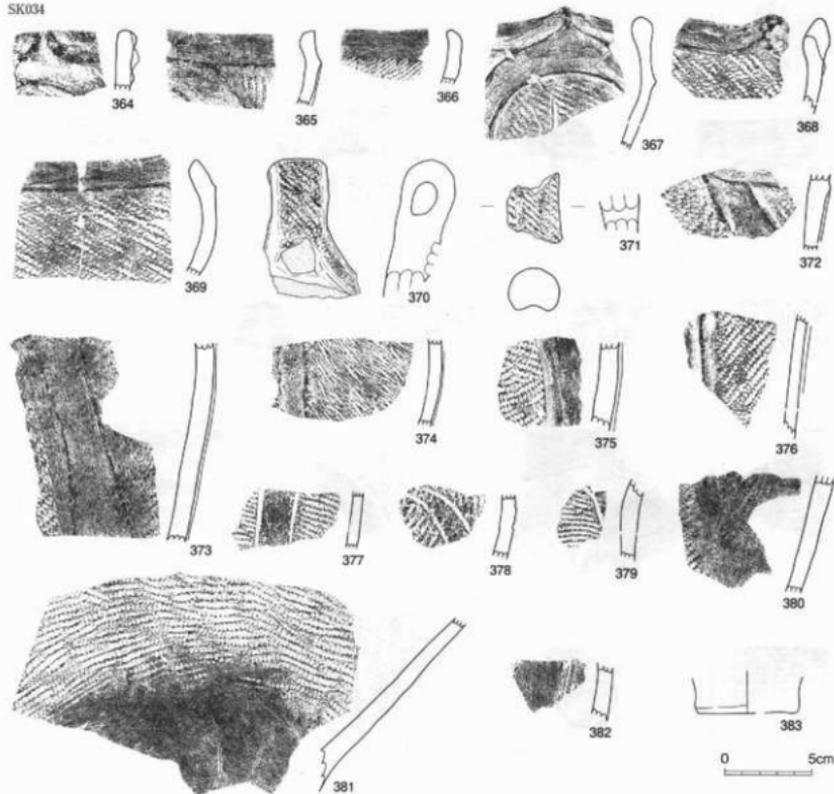


第77図 縄文時代土坑出土遺物(4)

SK033

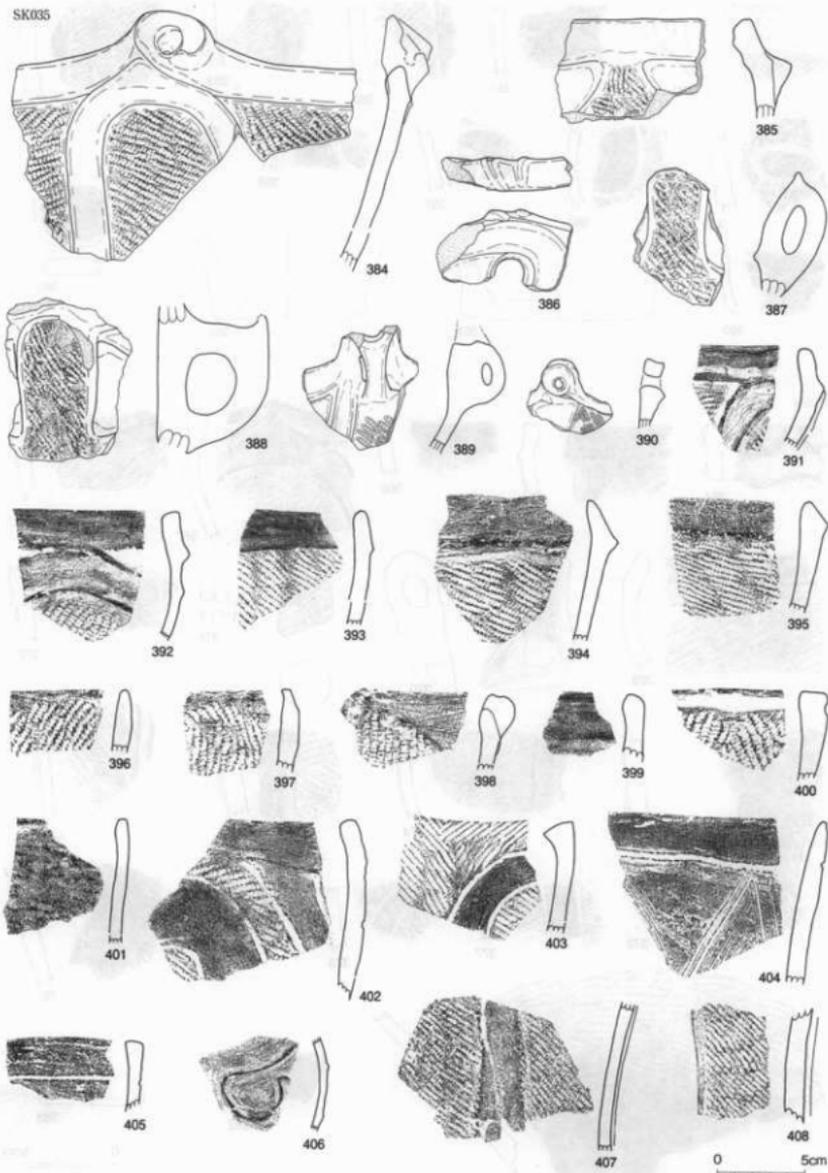


SK034



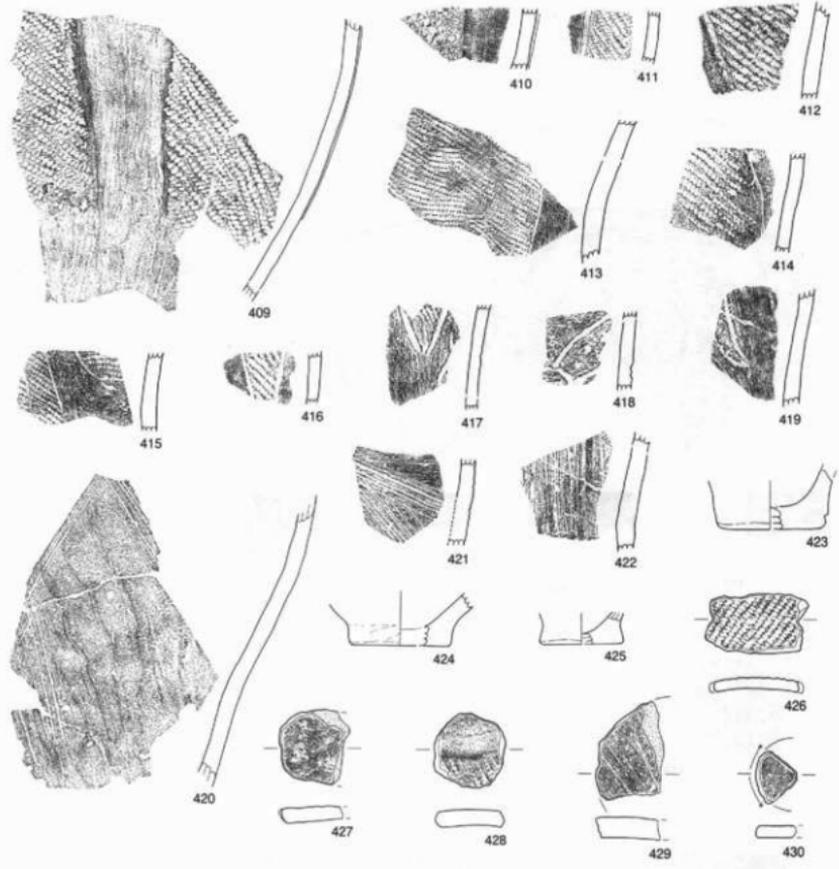
第78図 縄文時代土坑出土遺物15)

SK035

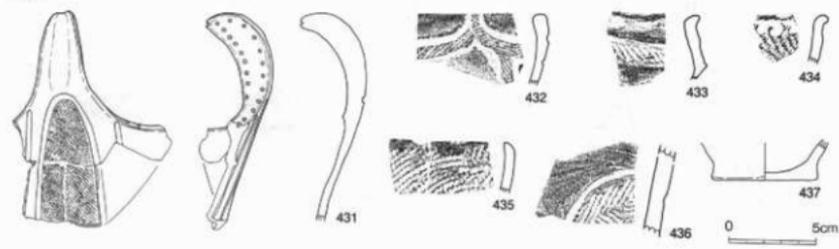


第79図 縄文時代土坑出土遺物(16)

SK035



SK036

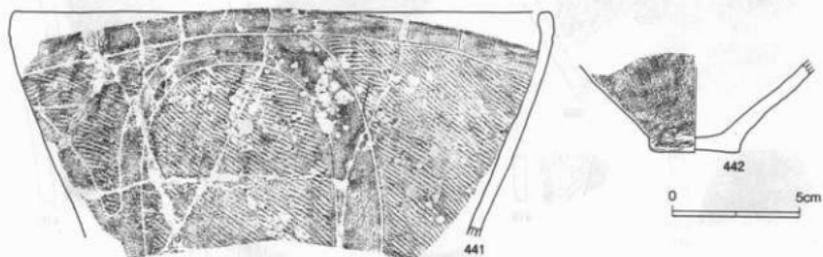


第80图 縄文時代土坑出土遺物17

SK036



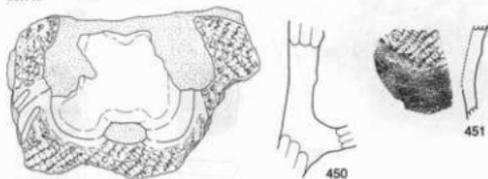
SK039



SK037



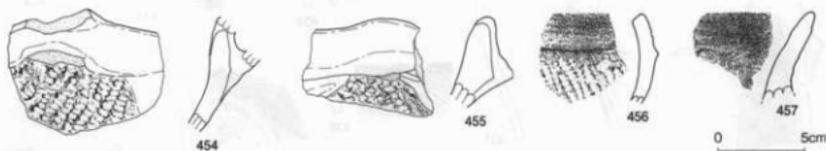
SK040



SK038

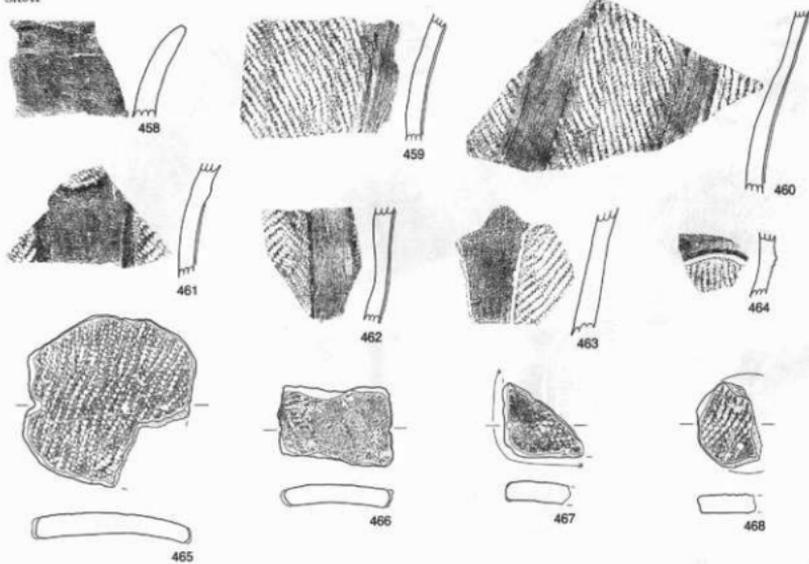


SK041

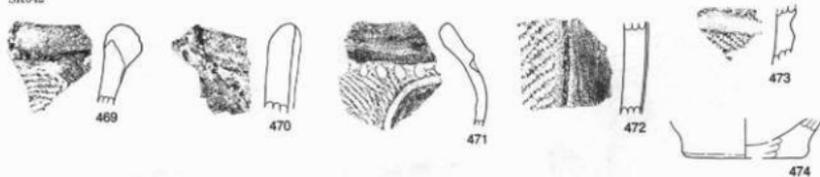


第81図 縄文時代土坑出土遺物⑧

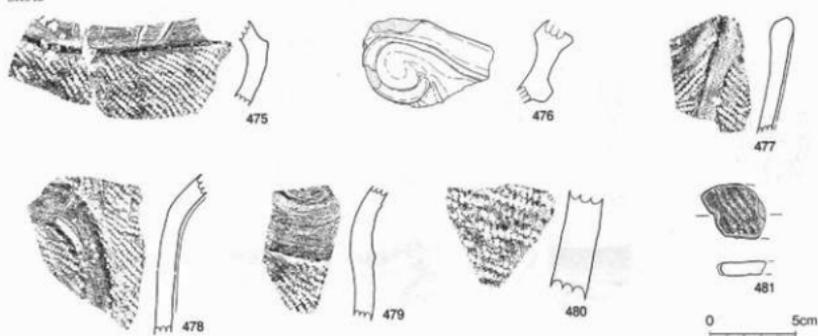
SK041



SK042

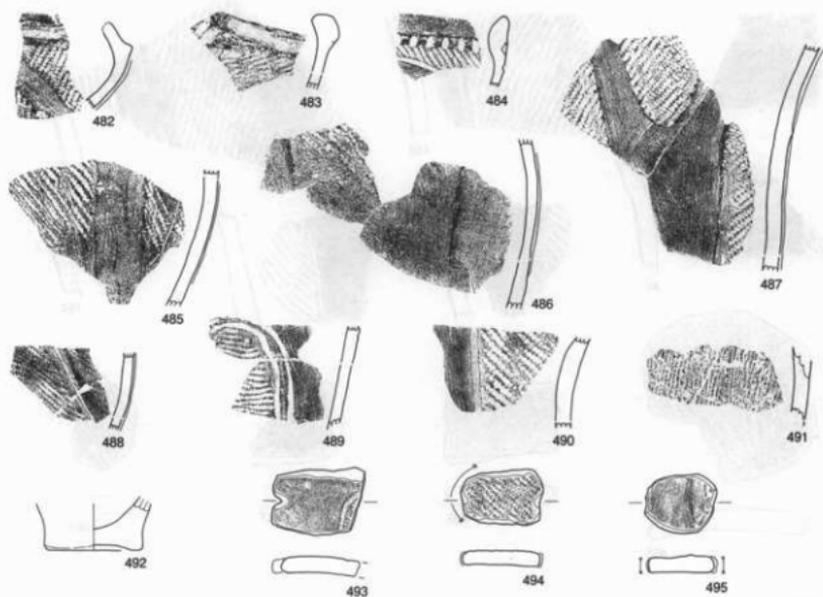


SK043

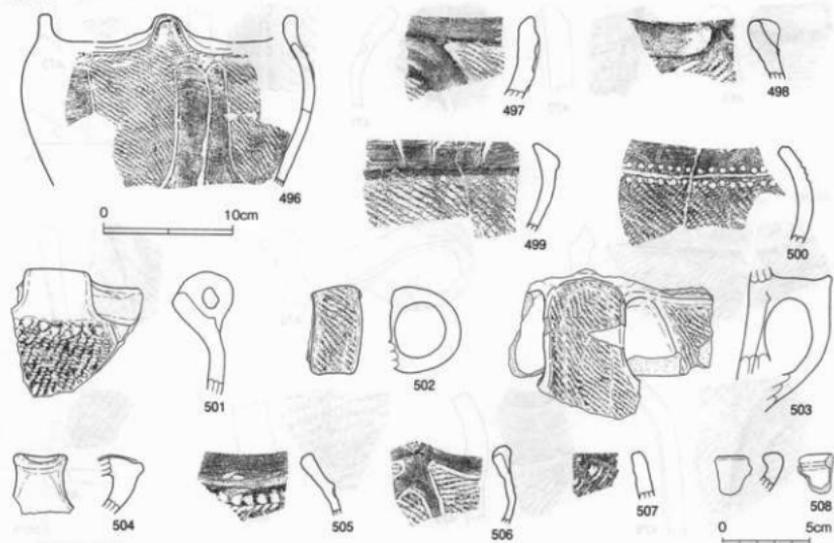


第82図 縄文時代土坑出土遺物(19)

SK003

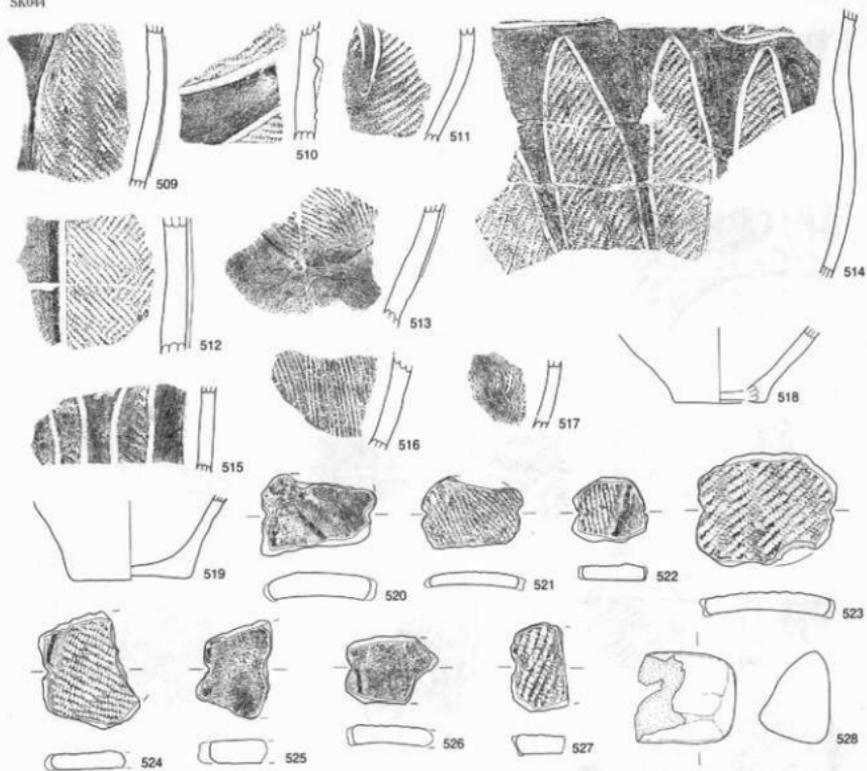


SK044

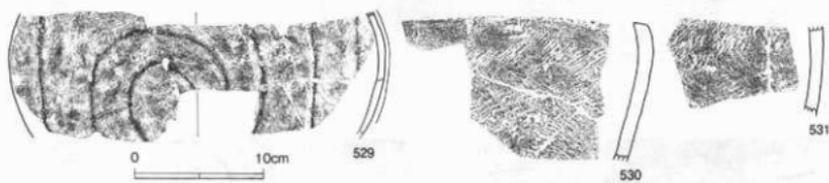


第83圖 縄文時代土坑出土遺物20

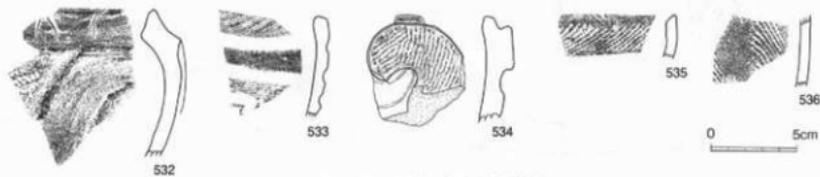
SK044



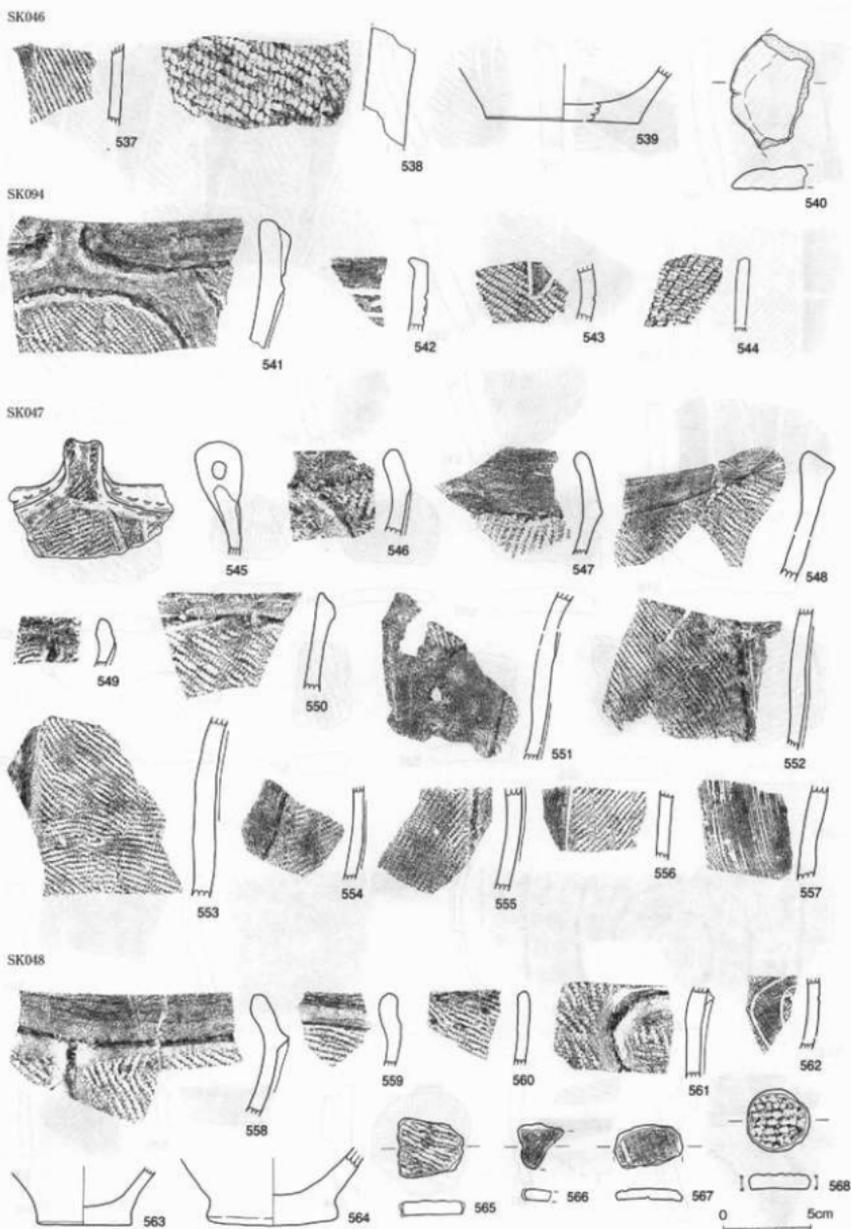
SK045



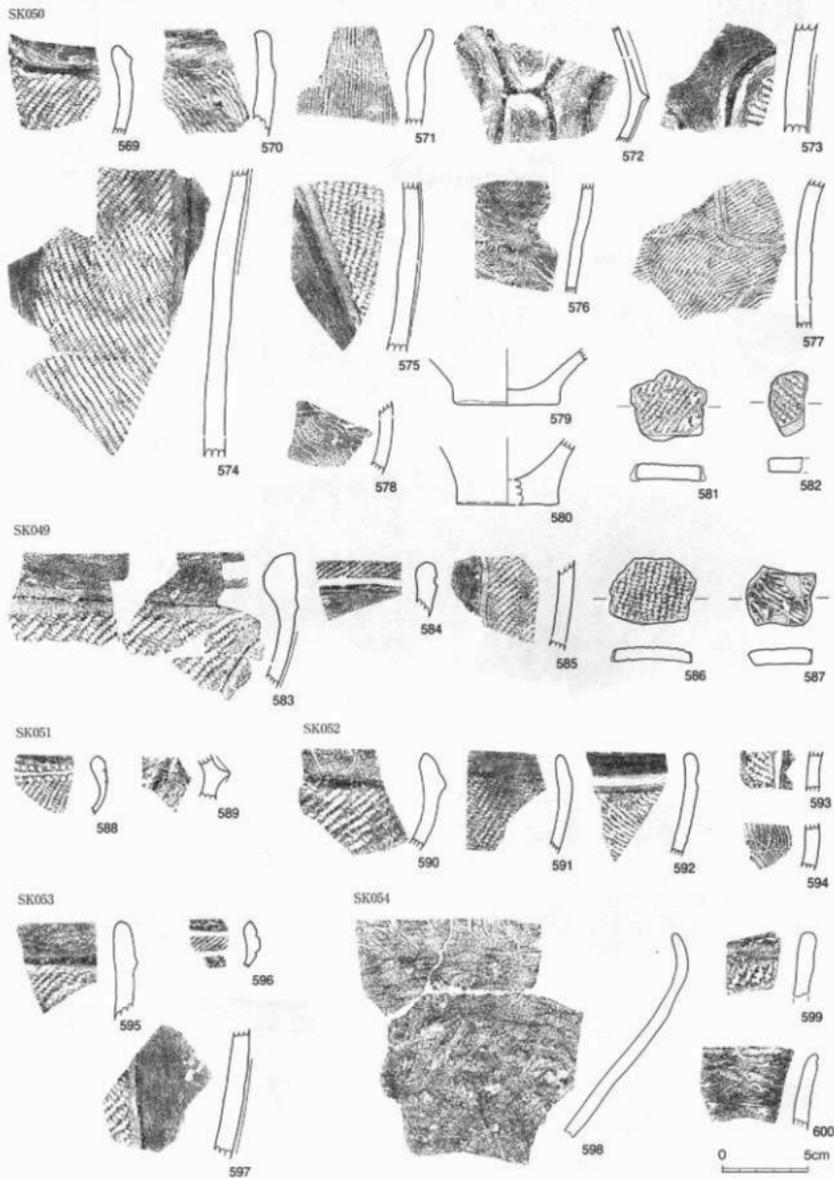
SK046



第84図 縄文時代土坑出土遺物(2)



第85図 縄文時代土坑出土遺物22

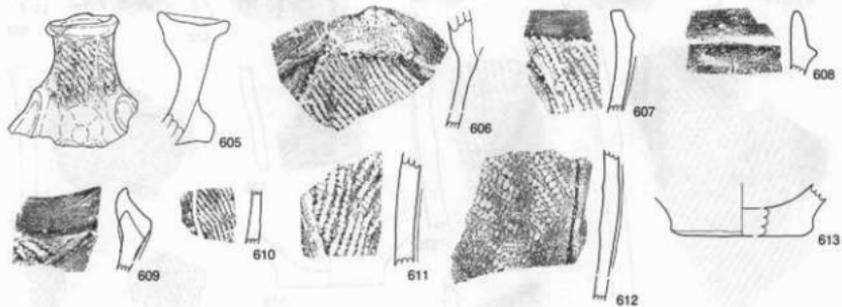


第86図 縄文時代土坑出土遺物23

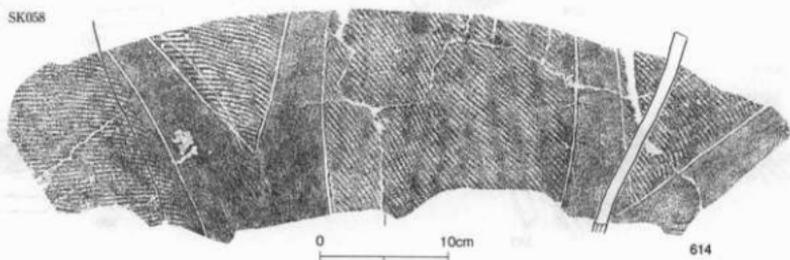
SK054



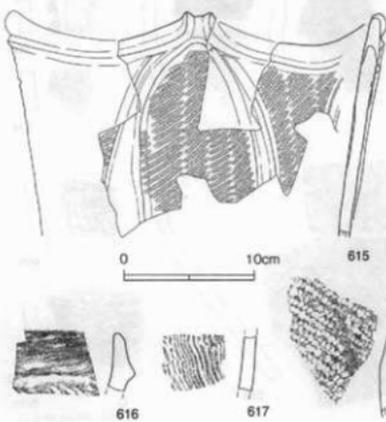
SK057



SK058



SK059



SK060

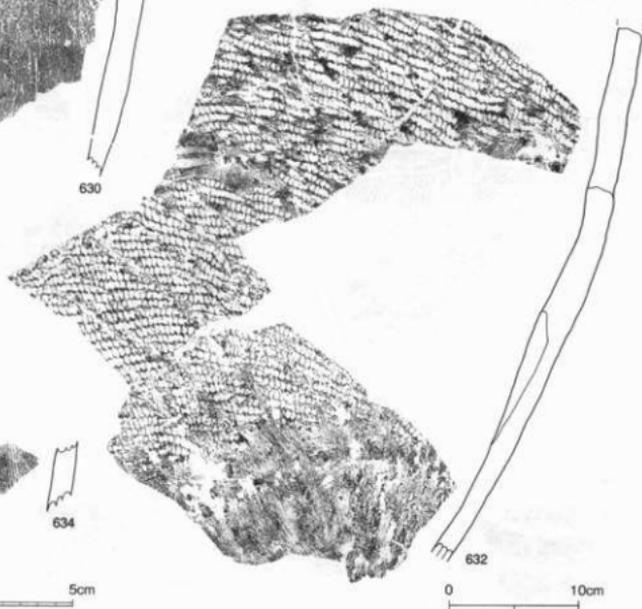
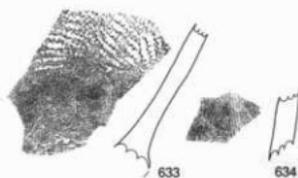
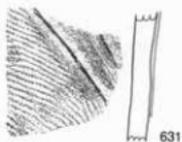
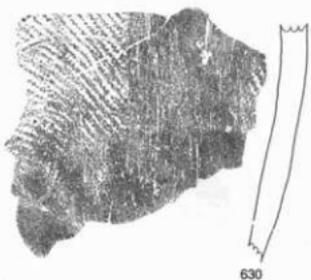
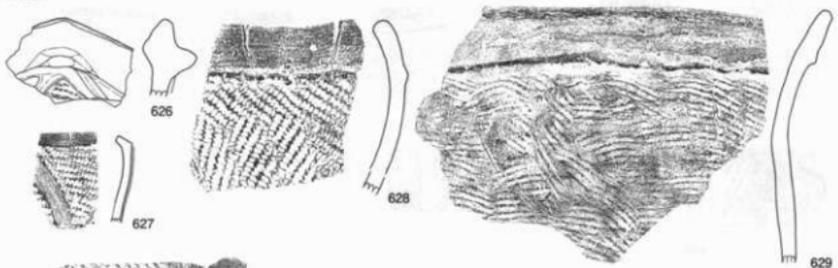


第87図 縄文時代土坑出土遺物24

SK060

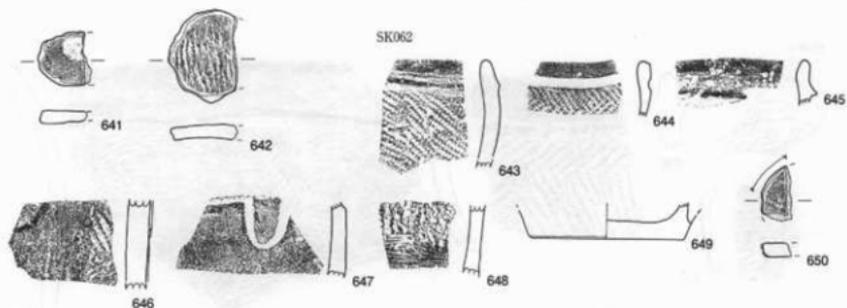
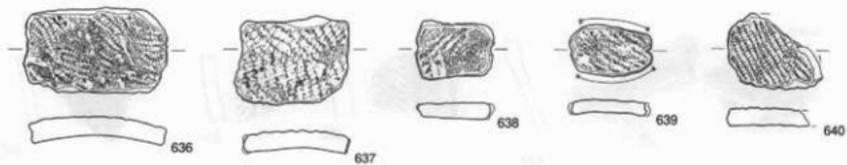


SK061



第88図 縄文時代土坑出土遺物(25)

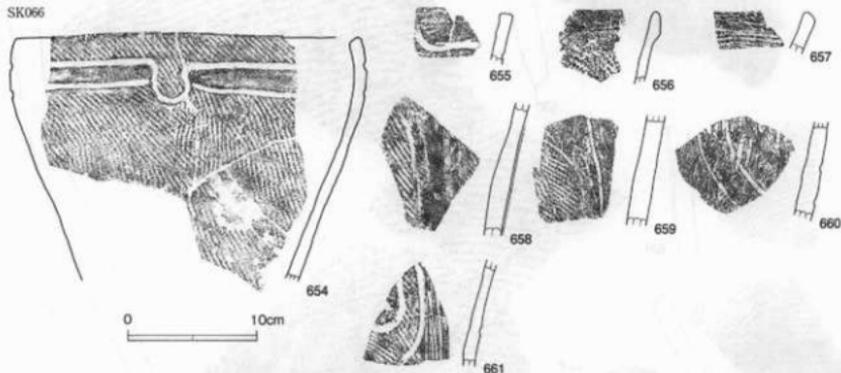
SK061



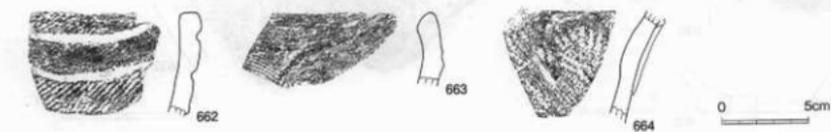
SK065



SK066

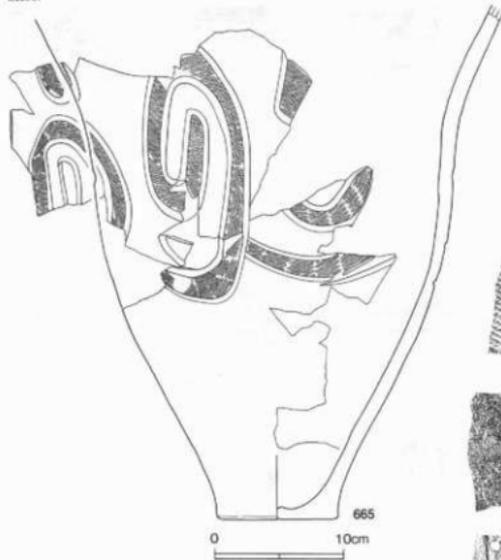


SK067

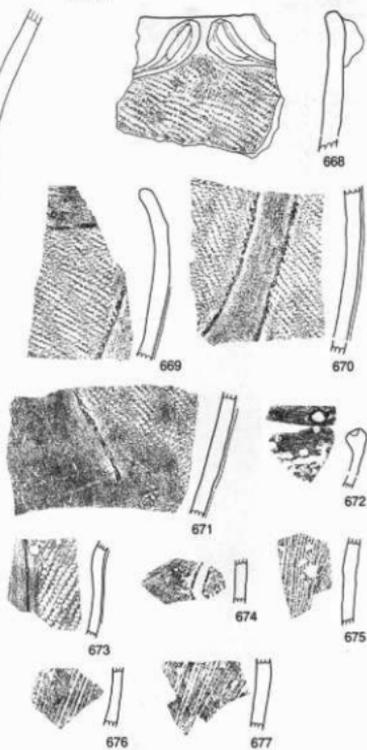


第89図 縄文時代土坑出土遺物26

SK067



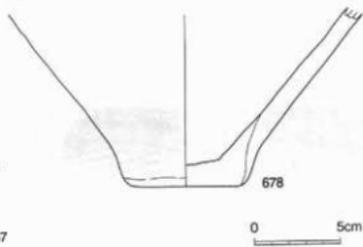
SK069



SK068

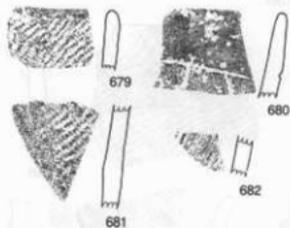


SK073

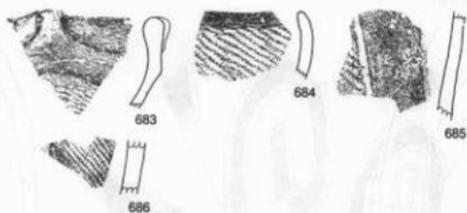


第90図 縄文時代土坑出土遺物27

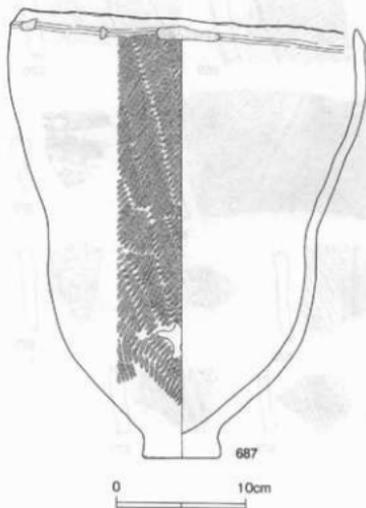
SK077



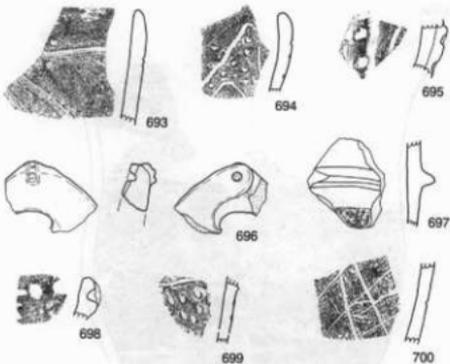
SK078



SK079



SK080

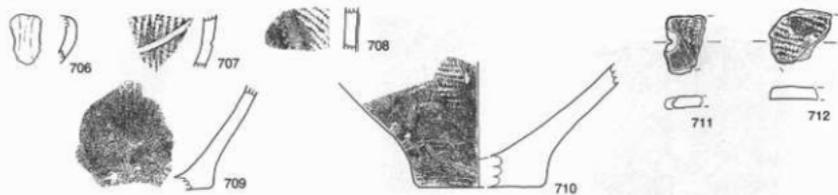


SK074

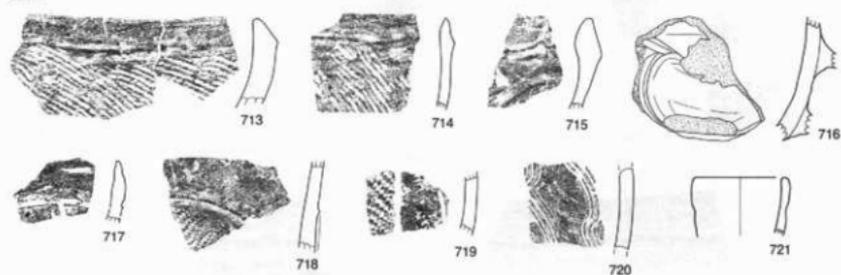


第91圖 縄文時代土坑出土遺物28

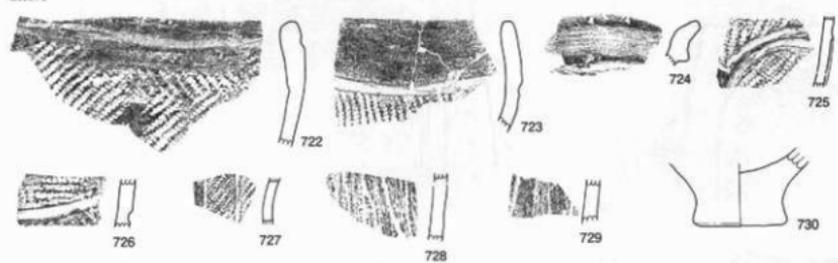
SK074



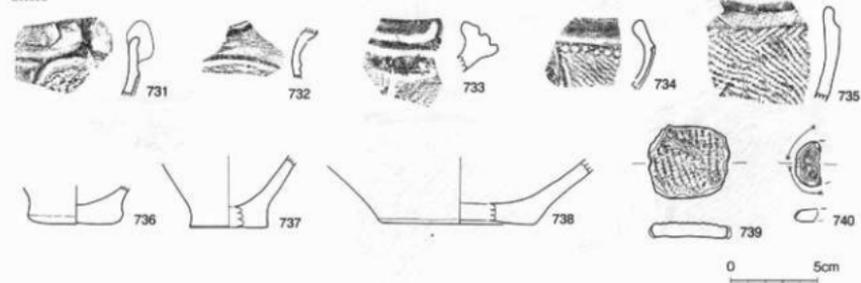
SK075



SK076



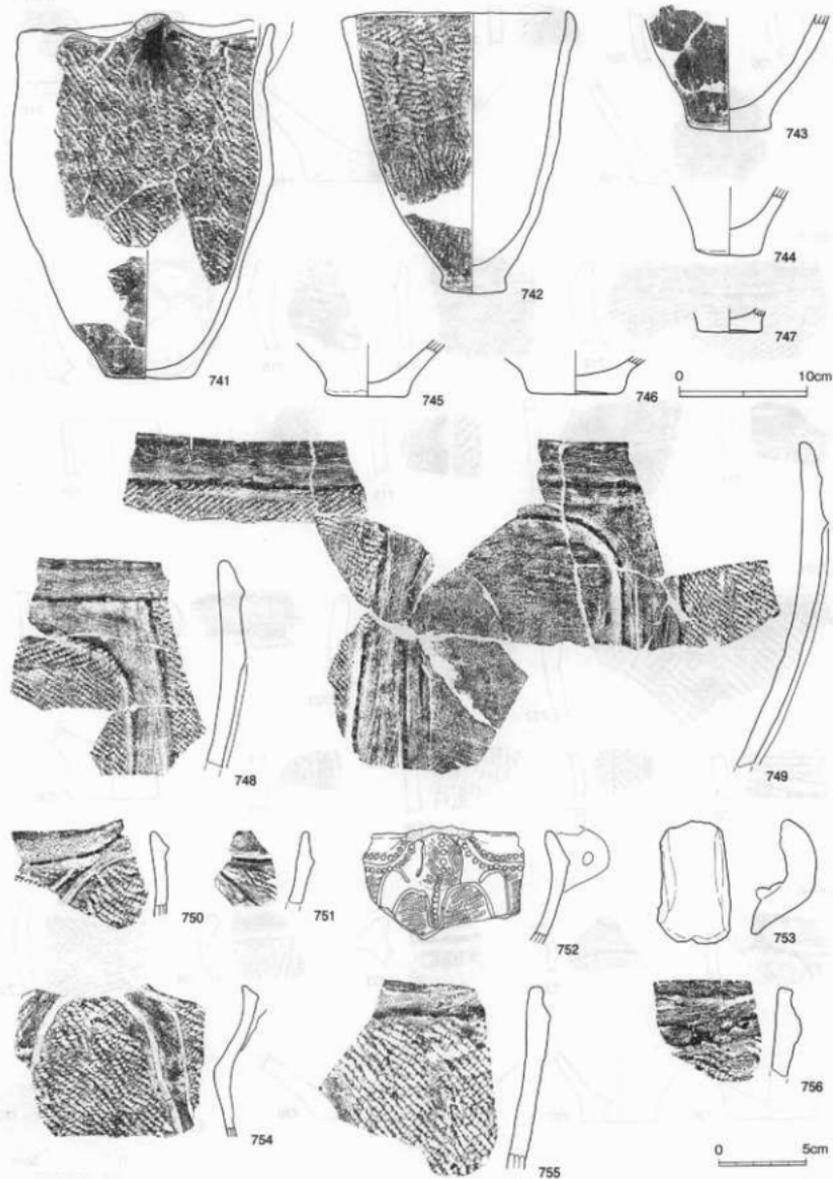
SK095



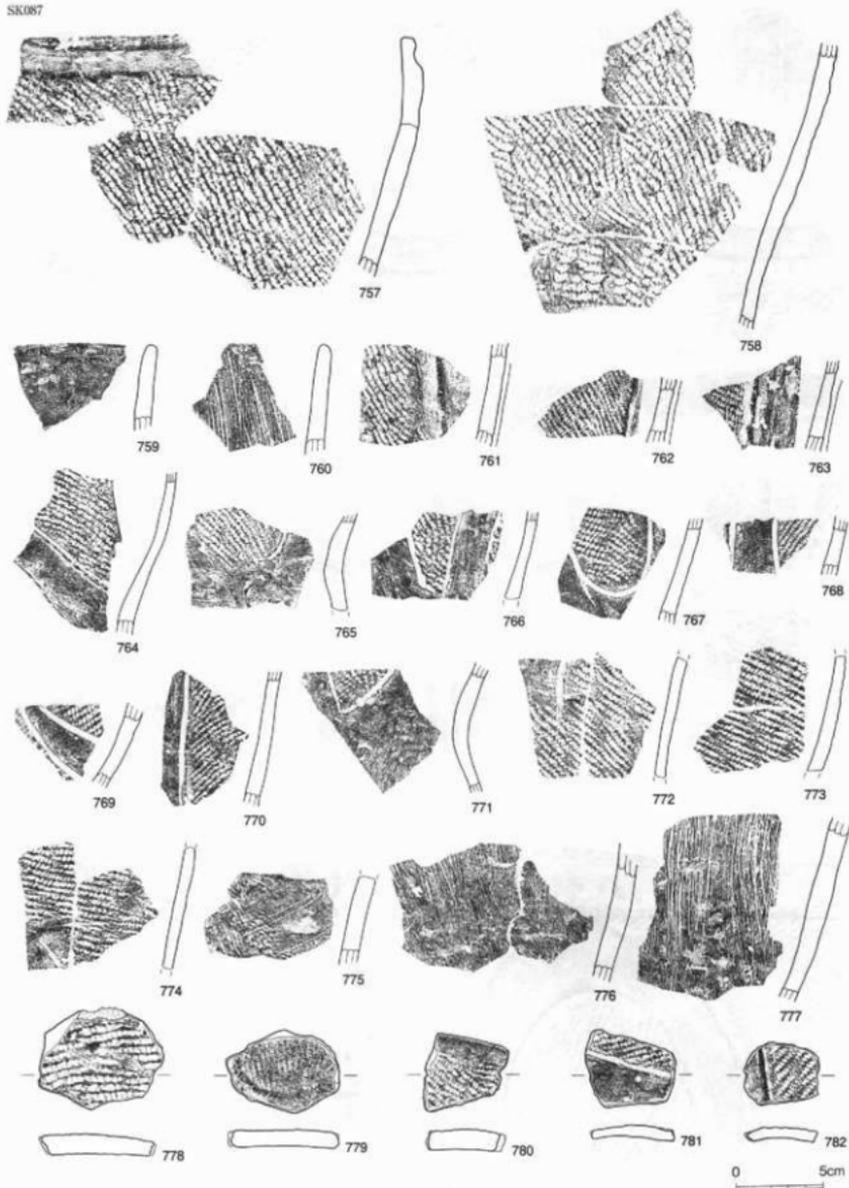
0 5cm

第92図 縄文時代土坑出土遺物29

SK087

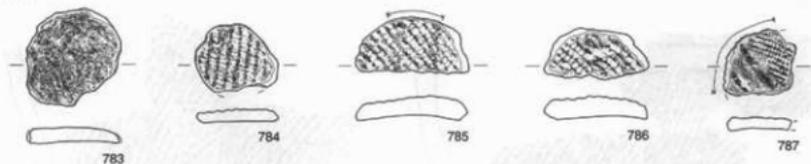


第93図 縄文時代土坑出土遺物(30)

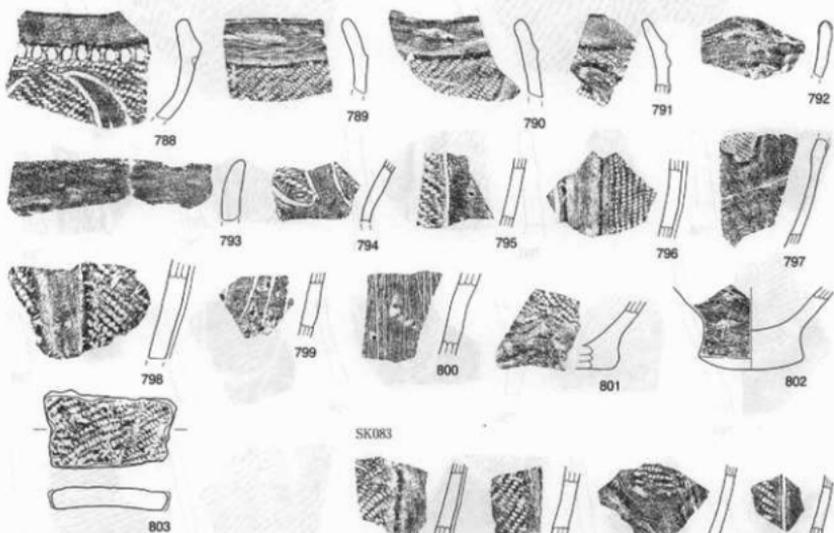


第94図 縄文時代土坑出土遺物(31)

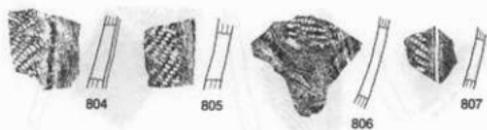
SK087



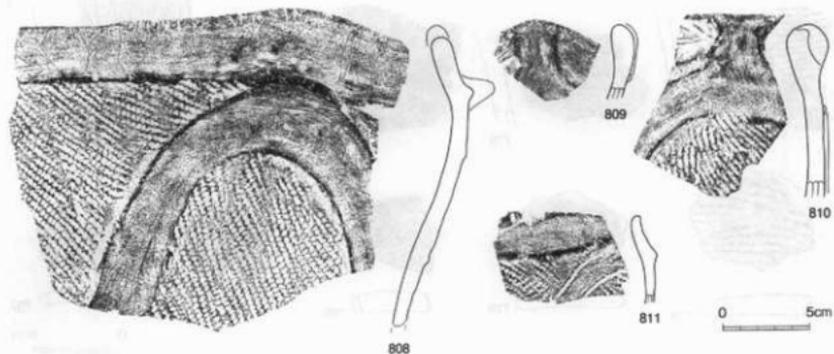
SK082



SK083

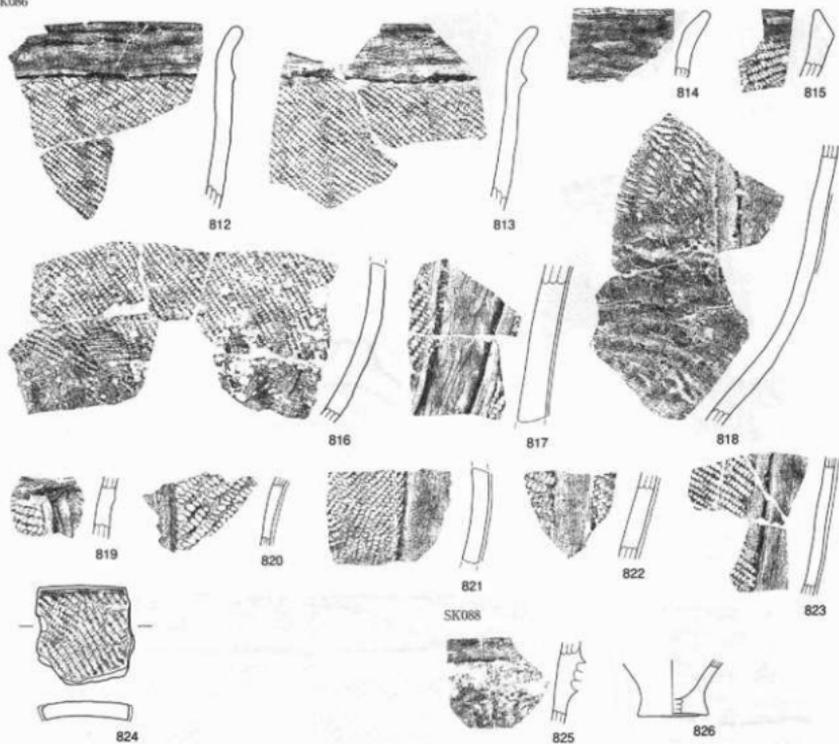


SK086

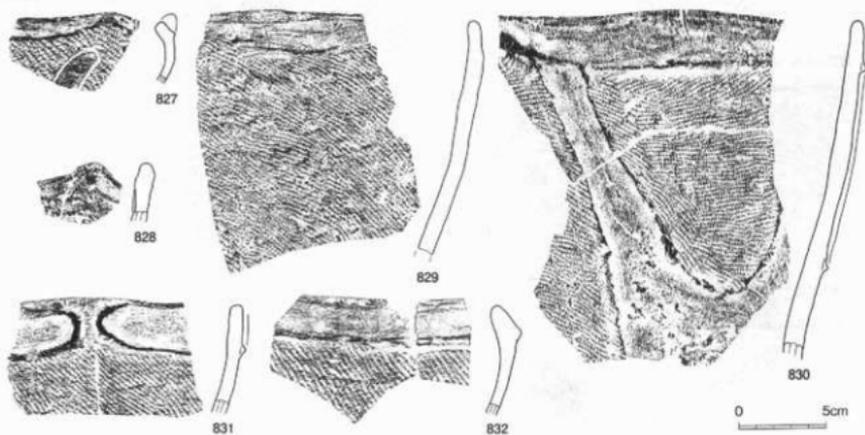


第95図 縄文時代土坑出土遺物32

SK086

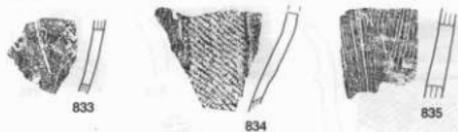


SK085

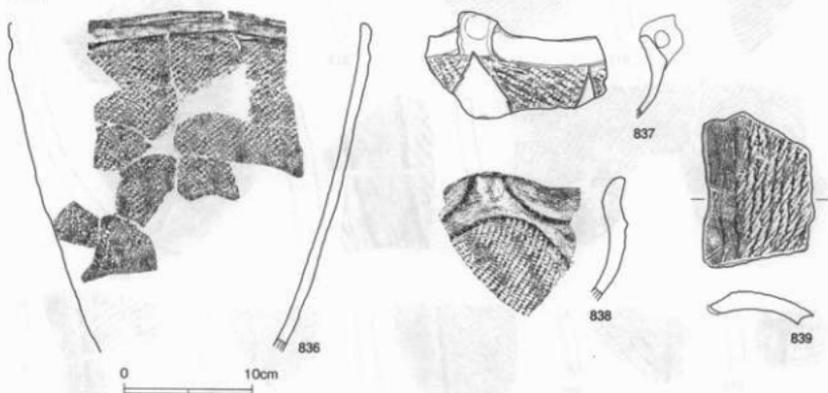


第96図 縄文時代土坑出土遺物33

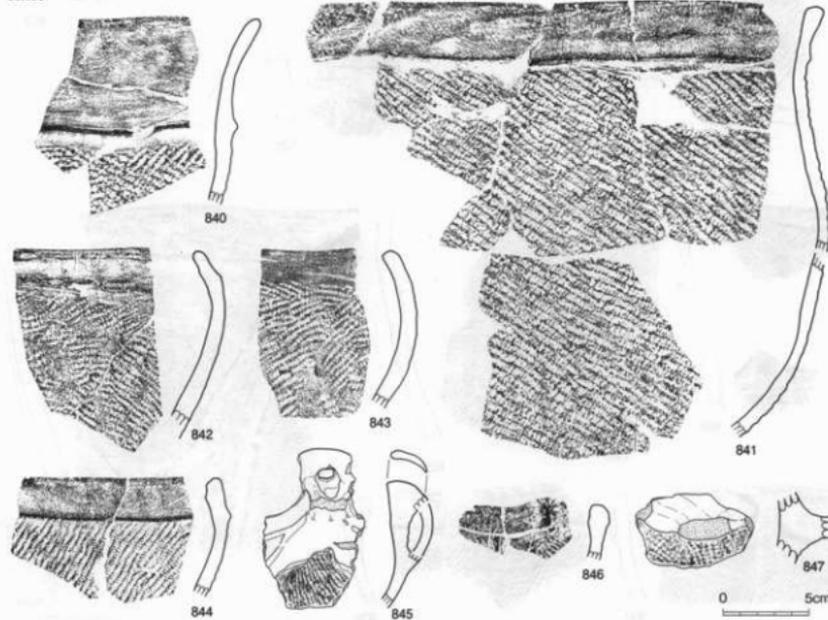
SK085



SK084

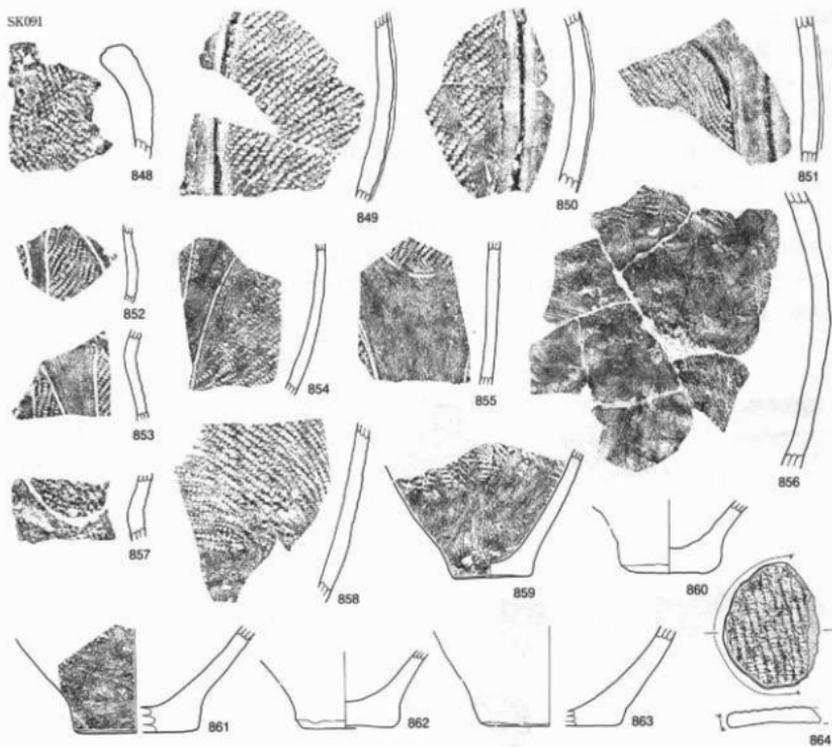


SK091

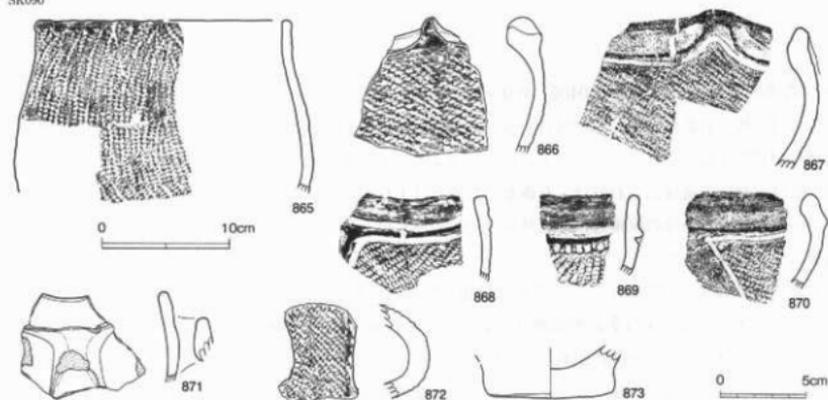


第97図 縄文時代土坑出土遺物34

SK091



SK090



第98図 縄文時代土坑出土遺物35

部片である。

SK095 (遺構：第63図 遺物：第92図731～740)

6E-07グリッド付近に位置する。平面形は歪んだ円形、規模は直径が約140cm～150cm、深さが約85cmである。底面はほぼ平坦である。時期は出土土器から加曾利E4式期と思われる。

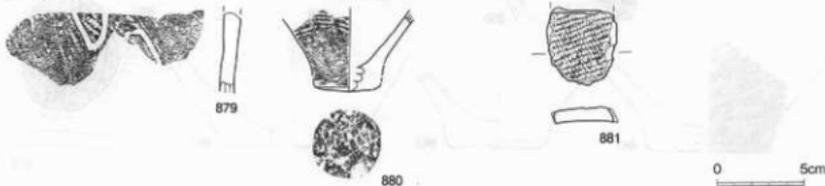
731・732は微隆線で器面を区画するものである。区画内に縄文を施文後、微隆線に沿って沈線を加えている。733は断面が逆「く」の字状に屈曲するものである。口唇部には沈線が施され、口縁部以下は微隆線によって文様が構成されるように見える。734は口縁部の微隆線区画の下に刺突列が施文される。735は無文の口縁部に凹線が施されることで、稜として縄文帯と区画している。736～738は底部である。

739・740は土器片鏟である。739は打ち欠きのままの製作であるが、丁寧に整形されている。溝も比較的明瞭である。740は図右側を欠損している。周縁は軽く磨かれている。

SK092



SK089

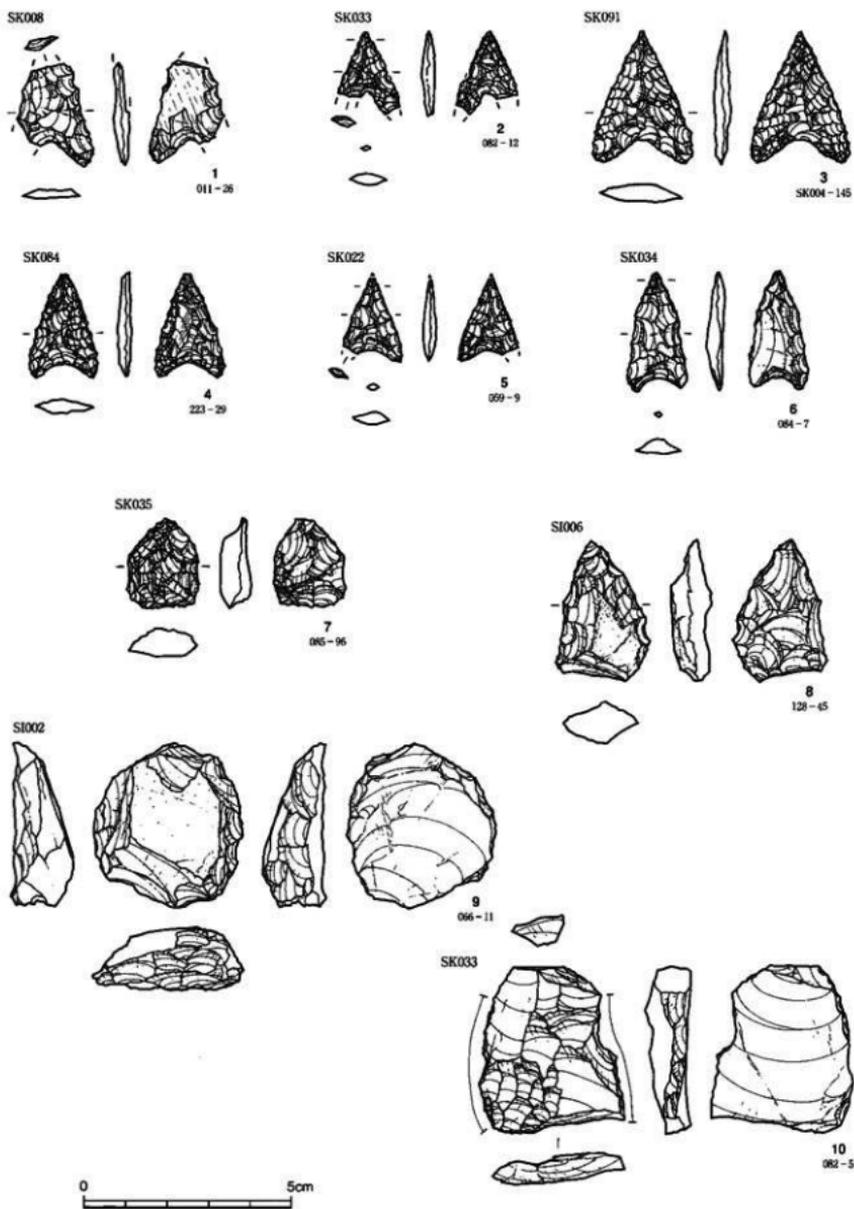


第99図 縄文時代土坑出土遺物36

#### 4 遺構出土石器 (第100～104図, 第9・10表, 図版35～37)

この項で扱う石器は、旧石器時代の石器と明らかに後世の所産と思われる砥石を除きすべて縄文時代石器として報告する。これらの石器は本遺跡出土縄文土器の主体である縄文中期末～後期初頭の時期の所産の可能性が高い。遺構出土石器は、石鏃など狩猟具は土坑からの出土が大部分であり、その他の磨石・石皿等の調理具や石棒等の呪術具は住居跡から比較的多く出土しているという傾向が読み取れる。以下、各器種について説明していく。

石鏃 石鏃は基部の形状をもとに5類に分類した(分類基準の詳細は遺構外出土石器の記載を参照)。1・2は1類である。1は裏面が節理状に剥がれ、その後、側縁の調整が見られる。先端部と片脚部が欠損しており製作途中の可能性が高い。2は基部が逆V字状に抉れ、両脚部先端を欠損するが細身の脚部をもつ。3～6は2類である。3・4は良質で透明な黒曜石製であり、やや円味のある側縁をもち精緻な調整加工が認められる。5は珪質頁岩製であり、基部に浅い抉りをもち脚部先端が尖る。6は黑色緻密質



第100図 縄文時代遺構出土石器(1)

安山岩製の長身のもので裏面に横方向からの主要剥離面を残置する。7は4類の基部が直線的な石鏃である。不純物の多い黒曜石を素材にして調整は荒く未成品の可能性もある。8は石鏃未成品である。玉髄製のもので表面に素材の礫面を残し器体が厚い。

削器 9・10は削器である。9は器体平面形が不整楕円形を呈し、右側縁から下端部にかけて表面からの急角度調整加工が施されて刃部としている。10はチャート製のもので、両側縁に急角度な細部調整が認められ、調整部位に使用痕と思われる微細剥離痕が連続する。

R剥片 11～13は細部加工を有する剥片（以下、R剥片と略記する）である。11は横長剥片素材の下端部に細部調整が施され、左側縁～下端部にかけて微細な剥離痕が連続する。12は縦長剥片の主要剥離面に平坦剥離と下端部に微細剥離痕が認められる。13はチャート製のもので両側縁に疎らな細部加工と微細剥離痕が連続する。

U剥片 14・15は微細剥離痕を有する剥片（以下、U剥片と略記する）である。14は縦長剥片素材の側縁末端に刃こぼれ状の微細剥離痕が見られる。15は右側縁に微細剥離痕が集中する。

磨製石斧 16は磨製石斧である。器体の刃部側と基部側を欠損するが、さらに刃部・基部の折面からの平坦な調整加工が認められる。

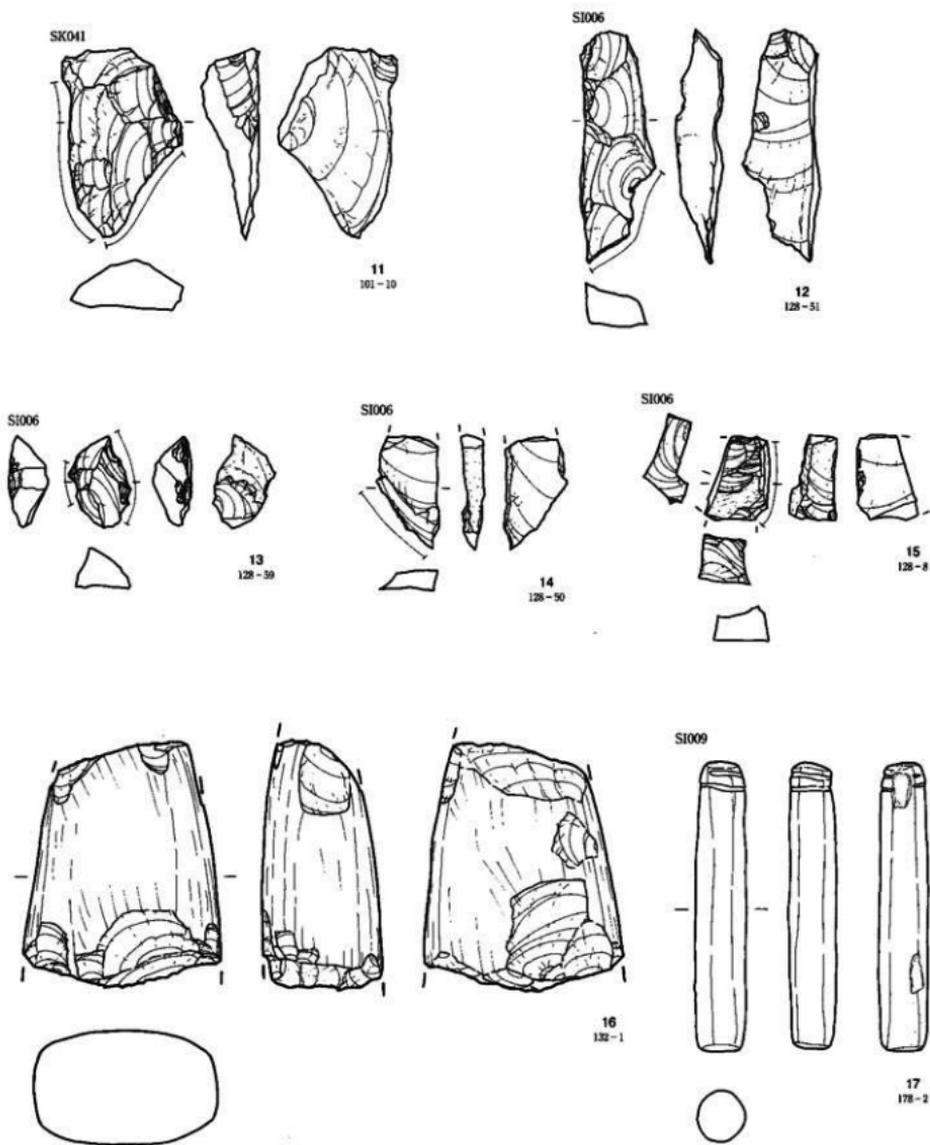
打製石斧 18・19は打製石斧である。2点とも基部側或いは刃部側を欠損するが、いわゆる分銅型石斧に属するものであろう。18の刃部は円味のある刃部となり、19の基部は直線的となる。

浮子 乳黄白色で多孔質の軽石製のもので、表裏面及び右側面は平坦に擦られている。平面形は三角形状に整形され一つの角側に円形の孔が斜めに穿孔されている。

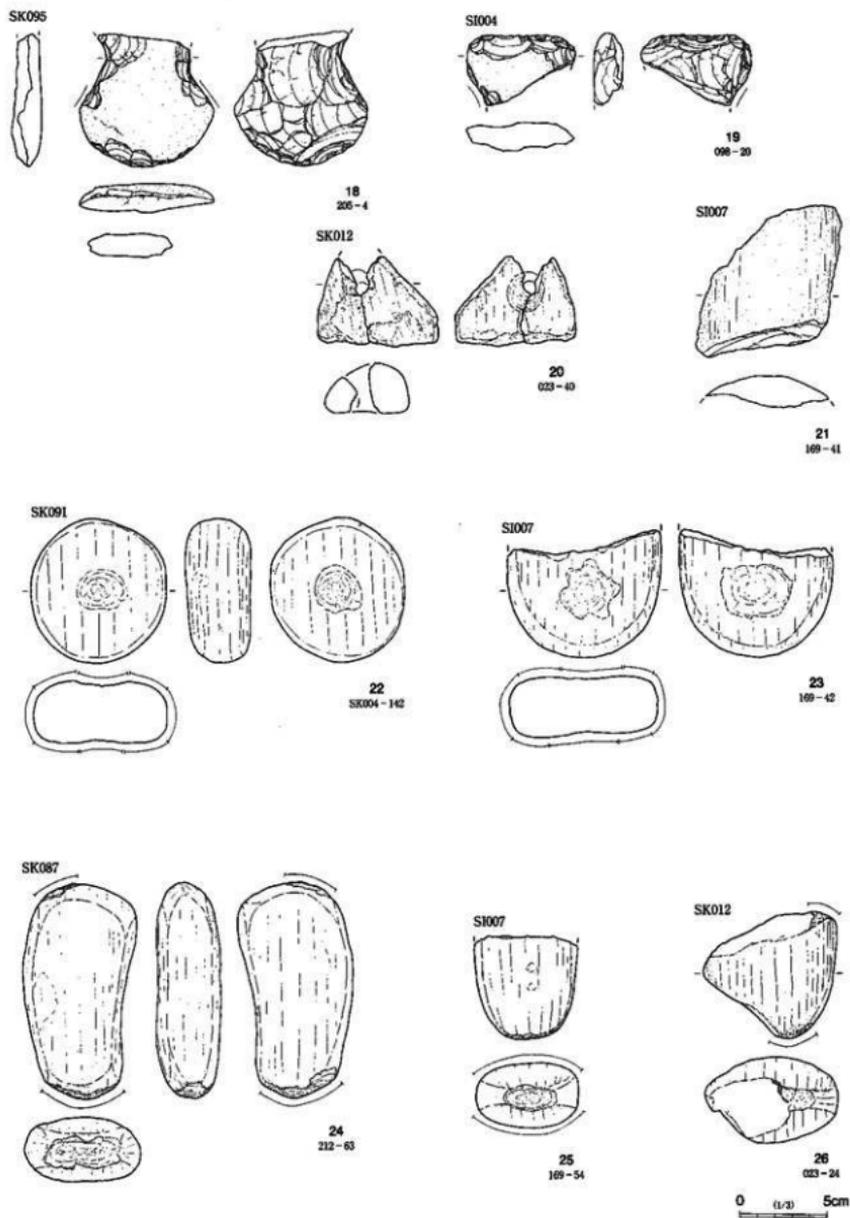
石棒 17・21は石棒である。17は小型の石棒で、頭部に横位に並行して2条の刻みが認められる。刻みは風化が著しく刻みが浅いところでは部分的に確認できなくなるが、刻みの窪みはV字状で何か細く堅い素材で沈線方向に引いたものであろう。石棒の横断面形は円形であるが縦方向に面取り状に研磨され、平坦な面の集合となっている。21は大型の石棒である。破片のため全体形状が窺い知れないが、復元推定では直径が10cm前後になる。表面は敲打によるものか凹凸が顕著である。

磨石 22～32は磨石である。磨石としたものは、擦り面をもつ石器すべてを磨石として総称する。従って窪み部や敲打痕が複合されるものも磨石に含めた。22・23は表裏面が平坦になるもので、2点とも表面と裏面に窪部をもつ。22は平面形が円形で表裏面とも中央部に窪み部があり、23は器体の1/3ほどを欠損するが平面形は楕円形を呈しやや片側に寄った窪み部が観察される。24～27は磨石の機能に敲石が加わるものである。24は長楕円礫の両端に敲打痕が見られ、先端が細くなる下端部側が敲打痕が顕著である。全面が擦り面となる。25は欠損するが長楕円形のものであろう。擦り面は表面及び裏面が顕著である。26は上下に礫を打ち欠いた面があり、その面と礫面との上下端部に敲打痕が認められる。打ち欠き面以外の全面が擦り面となるが、打ち欠き面の稜も磨られている。27は横断面三角形の棒状のもので、右側縁には敲打による急角度剥離と潰れが顕著であり、末端部の稜も敲打により潰れている。28～32は擦り面のみの機能を持つものである。28は長楕円形を呈するもので全面が擦り面となるが、上端面以外の擦り面は比較的平坦で擦りが著しい。29は表裏面の擦りが顕著である。30は小型のもので各面が面取り状に擦られ多面体のもとなっている。31は粘板岩製の扁平なもので、風化が著しいが表裏面に擦りが認められる。32は石皿の破片を転用したものと思われ、表裏面が擦り面となっている。

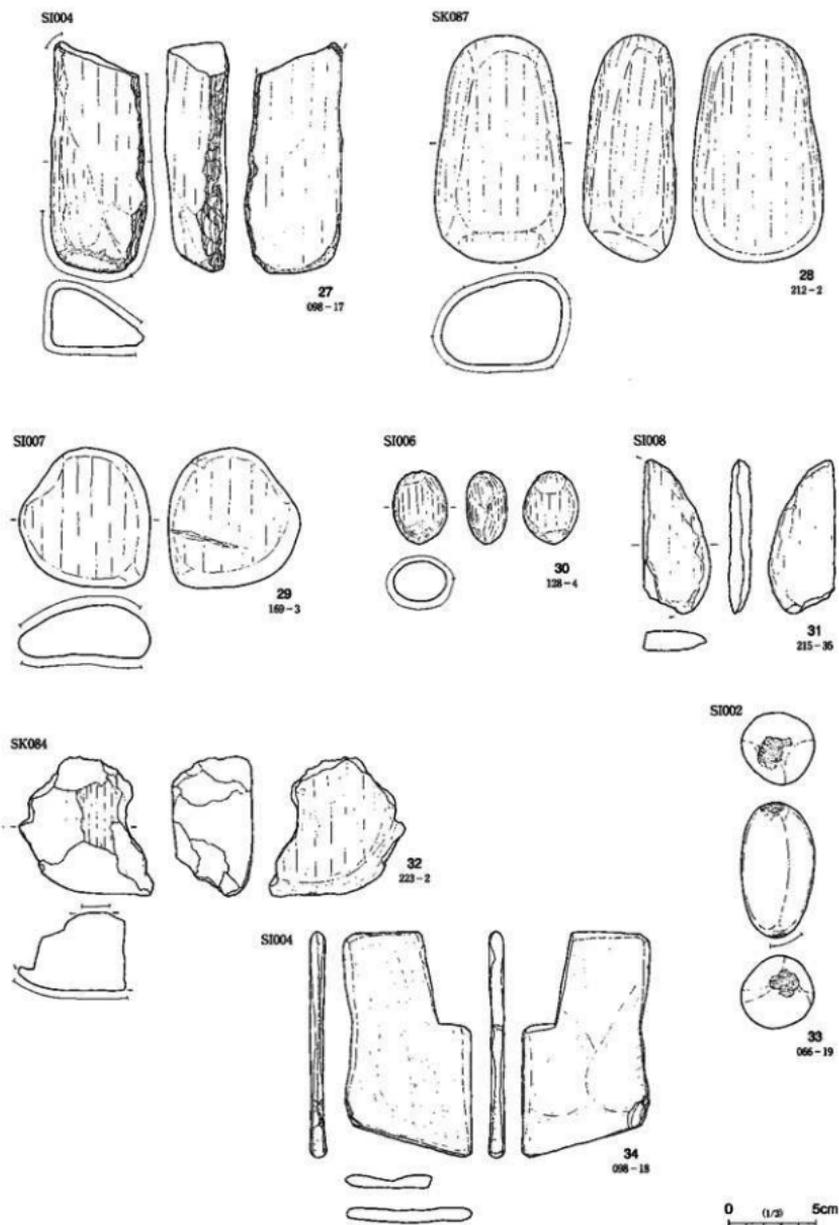
敲石 33は敲石である。棒状の形状の両端部に敲打痕が認められる。下端部の細い端部のほうが敲打痕



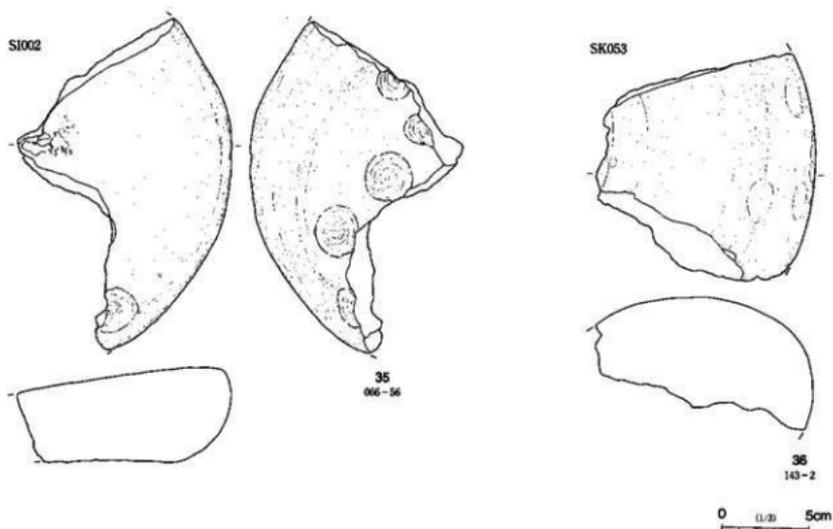
第101図 縄文時代遺構出土石器(2)



第102図 縄文時代遺構出土石器(3)



第103図 縄文時代遺構出土石器(4)



第104図 縄文時代遺構出土石器(5)

は顕著である。

砥石 34は砥石とした。縄文時代住居跡から出土しており該期のものとしては特異な形態をしている。扁平な長方形の礫を素材にして表裏面と側面に研ぎ面が観察される。表面には縦方向に2条ほどの顕著な研ぎが見られその部分が窪んでいる。裏面では4面ほどに研ぎ面が分かれている。さらに側面では表裏方向から斜めに研ぎが認められ左側縁は決れた側縁となっている。

石皿 35・36は石皿である。35は完形品の1/4程の破片である。表面は中央方向に向かって緩やかに窪み、裏面は平坦な面となり両面が研ぎ面となっている。表面には窪み部が1か所、裏面には5か所観察される。表裏面共に研ぎ面には煤状の変色が見られ表面中央部にはタール状の付着物が見られる。36は大型石皿の縁部分の破片である。縁は円味をもってカーブを描き中央に向かって急激に深くなるタイプの石皿と思われる。付着物は観察されないが、縁辺部に被熱によるハジケと思われる表面の剥落が観察される。

## 5 遺構外出土遺物

### (1) 土器 (第105～121図)

#### 第I群 加曾利E4式土器 (1～71)

第1類 1～18・29・34・39・48～53・60は器面の区画に微隆線のみが見られるものである。1は推定口径が22.0cm、現存高が17.4cmを測る。2は推定口径が21.0cm、現存高が11.4cmを測る。3は深鉢の胴部で、現存の最大径は39.3cmである。4は深鉢の底部であり、底径は5.7cmである。29・34・39は口縁部微隆線の直下に円形刺突文を連続して施文している。48～53は胴部片である。60は口縁部区画に微隆線を用いているが、胴部全面には縄文が施文され、区画等が見られない。

第2類 19・20・35・37・38・40は口縁部下端区画を微隆線で、胴部の区画を沈線でそれぞれ行うものである。35は波頂部の口縁部破片であり、突起が貼付されている。また、口縁部微隆線の直上には円形刺突文が連続して施文されている。

第3類 33・36・41・42～47・54～56・57・87は器面の区画に沈線のみが見られる。33には明確な口縁部区画が見られず、36の口縁部区画は沈線上に円形刺突文が連続施文されている。47は底部である。

第4類 22～28・30～32は把手及び波頂部の突起部分の破片である。22・23・25・27・28・31・32の口縁部付近には横状把手が貼付されている。24・26・30は波頂部の装飾突起である。

第5類 58・59・61～71は縄文のみが見られるものである。61～64は口縁部がやや内傾し、低い稜が作出され口縁部を区画する効果もたらされている。65は胴部屈曲部のあたりに一条の沈線が見られるが、区画文等の役割となるかどうか不明である。

第6類 72～86は櫛歯状工具による条線のみが施文されるものである。72・74～76の口縁部は無文となり、その下端は横方向の条線によって区画される。78～81は一条の沈線によって口縁部が区画されている。胴部の条線はいずれも縦位波状に施文されている。

## 第Ⅱ群 称名寺式土器 (88～228)

第1類 88・89・91～171は沈線区画内に縄文等が施文され、いわゆるJ字文を主体として文様が構成されるものであり、称名寺1式に相当する。

a種 88・89・91～110・140～145・147～171は沈線区画内に縄文が施文され、いわゆるJ字文を主体として文様が構成されている。96・97・101は縄文が施文されている区画内にさらに刺突文が加えられる。101は底径5.3cm、現存高15.0cmほどの比較的小型の土器である。無文部を観察すると、施文前に器面を丁寧なナデ、ケズリによって調整され、器表面は平滑である。105は無文部に刺突文が施文されている。薄手の器壁で、縄文施文後に沈線による区画を加えている。106は壺形土器の頸部付近と思われる。上面からみると、やや角状になっていることが確認できるが、全体の器形は明確でない。159～162は区画が四角形状であり、本群のモチーフ中でも異色の存在である。

b種 122～126・128～134は垂下する隆線が組み合わさるものである。130は径1.5mmほどの細い棒状工具による連続刺突が隆帯上に、隆帯の直下及び口縁部には同工具によって押引文が施文されている。

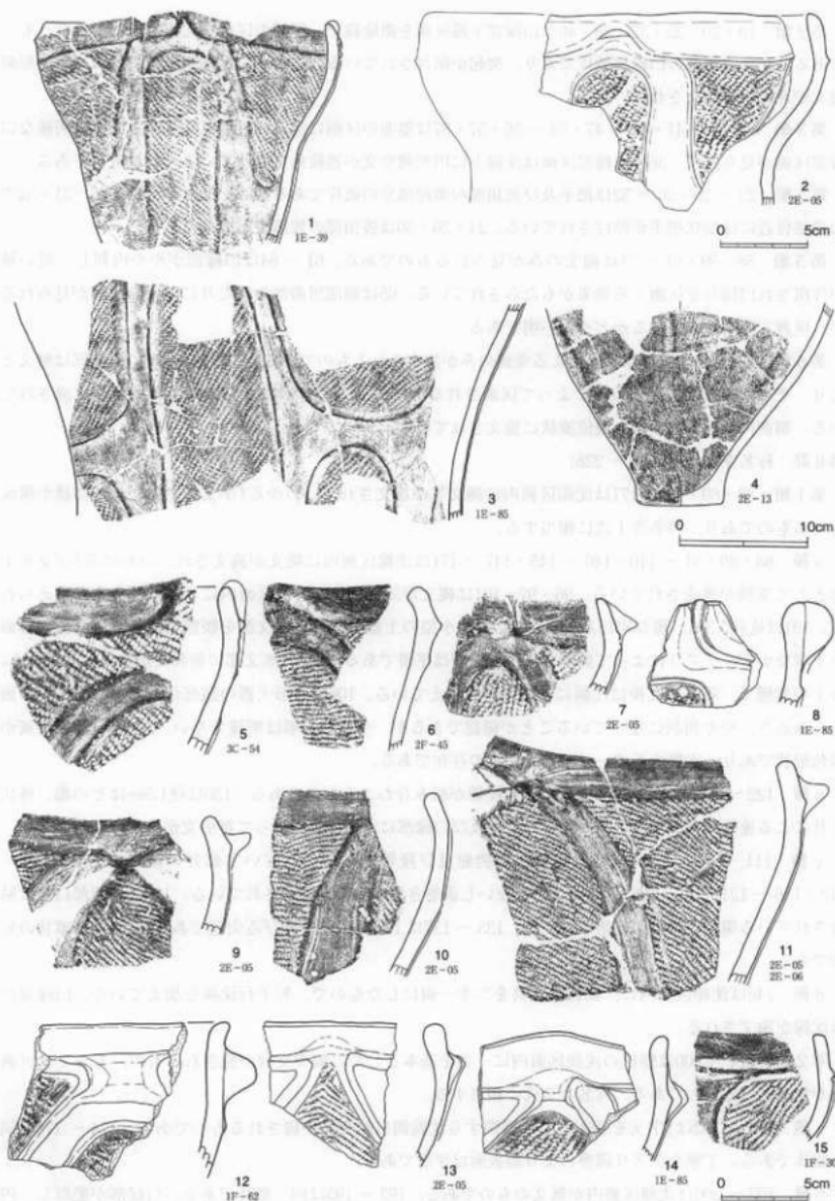
c種 111～121・135～139は波頂部の突起及び隆帯が貼付されている部分の破片である。111～113・116～121・127・138・139はJ字状ないし渦巻き状の隆帯が貼付されている。127は波頂部口縁に貼付されている環状の隆帯が剥落している。135～137は上方へ大きく伸びる突起である。137は鳥頭状の形状である。

d種 146は沈線区画内に、細棒状工具を二本一組にしたもので、短平行沈線を加えている。口縁部には沈線が施文される。

第2類 174～200は幅狭の沈線区画内に一条を基本とした刺突文列が施されるもの、もしくは区画内が無文となるものである。称名寺2式に相当する。

a種 174～192はJ字文を基本として展開する沈線間に刺突文が施されるものである。174～176は同一個体である。丁寧なケズリ調整により器表面は平滑である。

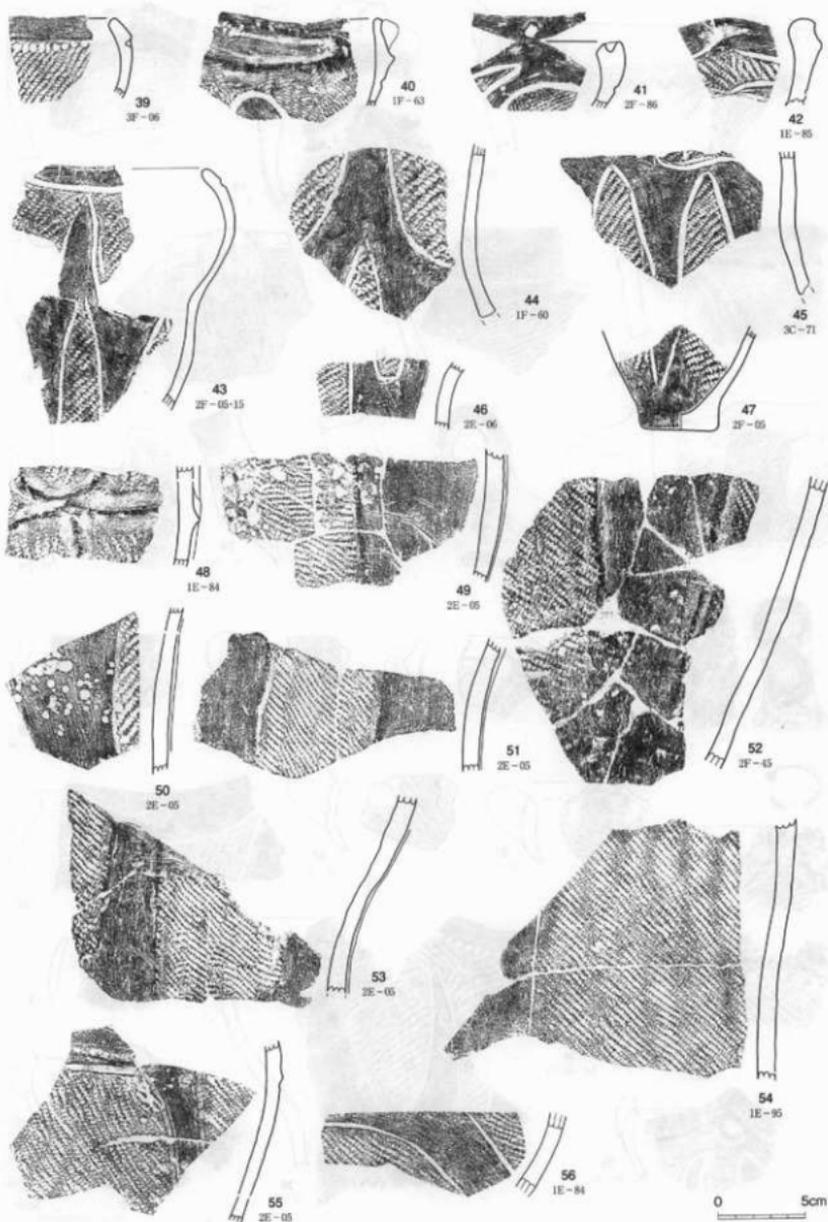
b種 193～200は沈線区画内が無文のものである。193～195は同一個体である。口縁部が肥厚し、円形刺突文が施文される部分が見られる。198には垂下する隆線が見られる。



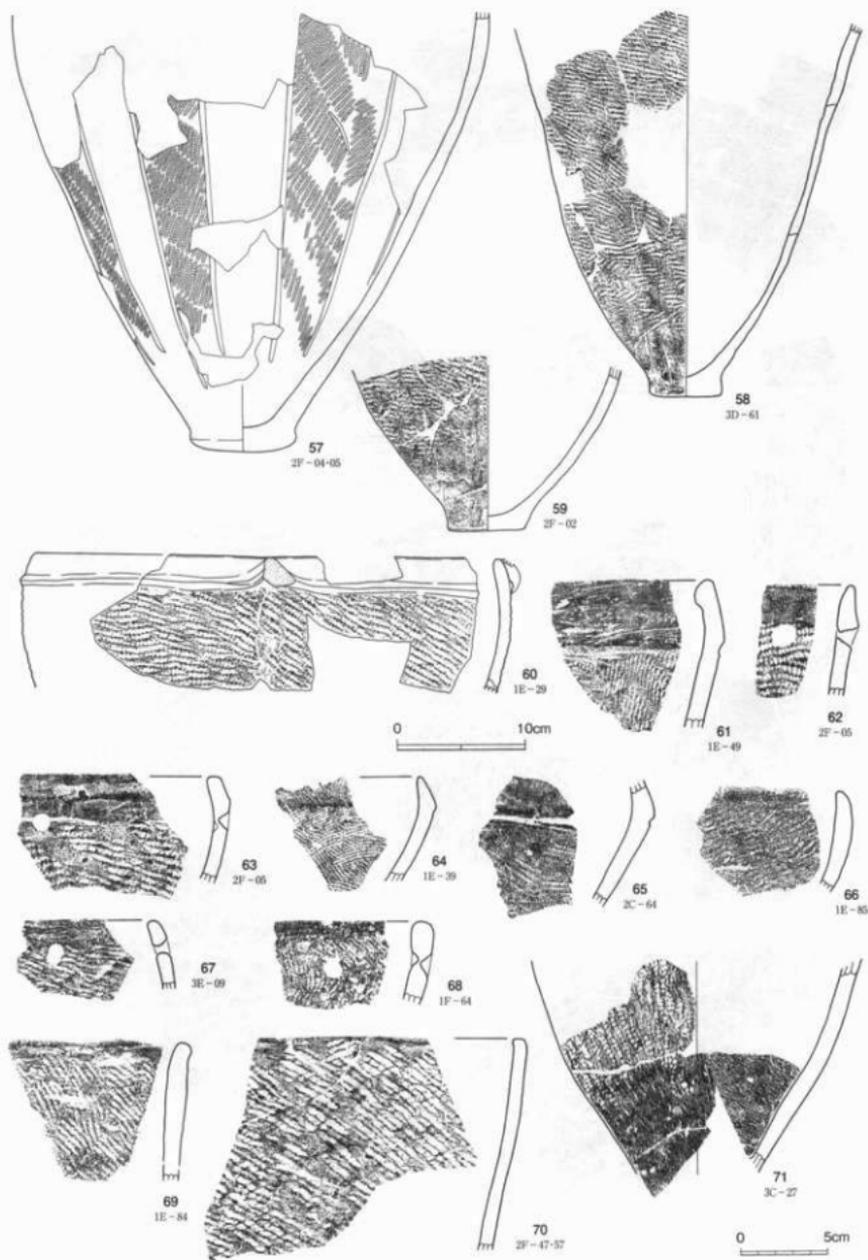
第105図 縄文時代遺構外出土土器(1)



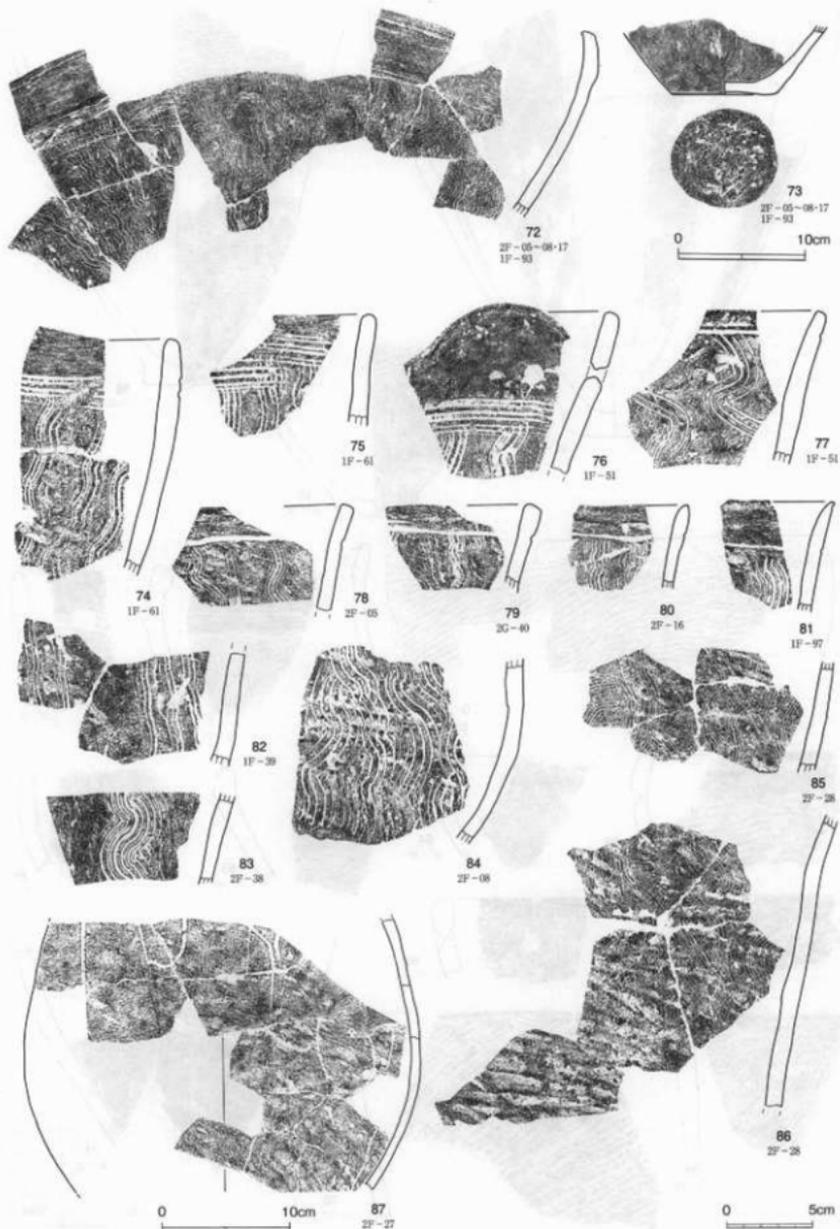
第106圖 縄文時代遺構外出土器(2)



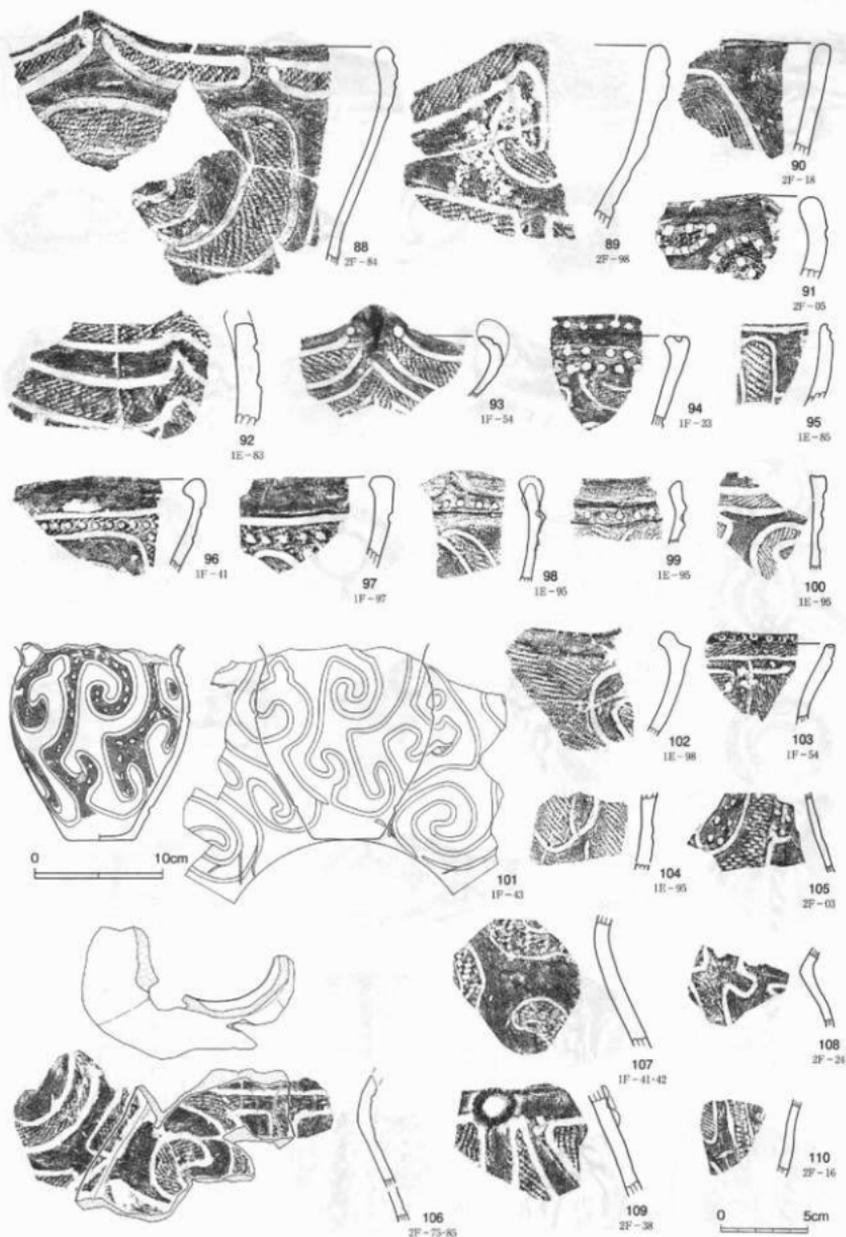
第107図 縄文時代遺構外出土土器(3)



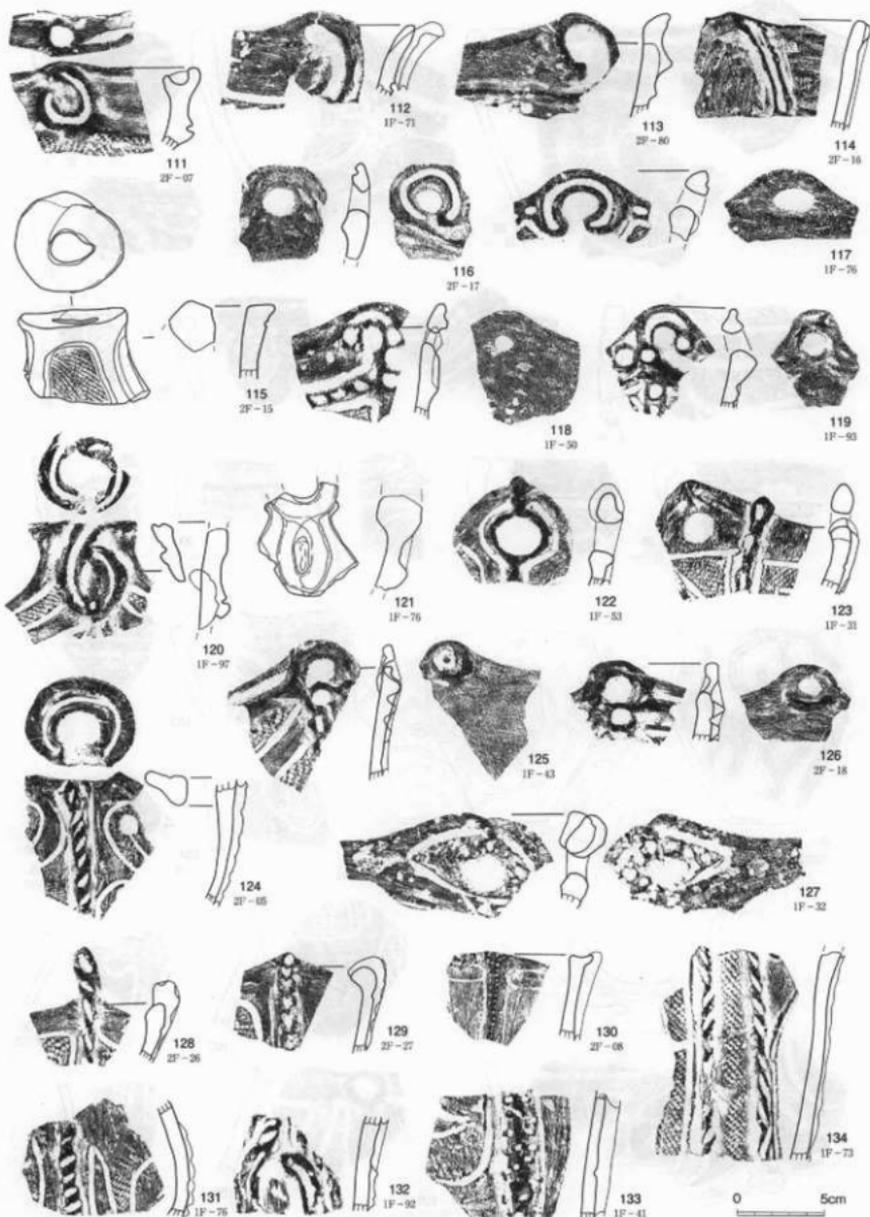
第108圖 縄文時代遺構外出土土器(4)



第109図 縄文時代遺構外出土土器(5)



第110図 縄文時代遺構外出土土器(6)



第111図 縄文時代遺構外出土土器(7)

第3類 201・216・218・223・225は刺突文の集合体である列点文を主体とするものである。201～204は同一個体である。口縁部は沈線によって区画され、部分的に丸棒状工具を押し引き、粘土をわずかではあるが、抉るように削り取っている。214は先尖状工具を用いて波状の連続刺突列を多段に施文するようである。全体で文様を作出しているどうかは明確でない。216は縦位の単沈線列の多条構成となっている。200は幅5.5mmで三本一組の櫛歯状工具を用いた刺突が、器面を充填するように施文される。だが、図右側の沈線を境として無文帯が形成されているようである。221・222は二列一組の角状刺突列が見られる。全体の構成は不明である。225は櫛歯状工具を用いた単沈線列をランダムに施文している。

第4類 217・224・226～228は口縁部を除き、目立った文様が見られないものである。217は口縁部に193～195と同様の刺突が見られる。226～228は同一個体である。226には、疎らながら、二本一組の刺突を施している。227と228の拓影図上側に刻みが施されているが、これは輪積み部分の結合力を高めるための加工と判断される。

#### 第三群 堀之内1式土器(88～228)

第1類 229～240は垂下する波状沈線が見られるものである。229～234は櫛歯状工具による条線が波状に、235～240は単沈線が波状に施文される。また、234～237は縄文地上施文にされる。235は推定口径13.0cmを測る比較的小型の深鉢である。

第2類 241～257は波状ないし曲線状の沈線文を主体として文様が構成されるものである。250・251は同一個体である。胴尖部が屈曲し、横位区画の役割を担う隆線が形成される。隆線には丸棒状工具の側面を押圧する刻みが施される。

第3類 258～273・277～279は口縁部が幅広の無文帯となり、胴部に沈線文を主体とする文様が展開するものである。磨消縄文技法による文様も見られる。口縁部及び胴部区画文は弧状の隆線などで連結され、交点には「丸」状及び「8」字状の貼り付けが施されている。

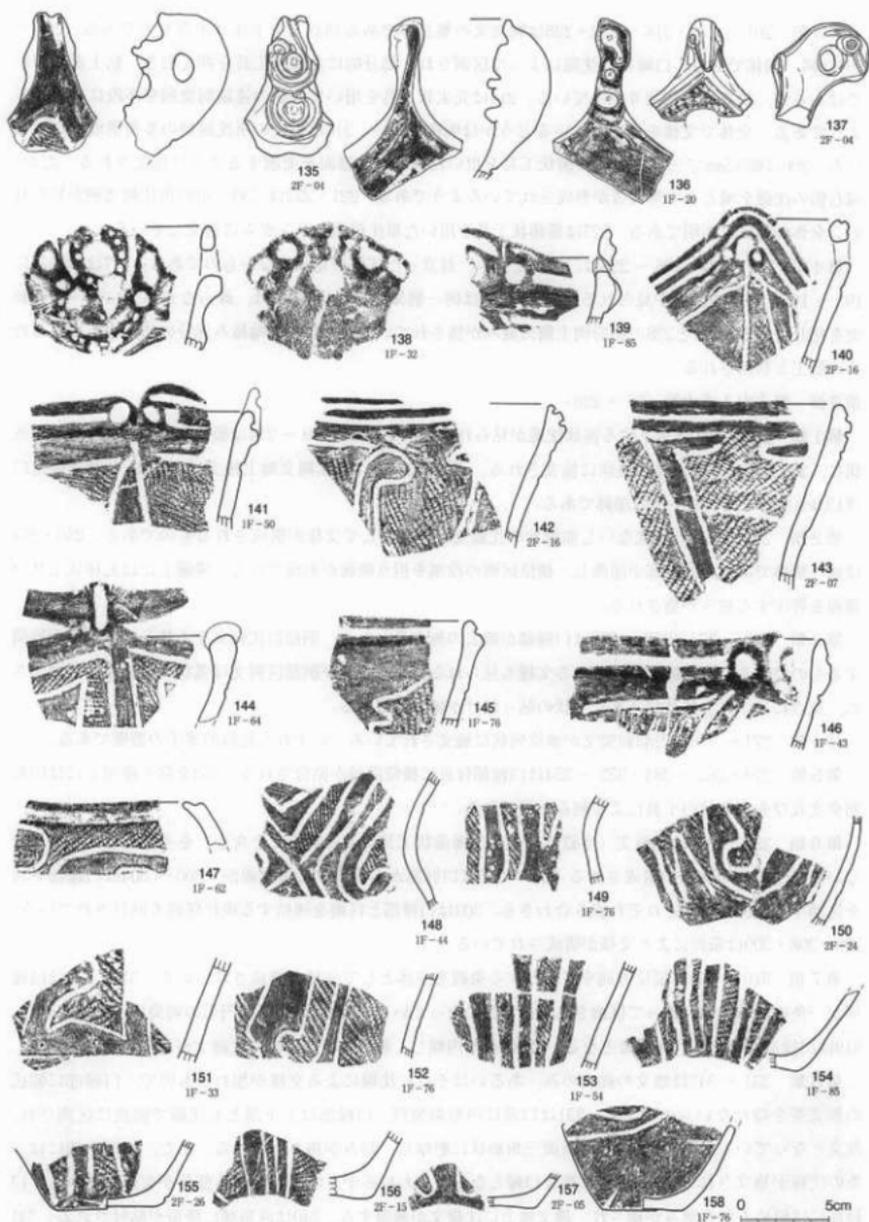
第4類 274～276は円形刺突文が横位列状に施文されている。いずれも比較的手薄の器壁である。

第5類 279・282～284・352～354は口縁部付近に横位隆線が貼付される。352を除く隆線上には円形刺突文及び先割れ状の工具による刻みが施される。

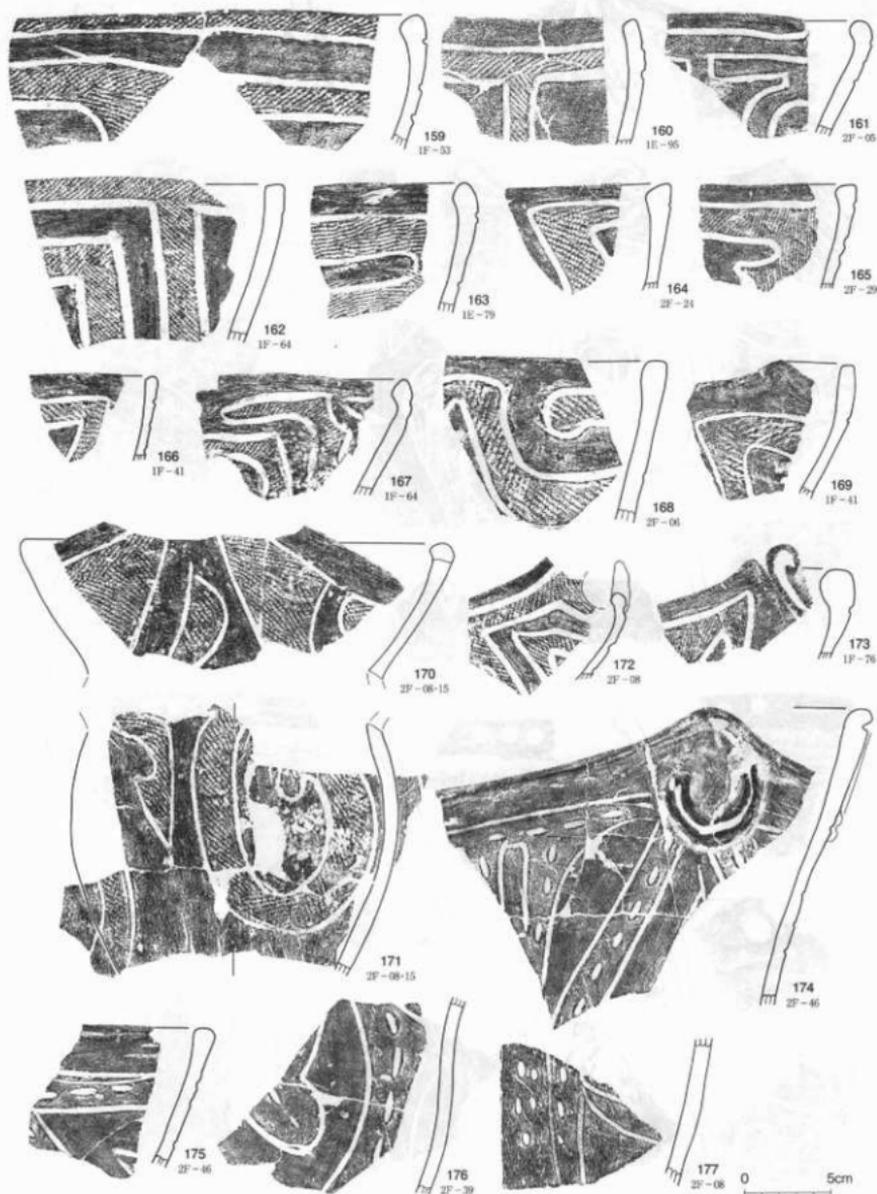
第6類 285～309は沈線文(半截竹管文及び櫛歯状工具による条線文を含む)を主体として、櫛歯状ないし格子目状の文様が構成される。297・305は口唇部から垂下する短隆線が、300～304は口縁部下端を区画する横位隆線がそれぞれ組み合わせる。303は口縁部と区画を連結する縦位隆線も貼付されている。299・308・309は条線により文様が構成されている。

第7類 310～330は縦位方向を基本とする条線を主体として文様が構成されている。310・312は口縁部が一条の横位沈線によって区画され、無文帯となっている。313は口縁部に円形の刺突列が施文される。319は口縁部が肥厚し、無文帯となる。320はやや内傾し、肥厚する口縁部に沈線文が施文される。

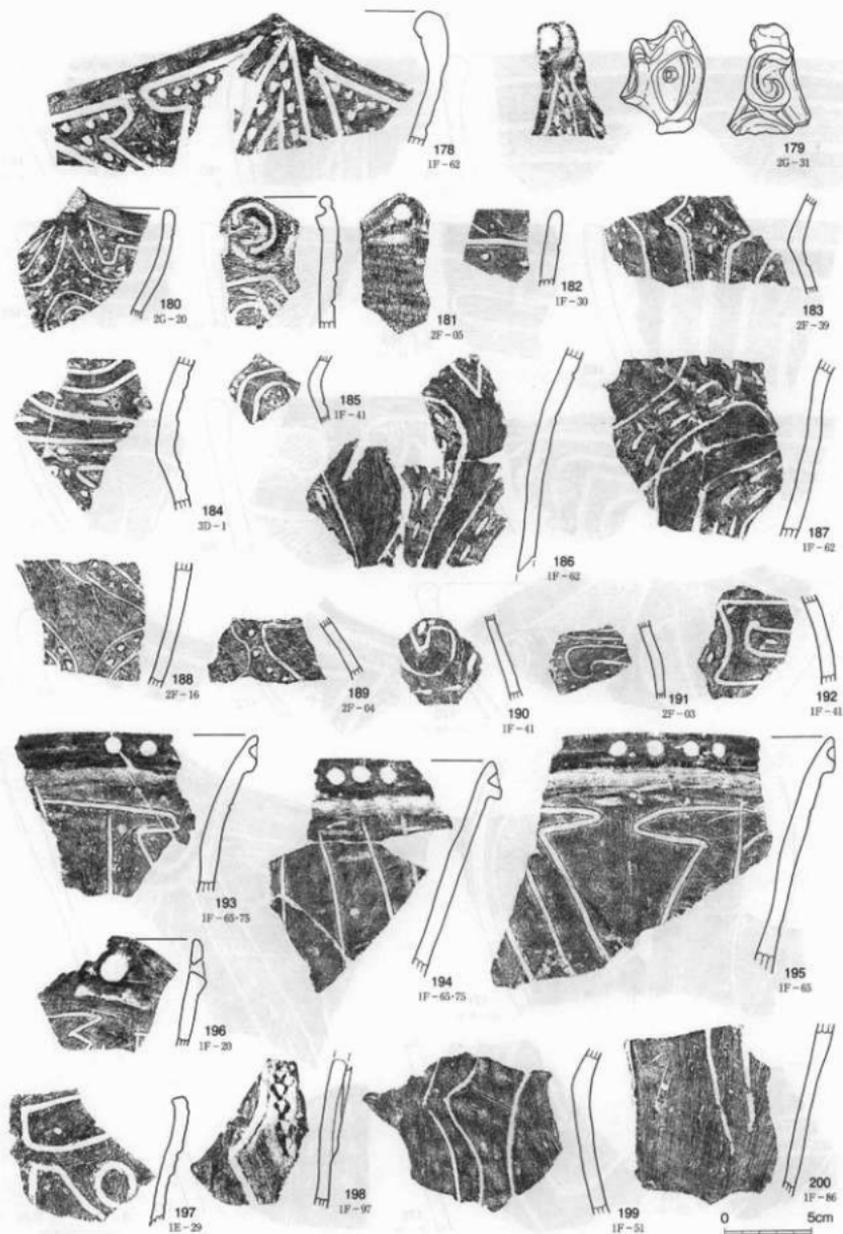
第8類 331～347は地文の縄文のみ、あるいはそれに沈線による文様加わるもので、口縁部に幅広の無文帯を持たないものである。331は口端に円形刺突列、口縁部は上下端とも沈線で幅狭に区画され、無文となっている。332は口縁部が断面三角形に肥厚し、刻みが施されている。また、口縁上部には一条の沈線が施文されている。337は複合口縁となると思われるが、内側へ伸びる部分が欠落している。口縁部には斜め方向の刻みが施され、縄文地上に沈線文が展開する。340は波頂部に隆帯が貼付される。341はやや幅広の口縁部を持ち、その下端は隆線によって区画される。342・343は胴尖部に横位隆線が貼付さ



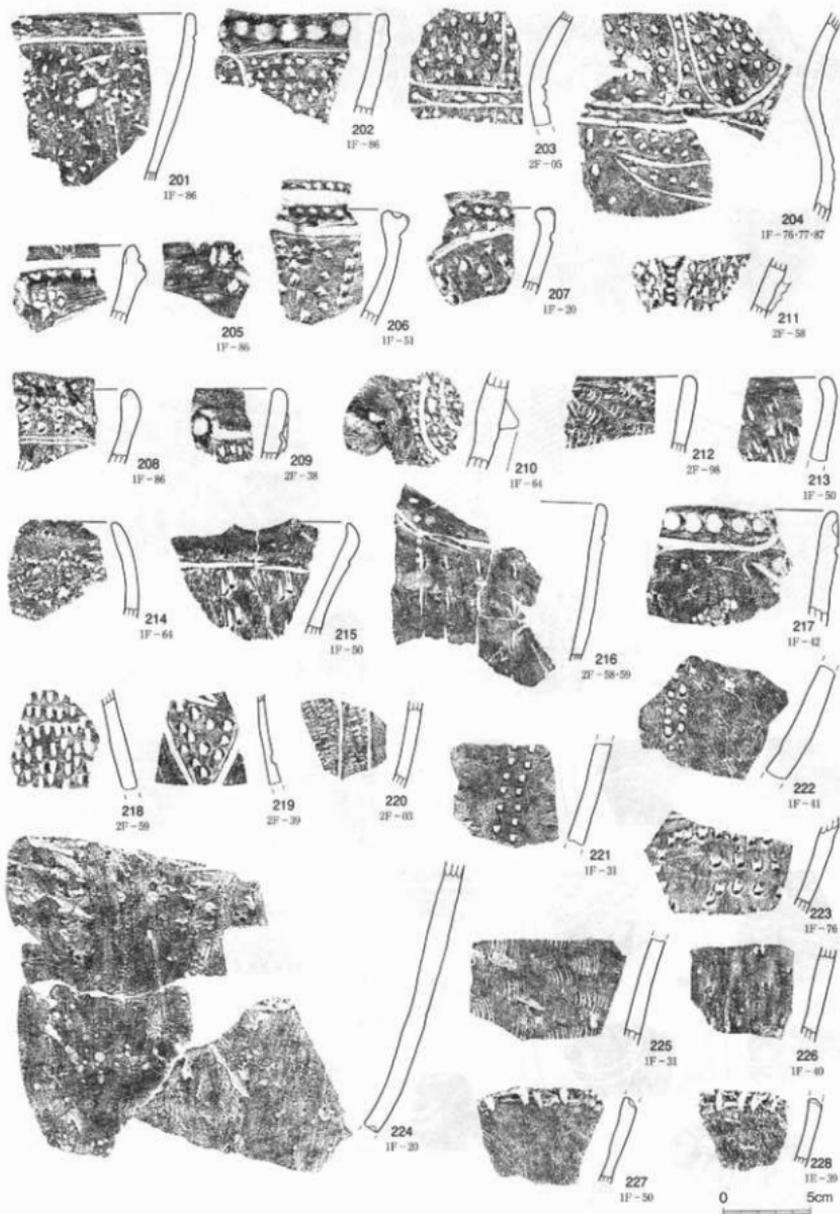
第112図 縄文時代遺構外出土土器(8)



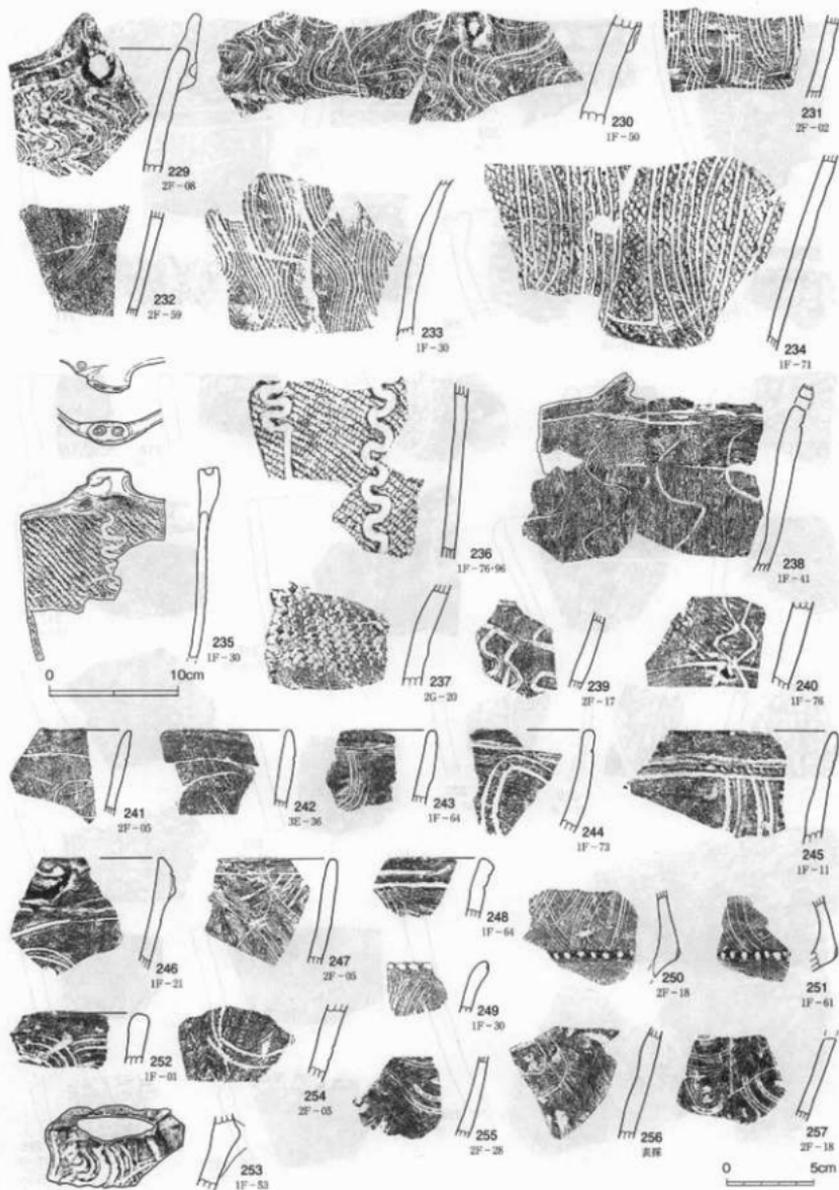
第113図 縄文時代遺構外出土土器(9)



第114図 縄文時代遺構外出土土器(10)



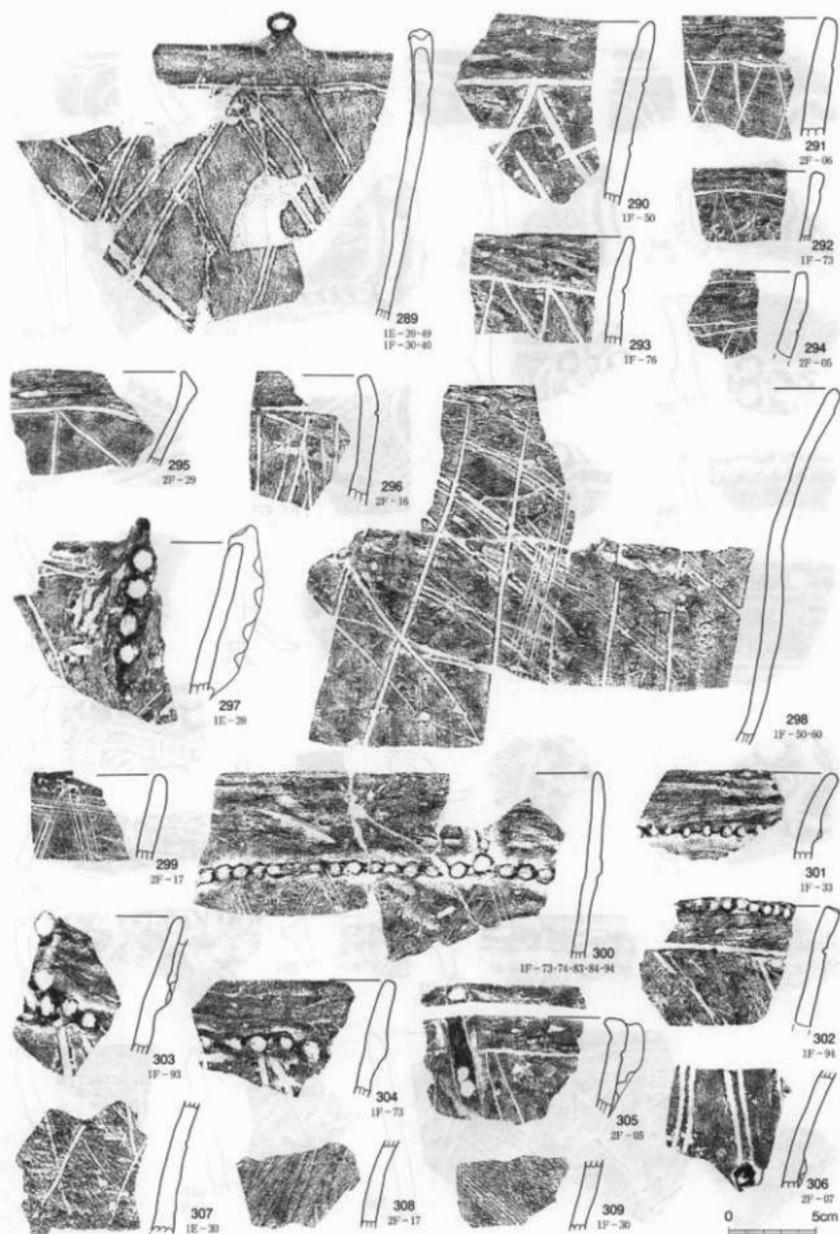
第115図 縄文時代遺構外出土土器(1)



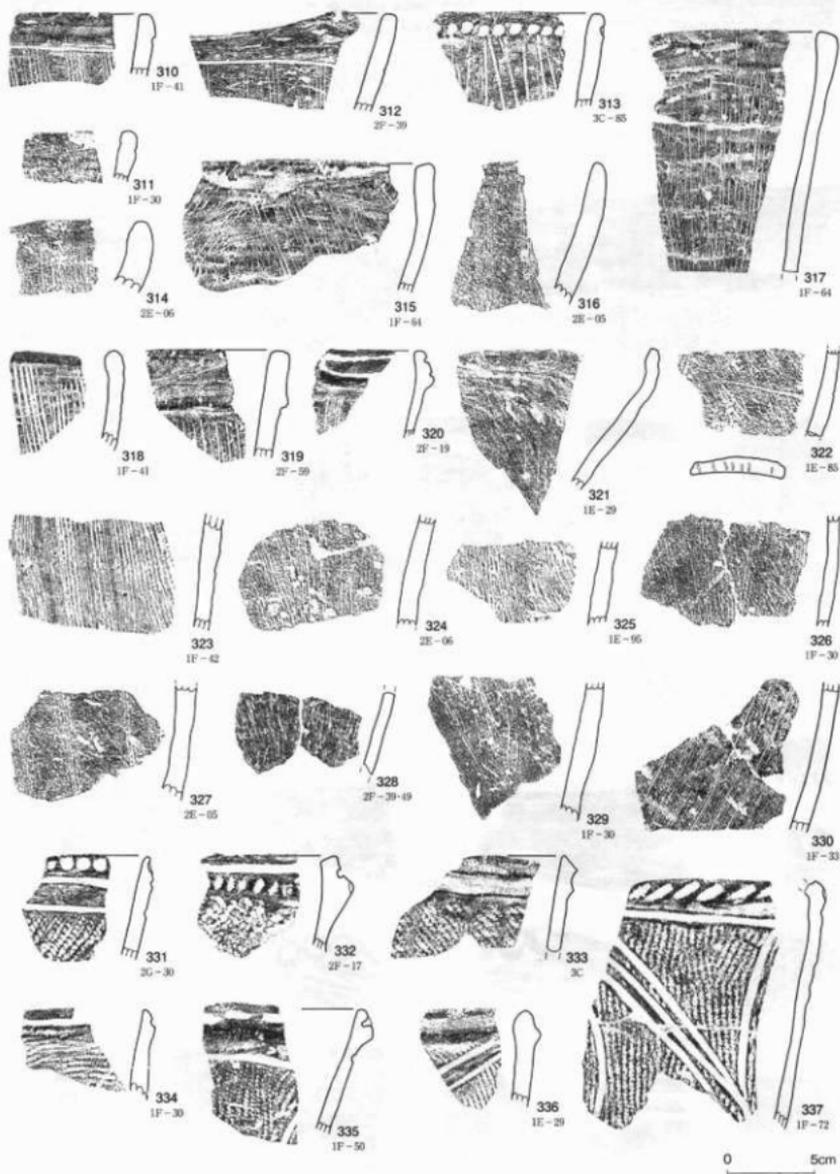
第116図 縄文時代遺構外出土土器12



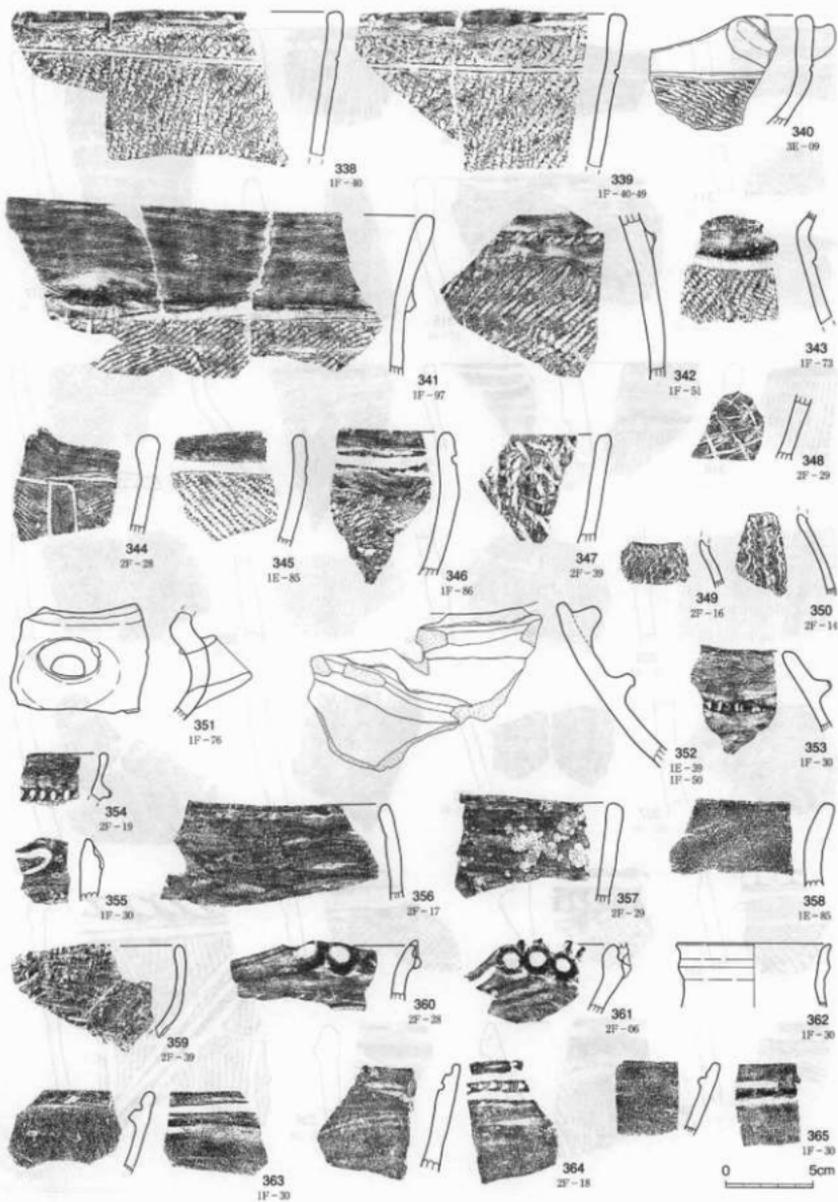
第117図 縄文時代遺構外出土土器



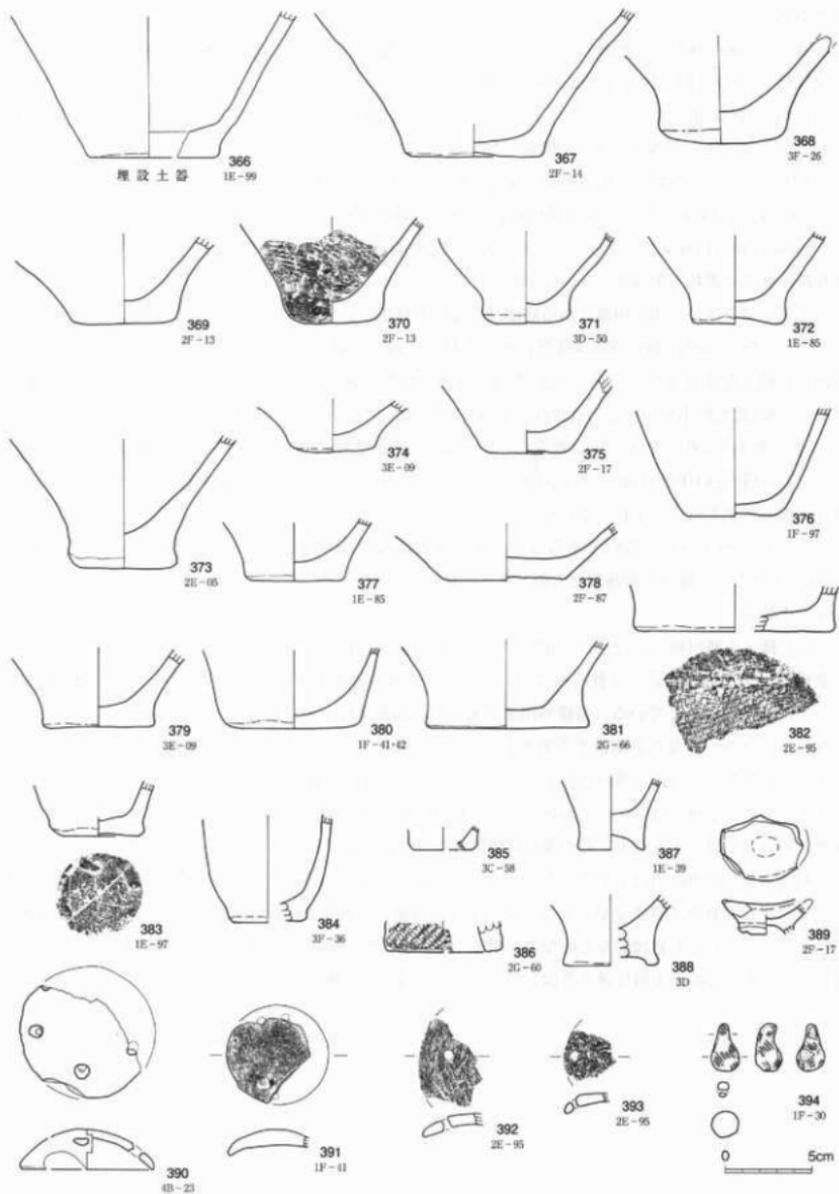
第118図 縄文時代遺構外出土土器④



第119図 縄文時代遺構外出土土器(15)



第120図 縄文時代遺構外出土土器16



第121図 縄文時代遺構外出土土器(7)

れている。

第9類 349・350は同一個体である。薄手の器壁に、縦位方向の波状沈線が密に施文されている。

第10類 351は注口土器の注口部の破片である。

第11類 348は網目状の燃糸文が施文されている。東北地方の粗製土器の系統と考えられる。1点のみの検出であり、便宜上本群に含めて掲載した。

第12類 356～365は口縁部の刺突、沈線、隆線等の文様以外は、基本的に無文となるものである。360・361は波状口縁であり、波頂部口縁部に円形の刺突を持つボタン状の貼り付けがなされている。363～365は複合口縁気味であり、口縁部内面に突帯が付されるものである。

第IV群 底部・蓋状土製品等（366～394）

第I群～第III群に分類が困難である底部及び蓋状土製品等を一括した。

（底部：366～388）368・373は底部に厚みを持ち、底部に低い台が付いたようになっている。370の外表面には縄文が施文されている。382の底面には網代痕が、383の底面には木葉痕がそれぞれ確認できる。384～388は比較的小型の土器の底部片である。387・388の底部はやや上げ底状になっている。

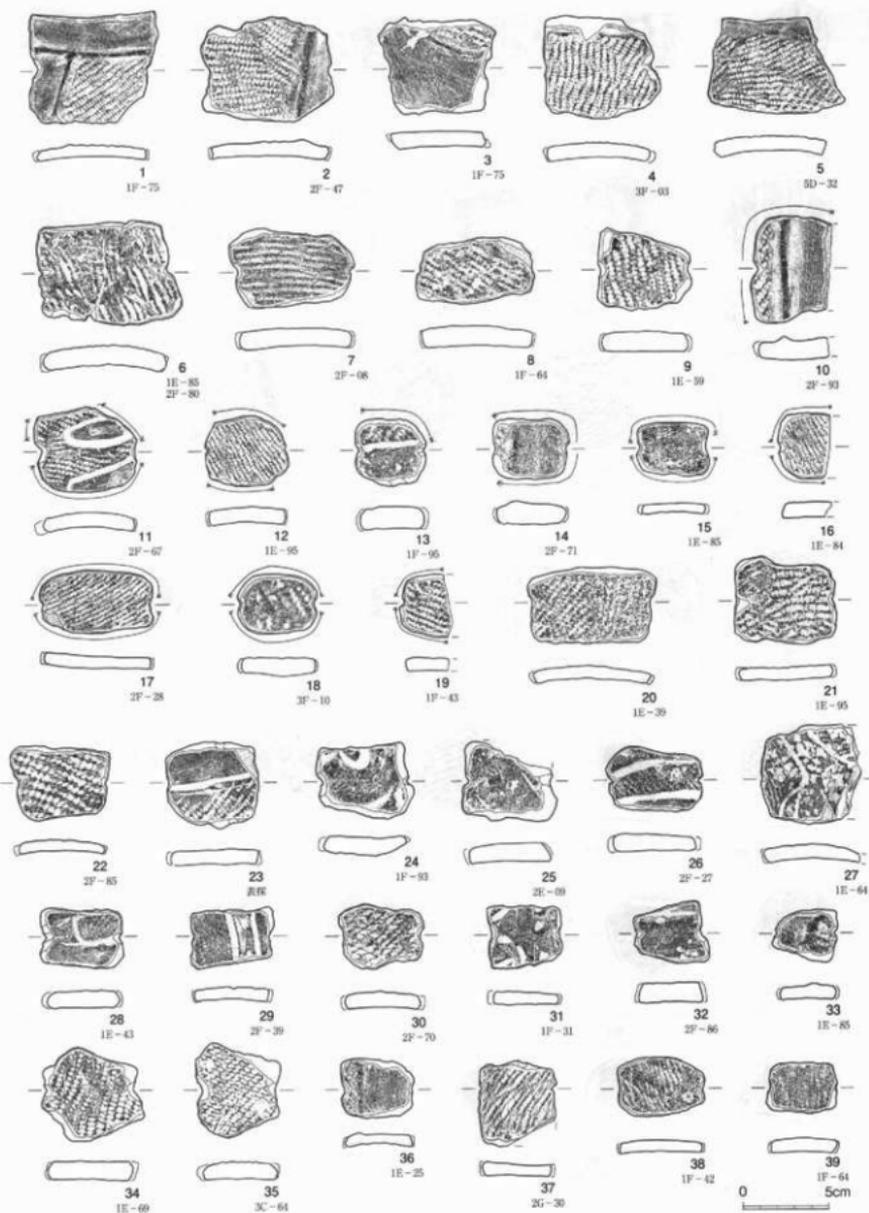
（蓋状土製品：390～393）390は推定口径が8.8cm、器高が2.4cmを測る。残存部に4か所の穿孔が認められる。391は推定口径が6.0cm、器高が1.6cmであった。少なくとも3か所の穿孔が確認できる。392・393は破片である。1か所ずつ穿孔を認める。

（その他）389は小型の器台であろうか。推定最大径は5.1cm、最小径は3.2cm、現存高は2.0cmである。394は把手状の貼り付けが剥落したものと考えられる。

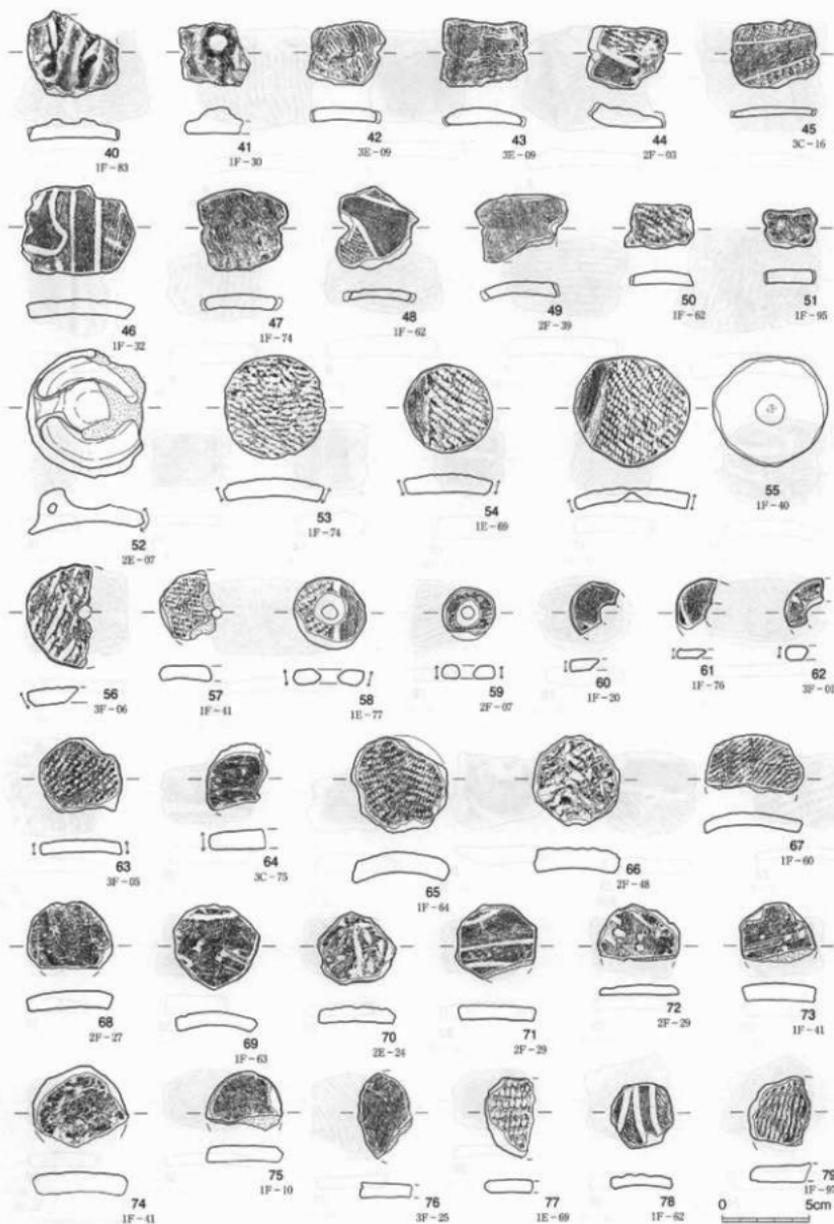
## （2）土製品

土器片錘・土製円板（第122～124図1～104、図版32～34、第7～8表）

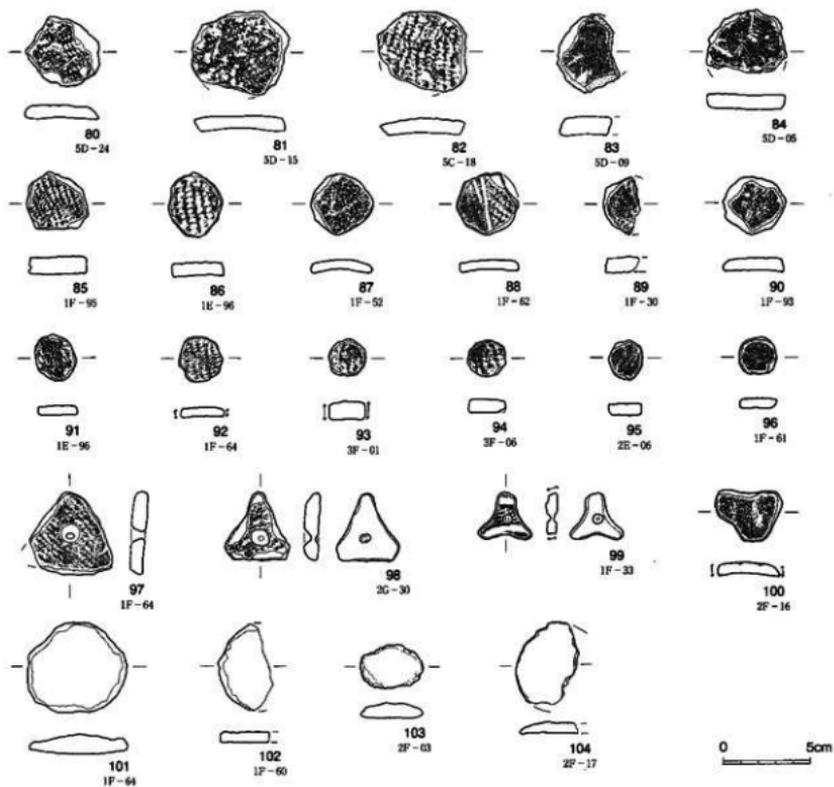
遺構内出土の土器片錘・土製円板については、各遺構の記載文中に記した。その一覧及び計測値等については第7表に示している。遺構外出土のものの一部を第122～124図に示した。図化しなかったものを含め、全点の一覧及び計測値等を第8表に示した。使用している土器片は加曾利E4式及び称名寺式が大半を占めており、ほぼ遺構の時期と一致している。土器片錘の製作について見ると、基本的に打ち欠きのままである。丁寧に打ち欠いて形状を整えるものは多いが、研磨しているものはほとんど見ない。一見研磨していると思えるものも、その多くは使用によって磨り減ったものと考えられる。溝については大半が一對であり、その作出は丁寧ではないが明確に認識できるものが多い。また、土製円板については、大きさ及び穿孔の有無多様が見られる。55のような断面三角形形状の凹みは、56～62の穿孔になる途中の形態なのか、それとも意図的なものなのか明確でない。また、80～84のように打ち欠きのままのものは、製作途中のものなのか土器片錘を意図しているものか判断が困難である。



第122図 縄文時代遺構外出土土器片・円板等(1)



第123図 縄文時代遺構外出土土器片鏢・円板等(2)



第124図 縄文時代遺構外出土土器片・円板等(3)

第5表 遺構出土縄文土器集計表  
(竪穴住居跡)

遺構	グリッド	中期		後期				不									備考
		加曾利E		称名寺		堀之内		無紋		縄文		底部		小破片			
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	重量			
SI 001	1E-68	28	640	0	0	2	23	33	400	61	1050	0	0	3			
SI 002	1E-67	130	2700	2	22	0	0	134	1317	306	4179	5	217	98	粘土塊		
SI 003	1E-39	14	144	2	17	4	26	38	250	60	640	1	7	11			
SI 004	2F-80	44	750	8	126	1	13	99	850	145	2010	2	19	0	粘土塊		
SI 005	1F-53	9	219	52	650	26	410	134	1180	137	2240	10	232	58	粘土塊		
SI 006	3F-05	37	994	2	36	19	191	128	1100	446	6700	13	434	176	粘土塊		
SI 007	1F-21	43	890	153	2560	94	1200	456	4270	185	3080	19	296	40	粘土塊		
SI 009	1E-76	20	424	0	0	0	0	30	271	57	513	0	0	27	炭化物		

(土塊)

遺構	グリッド	中期		後期				不									備考
		加曾利E		称名寺		堀之内		無紋		縄文		底部		小破片			
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	重量			
SK 001	3C-57	2	18	0	0	0	0	25	130	24	186	0	0	0	粘土塊		
SK 002	3C-55	16	452	0	0	18	130	20	142	37	600	1	20	2	粘土塊		
SK 003	3C-55	23	650	0	0	1	20	59	620	127	1750	2	66	20	粘土塊		
SK 004	3C-37	22	466	0	0	1	9	41	350	67	1125	1	18	0			
SK 005	2E-17	14	364	0	0	0	0	29	284	41	560	1	90	20			
SK 006	2E-05	5	144	0	0	0	0	16	66	11	150	0	0	4			
SK 007	2E-05	5	60	0	0	1	50	10	114	19	316	0	0	0			
SK 008	1E-95	23	410	0	0	8	90	41	480	86	1350	0	0	10			
SK 009	2E-04	37	700	4	30	0	0	39	600	87	1750	0	0	6			
SK 010	2E-05	3	44	2	24	3	48	15	250	20	34	1	24	0			
SK 011	2E-05	22	700	0	0	0	0	26	350	48	1200	0	0	20			
SK 012	2E-18	78	2550	5	70	3	48	57	850	159	2600	1	30	18	粘土塊		
SK 013	3C-54	24	1000	2	26	3	44	16	330	33	1500	0	0	0			
SK 014	3D-03	24	950	0	0	0	0	20	200	82	1540	1	35	5			
SK 015	1E-98	7	260	1	10	1	32	17	254	57	950	2	20	10			
SK 016	2F-49	0	0	0	0	0	0	4	40	0	0	0	0	0			
SK 017	2E-79	96	2750	0	0	0	0	146	1668	228	4150	7	142	20	粘土塊		
SK 018	2F-71	28	700	22	280	0	0	89	750	68	950	2	70	18	粘土塊		
SK 019	2F-61	15	394	0	0	3	38	28	376	48	850	0	0	17			
SK 020	2F-52	0	0	0	0	0	0	3	44	2	23	0	0	2			
SK 021	2F-60	5	88	2	24	0	0	20	156	10	128	0	0	4			
SK 022	2F-42	2	16	4	24	0	0	20	174	19	382	0	0	10			
SK 023	2E-23	29	500	0	0	0	0	55	700	90	1550	1	30	5	粘土塊		
SK 024	2F-45	11	332	1	17	1	10	40	395	33	1150	0	0	4			
SK 025	2F-45	13	472	1	16	0	0	17	240	50	1040	0	0	5			
SK 027	2E-24	18	370	0	0	0	0	27	268	48	800	0	0	3			
SK 028	2D-98	0	0	0	0	0	0	3	34	10	136	0	0	9			
SK 029	3D-51	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0	1			
SK 030	2F-65	2	29	2	20	0	0	16	66	24	492	0	0	2			
SK 031	2E-13	28	630	4	36	0	0	92	650	92	1950	2	46	28			
SK 032	2E-16	2	86	16	214	1	6	67	650	17	240	4	66	30			
SK 033	2E-26	11	162	21	236	0	0	90	750	33	550	0	0	0			
SK 034	2E-77	46	680	0	0	2	14	46	680	157	2150	0	0	32	粘土塊		
SK 035	2E-03	107	2250	0	0	11	206	182	2100	251	3850	0	0	30			
SK 036	2F-55	9	144	5	60	0	0	77	500	53	900	1	30	8	粘土塊		
SK 038	3C-55	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0			

遺構	グリッド	中期		後期				不明						備考	
		加曾利正		称名寺		堀之内		無紋		縄文		麻部			小破片
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
SK 039	1E-84	0	0	0	0	0	0	5	30	15	126	0	0	2	
SK 039	1E-84	1	30	0	0	0	0	9	56	13	236	0	0	0	
SK 040	3C-38	2	28	0	0	0	0	17	114	15	200	0	0	0	
SK 041	2E-94	38	1050	0	0	1	14	57	600	70	900	2	40	5	
SK 042	3E-05	15	180	0	0	0	0	23	200	44	600	1	16	2	
SK 043	2E-95	27	750	1	10	0	0	29	206	54	1150	0	0	6	
SK 044	3C-71	109	1450	0	0	1	7	122	1300	249	4170	9	154	17	
SK 045	2F-73	2	38	0	0	0	0	3	11	6	54	0	0	0	
SK 046	2F-77	13	206	13	156	2	20	29	270	47	650	1	18	7	
SK 047	3E-14	20	600	0	0	0	0	38	340	80	1790	0	0	8	
SK 048	1E-98	14	228	0	0	1	10	54	405	94	1800	3	86	10	粘土塊
SK 049	1F-93	2	50	0	0	1	7	6	55	12	370	0	0	0	粘土塊
SK 050	2D-89	7	290	0	0	0	0	29	290	69	1200	3	50	5	
SK 051	2F-82	0	0	0	0	0	0	3	42	2	22	0	0	0	
SK 052	2F-23	1	16	0	0	1	10	12	154	60	800	0	0	10	
SK 053	2E-79	6	92	0	0	0	0	17	160	16	250	0	0	2	
SK 054	1F-30	2	19	0	0	3	60	34	260	13	140	0	0	3	
SK 057	2E-02	28	700	0	0	0	0	28	400	50	700	0	0	8	粘土塊
SK 058	1E-85	0	0	0	0	0	0	8	76	9	106	0	0	16	
SK 059	1E-85	6	52	0	0	0	0	3	8	10	100	2	24	10	
SK 060	2F-47	5	90	3	22	0	0	30	278	28	450	2	22	4	
SK 061	2F-47	20	406	3	26	2	68	52	500	66	1100	3	68	18	
SK 062	2F-79	5	160	0	0	2	12	31	262	59	850	0	0	1	
SK 064	2F-57	0	0	1	8	1	16	9	94	4	40	0	0	2	
SK 065	2E-05	0	0	2	25	0	0	2	14	2	8	0	0	0	
SK 066	1E-84	0	0	0	0	0	0	19	120	19	264	0	0	0	
SK 067	1E-84	0	0	2	96	0	0	18	294	2	20	0	0	12	
SK 068	1F-65	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	
SK 069	1F-65	0	0	0	0	6	46	56	550	65	550	0	0	8	
SK 073	2F-65	3	44	0	0	0	0	1	8	3	26	0	0	0	
SK 074	1F-31	7	80	3	21	0	0	24	210	48	472	2	51	30	
SK 075	1F-50	7	89	0	0	8	54	22	181	42	650	0	0	3	
SK 076	2F-07	0	0	0	0	9	76	8	236	36	690	0	0	3	
SK 077	1F-66	0	0	0	0	0	0	5	50	13	180	0	0	0	
SK 078	1F-65	0	0	0	0	0	0	13	92	19	234	0	0	1	
SK 079	1F-65	6	52	0	0	0	0	12	62	20	146	1	6	4	
SK 080	1F-65	1	11	3	18	2	20	12	124	15	102	1	8	0	
SK 082	5D-32	25	404	0	0	8	100	23	260	93	1050	1	30	24	
SK 082	5D-16	34	650	0	0	0	0	31	318	73	1000	2	56	0	
SK 083	5C-37	1	18	0	0	0	0	5	48	4	61	0	0	0	
SK 084	5D-16	12	700	0	0	1	20	13	136	56	1340	1	30	8	
SK 085	5D-18	12	258	0	0	0	0	16	547	0	0	0	0	36	
SK 087	5D-14	43	750	0	0	8	79	128	1240	293	3850	11	102	110	粘土塊
SK 088	5D-08	0	0	0	0	0	0	2	18	0	0	0	0	0	
SK 089	6E-23	1	9	0	0	1	5	5	29	0	0	0	0	0	
SK 090	5D-55	44	995	0	0	1	9	9	158	38	600	0	0	0	
SK 091	5D-37	121	2505	0	0	2	23	83	1040	236	3940	4	369	63	
SK 092	5D-57	3	80	0	0	3	14	8	127	0	0	0	0	0	
SK 095	6E-07	25	220	0	0	1	2	55	230	73	800	6	86	1	

第6表 遺構外出土縄文土器集計表

ブツID	中 期		後 期				不 明					小幡形	
	加賀郡王式		船立舟式		船立舟式		船立		船立のA		船立のB		
	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数		質量 (g)
1E 29	7	254	16	233	18	207	97	1068	56	1085	2	38	29
1E 36	1	19	0	0	0	0	2	8	9	28	0	0	0
1E 39	65	1959	28	499	42	846	294	2786	166	2507	14	469	132
1E 48	3	74	0	0	3	32	12	95	10	120	1	30	3
1E 49	12	437	22	407	39	816	126	1233	62	1216	4	61	4
1E 50	0	0	2	44	0	0	1	5	2	14	0	0	1
1E 57	3	90	0	0	0	0	2	53	4	59	1	3	3
1E 58	0	0	0	0	0	0	2	10	3	28	0	0	0
1E 59	9	347	35	609	23	343	74	850	41	543	2	46	34
1E 66	2	29	0	0	1	33	7	56	1	5	0	0	0
1E 66	0	0	0	0	1	3	0	0	8	44	0	0	0
1E 67	4	25	3	20	0	0	12	66	14	117	0	0	1
1E 68	8	184	0	0	0	0	18	124	24	317	1	92	4
1E 69	21	965	22	459	7	79	51	503	39	959	5	169	1
1E 71	4	80	0	0	0	0	4	35	16	225	0	0	0
1E 75	17	459	1	15	0	0	40	422	26	269	0	0	5
1E 76	3	25	0	0	0	0	7	110	8	88	0	0	0
1E 77	4	109	4	25	0	0	21	158	21	203	0	0	0
1E 78	10	202	11	200	1	20	20	253	23	242	2	29	4
1E 79	7	128	9	189	4	74	24	246	24	200	5	118	12
1E 83	18	458	3	62	1	35	45	664	55	628	2	68	0
1E 84	40	1867	12	258	0	0	41	921	83	1204	3	126	13
1E 85	169	5105	35	809	81	126	247	2689	261	7099	15	662	23
1E 86	40	1023	6	54	2	25	37	2697	164	2272	3	129	16
1E 87	11	206	0	0	2	18	5	66	26	477	2	22	4
1E 88	5	100	0	0	2	26	11	105	16	262	0	0	4
1E 89	12	292	6	805	2	22	41	261	42	244	5	129	69
1E 92	4	20	0	0	0	0	7	84	5	45	1	18	0
1E 93	5	164	0	0	0	0	12	122	5	189	1	19	12
1E 94	20	619	0	0	3	26	66	460	99	442	3	82	15
1E 95	33	1590	36	676	2	43	38	1992	168	2099	6	183	76
1E 96	22	363	11	238	2	25	50	428	97	428	1	12	26
1E 97	8	256	11	189	1	19	23	239	81	209	1	16	9
1E 98	2	102	10	154	1	46	9	152	52	622	1	16	0
1E 99	0	0	7	96	0	0	2	15	2	62	2	44	0
1E -	0	0	0	0	0	0	1	79	0	0	2	166	0
1F 40	1	11	0	0	3	32	28	260	16	249	0	0	2
1F 11	43	1281	98	1814	41	699	177	3616	154	2272	11	260	9
1F 20	64	1535	167	2778	123	2283	646	6865	258	6388	26	1073	203
1F 21	76	2294	143	2583	95	1612	464	5961	328	6527	20	829	20
1F 22	2	24	6	62	5	43	15	128	7	96	0	0	0
1F 30	30	1207	43	1780	109	1501	385	3911	145	2417	12	343	112
1F 31	47	1846	48	1679	64	1261	223	2228	170	2622	20	519	24
1F 32	7	187	96	1884	64	958	186	1250	48	959	7	201	17
1F 33	14	497	259	6902	110	2202	490	4962	196	1235	26	1133	75
1F 39	8	260	0	0	3	49	14	91	26	224	1	16	11
1F 49	15	730	137	1780	109	1640	324	2717	248	2705	20	1138	120
1F 41	43	2290	263	4225	224	2710	1224	11954	779	8932	128	1277	264
1F 42	21	889	49	824	29	254	94	1025	52	630	2	163	34
1F 43	17	544	106	1721	29	695	60	1729	74	1150	16	770	26
1F 44	0	0	46	1205	49	642	145	1772	47	970	2	88	2

ブツID	中 期		後 期				不 明					小幡形	
	加賀郡王式		船立舟式		船立舟式		船立		船立のA		船立のB		
	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数		質量 (g)
1F 48	0	0	6	0	0	0	0	0	0	3	64	0	0
1F 50	25	950	149	2862	173	4803	965	7175	141	2619	42	1052	123
1F 51	40	1407	165	2247	189	2689	561	5425	129	2220	20	361	18
1F 52	20	743	119	1200	47	915	193	1679	129	1100	13	301	68
1F 53	34	329	107	1642	73	1200	260	2699	149	1800	18	466	8
1F 54	23	1069	221	4695	94	2933	338	3429	227	2643	27	930	20
1F 55	4	290	15	268	9	147	32	468	27	203	4	52	0
1F 59	0	0	2	21	0	0	4	78	3	56	0	0	0
1F 60	28	1253	90	1142	93	1435	435	4352	201	3375	26	2689	232
1F 61	32	932	223	2689	146	2507	356	2362	267	2999	16	421	428
1F 62	68	1989	217	3276	18	1738	323	2622	274	4370	17	959	242
1F 63	18	634	117	2081	34	893	178	1952	99	1616	16	239	17
1F 64	54	1206	261	6227	125	2257	679	7534	709	18075	52	1289	69
1F 65	44	2220	52	897	28	448	174	2626	175	2040	13	661	122
1F 66	10	321	27	266	14	364	91	749	71	1130	8	149	65
1F 70	4	147	9	78	6	20	26	438	27	424	5	145	0
1F 71	11	262	40	670	15	361	46	596	35	1280	7	233	2
1F 72	15	259	72	830	44	530	149	694	139	1203	15	442	107
1F 73	44	1218	229	2726	236	2624	732	16913	468	6840	71	2645	268
1F 74	29	927	183	2283	79	1218	475	4077	297	4659	28	487	258
1F 75	71	2220	152	2277	61	1220	375	2662	327	5946	23	759	242
1F 76	89	3029	428	2686	262	2465	2148	21162	969	12579	62	2522	248
1F 77	0	0	1	13	1	12	1	9	0	0	0	0	0
1F 80	4	148	15	264	4	68	40	242	41	483	1	107	228
1F 81	8	288	19	308	11	127	52	230	47	500	3	139	14
1F 82	11	311	72	950	27	884	149	1429	96	1893	17	188	283
1F 83	9	247	26	324	52	1826	128	1269	26	779	19	261	203
1F 84	4	87	36	278	26	880	189	1486	78	910	14	203	123
1F 85	18	569	103	1336	44	597	229	2729	148	1534	14	283	75
1F 86	25	458	79	1190	28	682	228	2694	104	1460	17	324	84
1F 87	1	168	5	40	3	40	42	354	18	182	2	42	11
1F 88	0	0	0	0	1	24	3	20	0	0	0	0	0
1F 89	0	0	2	33	0	0	2	28	4	120	0	0	1
1F 90	0	0	5	74	0	0	27	186	7	121	0	0	0
1F 91	7	187	10	100	0	0	25	213	13	174	1	22	5
1F 92	19	426	24	262	12	187	41	629	29	730	6	121	14
1F 93	31	879	101	1331	73	1128	288	3273	143	2676	26	671	83
1F 94	20	426	161	1426	76	1259	226	2594	176	2275	15	654	174
1F 95	18	811	108	1659	72	1394	263	2262	174	1999	14	297	263
1F 96	19	284	83	1119	38	740	226	2254	82	1891	16	642	74
1F 97	11	322	122	1832	66	1192	262	2224	113	1294	21	449	96
1F 98	2	66	29	256	12	197	63	678	26	300	4	124	65
1F -	4	68	74	756	28	1193	296	2462	127	1609	15	119	129
2E 51	0	0	0	0	0	0	1	15	1	17	0	0	0
2E 52	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0
2E 53	0	0	0	0	0	0	1	7	2	25	0	0	3
2E 54	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0
2E 61	1	22	0	0	0	0	2	14	0	0	0	0	0
2E 62	0	0	0	0	0	0	0	0	3	19	0	0	0
2E 63	0	0	0	0	0	0	2	37	0	0	0	0	0
2E 64	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	0

ゾリヤ	中 層		最 層				不 明							
	加齢別式		稚若式		稚之内式		稚魚		稚魚のム		産卵		小稚卵	
	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)		
228	87	0	0	0	0	0	2	16	0	0	0	0	0	
229	68	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	
230	69	0	0	0	0	0	1	10	1	16	0	0	0	
231	77	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
232	75	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0	
233	79	0	0	0	0	0	1	11	0	0	0	0	0	
234	82	0	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	
235	83	0	0	0	0	0	1	18	0	0	0	0	0	
236	84	0	0	0	0	0	1	37	0	0	0	0	0	
237	86	0	0	0	0	0	2	17	0	0	0	0	0	
238	87	0	0	0	0	0	2	20	0	0	1	25	0	
239	88	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	
240	93	0	0	0	0	0	1	18	0	0	0	0	0	
241	94	0	0	0	0	0	2	21	1	7	0	0	0	
242	97	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	0	
243	103	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	
244	83	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	
245	84	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	
246	85	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	
247	73	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	
248	75	2	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
249	74	3	837	0	0	0	7	76	5	67	0	0	25	
250	75	0	0	0	0	0	3	58	0	0	0	0	30	
251	76	0	0	0	0	0	0	0	4	43	0	0	0	
252	77	0	0	0	0	0	0	0	1	15	0	0	0	
253	82	0	0	0	0	0	0	0	1	13	0	0	0	
254	83	0	0	0	0	0	0	0	2	11	0	0	0	
255	84	0	0	0	0	0	1	11	0	0	0	0	0	
256	85	2	30	0	0	0	1	9	1	6	0	0	2	
257	86	2	19	0	0	2	20	10	147	5	31	0	0	
258	87	1	36	2	26	0	0	1	7	2	30	0	0	
259	84	0	0	0	0	0	1	3	2	8	0	0	0	
260	85	0	0	0	0	0	0	4	74	0	0	0	0	
261	86	1	42	0	0	0	2	9	2	23	0	0	0	
262	88	0	0	0	0	0	1	22	0	0	0	0	0	
263	89	0	0	0	0	0	1	10	1	13	0	0	0	
264	0	0	0	0	0	0	0	0	2	20	0	0	0	
265	0	0	0	0	0	0	0	0	2	20	0	0	0	
266	-	1	80	0	0	0	1	80	0	0	0	0	0	
267	91	1	66	0	0	0	0	0	2	40	0	0	0	
268	101	11	253	0	0	0	17	204	13	284	0	0	7	
269	88	8	120	11	162	4	112	75	840	106	855	3	70	27
270	84	0	0	2	25	1	24	8	80	14	120	1	11	3
271	85	24	2029	3	28	1	55	142	1725	224	5200	10	136	94
272	86	8	266	3	54	3	54	68	623	1760	3	90	36	
273	87	3	159	24	264	2	33	27	262	15	209	3	112	0
274	88	2	89	4	124	0	0	16	150	12	27	1	11	0
275	89	3	50	4	54	2	68	0	0	8	80	0	0	12
276	10	4	72	0	0	0	3	60	3	600	0	0	0	0
277	11	1	23	0	0	0	13	96	11	96	0	0	0	0
278	12	2	18	0	0	0	3	52	4	66	0	0	0	0
279	13	3	21	0	0	0	2	21	8	170	1	100	0	0
280	14	2	36	0	0	0	4	80	5	180	0	0	0	0

ゾリヤ	中 層		最 層				不 明							
	加齢別式		稚若式		稚之内式		稚魚		稚魚のム		産卵		小稚卵	
	点数	質量 (g)												
281	15	0	0	0	0	0	12	86	11	100	0	0	0	
282	16	2	48	0	0	0	0	0	0	9	80	0	0	0
283	17	3	94	0	0	0	0	6	94	8	101	0	0	0
284	18	1	21	0	0	0	0	3	25	4	33	0	0	0
285	19	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	1	27	0
286	20	0	0	0	0	0	0	0	1	30	0	0	0	
287	21	0	0	0	0	0	0	4	32	6	104	0	0	0
288	22	0	0	0	0	0	2	21	3	28	0	0	0	
289	23	0	0	0	0	0	1	37	0	0	5	20	0	0
290	24	4	186	0	0	0	0	3	32	10	81	0	0	0
291	25	1	23	12	148	0	0	9	90	10	106	0	0	0
292	26	0	0	3	53	0	0	4	52	2	24	0	0	0
293	27	1	25	0	0	0	0	0	0	5	18	0	0	0
294	28	1	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
295	29	0	0	0	0	0	0	4	26	2	55	0	0	0
296	30	0	0	0	0	0	1	19	4	43	0	0	0	
297	31	1	107	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
298	32	0	0	2	27	0	1	42	4	172	0	0	0	0
299	33	0	0	0	0	0	1	19	3	31	0	0	0	0
300	34	3	86	1	11	0	0	12	100	11	160	2	58	2
301	35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
302	40	0	0	0	0	0	1	2	2	23	0	0	0	0
303	41	0	0	0	0	0	1	19	0	0	0	0	0	0
304	42	0	0	0	0	0	4	23	1	17	0	0	0	0
305	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0
306	44	0	0	0	0	0	1	18	1	17	0	0	0	0
307	45	0	0	0	0	0	4	14	2	12	1	20	3	0
308	46	0	0	0	0	0	0	2	36	0	0	0	0	0
309	47	0	0	0	0	1	35	3	42	4	14	0	0	3
310	48	1	20	0	0	0	0	0	1	13	0	0	0	0
311	49	0	0	0	0	0	1	12	0	0	0	0	0	0
312	51	4	121	0	0	2	23	30	213	21	284	1	35	25
313	52	0	0	0	0	0	1	45	4	23	3	58	0	7
314	53	3	136	0	0	0	0	9	112	19	174	2	18	0
315	54	0	0	1	30	0	0	0	0	4	62	0	0	0
316	55	0	0	0	0	0	2	11	2	16	0	0	0	0
317	56	1	35	0	0	0	0	0	1	18	0	0	0	0
318	58	1	16	0	0	0	0	9	67	17	244	1	7	13
319	60	1	45	0	0	0	0	0	2	14	1	10	0	0
320	61	1	45	0	0	0	0	0	0	1	3	1	15	0
321	62	45	2080	2	27	1	40	32	403	62	1257	2	20	13
322	63	0	0	3	30	1	57	1	46	1	40	0	0	0
323	67	2	64	4	21	0	0	6	32	15	207	0	0	0
324	68	0	0	0	0	0	0	0	0	2	33	0	0	0
325	69	5	100	0	0	0	0	10	106	6	60	0	0	0
326	-	82	440	5	100	1	18	13	162	49	568	3	98	28
327	70	0	0	0	0	0	0	7	206	13	170	1	23	7
328	71	7	204	2	11	5	64	12	116	11	227	1	60	1
329	72	31	609	14	212	5	44	70	706	112	1540	1	16	38
330	73	21	691	42	809	30	140	145	1690	104	1545	7	252	94
331	74	20	1065	125	1803	85	1582	202	3006	183	2387	20	493	187
332	75	15	1016	228	2047	152	2065	512	7417	285	4904	32	1010	281

グループ	中 期			後 期			不 期							
	設備原式		点数	新式		点数	備内式		点数					
	点数	原価 (g)		点数	原価 (g)		点数	原価 (g)						
2F	06	10	302	146	2365	94	1608	202	2735	159	2656	14	362	560
2F	07	53	1300	251	2647	111	1763	474	6384	252	3528	22	527	852
2F	08	12	267	114	2655	63	1059	120	2454	142	2822	14	378	630
2F	09	2	16	13	1058	11	127	33	279	9	216	6	85	0
2F	10	0	0	1	27	0	0	2	27	1	14	0	0	0
2F	11	4	66	3	47	0	0	13	111	18	289	0	0	0
2F	12	17	359	7	92	5	69	26	273	40	616	4	93	12
2F	13	27	628	13	633	4	124	20	289	74	966	4	215	34
2F	14	9	340	362	2	61	20	583	26	360	4	119	23	
2F	15	4	303	38	1427	48	973	186	2454	39	1079	14	409	78
2F	16	17	615	163	2777	69	1264	264	2638	192	2296	17	372	546
2F	17	13	268	232	2552	90	1077	279	4320	197	2899	29	947	279
2F	18	0	0	151	2725	84	1837	287	2613	142	2258	21	384	158
2F	19	0	0	30	705	28	625	32	369	19	543	11	424	29
2F	20	0	0	0	0	0	0	1	34	1	61	1	14	1
2F	21	7	164	3	84	0	0	12	113	20	308	2	56	10
2F	22	2	10	2	20	0	0	2	12	16	207	0	0	2
2F	23	4	148	9	180	7	80	22	229	23	649	1	15	23
2F	24	26	560	78	1248	51	945	322	2896	226	2983	16	642	68
2F	25	3	124	44	620	17	264	53	540	25	625	4	160	65
2F	26	3	16	116	1649	25	529	180	1192	69	1074	9	154	226
2F	27	4	311	79	1246	20	589	112	1453	66	1087	7	103	229
2F	28	11	200	27	1616	63	1294	292	2816	153	1796	13	362	265
2F	29	2	402	123	2288	53	361	230	149	2123	16	323	220	
2F	30	9	254	11	162	4	89	79	782	302	1	6	13	
2F	31	0	0	1	11	0	0	2	11	2	24	0	0	0
2F	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2F	33	0	0	7	162	2	12	18	120	13	134	0	0	0
2F	34	2	18	12	163	6	122	14	86	23	282	1	30	4
2F	37	0	0	25	245	6	102	43	526	52	523	4	185	42
2F	38	3	60	26	590	24	669	47	603	69	950	5	121	122
2F	39	77	1877	225	2881	139	2266	789	7280	627	7287	27	984	255
2F	40	1	35	0	0	0	0	1	34	0	0	0	0	0
2F	41	0	0	0	0	0	0	1	12	0	0	0	0	0
2F	42	0	0	2	20	0	0	0	0	1	18	1	19	11
2F	43	2	46	0	0	0	0	0	3	41	1	46	0	
2F	44	0	0	1	16	0	0	2	16	3	20	0	0	0
2F	46	27	1889	17	332	0	0	28	240	63	2224	7	362	32
2F	46	22	629	26	219	20	272	133	1688	266	2743	7	315	51
2F	47	2	49	21	244	8	87	55	790	69	647	2	12	59
2F	48	5	183	23	322	5	107	41	326	21	900	1	8	44
2F	49	7	201	21	202	20	207	77	899	27	548	4	76	46
2F	50	0	0	0	0	0	0	4	26	5	65	0	0	5
2F	51	0	0	1	26	0	0	1	22	0	0	0	0	0
2F	52	0	0	1	12	0	0	3	43	2	12	0	0	0
2F	53	0	0	0	0	0	0	1	9	3	9	0	0	0
2F	54	3	128	3	153	0	0	6	57	11	138	1	7	3
2F	55	3	102	17	160	10	124	27	246	22	322	5	110	61
2F	56	1	21	0	0	0	0	5	20	4	20	1	15	0
2F	57	5	0	0	103	1	4	8	72	12	368	0	0	0
2F	58	0	0	10	402	20	203	60	952	22	400	4	137	24
2F	59	3	117	12	208	24	425	76	969	47	792	7	222	24

グループ	中 期			後 期			不 期									
	設備原式		点数	新式		点数	備内式		点数							
	点数	原価 (g)		点数	原価 (g)		点数	原価 (g)								
2F	60	3	100	1	16	0	0	3	65	3	29	0	0	1		
2F	61	3	124	0	0	0	0	6	24	9	92	2	26	0		
2F	62	0	0	0	0	0	0	2	12	4	96	0	0	0		
2F	63	0	0	1	39	0	0	4	32	3	60	0	0	0		
2F	64	2	78	2	18	0	0	5	52	3	54	0	0	0		
2F	65	0	0	2	27	0	0	5	27	5	42	0	0	0		
2F	66	4	109	1	65	3	42	8	64	8	102	1	131	0		
2F	67	4	192	1	11	1	26	10	84	14	220	1	12	14		
2F	68	0	0	2	20	2	26	3	26	5	80	0	0	0		
2F	69	3	132	10	116	39	542	17	180	20	610	1	22	27		
2F	70	0	0	0	0	0	0	6	6	6	182	0	0	0		
2F	71	1	60	0	0	2	28	7	70	11	113	0	0	13		
2F	72	2	66	0	0	1	27	6	114	4	133	0	0	11		
2F	73	8	225	3	29	0	0	10	102	16	540	1	22	0		
2F	74	3	108	5	44	1	48	4	66	17	403	1	78	7		
2F	75	3	43	6	26	2	116	13	197	7	96	3	48	28		
2F	76	1	4	1	28	0	0	11	154	8	183	0	0	5		
2F	77	0	0	2	26	1	7	6	52	10	119	1	18	8		
2F	78	3	183	0	0	3	26	18	264	19	325	2	66	22		
2F	79	13	400	2	43	0	0	21	311	29	626	2	20	53		
2F	80	42	1120	1	24	0	0	47	562	108	1750	3	123	18		
2F	81	61	600	11	124	0	0	19	92	30	700	3	40	40		
2F	82	78	2200	23	272	4	79	145	1523	183	5000	12	482	76		
2F	83	13	264	0	0	0	161	29	272	65	1802	2	82	136		
2F	84	18	470	29	284	0	0	73	945	61	1193	4	57	120		
2F	85	7	180	24	500	4	129	23	640	58	820	0	83	64		
2F	86	14	265	21	284	2	42	46	620	46	960	7	254	0		
2F	87	14	64	21	493	13	615	68	489	39	900	4	174	20		
2F	88	14	496	21	263	3	77	30	466	27	790	4	284	27		
2F	89	7	217	8	161	0	0	22	295	23	238	0	9	26		
2F	90	16	430	1	9	1	5	30	253	27	540	4	104	28		
2F	91	13	305	4	51	0	0	10	323	22	395	0	0	0		
2F	92	26	1417	0	217	4	51	49	715	94	223	9	262	40		
2F	93	46	1289	12	223	4	46	96	1145	178	3149	3	97	58		
2F	94	7	225	0	0	0	0	15	220	19	262	1	15	9		
2F	95	2	46	0	0	0	2	23	18	149	22	200	0	0	0	
2F	96	19	622	4	104	2	44	21	211	62	1096	2	64	4		
2F	97	14	489	7	139	7	194	16	567	68	1044	3	118	17		
2F	98	41	1800	20	264	1	4	56	712	81	1421	5	118	15		
2F	99	0	0	0	0	0	0	1	3	2	29	0	0	0		
2F	-	0	0	11	249	4	68	7	140	2	89	3	124	0		
2G	10	10	220	28	519	6	139	21	260	17	289	0	0	0		
2G	10	20	632	124	2244	68	1802	167	2225	85	1160	6	133	273		
2G	11	9	170	105	2291	29	420	40	280	20	520	4	280	20		
2G	4	17	15	259	20	209	23	437	25	1009	0	0	0	0		
2G	50	11	242	17	209	14	259	20	542	21	200	7	189	0		
2G	60	12	740	10	590	0	0	22	250	25	500	3	30	0		
2G	-	4	189	7	160	3	20	2	36	4	50	1	5	0		
2G	60	0	0	0	0	0	0	2	6	0	0	0	0	0		
2G	60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	22	0	0	0
2G	60	0	0	0	0	0	0	1	35	0	0	0	0	0	0	
2G	60	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	0	0	

フリット	中 期					後 期					不 期				
	加算料式		非加算式		船之内式		乗船		風支のA		風船		小艇用		
	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	
30	17	0	0	0	0	0	1	31	0	0	0	0	0	0	
30	12	0	0	0	0	0	2	9	0	0	0	0	0	0	
30	17	0	0	0	0	0	2	20	0	0	0	0	0	0	
30	18	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	7	
30	23	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	3	
30	27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
30	33	0	0	0	0	0	0	0	1	20	0	0	0	0	
30	34	0	0	0	0	0	1	19	0	0	0	0	0	4	
30	36	0	0	0	0	0	1	18	0	0	0	0	0	0	
30	37	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	
30	38	0	0	0	0	0	0	0	1	13	0	0	0	0	
30	40	0	0	0	0	0	0	0	1	27	0	0	0	0	
3C	04	0	0	0	0	0	2	11	2	42	0	0	0	0	
3C	05	3	154	1	10	0	0	9	60	23	23	0	0	0	
3C	06	5	94	0	0	0	3	28	10	100	1	20	0	0	
3C	07	0	0	0	0	0	0	0	14	97	0	0	0	0	
3C	09	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	
3C	12	0	0	0	0	0	0	0	1	14	0	0	0	0	
3C	13	6	100	0	0	0	7	45	17	102	1	11	0	0	
3C	14	8	156	0	0	0	3	43	14	200	0	0	0	21	
3C	15	9	102	0	0	0	13	163	16	201	1	43	0	0	
3C	16	6	102	0	0	0	13	160	26	202	1	19	26	0	
3C	17	4	109	0	0	0	11	157	16	241	0	0	0	0	
3C	18	6	230	0	0	0	2	30	14	219	0	0	0	9	
3C	19	0	0	0	0	0	1	8	1	12	0	0	0	0	
3C	22	0	0	1	18	0	0	1	7	0	0	0	0	0	
3C	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
3C	24	1	63	0	0	0	2	16	4	103	0	0	0	0	
3C	26	4	33	0	0	0	1	5	13	106	0	0	0	0	
3C	27	11	364	0	0	0	16	206	19	151	2	173	11	0	
3C	28	1	30	0	0	0	6	2	33	8	106	0	0	11	
3C	29	1	30	0	0	0	2	7	0	0	0	0	0	0	
3C	33	0	0	1	33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3C	34	3	34	0	0	0	0	3	13	0	0	0	0	0	
3C	35	2	31	0	0	0	1	13	4	34	0	0	0	0	
3C	36	1	20	2	41	0	0	6	115	9	110	1	33	0	
3C	37	7	200	0	0	0	16	136	20	200	0	0	0	17	
3C	38	0	0	0	0	0	0	0	4	36	0	0	0	0	
3C	43	0	0	0	0	0	3	19	0	0	1	23	0	0	
3C	44	2	29	2	20	0	0	3	24	3	36	0	0	0	
3C	45	1	30	2	33	0	0	0	9	7	87	0	0	0	
3C	46	3	38	2	37	0	0	6	81	13	208	0	0	0	
3C	47	5	136	0	0	0	20	206	25	206	0	0	0	23	
3C	48	1	20	0	0	0	5	32	4	30	1	36	0	0	
3C	49	1	23	0	0	0	2	7	1	40	0	0	0	0	
3C	53	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	
3C	54	0	0	0	0	0	0	0	2	30	0	0	0	0	
3C	54	9	196	0	0	0	10	42	11	407	0	0	0	0	
3C	55	9	140	0	0	0	10	28	11	310	1	9	26	0	
3C	56	3	37	0	0	1	0	4	28	8	97	0	0	0	
3C	57	0	0	1	12	0	0	4	16	3	93	0	0	0	
3C	58	2	27	0	0	0	2	23	9	119	0	0	0	0	

フリット	中 期					後 期					不 期				
	加算料式		非加算式		船之内式		乗船		風支のA		風船		小艇用		
	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	
3C	59	1	17	0	0	0	0	0	3	30	3	19	0	0	0
3C	61	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	46	0
3C	62	0	0	0	0	0	0	1	3	3	45	0	0	0	
3C	69	0	0	0	0	0	0	1	16	0	0	0	0	0	
3C	71	2	86	0	0	0	0	1	13	1	10	0	0	0	
3C	73	4	206	0	0	1	13	0	0	4	120	0	0	0	
3C	75	9	199	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3C	83	7	200	0	0	0	0	0	0	0	5	48	1	27	0
3C	84	5	74	0	0	0	0	5	24	8	133	0	0	0	
3C	85	0	0	0	0	0	0	2	3	4	100	0	0	0	
3C	85	1	42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3C	94	1	40	1	14	1	6	2	33	3	32	1	28	0	
3C	96	1	30	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	
3C	-	13	462	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	23	0	0	0
3D	12	0	0	0	0	0	0	0	0	3	32	0	0	0	
3D	13	0	0	0	0	0	0	1	3	2	32	0	0	0	
3D	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	126	0
3D	23	0	0	0	0	0	0	0	0	3	44	0	0	0	
3D	34	1	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3D	40	2	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	77	0
3D	50	7	333	0	0	0	0	4	23	8	146	0	0	0	0
3D	60	8	188	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0
3D	61	2	90	0	0	0	0	0	0	6	112	0	0	0	25
3D	80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	36	0	0	0
3D	93	0	0	0	0	0	0	3	1	7	0	0	0	0	0
3D	-	23	515	0	0	1	30	17	128	26	1003	26	429	5	0
3E	00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	30	3	28	0
3E	01	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	82	0	0	0
3E	40	2	66	0	0	0	1	16	1	6	0	0	0	0	0
3E	60	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	0	0
3E	65	0	0	0	0	0	0	0	0	1	36	0	0	0	0
3E	66	3	125	3	89	0	0	1	21	3	126	1	82	0	0
3E	67	6	155	2	34	0	0	6	97	14	259	0	0	0	0
3E	68	4	68	0	0	0	0	4	9	5	44	3	20	0	0
3E	69	64	6165	1	12	27	330	140	1629	659	10560	10	176	38	0
3E	71	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
3E	73	0	0	0	0	0	0	0	0	1	11	0	0	0	0
3E	76	0	0	0	0	0	0	0	0	2	24	0	0	0	0
3E	77	9	159	2	15	1	11	0	0	16	265	0	0	0	0
3E	78	2	36	0	0	0	0	0	0	4	36	1	4	0	0
3E	79	1	17	0	0	0	0	4	34	9	77	0	0	0	0
3E	26	25	960	0	0	2	12	37	206	82	1400	6	267	0	0
3E	27	3	126	1	82	0	0	0	0	16	90	0	0	0	0
3E	28	0	0	0	0	0	0	4	12	4	10	0	0	0	0
3E	29	0	0	0	0	0	0	0	0	2	40	0	0	0	0
3E	34	4	49	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3E	35	13	237	0	0	1	14	36	300	65	781	1	34	5	0
3E	36	3	144	0	0	0	0	0	0	2	72	0	0	0	0
3E	37	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0
3E	38	0	0	0	0	0	0	0	0	3	26	0	0	0	0
3E	39	0	0	0	0	0	0	0	0	2	22	0	0	0	0



フリック	中 期						後 期						不 明					
	加算方式		乗算方式		繰上方式		加算		繰上のみ		減算		小振り					
	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)		
SD 09	0	0	0	0	0	0	1	9	1	20	1	30	2					
SD 11	3	362	6	0	0	0	0	0	1	35	0	0	0					
SD 14	4	132	3	22	0	0	6	40	28	206	0	0	7					
SD 15	3	38	0	0	0	0	7	110	17	218	1	30	3					
SD 16	0	0	0	0	0	0	2	24	0	0	0	0	0					
SD 21	0	0	0	0	0	0	2	12	2	22	0	0	0					
SD 23	0	0	2	55	0	0	2	20	11	90	0	0	0					
SD 24	1	35	0	0	0	0	1	33	1	19	0	0	0					
SD 25	3	44	0	0	0	0	3	32	4	53	0	0	0					
SD 26	0	0	0	0	0	0	1	32	0	0	0	0	0					
SD 31	0	0	0	0	0	0	3	52	4	84	0	0	0					
SD 32	2	31	0	0	0	0	2	83	2	9	0	0	0					
SD 33	1	14	0	0	0	0	7	80	6	52	0	0	0					
SD 34	0	0	0	0	0	0	0	0	1	13	0	0	0					
SD 41	1	49	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SD 42	1	78	0	0	0	0	1	24	7	102	0	0	0					
SD 43	4	111	0	0	0	0	7	57	22	220	1	35	4					
SD 44	0	0	0	0	0	0	1	13	0	0	0	0	0					
SD 51	0	0	0	0	0	0	1	36	2	39	0	0	0					
SD 52	2	36	0	0	0	0	2	23	12	189	0	0	0					
SD 53	13	30	232	0	0	0	10	77	18	162	0	0	0					
SD 63	4	73	0	0	0	0	0	0	7	77	0	0	0					
SD 63	0	0	0	0	0	0	0	0	4	34	0	0	0					
SD 69	1	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SD 71	1	91	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SD 82	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0					
SE 02	2	101	0	0	0	0	2	25	0	0	0	0	0					
SE 17	0	0	0	0	0	0	0	0	1	87	0	0	0					
SE -	0	0	0	0	0	0	2	16	2	9	0	0	0					
SC 05	1	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SC 06	1	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SC 09	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0					
SD 01	0	0	0	0	0	0	1	7	9	129	0	0	0					
SD 02	0	0	1	92	0	0	0	0	2	138	0	0	0					
SD 03	0	0	0	0	0	0	0	0	2	12	0	0	0					
SD 11	0	0	2	22	0	0	0	0	5	32	0	0	0					
SD 12	0	0	0	0	0	0	1	10	3	87	0	0	0					
SD 22	0	0	0	0	0	0	1	4	1	4	0	0	0					
SE 25	0	0	0	0	1	40	0	0	3	76	0	0	0					
SC 00	0	0	0	0	0	0	83	112	36	666	1	20	1					
SC 05	0	0	1	52	0	0	1	9	1	39	0	0	0					
SC 15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15					
SD 17	0	0	0	0	0	0	1	31	0	0	0	0	0					
SDA 03	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0					
SDC 23	0	0	0	0	0	0	0	0	2	33	0	0	0					
SDA 23	0	0	0	0	1	11	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 33	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4					
SDA 75	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14	0					
SDA 76	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0					

フリック	中 期						後 期						不 明					
	加算方式		乗算方式		繰上方式		加算		繰上のみ		減算		小振り					
	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)	点数	賞金 (g)		
SDA 05	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14	0	0	0				
SDA 06	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0					
SDA 07	0	0	0	0	0	0	1	4	1	7	0	0	0					
SDA 10	0	0	0	0	0	0	0	0	1	21	0	0	0					
SDA 03	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0					
SDA 06	0	0	0	0	1	35	1	6	0	0	0	0	0					
SDA 07	1	44	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0					
SDA 12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 20	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0					
SDA 32	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0					
SDA 33	0	0	0	0	1	6	1	22	0	0	0	0	0					
SDA 36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 42	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0					
SDA 43	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0					
SDA 46	0	0	0	0	0	0	0	1	11	0	0	0	4					
SDA 52	2	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5					
SDA 54	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 55	0	0	0	0	0	0	2	9	1	4	0	0	13					
SDA 57	0	0	0	0	0	0	6	26	0	0	0	0	5					
SDA 63	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	0	0					
SDA 64	0	0	0	0	0	0	2	9	0	0	0	0	2					
SDA 67	0	0	0	0	0	0	3	14	0	0	0	0	0					
SDA 69	0	0	0	0	0	0	2	17	1	17	1	36	0					
SDA 79	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3					
SDC 31	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	0					
SDC 33	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0					
SDC 40	0	0	0	0	1	7	0	0	2	18	0	0	0					
SDC 41	0	0	0	0	2	20	1	15	1	3	0	0	0					
SDC 50	0	0	2	38	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SDC 51	0	0	0	0	1	20	0	0	0	0	0	0	0					
SDC 59	0	0	0	0	0	1	19	2	36	0	0	0	16					
SDC 60	0	0	0	0	0	2	7	0	0	0	0	0	0					
SDC 61	0	0	0	0	2	25	0	0	0	0	0	0	0					
SDC 64	0	0	0	0	0	0	0	1	19	0	0	0	0					
SDC 70	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	0					
SDC 74	0	0	0	0	0	2	24	0	0	0	0	0	0					
SDC 79	0	0	0	0	2	21	17	36	3	53	3	36	15					
SDC 82	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	30	0					
SDC 83	0	0	0	0	0	0	1	17	0	0	0	0	0					
SDC 84	0	0	0	0	0	3	45	1	19	0	0	0	0					
SDC 92	0	0	0	0	0	2	17	0	0	0	0	0	0					
SDA 02	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 04	1	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
SDA 07	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0					
SDA 17	0	0	0	0	0	1	12	0	0	0	0	0	0					
SDA 43	3	123	0	0	1	84	4	90	31	634	1	48	0					
SDC 27	0	0	0	0	0	1	94	0	0	0	0	0	0					
賞 係	1	14	1	25	4	20	13	119	7	26	0	0	4					
合 計	483	12121	1003	84528	5476	60894	28279	28893	21294	34071	3304	53074	8425					

第7表 縄文時代遺構出土土製品計測表

(居住区層出土の土器片断)

器種%	種類	器種 %	直径 (mm)	高さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	水穴に於ける孔径 (mm)	備 考
SK 001	16	0001	51.00	37.00	9.00	23.99	12.52	定形
SK 001	-	0002	48.70	44.50	11.40	31.36	17.25	定形
SK 002	-	0004	44.20	40.00	6.50	20.82	10.50	定形
SK 003	-	0001	52.80	52.80	11.10	44.40	24.30	定形
SK 004	64	0001	36.00	36.00	6.50	30.47	15.79	破断面研磨
SK 004	65	0001	39.00	41.50	8.00	30.71	10.71	
SK 004	66	0001	27.00	35.50	6.00	20.24	10.84	
SK 004	67	0001	29.50	-	7.00	12.27	6.50	円筒?・定形
SK 004	-	0002	67.80	46.10	11.30	49.45	25.13	定形・十字
SK 004	-	0008	78.60	46.30	10.70	66.66	34.84	定形
SK 004	-	0022	64.60	29.30	11.50	34.80	12.70	定形
SK 004	-	0022	63.60	49.00	10.30	24.67	24.66	定形・十字
SK 004	-	0001	45.80	28.30	7.50	14.42	7.42	定形
SK 004	-	0016	76.70	44.80	10.20	54.67	27.02	定形
SK 006	136	0001	59.00	42.50	10.80	39.38	31.88	定形
SK 006	136	0001	61.00	45.00	12.00	43.05	22.78	定形
SK 006	137	0001	47.00	38.00	8.50	22.56	11.71	定形・破断面研磨
SK 006	138	0003	25.50	19.00	8.00	5.71	3.03	定形
SK 006	138	0001	32.50	30.50	9.50	12.84	7.34	
SK 006	-	0003	39.40	37.70	9.50	17.09	8.88	定形
SK 007	-	0124	31.70	28.90	8.70	23.76	12.51	定形
SK 007	-	0124	34.80	39.50	12.60	18.26	9.73	定形
SK 009	-	0001	52.60	33.30	8.40	21.21	10.80	定形
SK 009	-	0001	38.80	28.80	9.80	17.10	8.73	定形
SK 009	-	0001	39.90	30.10	9.50	14.79	7.63	定形

(居住区層出土の土器片断)

器種%	種類	器種 %	直径 (mm)	高さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	水穴に於ける孔径 (mm)	備 考
SK 001	17	0021	52.00	-	7.00	9.73	-	
SK 004	68	0002	36.00	-	7.50	3.24	-	
SK 006	140	0001	(46.00)	(6.00)	8.50	6.13		有孔円筒
SK 006	141	0001	(25.00)	(4.50)	8.50	4.45		有孔円筒・破断面研磨

(土坑出土の土器片断)

器種%	種類	器種 %	直径 (mm)	高さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	水穴に於ける孔径 (mm)	備 考
SK 005	39	0001	45.00	42.00	12.00	36.17	13.47	定形
SK 003	71	0001	37.00	37.00	8.00	12.44	6.76	定形
SK 009	95	0001	47.00	33.00	6.00	12.77	4.80	定形・十字
SK 009	95	0001	17.00	(29.00)	9.00	4.66	2.50	破断面研磨
SK 009	-	0001	36.50	31.10	9.80	36.28	13.61	定形
SK 009	-	0001	35.80	23.40	6.00	7.30	3.85	定形
SK 011	118	0001	37.50	48.50	9.00	29.33	16.98	定形
SK 011	119	0001	45.00	37.00	9.00	14.68	8.36	定形
SK 012	140	0001	99.00	47.00	8.00	33.02	17.50	定形・十字
SK 013	-	0063	51.80	43.40	7.80	22.74	12.73	定形
SK 015	184	0001	41.00	33.00	25.00	16.75	8.66	定形
SK 015	185	0001	54.00	33.00	10.00	23.49	12.02	定形・破断面研磨
SK 018	239	0002	62.00	43.00	7.00	14.57	15.86	破断面研磨
SK 019	296	0001	62.00	43.00	10.30	36.10	19.50	定形・円筒
SK 025	276	0018	51.50	49.50	9.50	28.20	15.34	定形
SK 008	278	0001	41.50	48.50	7.00	19.58	9.75	定形
SK 022	284	0001	39.50	-	95.00	16.47	8.43	円筒?・破断面研磨
SK 003	299	0042	74.00	46.00	11.00	54.00	27.70	定形
SK 001	326	0047	(22.50)	-	6.50	8.83	4.82	円筒?・破断面研磨
SK 011	-	0048	72.30	46.50	8.50	34.93	19.86	定形
SK 001	001	45.00	34.00	8.00	21.00	10.62	定形	
SK 032	349	0007	(37.00)	(37.00)	8.50	14.23	7.76	一部破断面研磨
SK 003	363	0001	35.00	31.50	10.00	14.97	8.12	定形・破断面研磨
SK 004	-	0001	50.60	38.10	8.60	24.15	13.30	定形・円筒
SK 034	-	0001	36.10	31.00	8.80	15.02	7.56	定形
SK 034	-	0001	39.10	32.80	8.00	12.98	6.95	定形
SK 005	426	0001	55.00	35.00	6.50	20.86	10.95	定形
SK 035	427	0004	(36.50)	(43.50)	9.00	16.68	9.30	
SK 035	-	0001	36.80	32.20	9.20	16.45	8.54	定形
SK 036	428	0001	49.50	32.00	9.00	16.59	8.36	破断面研磨
SK 036	429	0001	(45.90)	48.00	8.00	18.55	9.70	
SK 036	440	0001	(32.00)	(42.00)	9.50	11.70	6.40	破断面研磨
SK 041	495	0002	92.00	30.00	12.50	148.96	79.63	十字
SK 041	496	0015	66.00	46.50	10.50	49.65	24.96	定形
SK 041	467	0001	(44.50)	(41.00)	11.50	23.01	12.40	破断面研磨
SK 041	468	0001	(36.00)	-	19.50	22.82	12.87	円筒?
SK 041	-	0001	40.40	42.70	7.80	32.85	16.06	定形
SK 041	-	0001	48.10	34.10	8.80	19.21	10.25	定形

器種%	種類	器種 %	直径 (mm)	高さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	水穴に於ける孔径 (mm)	備 考
SK 041	-	0001	(56.40)	(59.20)	11.70	61.31	32.82	破断面研磨
SK 043	481	0001	(31.00)	(32.00)	8.00	10.77	6.02	
SK 003	490	0001	(52.00)	(37.50)	9.00	24.80	13.21	
SK 003	494	0001	47.30	32.00	9.00	19.59	10.01	定形・一部破断面研磨
SK 003	495	0001	40.00	33.50	10.00	16.65	9.24	定形・破断面研磨
SK 044	520	0001	66.00	45.00	13.50	49.41	26.24	
SK 044	521	0001	58.00	41.00	7.50	22.99	13.54	
SK 044	522	0001	43.00	37.50	10.00	29.40	16.42	定形
SK 044	523	0001	40.30	64.50	11.50	43.24	42.18	定形
SK 044	524	0001	(58.00)	(68.50)	10.50	45.14	24.02	
SK 044	525	0001	(40.50)	(55.50)	13.50	35.80	19.08	
SK 044	526	0001	(34.00)	(39.50)	11.50	28.52	15.22	
SK 044	527	0001	(32.50)	(50.50)	11.50	27.60	14.66	
SK 044	-	0008	77.30	44.80	12.10	63.31	34.23	定形
SK 044	-	0001	51.00	43.70	8.00	26.45	13.56	定形
SK 044	-	0001	43.00	42.70	10.40	23.40	12.10	定形・円筒
SK 048	505	0001	37.00	34.00	8.00	14.69	7.33	定形
SK 048	506	0001	(26.50)	(25.00)	6.50	4.41	2.30	
SK 048	507	0001	29.00	(23.00)	6.00	7.64	3.96	土器片断?
SK 048	-	0001	32.00	30.00	8.00	12.31	6.59	定形
SK 048	-	0001	41.00	41.00	8.00	18.78	10.16	定形
SK 050	503	0001	(21.50)	(26.50)	7.50	8.48	4.43	
SK 048	506	0001	48.00	37.50	7.00	18.66	9.32	定形
SK 049	507	0001	39.00	33.00	9.00	14.85	8.06	定形
SK 049	-	0001	53.40	32.60	7.80	15.03	9.53	定形
SK 001	626	0006	83.00	51.00	11.00	74.02	36.78	定形
SK 001	627	0001	63.00	52.00	10.60	50.42	26.31	定形
SK 001	628	0001	45.00	35.00	9.50	20.62	10.53	定形
SK 001	629	0001	43.50	29.00	7.00	15.38	8.42	定形・破断面研磨
SK 001	640	0001	(32.00)	(42.50)	10.00	30.83	15.47	
SK 001	641	0001	(29.00)	(30.50)	7.00	7.25	4.04	
SK 001	642	0001	(39.50)	(33.50)	9.00	30.75	11.09	土器片断?
SK 002	650	0001	(17.00)	(31.00)	6.00	4.67	2.59	定形
SK 074	711	0002	(22.00)	(33.50)	6.50	5.16	3.20	
SK 074	712	0001	(22.50)	(32.00)	7.00	10.81	5.49	
SK 075	-	0001	35.40	41.40	8.30	12.66	7.30	定形
SK 075	-	0001	56.50	36.00	7.70	15.21	10.19	定形・円筒
SK 005	739	0001	47.00	42.50	8.50	22.64	11.48	定形・十字
SK 005	740	0001	(14.80)	(26.00)	7.00	2.61	1.40	破断面研磨
SK 005	-	0001	30.70	34.50	11.40	13.06	7.21	定形
SK 007	778	0001	70.50	56.00	11.00	57.26	29.88	定形
SK 007	779	0001	62.00	47.00	16.00	36.92	18.54	定形?
SK 007	780	0009	44.00	42.00	11.30	28.30	15.82	定形・円筒
SK 007	781	0001	47.00	44.00	7.86	30.42	16.40	定形
SK 007	782	0001	41.00	35.50	7.00	14.20	7.50	定形
SK 007	783	0004	52.00	56.00	9.00	29.53	17.21	定形?
SK 007	784	0001	45.00	-	6.50	17.56	9.42	定形
SK 007	785	0001	66.00	-	13.00	40.40	15.67	円筒?・一部破断面研磨
SK 007	786	0001	40.00	-	11.50	21.13	10.01	円筒?
SK 007	787	0023	36.00	38.00	7.50	13.47	7.08	破断面研磨
SK 002	823	0005	75.50	45.00	12.00	59.27	30.17	定形
SK 006	824	0006	55.50	57.00	9.50	42.94	23.02	定形・円筒
SK 004	829	0019	63.90	87.50	9.50	77.19	42.42	定形・円筒
SK 001	864	0020	61.10	50.00	9.00	45.50	23.48	破断面研磨
SK 009	-	0007	48.60	43.00	6.45	20.96	10.54	定形
SK 003	881	0001	(34.20)	(36.00)	8.00	18.45	9.70	

(土坑出土の土器片断)

器種%	種類	器種 %	直径 (mm)	高さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備 考
SK 012	141	0001	41.00	-	7.00	15.64	定形
SK 015	186	0001	(55.00)	(48.00)	8.00	9.20	有孔円筒・破断面研磨
SK 017	218	0001	(24.50)	-	7.50	8.27	定形・破断面研磨
SK 017	219	0001	29.00	-	7.50	8.27	円筒状手取
SK 017	220	0001	(43.50)	2.00	10.50	27.31	円筒状土製品・穿穴一→一
SK 027	307	0001	43.50	4.50	12.00	23.42	有孔円筒・破断面研磨
SK 031	325	0001	(50.00)	-	9.50	11.51	
SK 035	428	0001	43.00	-	9.50	22.19	定形
SK 035	429	0001	(37.00)	-	11.00	30.46	円筒?
SK 035	430	0001	(23.50)	-	6.50	5.11</	

第8表 縄文時代遺構外出土土製品計測表

(土器片断)

種類	遺物%	径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	年代加圧値 (kg)	出土地点	備考(1)	備考(2)
1	0001	74.50	62.50	8.00	51.66	32.18	IF-75	定形	口縁部
2	0001	73.00	60.00	11.00	65.08	33.04	2F-47	定形	
3	0001	68.50	57.00	10.00	56.78	29.47	IF-75	定形	
4	0001	65.50	58.50	9.50	53.57	26.71	3F-40	定形	十字
5	0001	77.50	56.00	9.50	58.51	30.26	5D-32	定形	十字、口縁部
6	0001	73.00	60.00	11.50	73.92	40.69	1E-85 2F-80	定形	腹底部
7	0001	7.50	56.00	11.00	30.36	27.86	2F-08	定形	
8	0001	68.00	37.00	11.50	38.73	20.40	1F-64	定形	
9	0001	82.50	45.50	31.50	11.50	39.94	21.20	1E-59	定形
10	0001	[60.00]	6.00	12.50	68.49	26.08	2F-93	破断面研ぎ	
11	174-005	59.00	49.50	8.50	34.18	19.13	2F-67	定形	破断面研ぎ
12	0001	42.00	40.50	9.50	27.02	13.77	10E-96	定形	破断面研ぎ
13	0001	40.50	38.00	13.00	29.78	16.95	1F-36	定形	破断面研ぎ
14	0001	42.50	35.50	11.50	25.64	14.41	2F-71	定形	破断面研ぎ
15	0001	40.00	39.50	6.00	12.89	6.60	0.0	定形	破断面研ぎ
16	0004	[30.00]	28.00	9.00	15.90	8.00	0.0	破断面研ぎ	
17	0001	65.50	36.50	8.00	29.86	16.98	2F-28	定形	破断面研ぎ
18	0001	45.50	35.50	10.50	21.44	11.84	3F-10	定形	破断面研ぎ
19	0001	[30.00]	37.00	7.50	11.02	5.83	1F-43	破断面研ぎ	
20	0001	74.00	43.50	7.50	37.25	20.30	1E-30	定形	
21	0001	59.00	47.50	7.50	30.70	20.70	10E-96	定形	十字
22	0001	59.00	43.00	6.00	25.30	13.05	2F-65	定形	
23	0001	52.50	50.50	8.00	32.35	18.78	裏研ぎ	定形	
24	0001	54.00	43.00	9.50	30.57	17.23	1F-93	定形	
25	0008	35.00	(43.00)	10.00	32.73	17.68	2E-09	破断面	
26	0001	37.00	55.00	10.00	25.30	13.76	2F-27	定形	
27	0001	[37.50]	57.50	8.00	36.65	19.04	1F-64	1字	
28	0001	48.50	33.50	10.00	28.67	13.69	1F-43	定形	
29	025-0001	47.50	32.50	7.00	18.49	10.25	2F-39	定形	
30	0001	49.00	37.50	9.00	22.85	12.23	2F-70	定形	
31	0001	42.50	36.50	8.00	18.95	9.66	1F-31	定形	
32	0001	42.00	35.00	11.00	25.20	13.20	2F-88	定形	
33	0001	36.00	30.00	8.00	11.38	6.50	1E-85	定形	
34	0001	58.00	35.50	10.50	45.96	23.30	1E-49	定形	
35	0001	48.50	52.50	9.50	32.27	17.29	3C-64		
36	0001	11.50	34.50	6.50	14.35	7.60	0.0	定形	
37	0001	44.50	47.50	8.00	25.13	12.94	2D-20	十字	
38	0001	49.50	34.00	7.00	18.98	9.52	1F-42	定形	
39	0001	40.50	29.00	8.00	14.86	8.86	1F-64	定形	
40	0001	50.00	42.00	11.00	8.00	27.55	1F-83	可動 腹壁を伴つ土器片	
41	0001	[39.00]	36.00	15.00 7.00	20.04	11.10	1F-30	腹壁を伴つ土器片	
42	067-0001	42.50	38.00	7.50	18.06	9.45	3E-09		
43	067-0001	49.00	40.50	9.00	22.97	12.17	3E-09	定形	
44	0001	45.00	36.00	11.00	21.85	11.85	2F-01	定形	
45	0001	50.50	39.00	4.50	13.33	7.31	3C-16	定形	
46	0001	63.50	51.50	8.00	41.09	22.42	1F-30	土器片番	
47	0001	51.00	47.50	8.00	26.54	14.06	1F-74	定形	
48	0001	66.00	48.00	6.00	16.55	8.57	1F-42		
49	028-0000	53.00	37.00	7.50	24.07	12.08	2F-29		
50	0001	37.00	25.00	7.00	11.31	5.77	1F-62	定形	
51	0001	31.50	22.00	8.00	7.76	4.11	1F-85	定形	

(土器片断・等)

種類	遺物%	径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	年代加圧値 (kg)	出土地点	備考(1)	備考(2)
52	0001	66.00	-	6.50	59.43	28.07		破断面研ぎ	
53	0019	57.00	-	10.00	47.04	1F-74		定形	破断面研ぎ
54	0001	51.00	-	10.00	32.65	0.0		定形	破断面研ぎ
55	0007	66.50	-	8.50	50.30	1F-40		有孔円筒	破断面研ぎ
56	0001	[28.00]	( 8.00)	8.50	26.20	3F-06		有孔円筒	破断面研ぎ
57	0001	[29.00]	( 6.00)	8.50	12.84	1F-41		有孔円筒	破断面研ぎ
58	0002	41.00	8.50	9.00	18.83	0.0		有孔円筒	定形
59	0001	31.00	8.00	4.50	8.03	2F-07		有孔円筒	破断面研ぎ
60	0001	[16.50]	(12.00)	5.00	5.16	1F-30		有孔円筒	破断面研ぎ
61	166-245	[17.00]	(12.00)	5.00	3.83	1F-76		有孔円筒	破断面研ぎ
62	121-0001	[16.00]	(12.00)	8.00	5.62	3F-01		有孔円筒	破断面研ぎ
63	0001	47.00	-	7.00	19.95	3F-05		定形	破断面研ぎ
64	0001	[23.00]	-	11.00	17.02	3C-75		破断面研ぎ	

種類	遺物%	径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	年代加圧値 (kg)	出土地点	備考(1)	備考(2)
65	0001	67.00	-	11.50	46.13	1F-64			
66	0001	49.50	-	13.00	40.84	2F-48		定形	
67	0001	56.00	-	4.50	17.75	1F-66			
68	0001	48.50	-	10.00	23.86	2F-27			
69	0001	47.50	-	7.50	36.83	1F-63		定形	
70	004-0001	45.50	-	8.50	18.73	2F-24		定形	
71	0001	46.00	-	9.00	22.28	2F-29			
72	0001	48.00	-	6.00	10.02	2F-29			
73	060-0000	43.00	-	10.50	20.03	1F-41			
74	060-0000	53.00	-	11.50	32.18	1F-41			
75	182-0001	43.50	-	10.00	14.77	1F-10			
76	0001	[30.50]	-	8.50	14.89	3F-25			
77	0001	(46.00) (21.50)	-	7.50	12.30	0.0			
78	0001	35.50	-	6.00	11.28	1F-62		定形	
79	189-0001	[26.50]	-	9.50	18.28	1F-97			
80	0001	44.50	-	7.50	19.08	5D-24			
81	0001	53.50	-	8.50	34.18	3D-15			
82	0001	30.00	-	8.00	25.52	3C-18			
83	0001	45.00	-	11.00	21.46	5D-09			
84	0001	42.50	-	7.50	17.20	5D-03			
85	0001	34.50	-	10.00	16.46	1F-96		定形	
86	0001	30.00 36.50	-	7.50	11.23	0.0		定形	
87	0001	35.50	-	10.00	7.90	1F-52		定形	
88	0001	36.00	-	6.00	9.86	1F-62		定形	
89	0001	[34.00] (20.50)	-	9.00	6.12	1F-30			
90	0001	36.00	-	7.00	11.16	1F-93		定形	
91	0001	23.00	-	5.50	4.88	0.0		小型	
92	0001	24.40	-	3.00	4.98	1F-64		小型	破断面研ぎ
93	121-0001	20.50	-	10.00	5.87	3F-01		小型	破断面研ぎ
94	0001	21.00	-	7.50	4.92	3F-06		小型	定形
95	0001	18.50	-	6.50	3.65	2E-06		小型	定形
96	0001	21.00	-	5.50	3.25	1F-61		小型	定形
97	0001	最大径 64.00 (43.50)	最大径 35.00	9.00	22.15	1F-64		有孔三角筒	
98	0001	最大径 59.50 (46.00)	最大径 36.00	7.50	11.12	2D-30		有孔三角筒	定形
99	0001	最大径 44.00 (31.00)	最大径 31.00	7.50	4.69	1F-33		有孔三角筒	定形
100	0001	最大径 37.50 (26.00)	最大径 26.00	6.50	7.82	2F-16		定形	三角
101	0001	57.00	-	7.00	31.32	1F-64		定形	腹壁片
102	0001	(49.00) (28.50)	-	6.00	11.46	1F-60		腹壁片	
103	0001	最大径 36.00	径 24.50	8.50	7.64	2F-03		円筒状土器片	定形
104	0001	[32.50]	-	6.00	9.96	2F-17		円筒状土器片	

(土器片断・等一箇非断片断)

種類	遺物%	径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	年代加圧値 (kg)	出土地点	備考(1)	備考(2)
-	0001	48.00	9.00	24.34	12.80	2F-05			
-	166-0001	[62.50]	49.50	11.00	32.26	18.12	1F-70		
-	0001	[51.00]	44.00	15.00	38.27	23.02	2F-07		十字、口縁部
-	0001	[45.00]	[37.00]	11.50	21.26	11.48	1E-85		
-	001-0002	[43.00]	51.50	12.00	28.09	18.52	2F-03		十字
-	060-0008	[46.00]	47.00	11.50	29.75	16.06	1F-41		破断面研ぎ
-	060-0028	[48.00]	47.00	9.00	38.58	15.85	1F-41		土器片番
-	080-0022	[55.50]	[59.00]	7.00	27.36	14.58	1F-41		
-	0001	[46.00]	62.50	9.00	31.24	17.07	2F-28		土器片番
-	080-0023	[53.50]	54.00	7.50	15.23	8.30	1F-41		破断面研ぎ
-	0001	[49.00]	[43.00]	7.00	21.83	11.71	2F-91		
-	0001	[60.00]	58.00	8.00	17.66	9.40	1F-64		
-	166-0001	[41.50]	[50.00]	11.50	27.54	14.88	1F-76		破断面研ぎ
-	0001	[38.00]	58.00	5.00	22.45	13.07	1E-86		土器片番
-	0002	[56.50]	54.00	13.00	47.50	24.66	2F-86		口縁部
-	080-0003	[53.00]	44.00	7.50	14.51	8.08	1F-41		
-	0001	[32.00]	39.00	8.50	14.10	7.46	1F-62		
-	0001	[26.00]	42.50	9.00	13.25	7.79	1F-31		
-	0001	[27.00]	36.00	8.50	11.51	6.36	1F-33		
-	0001	[33.50]	[28.00]	10.50	11.51	6.59	0.0		

発掘 No.	産物%	長径 (mm)	短径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	平均比重 (g/cm <sup>3</sup> )	出土 層位	備 考
- 046-0002	(31.50)	28.50	8.00	8.74	4.77	1F-73		
- 0001	(33.50)	30.50	8.00	8.42	4.80	1F-33		
- 046-0001	(40.50)	29.00	6.50	10.11	3.30	1F-73		
- 0001	(21.00)	32.50	9.00	6.91	3.87	2F-98	破断面研削	
- 0001	(15.50)	36.00	10.00	6.81	3.56	0.0		
- 0001	(18.50)	32.00	9.50	7.98	4.99	1F-64		
- 046-0003	(28.00)	(31.50)	9.50	7.53	4.66	1F-41		
- 0001	(25.50)	33.50	7.50	7.28	4.17	10E-96		
- 0001	(30.50)	39.50	7.50	8.08	4.08	1F-42		
- 0001	(22.50)	30.50	6.00	6.18	3.20	1F-40	破断面研削	
- 046-0003	(28.50)	36.00	8.30	10.75	6.06	1F-41		
- 0001	(33.50)	(36.00)	9.00	13.97	7.20	1E-85		
- 046-0003	(42.00)	(30.50)	8.50	25.73	13.37	1F-41	土層内産?	
- 0001	(56.00)	63.50	11.50	41.44	22.63	1F-11	円板?	
- 046-0001	(39.50)	65.00	14.00	29.21	14.41	1F-73	円板?	
- 046-0030	(41.00)	48.50	11.00	25.88	14.17	1F-41		
- 0002	(42.00)	(41.00)	10.00	21.36	11.46	10E-94	円板?	
- 046-0000	(26.00)	36.00	8.00	10.41	5.46	1F-41		
- 0001	(40.00)	(28.00)	9.00	13.42	7.22	1F-73	円板?	
- 046-0001	(29.00)	(32.00)	7.00	8.69	4.48	1F-73	円板?	
- 0001	56.50	(43.50)	9.00	27.80	15.60	3D-03		
- 046-0030	(41.00)	48.50	11.00	25.88	14.17	1F-41		
- 007-0003	28.20	23.30	8.30	7.43	4.08	2E-95	定形	
- 104-0001	44.62	33.00	10.30	19.03	20.12	2E-95	定形	
- 104-0001	36.62	31.40	7.40	10.47	5.53	2E-95		
- 046-0001	39.10	34.00	10.80	12.54	7.36	2E-79		
- 046-0001	(49.00)	64.00	12.50	54.85	39.57	2E-76	多軸	
- 123-0001	(63.00)	(34.00)	7.90	19.43	10.16	3E-26		
- 046-0001	66.90	48.10	10.70	43.17	23.50	3E-09	定形	
- 046-0001	33.40	28.80	9.40	14.32	7.36	3E-09	定形	
- 046-0001	33.50	35.30	12.00	30.41	11.07	3E-09	定形	
- 046-0001	31.10	32.70	6.40	6.75	4.07	3E-09	定形	
- 046-0001	42.10	40.20	7.60	26.84	14.41	3E-09	定形・多軸・堀之内	
- 046-0001	50.50	45.60	7.40	21.07	11.53	3E-09	定形・堀之内	
- 046-0001	39.50	57.60	6.80	22.79	12.12	3E-09	定形・堀之内	
- 046-0001	(43.62)	42.50	10.40	21.40	12.52	3E-09	円筒部・堀之内	
- 046-0001	(46.66)	40.30	8.30	20.41	10.87	3E-09	十字	
- 046-0001	(30.42)	40.30	15.30	12.29	7.15	3E-09	多軸	
- 046-0001	(33.00)	41.90	9.40	15.49	8.47	3E-09		
- 046-0001	(30.40)	44.70	7.90	15.42	8.12	3E-09		
- 046-0001	(33.40)	(27.30)	7.70	10.67	3.91	3E-09	十字	
- 046-0003	48.70	48.70	11.00	34.66	17.32	1F-41	定形	
- 046-0000	34.80	33.20	11.40	13.67	6.68	1F-41	定形	
- 046-0002	51.50	38.00	10.00	29.55	15.43	1F-41	定形・加賀利正	
- 046-0002	41.60	35.30	7.60	13.60	7.41	1F-41	定形	
- 046-0002	37.60	38.30	6.80	9.67	5.67	1F-41	定形	
- 046-0002	(30.80)	(34.50)	7.90	9.49	5.36	1F-41	定形	
- 046-0002	(27.40)	(32.40)	9.80	6.29	3.62	1F-41		

発掘 No.	産物%	長径 (mm)	短径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	平均比重 (g/cm <sup>3</sup> )	出土 層位	備 考
- 046-0002	(22.00)	(24.80)	7.70	3.77	2.19	1F-41		
- 046-0002	(20.00)	(18.10)	9.60	3.23	1.79	1F-41		
- 046-0003	43.40	16.40	22.05	11.98	1F-73		定形	
- 104-0001	(28.30)	44.20	8.70	14.83	7.92	1F-76	板石中	
- 104-0001	(25.20)	(29.40)	11.20	7.22	4.00	1F-76	堀之内	
- 104-0001	(23.30)	(22.80)	8.00	8.84	2.60	1F-76		
- 104-0171	47.70	26.30	13.00	19.70	10.66	1F-76	定形	
- 104-0241	62.30	15.40	14.50	18.41	33.34	1F-76	定形	
- 104-0241	58.60	49.00	11.10	39.36	19.30	1F-76	定形・口縁部	
- 104-0241	44.00	28.80	9.90	21.68	11.43	1F-76	定形・口縁部	
- 104-0241	51.90	57.80	9.30	36.30	18.17	1F-76		
- 104-0241	(27.40)	65.60	8.70	22.90	13.01	1F-76	堀之内	
- 104-0241	59.80	36.40	8.80	22.06	11.48	1F-76	堀之内・口縁部	
- 104-0241	(41.20)	51.70	8.90	21.49	11.84	1F-76	板石中	
- 104-0241	(23.60)	34.00	9.00	9.40	5.32	1F-76		
- 104-0245	38.70	44.10	7.90	17.48	9.37	1F-76	定形	
- 104-0245	40.00	31.60	10.90	13.99	8.23	1F-76	定形	
- 104-0245	(57.50)	70.30	9.50	53.83	27.56	1F-76	堀之内	
- 104-0245	(28.70)	44.10	10.40	13.56	7.27	1F-76	堀之内	
- 104-0245	(25.00)	(27.30)	7.10	4.75	2.63	1F-76	堀之内	
- 104-0245	(16.30)	(23.70)	7.80	3.77	1.96	1F-76	堀之内	
- 024-0001	40.20	26.60	8.80	12.01	6.50	2F-04	定形	
- 024-0003	32.10	32.20	9.30	11.99	6.08	2F-04	定形・加賀利正	
- 024-0004	38.40	30.10	8.90	12.19	6.63	2F-04	定形	
- 024-0003	44.60	40.50	7.80	20.25	9.36	2F-04	定形	
- 024-0002	47.00	22.50	7.50	18.54	9.42	2F-04	定形	
- 024-0002	40.70	35.40	11.80	17.78	9.54	2F-04	定形	
- 024-0002	(24.62)	35.30	8.80	12.35	6.85	2F-04		
- 024-0002	(40.70)	(31.70)	7.20	12.12	6.43	2F-04		
- 024-0002	(32.10)	32.50	10.00	11.58	6.52	2F-04		
- 024-0004	30.00	33.50	9.80	15.77	8.28	2F-04	定形・十字	
- 104-0001	39.50	48.40	10.70	28.69	15.81	2F-04	定形	
- 110-0001	(26.20)	39.50	10.80	14.00	7.98	2F-82		
- 110-0002	42.30	42.30	10.40	32.68	19.31	2F-82	定形	
- 130-0001	39.80	30.80	10.10	15.28	5.18	2F-98	定形・多軸	
- 130-0001	45.30	25.40	13.80	17.20	9.58	2F-98	定形	
- 105-0006	48.30	36.90	8.90	21.96	10.58	2G-30	定形	
- 114-0002	(20.70)	(22.50)	11.30	6.39	3.77	3C-71		
- 002-0001	30.10	45.00	5.30	18.47	15.82	3D	定形・多軸	
- 070-0001	(28.60)	37.30	9.90	12.89	6.52	3D		
- 070-0001	(33.20)	53.70	6.50	17.22	8.76	3E	十字	
- 121-0001	44.60	46.30	10.70	29.08	15.36	3F-01	定形	
- 170-0004	41.60	31.60	11.90	19.55	11.80	3F-01	定形・破断面研削	
- 表紙	37.00	26.90	10.90	11.57	6.54	表紙	定形・十字	
- 046-0001	38.70	-	11.80	22.13	6.09	定形・破断面研削		
- 057-0001	33.20	-	8.30	8.67	35.36	定形		
- 101-0002	25.90	-	8.50	8.90	3F-44	定形		

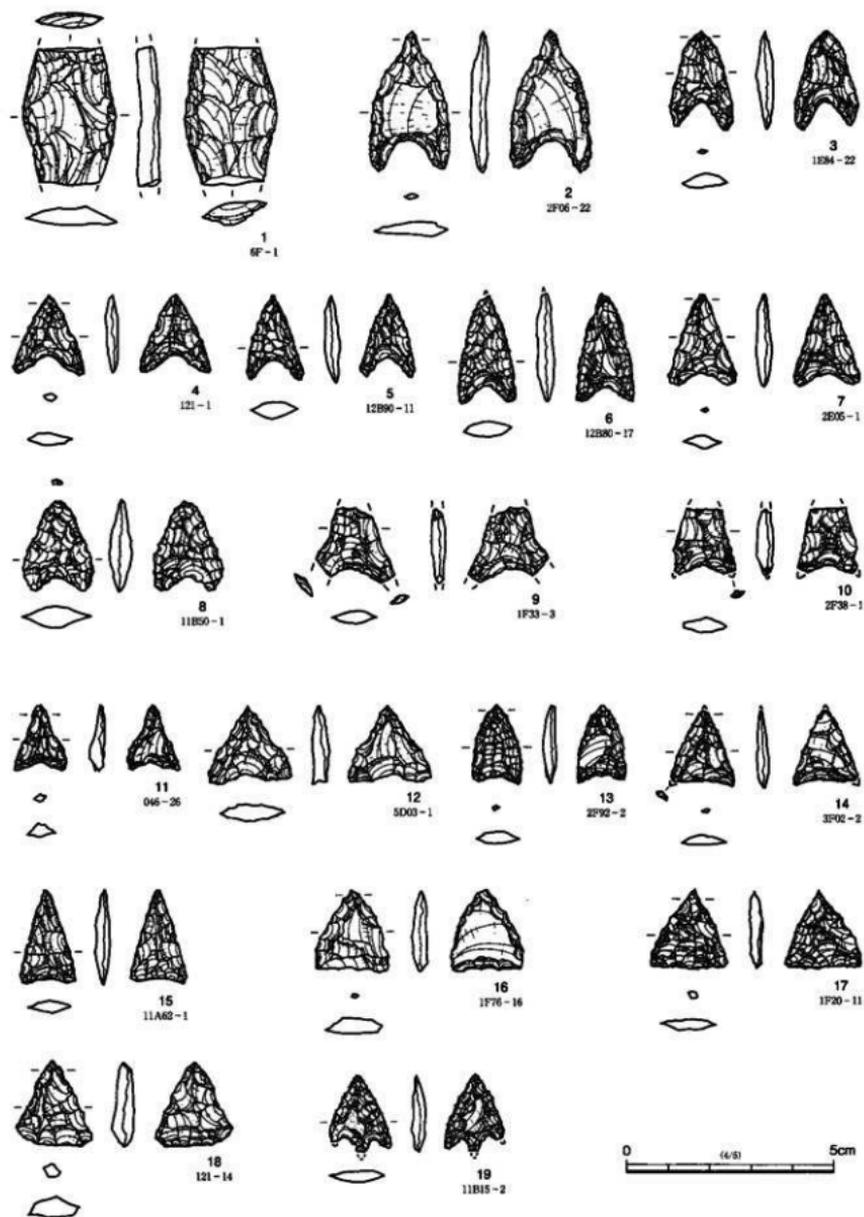
### (3) 石器 (第125～133図, 第9・10表, 図版38～43)

この項で扱う石器は、旧石器時代の石器と明らかに後世の所産と思われる砥石を除きすべて縄文時代石器として報告する。遺構外出土の石器については、本遺跡出土土器の時期である縄文中期末～後期初頭の所産である可能性が高いが、一部、尖頭器・石鏃・打製石斧等に他時期のものが混在していると考えられる。以下、各器種について説明していく。

**尖頭器** 1は尖頭器である。黒色緻密質安山岩を石材として先端と基部が切断されている。形態から見て縄文草創期の尖頭器であろう。

**石鏃** 石鏃は基部の形状をもとに概ね5類に分類した。

1類: 基部が逆V字状・逆U字状に深く抉り込み細長い脚部を有するもの(2・3, 22・23)。2は黒色緻密質安山岩製のもので基部が逆U字状に深く抉れ、両側縁先端が抉れて先端部が錐状に細くなる。3は基部が逆V字状になるもので、両側縁下半部が膨らみ脚部が尖る。先端部は欠損後再加工したものが鈍角となる。22・23は片脚のみの欠損品である。2点とも末端が尖る扁平棒状を呈しており1類の範疇に含



第125図 縄文時代遺構外出土石器(1)

まれる。

2類：基部が浅く山形に挟り込み短い脚部を有するもの（4～10）。4は両側縁が影らみ調整は精緻である。5は細身で先端が尖る。6はやや長身なもので先端を欠損する。7は両側縁が直線的で脚部末端は円味をもつ。8は両側縁下半部が影らみ脚部末端が内湾する。先端部が鈍角であり器体形状は円味を帯びる。9は先端と両脚部を欠損する。側縁が左右非対称であり或いは小型石匙の可能性もある。10は先端を欠損し基部は浅く直線的に挟れる。

3類：基部が部分的に挟れる或いは弧状に僅かに挟れるもので明確な脚部を有さないもの（11～16）。11は本遺跡最小のもので両側縁が挟れ先端が尖る。12は器体が短いもので基部中央部が部分的に挟れる。13は基部が弧状に挟れ両側縁が緩やかに影らむ。14・15は両側縁が直線的で基部は弧状に挟れるが、15はやや長身である。16は裏面に大きく主要剝離面を残し、素材の打面部を鋸歯状調整で除去している。

4類：基部が平基或いは凸基となるもの（17・18）。17は器体平面形が三角形になるもので先端部が細く尖る。18は片側縁が短く、そのため基部が円味をもって影らむ。

5類：基部に茎部を有するもの（19）。19はいわゆる有茎石鏃である。透明な黒曜石製で表面に主要剝離面を残置する。茎部は先端を欠損するが、基部両端を深く挟り込み細い基部を作り出している。

20・21は基部を欠損しており分類不可能のものである。21は復元形状はかなり長身なものとなろう。

24・25は石鏃未成品とした。24は黒曜石製の横長剥片を横位に用い、両側縁が細部加工と急角度な調整により先端部を作出している。25は小型のもので器体周辺に疎らに調整が認められる。

石鏃 26は石鏃とした。石刃状縦長剥片の左側縁全縁に細部調整が連続し、素材の右側縁末端部に挟入した細部調整が認められる。右側縁末端には細部調整が認められるが、右側縁の裏面での使用痕と思われる微細剝離痕が顕著である。

R剥片 27～30はR剥片である。27は背面右側縁に急角度の調整が認められ、その調整部位を中心に微細剝離痕が認められる。28はチャート製で右側縁末端に集中的な調整が看取され、その部分に微細剝離痕が見られる。29は右側縁に挟入した細部加工と裏面末端に平坦調整が認められ、両側縁全縁に微細剝離痕が連続する。30は黒曜石製で器体周縁に疎らな細部加工が看取され、器体下半部に微細剝離痕が見られる。

石核 31は石核である。チャート製のもので、板状素材の上下打面からの剝離を中心にして、正面で上面方向、裏面で下面方向からの剥片剝離が進行する。

磨製石斧 32～42は磨製石斧である。32は蛇紋岩製のもので、全面が研磨される。先端部は細かな剝離と潰れが認められる。33は砂岩製のもので、裏面が広く割られた後にさらに研磨が行われている。34はホルンフェルス製のもので器体を大きく欠損するが、刃部は蛤刃状になる。35は小型のいわゆる定角式石斧であるが刃部を欠損する。36～38は刃部のみの破片である。39も小型の定角式石斧であり刃部が欠損している。40は磨製石斧としたが、刃部が欠損した後に再加工されているものである。刃部の切断面は擦り面となっていて、両側面は再敲打されている。41・42はやや大型のものと思われ、41は基部のみの欠損品、42は胴部のみの欠損品である。

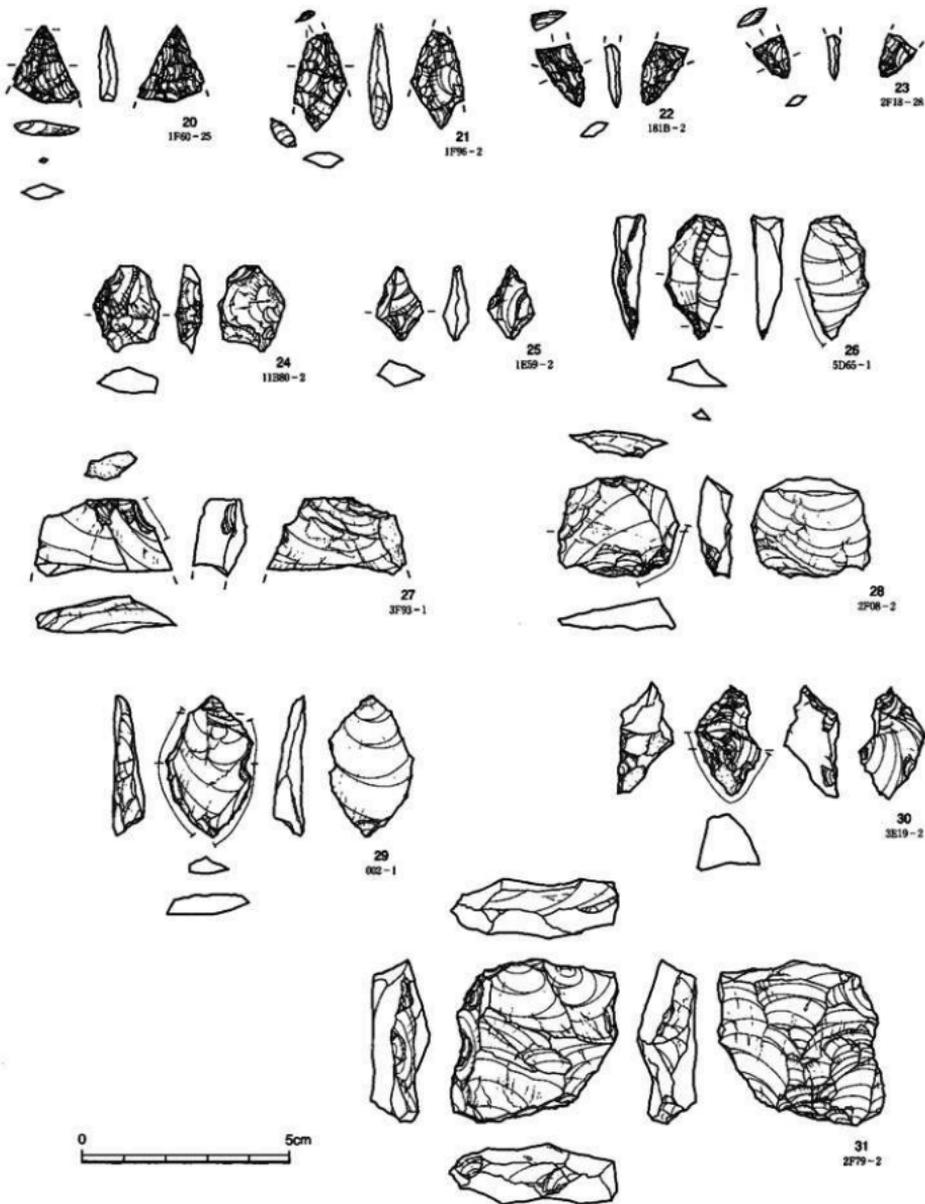
打製石斧 43～60は打製石斧である。打製石斧は大部分が分銅型の打製石斧である（43～58）。43は表面・裏面に礫面を残しており素材形状をいかして打製石斧を整形している。44は刃部の摩耗が顕著であり胴部の挟入部も摩耗している。45～47はやや小型の打製石斧であり、45は器体が薄く刃部は直線的で

ある。46は一部刃部を欠損するが刃部は円味をもつと思われる。47は胴部の挟りが深く刃部・基部の端部が尖る。48～51は胴部下半部～刃部が残存している欠損品である。いずれもやや円味をもつ刃部である。52～56は胴部上半部～基部が残存している欠損品であり、57は胴部のみ欠損品である。58は分銅型の範疇に入れるのはやや躊躇されるものであるが、器体長が短く、おそらく基部が欠損した石斧を再加工したものであろう。59は器体平面形が長楕円形を呈し、片面に礫面を大きく残す。いわゆる礫石斧に近いものである。60は器体平面形が楕円形のもので風化が著しい。

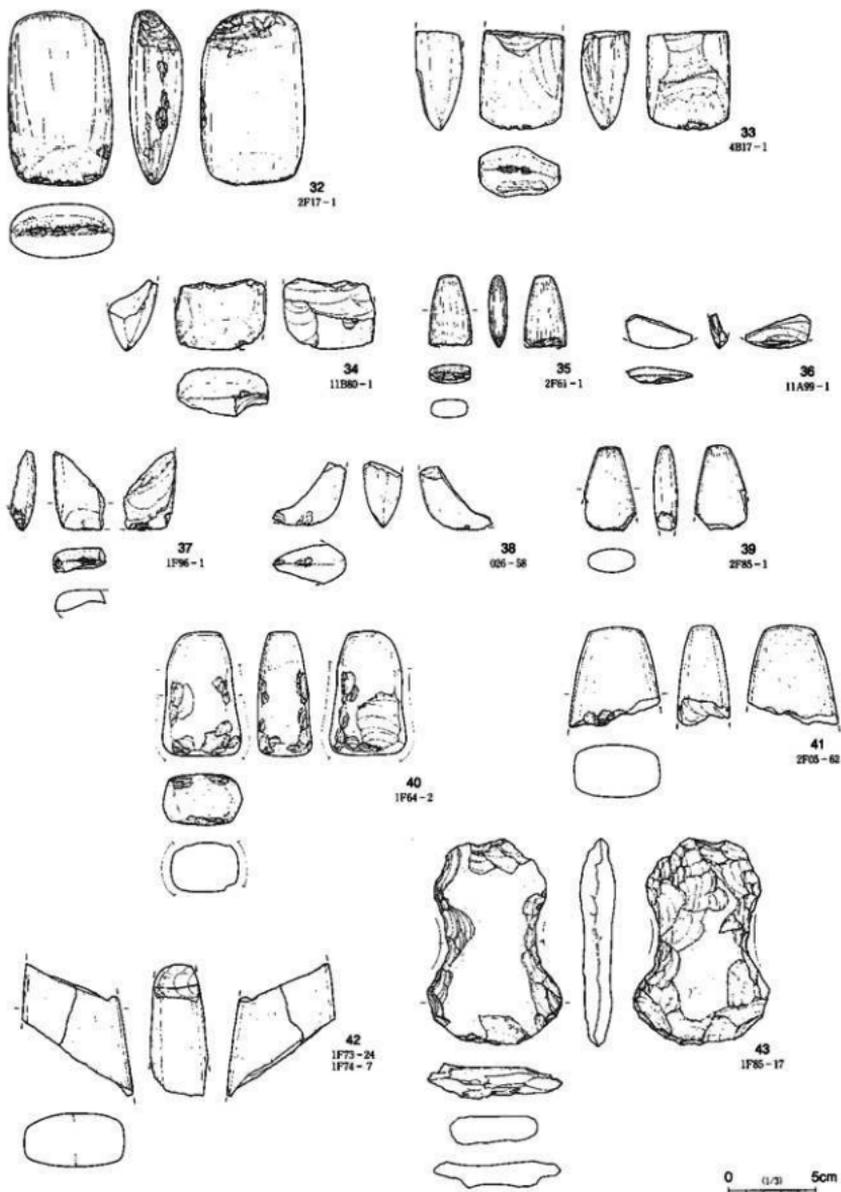
石棒 61～63は石棒である。63は大型石棒の頭部片と思われる。頭頂部には敲打による縦長の刻みがあり、他の表面も敲打により整形されている。62も大型のもので、石棒の胴部片である。表面は敲打後に磨かれている。63は小型のもので、直方体の素材全面が敲打されており、頭部の敲打が顕著である。

磨石 64～106は磨石である。磨石としたものは、擦り面をもつ石器すべてを磨石として総称する。従って窪み部や敲打痕が複合されるものも磨石に含めた。64～77は擦り面と窪み部があるもので、いわゆる凹石の機能が複合されているものである。64は表面に1か所、裏面に2か所の窪み部があり、横断面形は略三角形を呈する形態が特異なものである。65は表裏面に1か所ずつの窪み部があり、平面形は三角形を呈し下端部は敲打されている。66も上下端部に敲打痕が観察される。67は表面のみに窪み部が見られる。68～73は表裏面が平坦に近いもので、扁平な円形或いは楕円形を呈するものである。68は下端部にも窪み部が認められる。69は長楕円形を呈する。70は表裏面、側面の擦りが顕著で断面形は長方形を呈する。71は表裏面の擦りが著しく、側面には擦りが及ばない。72・73は縦方向に欠損する。73は側面の擦りが顕著で、平面形は長方形になる。74・75は不定形状のもので多孔質安山岩を石材にしており、74は表面と側面に窪みが見られる。75は表面のみに窪み部が見られ、裏面は擦りが顕著で平坦な面で構成される。76は表面に大きな窪みがあり、末端に敲打痕が見られる。77は表裏面の擦りが側面に及ばないもので、端部に割れた後の敲打痕が見られる。78～90・94は擦り面と敲打痕が観察されるものである。78は表裏面のみが擦り面となり、両端部に敲打による剝離痕と敲打痕が看取される。79・80は器体が長楕円形となり下端部に集中した敲打痕が観察される。81は両端部から右側縁に敲打痕が見られる。82は卵形に近いもので、全面が擦り面となるが片端部に敲打は集中する。83は裏面の擦りが顕著であり下端面の平坦面に敲打が認められる。84～88は全面が擦り面となり、側面にも敲打が及ぶものである。84は右側縁下半部と左側縁上部に敲打が集中する。85は両端部の敲打と左側縁の敲打が顕著である。86は両端部と上端縁に敲打が連続する。87は右側縁全縁と上端部を中心に敲打が観察される。88は下端部から左側縁にかけて敲打痕が認められる。89は下端部から右側縁下部が挟り込むように擦られ、その擦り面の端部が敲打されている。90は大型のもので下端部が敲打により剝離されその部分に敲打痕が看取される。91～93は擦り面のみで構成されるものである。94はやや扁平のもので下端部に敲打痕が見られる。95は表面に擦り面が2面観察される。96・97は横断面が三角形を呈するもので、96は右側面に剝離痕が観察される。97は下面も擦り面となっている。98は棒状礫片の裏面の擦りが顕著である。99～106は扁平な磨石である。99は全面が擦り面となる。100は上下端部を欠損するが、表裏面が平坦な擦り面となる。101は非常に扁平なもので表裏の擦りが著しい。102は安山岩製で表裏の擦りが顕著で縁辺が尖る。103も安山岩を石材としている。104は半分を欠損するが平面形は円形になろうか。105は擦りが顕著で表面は光沢を帯びる。106は表裏面のみが擦られている。

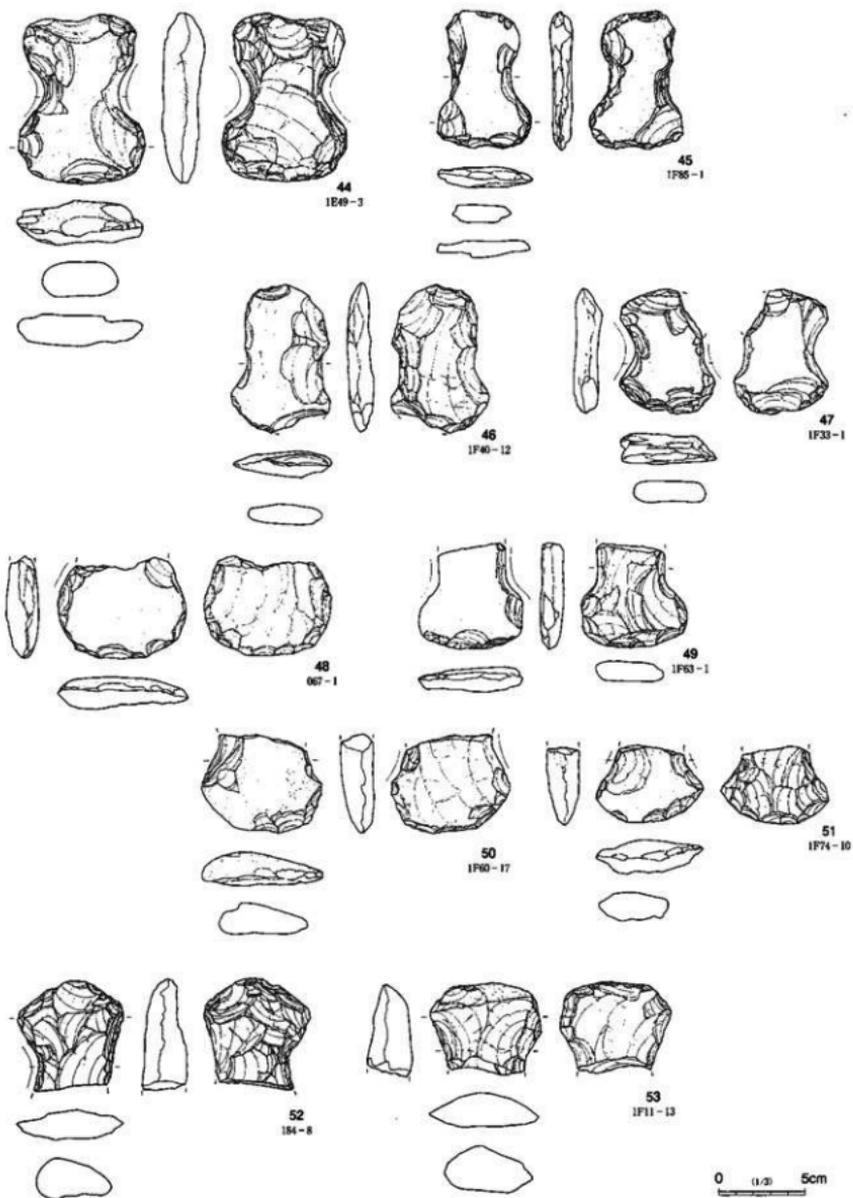
敲石 107・108は敲石である。107は平面形状が円形であり下端部が大きく剝離され、その端部が敲打



第126圖 縄文時代遺構外出土石器(2)



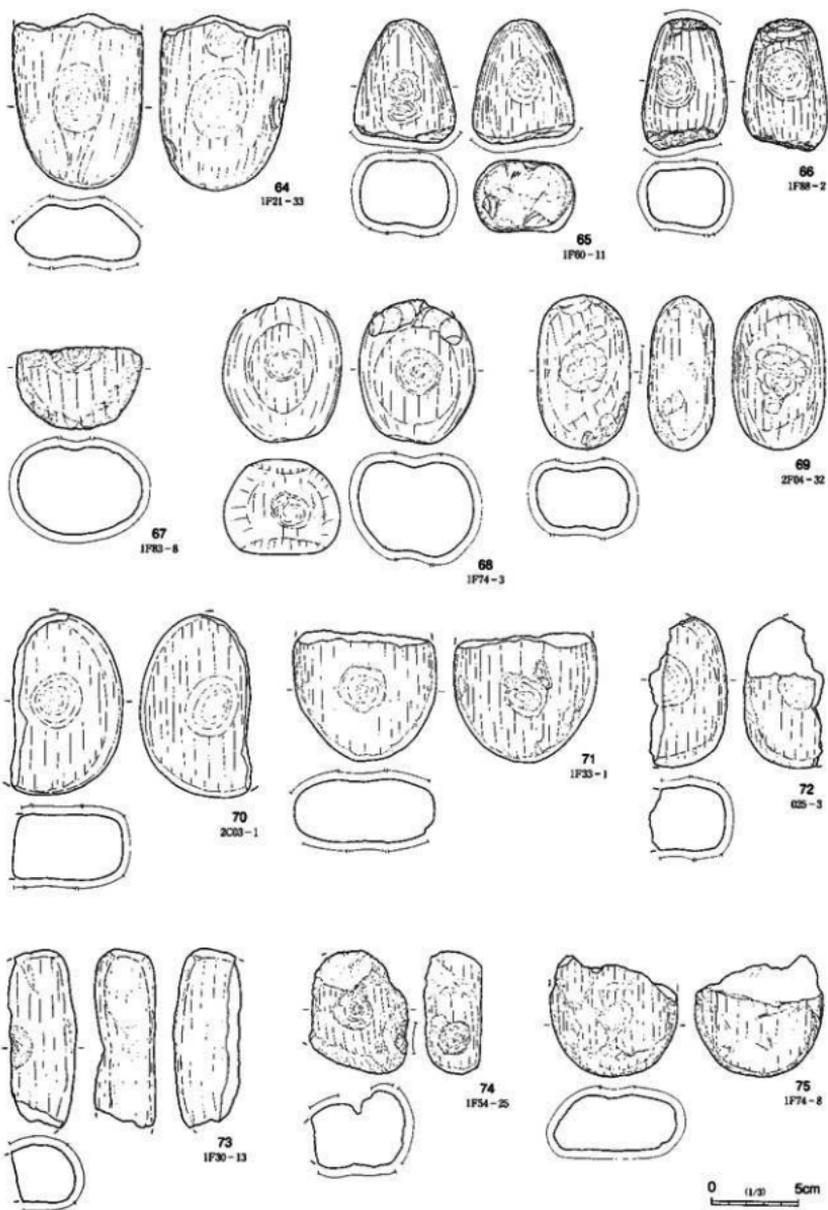
第127図 縄文時代遺構外出土石器(3)



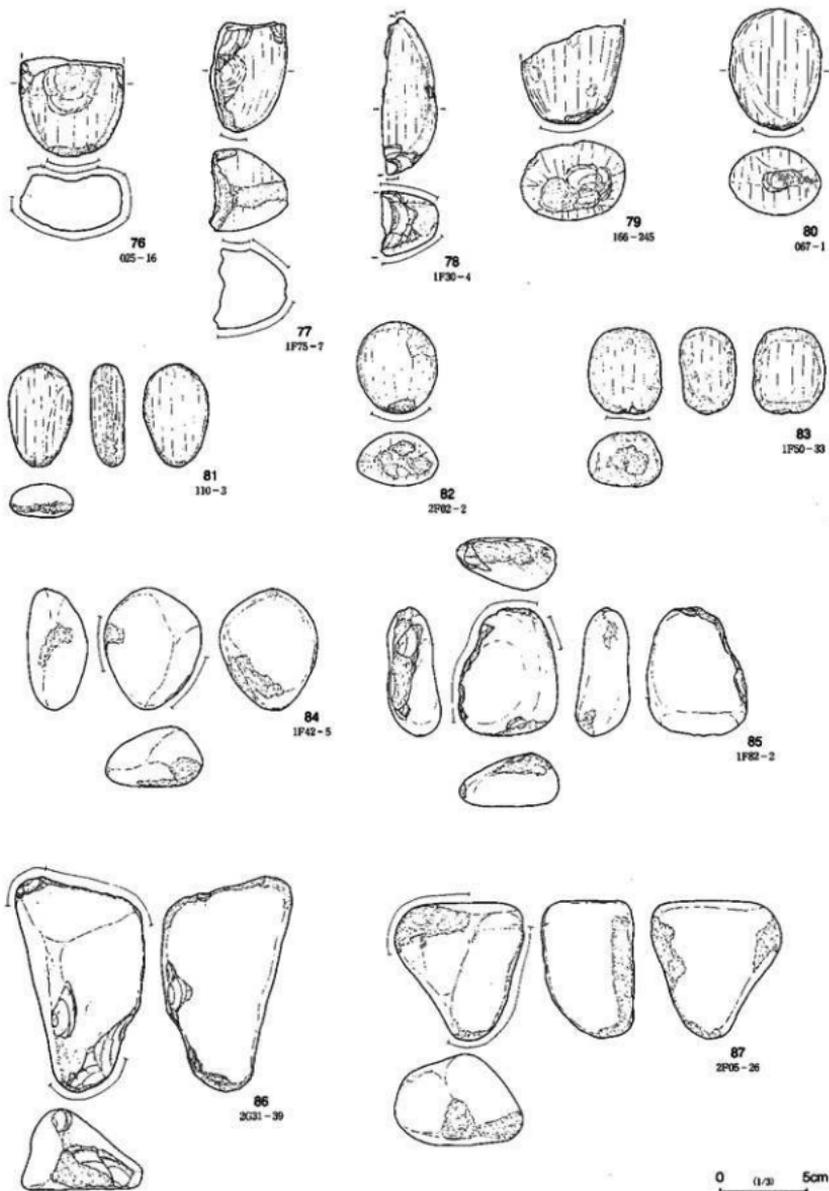
第128図 縄文時代遺構外出土石器(4)



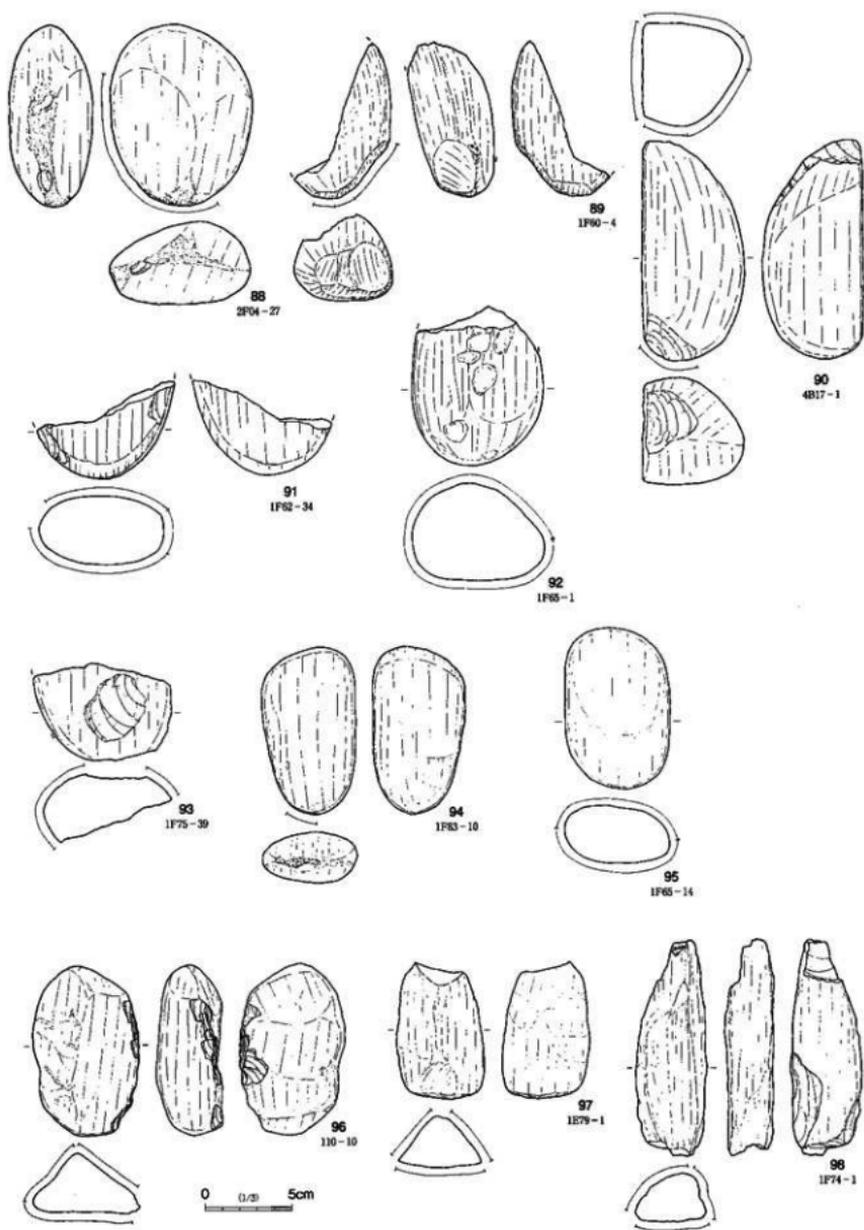
第129図 縄文時代遺構外出土石器(5)



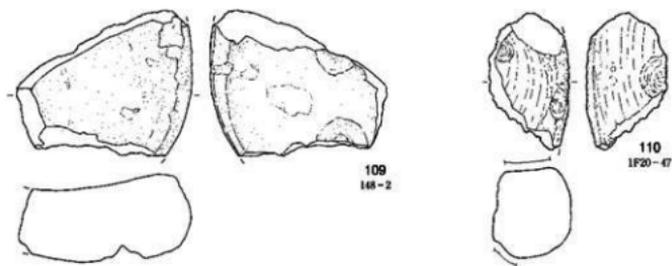
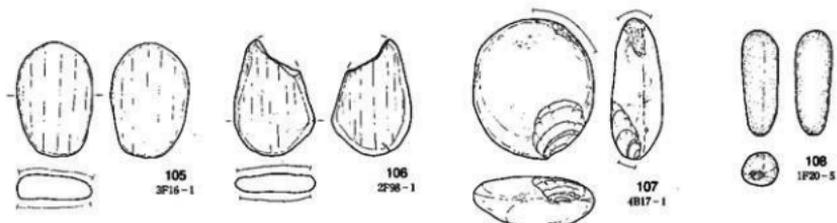
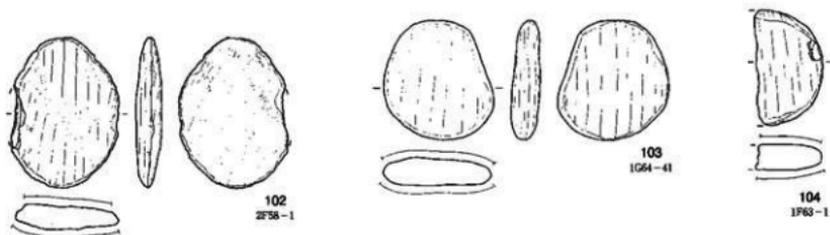
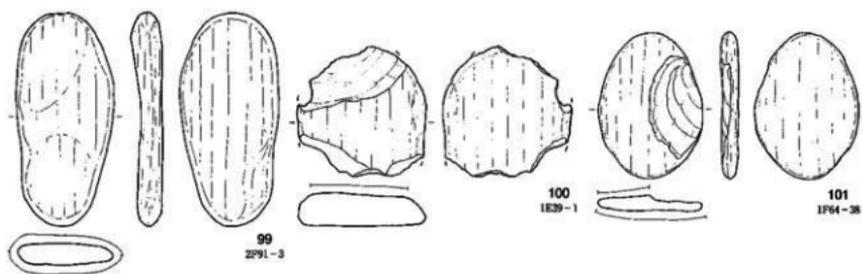
第130図 縄文時代遺構外出土石器(6)



第131圖 縄文時代遺構外出土石器(7)



第132図 縄文時代遺構外出土石器(8)



0 (1/2) 5cm

第133図 縄文時代遺構外出土石器(9)

されている。上端部は敲打痕のみで構成される。108は棒状の形状をして下端部に僅かな敲打痕が認められる。

石皿 109・110は石皿である。109は表面が縁辺から緩やかに窪んで研ぎ面となっている。表面には窪み部が2か所観察される。110は石皿の縁辺部の破片で、表面から縁辺部と裏面に3か所の窪み部が認められる。

## 6 まとめ

本遺跡における縄文時代の遺構及び遺物は、その大半が加曾利E4式から称名寺式期のものであった。この時期は、千葉県東部の縄文時代を特色づける貝塚の形成が沈静化し、非常に小規模になる時期である。具体的には、東京湾岸を中心として加曾利E3式期くらいまでは大型貝塚の形成が見られるが、加曾利E4式期になるとほとんどの遺跡で形成がとぎれてしまう。次に貝塚が発達するのは堀之内式期以降である。もちろんこれは千葉に特有の現象と見られ、隣接する貝塚地帯である神奈川県三浦半島や東北部太平洋沿岸ではこの限りではない。千葉県域では、この時期に貝塚は極端に減少するが、逆に下総台地を中心とする内陸部では集落が増大する様相が見られる。この馬込遺跡もその一つになるであろう。集落の存続が前後型式にあまり重ならない（つまり、加曾利E4式から称名寺式にほぼ限定される）という特徴も共通すると思われる。

また、加曾利E4式及び称名寺式については、土器型式研究上も議論の絶えないところである。近年は、特に下総台地において、称名寺式期に加曾利E4式の系統を引き継ぐ土器が主体となることが共通の認識となりつつある。本遺跡においても加曾利E4式と称名寺式が同一の遺構から出土する例が多く見られ、時間的に非常に近い位置にあることが予想される。これらの事例について慎重な分析を行うことで、下総台地における後期初頭土器群の様相解明につながることもたろう。

下総台地における中期末から後期初頭は、上記のように遺跡形成においても、土器型式変遷においても、重要な時期にあるといえる。馬込遺跡はまさにその時期にほぼ限定される遺跡であり、特色解明に必要なデータを数多く内包していると思われ、今後、本報告をもとにして分析を深化させることで、本時期の実態に迫ることが期待できる。

第9表 縄文時代石器属性表

No	採掘番号	遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	旧遺構 番号	新遺構 番号	備考
1	1	011-0026	石鏃	チャート	2.01	1.77	0.34	1.1	11	SK008	
2	2	082-0012	石鏃	黒曜石	2.08	1.49	0.29	0.5	82	SK033	
3	3	SK004-0145	石鏃	黒曜石	3.25	2.40	0.40	1.8	SK004	SK091	
4	4	223-0025	石鏃	黒曜石	2.50	1.69	0.38	1.1	223	SK084	
5	5	069-0009	石鏃	珉質頁岩	2.01	1.45	0.31	0.5	59	SK022	
6	6	084-0007	石鏃	安山岩	2.90	1.44	0.39	1.3	84	SK034	
7	7	085-0096	石鏃	黒曜石	2.20	1.81	0.82	2.3	85	SK035	
8	8	128-0045	石鏃	玉髄	3.47	2.30	1.01	6.4	128	SK006	
9	9	066-0011	削器	チャート	4.05	3.63	1.51	23.5	66	SK002	
10	10	082-0005	削器	チャート	4.08	3.51	1.10	15.9	82	SK033	
11	11	101-0010	R削片	チャート	4.69	2.89	1.40	13.6	101	SK041	
12	12	128-0051	R削片	チャート	5.72	1.85	0.92	10.31	128	SK006	
13	13	128-0059	R削片	チャート	2.27	1.47	0.94	2.67	128	SK006	
14	14	128-0050	U削片	チャート	2.8	1.53	0.61	2.5	128	SK006	
15	15	128-0008	U削片	黒曜石	2.1	1.48	1.14	3.66	128	SK006	
16	16	132-0001	磨製石斧	砂岩	5.95	5.78	2.88	131.86	132	-	遺構附録、遺構外扱い
17	17	178-0002	石棒	緑泥片岩	7.02	1.23	1.23	21.72	178	SK009	
18	18	205-0004	打製石斧	安山岩	7.99	7.8	1.85	121.75	205	SK095	
19	19	098-0020	打製石斧	安山岩	4.02	6.34	1.6	48.28	98	SK004	
20	20	023-0040	浮子	輝石	5.2	6.95	3.36	14.08	23	SK012	
21	21	169-0041	石棒	安山岩	8.85	8.5	1.92	128.69	169	SK007	
22	22	SK004-0142	磨石	安山岩	8.3	7.75	3.7	394.46	SK004	SK091	
23	23	169-0042	磨石	安山岩	7.44	8.89	3.9	400	169	SK007	
24	24	212-0083	磨石	流紋岩	12.50	6.55	3.8	481.27	212	SK087	
25	25	169-0054	磨石	安山岩	6.00	5.95	3.8	202.69	169	SK007	
26	26	023-0024	磨石	砂岩	7.81	7.73	4.6	298.6	23	SK012	
27	27	098-0017	磨石	砂岩	13.50	5.49	3.7	353.89	98	SK004	
28	28	212-0002	磨石	安山岩	13.25	7.50	5.3	848	212	SK087	
29	29	169-0003	磨石	流紋岩	8.21	7.54	3.5	280.46	169	SK007	
30	30	128-0004	磨石	安山岩	4.24	3.16	2.4	40.68	128	SK006	
31	31	215-0035	磨石	粘板岩	8.95	3.80	1.3	58	215	SK008	
32	32	223-0002	磨石	安山岩	8.15	7.70	4.6	309	223	SK084	
33	33	066-0019	磨石	砂岩	7.89	4.21	4.2	182.57	66	SK002	
34	34	098-0018	磨石	砂岩	14.17	7.44	9.6	109.88	98	SK004	
35	35	066-0056	石皿	安山岩	18.05	12.30	5.6	1160	66	SK002	
36	36	143-0002	石皿	安山岩	13.35	12.55	9.5	1660	143	SK053	
37	1	6F-0001	石鏃	安山岩	3.50	2.26	0.6	5.46			
38	2	2F06-0022	石鏃	安山岩	2.99	1.92	0.4	2.32			
39	3	1E84-0022	石鏃	チャート	2.44	1.52	0.3	1.05			
40	4	121-0001	石鏃	チャート	1.89	1.71	0.3	0.65	121	SK022	奈良・平安住居跡
41	5	12B90-0011	石鏃	安山岩	2.06	1.39	0.4	0.59			
42	6	12B80-0017	石鏃	チャート	2.62	1.40	0.5	1.21			
43	7	2E05-0001	石鏃	チャート	2.11	1.57	0.3	0.89			
44	8	11B50-0001	石鏃	黒曜石	2.21	1.73	0.5	1.31			
45	9	1F33-0003	石鏃	チャート	1.84	1.91	0.3	0.98			
46	10	2F38-0001	石鏃	チャート	1.60	1.46	0.3	1.04			
47	11	046-0026	石鏃	チャート	1.58	1.27	0.4	0.44	46	SK013	養生住居跡
48	12	5D03-0001	石鏃	安山岩	1.93	2.03	0.4	1.2			
49	13	2F92-0002	石鏃	チャート	1.90	1.17	0.3	0.63			
50	14	3F02-0002	石鏃	チャート	1.88	1.53	0.3	0.69			
51	15	11A62-0001	石鏃	安山岩	2.26	1.35	0.3	0.76			
52	16	1F76-0016	石鏃	チャート	2.00	1.76	0.5	1.47			
53	17	1F20-0011	石鏃	黒曜石	1.91	1.33	0.3	0.72			
54	18	121-0014	石鏃	安山岩	2.06	1.84	0.5	1.71	121	SK022	奈良・平安住居跡
55	19	11B15-0002	石鏃	黒曜石	1.85	1.46	0.4	0.6			
56	20	1F60-0025	石鏃	黒曜石	1.90	1.58	0.4	0.88			
57	21	1F96-0002	石鏃	チャート	2.49	1.29	0.5	1.49			
58	22	181B-0002	石鏃	黒曜石	1.57	1.27	0.3	0.39	181B	-	
59	23	2F18-0028	石鏃	チャート	1.08	0.91	0.3	0.22			
60	24	11B80-0002	石鏃	黒曜石	2.11	1.63	0.6	1.95			
61	25	1E59-0002	石鏃	チャート	1.82	1.15	0.6	0.78			
62	26	5D06-0001	石鏃	チャート	3.05	1.64	0.8	3.12			
63	27	3F93-0001	R削片	チャート	1.88	3.38	1.3	7.26			
64	28	2F08-0002	R削片	チャート	2.45	2.97	0.8	5.9			
65	29	002-0001	R削片	玉髄	3.46	2.10	0.8	4.42	2	SD002	近世野馬堀
66	30	3E19-0002	R削片	黒曜石	2.67	1.73	1.4	3.58			
67	31	2F79-0002	石棒	チャート	4.01	4.10	1.4	24.3			
68	32	2F17-0001	磨製石斧	粘板岩	10.38	5.78	3.1	334.67			
69	33	4B17-0001	磨製石斧	砂岩	5.90	4.70	2.6	111.71			
70	34	11B80-0001	磨製石斧	ホルンフェルス	4.10	5.18	2.8	52.98			
71	35	2F51-0001	磨製石斧	緑色凝灰岩	4.18	2.39	1.1	17.88			
72	36	11A90-0001	磨製石斧	凝灰岩	2.00	3.75	1.1	5.86			
73	37	1F96-0001	磨製石斧	緑色凝灰岩	4.61	3.03	1.3	21.25			
74	38	026-0058	磨製石斧	緑色凝灰岩	3.70	4.19	2.3	25.07	26	SK020	奈良・平安住居跡
75	39	2F85-0001	磨製石斧	緑色凝灰岩	4.94	3.00	1.3	33.88			

No	棟別 番号	遺物番号	部 種	石 材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	旧遺構 番号	新遺構 番号	備 考
76	40	1F64-0002	磨製石斧	ホルンフェルス	7.24	4.44	3.1	172.24			
77	41	2F05-0082	磨製石斧	緑色凝灰岩	5.87	5.29	3.0	138.31			
78	42	1F73-0024	磨製石斧	凝灰岩	7.27	6.36	3.3	166.68			1F74-0007と接合 1F73-0024と接合
79		1F74-0007	磨製石斧	凝灰岩							
80	43	1F88-0017	打製石斧	安山岩	12.00	7.78	1.9	187.87			
81	44	1E49-0003	打製石斧	砂岩	10.05	7.29	2.3	196.84			
82	45	1F88-0017	打製石斧	凝灰岩	8.18	5.43	1.1	58.83			
83	46	1F40-0012	打製石斧	砂岩	8.59	5.81	1.0	69.24			
84	47	1F33-0001	打製石斧	凝灰岩	7.32	5.50	0.9	70.24			
85	48	067-0001	打製石斧	安山岩	5.82	7.43	1.9	98.87	67	SK098	中・近世地下式坑
86	49	1F63-0001	打製石斧	安山岩	6.04	6.15	1.2	61.02			
87	50	1F60-0017	打製石斧	安山岩	5.54	6.96	1.8	86.01			
88	51	1F74-0010	打製石斧	安山岩	4.52	6.11	1.8	57.39			
89	52	1B4-0008	打製石斧	ホルンフェルス	6.54	6.15	2.2	105.82	184	SB003	奈良・平安朝柱建物跡
90	53	1F11-0013	打製石斧	ホルンフェルス	5.36	6.55	2.6	95.41			
91	54	2F39-0001	打製石斧	凝灰岩	5.93	5.60	2.0	78.35			
92	55	1F11-0001	打製石斧	安山岩	3.94	5.74	2.2	30.74			
93	56	1F71-0008	打製石斧	凝灰岩	5.34	6.95	2.2	79.37			
94	57	2F39-0001	打製石斧	安山岩	6.07	6.41	1.5	82.75			
95	58	1E85-0033	打製石斧	砂岩	6.43	5.73	2.1	103.79			
96	59	5G39-0002	打製石斧	ホルンフェルス	9.30	4.60	2.7	108			
97	60	046-00026	打製石斧	凝灰岩	7.11	5.31	2.1	87.11	46	SD13	弥生住居跡
98	61	1F64-0057	石槌	安山岩	7.15	9.25	9.9	586.82			
99	62	2F07-0004	石槌	凝灰岩	8.27	8.71	8.4	760			
100	63	1F63-0021	石槌	砂岩	14.82	3.80	3.0	304.91			
101	64	1F21-0033	磨石	安山岩	10.35	7.49	3.6	410			
102	65	1F60-0011	磨石	安山岩	7.44	5.90	4.3	239.65			
103	66	1F88-0002	磨石	安山岩	7.79	4.79	3.9	210.44			
104	67	1F83-0008	磨石	安山岩	4.76	7.24	5.3	162.14			
105	68	1F74-0003	磨石	安山岩	8.46	6.73	5.5	490			
106	69	2F04-0032	磨石	凝灰岩	9.13	5.34	3.9	275.98			
107	70	2C03-0001	磨石	安山岩	10.56	6.20	3.8	50			
108	71	1F33-0001	磨石	安山岩	7.64	8.26	4.0	390			
109	72	025-0003	磨石	安山岩	8.78	4.51	3.8	196.39	25	SH019	奈良・平安住居跡
110	73	1F30-0013	磨石	凝灰岩	10.50	3.98	3.5	221.51			
111	74	1F94-0025	磨石	安山岩	7.08	5.74	4.4	120.7			
112	75	1F74-0008	磨石	安山岩	7.05	7.36	3.7	114.75			
113	76	025-0016	磨石	安山岩	5.86	6.10	3.2	154.4	25	SH019	奈良・平安住居跡
114	77	1F75-0007	磨石	凝灰岩	6.57	4.18	5.0	32			
115	78	1F90-0004	磨石	凝灰岩	9.39	3.26	3.8	140.31			
116	79	1B6-0245	磨石	安山岩	5.80	5.96	4.6	178.76	166	SK001	奈良・平安瓦葺片倉中
117	80	067-0001	磨石	安山岩	7.08	5.28	4.0	200.98	67	SK098	中・近世地下式坑
118	81	110-0003	磨石	砂岩	6.01	3.75	1.9	63.92	110	SH016	奈良・平安住居跡
119	82	2F02-0002	磨石	安山岩	5.35	4.65	3.2	109.1			
120	83	1F50-0033	磨石	凝灰岩	5.05	4.21	3.2	84.72			
121	84	1F42-0005	磨石	砂岩	7.08	5.63	3.5	170.03			
122	85	1F82-0002	磨石	砂岩	7.45	5.72	3.1	162.33			
123	86	2C31-0039	磨石	石炭凝灰岩	12.50	7.50	4.7	412.94			
124	87	2F05-0026	磨石	砂岩	7.97	7.54	5.4	414.32			
125	88	2F04-0027	磨石	砂岩	10.70	8.18	4.8	586.86			
126	89	1F60-0004	磨石	砂岩	9.29	5.71	5.0	174.71			
127	90	4B17-0001	磨石	砂岩	12.75	5.90	6.2	725			
128	91	1F62-0046	磨石	安山岩	5.63	7.88	4.1	159.27			
129	92	1F65-0006	磨石	ハンレイ岩	9.22	7.51	5.7	600			
130	93	1F75-0009	磨石	砂岩	5.64	8.02	4.2	203.7			
131	94	1F83-0010	磨石	砂岩	9.77	5.43	3.0	225.79			
132	95	1F65-0014	磨石	ホルンフェルス	9.40	6.02	3.4	288.14			
133	96	110-0010	磨石	砂岩	9.95	6.10	3.9	250.79	110	SH016	奈良・平安住居跡
134	97	1E79-0001	磨石	砂岩	7.98	5.09	3.1	142.52			
135	98	1E74-0010	磨石	粘板岩	12.45	4.15	2.9	177.98			
136	99	2F91-0003	磨石	凝灰岩	12.65	5.65	1.8	167.29			
137	100	1E39-0001	磨石	砂岩	7.68	7.36	1.9	129			
138	101	1F64-0038	磨石	凝灰岩	8.63	5.97	1.1	72.68			
139	102	2F88-0001	磨石	安山岩	8.75	6.20	1.5	82.24			
140	103	1F64-0041	磨石	安山岩	7.00	6.20	1.7	105.78			
141	104	1F63-0001	磨石	砂岩	6.77	3.89	1.5	57.82			
142	105	3F16-0001	磨石	砂岩	6.69	4.47	1.5	67.39			
143	106	2F98-0001	磨石	凝灰岩	6.90	4.55	1.2	48.86			
144	107	4B17-0001	磨石	凝灰岩	8.15	6.90	2.9	228.01			
145	108	1F20-0005	磨石	砂岩	6.12	2.13	2.0	37.33			
146	109	148-0002	石皿	安山岩	8.55	10.20	5.4	510	148	-	
147	110	1F20-0047	石皿	安山岩	8.13	4.70	5.2	263.95			

第10表 縄文時代石器組成表

	石鏃	R製片	U製片	削器	石核	石錘	磨製石斧	打製石斧	石棒	浮子	磨石	敲石	石皿	砥石	計
チャート	14 12.67	5 39.72	1 2.5	2 39.45	1 24.3	1 3.12	0	0	0	0	0	0	0	0	24 121.76
ハンレイ岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 600	0	0	0	1 600
ホルンフェルス	0	0	0	0	0	0	2 225.22	4 314.05	0	0	2 477.89	0	0	0	8 1017.16
安山岩	7 13.32	0	0	0	0	0	0	9 774.68	2 715.51	0	25 5782.11	0	5 3626.04	0	48 10911.66
凝灰岩	0	0	0	0	0	0	1 5.86	0	0	0	0	0	0	0	1 5.86
玉髓	1 6.4	1 4.42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2 10.82
珪質頁岩	1 0.53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 0.53
軽石	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 14.08	0	0	0	0	1 14.08
黒曜石	10 11.6	1 3.58	1 3.66	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12 18.84
砂岩	0	0	0	0	0	0	2 243.57	3 369.87	1 304.91	0	18 4270.71	2 219.9	0	1 109.88	27 5518.84
蛇紋岩	0	0	0	0	0	0	1 334.67	0	0	0	0	0	0	0	1 334.67
石英英岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1 412.94	0	0	0	1 412.94
泥岩	0	0	0	0	0	0	0	1 87.11	0	0	1 167.29	0	0	0	2 254.4
粘板岩	0	0	0	0	0	0	0	2 86.36	0	0	2 235.98	0	0	0	4 322.34
流紋岩	0	0	0	0	0	0	2 166.68	3 207.42	1 760	0	12 2170.36	1 228.01	0	0	19 3532.47
緑色凝灰岩	0	0	0	0	0	0	5 236.39	0	0	0	0	0	0	0	5 236.39
緑泥片岩	0	0	0	0	0	0	0	1 21.72	0	0	0	0	0	0	1 21.72
計	(点) 33	7	2	2	1	1	13	22	5	1	62	3	5	1	158
	(g)	44.52	47.72	6.16	39.45	24.3	3.12	1212.39	1839.49	1802.14	14117.28	447.91	3626.04	109.88	23334.48

\* 未掲載石器を含む

## 第4節 弥生時代

### 1 概要

本遺跡での弥生時代に関する遺構としては、他の時代と同様に調査区北端にあたる部分（1E・2E、1F・2F区）で後期に属する5軒の住居跡が検出された。ほぼ平坦な台地上に占地し、散漫な分布状況を示す。このような分布からみれば、未調査区の台地上にはまだ確認された以上の遺構が存在するものと推察できる。一方、遺物についてみると遺構内から出土したものは土器片等で、しかも少量であった。この傾向は、本遺跡に限られたことではなく、概して下総地域に所在する弥生後期の住居跡ではしばしばみられることでもある。このため調査区域に包含されていた土器片についてもできる限り採拓し、掲載するようにした。次に各遺構・遺物の概要について記載しておく。

### 2 竪穴住居跡

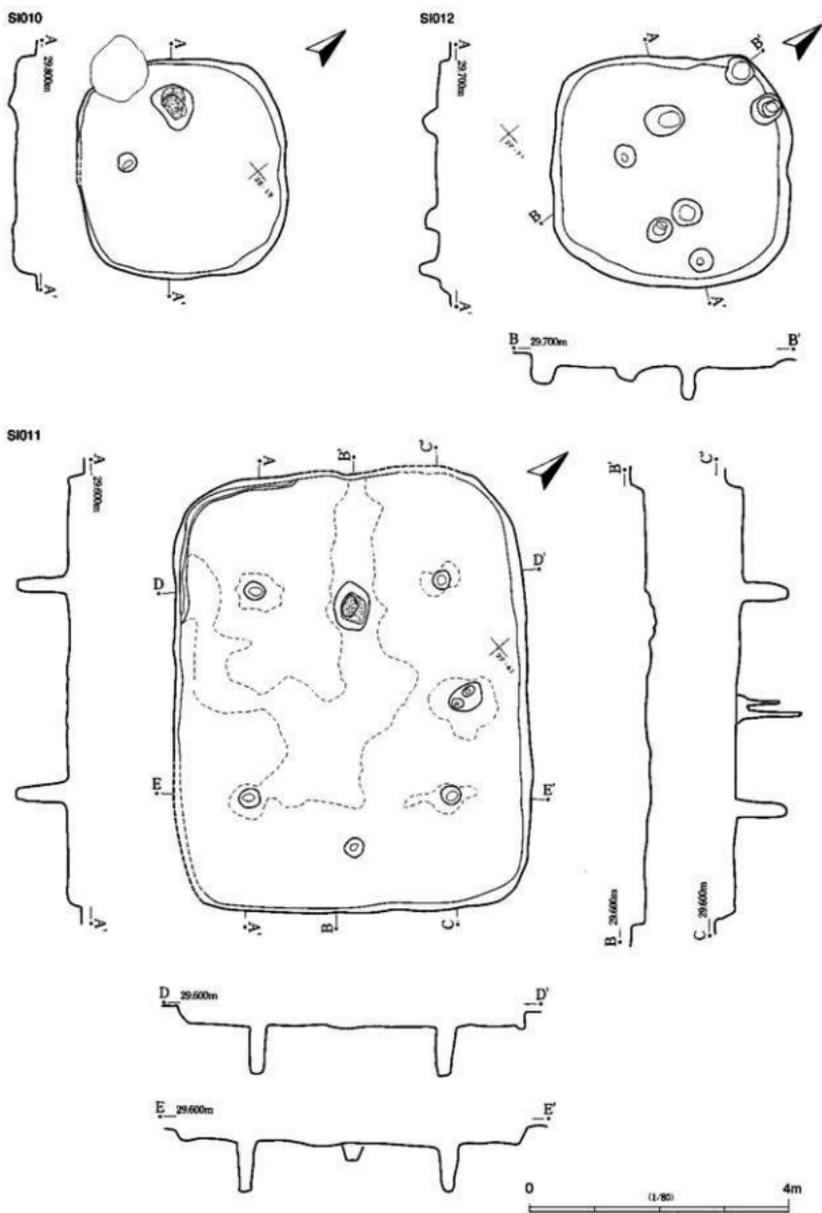
SI010（遺構：第134図，図版16 遺物：第136図1～13，図版44）

遺構 2E区の北東隅部分において検出された。形状は扇張りの隅丸方形を呈し、長径3.5m、短径3.2mを計測、主軸方向はN-50°-Wとなる。西側のコーナーではSK005号跡により削平され、傾壁の一部も耕作による攪乱が認められた。堆積土は省略したが、レンズ状の自然堆積を示し上部では黒褐色土、次いでやや黒みがかった暗褐色土、壁面付近ではローム粒・ブロック混入の暗褐色土の堆積が認められた。壁高は第Ⅲ層のソフトロームから約30cmの掘り込みを有し、遺構確認の時点ではかなり鮮明にその形状が確認できた。柱穴は定位置では確認できず、1口のみにとどまった。その深さは、床面下37cmほど掘り込まれていたが、他の小規模住居でも同様定位置には存在しないところをみると本住居の構造は、この1口の柱穴によって支えられていたと考えて差し支えないであろう。炉跡は径60cmの不整形円形を呈し、中央部では5cm～6cmほどの焼土粒混入層の堆積が認められ、直下の火床部はよく焼け赤褐色に変色していた。床面は炉跡部周辺でよく踏み固められ、総じて平坦な面で良好な状態にあった。

遺物 本住居跡から出土した遺物は土器片のみで、しかも小破片が19点と少ない。採拓は13点にとどめた。1は口縁部片で、複合口縁となっている。器面は複合部を横ナデ、それ以下を縦方向に粗くヘラナデしている。2～5は頸部片で山形（2）や小さな波状（5）の櫛掻文が認められる。他は胴部片で縄文施文がほとんどである。5・6の胎土には白色鉱物が多く含有される。13は無文で、器面はヘラ磨きで調整され上部には赤彩の一部が残る。南関東的な壺形土器の破片である。

SI011（遺構：第134図，図版16 遺物：第136図14～30，図版44）

遺構 2F区の西から2E区にかけて検出された住居跡で、弥生期住居跡中最大の形状を有する。形は隅丸長方形を呈し、長径6.9m、短径5.4mと大きい。主軸方向はN-50°-Wとなり、SI010号跡と同様な位置を示す。北西部・南部の傾壁は攪乱により一部破壊されていた。堆積土は省略したが、レンズ状の自然堆積を示し、中心部では黒褐色土が主体となる。壁面付近ではローム粒混入層の堆積が認められた。壁高は第Ⅲ層のソフトロームから一部第Ⅳ層上面を削平しており、約25cm～30cmの掘り込みを有する。柱穴は定位置に4口検出され、階段ピットも確認されている。主柱穴の深さは4口とも床面下70cm～80cmと安定しており、階段ピットはやや東に傾く。その他に東傾壁に沿って底部が2口に割れるピットが検出されたが深さ床面下1m、底面は小円形となり柱穴としては不自然となろう。炉跡の掘り込みは長径75cm、短径55cmを計測し、凹部には焼土混入層が堆積し、火床部はよく焼けていた。床面は図示したように波線部では軟弱で、柱穴間ではしっかりした床面を維持しており、場所によっては第Ⅳ層のハードローム面をう



第134圖 弥生時代竪穴住居跡(1)

まく利用している部分も認められた。周溝は西側コーナーにおいてのみ検出されている。

遺物 本住居跡から出土した遺物は、土器片21点、扁平な碟、軽石となる。1は口縁部付近の破片で折り返した口縁部に結節した原体で押圧を加えている。15～17は頸部片で細いヘラ状工具による沈線をもつもの(16)もあるが、縄文の施文が主となる。24・25・26は同一個体で、胴部片には赤彩が施され、24の上端には僅かながら結節縄文が認められる。26の底部は、接点はないが器面のヘラ磨き及び胎土から同一個体と看なされた。これらも南関東的な壺形土器の一部である。28は大型の底部片で器面は著しく磨耗しているが、その器形から明らかに壺形土器となる。29は、丸みを帯びた表面は滑らかで、磨石等の石器として使用されていたものであろう。石材はホルンフェルス。30は軽石製で、平坦な面が形作られている。研磨等に用いられたものと考えられる。

SI012 (遺構：第134図、図版16 遺物：第136図31～33、図版44)

遺構 2F区の東から検出され、SI010号跡同様小規模な住居跡となる。形状は隅丸方形を呈し、径約3.5mを計測する。主軸方向はN-51°-Wとなり、前述の住居跡とほとんど変わらない。壁面は第Ⅲ層を10cm～15cmほどを掘り窪めたもので、軟弱で立ち上がりに傾斜を有する部分が多い。堆積土は上部が黒褐色、下部ではロームが混入するようになる。ピットは計6口検出されたが、北東側壁部の1口と炉跡南の1口は床面下50cm、東南の段上に掘り窪められたピットは15cmと浅く、その他3口は約30cmの深さを有する。このことから明確に柱穴を特定することは困難になるが、すべて柱穴とは考えにくい。15cmと浅いピットは出入り口のピットの可能性が高い。炉跡は中央やや北西に位置する楕円形の落ち込みで長径60cm、短径50cmを計測するが、長期間使用とは認めがたく、堆積土に焼土を含有する程度で底面での焼成痕跡は皆無であった。床面は第Ⅲ層中に設けられていたため全体に軟弱となっていた。

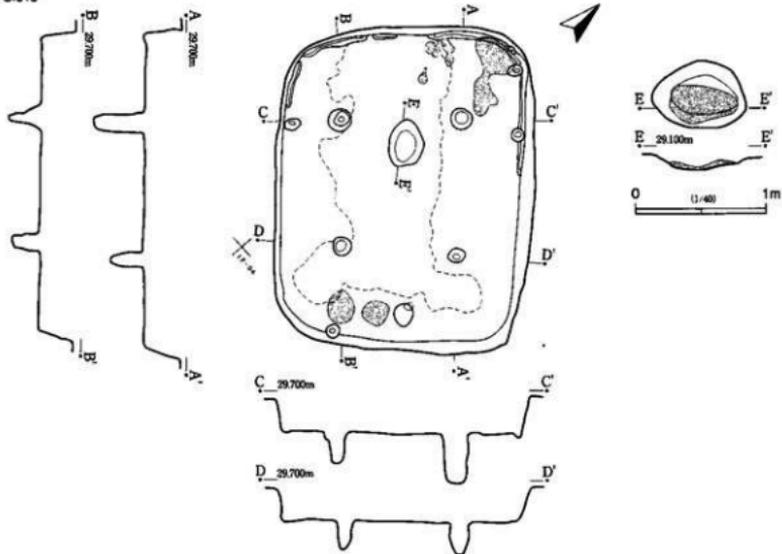
遺物 ここでは3点の土器が出土しただけである。31は口縁部片で、口唇部にも縄文を施文しており、口縁下には刺突文を巡らせる。胎土には雲母を混入し、焼成は良好である。

SI013 (遺構：第135図、図版17 遺物：第136・137図34～81、図版45)

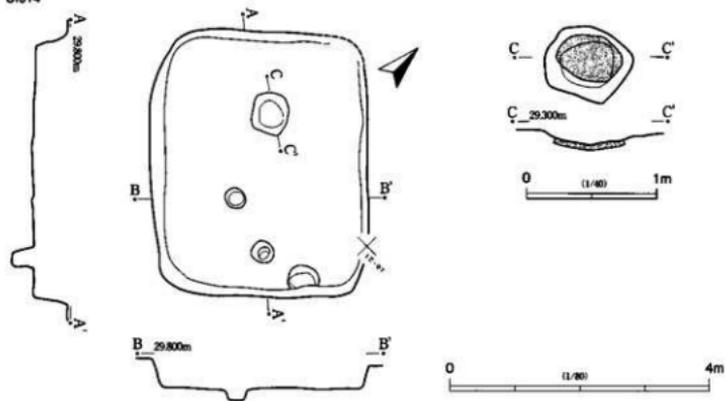
遺構 1F区において検出された住居跡で5軒中最もしっかりした遺存状態を示していた。形状は隅丸長方形を呈し、長径5.1m、短径4mを計測する。主軸方向はN-48°-Wとなる。堆積土は上部で若干擾乱を受けている部分もあったが、中央部では最終堆積土の黒褐色土が厚く50cm以上堆積していた。この堆積土下部(床面上約15cm)からは焼土ブロックが検出され(図のトーン部)、中には炭化材も含まれており、住居廃棄時に焼却したものと考えられた。壁高は確認面から約60cmの深さにおよび、第Ⅳ層のハードロームまで掘り込んでいたため、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は定位置に4口と側壁に沿って4口、階段ピット1口が認められた。側壁側の小ピットは周溝の施設の一部とみることができる。主柱穴の深さは、床面下45cm～70cmと一定の深さを保つ。炉跡は長径70cm、短径50cmの楕円形を呈し、中央部では数cmほどの焼土層の堆積が認められた。底面の火床部でも赤褐色によく焼けていた。床面は本跡の場合、炉跡部周辺と床中央部分でよく踏み固められていた。第Ⅳ層のハードローム中に設定しているため一層堅さが顕著であった。周溝は西側コーナーから北側コーナーにかけて一部欠如するものの明確に確認できた。

遺物 弥生期の住居跡の中で最も多くの遺物が検出され、土器片は70点を超える。他に紡錘車2点と焼成粘土塊1点が出土している。34～39は口縁部片で、34・35と38・39は施文具・胎土・色調等が共通しており同一個体となる。34は口唇部にも縄文が施され、その直下には高さ1cm、長さ2cm程の粘土塊を貼付する。棒状工具による刺突文を横位に施し装飾としている。36も同様なタイプであるが縄文は無節のしと

SI013



SI014



第135图 弥生时代竖穴住居跡(2)

なっている。37は口唇部に縄文を施すとともにその端部を器面に押しつけ刺突文の効果をもたせている。さらに38では縄文原体を口唇部に一定間隔に押捺し、刻目文のような表現をする。40～57は胴部片で各種の縄文原体が用いられている。40は頸部片で粘土紐の貼付、43では連続した爪形文のような文様も施されている。70～78は底部及びその周辺の部位であり、78は薄い底部に木葉痕の一部が認められる。これらの中には大破片も存在するが器形を復原するまでには至っていない。58～69はいわゆる南関東系の土器群で壺形土器の破片であり、器面の赤彩やミガキ、胎土から同一個体となるもの(59・60, 61～64・66～69)もある。58は沈線によって区画した中を羽状の細縄文で満たす。明確な赤彩は認められない。79・80は土製の紡錘車で同様の形状を有し、同一地点からの出土した。接点はないが同一個体の可能性が高い。遺存部最大径は58mmを計測し、上端では50mmとなる。褐色を呈し、焼成は良好である。81の焼成粘土塊については図示はしたもののその用途については明らかでない。82は砥石である。短い角柱状を呈する。下端面は欠損した後研がれている。表面及び側面が研がれているが表裏面の研ぎが顕著である。石材は砂岩である。最大長4.84cm, 最大幅2.61cm, 最大厚1.65cm, 重量35.04gである。

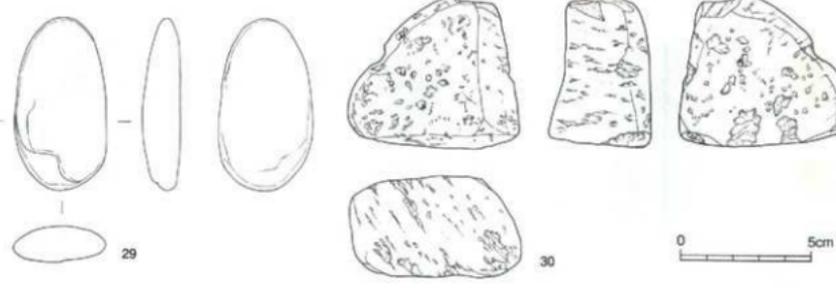
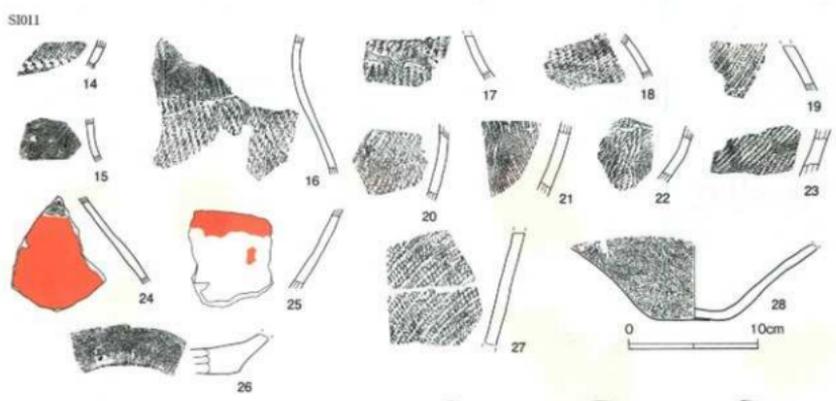
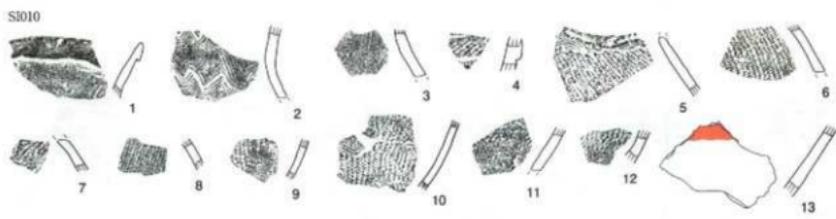
SI014 (遺構：第135図, 図版17 遺物：第137図82～86, 図版46)

遺構 1E区で検出された住居跡で、北側コーナー部分が中世の地下式坑によって破壊されている(図の破線部)。形状はほぼ隅丸長方形となり、長径4.2m, 短径3.4mを計測する。主軸方向はN-45°-Wとなり、他の住居よりも若干北に振れる。掘込みはやや深く確認面から約40cmを計測でき、側壁はしっかりとした状態であった。堆積土は省略したが、中央部では黒褐色土が30cm～40cmの厚みをもって堆積しており、自然埋没の状態を示していた。住居が小規模なため柱穴も定位置には確認できず、いずれも浅いものであった。ただ第135図に示したように炉跡と対面するピットは45cm程掘り込まれており、出入り口用の柱穴跡となろう。他の2口は20cm未満の深さで柱穴とするには疑問と思われた。炉跡は長径65cm, 短径55cmを計測し、中心部では20cm程掘り込まれていた。火床部は赤褐色に変色し長期の使用を思わせた。床面はほぼ平坦で、ハードルーム上面を利用しており良好な状態であった。

遺物 本住居跡からの出土遺物は土器片が8点のみと少ない。うち5点を採掘したが83では沈線が認められる。省略した土器片には微細な口縁部と南関東系の壺片がみられた。

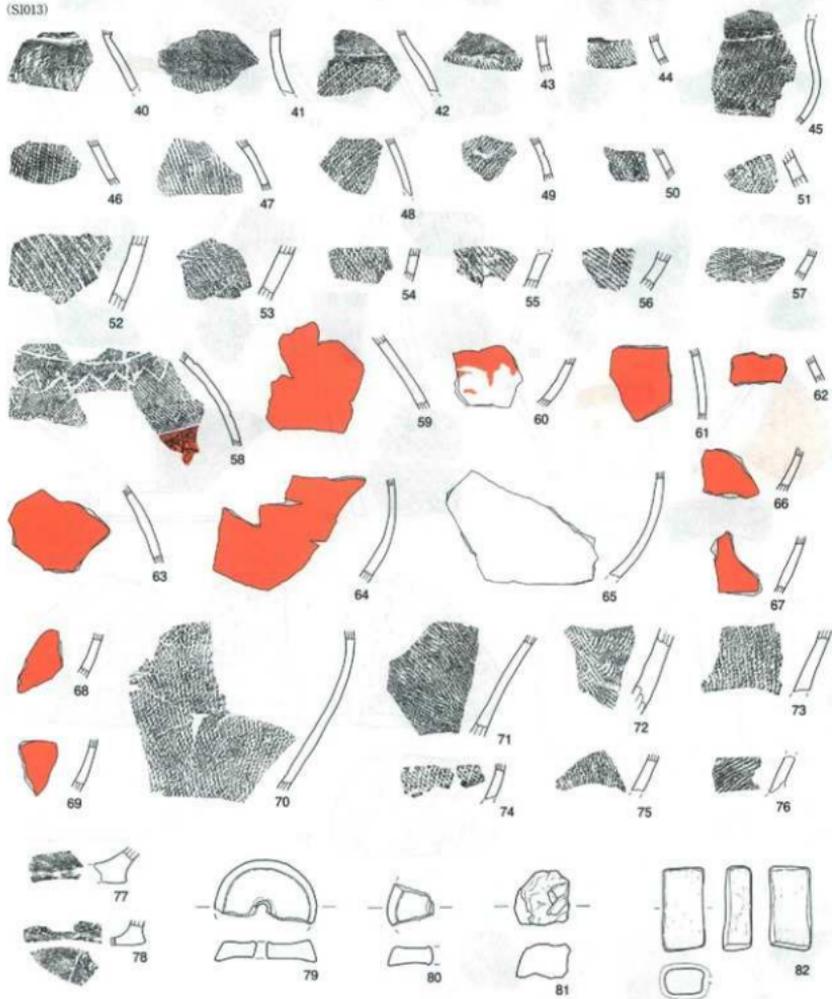
### 3 遺構外出土遺物 (第138図, 図版46)

弥生期の住居跡周辺から出土した土器群を一括して掲載した。1～17までは口縁部片かそれに近いものである。ここでは刺突文を粘土紐接合部に巡らせたり(4・6～9)、口唇部に押捺したもの(2・4・5・13)などがある。刺突具としては棒状のもの、縄文原体の結節部で押しつけたもの(3・8)とがみられる。13は無文で口唇部の刻目に用いた工具で器面の整形を施している。15は小型の甕で、口縁部は複合となり器面にはナデ整形を簡単に施すのみである。16は口縁に稜を有しており、器形は碗に近いものとなろう。14・17は南関東系の特徴を有するもので14は広口の壺、17は表裏両面が赤彩で飾られた小型壺となろう。赤彩はよく遺存している。18～29では頸部片で文様を有するものを集めた。18・19は5～6本1組の櫛歯状工具で波状を整然と描いている。20～23も波状文の施文であるが頸部を櫛歯で満たすだけという施文である。28は小片で原体の結節部を横方向に回転させている。29は半截竹管を用い波状に押し引きしている。あまりみられない文様である。31～34は南関東系に属する壺形土器の胴部片で、31・33の赤彩は磨耗により薄れているが、34の胴下部片は鮮明に残っている。その他は縄文施文の胴部片であり、種々な縄文原体を用いている。36・37や39・40は同一個体の可能性が高い。後者は施文方向を変える



第136圖 弥生時代竪穴住居跡出土遺物(1)

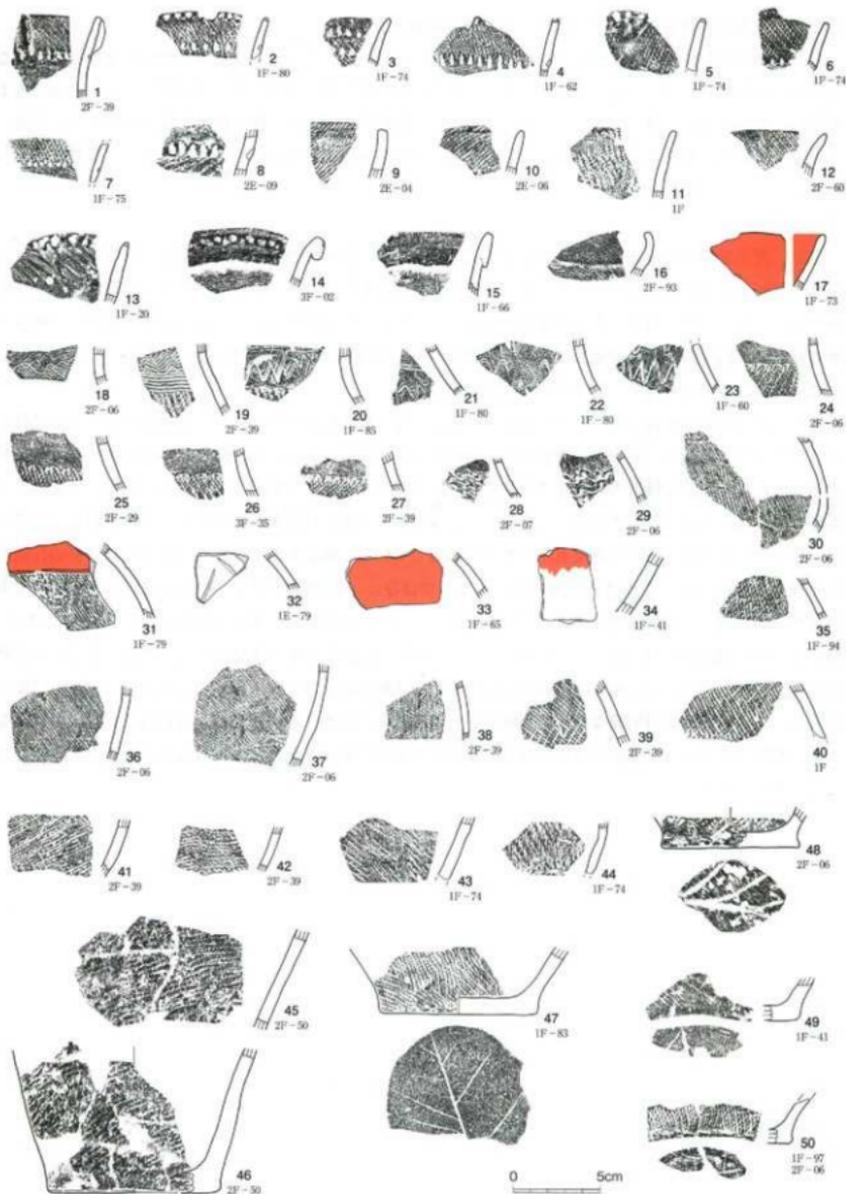
(SI013)



SI014



第137圖 弥生時代竪穴住居跡出土遺物(2)



第138图 弥生时代遺構外出土遺物

ことにより羽状の効果をもたせており、ここでの類例は少ない。

45～50は底部を一括した。45・46は同一個体であるが、接点はない。いわゆる北関東系特有の石英などの白色鉱物を多く含んだ焼きの軟弱な甕で、2F区で11点に分散し出土した。底部推定径は10.5cmで木葉痕等は認められない。他の47～50の4点ではすべて木葉痕がみられ、特に47は葉脈の細部までよく残っている。48は木の葉の下に異物があつたらしく幾つかの窟みが生じている。いずれも器面には縄文が施されている。

#### 4 まとめ

以上、弥生後期の住居跡とそこから出土した遺物についてその概要を記してきた。この弥生後期では、集落が数軒の住居跡によりひとつのグループを形成して存在することはしばしばみられる形態であり、未調査区を考慮してもそれほど大きな集落を形成していたものとは思えない。検出された5軒の住居跡は主軸方向をほぼ同一の方向に設定しており、遺物についても明らかな時期差は認められないところから同時期に営まれたものと考えることが妥当となろう。

また遺物について触れると、器形が復元できるような一括土器は皆無であり、集落の廃絶とともに持ち去られたものであろう。僅少の遺物類はそれを物語るかのようである。出土土器についてみると、施文具や施文法からいわゆる後期の特徴をよくあらわした土器群であり、利根川下流域の左岸に多く分布する土器群の中で捉えることのできるものである。しかもこれらの大半は壺形土器であり、壺形土器については多くはないものの彩色された南関東系のもを採用している。図示した土器片が示すように3軒の住居跡から検出されている。これは本遺跡に限ったことではなく、周辺遺跡でも一般的に認められる傾向であり壺形土器に関しては異系統土器を好んで採用していたと思われる。次に土製品として紡錘車がある。SI013号から欠損品ではあるが分割して出土した。前述したように接点はないが同一個体と考えられる紡錘車で、形状は台形に近く後出する古墳時代のものと比較すると、やや大きくなるものの径に比べて厚みがない。また周辺部での明瞭な後が特徴的といえよう。このタイプの紡錘車は、周辺域での出土量は少ないが、利根川を越える茨城県南部ではよく見かける形状であり、集落ごとに機織りがおこなわれていたことの証左となろう。

## 第5節 奈良・平安時代

### 1 概要

奈良・平安時代の遺構は調査区の北東端部に集中して検出された。調査区北東端部は、北東に突出した小舌状台地で、主に南側斜面沿いに遺構が分布している。検出遺構は、竪穴住居跡7軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡6棟、土坑1基である。また、遺構は伴わないが、調査区北東境界付近に集中して、2基に復元可能な瓦塔の破片が多量に出土している。

### 2 竪穴住居跡

竪穴住居跡は主に小舌状台地の南側斜面に近い平坦面に位置する。遺構番号はSI015、SI017～SI022である。

SI015 (第139・145図, 図版18, 第11表)

他の住居跡から離れた、小舌状台地の基部、3D-62グリッド付近に位置する。東側が斜面になり、西側1/3の遺存である。平面形は隅丸方形で、規模は一辺約4mと推定される。検出面からの深さは、最大30cm。主軸方位は大きく西に振れている(N-70°-W)。主柱穴は検出されなかった。遺存部分に壁溝が検出され、幅20cm、深さ約8cmである。カマド両脇の壁溝内にピットが1基ずつ検出された。円形で、径30cm、深さは、カマド北側が30cmで、壁内に入り込み、南側は45cmである。ほかにピットが4基検出された。ほぼ円形で、径30cm、深さ26cm～35cmである。

カマドは西壁中央に位置し、長さ95cm、幅120cm、袖長35cm、煙道部の掘込みは60cmである。掘込みは半円形で、傾斜は約32度である。

主な出土遺物は次のとおりである。

1は土師器の坏で、ロクロ未使用である。平底で、体部は外傾して立ち上がり、ゆるやかに内湾する。口縁部はほぼ直立する。

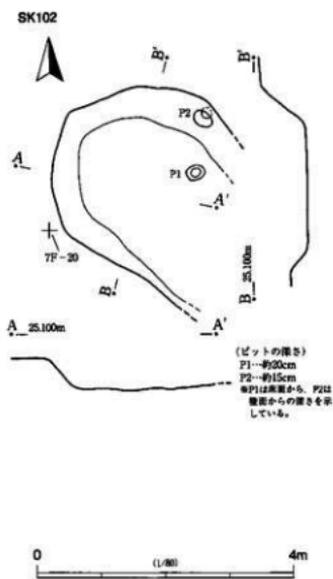
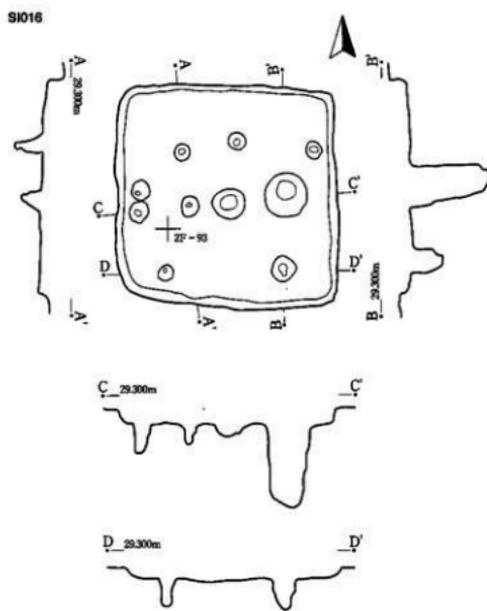
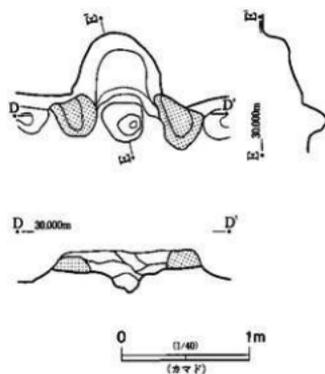
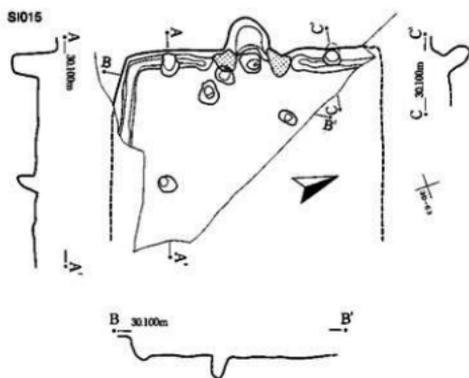
2～4は土師器の甕である。2・3は胴部から口縁部片である。胴部と口縁部との境に稜があり、口縁部は外反する。4は底部から胴部片である。胴部が大きく広がって立ち上がる。胴部が球形に近い小型甕と思われる。

SI017 (第140・146図, 図版18・47, 第11表)

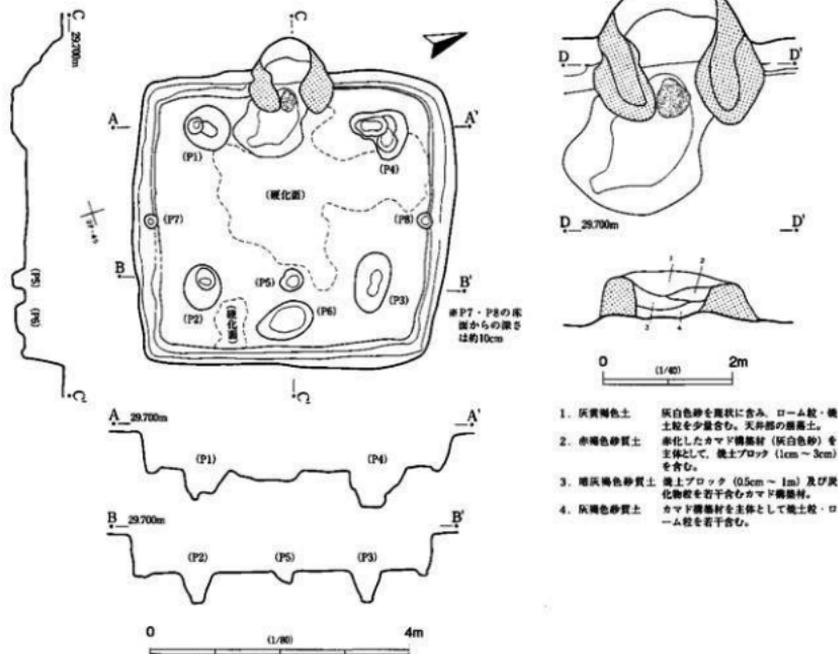
南側斜面付近、2F-35グリッド付近に位置する。平面形はやや横長の隅丸方形である。規模は4.6m×5.0mで、検出面からの深さは60cm～50cm。主軸方位は大きく西に振れている(N-70°-W)。主柱穴は4か所(P1～P4)検出された。P1は円形で径70cm、床面からの深さ50cmである。底面に柱痕と思われるピットが検出され、径25cm、底面からの深さ10cmである。P2は楕円形で、70cm×60cm、深さ50cmである。P3は楕円形で、100cm×50cm、深さ50cmである。P4は2基の重複である。それぞれ楕円形で、90cm×80cm、深さ60cmである。東壁側に出入口ピットが2か所(P5・P6)検出された。P5は円形で、径30cm、深さ20cmである。P6は楕円形で、90cm×56cm、深さ15cmである。壁溝は全周し、幅20cm～30cm、深さ5cm～10cmである。北及び南側壁下にピットが1基ずつ(P7・P8)検出された。円形でP7は、径22cm、深さ10cm、P8は、径24cm、深さ10cmである。床面は平坦で、中央部及び東壁南部に硬化面が検出された。

カマドは西壁中央に位置し、長さ123cm、幅133cm、袖長67cm、煙道部の掘込みは56cmである。掘込みは半円形で、傾斜は約36度である。

出入口ピットが2基検出され、P4柱穴が2基重複しているの、建替えが行われたと考えられる。



第139図 奈良・平安時代竪穴住居跡(1)及び竪穴状遺構・土坑



第140図 奈良・平安時代竪穴住居跡(2)

主な出土遺物は次のとおりである。

1～4は須恵器の坏蓋である。天井部には回転ヘラケズリが施され、端部に折り返しがある。1は、全体が扁平で、擬宝珠形から退化した円筒形に近い、やや小さなつまみが付く。折り返しは小さく、端部はわずかに外反する。また、内面の体部と折り返しの境が沈線状になる。2は、全体は笠型で、つまみ部が欠損している。折り返しは小さく、また、外傾している。3はやや扁平な笠型で、つまみは欠損している。折り返しは小さく、内面の体部と折り返しとの境のくびれが明瞭である。4は笠型と思われる。折り返しは小さく、端部が外反する。1・2は胎土に細砂粒のほかにやや粗い石英粒・長石粒が含まれる。3は粗い石英粒・長石粒、雲母細粒が多く混入される。4は混入物がほとんど見られない。

5～12は須恵器の坏である。平底で、体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。ロクロ成形で、ロクロ目が明瞭である。強弱はあるが、内面の底部と体部との境にくびれが見られる。胎土には細砂粒のほかに、粗い石英粒・長石粒が多く混入され、5・7には細雲母粒も多く混入される。

13は須恵器の高台付坏である。高台は直線的な八字状で、体部が、垂直に近く外傾して、直線的に立ち

上がり、口縁部がわずかに外反する。

14・15は須恵器の高台付盤である。15は口縁部の遺存であるが、14と形が類似するので、高台付盤とする。高台は直線的なハ字状で、皿状の体部から口縁部が短く外反する。14は胎土に粗い石英粒・長石粒が多く混入し、15は少量の細雲母粒が混入する。

16は土師器の坏で、ロクロ未使用である。平底で、体部は外傾して立ち上がり、ゆるやかに内湾する。体部と口縁部との境に稜がある。口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに外反する。

17・18は須恵器甕の胴部片である。横位の叩き目が施される。18は細雲母粒が多く混入する。

19は土師器の甕である。底部が欠損しているが、口縁部に比べてかなり小さくなると思われる。やや長胴であるが、最大径は胴部上半部で、丸味がある。口縁部は短く外反し、端部は小さくつまみ出された様に、受け口状になる。

20～22は土師器の小型甕である。胴部から口縁部の遺存である。20は口縁端部が受け口状になる。21・22は口縁端部は外反し、22は丸味が強く、玉縁状になる。23は土師器甕の口縁部片である。端部が受け口状になる。24は土師器甕の底部である。胴部の立ち上がりはやや丸味がある。外面にヘラケズリが施される。

SI018 (第141・146・147図、図版19・47、第11表)

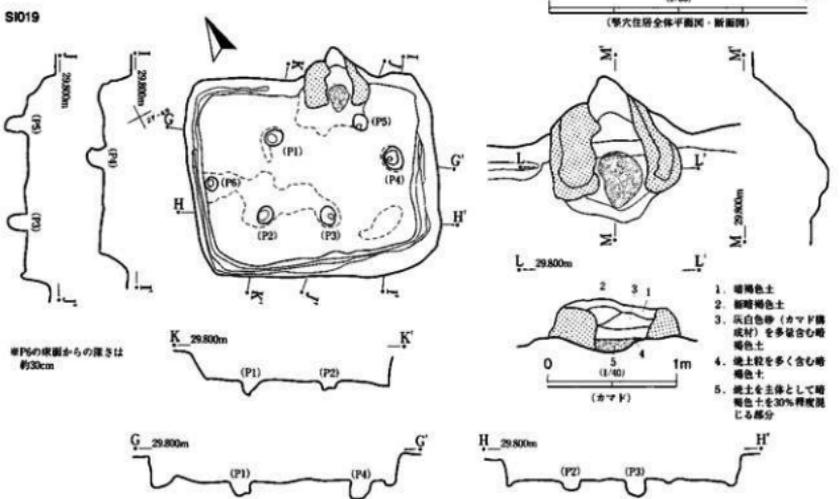
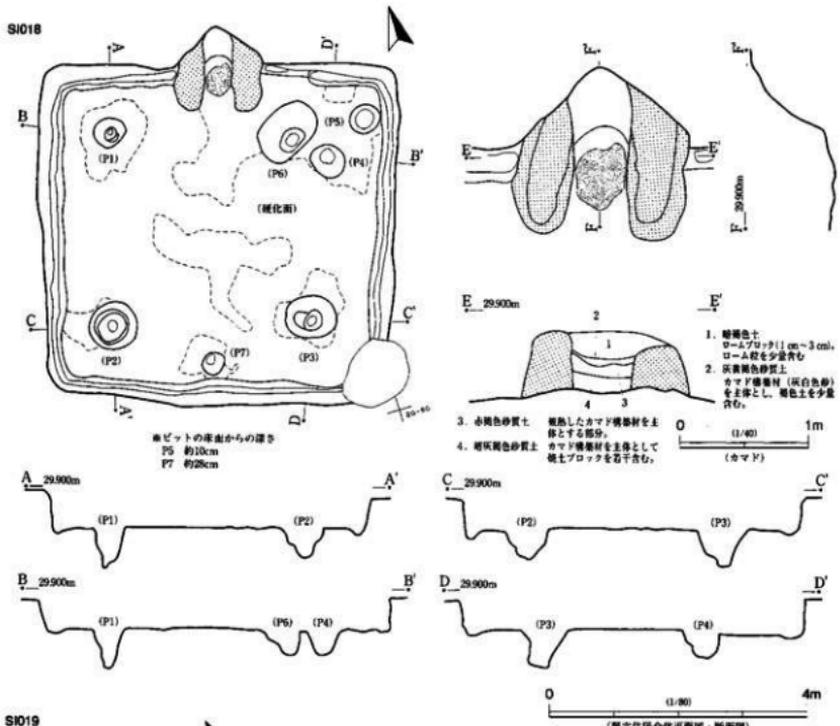
南側斜面際、2F-49グリッド付近に位置する。南東隅が縄文時代の土坑と重複している。平面形は隅丸で、ほぼ正方形である。規模は5.4m×5.5mで、検出面からの深さは40cm～50cm、主軸方位は少し東に振れている(N-15°-E)。主柱穴は4か所(P1～P4)検出された。P1は円形で径50cm、床面からの深さ64cmである。P2は円形で、径75cm、深さ50cmである。P3は楕円形で、80cm×65cm、深さ63cmである。P4は円形で、径55cm、深さ45cmである。南壁側に出入口ピット(P7)が検出された。円形で、径36cm、深さ28cmである。北東隅にピットが2基(P5・P6)検出された。P5は円形で、径48cm、深さ10cmである。P6は楕円形で、105cm×70cm、深さ43cmである。壁溝はカマド右側を除いて全周し、幅20cm～30cm、深さ10cmである。床面は平坦で、中央部と主柱穴周辺及び北東隅以外に硬化面が検出された。

カマドは北壁中央に位置し、長さ135cm、幅135cm、袖長75cm、煙道部の掘込みは60cmである。掘込みは三角形で、傾斜は約42度である。火床部の掘込みはわずかで、深さ3cmである。

主な出土遺物は次のとおりである。

1～3は須恵器の坏である。1・2は平底で、体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。ロクロ成形で、ロクロ目が明瞭である。強弱はあるが、内面の底部と体部との境にびれが見られる。3は体部の立ち上がりやや丸味がある。胎土には、粗い石英粒・長石粒が多く混入される。4・5は須恵器の高盤と思われる。4は体部から口縁部で、皿状の体部から口縁部が外傾して直線的に立ち上がり、端部がわずかに外反する。混入物はほとんど無く、器面全体が磨耗している。5は脚部である。高坏の脚状で、裾部に向かってラッパ状に開く。胎土に細雲母粒が多く混入され、器面全体が磨耗している。

6は土師器の小型甕である。胴部から口縁部である。器厚は口縁部が厚く、胴部が薄い。口縁部は短く外反し、端部は丸味がある。内外面全体にうすくススが附着している。7～9は土師器の甕である。7・8は口縁部片で、7は直線的に外傾して、薄く、8は外反して、端部が受け口状になる。8は、胎土に粗い石英粒・長石粒、雲母細粒が多く混入する。9は胴部の遺存である。下半部はやや丸味があるが、上半部から口縁部へのしまりが強い。外面下半部に縦方向のヘラナデが施される。8と同様に、胎土に粗い石



第141図 奈良・平安時代竈穴住居跡(3)

英粒・長石粒、雲母細粒が多く混入される。

SI019 (第141・147図、図版19・47、第11表)

南側斜面付近、SI017の東隣、2F-46グリッド付近に位置する。平面形は横長の隅丸方形である。規模は3.1m×3.9mで、検出面からの深さは45cm。主軸方位は東に振れている(N25°-E)。床面からピットが6基検出された。P1～P4はP3の配置がやや中央に寄っているが、主柱穴と考えられる。P1は円形で径25cm、床面からの深さ26cmである。P2は楕円形で、28cm×24cm、深さ16cmである。P3は楕円形で、30cm×23cm、深さ30cmである。P4は楕円形で、37cm×28cm、深さ30cmである。カマド前面にP5、北西壁中央下にP6が検出された。P5は円形で、径36cm、深さ30cmである。P6は円形で、径20cm、深さ30cmである。P6は位置から、出入口ピットと考えられる。壁溝はカマド右から東隅までを除いて全周し、幅10cm～20cm、深さ10cm～15cmである。床面は平坦で、柱穴、ピットの周辺以外に硬化面が検出された。カマドは北東壁の東寄りに位置し、長さ97cm、幅100cm、袖長58cm、煙道部の掘込みは39cmである。掘込みは三角形で、傾斜は約40度である。火床部の掘込みは、深さ10cmである。

主な出土遺物は次のとおりである。

1は須恵器の高台付盤である。高台は八字状で、皿状の体部から口縁部がゆるやかに、短く外傾する。胎土に細雲母粒が多く混入し、器面全体が磨耗している。2は土師器の坏で、ロクロ未使用である。平底で、体部は外傾して立ち上がり、ゆるやかに内湾する。体部と口縁部との境に稜があり、口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに外反する。3は土師器の小型甕である。胴部から口縁部部の遺存である。胴部と口縁部との境の屈曲が強く、口縁部は短く外反し、端部はわずかに立ち上がり、受け口状になる。

4は須恵器甕の胴部片である。横位叩き目が施される。胎土に粗い石英粒・長石粒、雲母粒が多く混入される。5～8は土師器の甕である。5・6は口縁部片で、5は外反して端部が受け口状になる。6は強く外反し、端部はほぼ水平になる。7・8は胴部である。7は外面全体に細かなハケ目が施される。器厚も薄く、他の土師器と比べて胎土が精製されているので、東海以西からの搬入品の可能性がある。8は縦方向のヘラナデが施される。胎土に粗い石英粒・長石粒、雲母粒が多く混入される。

SI020 (第142・147図、図版19・47、第11表)

小舌状台地の基部寄り、2F-77グリッド付近に位置する。東壁北半分が土坑と重複している。平面形はやや横長の隅丸方形である。規模は2.2m×2.3mで、検出面からの深さは20cmである。隅カマドの住居跡で、主軸方位は大きく東に振れている(N-141°-E)。主柱穴は検出されなかった。ピットが7基検出された。カマド左前にP1、西壁下北西隅から南西隅にかけてP2～P6、南壁中央壁下にP7が位置している。ピットは円形で、P1は径18cm、床面からの深さ22cm、P2～P7は径10cm～13cm、深さ6cm～14cmである。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。カマドは南東隅に位置し、長さ70cm、幅75cm、袖長23cm、煙道部の掘込みは47cmである。掘込みは半円形で、傾斜は約63度である。

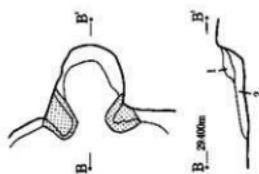
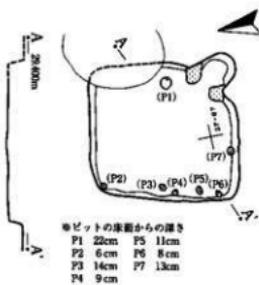
主な出土遺物は次のとおりである。

1は須恵器の坏である。平底で、体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。ロクロ成形で、ロクロ目が明瞭である。内面の底部と体部との境に弱いくびれが見られる。胎土には、粗い石英粒・長石粒が多く混入される。

SI021 (第142・147図、図版20・47、第11表)

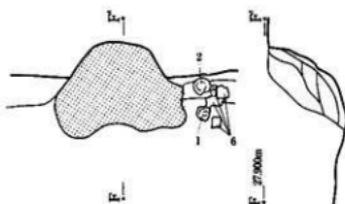
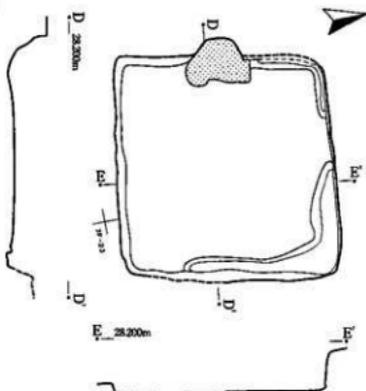
南側斜面上端部、3F-13グリッド付近に位置する。斜面に位置しているため、検出面からの遺存は悪い。

SI020

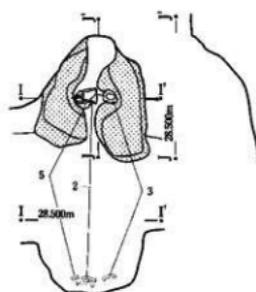
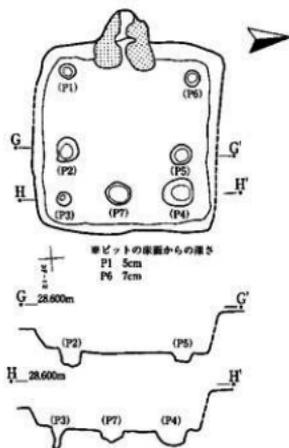


1. 焼熱により硬化したカマド構築材 (灰白色砂)
2. カマド構築材 (灰白色砂) を主体とする部分

SI021



SI022



0 (1/40) 2m  
(カマド)

0 (1/40) 4m  
(竈穴住居跡全体平面図・断面図)

第142図 奈良・平安時代竈穴住居跡(4)

平面形はやや縦長の隅丸方形である。規模は3.5m×3.4mで、検出面からの深さは65cm～15cm、主軸方位は大きく西に振れている(N-81°-W)。支柱穴、ビットは検出されなかった。壁溝は北半部の壁下に検出され、北壁中央部分で途切れている。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。

カマドは西壁中央に位置し、長さ70cm、幅100cm、袖長40cm、煙道部の掘込みは30cmである。掘込みは半円形で、傾斜は約55度である。カマド右から遺物が集中して出土している。

主な出土遺物は次のとおりである。1・2・6はカマド右側から出土している。

1は須恵器の短頸壺蓋である。扁平で、天井部に回転ヘラケズリが施される。折り返しが坏蓋よりも長い。つまみは欠損している。胎土には、やや粗い石英粒・長石粒が多く混入される。2・3は須恵器の坏である。平底で、体部が外傾して直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。ロクロ成形で、ロクロ目が明瞭である。3は内面の底部と体部との境に弱いくびれが見られる。

4は土師器の甕である。底部から胴部下部で、縦方向のヘラナデが施される。胎土には、粗い石英粒・長石粒が多く混入される。5・6は土師器の小型甕である。5は底部から胴部下部で、ヘラケズリが施され、器厚は、底部を含めてかなり薄い。6は底部中央部が欠損する。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、ゆるやかに内湾して口縁部につながり、口縁部は短く外反する。口縁部端部は小さく立ち上がり、受け口状になる。胴部外面に線刻「卍」が施される。

SI022(第142・148図、図版47、第11表)

南側斜面際の平坦部、3F-02グリッド付近に位置する。平面形はやや縦長の隅丸方形である。規模は3.0m×2.9mで、検出面からの深さは67cm～38cm、主軸方位は大きく西に振れている(N-84°-W)。支柱穴は6か所(P1～P6)と考えられる。P1～P3とP4～P6が直線に並ぶ。P1は円形で、径25cm、床面からの深さ5cmである。P2は円形で、径35cm、深さ25cmである。P3は円形で、径22cm、深さ35cmである。P4は楕円形で、48cm×43cm、深さ25cmである。P5は円形で、径32cm、深さ15cmである。P6は円形で、径26cm、深さ7cmである。東壁側に出入口ビット(P7)が検出された。円形で、径35cm、深さ20cmである。壁溝は検出されなかった。床面は平坦で、硬化面は検出されなかった。カマドは西壁中央に位置し、長さ100cm、幅88cm、袖長50cm、煙道部の掘込みは50cmである。掘込みは半円形で、傾斜は約45度である。カマド内から土師器甕が1個体出土している。

主な出土遺物は次のとおりである。2・3・5はカマド内から出土している。

1は須恵器の甕である。底部は5孔である。2・4は土師器の甕である。2は胴部上半部から口縁部である。口縁部は短く外反し、端部は小さくつまみ出された様に、受け口状になる。胴部に線状の成形痕がある。4は胴部下部で、縦方向のヘラナデが施される。2・4とも、胎土には、粗い石英粒・長石粒が多く混入される。3・5は土師器の小型甕である。底部から胴部で、胴部はほぼ球形である。底部を含めて器厚は薄い。外面にヘラケズリが施される。

6～8は鉄製品で、刀子である。6はほぼ完形である。ほぼ直刃で、刃部と基部との境の背部に関がある。7は刃部片、6は基部片である。

### 3 竈穴状遺構

台地の南側斜面に近い平坦面に位置する。竈穴住居跡SI022・SI023の北隣で、SI016の1軒である。平面形、規模は竈穴住居跡に類似するが、カマド、支柱穴が検出されないため、竈穴状遺構に分類した。

SI016 (第139・145図, 図版18, 第11表)

2F-83グリッド付近に位置する。平面形は隅丸正方形である。規模は一辺3.5mで、検出面からの深さは20cm～30cm, 北を中心とした主軸方位はN-1.5°-Eである。主柱は穴検出されなかったが、円形のピットが10基検出された。大、中、小の3種類で、大は1基で、径70cm, 床面からの深さ125cmである。中は2基で、径50cm・40cm, 深さ20cm・50cmである。小は7基で、径25cm～30cm, 深さ30cm～50cmである。

主な出土遺物は次のとおりである。

5は土師器杯の口縁部片である。ロクロ未使用である。6は縄文土器の口縁部片である。縦位RL縄文が施される。7・8は支脚片と思われる土器塊である。スサ混じりで、細かな孔が観察される。

#### 4 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は6棟検出された。4棟(SB001～SB004)は調査区の北東端部、堅穴住居跡の分布と一致する。ほかの2棟(SB005・SB006)は調査区中央部、東に突出する小舌状台地の基部に位置する。

##### SB001 (第143図, 図版20)

南側斜面際の平坦部, 2F-78グリッド付近に位置する。梁行方位はN-9°-Eである。規模は3間×2間で、側柱構造である。桁行長は4.8mで、梁行長は3.6mである。柱間寸法は、桁行方向は均等で、1.6mである。梁行方向は、西辺は均等で1.8mであるが、東辺は南側が広くなり、2.0m, 1.6mである。掘形は円形で、径は50cm～120cmであるが、60cm～80cmが7基, 100cm～120cmが3基である。掘形深さは15cm～45cmであるが、25cm～30cmが最も多い。南辺の東から2番目の底面に柱痕が検出された。円形で、径10cm, 底面からの深さは10cmである。

##### SB002 (第143図)

南側斜面際の平坦部, 1F-75グリッド付近に位置する。梁行方位はN-17.5°-Eである。規模は2間×1間で、側柱構造である。桁行長は4.5mで、梁行長は2.1mである。柱間寸法は、桁行方向は南側では均等で、2.25mである。北側は西側が広くなり、2.6m, 1.9mである。梁行方向は2.1mである。掘形は円形で、径は30cm～50cmである。深さは20cm～45cmである。また、2基で柱痕が検出された。北辺の中央では、円形で、径25cm, 底面からの深さ10cmである。南辺東端は、径20cm, 深さ5cmである。

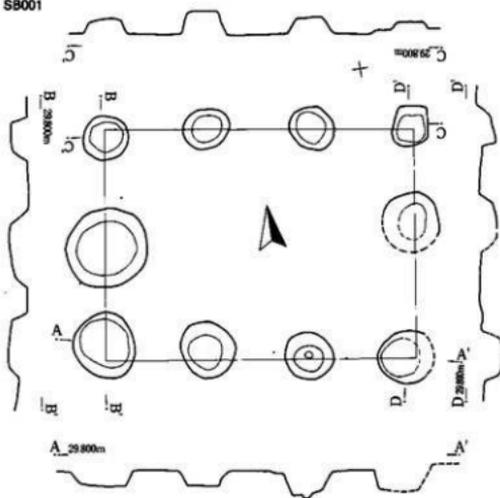
##### SB003 (第143図)

南側斜面際の平坦部, 2F-69グリッド付近に位置する。規模は2間×2間で、側柱構造である。一辺4.1mで、北を中心とした建物方位はN-8°-Eである。柱間寸法は、北・南・東辺は均等で、2.05mである。西辺は北側が広くなり、2.8m, 1.3mである。掘形は楕円形または円形で、楕円形は105cm×84cm・68cm, 円形は、径70cm～100cmである。深さは30cm～60cmであるが、40cm～50cmが最も多い。4基で柱痕が検出された。北西端、北辺中央、南東端及び南辺中央である。ほぼ円形で、径25cm～30cm, 底面からの深さは10cm～25cmである。

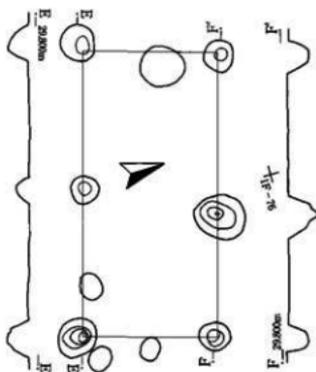
##### SB004 (第143図)

南側斜面際の平坦部, 2G-30グリッド付近に位置する。規模は2間×2間で、側柱構造である。一辺3.6mで、北を中心とした建物方位はN-17°-Eである。柱間寸法は、北及び東辺は均等で、1.8mである。西辺は南側が広くなり、2.6m, 1.0mである。南辺は西側が広くなり、2.0m, 1.6mである。掘形はほぼ円形で、径70cm～120cmである。深さは30cm～40cmであるが、40cmが最も多い。3基で柱痕が検出された。東辺3基である。ほぼ円形で、径約35cm, 底面からの深さは10cm～15cmである。西辺中央では3基の重

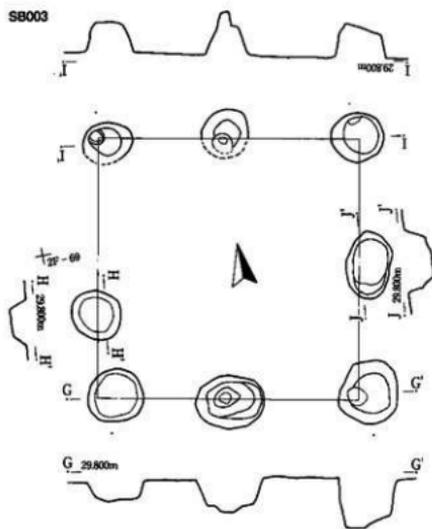
SB001



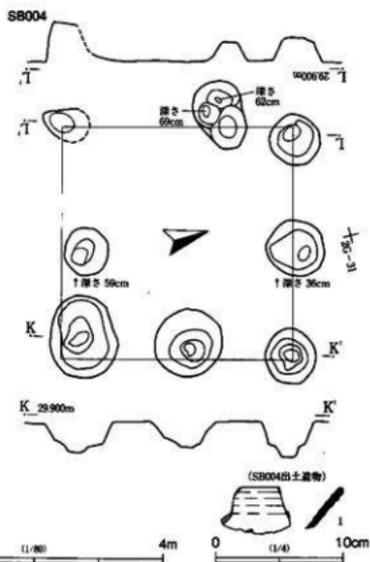
SB002



SB003



SB004



第143图 掘立柱建物跡(1)

複が確認されたが、他の柱穴では、重複は確認されていないので、別遺構と考えられる。

出土遺物には須恵器の坏がある。口縁部片で、外傾して、直線的に広がると考えられる。ロクロ目が明瞭である。

#### SB005 (第144図、図版20)

調査区の中央部、5E-52グリッド付近に位置する。規模は2間×2間で、銅柱構造である。一辺4.8mで、北を中心とした建物方位はN-25°-Wである。柱間寸法は、北、南及び西辺は均等で、2.4mである。東辺は南側が広くなり、2.9m、1.9mである。掘形はほぼ円形で、径80cm～160cmであるが、径80cm～100cmが6基、径100cm以上が3基である。深さは50cm～90cmであるが、四隅が80cm～90cmで中間の柱穴よりも深い。北西、南西隅及び南辺中間の柱穴で浅い土坑の重複が確認された。深さは30cm～40cmである。新旧は不明であるが、柱の抜き取り跡の可能性はある。

#### SB006 (第144図)

調査区の中央部、5E-20グリッド付近に位置し、SB005の北隣である。規模は2間×2間で、銅柱構造である。西辺が東辺よりも長い台形状の柱配置で、西辺5.4m、東辺4.5m、北辺5.5m、南辺5.2mである。北を中心とした建物方位はN-24°-Eである。柱間寸法は、西及び東側は均等で、それぞれ2.7m、2.25mである。北辺は東側が広くなり、3.0m、2.5mである。南辺は西側が広くなり、2.8m、2.4mである。掘形は円形または楕円形で、円形は、径80cm～160cm、楕円形は140cm×110cm～80cmである。深さは30cm～60cmであるが、40cm～60cmが多い。3基で柱痕が検出された。北東隅、北辺中央及び東辺中央である。ほぼ円形で、径20cm～30cm、底面からの深さは15cm～20cmである。

## 5 土 坑

奈良・平安時代と考えられる土坑が調査区中央東端から1基検出された。

#### SK102 (第139・145図)

7F-10付近に位置する。斜面際で、東半部が遺存しない。平面形は楕円形と考えられ、長径は不明であるが、短径は2.9mである。深さは、遺存部分で50cmである。底面はほぼ平坦で、ピットが2基検出された。ほぼ円形で、径約30cm、深さは15cm、20cmである。

主な出土遺物は次のとおりである。

9は土師器小型甕形のミニチュア土器である。手捏ね成形で、口縁部にヨコナデ、胴部にはナアが施される。器厚は、口縁部は薄い、胴部から底部は厚い。

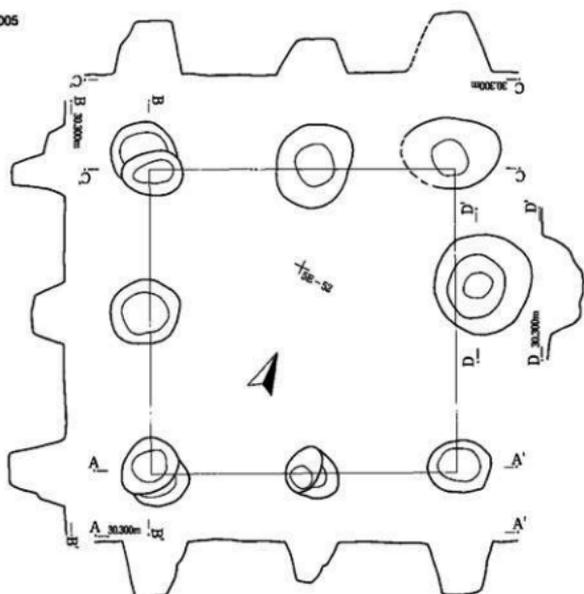
## 6 遺構外出土遺物

### (1) 土器 (第149図)

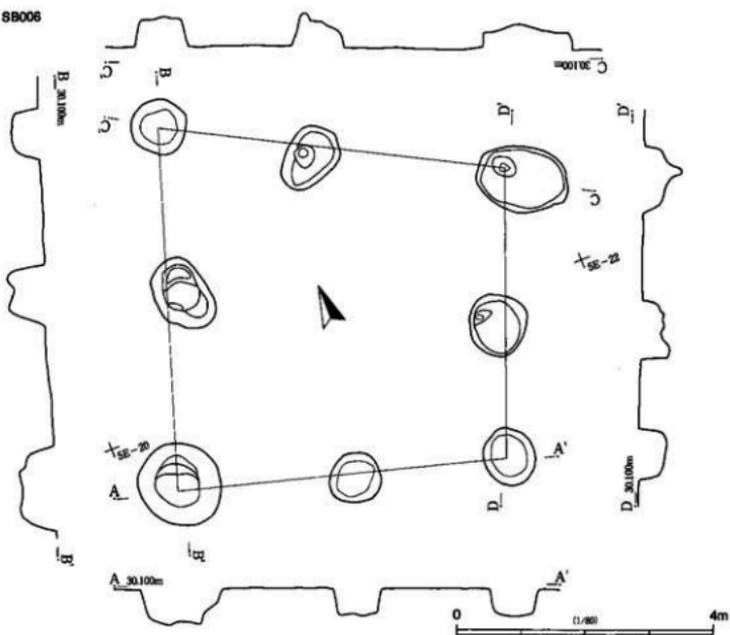
1は須恵器の坏壺である。笠型で、天井部に回転ヘラケズリが施され、擬宝珠形つまみが付く。端部は水平に拡がり、折り返しが垂直に短く突出する。胎土には、長石粒が少量混入する。2は須恵器の高台付坏である。端部が外反する、八字状の短い高台が付く。底部が高台よりもわずかに突出する。底部と体部との境に稜がある。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。1と同様の胎土で、長石粒が少量混入する。

3～5は土師器の坏である。3・4はロクロ未使用である。3は丸底で、やや扁平な半球形の体部から口縁部がほぼ直立する。内外面にヘラミガキと黒色処理が施される。外面底部にヘラ記号「×」が施される。4は平底で、体部が外傾して立ち上がり、ゆるやかに内湾して口縁部に至る。体部と口縁部との境に

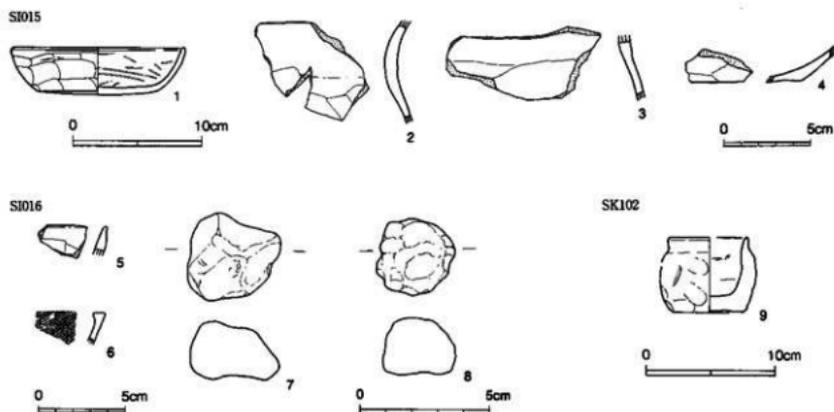
SB005



SB006



第144図 掘立柱建物跡(2)



第145図 奈良・平安時代遺構出土遺物(1)及び堅穴状遺構・土坑出土遺物

弱い稜があり、口縁部はほぼ直立する。5はロクロ成形の坏である。平底で、体部は外傾して立ち上がり、わずかに内湾して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り痕があり、未調整である。

6は土師器の小型甕である。胴部上半部から口縁部の遺存で、胴部は球形に近い形と思われ、口縁部との境に稜がある。口縁部は外反して立ち上がり、端部は丸い。胴部にヘラケズリ、口縁部にヨコナデが施される。

7～10は墨書土器である。7～9は土師器の坏、10は土師器の甕である。7は外面体部で、「方」と考えられる。8も外面体部であるが、文字は不明である。9は外面底部であるが、文字は不明である。10は「圓」と考えられる。11は土師器鉢型のミニチュア土器である。器形は扁平な球形で、無頸状で、口縁部は内傾する。手捏ね成形で、器面に指の成形痕が残る。

#### (2) 土製品 (第149図)

12は棒状の土製品である。端部の遺存で、全体の形は不明である。

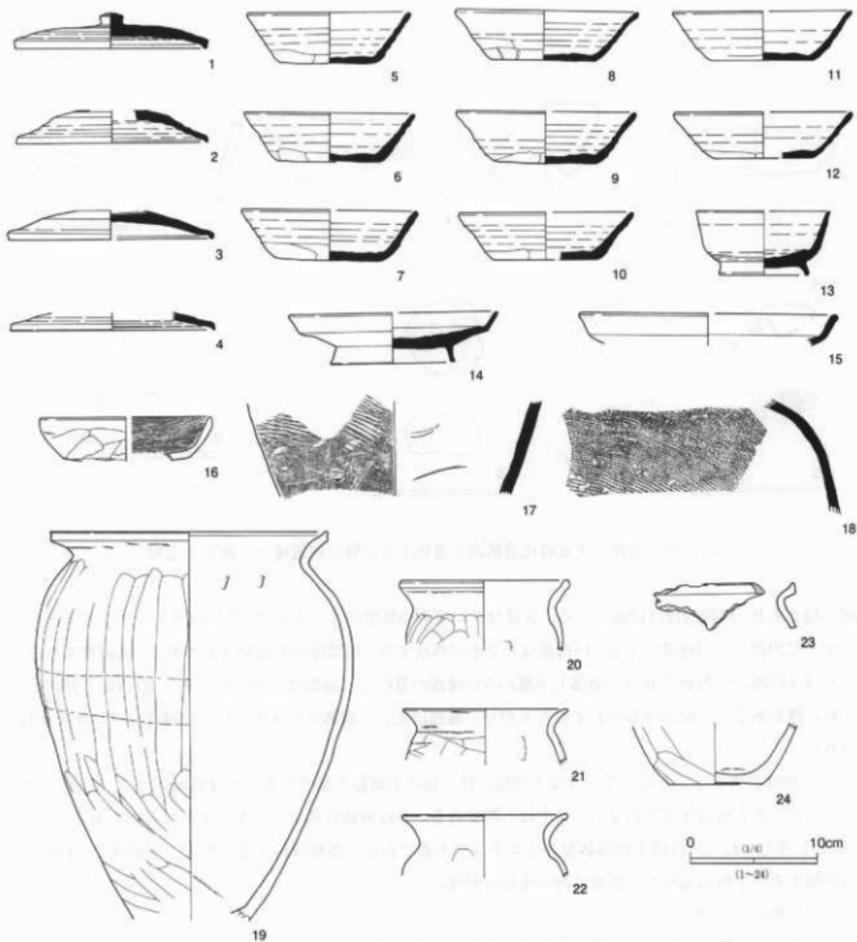
13・14は土玉である。13は完形であるが器面の剥離が激しい。14は半分の遺存である。表面は丁寧なナデが施される。

#### (3) 石製品 (第150図, 表12, 図版48)

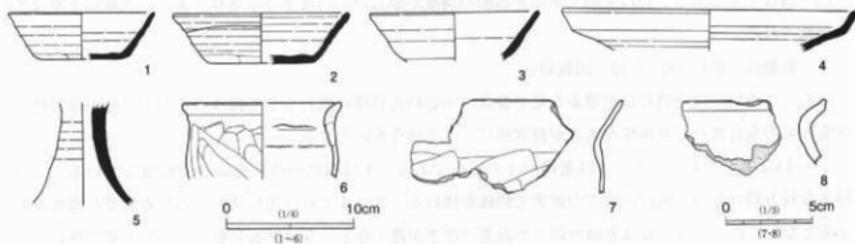
砥石 この項で扱う砥石は形態から見て奈良・平安時代以降の砥石を全て扱う。この中には中世以降の所産のものも含まれる可能性があるが便宜的にここで扱うものとする。

1～14は砥石である。1～6は遺構出土の砥石である。1は板状の破片を砥石に転用している。2は扁平な長方形のもので側面の研ぎが顕著で側縁が抉れる。3・4・6は角柱状のもので表面及び側面が研ぎ面となっている。4・6は表面の研ぎが顕著で厚さが薄くなる。5は粘板岩製のもので非常に薄いものである。

SI017

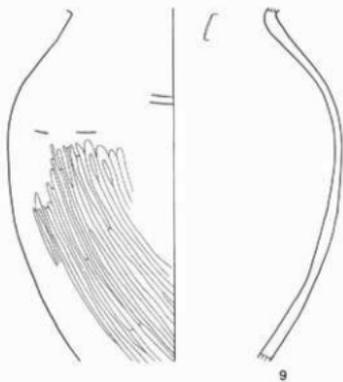


SI018

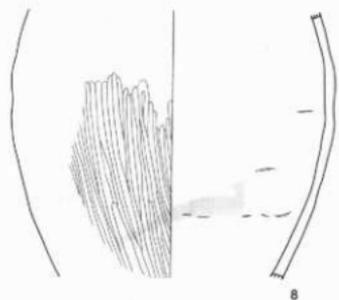
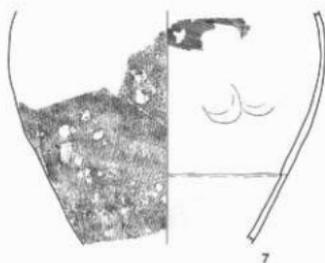
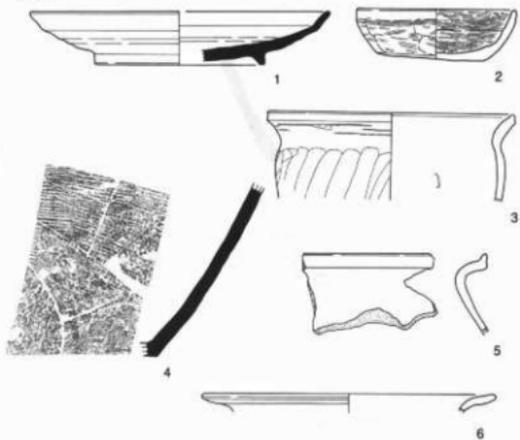


第146圖 奈良・平安時代遺構出土遺物(2)

S1018



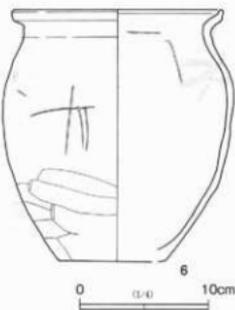
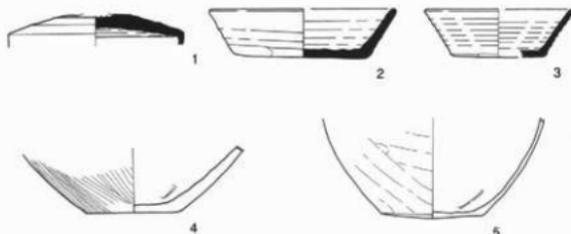
S1019



S1020

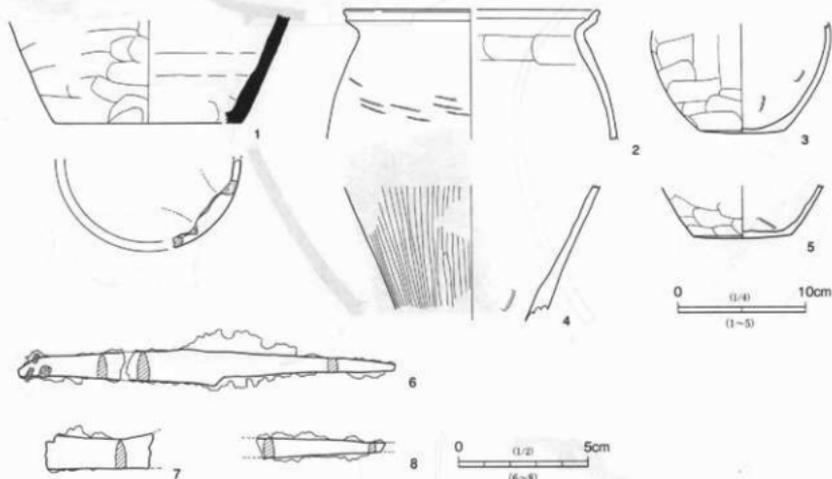


S1021

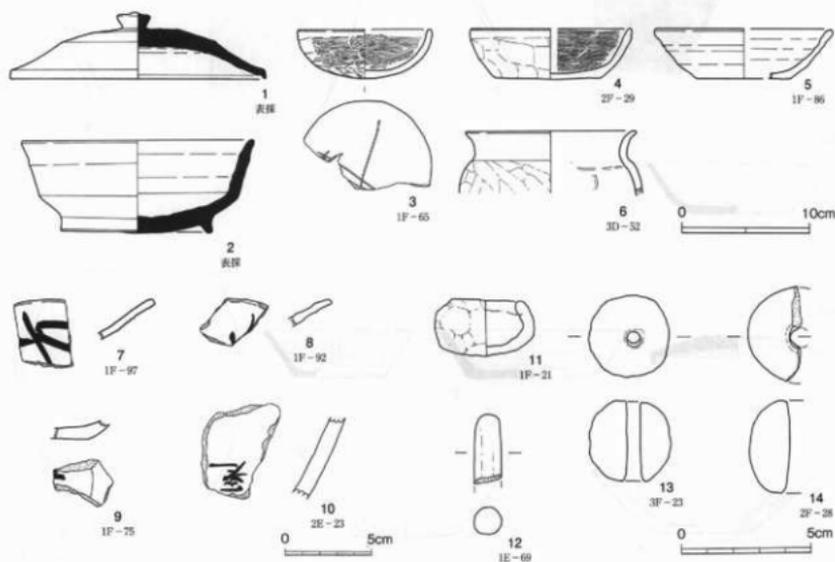


第147图 奈良・平安時代遺構出土遺物(3)

SI022



第148図 奈良・平安時代遺構出土遺物(4)



第149図 奈良・平安時代遺構外出土土器・土製品



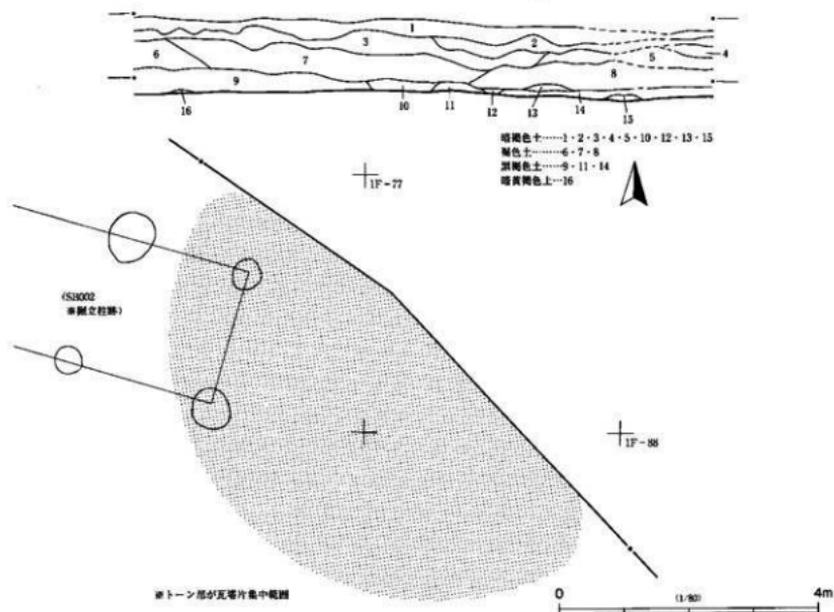
第150圖 奈良・平安時代以降砥石

7は石皿の破片を転用したのか、縁辺に細長い研ぎ面があり窪んでいる。8は長方形のもので側面の研ぎにより抉入した側縁となっている。9も側面の研ぎが顕著で上半が細くなる。10～12は不定形のもので、10は表裏面が平坦になっている。11・12は平面形が三角形状で表面及び側面の研ぎが顕著で部分的に抉れている。13は表面に2条の深い研ぎ面、裏面に1条の浅い研ぎ面があり、玉類等の研磨用砥石の可能性はある。14は大型の砥石で表面及び側面の研ぎにより中央が括れる。表面には細長く断面V字状に窪んだ研ぎ面があり、鉄製品などを研いだものであるか。

## 7 瓦 塔

### (1) 瓦塔の接合及び分類方法と復元

接合及び分類については、1) 大きさ、2) 焼成、3) 各部表現(瓦の太さ、突帯の形、垂木の形と間隔)を主な指標として、接合破片を核とした各部材ごとの識別を行った。破片はいずれも同工品であるが、二つに大別でき、その中に初軸(一階の壁部分)が2基分、最上層屋蓋2枚分、伏鉢(受花と一体か)2点、水煙1点、宝珠(龍車と一体)1点がみられた。そこで、当初は五重塔2基を前提に、残りの部材を屋蓋8層、軸8点に識別することを目指した。しかし、破片の点検を進めると、屋蓋の隅軒先が最上層を含めて41点あり、五重塔の5層×2基×4隅を上回ることが判明した。さらに、初軸を除く軸(二階以上の壁部分)の隅部遺存数は、4軸×2基×4隅の32か所を超えるには至らないが、破片の大きさから相互に決して接合しえない部材があり、細部特徴による部材識別をしながら破片を組合せると、軸数が最小値で9



第151図 瓦塔集中域 (SX001)

点、妥当な数は10点～11点であることが判明した。4軸×2基の8点を確実に上回る。

以上の状況から、五重塔2基ではなく、3基以上の可能性と、五重塔ではない可能性が考えられた。

そこで、改めて上記の主要3指標に基づき部材識別し、同時に空白部を補い合う組合せの最小数をめぐりて分類を進めた。接合している屋蓋の部材は、片側（一隅）が灰色や黒灰色に変色し、もう片側が褐色ないし暗褐色に焼成されるものが多い。この点を参考に、より合理的な部材識別を試みた。結果、屋蓋の総数は少なくとも13枚以上とみられ、14枚に分類すると破片の大多数を吸収できた。

資料は接合・分類案を示した上で、(株)京都科学に復元を委託した。復元は部材毎に行い、資料に忠実な形と大きさに整えた。層数・基数の検討は、部材完成後に積み方の検討と併せて行った。

まず、五重塔2基+1基を前提に組むと、うち2基は違和感なく組める。しかし、最上層屋蓋が2枚とも小型であるから、2基とも小型の屋蓋を4層目に使用せざるをえず、組合せの良くない大型部材ばかりが余る。これでは五重塔3基は組みにくい。3基ではないならば、4基以上も考慮しなくてはならない。つぎに、七重塔を組んでみると、かなり均整な形で組める。部材をほとんど使い切り、かつ屋蓋の勾配が揃う。細部特徴の相違については、最上層屋蓋の帰属に難点が残るが、ほかは不完全ながら二大別しうる部材をそれぞれ分けて使用することができる。また、初軸（一階壁部分）の高さが異なるにもかかわらず、類似特徴をもつ軸を重ねていくと、2基はほぼ同じ高さになる。組合せを考える上で、2基の釣り合いがとれることは、重要な指標と考える。

馬込遺跡瓦塔の出土位置は（第151図、7層～9層）、調査区の境にかかっており、調査区外にも破片が残っているとみられる。五重塔3基どころか、4基以上存在した可能性は排除できない。ただし、調査状況を総合すると、破片の出土位置を図に記録できた場所は調査区境付近だけであり（図版20）、表土除去の際に重機にかかってしまったために回収した瓦塔片が資料の大多数を占めると判断される。その位置は調査区の外より内側であり、瓦塔出土位置の中心は調査区内に納まる可能性が高い。

従来、瓦塔が五重塔であるとされた根拠は、出土品の総量から求められたものである。池田敏宏氏のご教示に拠れば、これまで五重塔を超える量の資料は出土していない。ただし、相川考古館所蔵資料には、屋根の裏に「六」と書かれた例があり、五重を超える塔の存在可能性も考慮されていたという。

七重塔2基に組むと、形態上の整合性が取れ、ほぼすべての破片が吸収される。一方、五重塔3基では形態的にやや不安があり、4基以上の出土可能性も考慮しなくてはならない。最上層の屋蓋と最下部の初軸が2基分、伏鉢が2基分（2点）にとどまる現状でこれを秤に掛けるなら、前者の蓋然性がより高い。以上の理由により、初めての試みとして、七重塔2基に復元した（第152図）。

なお、以上の経過からこれまでの中間報告は見直しが必要となり、本書をもって最終報告とする。

復元にあたり、相輪の高さは、伏鉢から宝珠までを全高の約1/3とし、九輪の部分において調整した。受花は伏鉢と一体型と考えた。部材が出土しなかった九輪は、伏鉢の径に対応させた。県内における九輪の報告例は乏しく、佐倉市六拾部遺跡・八千代市白幡前遺跡出土の、ラッパ状部材を別々に積み例と、袖ヶ浦市東郷台遺跡出土の、九輪一体の例があるが、本資料とは瓦塔の形状も焼成も異なる。その中で、白幡前遺跡例では九輪と伏鉢の径がほぼ同大であり、今回の復元方針に合致する。

瓦堂の破片として識別できる破片は、まったく確認できなかった。関連土器として、瓦塔出土地点から、鉄鉢形土器が1点出土した。

## (2) 塔の特徴 (第152図, 巻頭図版)

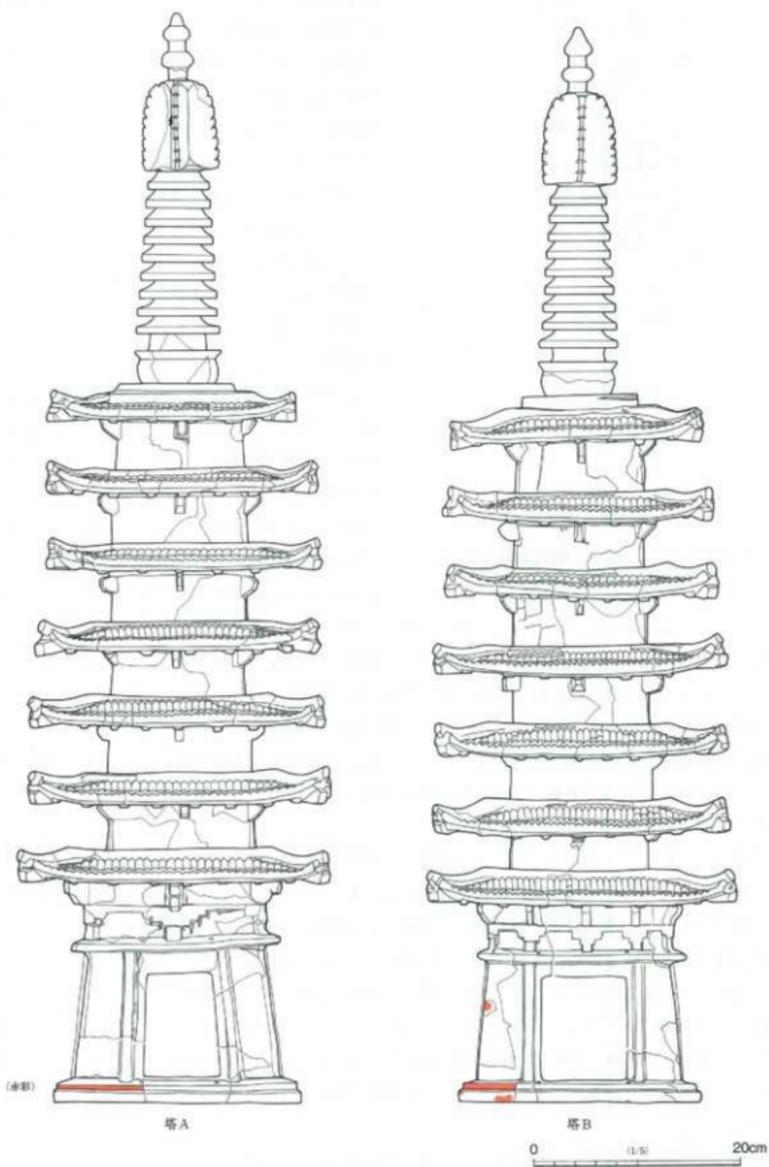
2個体ともに、窀穸で赤く焼かれた瓦塔である。屋蓋と軸（壁部分）が別造りで、一層ずつ組み上げる。焼成の質、赤色スコリアを多く含むなど、胎土は均質である。色調は類似し、褐色を基調とする。大きく接合した部材では、いずれも一辺（一隅）が灰褐色を帯びる。調整はほぼ共通で、外面は丁寧なナデ、内面はヘラ痕跡を明瞭に残すヘラナデ・ケズリを基調とする。屋蓋の成形は、四方の板で隅垂木の粘土柱を挟み、傾斜をつけて組合せ、裏面に補強粘土を貼付け接合している。裏面の垂木表現は、貼付けによらず本体から削出したもので、周辺はとくに深く粗いヘラケズリが施される。表面の瓦は、一種類の表現に統一される。2本～4本の半截竹管を連ねた工具が想定され、幅5mm前後の細く深い、逆U字形瓦文様が刻まれる。軒瓦のみ、段をつけて表現し、ほかの瓦は切れ目が表現されない。軸の成形は、基本的に四面の粘土板を隅部で接合しており、一部を除き、輪積み痕は明瞭ではない。初軸を除く軸の斗拱表現は、隅部と辺の中央部に各1か所ずつ、8方向に統一される。以上、斗拱・垂木の形態と数、成形、調整等の点で、分類がすこぶる困難であるほどに作りは酷似しており、同一工人集団の作であることは確実である。

塔A・塔Bの峻別は初軸が基本となる。二軸目以上は斗拱成形と隅部調整状況等に微細な相違がある。初軸との対応関係は、斗拱が2段持送り表現の初軸と、簡易持送り表現（第153図表現a～b）の二軸以上で、異なるという特徴があるため難しいが、壁が平らで隅部が鋭利に表現されるものを初軸Bに、壁が内側に凹んだり隅部に丸みがあるものを初軸Aに対応させた。一方、屋蓋は隅部垂木表現と瓦表現から概ね2分できるが、中間の特徴をもつ部材もある。初軸との対応関係に、確実な根拠がみあたらない。屋蓋表現が概して細かいものを初軸B、太いものを初軸Aに対応させたが、入れ替わる可能性も残る。

### 塔A（第154図～第156図、図版49～図版55）

復元高は106.5cm、最大幅は30cmである。七層までの高さは70.0cmである。ただし、緩衝・安定材、復元厚などにより1.5cm程度前後する。表現がやや簡略的である。とくに、各種表現を施す際、本体にヘラ切り痕を明瞭に残す点に特徴がある。比較的焼成が良く、部材がやや多く遺存する。初軸Aの出土状況はほとんどが重機による表土除去排土からの採集であり、調査区北側境界線に沿った手掘り除去部分（境界線から幅1m、長さ6mの帯状部分）からの出土片は1点にとどまるため、その南側の部分、すなわち1F-86、1F-87グリッド付近の可能性が高い。

初軸A 基部は一辺24cm、高さ23.5cmである。にぶい褐色～にぶい黄褐色で、比較的明るい。上辺が部分的に還元し灰色に変色している。本体の粘土雜目は明瞭でない。二段の基壇が巡る。段に赤彩の痕跡が残る。入口が4面にあく。ヘラにより縦10cm、横上部6cm、横下部7cm前後の台形に、ほぼ同じく切取られる。入口の両脇に柱の表現があり、庇状の突帯（台輪）を支える。柱は粘土貼付け・ヘラ切出しにより、幅9mm～12mm、厚さ5mmの長方形断面をなし、明瞭なヘラ切り痕がつく。庇状の突帯は高さ約20mm、粘土貼付け後横方向のナデ、端部にヘラで面が施される。入口の左右に径約4.5mmの軸受けの小円孔がみられ、観音開きの扉が付けられたことを示す。上の孔は庇を貫通し、下の穴は基壇上面からU字形に凹む。壁部の四隅はヘラで面取りされる。庇の上に柱上部（簡略化した大斗）を含む組物（斗拱）が表現される。組物の基部は平面的な粘土帯で表現され、横梁状帯で連結される。この「斗拱粘土帯」は3段で、初軸Bに比べ大きい分、全高も高い。本体に深いヘラ切り痕跡が及ぶ。上部に2段持送りが表現される。組物の表現数は、四隅と、辺の中央部に各1か所ずつ、全8か所と少ない。柱と組物の位置は対応しない。屋蓋受けとして、外側に傾斜する突出高14mm、厚さ8mm前後の突帯が貼付けられる。横方向のナデ、ヘラによ



第152图 马达遗址瓦塔实测图



ある。軒はやや長い(5.1cm~5.5cm)。隅部垂木は、簡易だが立体的表現であり、先端は扁平である。垂木が細い部分と太い部分がある。太い表現では間隔も広い。一辺につき7か所~8か所みられる。比較的明るい色(にぶい褐色)である。

屋蓋A4 一辺約26.8cmである。突帯部の接合率は9割に達する。突帯は立体的で、幅は細く(9.6mm~12.2mm)、断面は角ないし丸形をなす。中央に円孔(7.5cm)があり、周囲に強いヨコナデが施される。瓦の表現は中太(4.5mm~5.5mm)である。軒は短い(4.4cm~5.1cm)。隅部垂木はヘラ線が残り、やや立体感を欠く。大きめで雑な垂木が一辺に7か所表現される。裏面ヘラケズリが明瞭である。褐色である。

屋蓋A5 一辺は26.5cm前後に復元される。隅部が対角に2か所遺存する。突帯は立体的で、幅は細く(9.6mm~12.6mm)、断面は角ないし丸形をなす。瓦の表現は中太(4.5mm~5.5mm)である。軒は短い(4.6cm前後)。隅部垂木は、立体感のある丁寧な造りであるが、先端は扁平である。垂木は丁寧な造りであるが細い。赤く焼けすぎた感があり、荒れている。灰黄褐色とにぶい赤褐色をなす。

屋蓋A6 一辺約26.2cmである。隅が接合し、突帯部の接合率は3割程度である。突帯は立体的で、幅は中程度(13.0mm~14.1mm)、断面は角形をなす。中央に円孔(7.2cm)があく。瓦の表現は太い(5.1mm以上)。軒は短い(4.5cm~4.7cm)。隅部垂木は、丁寧に立体感がある。裏面ヘラケズリが明瞭である。にぶい赤褐色である。

屋蓋A7 一辺約24.0cmの最上層屋蓋である。この部位に該当する破片が4割程度あるが、接合するものは少ない。中央部露盤は低い壇で、小円孔(径約4cm)があく。瓦の表現は太い(4.9mm~5.4mm)。軒は短い(3.7cm~4.6cm)。隅部垂木はやや扁平である。にぶい赤褐色で、器面は荒れている。

伏鉢A 受花と一体で、口径5.8cm、突帯径8.3cm、高さ5.3cmである。Bより大きい。胴部が4割程度遺存する。ロクロ成形で、ヨコナデにより比較的丸みを帯びる。下端は平らである。にぶい褐色である。

宝珠・龍車・水煙 三部一体に作られる。龍車と水煙の中間で折れており、直に接点はない。水煙は十字に突き出た飾りで、端部に8か所のヘラ刻みが施され、中軸部に「イ」の字形の墨書が付着する。宝珠は径2.6cm、高さ2.8cm、龍車は径3.1cm、高さ1.8cmである。宝珠から水煙にかけて、中心部を径8mmの中軸孔が通る。中軸孔は水煙の下部ではやや広がっており(径12mm)、上端は宝珠の部分で塞がれる。

塔B(第157図~第159図、図版49~図版55)

復元高は105cm、最大幅は30cmである。七層までの高さは68.5cmである。緩衝・安定材、復元厚などにより1.5cm程度は前後する。表現は比較的丁寧である。焼成は良い。部材はやや遺存度が低い。初軸Bの出土状況は、表土除去排土からの採集のほか、調査区北側境界線に沿った幅1m長さ6mの帯状部分にて、接合片が8点認められたことから、原位置は調査区北側の境界線付近である可能性が高い。すなわち、1F-76、1F-77グリッド付近とみられる。

初軸B 基部は一辺23.2cm、高さ20.3cmである。にぶい赤褐色で、比較的暗めであるが焼成はよい。上辺内面が部分的に還元し灰色に変色している。本体の粘土継目は明瞭でない。二段の基壇が巡る。一部に赤彩の痕跡が残る。入口は4面にあく。ヘラにより縦10cm、横8cm前後の長方形でほぼ同じく切り取られる。入口の両脇に柱の表現があり、庇状突帯を支える。柱は粘土貼付け・ヘラ切出しにより、幅8mm~9mm、高さ4mmの、整った長方形断面をなす。庇状突帯は高さ1.5cmであり、粘土貼付け後横のナデ、端部にヘラ面取りが施される。入口の左右には径4mm前後の軸受けの小円孔がみられ、観音開きの扉が付く。上の孔は庇を貫通し、下の穴は基壇上面からU字形に凹む。壁部の四隅は角張る。組物(斗拱)基部の「斗

「粘土帯」は2段であり、横梁状帯で連結される等の特徴は共通であるが、Aより表現は小さい。上部の持送りは2段表現であり、これもやや小柄である。組物表現は、四隅のほか、各辺に3か所ずつ、全16か所である。組物の位置は庇下の柱の位置に対応する。比較的繊細な細工が施される。屋蓋受けとして、外側に傾斜する突出高12mm、厚さ7mm前後の突帯が貼付けられる。横のナデ、ヘラによる端面面取りが施される。平滑面への単純な接着によるため大部分が剥落している。

軸B2 壁部で一辺13.5cmの方形、高さ6.3cm、厚さ10mm前後である。遺存度は1/4周以上である。隅部をやや尖らせて表現している。屋蓋受けの貼付粘土帯は突出高5mm～8mm、厚さ8mm前後、外側に面があり、突出度はあるが、断面下部は丸い。斗拱表現はb'である。にぶい褐色である。

軸B4 辺長は不明である。高さ6cm、厚さ8mm前後である。遺存度は1/4周程度である。隅部を尖らせて表現される。貼付粘土帯は突出高5mm～6mm、厚さ8mm前後、外側に面をもつが突出度は低く、断面下部が丸い。斗拱表現はb・b'である。黄褐色である。

軸B5 壁部で一辺12.5cmの方形、高さ5.7cm、厚さ10mm前後である。遺存度は3/4周分以上である。隅部を尖らせて表現される。貼付粘土帯は突出高5mm～6mm、厚さ7mm前後、外側に面をもつが突出度は低く、断面下部が丸い。斗拱表現はb'である。にぶい赤褐色である。

軸B6 壁部で一辺12.7cmの方形、高さ5.1cm、厚さ13mm前後である。遺存度は3/4周分程度である。隅部を尖らせて表現される。貼付粘土帯は突出高4mm～5mm、厚さ8mm前後、外側に面をもつが突出度は低く、断面下部が丸い。斗拱表現は不明である。明赤褐色である。

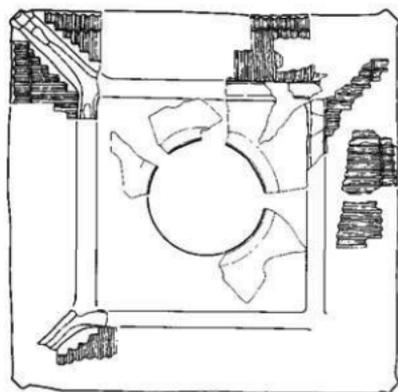
軸B7 壁部で一辺12.4cmの方形、高さ6.6cm、厚さ中央が厚く12mm前後である。遺存度は3/4周分以上がある。隅部を尖らせて表現される。貼付粘土帯は突出高6mm、厚さ7mm前後、外側に面をもつが突出度は低く、断面下部が丸い。斗拱表現はb'である。にぶい褐色である。

屋蓋B1 一辺約30cmである。隅部を中心に、瓦表現の類似する破片からなる。突帯は立体的で、幅は中太(12.0mm～13.6mm)、断面は角形をなす。中央に円孔(約7.0cm)があく。瓦の表現は細く(3.8mm～4.0mm)、彫りが深い。軒はやや長い(5.0cm～5.3cm)。隅部垂木は立体的であるが、先端は扁平である。垂木は造りが粗く、細く短い。裏面ヘラケズリが明瞭である。にぶい赤褐色である。

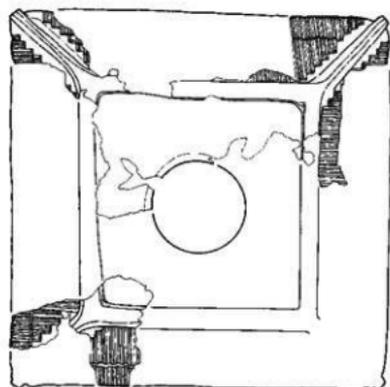
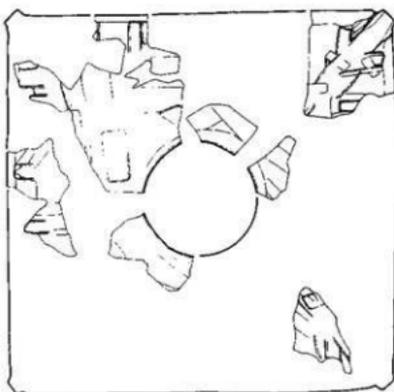
屋蓋B2 一辺約29.2cmである。4割程度の接合率のもと、その対角上の隅部片からなる。突帯は立体的な部分と扁平な部分があり、幅は中程度(11.0mm～14.1mm)、断面は角ないし平丸形をなす。中央に円孔(約6.8cm)があく。瓦の表現は細い(4.5mm～5.0mm)。軒は長い(5.6cm～5.8cm)。隅部垂木は、簡易だが立体的で、先端は細い角柱状をなす。垂木は扁平だが整っており、一辺につき8か所みられる。明るい色(にぶい橙色)である。

屋蓋B3 一辺約28.4cmである。瓦表現に近い大型片からなる。突帯は立体的で、幅は中太(11.6mm～14.5mm)、断面は角形をなす。瓦の表現は中太(4.7mm～5.4mm)である。軒は長い(4.9cm～5.4cm)。隅部垂木は、簡易だが立体感がある。垂木は形が多様である。一辺に7か所～8か所みられる。裏面ヘラケズリが明瞭である。滑らかな器面で、にぶい赤褐色である。

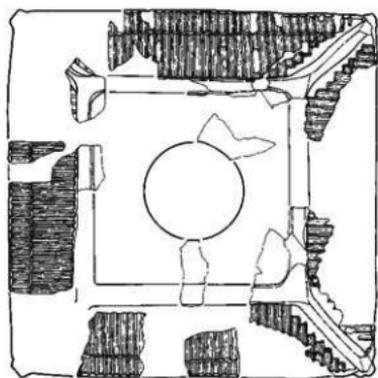
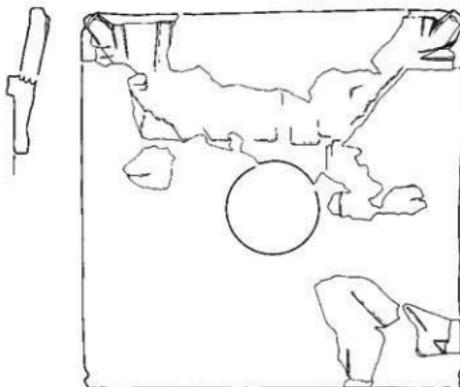
屋蓋B4 一辺約28.4cmである。二つの辺からなる。突帯は扁平で、幅は太い(13.0mm～14.8mm)、断面は角ないし角平形をなす。瓦の表現は細い(4.0mm～4.6mm)。軒は長い(5.0cm～5.9cm)。隅部垂木は、粗い造りで、ヘラ線刻が深くつく。先端は細い角柱状である。垂木は太く、間隔が広い。一辺に7か所前後である。裏面ヘラケズリが明瞭である。器面の滑らかさに欠ける。暗い色(にぶい赤褐色)である。



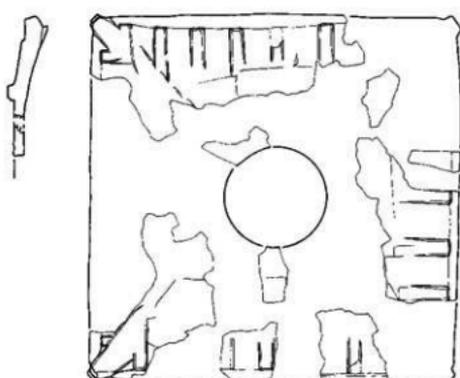
屋 A 1



屋 A 2

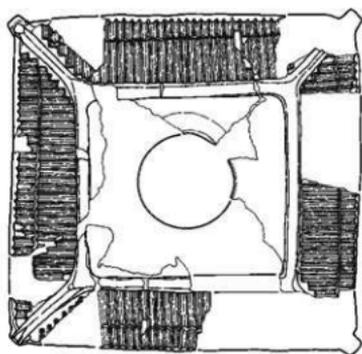


屋 A 3

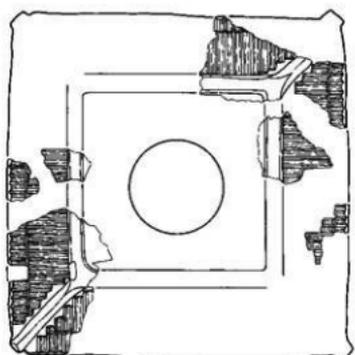
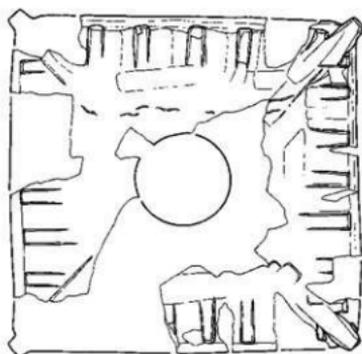


0 10cm

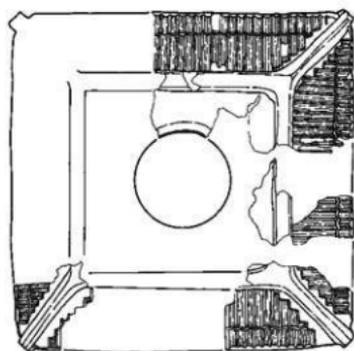
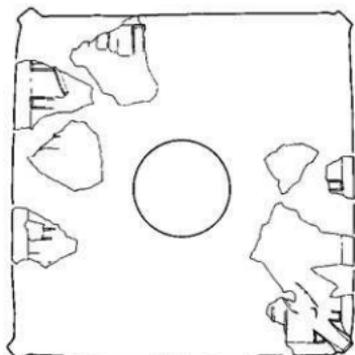
第154图 塔A部材实测图(1)



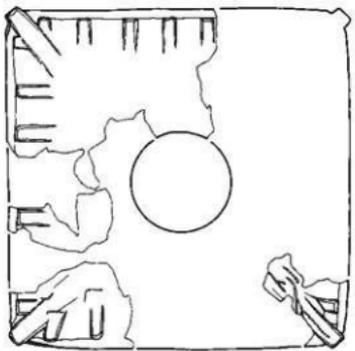
層 A 4



層 A 5

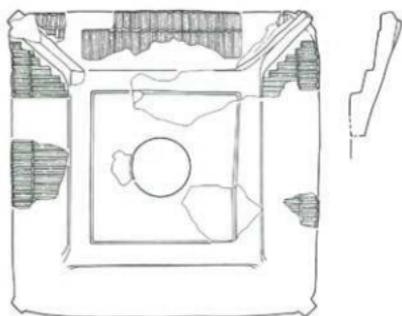


層 A 6

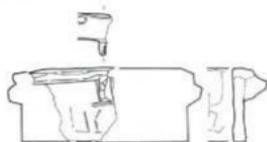
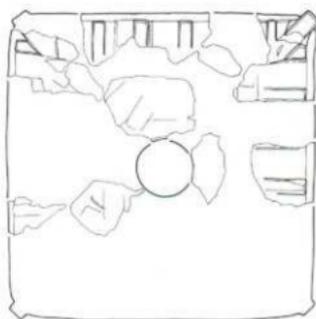


0 (1/4) 10cm

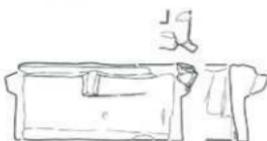
第155図 塔A部材実測図(2)



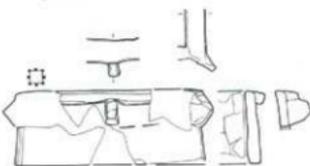
層 A 7



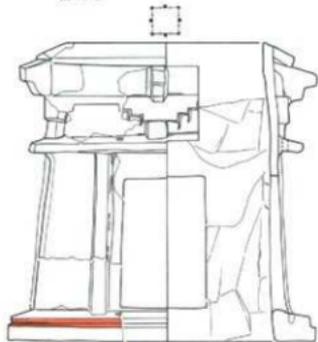
軸 A 5



軸 A 4



軸 A 2



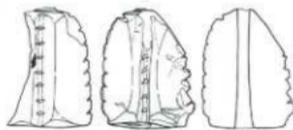
塔初 A



宝珠



水盤



伏鉢 A



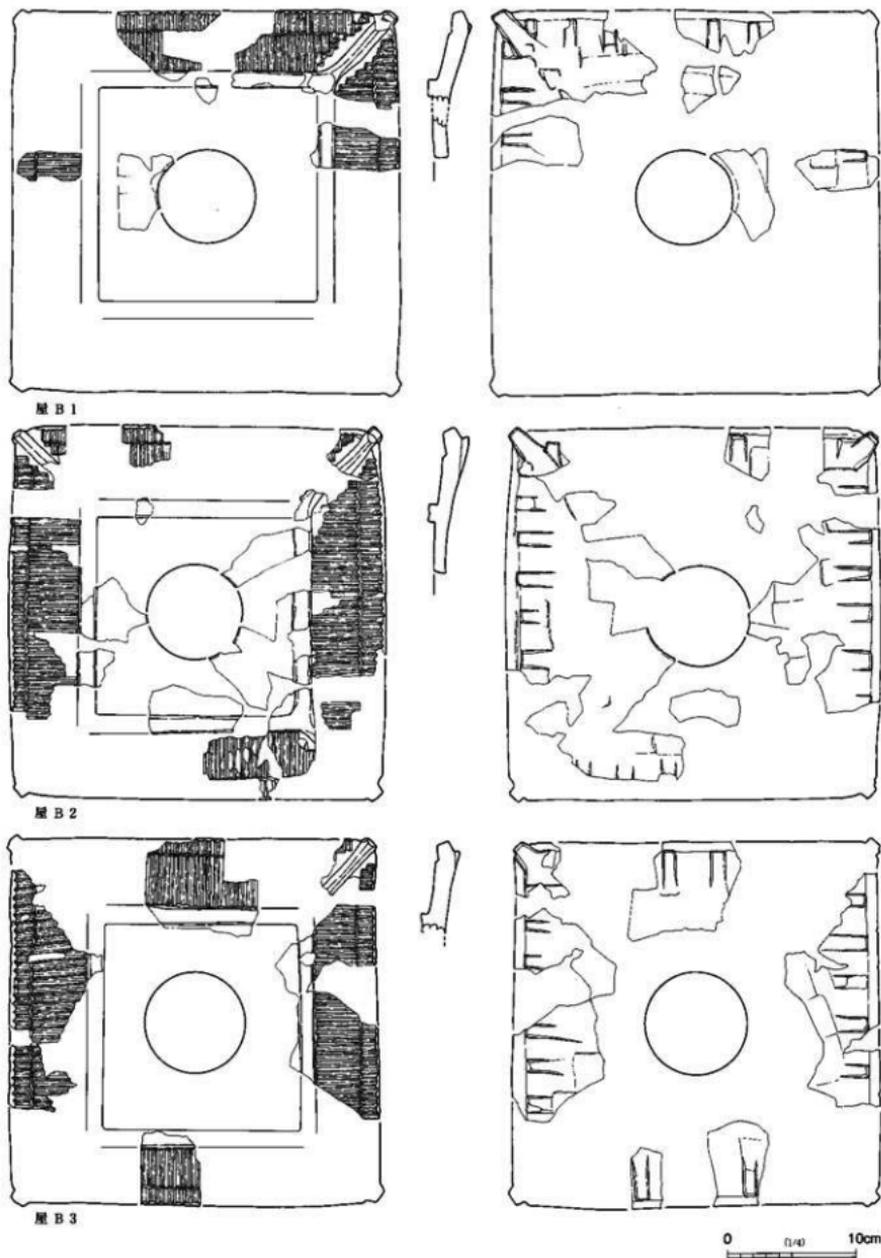
軸 A 7



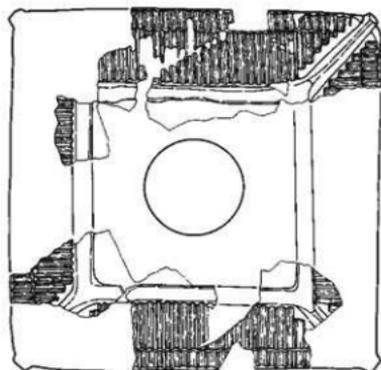
軸 A 6



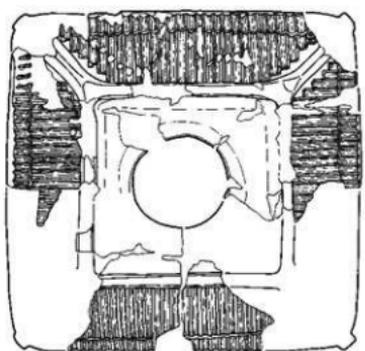
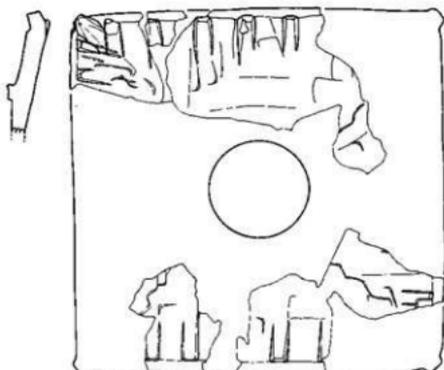
第156图 塔A部材実測图(3)



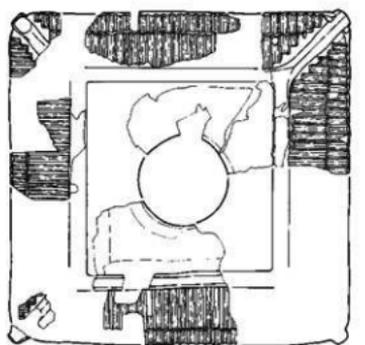
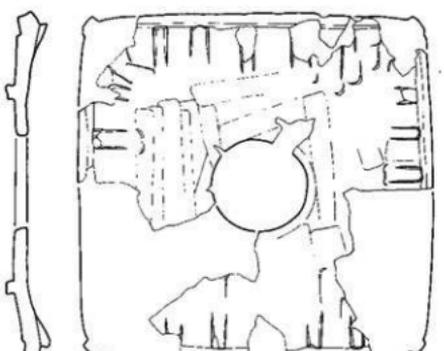
第157图 塔B部材实测图(1)



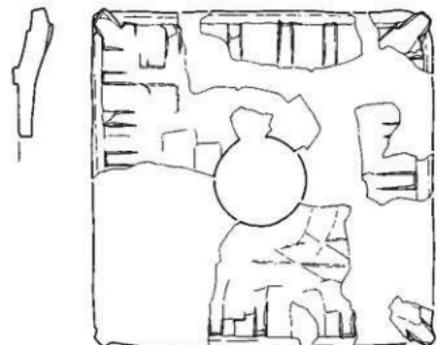
層 B 4



層 B 5

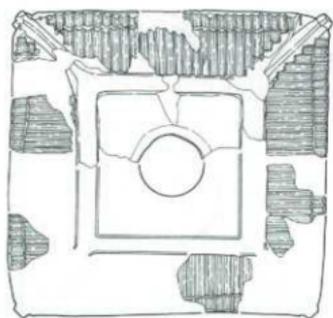


層 B 6

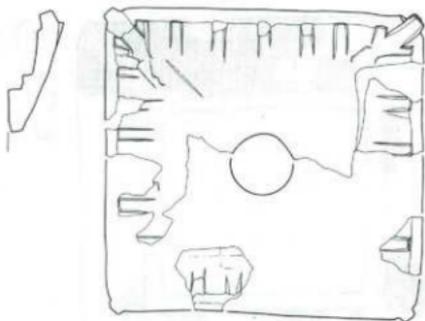


0 (1/4) 10cm

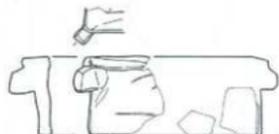
第158図 塔B部材実測図(2)



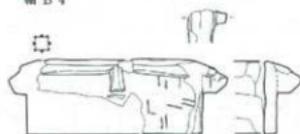
層 B 7



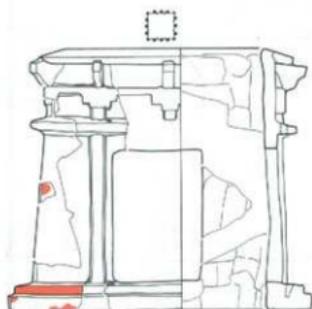
輪 B 5



輪 B 4



輪 B 2



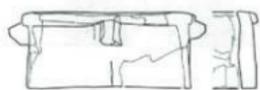
初輪 B



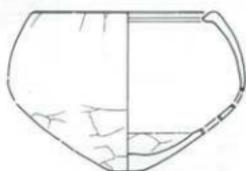
伏鉢 B



輪 B 7



輪 B 6



鉄鉢形土器



第159図 塔B部材実測図(3)

屋蓋B5 一辺約27.0cmである。突帯部の接合率は8割に達する。突帯は立体的で、幅は細く(10.7mm以下)、断面は角形をなす。中央に円孔(7.2cm)があく。瓦の表現は太い(4.9mm～5.6mm)である。軒はやや長い(5.0cm～5.4cm)。垂木は形が良く角張る。一辺に7か所みられる。裏面ヘラケズリは明瞭であるが粗くない。器面が滑らかで、にぶい褐色である。

屋蓋B6 一辺約26.2cmである。隅部2点からなる。円孔周辺が隅部破片と接合している。突帯は立体的で、幅は細く(11.5mm～13.1mm)、断面は角形をなす。中央に小円孔(6.0cm)があく。瓦の表現は太い(4.9mm～5.7mm)。軒は短い(4.8cm)。隅部垂木は、簡略的であるが比較的太い。垂木は太く平らなものと細いものに分かれる。やや器面が荒れている。褐色である。

屋蓋B7 6割程度接合した最上層屋蓋である。一辺約24cmである。露盤は高い壇で、径約9.5cmの小円孔があく。瓦の表現は太い(5mm以上)。軒は短い(4.5cm～5.2cm)。隅部垂木は太く、立体的である。垂木は一辺に7か所である。器面は滑らかで、角が明瞭に作られる。明るい色(にぶい褐色)である。

伏鉢B 受花と一体で、口径5.1cm、突帯径7.7cmである。突帯部付近は全周する。ロクロ成形とみられ、シャープな造りで、とくに突帯の端部と付け根が鋭い。ヨコナデを基調とする。明褐色である。

#### 鉄鉢形土器(第159図、図版55)

1個体出土した。口径14.2cm、胴部復原径18.4cm、復原高12.5cmである。口縁部で半周以上が遺存するものの、胴部で接点がない。焼成は土師器であるが、黒斑はみとめられない。ロクロ成形で、外面ヘラケズリにより薄く仕上げられており、胴部付近では器壁厚2mmという薄さである。口縁部は厚手で、内側に突出し、突出部にはやや強いヨコナデが施される。底部は尖底気味に厚くなるが、底径2.2cm程度の平底に作られる。胎土は砂粒が極めて多く、白・黒雲母を含む。赤色スコリアは少ない。黄褐色である。

#### (3) 瓦塔の技法と位置づけ

塔A・塔Bは、表現や製作技法において、規則性や緻密性の面で若干の相違があるが、手法的に大きな違いはない。池田敏宏氏に拠れば、屋蓋表現は池田分類案<sup>(1)</sup>における、瓦が「幅狭工具押し引きA手法」、垂木が「ヘラ削り出しC1手法」をとる東山類型(埼玉県児玉郡美里村東山遺跡)、斗拱表現が高崎光司編年案<sup>(2)</sup>における谷津瓦塔(千葉県千葉市緑区谷津遺跡)併行に位置づけられる。ただし、東山類型にみられる通常の「ヘラ削り出しC1手法」よりも、谷津遺跡例を含む上西原類型(群馬県前橋市上西原遺跡)の「ヘラ削り出しC2手法」に近く、東山類型では新要素を含み、谷津遺跡例に近い年代であるとする<sup>(3)</sup>。上記案では、東山類型瓦塔は8世紀末～9世紀前半、谷津遺跡例は9世紀中葉ごろと指摘される。九重塔の類例はないが、馬込塔A・塔Bの技法は、ともにこのころに位置づけられる。

馬込瓦塔に伴う土器は少ない。鉄鉢形土器は瓦塔と焼成は異なる土師質であるが、明らかに伴う。仏教関連の活動が、瓦塔周辺で行われた証拠といえる。ほかに、グリッド出土土器として杯などが出土している(第149図5)。底部回転糸切り無調整の杯が含まれるので、存続期間はやや下る可能性もある。

馬込瓦塔2基の類似度は、同一遺跡での複数出土例で地域的にも近い、八千代市白幡前遺跡例と比較することで、推し量ることができる。白幡前遺跡では3塔と1堂が出土しており、3塔はすべて別地点から出土している。D159など住居跡出土瓦塔は、馬込瓦塔に類似し、表現や技法のほか、窯で褐色に焼く焼成面、胎土面でもよく似る。ただし、傾き調整のため垂木が削り落とされるなど、馬込例より粗雑な造りである。一方、D128出土瓦塔は、馬込例と同じ赤彩による表現があるものの、白色塗料による彩色も施され、瓦が太いなど表現的に差違がみられ、焼成は千葉産須恵器に特有のいわゆる「クスベ」焼成であ

る。また、溝のM034出土瓦塔は、軒先一節目はほぼ不規則な結節による瓦表現（幅状工具押し引きC手法）で、初軸には礎石表現があるなど、表現的な差違があるのに加え、淡い褐色で明瞭な黒斑がつく「野焼き」焼成によるもので、明瞭な違いが認識できる。このように、白幡前遺跡にみる複数出土例の個体差は明瞭である。一地域において入手される瓦塔が多様であったことを示す。これに比較すれば、馬込瓦塔2基の類似度は抜きんでている。産地の違いなどを考慮する必要はあるが、時間差を想定することはむしろ難しく、2基の同時性をこそ考慮するべきであろう。

製作地は県内窯資料が不足のため確定できない。ただし、馬込瓦塔の焼成、胎土の特徴は千葉市周辺の窯で焼かれたいわゆる千葉産須恵器とよく似る。白幡前遺跡のD128出土瓦塔が独特の焼成である点を考慮すれば、地元生産品の存在を認めてよい。とすれば、千葉産須恵器窯の興隆と瓦塔生産は無縁ではない。七重塔のモデルは明らかにしえない。地元生産の可能性を考慮するなら、付近に実在する寺として国分寺が思い当たるが、瓦塔表現は写実的でなく、むしろ焼き物の系譜の中で位置づけるべき特徴がある。

以上、馬込遺跡では、少なくとも瓦塔など2基以上（七重塔2基の蓋然性が高い）が配列された場所で、仏教関連の活動が行われた可能性があることを報告する。

註1 池田敏宏 1995 「瓦塔屋蓋部表現手法の検討—埼玉県児玉郡堂平遺跡採集瓦塔をめぐって—」『土曜考古』19土曜考古学会

池田敏宏 1996 「瓦塔屋蓋部編年試案—北武蔵6～8類瓦塔、類似資料を中心として—」『土曜考古』20土曜考古学会

池田敏宏 1999 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討—関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に—」『研究紀要』7 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

瓦「幅状工具押し引きA手法」 0.7cm以下の半截竹管工具で、軒先一節目のみ結節表現

「幅状工具押し引きB手法」 0.7cm以下の半截竹管工具で、結節表現なし

「幅状工具押し引きC手法」 0.7cm以下の半截竹管工具で、軒先一節目のほか不規則に結節表現

垂木「へら削り出しC1手法」 飛檐垂木を表現せず、一軒表現 垂木幅2cm、間隔2.5cm

「へら削り出しC2手法」 飛檐垂木を表現せず、一軒表現 垂木幅1cm、間隔1.2cm

2 高崎光司1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-3

3 池田敏宏氏ご教示による。

4 駒宮史朗・栗岡眞理子1994「瓦塔」埼玉県立歴史資料館

## 8 まとめ

以上が、本遺跡における奈良・平安時代遺構・遺物の内容である。

概要に記述したように、調査区内の遺構の分布に偏りがある。竪穴住居跡は北東端の谷部に面して位置し、掘立柱建物跡は、大きく2群に分かれ、北東端部と、中央やや北部に位置しているが、両者とも谷部に面して分布している。竪穴住居跡7軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡6棟の小規模な集落跡の様相である。時期としては、常陸産の須恵器ロクロ坏および須恵器横位叩き目甕、土師器非ロクロ坏および常総型甕がそれぞれ住居跡から出土し、これらは8世紀後半代と考えられる。

竪穴住居跡は一辺5m級と、3m～4m級および2m級に区分される。5m級は2軒（SI018・SI019・025）、3m～4m級は竪穴状遺構も含めると5軒（SI015・SI016・SI019・SI021・SI022）、2m級は1

軒 (083) である。また、カマドの位置から北カマド2軒 (SI018・SI019) と、西カマド4軒 (SI015・SI017・SI021・SI022)、隅カマド1軒 (SI020) に区分される。しかし、位置関係からSI017とSI019が同時に存在したとは考えにくいので、東北端部の竪穴住居跡は、大きさとは別に、北カマドの住居跡2軒と、西カマドの住居跡3軒に分けられる。また、隅カマド住居跡と竪穴状遺構は辺の方位から西カマド住居跡の群に区分されると思われ、やや離れて位置する竪穴住居跡 (SI015) はカマドの位置から西カマドに区分される。この区分は、西カマド住居跡からは、土師器常総型甕の流れで、ヘラナデが消えたもの (SI017-19)、房総産須恵器甕で5孔のもの (SI022-1) など、北カマドよりも新しい様相が見られることなど、出土遺物からも妥当と思われる。また、これらの遺物は9世紀初めと考えられる。掘立柱建物跡はSB004が北カマド住居跡SI018と重複し、掘立柱建物跡が新しいと考えられる。規模は2間×1間 (SB002)、2間×2間 (SB003・SB004・SB005・SB006)、3間×2間 (SB001) で、竪穴住居跡に伴って、奈良・平安時代集落跡に多く検出される規模である。

よって、集落の変遷としては、8世紀後半代に北カマド住居跡の集落が成立し、西カマド住居跡および掘立柱建物跡群に移行しながら、9世紀初めにかけて営まれたと考えられる。しかし、調査区の北東隣には未調査の小舌状台地が広がっているので、この地区に集落が展開している可能性は大きい。

以上が遺構から見た奈良・平安時代の様相であるが、遺物からは別の様相が見られる。それは、仏教関連遺跡の様相である。遺物として、2基の瓦塔が鉄鉢形土器を伴って出土している。遺物についての詳細は前述のとおりであるので、ここでは、遺構との関係を若干述べることにする。

概要で記述したように、遺構は検出されていない。また、住居跡等の遺物にも仏教的なものは確認されなかった。瓦塔及び鉄鉢形土器が出土した位置付近の遺構としては、掘立柱建物跡SB002がある。規模は、2間×1間と小規模である。また、瓦塔の出土範囲は調査区北東の境界を越えて未調査区にまで広がるので、未調査区に遺構が存在すると考えられる。しかし、掘立柱建物跡SB002の位置が調査区の北東境に接していることをから、SB002をさらに規模の大きな掘立柱建物跡の一部と考えることも可能である。大きな掘立柱建物跡の一部と考えるならば、SB002は南側の底部分であると思われる。底を持つ掘立柱建物跡は、集落の中で、仏教に関連した「堂」と考えられるものもある。よって、SB002は瓦塔等を安置した建物の一部であるとも考えられる。

どちらにしても、調査区北東隣の小舌状台地は瓦塔に関連した遺構および、瓦塔の残りを含めた遺物 (瓦堂等) が存在する可能性は非常に大きいので、この地区の取り扱いには極めて慎重でなければならぬと考えられる。

第11表 奈良・平安時代遺物観察表

群	遺物	番号	注 記	器 種	器 形	口 径	底 径	器 高	底 径	器 容	器 質	色 澤	色 澤	土 質	産 人 物	調査内容	調査結果	調査者	備 考		
145	5815	1	3	土師器	坏	15.4	9.2	3.8	70	焼	赤褐色	黄	赤褐色	黄	石、灰石、砂鉄多、赤色スコリア少	ヨコナテ、ハラナテ	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	手持ちヘラケズリ、ハラナテ	手持ちヘラケズリ、ハラナテ	ヨコナテ使用	
		2	1	土師器	甕	-	-	-	-	焼	赤褐色	黄	赤褐色	黄	砂鉄多	ヨコナテ	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ				
		3	1,6	土師器	甕	-	-	-	-	焼	赤褐色	黄	赤褐色	黄	砂鉄多	ヨコナテ	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ				
		4	5	土師器	甕	-	-	-	-	焼	赤褐色	黄	赤褐色	黄	砂鉄多	ナテ	手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ			
	5816	5	1	土師器	坏	-	-	-	-	焼	赤褐色	黄	赤褐色	黄	砂鉄多	ナテ	手持ちヘラケズリ、ヨコナテ	手持ちヘラケズリ			
		6	2	甕文土師	坏	-	-	-	-	赤褐色	赤褐色	黄	赤褐色	黄	砂鉄	ナテ	瓦、瓦文				
		7	3	土師器	支那	-	-	-	-	-	赤褐色	赤褐色	黄	赤褐色	黄	砂鉄	ナテ				
		8	3	土師器	支那	-	-	-	-	-	赤褐色	赤褐色	黄	赤褐色	黄	砂鉄	ナテ				
	5819	9	1	土師器	2ニチュア土師	6.8	7.2	5.8	80	赤褐色	赤褐色	黄	赤褐色	黄	石、灰石、砂鉄多、赤色スコリア	ヨコナテ	ナテ、ヨコナテ、ハラナテ	奈良県			
	146	5817	41		須恵器	甕	15.0	-	2.9	30	灰	灰	黄	黄	黄	石、灰石、白砂鉄多	ナテ	須恵ヘラケズリ、ナテ			
2			1,30	須恵器	甕	15.0	-	2.6	30	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
3			1,2,61,62,27-35-1	須恵器	甕	15.1	-	2.6	30	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
4			1	須恵器	甕	16.0	-	1.9	20	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
5			5,41,44	須恵器	坏	12.9	7.4	4.1	60	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
6			29,43	須恵器	坏	13.5	8	4.0	80	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
7			024-2.1,45,025-31,42	須恵器	坏	13.8	8.4	4.0	60	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
8			1,2,3,4	須恵器	坏	14.4	8	4.0	40	黄褐色	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
9			1,2,3,7,7,7,4	須恵器	坏	14.1	8	4.1	40	黄褐色	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
10			024-2.1,45,025-31,42	須恵器	坏	13.8	8.4	4.0	60	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
11			2,3,42	須恵器	坏	14.0	7.8	4.0	10	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
12			2,3	須恵器	坏	14.0	7.6	3.7	10	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
13			2,49	土師器	高台付甕	10.4	7	5.0	10	黄褐色	灰白	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
14			1,2,1,54,63,70,74	須恵器	高台付甕	16.4	9.8	4.0	10	黄褐色	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
15			1,2	須恵器	高台付甕	20.2	-	2.5	10	灰褐色	灰褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
16			3	土師器	坏	13.4	9.8	3.4	30	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
17			6,36,48	須恵器	甕	-	-	7.3	10	灰	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
18			55	須恵器	甕	-	-	8.1	10	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
19			024-1.1,4,11,17,18,20,21,25,26,27,28,31,32,34,36,37,39,41,42,44,46,47,49,026-4.1,5,17,44,27-35-1	土師器	甕	21.6	-	30.5	50	黄褐色	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄
20	23,28	土師器	小甕	15.4	-	5.5	30	黄	赤褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		
21	1	土師器	小甕	13.0	-	4.4	30	黄褐色	赤褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		
22	45	土師器	小甕	13.0	-	4.9	30	黄褐色	赤褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		
23	56	土師器	甕	-	-	3.6	10	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		
24	024-1.7,27-35-1	土師器	甕	7.2	-	4.9	70	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		
5818	8		須恵器	坏	11.4	6	3.6	20	黄褐色	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		
	2	5,27	須恵器	坏	13.8	8.2	3.9	60	黄褐色	黄褐色	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		
	3	2,30	須恵器	坏	13.5	-	3.8	30	灰	灰	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄	黄		

種別	品名	規格	単位	数量	口徑	高さ	部高	容積 %	全高 高さ	全高 径	仕上	塗入物	調剤内容	調剤箇所	その他 備考・調整	備考	
146	S104	4 19	調整部	蓋	23.2	-	3.2	28	灰白	灰白	滑	石膏・炭石・砂粒・ 砂粉少	ナア	ナア			
		5 27	調整部	調整	-	-	8.6	10	灰白	灰白	滑	石膏・砂粒多、石膏・ 炭石	ナア	ナア			
		6 18	土締部	小調整	12.4	-	6.6	30	黒黒	滑	滑	石膏多、石膏・炭石・ 砂粒	ナア・ヘラナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ			
		7 2.48	土締部	蓋	-	-	7.3	10	黒	滑	滑	石膏・炭石・白色封 装粉・炭粉、スクリ ア少	ナア・ヘラナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ			
		8 2	土締部	蓋	-	-	5.1	10	深黒	深黒	滑	石膏・炭石・炭粉 多	ナア・ヘラナア	ナア・ヘラナア			
147	S109	9 2.82, 5.64, 8.46, 11.28, 14.10, 16.92	土締部	蓋	-	-	27.9	30	黒	滑	滑	石膏・炭石・砂粒・ スクリア少、炭粉	ナア・ヘラナア	ヘラナア・ミダキ			
		1 1.05, 1.05, 2.10, 3.15	調整部	高付調整	23.0	13	44.2	19	灰黒	灰黒	滑	石膏・炭石・炭粉・ 砂粒多	ナア	ナア・ヘラナズリ	調整ヘラナズリ・ナ ア		
		2 2.35, 3.6	土締部	坪	12.5	8.6	3.9	10	暗黒	暗黒	滑	石膏・炭石・砂粒 多、スクリア少	ナア・ミダキ	ヘラナズリ・ミダ キ・ナア	多持ちヘラナズ リ・ミダキ		
		3 4.13, 14.46	土締部	蓋	19.2	-	6.9	30	黒	滑	滑	石膏・炭石・炭粉・ 砂粒多、スクリア少	ナア・ヘラナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ			
		4 3.4, 15.25, 46.75	調整部	蓋	-	-	11.9	10	灰	暗黒	滑	石膏・炭石・炭粉・ 砂粒多	ヘラナア	ナア・手持ちヘ ラナズリ			
		5 24	土締部	蓋	-	-	6.3	10	黒	滑	滑	石膏・炭石多、炭 粉・砂粒、スクリ ア少	ナア・ヘラナア	ナア・ヘラナア			
		6 4	土締部	蓋	22.4	-	1.45	20	黒	滑	滑	石膏・炭石少、白 色封装粉、炭粉、炭 粉、スクリア多	ナア	ナア			
		7 0.09-2.05-1.5, 3.6, 4.5, 5.7, 6.3, 7.1, 7.2, 7.3, 7.9, 8.6, 9.9	土締部	蓋	-	-	18.2	60	深黒	深黒	滑	炭粉・スクリア少、 多、砂粒少、石膏・ 炭石少	暗黒	ナア・暗黒			
8 1.29, 47.61, 64.76, 71.4	土締部	蓋	-	-	20.8	10	黒	滑	滑	石膏・炭石・炭粉 多、砂粒、スクリ ア少	ヘラナア	ミダキ・ヘラナア					
148	S102	1 1.2, 3	調整部	坪	13.8	7.6	3.9	100	灰	灰	滑	石膏・炭石多、炭粉 多、砂粒、白色封 装粉少	ナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ	手持ちヘラナズリ		
		2 25	調整部	坪	14.3	7.7	3.8	70	灰黒	灰	滑	石膏・炭石多、砂 粒、白色封装粉少	ナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ	調整ヘラナズリ		
149	S102	3 13	調整部	坪	11.5	6.9	3.7	30	灰	灰	滑	石膏・炭石少、炭 粉、砂粒	ナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ	手持ちヘラナズリ		
		4 1.1, 1.18, 23.35, 37.0	土締部	蓋	-	7.2	5.2	60	赤黒	赤黒	滑	石膏・炭石多、炭 粉、砂粒	ヘラナア	ミダキ・ナア	ミダキ・ナア		
		5 4.17, 35, 37.5	土締部	小調整	-	7.8	7.9	30	赤黒	赤黒	滑	石膏・炭石・砂粒多	ヘラナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ	手持ちヘラナズリ		
		6 4.8, 8.1, 22, 22.1, 24.2, 25, 26, 31, 34, 35, 36, 31	土締部	小調整	16.2	8.2	19.5	70	暗黒	黒	滑	石膏・炭石・炭粉・ 砂粒・スクリア多	ナア・ヘラナア	ナア・手持ちヘラ ナズリ	ナア・手持ちヘラ ナズリ		
		7 1.4, 5	調整部	蓋	-	14.2	8.5	30	暗黒	黒	滑	石膏・炭石・スクリ ア少、炭粉多、砂粒 少	ナア・手持ち ヘラナズリ	手持ちヘラナズリ	手持ちヘラナズリ		
		8 3.23, 30	土締部	蓋	20.0	-	-	10	黒	滑	滑	石膏・炭石・炭粉・ 砂粒多、スクリ ア少	ナア・ヘラナア	ナア・ヘラナア	ナア・手持ち ヘラナズリ		
149	S102	9 30, 30	土締部	小調整	-	6.5	8.7	50	赤黒	赤黒	滑	石膏・炭石・砂粒 多、白色封装粉少	ヘラナア	手持ちヘラナズリ			
		4 1.4, 6, 19	土締部	蓋	-	-	10.5	10	黒	暗黒	滑	石膏・炭石多、炭 粉・砂粒、スクリ ア少	ヘラナア	ミダキ			
		5 29	土締部	小調整	-	7.5	4.1	30	暗黒	黒	滑	石膏・炭石・砂粒 、スクリア少、白色封 装粉少	ヘラナア	手持ちヘラナズリ	手持ちヘラナズリ		
		6	調整品	刀子	長さ14.6 厚さ0.6	幅 1.1	厚さ 0.1	長さ 1.0	厚さ 0.2	長さ 1.0	厚さ 0.25	100					
		7	調整品	刀子	長さ10	幅1.4	厚さ1.1	長さ1.0	厚さ0.2	長さ1.0	厚さ0.25	100					
		8	調整品	刀子	長さ5.0	幅0.75	厚さ0.4	長さ0.4	厚さ0.25	長さ0.4	厚さ0.25	100					
		1 2	調整部	蓋	19.6	-	-	5.15	60	灰	灰	滑	石膏・炭石・炭粉・ 砂粒	ヨコナア	調整ヘラナズリ、 ヨコナア	調整ヘラナズリ、 ヨコナア	
		2 2	調整部	坪	17.8	11.7	7.2	95	灰	灰	滑	石膏・炭石・炭粉・ 砂粒	ヨコナア	ヨコナア	調整ヘラナズリ、 ヨコナア		
149	S102	3 12, 33	土締部	坪	16.4	-	3.95	60	暗黒	暗黒	滑	石膏・炭石・砂粒・ スクリア少、白色封 装粉多	ヨコナア、ヘ ラナズリ	ヨコナア、手持ち ヘラナズリ、ヘラ ミダキ	丸底	ヘラミダキ [x]	
		4 12	土締部	坪	12.5	8.1	2.95	50	黒	黒	滑	石膏・炭石・砂粒・ 炭色スクリア多	ヨコナア、ヘ ラナズリ	ヨコナア、手持ち ヘラナズリ	手持ちヘラナズリ		

種類	品名	番号	注 記	製 法	器 形	口 径	底 径	器 高	口径 %	色別 内径	色別 外径	熟 土	属 入 物	調整内径	調整外径	流通等 番号・調整	備 考
109	1F-66	5	6		土師器	坏	13.8	7.2	3.9	20	深黒	深黒	石灰・灰石・赤鉄多、赤色スクリア少	ココナテ	ココナテ	調整外径あり	
	3D-51	6	1		土師器	小壺	13.2	-	-	10	深黒	深黒	石灰・灰石・赤鉄、赤色スクリア全	ココナテ、ヘラナテ	ココナテ、ヘラナテの継ナテ		
	1F-97	7	1		土師器	甕	-	-	-	-	黒	黒	石灰・灰石・赤鉄、赤色スクリア、白鉄片状物少・赤鉄全	ココナテ、ヘラナテ	ココナテ、調整ヘラナテ		外部調整番号なし
	1F-02	8	1		土師器	甕	-	-	-	-	黒	黒	石灰・灰石・赤色スクリア、白鉄片状物少・銅等、赤鉄全	ココナテ、ヘラナテ	ココナテ		外部調整番号なし
	1F-75	9			土師器	坏	-	-	-	-	黒	黒	石灰・灰石・赤色スクリア、白鉄片状物少・銅等、赤鉄全	ココナテ	調整ヘラナテ	調整外径あり、調整ヘラナテ	外部調整番号なし
	3D-23	10	1		土師器	甕	-	-	-	-	黒	黒	石灰・灰石・赤鉄全	ヘラナテ	手持ちヘラナテ		調整外径番号なし
	1F-31	11	6		土師器	子甕	2.8	3.8	2.2	100	深黒	深黒	石灰・灰石・赤鉄少	ココナテ	ココナテ		
	1E-69	12	1		土師器	埴土製品	-	-	-	-	黒	黒	石灰・灰石・赤鉄全		手持ちヘラナテ		
	3F-23	13	1		土師器	土玉	3.2	-	3.1	100	黒	黒	赤鉄全		ナテ		
	3D-28	14	1		土師器	土玉	-	-	3.5	40	深黒	深黒	赤鉄全		ナテ		

第12表 奈良・平安時代以降砥石計測表

No	押印	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	旧遺構番号	新遺構番号	備考
					cm	cm	cm	g			
1	1	024-0019	砥石	流紋岩	8.79	6.57	2.4	202.3	24	SI018	
2	2	121-0016	砥石	砂岩	8.75	5.49	1.3	96.92	121	SI022	
3	3	017-0002	砥石	流紋岩	19.10	4.20	3.9	548.03	17	SK096	
4	4	025-0005	砥石	流紋岩	8.01	3.92	2.5	90.37	25	SI019	025-40と接合
		025-0040									025-5と接合
5	5	019-0001	砥石	粘板岩	3.90	2.84	0.4	5.36	19	SD004	
6	6	002-0007	砥石	流紋岩	9.80	2.89	3.3	116.26	2	SD002	
7	7	2F08-0020	砥石	緑泥片岩	10.61	4.44	2.4	162.6			
8	8	1F40-0013	砥石	砂岩	10.10	6.55	1.3	129.05			
9	9	3F06-0001	砥石	安山岩	7.70	5.18	1.7	65.82			
10	10	1F33-0001	砥石	砂岩	7.15	5.18	1.3	62.81			1F44-1と接合
		1F44-0001									1F33-1と接合
11	11	1F85-0001	砥石	砂岩	7.45	6.15	0.7	37.93			1F97-1と接合
		1F97-0001									1F85-1と接合
12	12	016-0002	砥石	砂岩	7.70	5.15	1.2	43.66	16	-	
13	13	1F85-0013	砥石	凝灰岩	4.33	4.47	3.3	62.21			
14	14	1F85-0003	砥石	砂岩	11.77	8.21	4.8	525.33			

## 第6節 中・近世

### 1 概要

本遺跡における中・近世の遺構は、地下式坑6基、障子堀状遺構1か所、野馬土手1条、溝（野馬堀）1条が検出された。遺物はあまり多くないが、陶磁器類が検出されている。

### 2 地下式坑

#### SK096（第160図、図版21）

2F-36グリッド付近に位置する。確認面の平面形は不整形であるが、本来は円形ないし半円形であったと思われる。入り口から段を経て地下室へと向かう構造である。地下室は長方形で、底面の長軸が2.8m、短軸が1.3mほどである。地下室本来の高さは天井部が崩落しているため不明である。だが、断面形態から天井はドーム状であったと思われる。その際の推定高は210cm前後と思われる。底面から確認面までの高さは約2.4mである。

#### SK097（第160図、図版21）

2F-58グリッド付近に位置する。確認面の平面形は円形をなしているが、本来はもっと小さな円形であったと思われる。入り口から段を経て地下室へと向かう構造である。地下室は長方形で、底面の長軸が2.0m、短軸が1.4mほどである。天井はドーム状であったと思われるが、ほぼ完全に天井が崩落しているため、不明点が多い。底面から確認面までの高さは約2.0mである。

#### SK098（遺構：第161図・図版21）

3F-10グリッド付近に位置する。確認面の平面形は不整形である。入り口から段を経て地下室へと向かう構造であると思われるが、天井及び側壁の崩落が激しく本来の形状が判然としない。地下室部分の底面形状は正方形に近い長方形で、長軸が2.2m、短軸が1.9mほどである。底面から確認面までの高さは約2.7mである。

遺物は1点のみが出土した（第166図5）。5は瓶である。最下部付近には粗いケズリが施される。胎土には粗砂粒が大量に混入されている。

#### SK099（第161図、図版21）

1E-86グリッド付近に位置する。確認面の平面形は不整形である。入り口から急な階段を経て地下室へと向かう構造であると思われるが、天井及び側壁の崩落が激しく本来の形状が判然としない。地下室部分の底面形状は長方形で、長軸が2.0m、短軸が1.7mほどである。底面から確認面までの高さは約3.2mである。

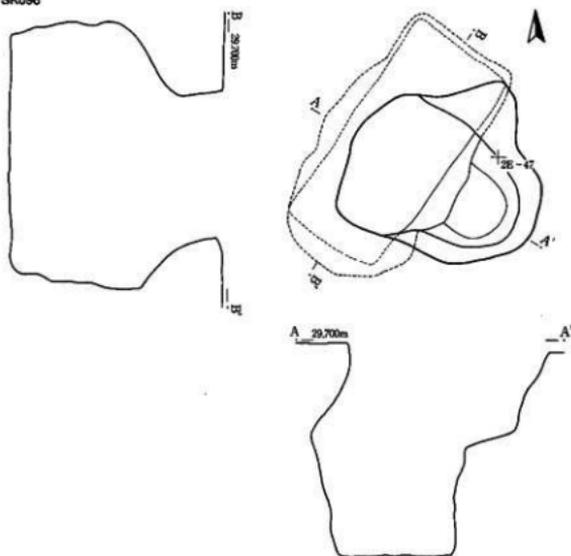
#### SK100（第162図、図版21）

3E-26グリッド付近に位置する。確認面の平面形は不整形である。入り口から直接に地下室へと向かう構造であると思われるが、天井及び側壁の崩落が激しく本来の形状が判然としない。地下室部分の底面形状は歪みのある方形で、長軸が2.7m、短軸が2.2mほどである。底面から確認面までの高さは約2.4mである。

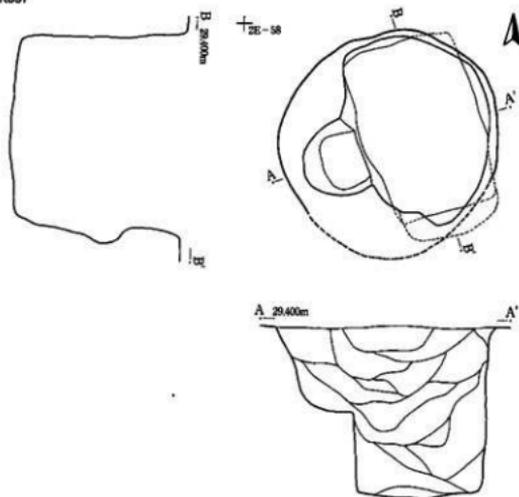
#### SK101（第162図、図版21）

1E-87グリッド付近に位置する。確認面の平面形は不整形であるが、本来は半円形であったと思われる。入り口から段を経て地下室へと向かう構造である。地下室部分の底面形状は長方形で、長軸が2.5m、短軸が1.6mほどである。天井はドーム状であったと思われるが、天井部分の崩落が激しく判然としない。

SK096

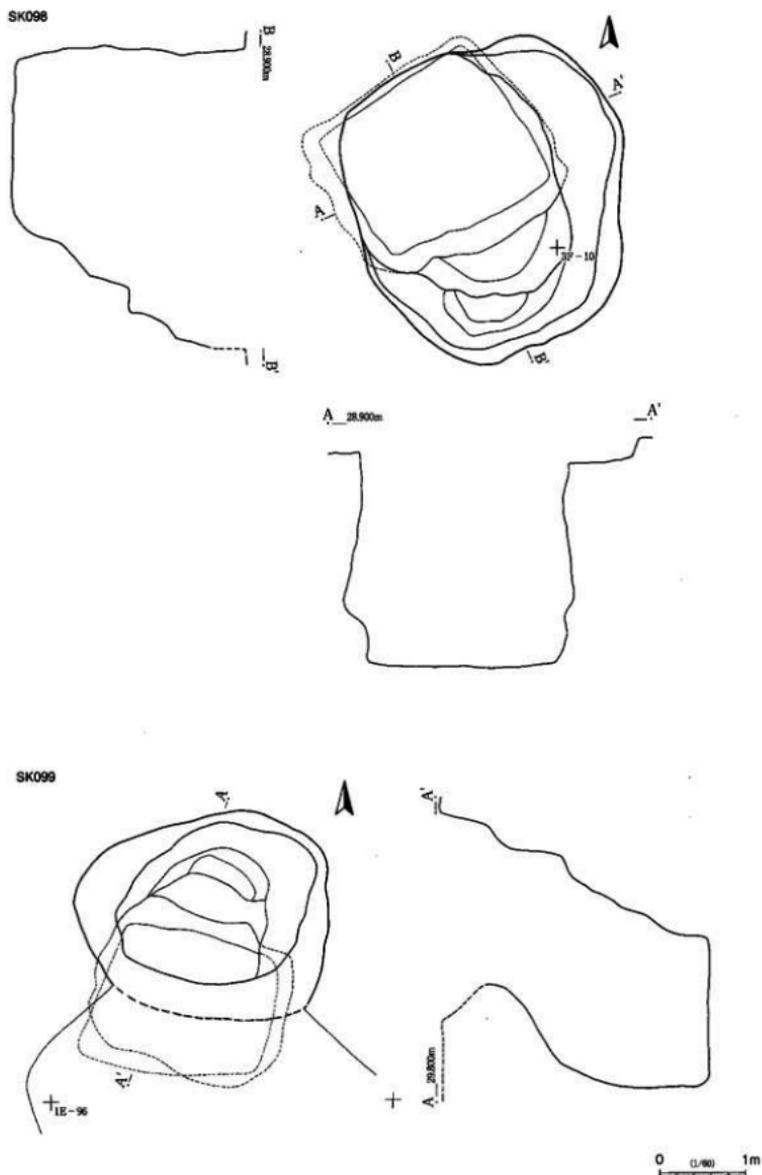


SK097



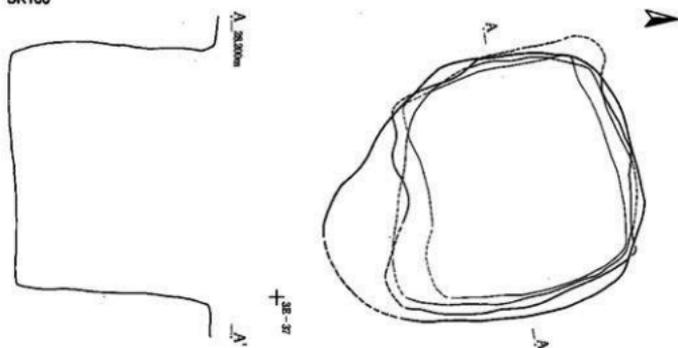
0 (1/400) 1m

第160图 地下式坑(1)

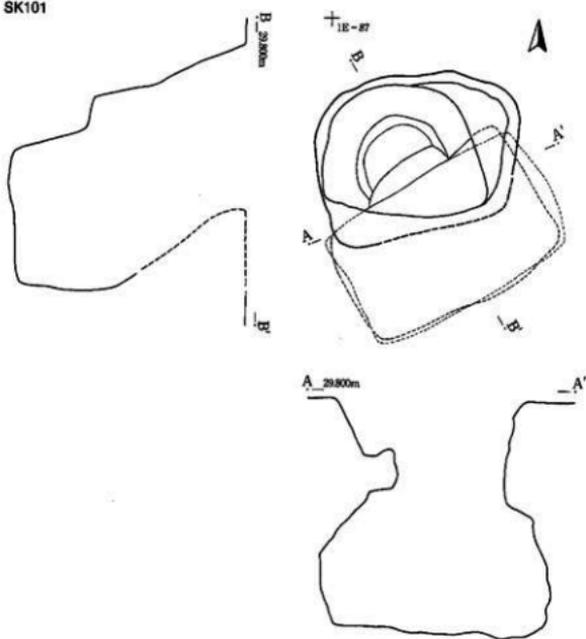


第161圖 地下式坑(2)

SK100



SK101



0 (1/60) 1m

第162图 地下式坑(3)

底面から確認面までの高さは約2.8mである。

### 3 障子堀状遺構

SD001（遺構：第163図・図版22）

1F-42グリッド付近に位置する。北東側が調査区外となるため全体の形状は不明である。北西側を見て逆「コ」の字状に折れ曲がるが、南東側へ3mほど伸びたところ（一区画分）で途切れてしまう。各区画の深さは1.6mほどである。

遺物は3点を図示した（第166図2～4）。2は土師質土器である。ロクロ整形で、底面は回転糸切り離しである。3は瀬戸・美濃産で緑釉の挟み皿である。大窯Ⅰ期（15世紀末～16世紀初頭）に相当する。4は内耳土器の口縁部片である。

### 4 野馬土手・野馬堀

SA001・SD002（第164・165図、図版21・22）

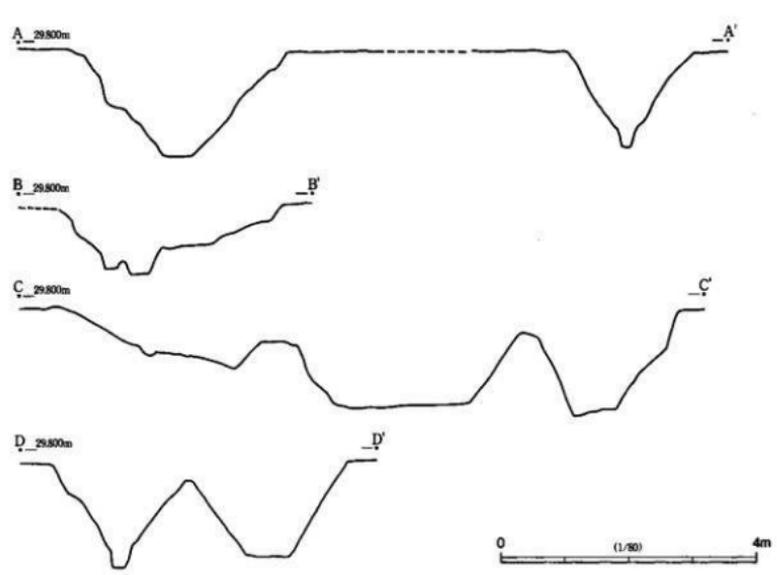
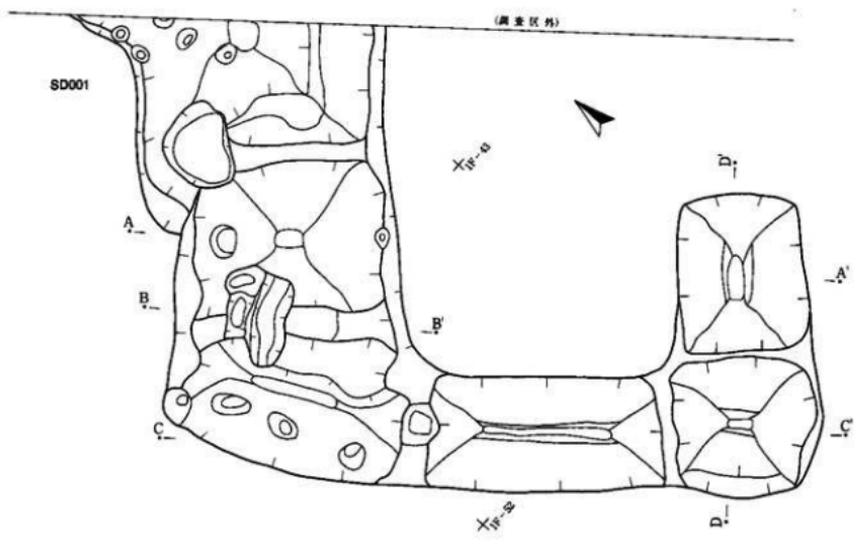
4E-80グリッド付近から5F-66グリッド付近にかけて、高さ1.5mほどの盛り上がり、深さ1mほどの溝状の落ち込みを確認し、その規模及び形状から野馬土手（SA001）及び野馬堀（SD002）と推定した。西側は、4D-68グリッド付近まではほぼ真直ぐに伸びることが確認できるが、その付近で続きが見えなくなってしまう。だが3D-73付近から3D-31付近にかけて溝が検出され、これが野馬堀の続きと推定される。従って、4D-68付近で方向が北北西へと変化すると思われる。SD002の幅は2.7m～3.0mほどで、底面は凹凸に富み、最大深度は0.7mほどである。

遺物はSD002の覆土中より、第166図1のみを検出した。1は瀬戸・美濃産の染付碗である。18世紀後半～19世紀にかけての所産と考えられる。

### 5 遺構外出土遺物（第167・168図、第12表）

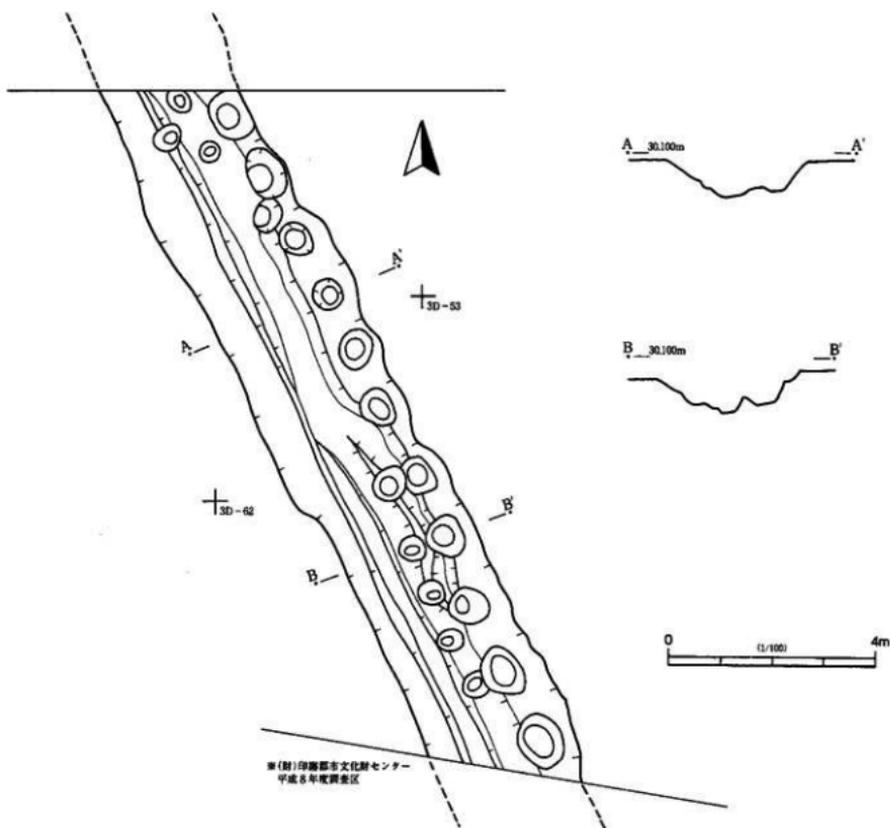
第167図1は白磁皿である。15世紀前半を中心とする15世紀代の所産と考えられる。2は瀬戸・美濃産で緑釉の小皿である。古瀬戸後Ⅲ期（15世紀前葉）に相当する。3は土師質土器である。底面は回転糸切り離しされている。内面の一部に黒彩の痕跡が見られる。4・5は陶質の内耳土器である。6～10は陶質の摺り鉢である。8は酸化焰焼成のもので、内外面とも褐色である。在地系で、15世紀後半～17世紀の所産と考えられる。10は鉄釉を確認するが、時期不詳である。

第168図1～12は銭貨である。1～5・11は寛永通宝、6～10はいわゆる渡来銭である。12も渡来銭であると思われるが、破損のため明確でない。なお、6・7の存在から、第2図の近世溝の中には、中世から存続したものを含むか、中世遺構と切りあうものを含む可能性があることを付記しておく。



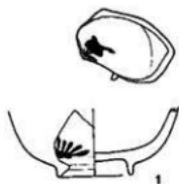
第163図 障子堀状遺構



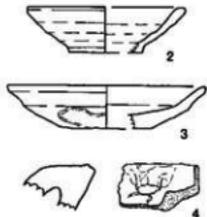


第165図 野馬堀 (SD002)

SD002



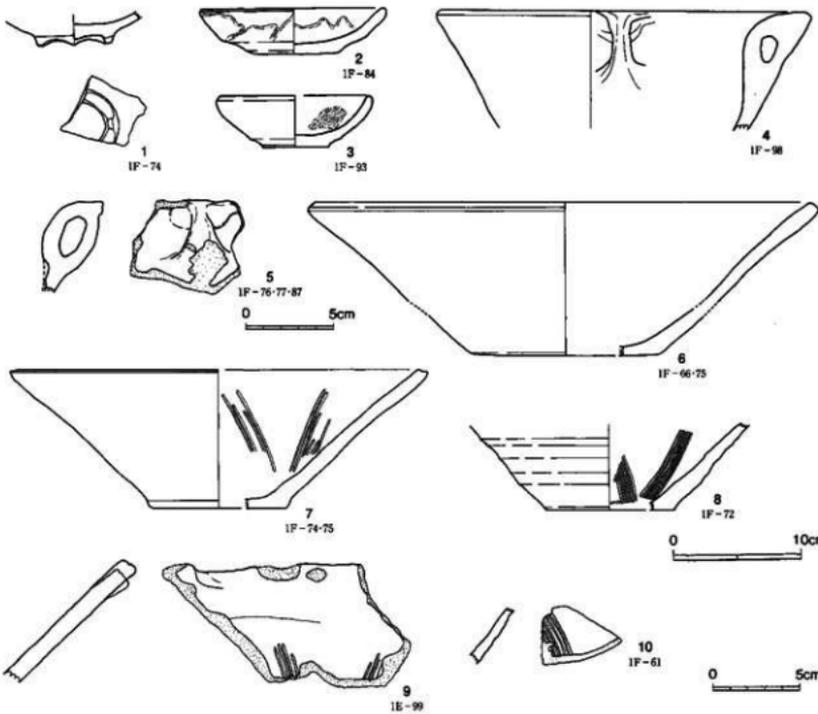
SD001



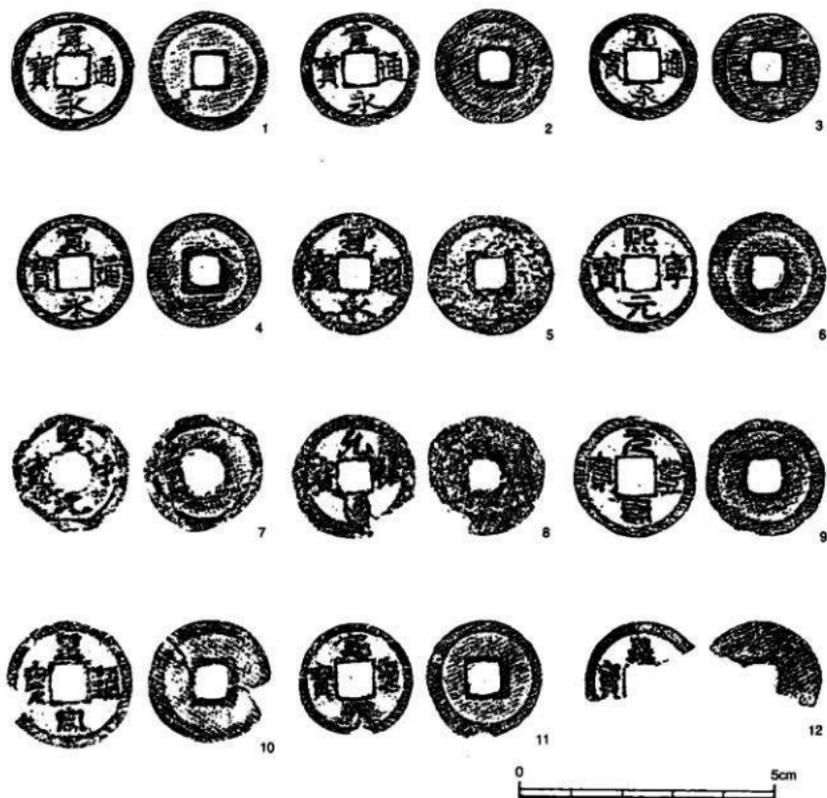
SK098



第166図 中・近世遺構内出土遺物



第167図 中・近世遺構外出土遺物



第168圖 錢 貨

第13表 錢貨計測表

番号	遺構・等	遺物No.	縁外径 (mm)	縁内径 (mm)	郭外径 (mm)	郭内長 (mm)	質量 (g)	備考
1	(近世溝)	0006	24.3	19.4	7.4	6.0	2.83	
2	(近世溝)	0006	23.9	18.4	7.9	6.1	2.81	
3	(近世溝)	0006	22.0	16.5	7.5	5.9	1.83	
4	025	0005	22.8	19.1	7.4	5.8	2.78	
5	025	0007	24.7	19.1	8.0	5.9	3.57	
6	(近世溝)	0012	24.5	19.3	8.1	6.1	2.66	

番号	遺構・等	遺物No.	縁外径 (mm)	縁内径 (mm)	郭外径 (mm)	郭内長 (mm)	質量 (g)	備考
7	(近世溝)	0017	23.5	17.8	-	7.2	2.02	
8		0001	24.6	18.7	8.0	6.7	2.47	
9	IF-85	0019	24.2	19.6	8.2	6.5	2.63	
10	SK100	0003	24.9	20.3	8.4	6.5	1.86	
11	3F-15	0003	23.0	19.1	7.9	6.4	2.92	
12		0001	-	-	-	-	1.04	

### 第3章 結 語

本遺跡は、平成8年度に財団法人印旛郡市文化財センターが一部確認調査を実施し、同9年度より当センターが本格的に調査を開始、同10年度～15年度の長期間にわたって発掘・整理作業をすすめてきた。その結果、古くは旧石器時代の石器群から新しいものでは江戸時代の野馬土手に至るまで各時代の遺構・遺物が発見されるに及んだ。遺跡の主体は縄文時代中期末葉から後期前半にかけての遺構・遺物群であったが、他に旧石器時代の石刃石器群、奈良・平安時代の瓦塔あるいは寺院関連といったような貴重な遺物も検出された。このような点を考慮すれば、本遺跡の調査は学術的な資料の提供とともに地域文化の解明という観点からも多大な成果をもたらした。以下、主な遺構・遺物について簡単にまとめておきたい。

旧石器時代石器群の調査は近隣でも二、三の報告例があり、本文中で触れているように石刃状の剥片が多く検出されている。使用された石材は黒曜石・硬質頁岩等であり、その母岩は想像以上に大きいものであった。むしろこれらの原石は他地域から搬入されたものであり、交易あるいは人びとの移動といった観点から興味のもたれる問題でもある。原石、特に黒曜石の原産地特定はその一助ともなろう。次に縄文時代の遺構・遺物についてみると、その中心は中期末葉から後期初頭にあり、土器型式でいえば加曾利E式の最終段階から後期初頭の称名寺式にあった。とりわけ住居跡・土坑といった遺構では加曾利E式終末期のものが主体となっており、後期に至ると徐々に遺物量も減少してくる。なかでも土器群についてみると、最盛期にあたる中期末葉から後期初頭にかけては豊富な出土が認められ、本地域での基準的な資料ともなり得る土器群であり、集落の構成はそれをよく物語っているとえよう。次いで時代は弥生後期に移行するが、ここでは数軒の住居跡と僅少な土器が出土したにとどまり、その内容を把握するまでには至らなかった。だが、ここでも一定程度の南関東系の土器群が存在し、壺形土器の広範囲な分布が確認されている。さらに奈良・平安時代に下ると、遺構・遺物は、縄文時代に次ぐものであり、住居跡7軒の他に6棟の掘立柱建物跡が検出された。遺跡全体の調査ではないため、その全容を語ることはできないが比較的大きな集落が成立していたことは想像できよう。さらにこの時期に伴う遺物として、2基の瓦塔と鉄鉢の出土はこの調査の大きな成果といえよう。惜しむらくは、瓦塔の散布範囲が調査区外にも及んでいたことであろう。このことから本遺跡における未掘部分から寺院跡に関係する遺構等の発見も考慮されよう。また瓦塔は、整理作業の過程で部材の遺存、部位等から七重の塔となる可能性が強くなったため、復原には一層慎重にならざるを得ず、検討・推考を重ねることと相成った。一般的には塔は、五重で構成される場合が多く、周辺での出土例も五重を想定した復原例が知られるところである。だが瓦塔についていうならば完形品に近い形で出土することは少なく推定部分の多い遺物でもあり、類例の出土を待ちたい。最後に中・近世について触れると、地下式坑あるいは野馬土手・野馬堀等の遺構が検出されたが、これらの遺構に伴う遺物は少なく中世末の土師質土器や陶器の類、近世に至っては柴付・銭貨等の遺物がみられる程度となる。また周辺でも近世牧跡が各所で確認されており、ここでの所在も一連の遺構として把握できよう。

以上のように本遺跡の調査は、問題点を提起しつつも大きな成果をあげることができた。この結果、本遺跡は地域史を語るうえで欠くことのできない遺跡の一つに数えられ、学術的価値の高い遺跡として評価できるものと考えられる。

# 写 真 图 版



新築地

馬場跡



調査状況等



調査前風景（平成9年度）



確認調査風景（平成9年度）



調査区空中写真（平成9年度）

11A-44付近  
(第3地点)



10A-88付近  
(第1地点)



11A-89付近  
(第4地点)

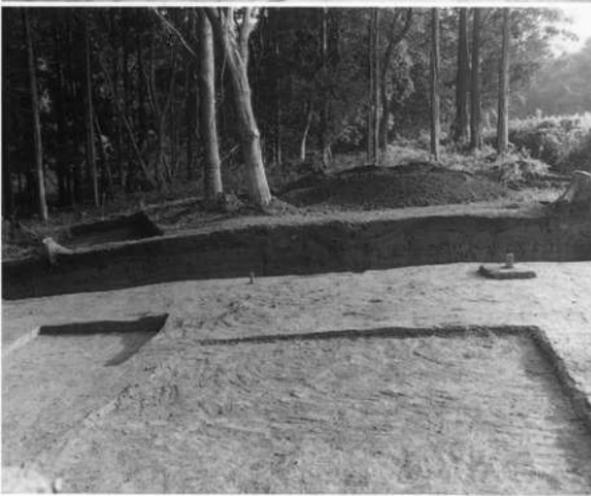




11B-55付近  
(第5地点)

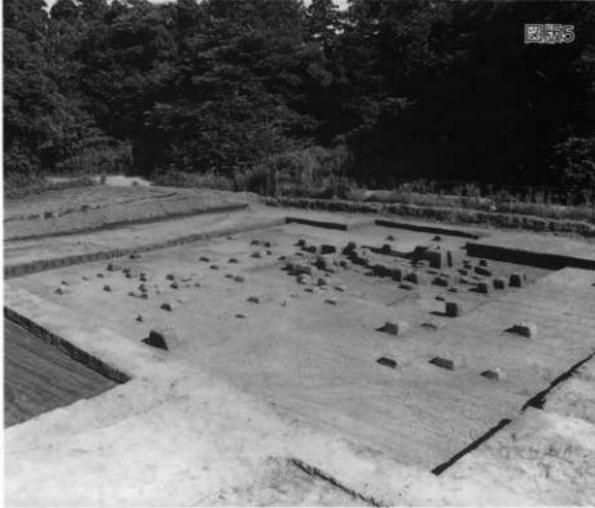


11B-56付近  
(第5地点)

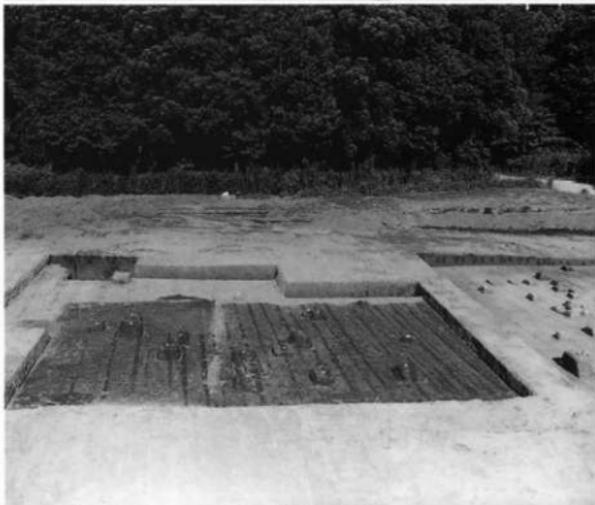


11B-55付近  
土層堆積状況

12B50 ~ 13B00周辺  
(第6地点)



12B50 ~ 13B00周辺  
(第6地点)



12B50 ~ 13B00周辺  
(第6地点)

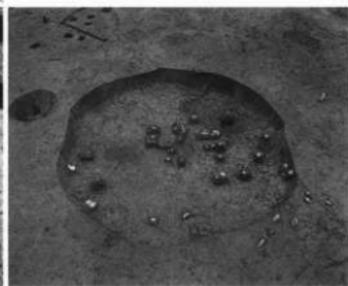




SI001



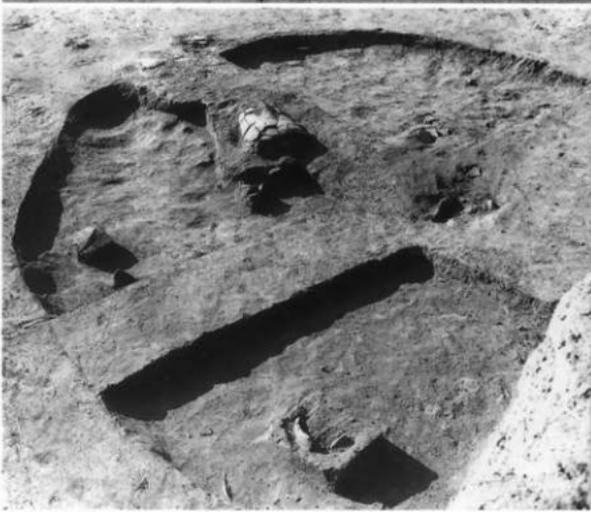
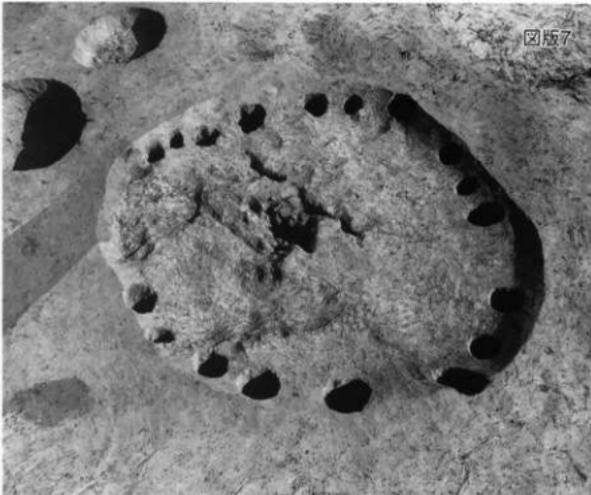
SI002



SI003



SI004



SI005



SI006

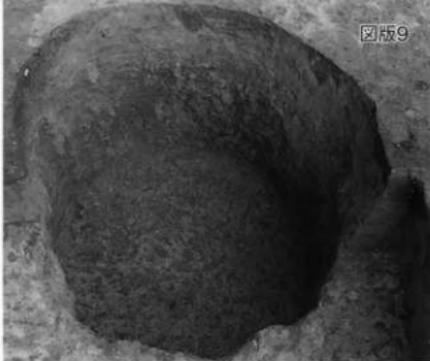


SI007

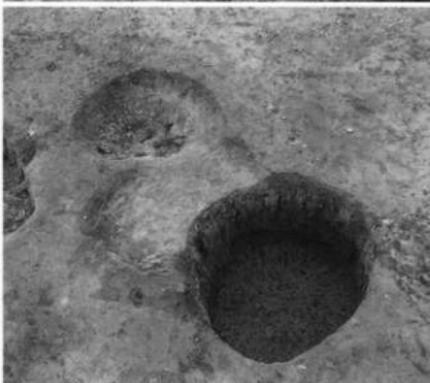
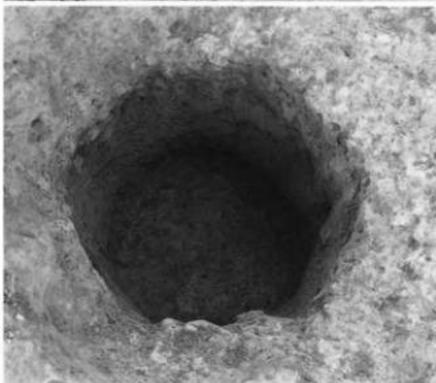


SI008

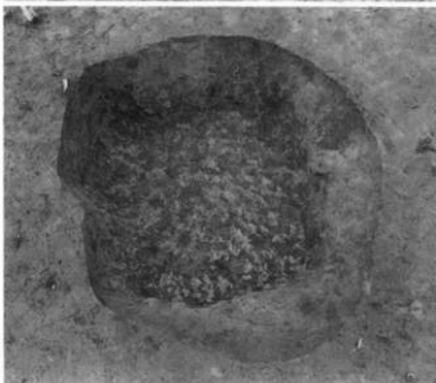
SK001 (左)  
SK004 (右)



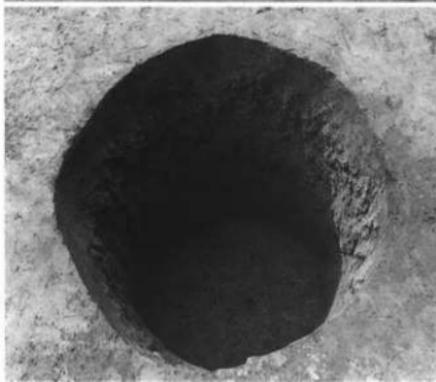
SK005 (左)  
SK006 | SK007 (右)  
SK008 |

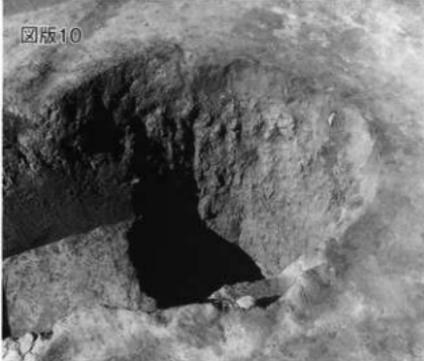


SK009 (左)  
SK010 (右)



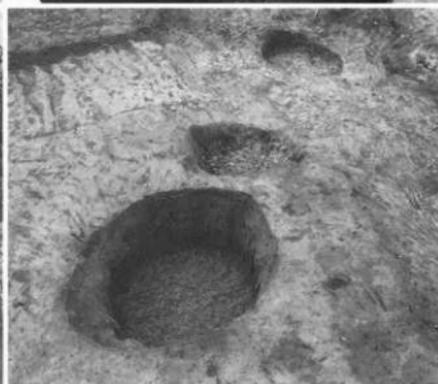
SK011 (左)  
SK013 (右)  
SK038



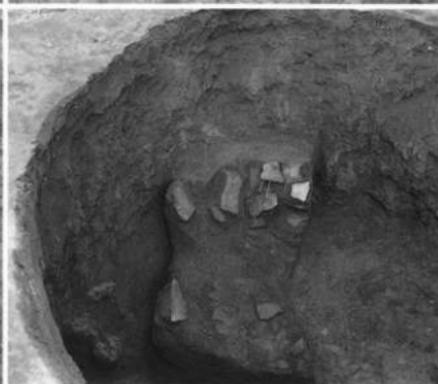


縄文時代  
土坑[2]

SK012 (左)  
SK012 (右)  
遺物出土状況



SK012 (左)  
断面状況  
SK014 (右)



SK015 (左)  
SK014 (右)  
遺物出土状況



SK015 (左・右)  
遺物出土状況

縄文時代  
土坑(3)

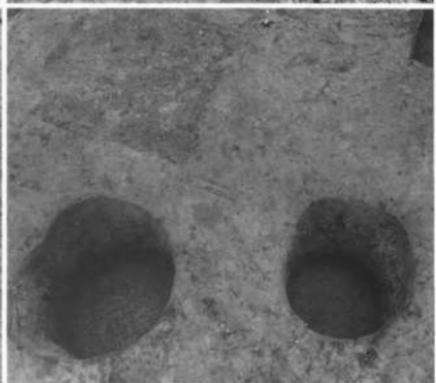


SK016 (左)  
SK018 (右)  
SK051

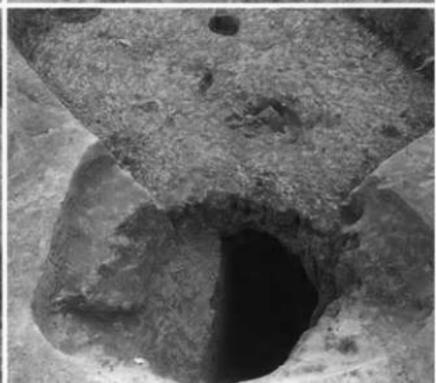
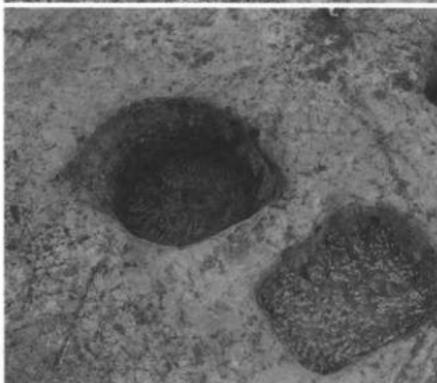


図版1-1

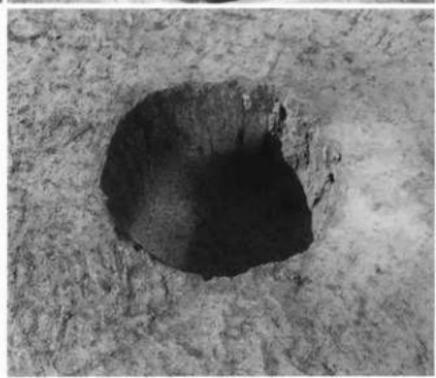
SK027 (左)  
SK031  
SK020 (右)  
SK022



SK023 (左)  
SK099 (右)



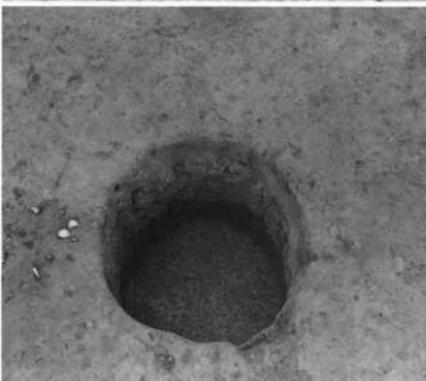
SK028 (右)





縄文時代  
土坑(4)

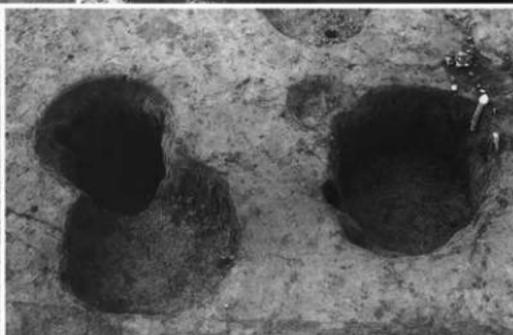
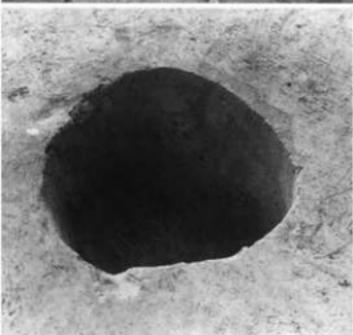
SK029 (左)  
SK034 (右)



SK035 (左)  
SK038 (右)



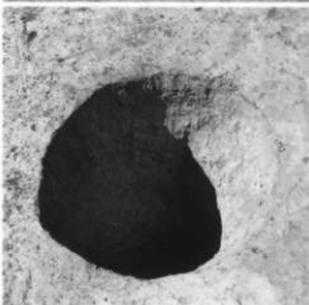
SK039 (左)  
SK066 (左)  
SK039 (右)  
※遺物出土状況



SK037 (左)  
SK042 (左)  
SK043 (右)



SK044 (左)



SK047 (左)  
SK050 (中)  
SK054 (右)



SK055 (左上)  
SK059 (左中)  
SK068 (左下)  
SK058 (右上)  
SK061 (右下)  
SK062





縄文時代  
土坑(6)

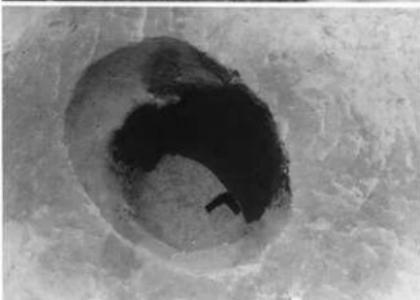
SK087 (左)  
遺物出土状況  
SK087 (右)  
全景



SK082 (左)  
SK083 (右)



SK086 (左)  
遺物出土状況  
SK086 (右)  
全景



SK091 (左)  
全景  
SK091 (右)  
断面状況

(全景)

(断面状況)



SK091

遺物出土状況



遺物出土状況



SK090

全景



遺物出土状況

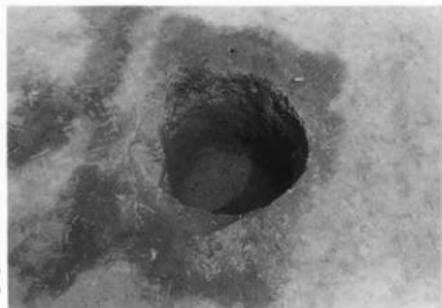


SK090

断面状況 (上半)

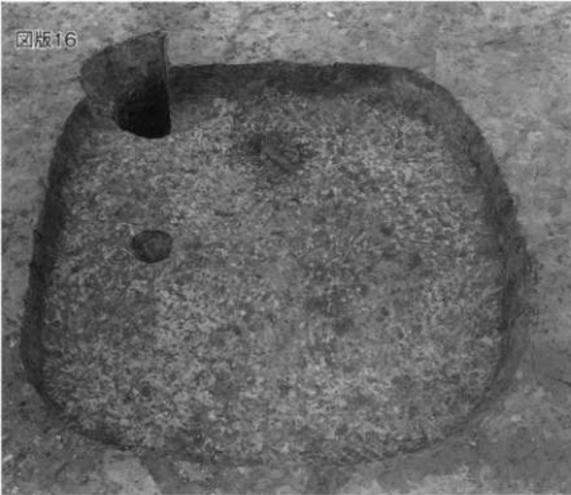


断面状況 (下半)

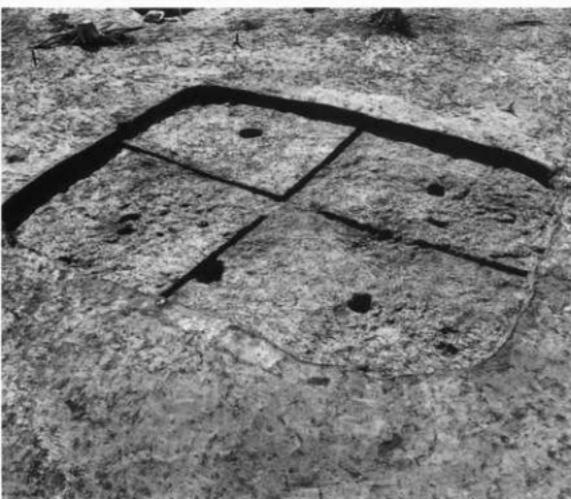


SK092 (左)  
SK089 (右)

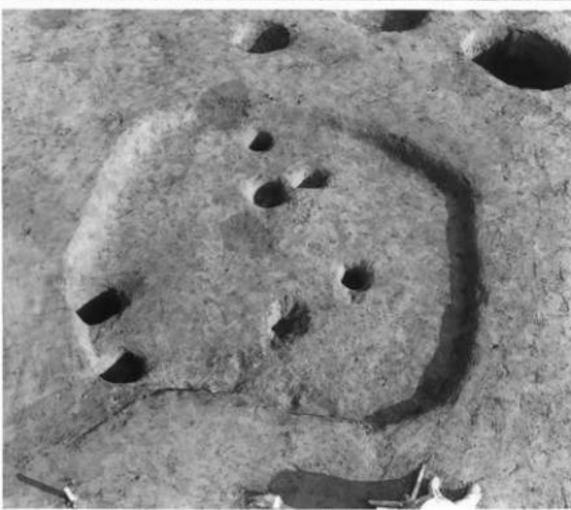




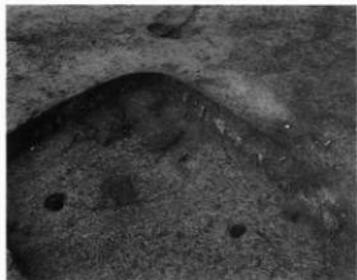
SI010



SI011



SI012



(焼土堆積状況)

SI013



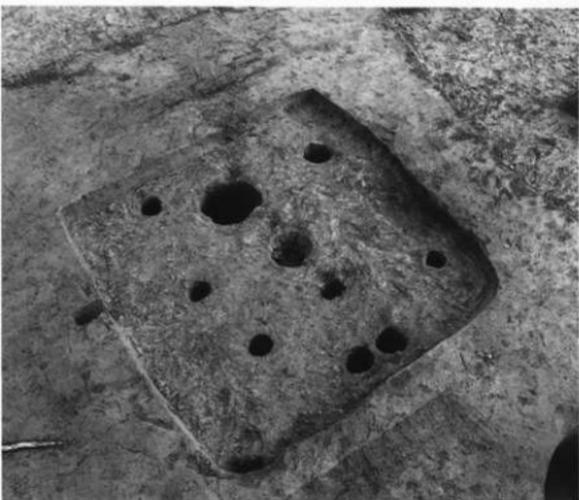
SI014



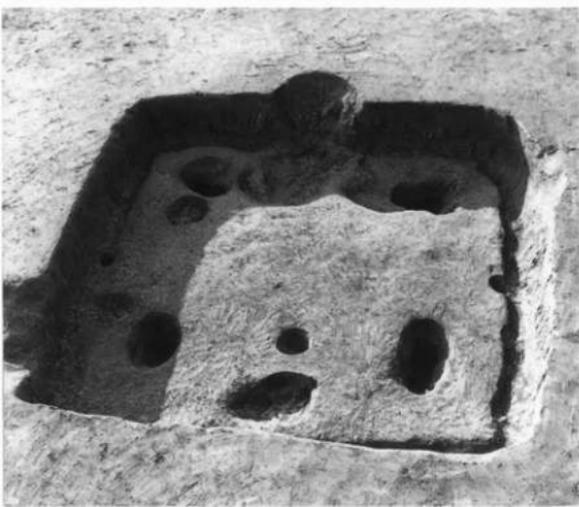
SI009  
(縄文時代)



SI015



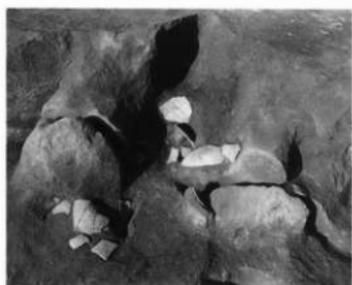
SI016



SI017



SI018



カマド遺物出土状況



SI019



遺物出土状況



SI020



奈良・平安時代  
竪穴住居跡3)

SI021カマド (左)  
SI022カマド (右)



掘立柱建物跡

SB005 (左)  
※平成11年度  
調査時  
SB005 (右)  
※平成13年  
調査時



瓦塔出土状況

SB001 (左)  
瓦塔出土地点付近  
土層状況 (右)

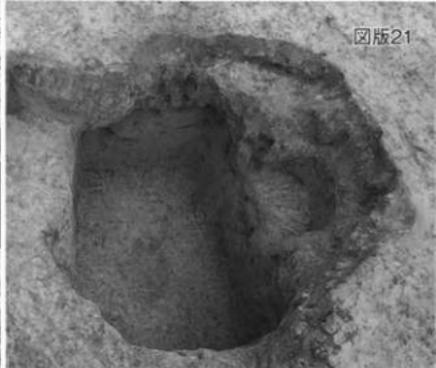


瓦塔出土状況  
(左・右)

地下式坑

図版21

SK096 (左)  
SK097 (右)



SK098 (左)  
SK099 (右)



SK100 (左)  
SK101 (右)



野馬土手  
野馬堀





野馬堀 (SD002)



障子堀遺構

障子堀状遺構 (SD001)



障子堀状遺構 (SD001)



第1・3・4地点出土石器



第5地点出土石器1

旧石器時代石器①



第5地点出土石器2

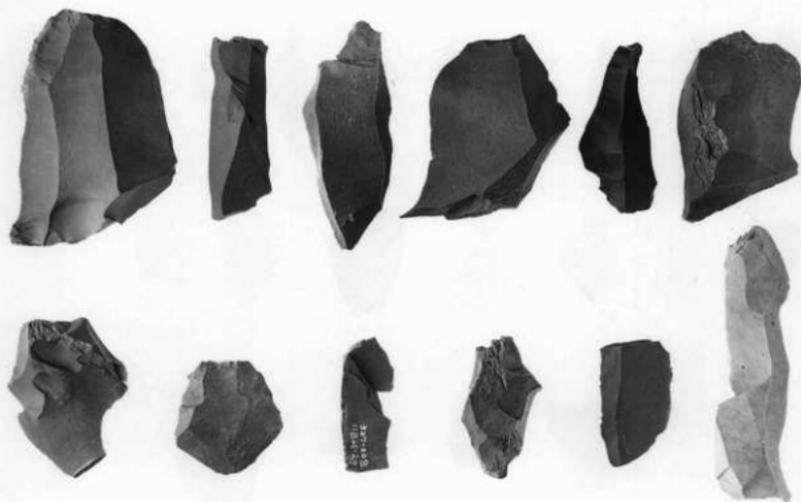


第5地点出土石器3

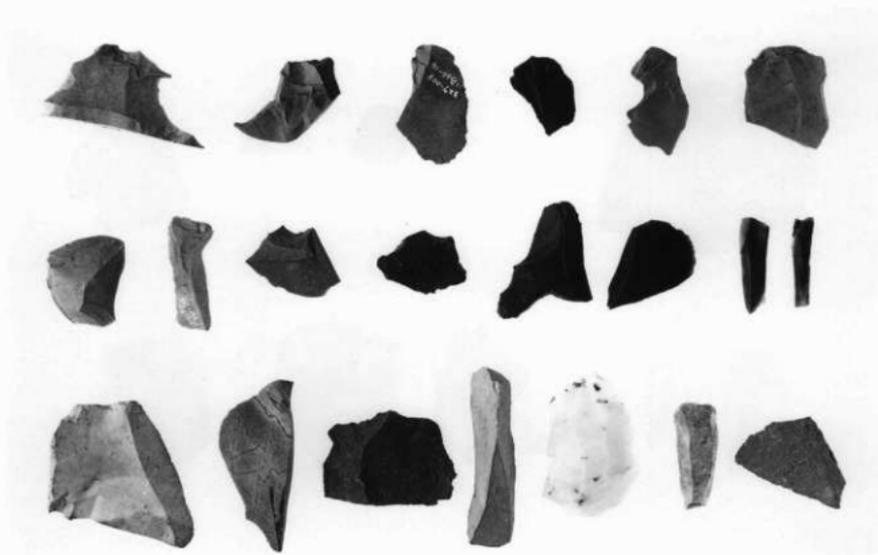
旧石器時代石器(2)



第5地点出土石器4



第5地点出土石器5  
旧石器时代石器(3)

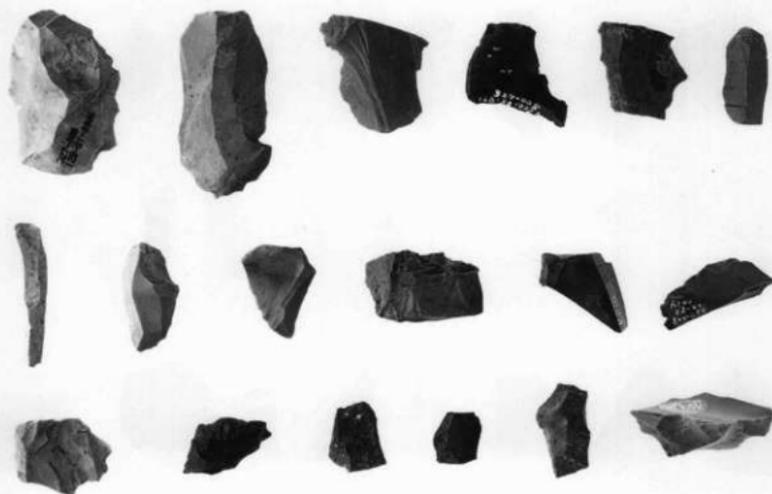


第5地点出土石器6



第6-2地点出土石器1

旧石器時代石器(4)



第6-2地点出土石器2

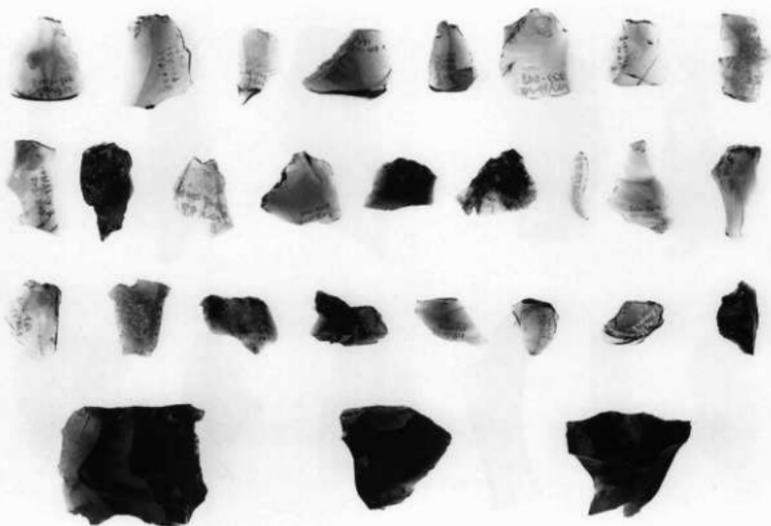


第6-2地点出土石器3

旧石器時代石器(5)

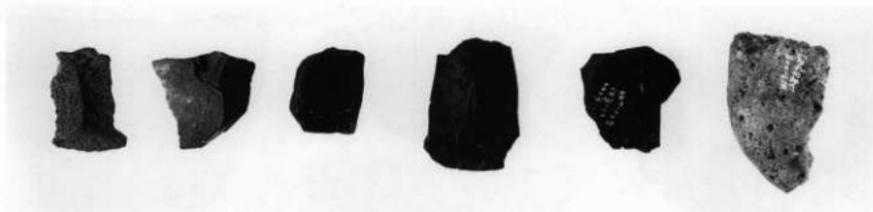


第6-2地点出土石器4

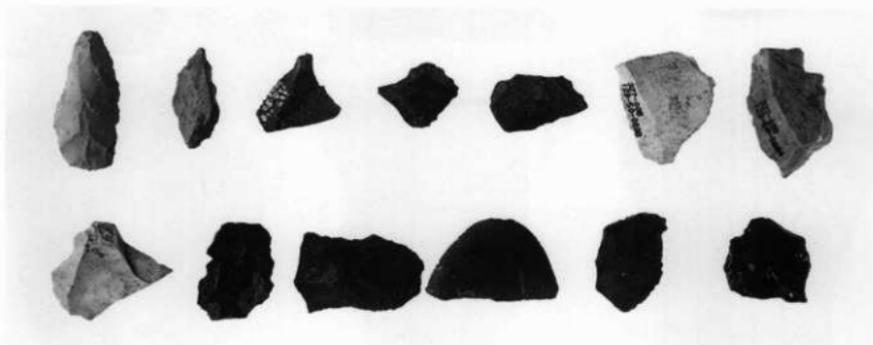


第6-2地点出土石器5

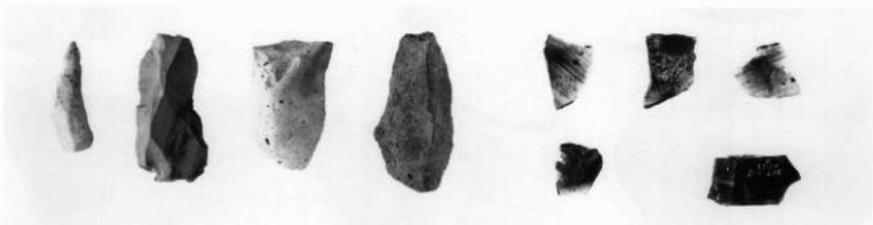
旧石器時代石器(6)



第6-2地点出土石器6



第6-1地点出土石器



第7・8地点出土石器



単独出土石器

旧石器時代石器(7)



SK014-160



SK032-348



SK039-441



SK015-173



SK005-70



SK005-69



SK005-73



SK005-96



SK005-96



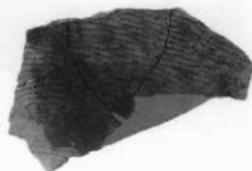
SK005-97



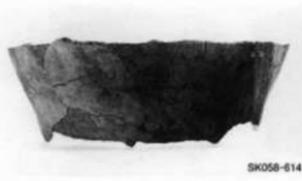
SK005-71



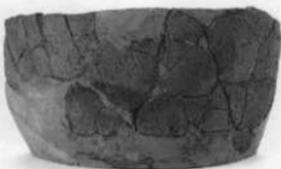
SK061-632



SK061-632



SK058-614



SK007-143



SK007-145



SK007-142



SK007-144



SK067-665



SK068-666



SK079-667



SK067-742

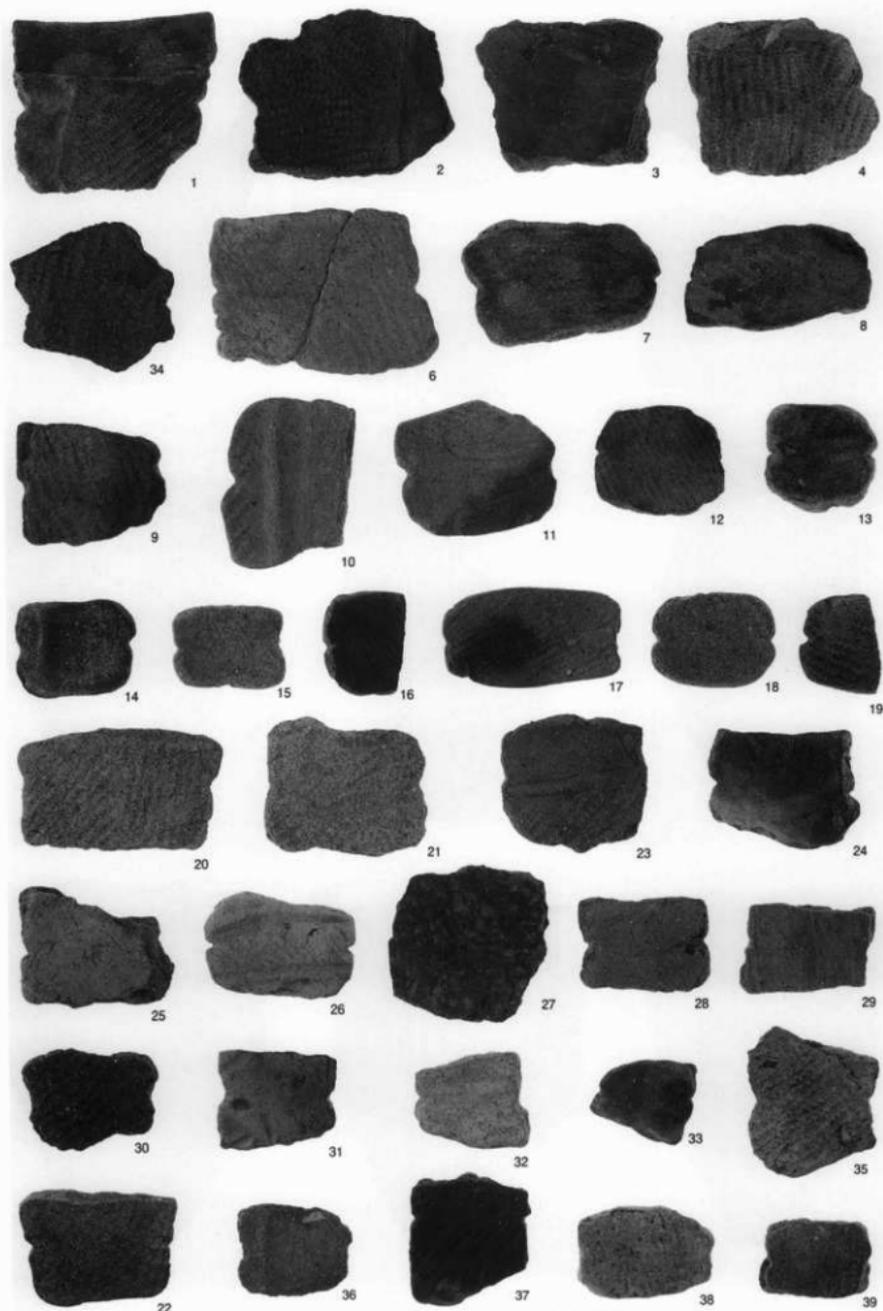


SK067-741

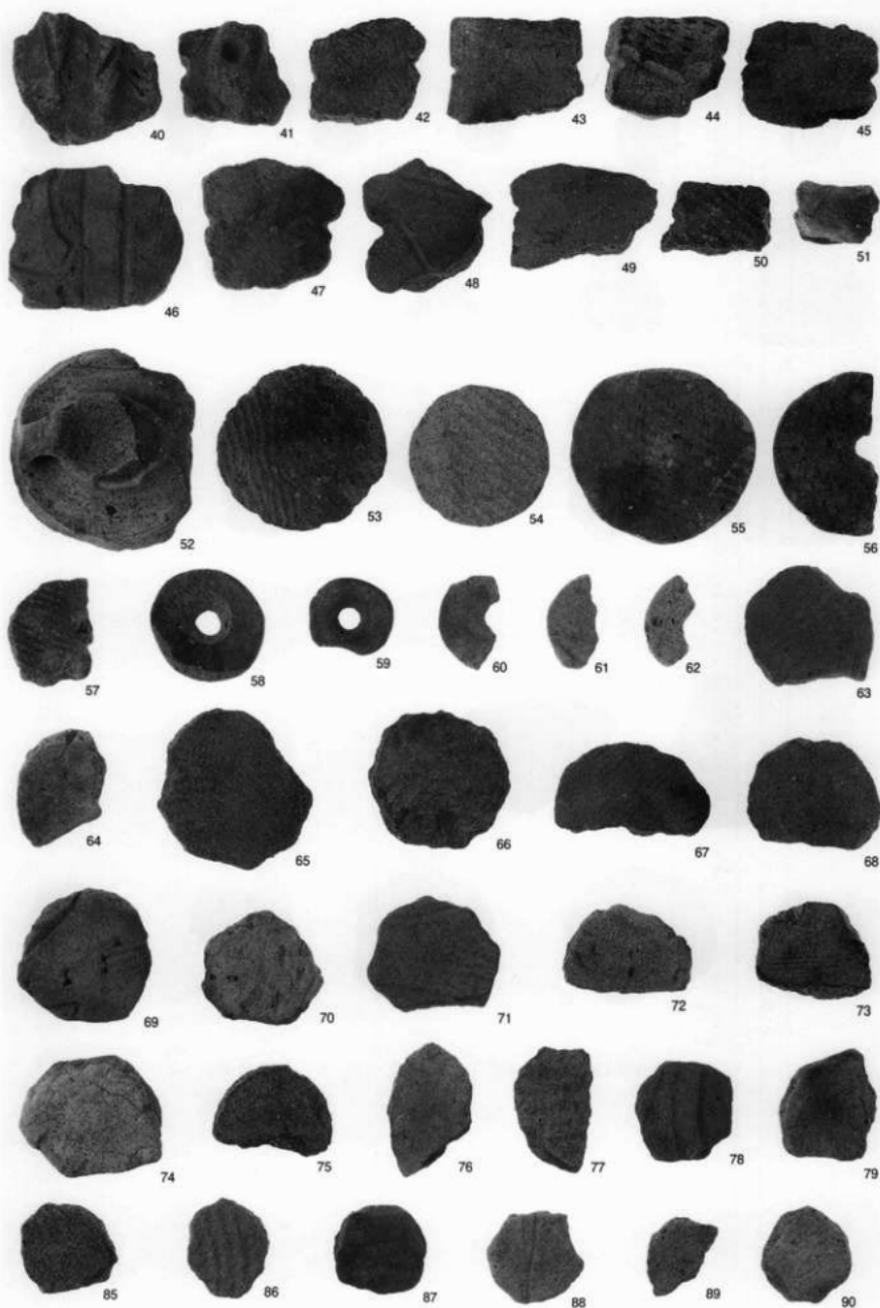


SK067-741

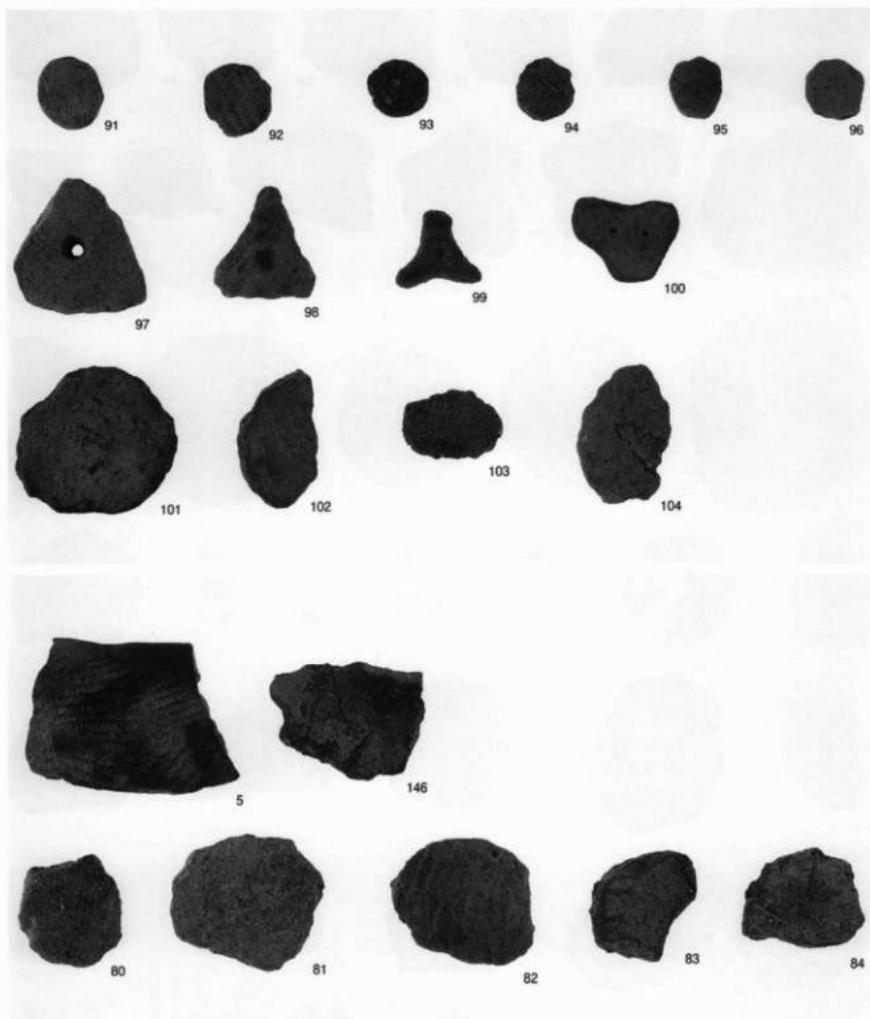
縄文時代遺構出土土器(2)



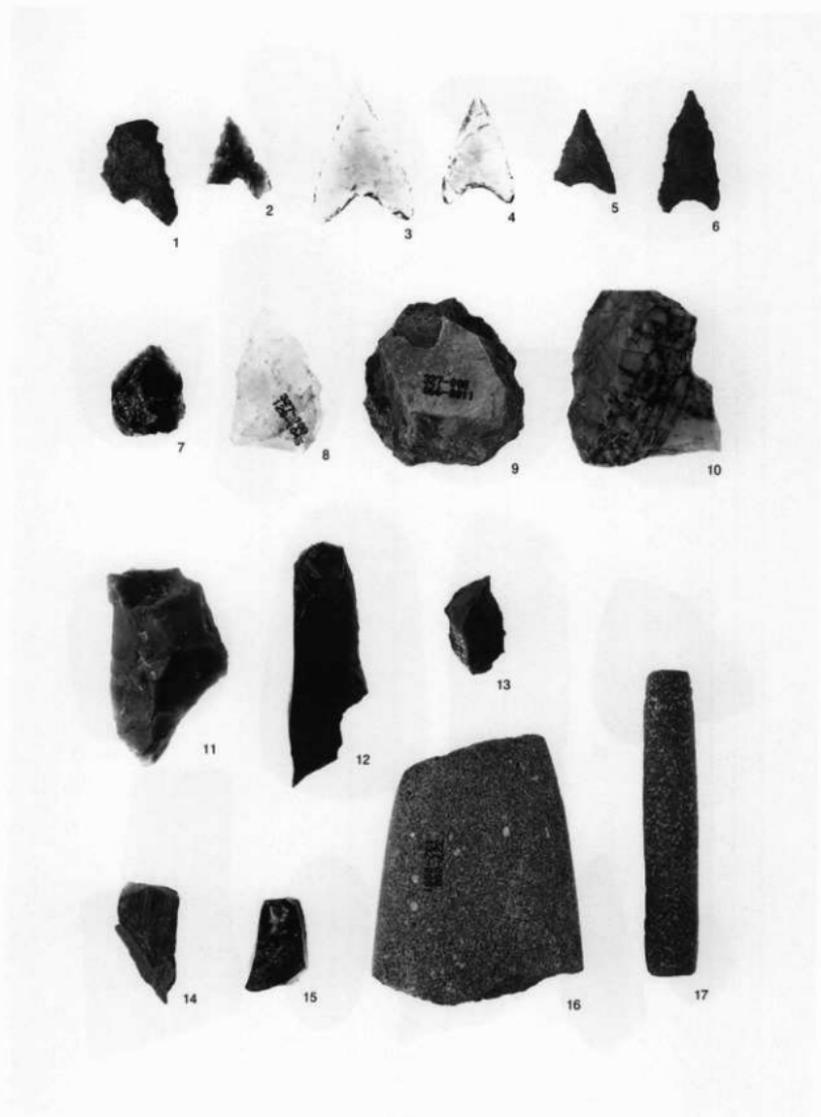
遺構外出土縄文時代土製品(1) ※完成品①



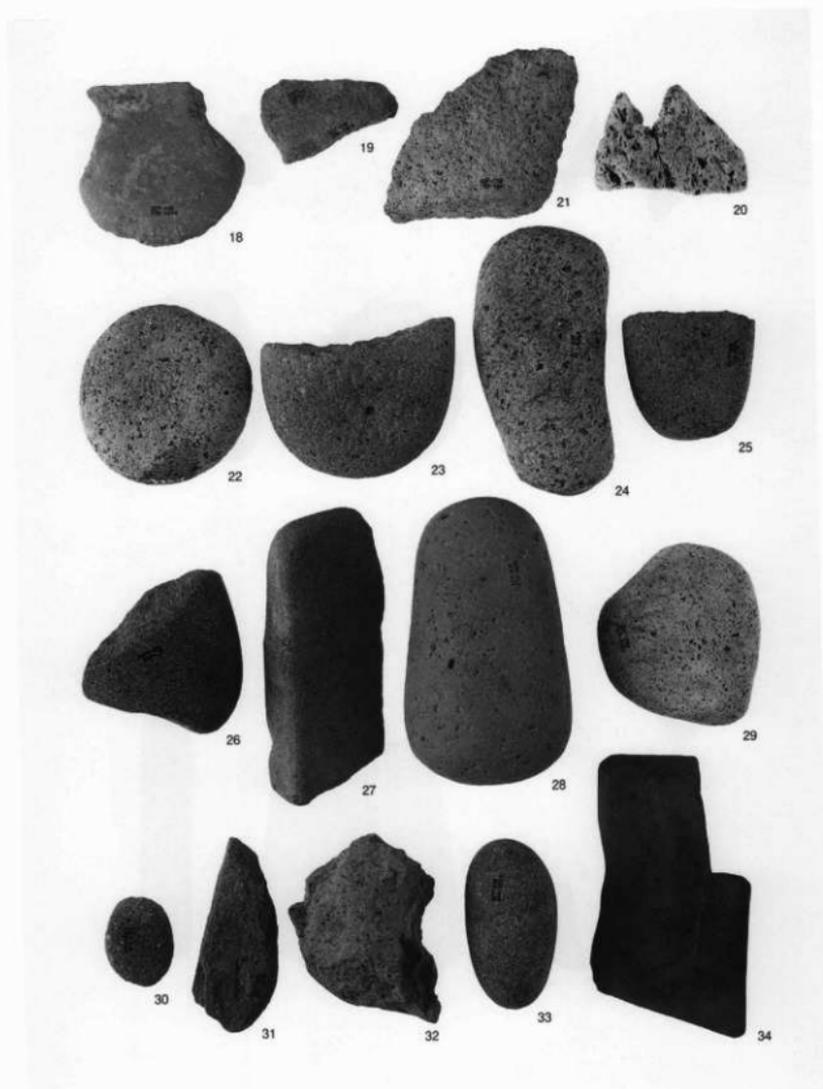
遺構外出土縄文時代土製品(2) ※完成品②



遺構外出土縄文時代土製品(3) ※上段 完成品③ 下段 破損品



縄文時代遺構出土石器(1)



縄文時代遺構出土石器②

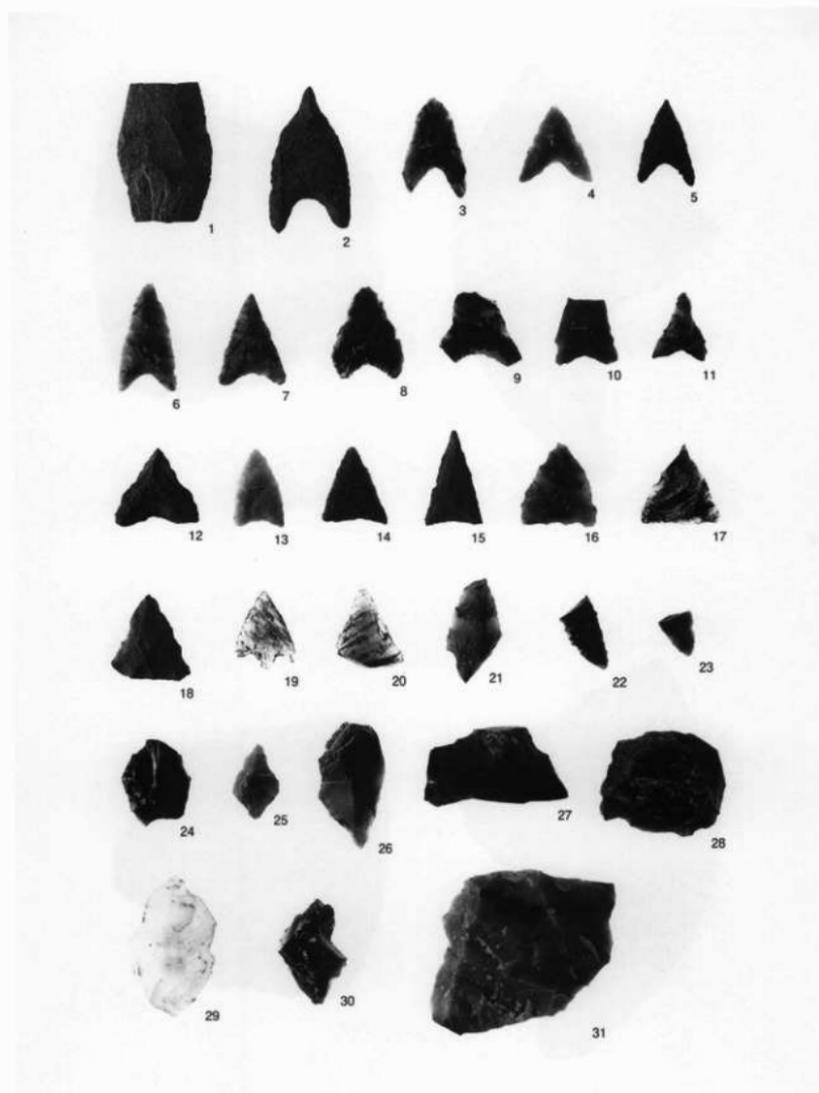


裏

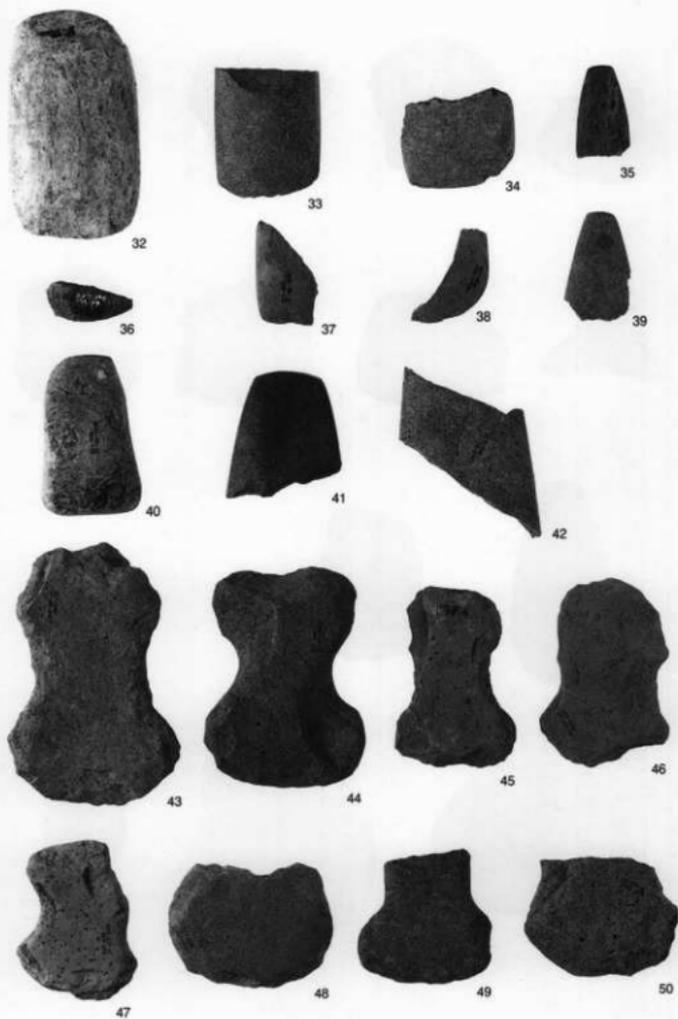


裏

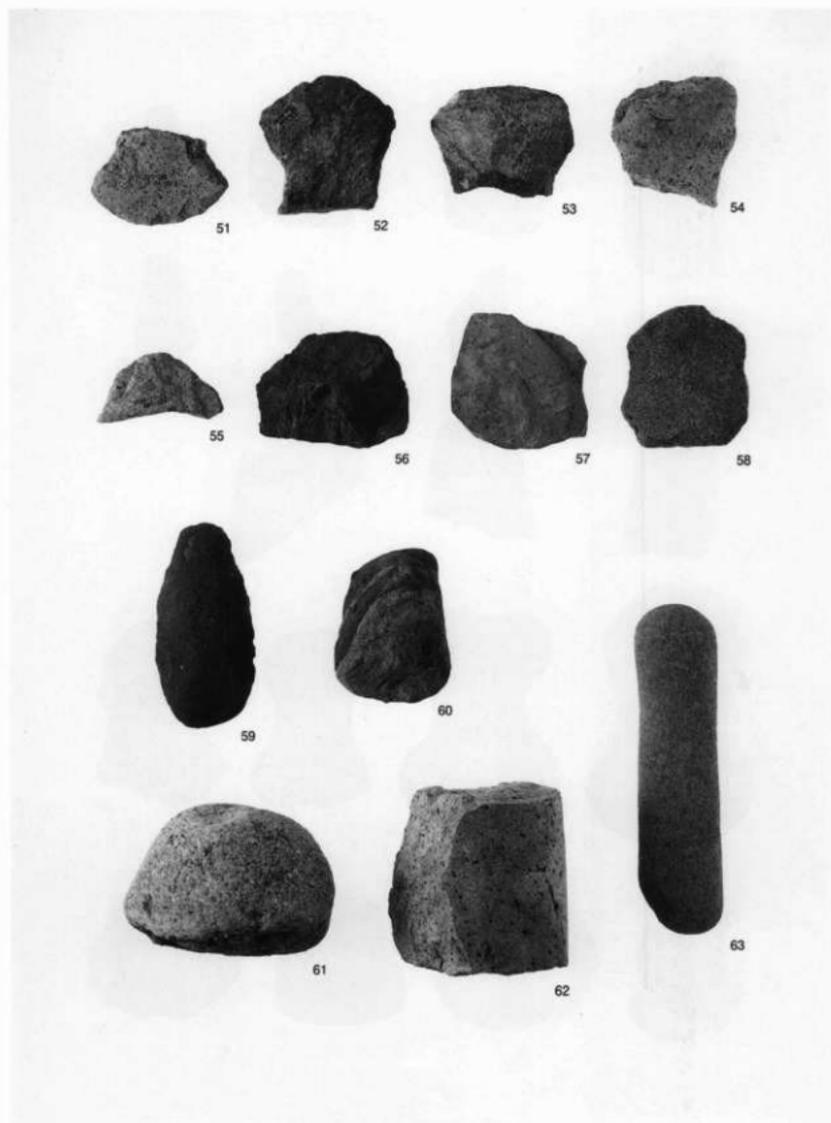
縄文時代遺構出土石器(3)



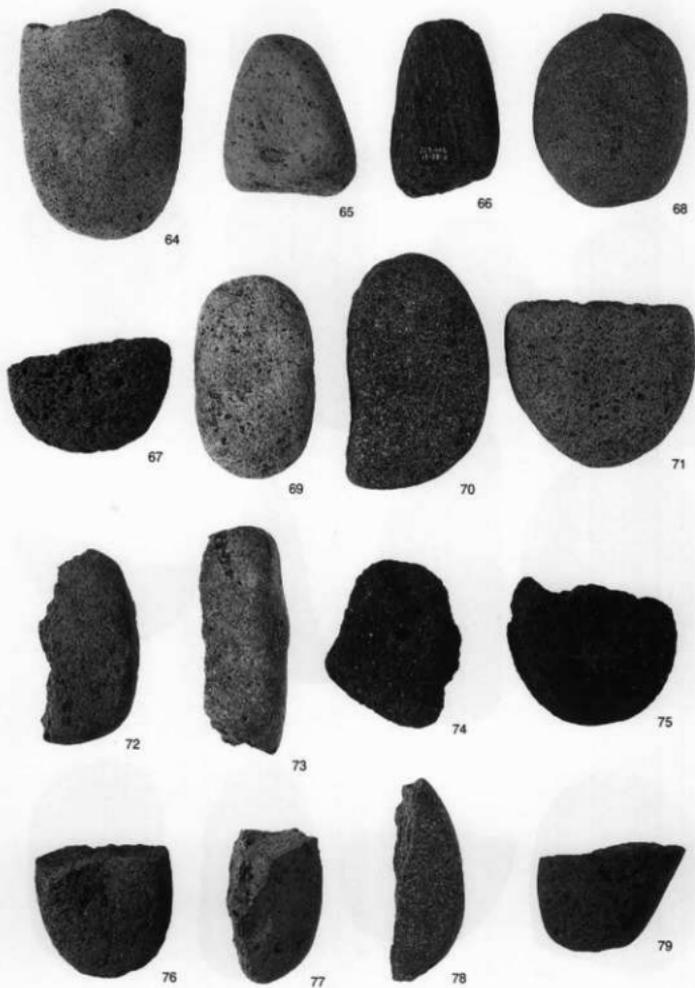
縄文時代遺構外出土石器(1)



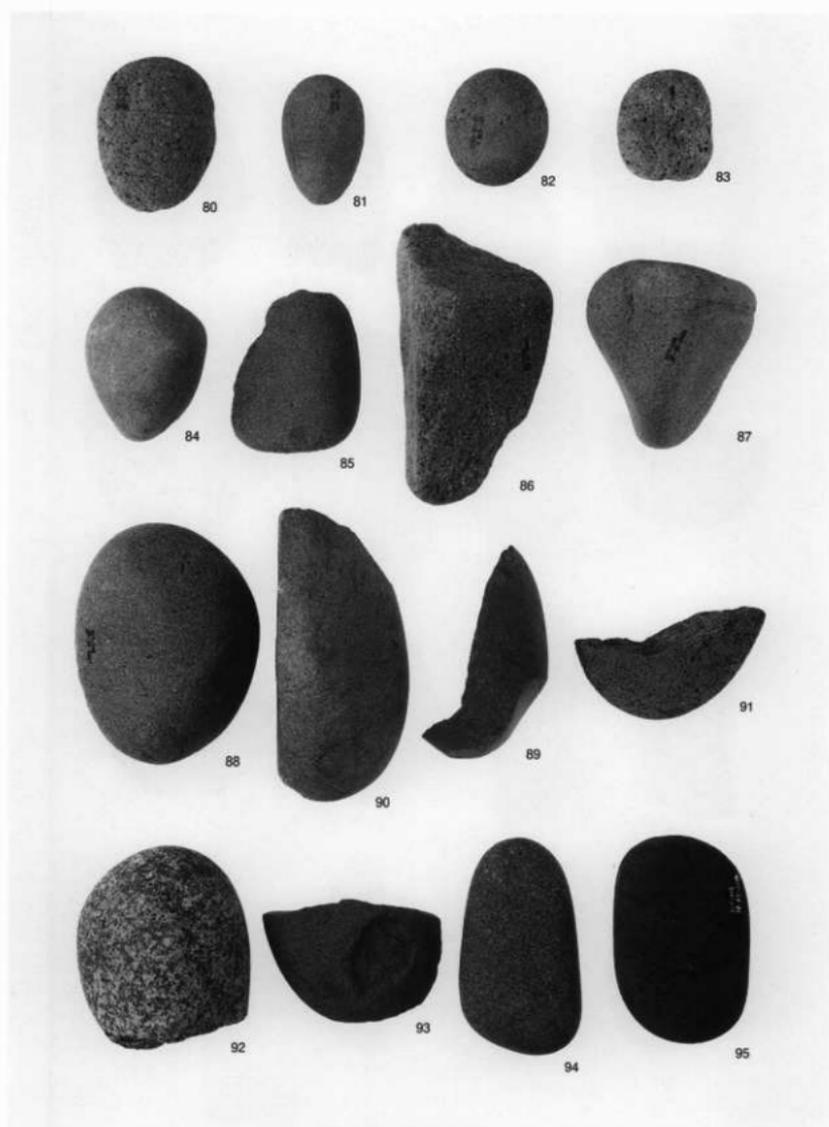
縄文時代遺構外出土石器(2)



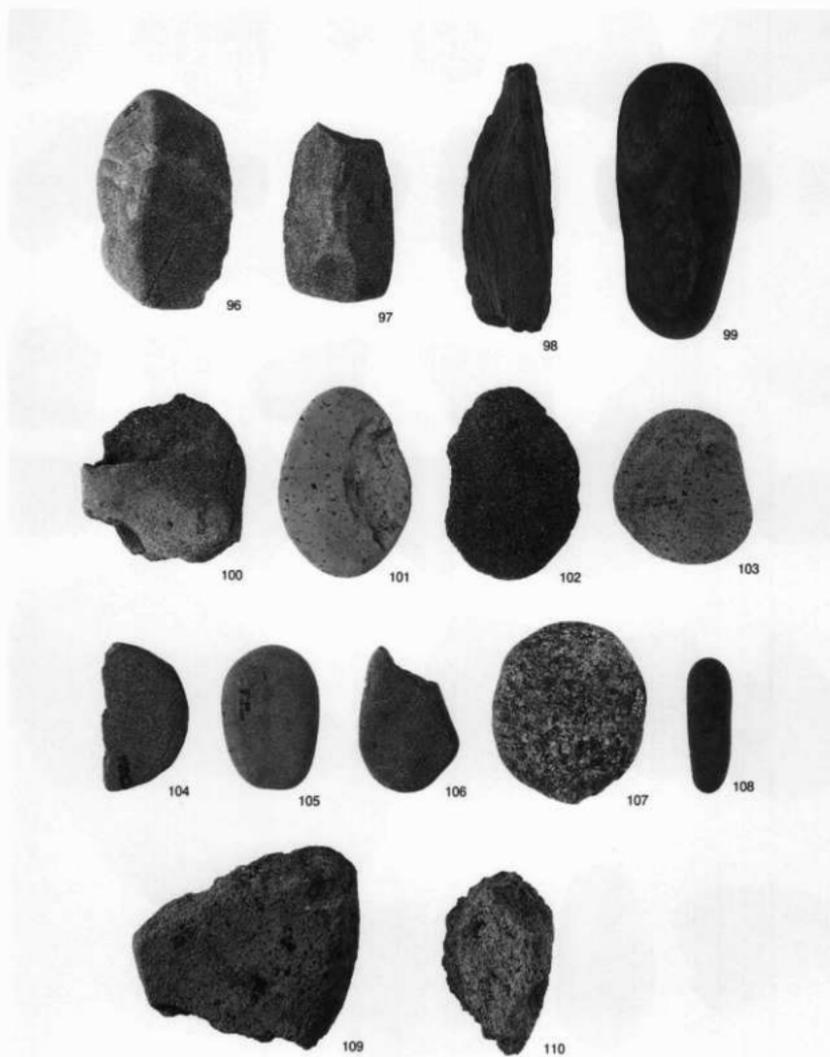
縄文時代遺構外出土石器(3)



縄文時代遺構外出土石器(4)

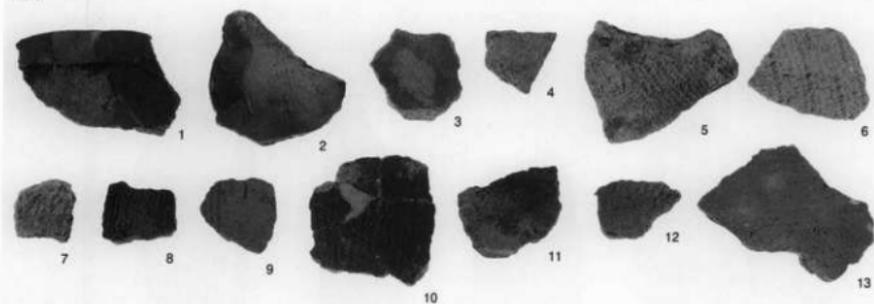


縄文時代遺構外出土石器(5)

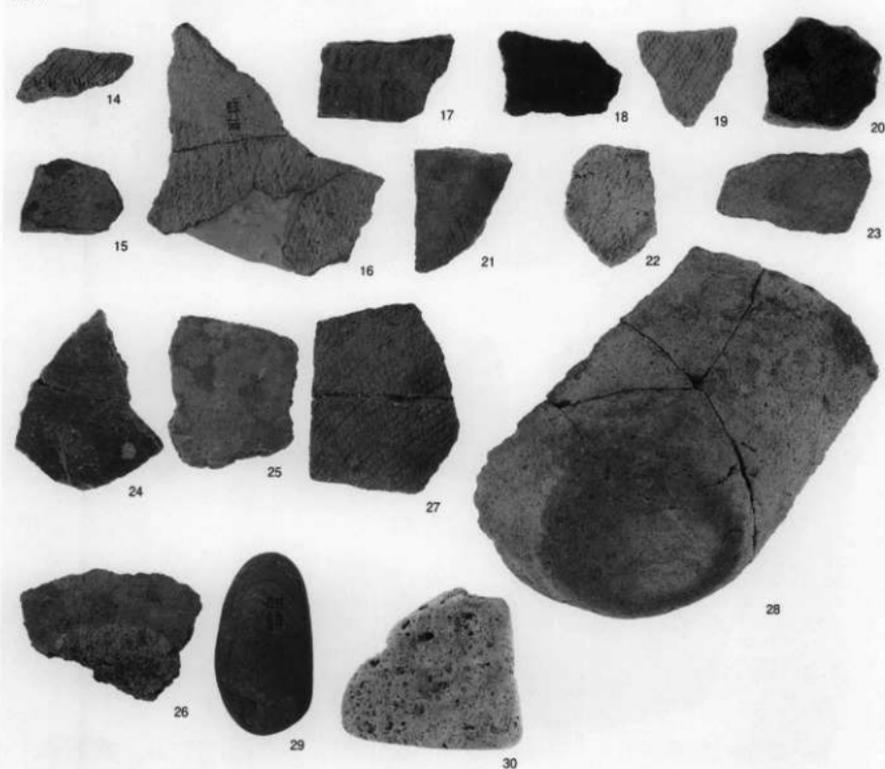


縄文時代遺構外出土石器(6)

SI010



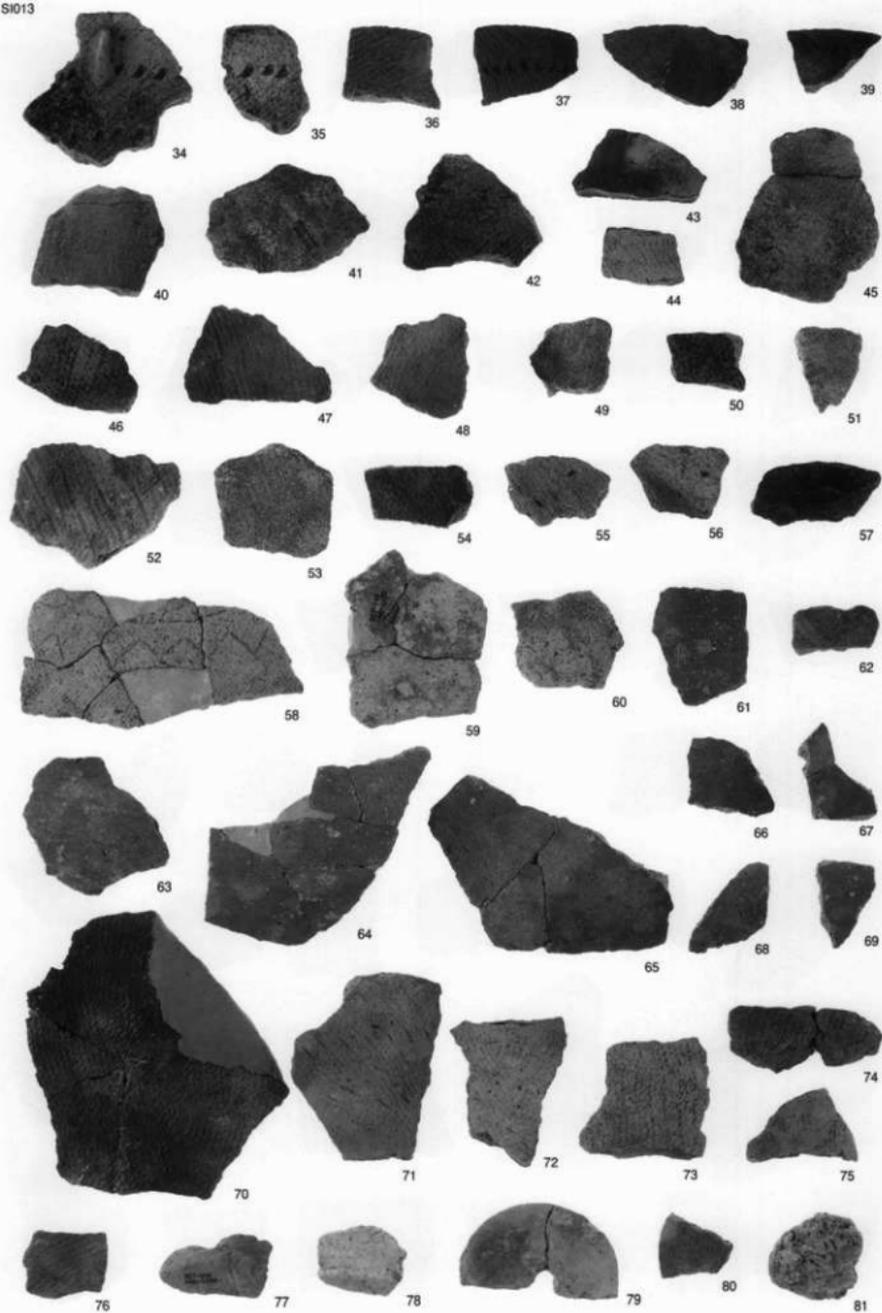
SI011



SI012



SI013

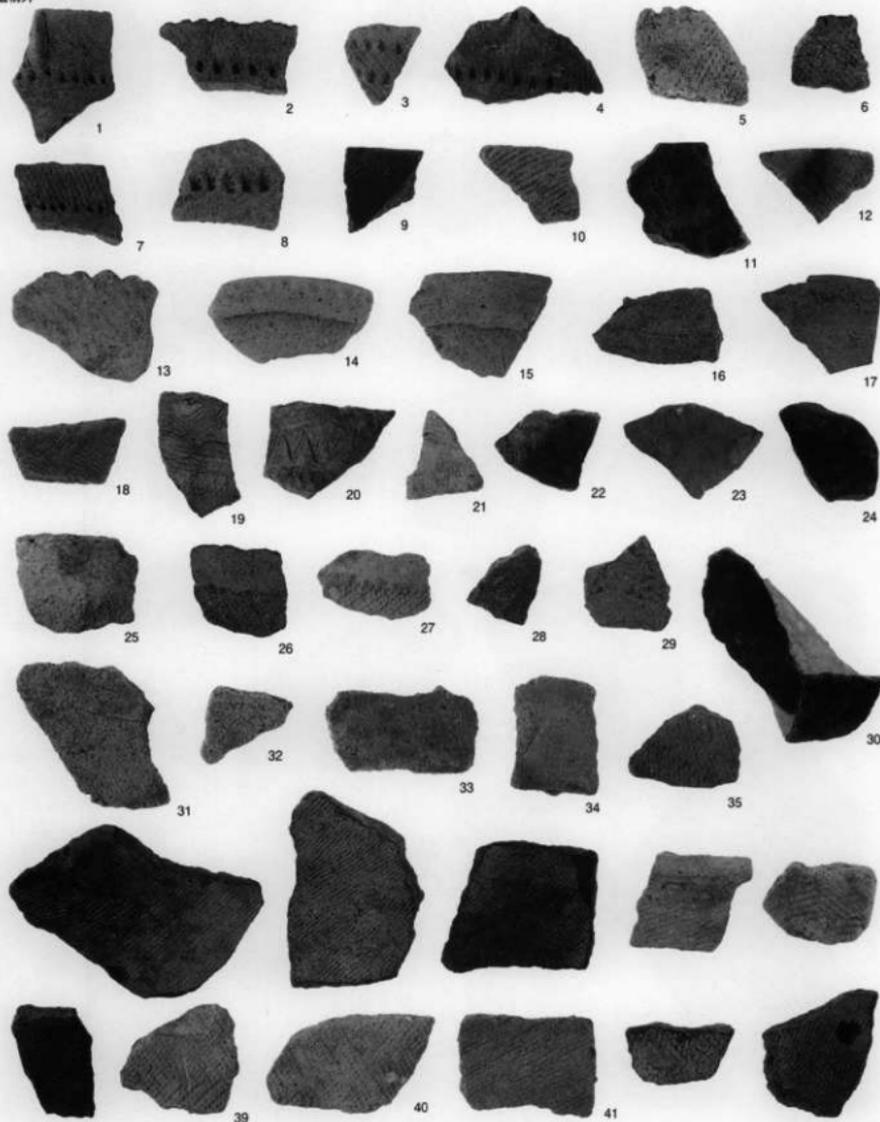


弥生時代聚穴住居跡出土遺物(2)

SI014



遺構外



弥生時代竪穴住居跡出土遺物(3)・遺構外出土遺物



SI017-1



SI017-2



SI017-3



SI017-5



SI017-6



SI017-9



SI017-10



SI017-14



SI017-9



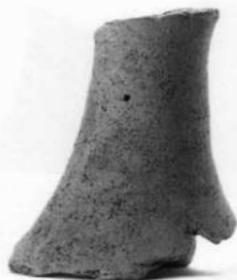
SI017-13



SI019-19



SI018-2



SI018-5



SI018-9



SI020-1



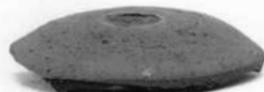
SI019-1



SI019-2



SI019-3



SI021-1

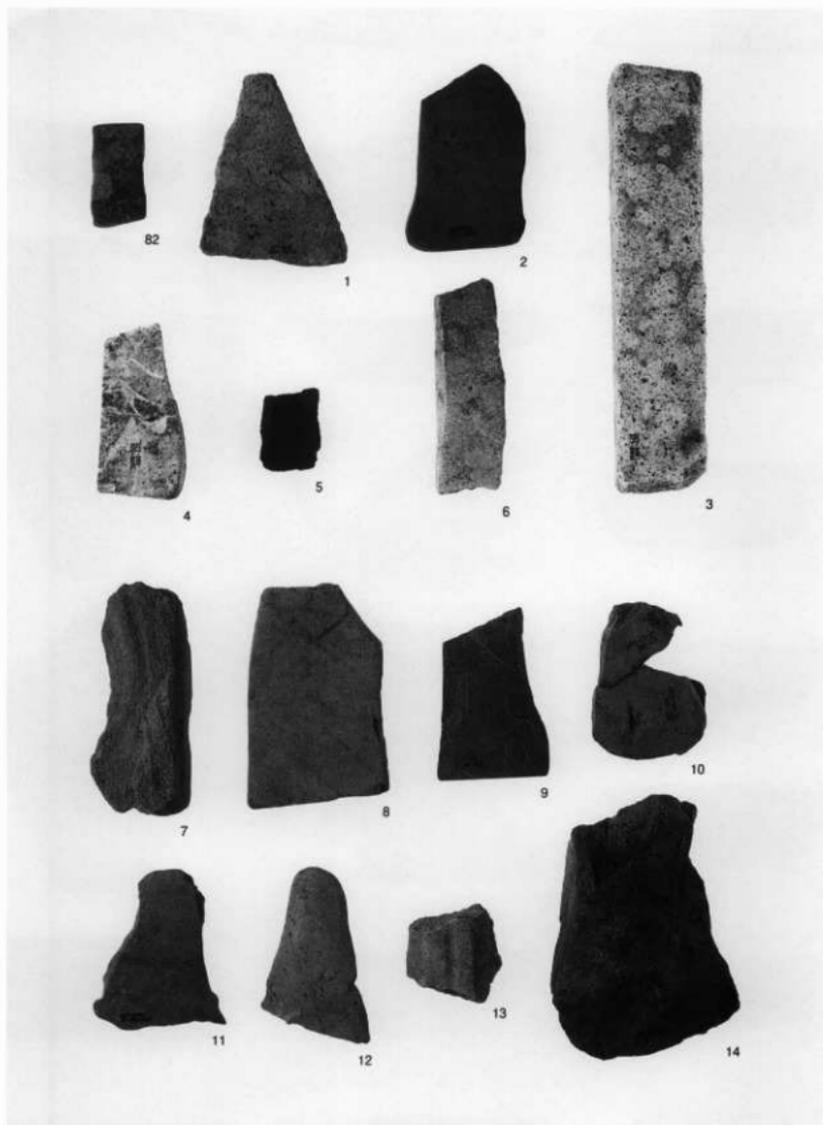


SI021-2

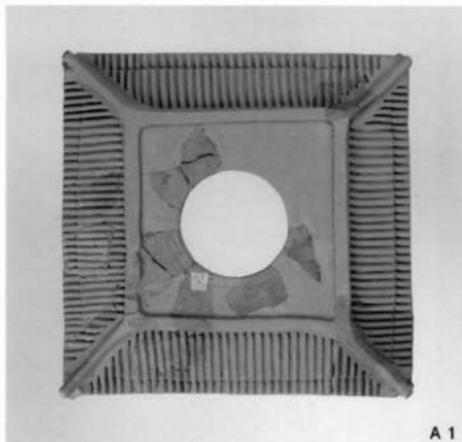


SI021-3

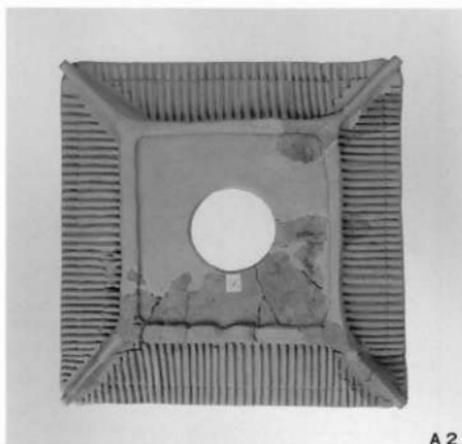
奈良・平安時代竪穴住居跡出土遺物



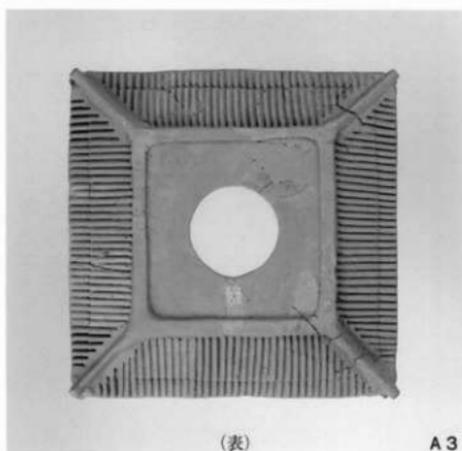
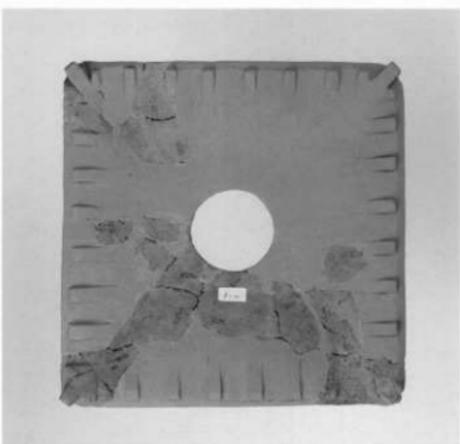
砗石



A 1



A 2

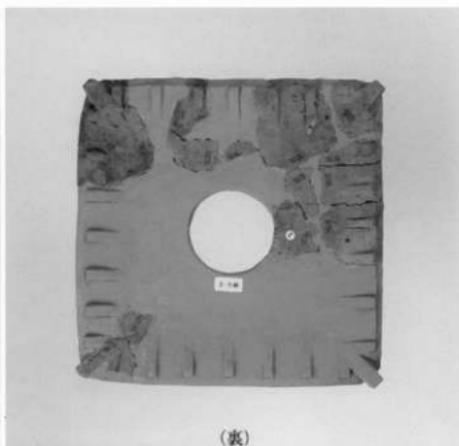
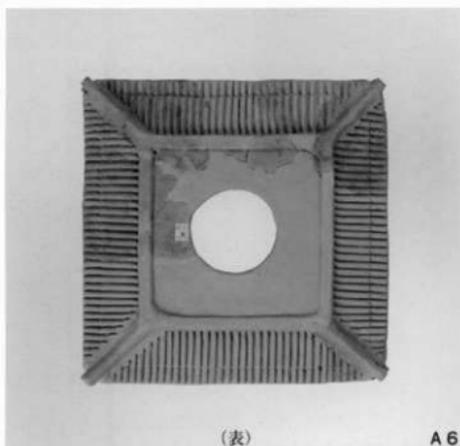
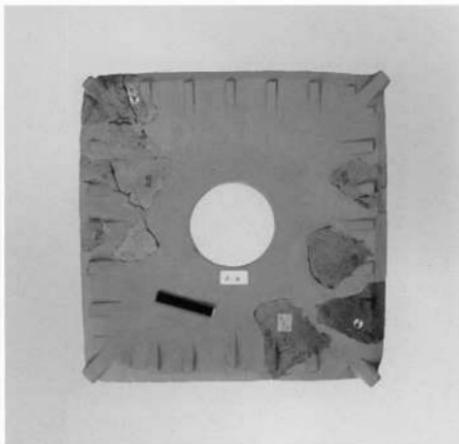
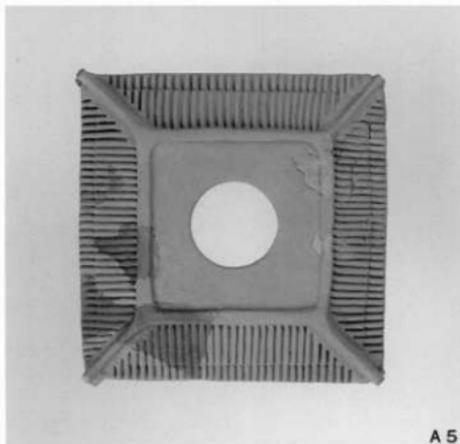
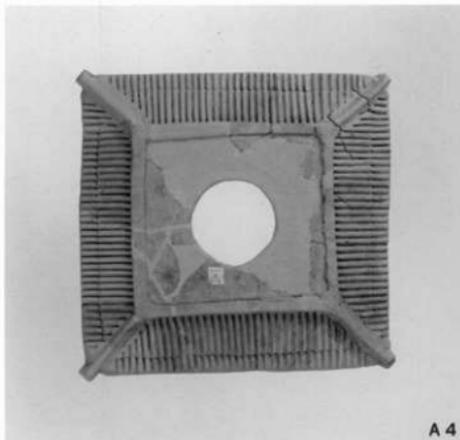


(表)

A 3



(裏)

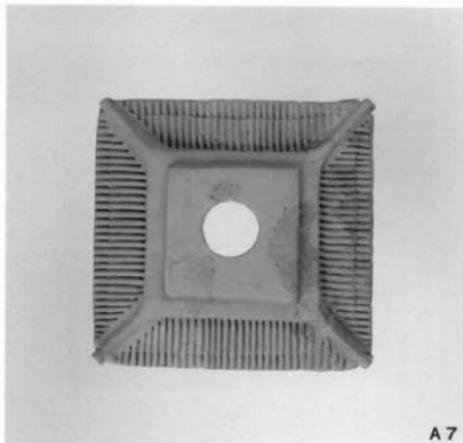


(表)

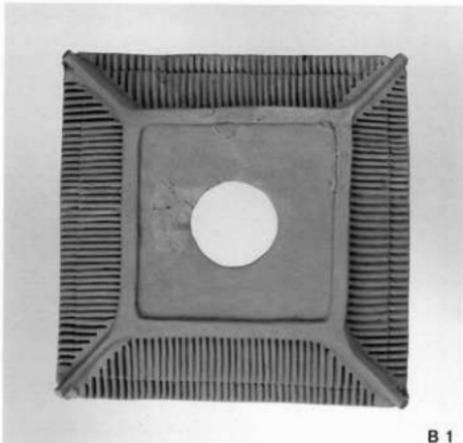
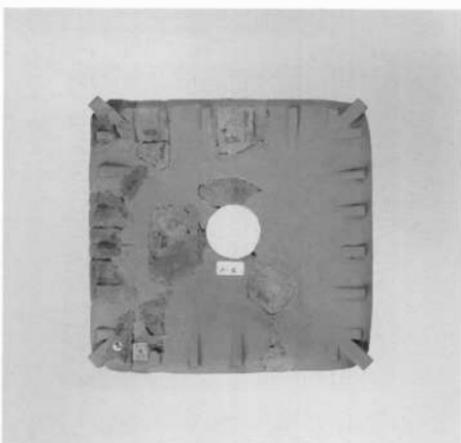
A 6

(裏)

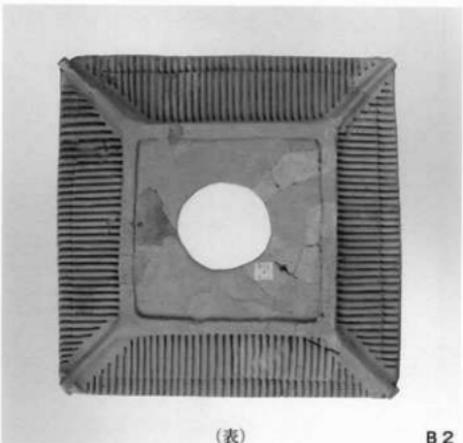
瓦塔部材(2)



A 7



B 1

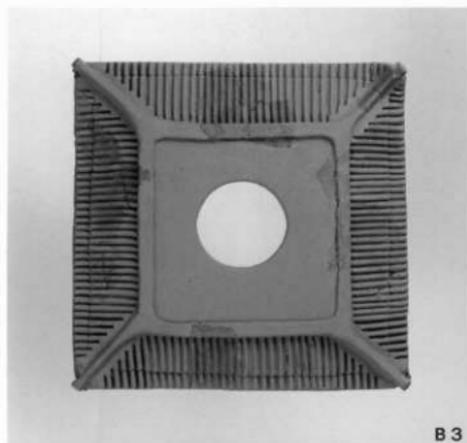


(表)

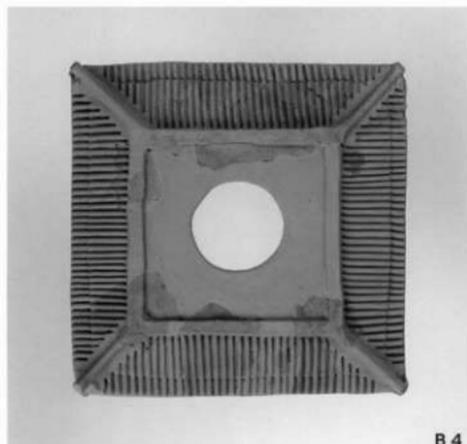
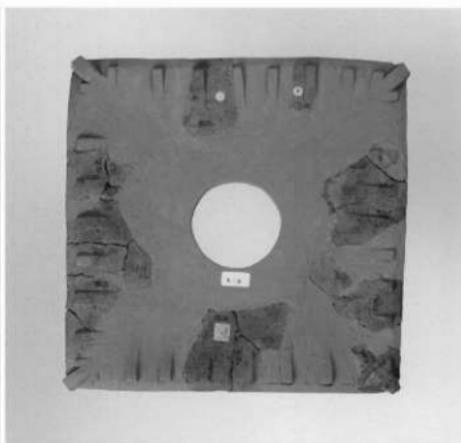


(裏)

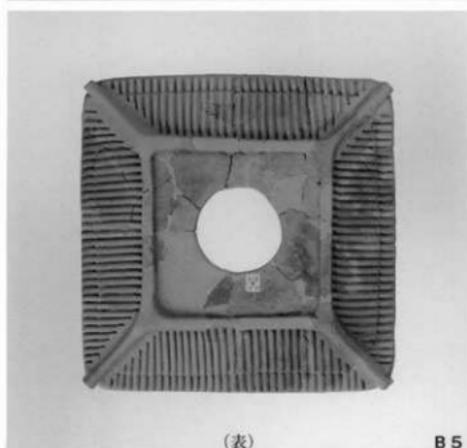
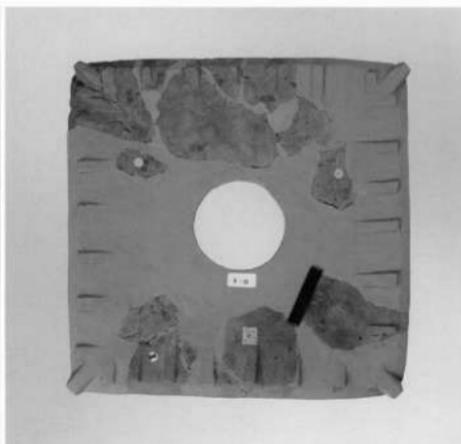
B 2  
瓦塔部材(3)



B 3



B 4

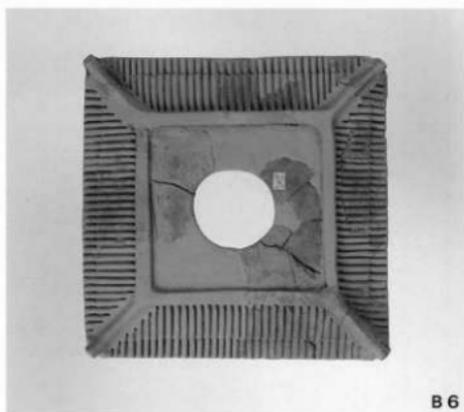


(表)

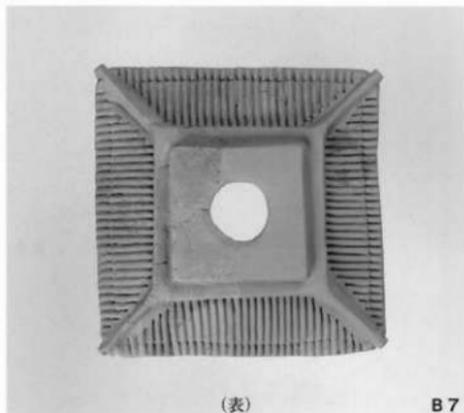
B 5



(裏)

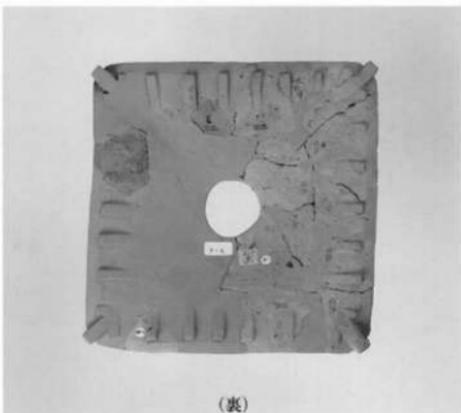


B 6



(表)

B 7



(裏)



A 初

瓦塔部材(5)



B 初



A 2



B 2



A 4



B 4



A 5



B 5



A 6



B 6



A7



B7



伏鉢A



伏鉢B



宝珠・水煙



鉄鉢形土器

## 報告書抄録

ふりがな	いんざいしまごめいせき							
書名	印西市馬込遺跡							
副書名	(仮称) 平岡自然公園埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第495集							
編著者名	古内茂・香取正彦・矢本節朗・田中裕・小笠原永隆							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	2004年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
馬込	千葉県印西市平岡 字馬込1,538-1ほか	12327	004	35度 49分 34秒	140度 10分 27秒	19970602～ 19980306 19990407～ 19990730 20010501～ 20010928 20020902～ 20021018	10,420㎡  3,849㎡  1,333㎡  430㎡	平岡自然公園建設事業に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
馬込	包蔵地	旧石器時代  縄文時代 (中期～後期)  弥生時代  奈良・平安時代   中・近世	石器集中地点 8か所  竪穴住居跡 土坑	9軒 95基	ナイフ形石器・剥片  縄文土器(加曾利E式・称名寺式・堀之内1式) 石器(尖頭器・石鏃・楔形石器・磨製石斧・打製石斧・磨石類・敲石・石核・石棒)	5軒  5軒 7軒 1軒 6棟 1か所 1基	弥生土器・砥石・土製紡錘車  土師器・須恵器 瓦塔 鉄製品・土製品・砥石	縄文時代では、中期末葉から後期初頭にかけての集落跡であり、土器編年及び集落変遷を考える上でも重要な資料である。  奈良・平安時代の瓦塔は2個体が出土し、ともに復元できた例は極めて珍しく、大変貴重である。
			地下式坑 障子堀状遺構 野馬土手 野馬堀	6基 1条 1条 1条	陶器破片・土師質土器・瓦質土器・砥石・銭貨			

千葉県文化財センター調査報告第495集

## 印西市馬込遺跡

－(仮称)平岡自然公園埋蔵文化財調査報告書－

---

平成16年3月25日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	印西地区環境整備事業組合 財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809番地2
印 刷	株式会社 正文社 千葉市中央区都町1-10-6

---